

魔法少女リリカルなのは Order

やみなべ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

縁は異なるもの味なもの。

運命の流れはどこでどう絡み、離れ、結び、交わるかわからない。

一度は重なり、すぐに離れてしまった縁。

出会い、別れ……それで終わるはずだった4人の少女たちの短い物語はしかし、思わぬところで再度結ばれる。

結んだのは聖杯の少女たちか、それとも数多の英傑たちと縁を繋ぐマスターか、あるいは虚数の海に沈んだ……。

誰によって紡がれたにせよ、行く当てのない漂流者たちを引き寄せるには十分すぎる要因。

一つ一つは偶然の産物であろうと、積み重なればそれは運命という名の必然。

であれば、“彼”が過酷な旅の最中さなかで優しい閃光と出会ったこともまた……。

「きつと、なにか大切なことを教えてくれた」と少女は言う。

「俺も頑張らなくちゃって、そう思ってたんだ」と彼は言う。

救われたのは、果たしてどちらだったのか。

* * * * *

注意点

本作は章管理の関係で、必ずしも話の流れ順に並んでおりません。

「アリサ・バニングスと月村すずかの場合」をお読みになりましたら、別途章立てしている「聖別秩序機構ベルカ」にお進みいただくことをお勧めします。

とはいえ、明確な時系列があるかという点と怪しい作品ですので、別に拘ることなく進んでいただき、一通り読んでから「聖別秩序機構ベルカ」をお読みになっても問題はないかと思えます。

目次

イリヤスフィール・フォン・アインツベルンの場合	1
美遊・エーデルフェルトの場合	7
クロエ・フォン・アインツベルンの場合	20
フェイト・テストアロッサ・ハラオウンの場合	38
高町なのはの場合	61
八神はやての場合	75
アルフの場合	108
クロノ・ハラオウンの場合	132
EX01 P・T事件	154
EX02 闇の書事件	177
フローリアン姉妹の場合	210
EX03 それぞれの恋愛事情	232
イリスの場合	276
ユーリ・エーベルヴァインの場合	307
アリス・バニングスと月村すずかの場合	339
EX04―1 JS事件(前編)	380
EX04―2 JS事件(後編)	411
高町ヴィヴィオの場合	460
聖別秩序機構ベルカ「ゆりかごの眠り姫」	
Next Order	496
カリム・グラシアの場合	499
リインフォース・ツヴァイの場合	534
マシユ・キリエライトの場合	567

「終わらない日々」

リンデイ・ハラオウンの場合

620

プレシア・テストロッサの場合

661

IF 次元特異点「英霊集結異邦ミッドチルダ」
天文台の放浪者

”

ヴェータの場合

715

シヤマルの場合

734

シグナムの場合

764

ユーノ・スクライアの場合

806

イリヤスフィール・フォン・アインツベルンの場合

結局、事の発端はどこだったのか？ あく……うん、どこなんだろう？

—— おやおや、イリヤさん。その年でもう政治家みたいな責任逃避ですか？

いや、誤魔化そうとしてるわけじゃなくて、真面目にどこが始まりだったのかって、私にもよくわからないんだよねえ。

パツと思いつくのは、やつぱり私と美遊が“なのはちゃん”たちと初めて出会った時？ でもなあ、別にあの時点では何がどうってこともなかったし。いつも通り“あの人たち”がやらかして、そのせいで私たちだけじゃなくてなのはちゃんたちまで巻き込まれて、一緒に戦って、それぞれ帰るべき場所に帰った、本当にただそれだけのはず。

—— まあ、実際アレはイリヤさんではなく、どこかの世界のお二人の仕業ですしねえ。

どこかの世界？ まあそれはおいておくとして、そもそも“あつちの私”と“^{カルデア}こつちの私”って厳密にはもう違うもののはずだしなあ……。

そういう意味で言えば、私とクロがカルデアに召喚された時？ 確か、マスターさんが夢で見えるようになったのもそれくらいって話だけど……でもさあ、私を通して縁が繋がったのは否定しないというか、できないけど、それって私のせい？ そりゃ力になれたらなあとは思ってたけど、召喚されたのも、縁が繋がったのも不可抗力というか、そこで私に責任を求められても困るといえるか……。

そもそも、あの頃はまだ縁が薄くてマスターさんもほとんど記憶の連続性がなかったって言ってたよ！ 記憶が繋がるようになったのは、旅の途中で虚数空間から“あの人”をサルベージしてかららしいし！

—— あはあ♪ イリヤさんってば、言うに事欠いて責任転嫁ですか？

あ、いや、別に責任を押し付けるわけじゃなくて……それこそ偶然

の結果なんだから、 “あの人” には何の責任もないわけだし。

—— いえいえ、ここまで重なればそれは偶然という名の必然、あるいは運命つてやつですよ♪

もう！ まぜつかえさないでよルビー！ え？ そもそも別に誰のせいとかそういう話じゃない？ ただ、どうしてこういうことになったのか知りたかっただけ？ あく、ごめんなさい。割と引つ掻き回してる自覚があるだけに早とちりしてました。いや、私自身は騒動とか起こしてないと思うんだけど……ほら、周りの人たちが、ね？ そのきつかけになつたんじやないかなあつて思うと、ちよつと責任感じてたり……。

ああ、でも……うん、一人だけ責任を負わなきゃいけない人がいたの忘れてた。全部が全部その人のせいってわけじやないけど、一番大きなきつかけだつたんじやないかなあつて。いや、結果的にそう悪いことにはなつてないって言えばそうなんだけど……。

誰かつて？ ほら、いるでしょ。悪意ゼロなのに、一歩歩けば何かしらやらかす人。え？ 心当たりが多すぎる？

あく、うん、ごめん。確かにそういう人いっぱいいた。えつと、スーパーにポジティブで、結構うっかりしてて、やらかす割にラック高いおかげで大抵うまくいく、ピンクな……そうそう、そのトラブルの大量生産者^{マスプロ}。

—— あく、そういえばあの人でしたっけ。勝手に管制室の端末弄つてイリヤさんたちをステキ転送しちゃつたの。

うう、私たちただこのままだと明日食べるものもないかもつてことで、食材の補充に行こうとしてだけだつたのに……。

人理焼却とか、濾過異聞史現象とか、その他諸々なるようになったとはいえ、結局マスターさんとマシユさん中心にカルデアは時間軸からも世界線からも外れた漂流生活。「しばらくどこにも浮上できなかつたから備蓄が危ない」「藤太さんの宝具も使い続ければ限界は来る」つてエミ……アーチャーさんが言つたのを聞いちゃつて、私は英霊じやないから、みんなに比べたら全然頼りないし、だから……

—— まあ、それはそれとして勝手に行動しようとしたのはまず

かったですけどね。

あ、はい。それは本当に反省しています。クロに唆されたとはいえ、ホイホイついていった私にも問題がありました。

でもさあ、てつきりスタツフの誰かがやってくれると思ってたなら、まさかのアストルフオさんだよ？ 誰がそんな未来予想できるの!?

っていうか、あの人も良くわからないのに何で弄っちゃうのかな!!

——ご本人は「なんかいけそうな気がするー!」って言ってましたよ。

うわあ、すつごいリアルに想像できちゃった……。

うん、まあ、そんなわけだね。たぶん、あの時の……そういえば、その時のことって……あ、なのはちゃんから聞いてたんだ。なら、そこは省略ね。とにかく、その時の縁を辿る形になっちゃったんだと思うんだけど、私たち……っていつても、クロは直接会ったことがなかったからなのか、ちよつと違うところに出ちゃったんだけど。とにかく、私と美遊は無事というかなんというか、ついちゃったんだ。

……そう、海鳴。そこで再会したんだ。私たちが会った時よりちよつとだけ大きくなって、ちよつと今の私たちと同じ年になったなのはちゃんたちに。

ふふ、変な感じ。こつちの私たちはサーヴァントだから年を取らないけど、なのはちゃんたちはほとんどん大きくなって、大人になって、綺麗になっていく。変わらない自分、変わっていく友達、ちよつとだけ虞美人さんとかヴィータちゃんの気持ちがあったかも。

でもまさか、こんな日が来るとは思わなかったなあ。初めて会った時、なのはちゃん私よりちよつと年下だったんだよ？ それが、今や私と同じ年の娘がいて、その子に私が昔話をしてるんだもん。

それで、まさか私たちがこつちに来るきっかけだけ、ってことはないんですよ。

さあ、お姉さんがなんでも答えてあげる。なっ!! 外見はともかく、中身はあなたのママと同年代以上なんですう!! まったくもう……。

ねえ、『ヴィヴィオ』は何が聞きたいの？

* * * * *

「ちよつ!? え、えええ!! 美遊もクロもどこ行っちゃったの——

つ!!」

思わぬトラブル大量生産者の介入のせいで、レイシフトを応用した疑似転移で物資の補給を凶らんとしたイリヤたちの目的は、のっけからとん挫した。

まあ当初の予定からして、三人で21世紀初頭の日本に行き持ち込んだアレコレを換金し、食材をはじめとした生活必需品を補充、意気揚々と帰還し一杯褒めてもらおうという実に杜撰な計画だったわけだが。

ところがどっこい、蓋を開けてみれば三人はバラバラの場所に飛ばされたらしく、近くに美遊とクロの姿はない。

せめてもの救いは、転移先である小高い丘から見える風景が良く見知ったものに近いことか。風景自体に見覚えはないが、海に面したそれなりに発展した街並が広がっている。どうやら、おおよそ「現代」と呼んでいい時代らしい。また、イリヤの周囲をはじめ、眼下には見事な桜色で彩られていることから季節的には春、それも祖国「日本」であることがうかがえる。

とはいえ、土壇場には強いがその手前くらいだと妙に弱いのがイリヤの特徴の一つ。別世界に迷い込むのは最早慣れっこだが、「美遊もクロもいるから大丈夫」と油断していたのが運の尽き。いきなり一人ぼっちで放りだされたイリヤは、いつそ清々しくくらいに動転していた。

「つていうか、(トコトコ)」

つ!?

「見た感じ、冬木のような日本の地方都市といった様子ですが、具体的な場所まではちよつとわかりませんねえ」

「なんでルビーはそんなに冷静なの!？」

「ん、美遊さんとクロさんも近くにはいない感じでしょうか? 合

流しないことには帰る云々以前の問題ですし、これは長丁場になりそうですねえ」

「話聞いてよ!?!」

普段の言動はアレだが、実は割と頼りにしている相棒が相手をしてくれずに憤慨する。まあ、テンパるイリヤをスルーするのは割といつものことなので、これはこれで平常運転といえるだろう。ついでに、イリヤも慣れたもので、相手にしてくれないとわかるとちよつと隅の方でこれ見よがしに小さくなる。

しかし、そんな割と悠長な時間は長く続かなかった。

「イリヤさんイリヤさん」

「なに? 二人の居場所が分かったの?」

「あ、そちらはまださつぱり。ただ……」

「ただ?」

「何かが結構なスピードで急速接近中です。魔力:ですかねえ? なんかそんな感じの、だけどちよつと違うような、そんな反応が二つほど」

「なんか妙にフワツとしてるのが気になるけど、それより今は…いくよ、ルビー!」

「ドドーンとやっちゃいましょう!」

「やらないよ!?! あくまでも何かあってもいいようにするためだから! まずは話し合い、これ大事!」

「えく……そこはノリノリでサーチ&デストロっちゃいましょうよ」

「なんでそう物騒なのかなあ!?!」

そのままギャーギャーと不毛な言い争い(?)を繰り広げる一人と一本。

その間にも二つの影はイリヤたちとの距離を詰めていき、ついに視認可能な距離にとらえる。ただし、空から。

「時空管理局だ! いきなりこんなところに転移してきやがって、ここ管理外世界だぞ。渡航許可、ちゃんと持ってんだらうなあ!」

「ヴィータちゃん、もうちよつと優しく……」

「こちとらこいつらのせいではやてのギガウマご飯のお預け食らって

んだ！ さっさと済ませて帰らねえと冷めちまうだろうが!!」

「うくん、それはわかるんだけど……って、あれ？ あの人の……」

明らかにイライラしている様子の赤い少女と、それをなだめようと苦笑いを浮かべる白い少女。

だがそこで、白い少女が何かに気付く。初めは困惑、続いて疑念から確信へ。眼下の一人の少女と一本のステッキに、ものすごく見覚えがあるのだ。

「もしかして………イリヤさん？」

「おや？ ルビーちゃんとしたことが不覚です。このMS力、間違いないよ、イリヤさん」

「へ？ って、なのはちゃん!？」

「あん？ お前ら知り合いか？」

「どうしてここに!？」

なのはは見下ろしながら、イリヤは見上げながら、それぞれ有り得ないはずの再会に驚愕をあらわにする。

こうしてかつて一度交わり、すぐに分かれた二人の魔法少女の運命の流れは、再度交差することになった。

美遊・エーデルフェルトの場合

そう、それでイリヤの次に私？ まあ、急ぎの用もないし、知らない間柄じゃないから別にいいけど。それで、何が聞きたいの？

海鳴に来てから……私が出たのは臨海公園、対応したのははやて。場所が場所だし、昼間だったからバリアジャケットとかはなし。途中で誤魔化してたけど、なのはを通してイリヤと連絡が取れたから、あとは管理局の指示に従った。一応、必要以上の証言はしないよう気を付けたけど。

なに、どうかした？

——美遊様、ヴィヴィオ様はその時の詳しいやり取りや何を感じ、どう思ったかをお聞きになっているのではないかと……。

そう。……………正直言えば、少し驚いたかな。まさか、あんな形でお兄……土郎さんに会うなんて思いもしなかったから。まあ、はやてには少し不審がられたけど。

少ししか驚かなかったのか？ ……イリヤの時に同じことがあったから、二度目だし、それでもなかったかな。そうでなかったら、抱き着くくらいはしてたかもしれないけど。

——イリヤ様の時には、しっかりと抱き着いておられましたからね。

サファイア、余計なことは言わなくていい。コホン……どちらかといえば、驚くよりも少し心配だった。

この人は私のお兄ちゃんではないけど、アーチャーさんみたいになっちゃうんじゃないかって。それが一概に不幸なこととは言えないけど、できるなら幸せになってほしかったから。だからはやてには……うん、感謝してる。土郎さんのはやてに向ける眼差しは、お兄ちゃんが私を見る目に似ていたし、はやても土郎さんへの愛情を隠してなかったから。というか、むしろ土郎さんがタジタジになるくらいグイグイ行ってたし。

うん、そのあたりは今もあんまり変わってない。はやてが土郎さんに甘えたり振り回したりして、土郎さんは困ったように笑いながらも

幸せそうにしている。

だからじゃないかな。イシュタルとかエレシユキガル、それにパールヴァティにジャガーマン、あとシトナイがはやてに加護をあげたのは。あの人たちも、士郎さんとは違う士郎さんに縁のある人たちが依り代だから。あの人の幸せを願ってて、きつとはやてなら有無を言わずに幸せにしてくれる。そう思ったから……。

——美遊様もイリヤ様も、実はとても安心しておられたのですよ。ご存知かもしれませんが、カルデアには士郎様の未来の可能性もおられますから。赤い方のエミヤ様はまだしも、黒い方のあの方はあまりにも……。

私とイリヤは世界を超えて父かぞくと兄で繋がった姉妹だった。まさか、三人目……ううん、クロもそうだから四人目と出会うとは思わなかったけど。

え？ 姉妹で友達？ 言っている意味がよくわからない。姉妹と言えばそうだけど、誰と誰が友達なの？ 私とはやて？ 別に、はやては知人。私の友達はいりやだけ、百歩譲ってまあクロも……かな？

なのはとフェイト？ 知人だけど？ こう言うといつも二人に怒られるんだけど、事実を口にして怒られるのは釈然としない。

まあ、そんなことはどうでもいいとして……イリヤと合流した後には、リンデイさんたちにクロの搜索をお願いしたのと、カルデアからの迎えが来るまでの間、海鳴に滞在する許可と生活の保障をもらえることになったことくらいかな。もちろん、カルデアのことはできるだけ秘密にしたけど。

結構不審だったり無理のある説明にはなったけど、そこはなのはとフェイトが頑張ってくれたから。クロノさんは追及したかったみたいだけど、別に犯罪者ってわけでもないし、なのはとフェイトに「大丈夫」って力説されたら白旗振ってたのはちよつと面白かったかな。リンデイさんとエイミイさんも笑ってたし。

そのあとは……

——なぜか、ちよつと模擬戦を試みよう、ということになったのでしたね。

ああ、そうだった。うん、なんでそんなことになったのか今でもよくわからない。気付くと押し切られてて、フェイトはともかくなのはあの頃から結構押しが強かった。それで、結局2対2で模擬戦をすることになったんだけど……

* * * * *

「ふ、二人ともめっちゃ強くなってるんですけど――

――っ!?!」

「いやあ、フェイトさんのスピードもそうですが、なのはさんの火力は圧巻ですねえ」

「あなたがバスターです」

割と至る所が煤けながらも何とか撃墜されることなく凌ぎ切ったイリヤだが、すでに涙目だ。

美遊も余裕がないらしく、普段は冷静な声音に焦りの色が見える。

二人は模擬戦の舞台に設定された廃墟の影に這う這うの体で身を隠し、こそそと作戦会議の真つ最中。ぶっちゃけ、いつ見つかるんじゃないか、あるいは廃墟ごと吹き飛ばされないか戦々恐々だ。

隠れたり隠したりするのは魔術の得意分野。イリヤたち自身に魔術の心得はないが、ルビーたちカレイドステッキは最高位の魔術礼装、ある程度の融通はきく。今はそれがうまく作用しているのだから。

「うん、なんてバ火力。単純な威力だけなら、並のサーヴァントを上回ってる。

でも、どうするのイリヤ? このままだと間違いなくじり貧、遠からず押し切られる」

「う〜……別にどうしても勝たなきゃいけないわけじゃないけど、このまま負けるのもなんか悔しいし。かといって……」

「とりあえず、夢幻召喚インストロールはなしですよ。ロストログアとやらや、危険技術扱いされて没収されてはことですからね。技術の方向性が真逆ですから、早々解析できるとも思えません……」

「だとしても、念には念を入れるべき。ただ、そうになると手札は限られる」

「ツヴァイフォームもなあ。模擬戦くらいで使うようなものじゃないし……っっていうか、アレものすごく痛いからできればやりたくない」
「当然。あれは本当に最後の切り札、どうしようもない時に使う自爆技なんだから。こんなところで使おうとしたら、さすがに怒るよ？」
「はい、わかっています」

かすかな怒気を滲ませる美遊に、イリヤも目を逸らしながら同意する。カルデアには優秀な回復役がいるので、ツヴァイフォームの反動も何とかなってしまふ。そのため、やや安易に使い過ぎているという自覚があるのだろう。

まあ、使わないことには状況を打開できない場面が多いというのも理由の一つではあるが。それだけ、カルデアの歩む旅は過酷なのだ。「というか、二人とも手札増えすぎだよお。なに、あの葉蒔みたいなの？ レイジング・ハートも見たことない形態になってるし、よく見たら二人とも衣装がバージョンアップしてるし」

「おや、期が変わるごとに衣装を刷新するのは魔法少女ものの定番では？」

「ルビーの戯言はおいとくとして、あっちは私たちと会ってから二年近く経ってる。進歩するのは当然、私たちもあの頃のままじゃない」

「そりや奥の手はあるけど、使っちゃダメならないと同じだよお」

二人が合流した後、事情説明がてらフェイトの自宅に案内された折、イリヤたちも管理局とやらについて概要程度は聞いている。その際にルビーやサファイアとも相談した結果、極力自分たちの手札や情報隠すことにしたのだ。

正直、管理局的に見てイリヤたちの持つ力やカルデアの技術がどう認識されるか判断がつかない。カルデアにおけるイリヤたちの立ち位置は、唯一のマスターとはいえ職員としては下っ端の立香のサーヴァントというもの。少なくとも、勝手に判断して情報や技術を漏らしている立場ではない。

そのことを理解しているからこそ、なのはたちが知らない手札を迂闊に切るわけにはいかないのだ。

「なら、あとできることは一つ」

そういつて美遊が手にしたのは、槍を持った戦士の図柄が描かれたカード。

「夢幻召喚がだめなら、限定召喚を使う。幸い、こっちはもうなのはたちに見せてるから問題はない」

「うう、こんなことならもつと色々持ってくるんだったよお」

「食料や生活必需品の調達だけのつもりでしたからねえ」

「はい。元々持っていた六枚以外はおいてきてしまったのが運の尽きか」と

「バーサーカーの斧剣は重すぎて使えない。キャスターの破戒すべき全ての符は直接戦闘向きじゃない。使えるのはセイバーとランサー、それにライダーとアサシンの四つ」

「ライダーとアサシンはともかく、セイバーとランサーの真名開放もやめた方がいいよね。セイバーは威力あり過ぎだし、ランサーは心臓に必中とか危なすぎ。なのはちゃんたちみたいに、〴〵ひさっしょうせてい〴〵っていうのできないからなあ、私たち」

「うん。だからこそ、作戦が重要になる。フェイトはヒット&アウエイが中心だから、近づいたところで白兵戦に持ち込めばいいとして、問題はなのは。どうやって近づくか……」

そのままゴニョゴニョと密談を続ける二人。

「そうやって聞くとすごい縛りプレイですよ、イリヤさんたちって実はマゾですか？」

「人聞きの悪いこと言わないでよ!？」

「別に好きで制限してるわけじゃないのに、その言われようは不本意」などという横やりが入りながらも、大筋の作戦は出来上がる。正直、穴だらけな上に運の要素が多すぎるのだが、これが今の彼女たちにできる精一杯だ。

とそこへ、まるで出待ちでもしていたかのようにサファイアが警告を発する。

「上空にエネルギー反応！ どうやら位置がばれたようです」

「デイバイ——ン……」

「あく、さつきから光る玉みたいなものがウロウロしてましたからねえ。何かを観測したのか、それとも私たちの周りだけ反応がなさ過ぎてばれたのか、どっちでしょう？」

「悠長なこと言っていないで行くよルビー！」

「イリヤ、あとは作戦通りに」

「うん」

「バスタ——！！！」

確認し合い、二手に分かれる二人。ちょうどそこへ、数秒前まで二人がいたはずの場所を桜色の極太レーザーが貫いた。

(非殺傷設定か何か知らないけど、あんなのまともにも食らったら死ぬ) 窓から飛び出した美遊だが、そこへ待ち構えていたかのように桜色と金色の魔力弾が殺到する。

「サファイア、物理保護全開！」

とてもではないが捌き切れない物量を前に、全魔力を物理保護に回しての強行突破を図る。

無数の魔力弾に打ち据えられながらも、足元に展開した魔力を足場に強引にかけがある美遊。物理保護のおかげでダメージはほぼないが、着弾するたびに体幹がぶれスピードが鈍る。それでも何とか廃墟の屋上へと飛び上がり、なのはを視界に収めることができた。そう、なのはだけを。

(……フエイトが、いない!?)

直後、美遊の背筋を何かが走った。咄嗟にステッキを背後に、間髪入れずに衝撃。つんのめる様にして前方へと投げ出された美遊は、何とか体勢を立て直して屋上に着地した。勘でステッキを背に回していなければ、今ので落とされていたかもしれない。

誰がやったかなど考えるまでもない。しかし、その姿を確認するより早く美遊の四肢を金色の光が拘束する。

同時に、再度桜色の閃光が頭上で輝きを増す。

「エクセリオン……バスタ——！！！」

「物理保護、ピロラミデー 錘形!!」

四肢を拘束されたまま、イリヤのそれを真似て器用に自身の頭上に錘形の物理保護を展開。降り注ぐ桜色の砲撃を逸らしながら、四肢を拘束する金色のバインドを破壊しようともがく。

フェイトがそこに追い打ちをかけようとするが、美優にやや遅れてイリヤが飛翔してくる。

(やっぱり、イリヤは少し遅れた)

二年前、イリヤが「出力はちよつと自信ない」と言っていたのを憶えていたのだ。だから、追いつめてやれば美遊とイリヤの間に速度の齟齬が生じることは読めていた。もちろん、それを織り込んで時間差行動に出ることも想定済み。美遊を囮に、イリヤがフェイトを崩したのはを狙う…その可能性は十分に予想できたことだ。

なら当然、思い通りにやらせはしない。

「やっぱり、使うしかないかあ……」

「フォトンランサー…ファイアー」

自身の周囲に展開していた魔力弾の狙いを変更し、イリヤ目掛けて撃ち放つ。

回避か、迎撃か、あるいは強行突破か。いずれにせよ、その際に距離を詰めて確実に切り伏せる。そのつもりでいたフェイトだったが、現実はその予想を裏切った。

「えっ……」

イリヤが選択したのは、あえて分類するなら「強行突破」。ただし、障壁など一切展開せず、馬鹿正直に突っ込むという無謀なもの。

まずは呆気にとられ、続いてフェイトの表情に焦りの色が浮かぶ。いくら非殺傷設定とはいえ、無防備に受ければただでは済まない。何かを叫ぼうとするが、声になるより早くフォトンランサーがイリヤの身体を貫いた…その瞬間。

「いったいですねえ、もう!」

「へ?」

イリヤの身体が膨らんだかと思うと、彼女が手にしていたステッキに変化した。

(今のは囮!? デコイ じゃあ、イリヤは……)

「ルビー、来て!」

声のした方を見れば、廃墟の屋上を美遊目掛けて駆けるイリヤの姿。転身は解けていたが、フェイトに生じた一瞬の虚を突いてすでにルビーが合流する直前。間もなくイリヤの手にルビーが戻り、再度転身。いつの間にかバインドから逃れた美遊と共にステッキを構え、砲撃を撃ち終わったばかりのなのはに狙いを定めている。

「なのはっ!!」

「シユナイデン斬撃!!」

二人の魔力の刃が十字を描きなのはに迫る。

二手に分かれて狙いを分散させるとともに、出力差からくる速度の差を利用して時間差を生む。さらにアサシンのクラスカードのインク限定召喚で虚を作り、その上で合流しての同時攻撃……というのがイリヤたちが立てた作戦の第一段階。時と場合によっては極めて有効なアサシンのインク限定召喚はできれば使いたくなかったが、「手札を一枚もさらさずに」というのは虫が良すぎる。

隠さなければならぬ手札ばかりの中で、辛うじて見せても良いと判断できたのがこれだったのだ。

運の要素が濃く、大筋以外は割と行き当たりばったりだったが、なのはたちが「手堅く」くれば十分に勝算はあった。そして、所詮は模擬戦でしかないこの場で、妙な博打に出るはずもないと考えてのこと。それは見事に当たり、なんとか狙った状況へと持ち込むことができた。となれば、次は……

「レイジングハート!」

大技を撃ち終わったばかりで回避する余裕がなかったのだろう。シールドを展開して受けようとするのは。ただし、彼女も馬鹿正直に受け止めようとはしない。直前に美遊が見せた防御を参考に、シールドに角度をつける。

咄嗟に錘形になるようプログラムを改変することはできなかったようだが、代わりに角度をつけることで代用したのだろう。二人の斬撃はなのはのシールドを削りながらも軌道が逸れ、彼方へと消えてい

く。

ついさつき見たばかりの防御を即座に応用するセンスには、驚くよりほかにない。

だが、当然なれないことをすれば隙が生じる。そしてその隙が命取りだ。

「危なかったあ……って、これ!？」

なのは足の絡みついていたのは、先に杭のような短剣がついた鎖。鎖は美遊の手元へ向かって伸びており、彼女はしっかりと握りしめたそれを背負い投げの要領で力任せで振り抜く。もちろん、魔力の大半を身体強化に振り分けた上だ。

「せええええええい!!!」

「きやあああああつ!？」

「くっ!」

なのはの防御が間に合うと見て、一度はイリヤたちに向かっていたフェイトだが、進路を変えようとする。向かうは当然なのはの元……ではなく、彼女の足につながる鎖。

だが、大剣状態のバルディッシュを構え向かおうとした矢先、真紅の槍を携えたイリヤに妨害される。

「させない!」

咄嗟のことで反応が遅れ、まるで大地を蹴る様にして駆け寄るイリヤの槍撃がフェイトに迫る。

美遊がイリヤの斬撃や錘シユナイデン形ビユラミレーデを真似たように、イリヤもまた美遊の

飛行方法……正確に言えば、魔力を足場に走る移動法を取り入れたのだ。白兵戦を演じる上では、飛ぶよりもこちらの方が効率がいい。

刺突を中心として次々に放たれる攻撃に、フェイトも受けに回らざるを得ない。

緩急をつけ、一瞬たりとも足を止めることなく動き回るイリヤの動きは、どこか獣染みている。それでいて、狙いは恐ろしいほどに正確。フェイトをして、反撃の隙を中々見出せないほどに。

(くっ……早くて、鋭い! イリヤ、こんなに巧かったんだ……)

模擬戦開始直後は遠距離攻撃ばかりだったので、まさかここまで白

兵戦を得手としているとは思わなかった。

近接戦闘は自分の領域と思っただけに、完全に意表を突かれた形だろう。

結果防戦に回り、自分の長所を生かせずにいる。

(いや、仮にそうじゃなかったとしてもどこまで渡り合えたか……それくらい、イリヤは強い。もしかしたら、シグナムにも……)

彼女が知る限り、近接戦闘の技巧面では最も秀でているであろう人物が頭をよぎる。速度で上回るためにある程度渡り合えているが、純粹な技量ではまだまだ及ばないことは自覚している。そんな相手に、イリヤの業は届くかもしれない。

それが、少しばかり悔しかった。

シグナムはフェイトを好敵手と認めてくれているが、今はまだ教わることの方が多い。彼女の言葉には、正確には「将来の」がつくのだろう。

しかし、イリヤは今すぐにでもいつか自分が立ちたい場所に立てるかもしれない。それが悔しい。

(いや、今は目の前のことに集中しないと。なのはは……)

何とかイリヤの猛攻を凌ぎながら、視界の端でなのはの様子をとらえる。

そこには、黄金の剣を手に迫りくる魔力弾を切り払いながら、着実になのはとの距離を詰めていく美遊の姿。

あのままでは、なのはも遠からず間合いに捉えられてしまうだろう。仮に、美遊の技量がイリヤに匹敵するものだったなら、なのはでは持ちこたえるのは厳しい。

そして、なのはを落とされてしまえば2対1、そうなる前に状況を覆す必要がある。

(一か八か、ソニックで引き離す!!)

スピードという、自身最大の長所に賭ける。

その決意を固めて、フェイトは一瞬の隙を得るべく渾身の力で真紅の槍をはじき返した。

* * * * *

そんな4名の模擬戦を、フェイトの義兄クロノは驚きとも感嘆ともつかない表情で見ながらつぶやく。

「……なんというか、正直驚いたな。話には聞いていたが、まさかあの二人と互角に渡り合うとは」

何しろ、なのはもフェイトも管理局全体で5%もいないAAAランク。間違いなく天才と呼ばれる人種であり、本人たちも努力を惜しまず優れた技量を身に着けている。まだまだ発展途上なのは事実だが、それでもあのコンビと渡り合える者はそういない。

身内鼯鼠などでは無く、厳然たる事実としてそうなのだ。

「ま、アイツらが上手いこと自分の土俵に引きずり込んだからってのはあるけどな」

「そうね。実際、初めのうちはなのはちゃんたちの方が優勢だったわけだし」

単純に基本性能だけを問うのなら、なのはたちの方が上だろう。機動力と火力など特にそうだ。どちらにとっても不利ではない状況なら、基本性能の差で優位に立てる。

ただいまは、それを活かせない状況に持ち込まれていた。自身の能力が十全に発揮でき、相手の能力は思うようにいかせない状況づくり、戦いの基本である。それを、イリヤたちが上手く作り出した結果だ。

「せやけど、二人ともてつきり典型的な魔導士タイプやと思ってたんやけど、見かけによらんもんやねえ」

「はいです」

「まあ、槍や剣を使っていたとは聞いてたから、意外ってほどじゃないけどね」

模擬戦の様子を写すモニターの端末を弄りながらおどけて見せたのは、クロノの相棒であるエイミィだ。

「頑張れー、フェイトー！…なのはー！…」

「……………」

「どうした、シグナム？」

「どーせ、またいつもの決闘趣味だろ。あいつらと剣を交えてみたい、とか」

「誰が決闘趣味だ。まあ……確かに素晴らしい技量だとは思う。ただ……」

「ただ？」

「いったいどうやって、あれほどの技量を身に着けたのかと思ってな」
モニターに映る戦いを見るシグナムは、どこか釈然としない面持ちだ。

そんなシグナムに、傍らに立つ赤毛の少年が首をかしげている。

「何かおかしいのか？」

「……正直、あの年頃でテスタロッサ以上というのは少々信じがたい。射砲撃系の魔法も使う以上、アレも近接戦の訓練ばかりというわけにはいかんが、それでもその才覚は頭一つ抜きんでている。同等の才を持つ者が剣にのみ力を注げば上回りはするだろうが、あの子たちはそうではないだろう？」

むしろ、模擬戦開始当初の動きを見るに、主はやての見立てが正しいように思う。にもかかわらず、あの技量だ。いったいどうやって……」

シグナムの違和感は正しい。イリヤと美遊の本来のスタイルははやてが言ったような「魔導士タイプ」だ。ただあの二人の場合、少々裏技を使っている。クラスカードの本来の使い方は、「自身の肉体を媒介とし、その本質を座に居る英霊と置換する」一言で言えば「英霊になる」ことだ。これは何も武器や肉体性能だけを得るのではなく、その技量すら一時的に身に着けることを意味する。

一度や二度ではさして意味がないだろう。だが、繰り返し繰り返しその技を身体がなぞること、二人は人間レベルとしては非常に高度な次元の技量を身につけていた。要は「身体で覚えた」ということだ。まさか、そんな方法で身に着けた技とは、さすがに思いもしないだろう。

そうしている間にも模擬戦は進んでいき、ただでさえ薄い装甲をさ

らに薄くしたフェイトの機動力が戦況を再度ひっくり返す。結果としてはなのはとフェイトの勝利だったが、この日以降二人：特にフェイトはしきりにイリヤと美遊を白兵戦の訓練に誘うのだった。もちろん、そこにシグナムが参加するまでがワンセット。

ちなみに、二人が密かに「この人、絶対ケルトの同類だ」と思ったとか思わないとか。

クロエ・フォン・アインツベルンの場合

あら、なのはじゃない。久しぶり……ってあんたね、人の顔を見るなり警戒態勢取るの、いい加減やめてくれない？ 胸に手を当ててみるって？ なにそれ、嫌味？ どーせ私たちはいつまで経つても口リツ子ボディですよーだ。自分がすっかり実ったからって、何様のつもりかしらね、まったく失礼しちゃうわ。

旦那に感謝しなさいよ。中学まで友達の中で一番小さかったのが、そこまで大きくなったのはアイツがすっかり揉んで：モガモガ！

——ママ、顔真つ赤だよ。それに、パパがどうかしたの？ え、クロエさんと話があるから、少しそのベンチで待ってればいいのか？ わかった、いつてらつしやい。………まったく、ママも何を照れてるんだらうね。クロエさんが何を言ってたのかなんて、わからないわけないのに。ねえ、クリス。

………つたく、しつかり鼻と口ふさいでくれちゃって、死ぬかと思つたわよ。

あー、はいはい。そういう意味じゃないって言いたいんでしょ、わかってるわよそれくらい。ちよつとしたジョークじゃないの。まったく、この程度で真つ赤になつちやって、仲睦まじいのは結構だけど、新婚気分も大概にしなさいよ。ヴィヴィオも苦労するわ。

ヴィヴィオがどうかしたのかって？ あの子もあの子なりに色々気を遣ってるってことよ。見て見ぬふりとか、気付かないふりとかね。ああ、一応言っておくけど聞いちやダメよ。

………よろしい。とりあえずまあ、私の方も切羽詰まっていたとはいえ、あの時のことは悪かったとは思ってるわよ。だから茶化したりしないで、誠心誠意頭も下げたじゃない。でも、アンタたちにとっては丁度いいきっかけになつたんじゃない？ アレがなかったら、今頃くつつていなかっただかもなんだし。

目をそらして「そんなことないもん」なんて言っても説得力ないわよ。というか、いい年して「もん」てなによ「もん」て。

まあそれはいいとして、鈍感と奥手のコンビじゃ、いつまで経って

も進展なんてしやしないじゃない。実際、きつかけがあつてすら付き合うようになるのに何年もかかつて、ヴィヴィオのことで覚悟が決まらなかつたら今も結婚してなかつたくせに。

あんた、そういうところ結構ヘタレよね。ヴィヴィオのことだつて、「空の人間だからいつ墜ちるかわからない」とか言つて逃げてたそうじゃない。

むしろ、その点に関しては感謝されてもいらいじゃないかしら？ ま、それ自体は結果論だから感謝なんてされても困るから別にいいんだけど。でも、一々警戒態勢取るのはほんとにやめなさいよね。と・く・に！ 旦那といっしょの時なんて警戒心むき出しじゃないの。別にとつたりしないから安心しなさいっての。

ほら、そろそろ戻るわよ。いつまでも子どもを一人にしてたら母親失格よ。

——あ、おかえり。もうお話終わった？

ほんと、いい子に育つたわね。あの子も大概厄介な背景があるつてのに……。

自信を持ちなさい、ヴィヴィオがああして屈託なく笑つて、真つすぐ育つたのはなのは、あなたがいたからなんだから。しっかり胸を張りなさい、あなたは立派に母親やつてるわ。

……あ、そうだ。もしもこれからも改善が見られないようなら、あの時のことヴィヴィオにばらすから、そのつもりで。

——あの時？ ママ、前に何かあつたの？

ん、聞きたいの、ヴィヴィオ？

——聞きたい！ ちょうど今、皆さんに昔のこと聞いて回つてるので、ぜひ！

ああ、そういえばそんなこと言つてたわね。でもね、そつちのママは話してほしくないみたいだし……？

——ええ！ どうして、私ママたちのこともっと知りたいのに！

ですつてよ、どうするのママさん？

……はいはい。じゃ、とりあえずは私がイリヤたちと合流する前あ

たりまでにしときましようか。だからなのはも、そんなこの世の終わりにみたいな顔しないの。ヴィヴィオも、今はそれで我慢しなさいな。誰だって、知られたくない過去の失敗談の一つや二つあるものよ♪

——（……………今度こそつと教えてくださいね）

さてさて、まずは私がどこに出たのか、かしら。いや、ほんとなんであそこだったのかしらね。

イリヤも美遊も海鳴だったのに、私だけ本局…しかも無限書庫だったのよ？ まあ、無理矢理理屈をつけるなら、最初にイリヤたちとなのはたちが関わった時に、私もアイツも関わっていたかもしれないのに関わらなかつた、そんな微妙な共通点が縁になったとか、そんなところでしようけど…割とこじつけなのよね。

とにかくまあ、なぜか私一人だけ無限書庫に出ちゃって、そこで最初に会った…そう、あなたのパパの世話になることになったのよ。

まず手始めに自分の遭難というか漂流というか、そういうものの申請を出して、それからイリヤと美遊の搜索願とかその他諸々。もちろん、ミツド語なんて話せないし字も書けなかつたから、手続きとかほとんど任せつきりだつたけど。

で、私の申請の方はさつきと通つただけど、何しろ言葉が通じないでしょ？ だから、アイツが借りてる部屋の近くの空き部屋に住まわせてもらうことになって、いろいろ面倒見てもらつたから事実上の後見人というか保護責任者状態ね。さすがに世話になりっぱなしは悪いから、書庫の整理とか身の回りの雑事とか手伝いながらイリヤたちの報告が来るのを待ってただけど…：灯台下暗しじゃないけど、まさかイリヤたちがお世話になってる人たちの思いつきり関係者とか、そんなニアミスしてるとは思わないわよ、普通。

リンデイさんたちの方も、てつきり私は地球にいてると思つてたからそつちの方面ばかり気にしてたみたいだし、仕方ないと言えば仕方ないんだけどね。

——でも、しゃべってたのは日本語なんですよ？… だつたら、パパからママたちに連絡とかいかなかつたんですか？

それがね、当時の無限書庫はまだまだ整理の方が主眼を置かれてい

るような時期で、とにかくどこに何があるかわからなきや仕事にならなかつたのよ。その上今以上に人手不足だったし、おかげで基本的に常時締め切り間際の作家みたいな修羅場状態だったの。そこに来て私のことでしょ？ ただでさえ忙しいのに余計な雑務まで抱えて、割と余裕がなかつたのよ。だから、あの時はあんまり連絡とか取ってないの。

まあ、私が地球関係者つてことで、てつきりそちから話が行くと思つてたつてのもあつたんでしようけど。

その結果、リンディさんたちは本局から来てる私の搜索願いとかを見逃して、見当外れのところばかり探す羽目になつたつてわけ。

で、そんなこんなで時間だけが過ぎて行つて……

* * * * *

(あゝ、これはいいよ不味いわね)

時空管理局本局、無限書庫なる場所に放り出されて早数日。クロエは割とのつぴきならない危機に晒されていた。

(いい加減、何とか魔力を補給しないと現界を維持できない。ただ退去してカルデアに戻るならそれはそれでいいんだけど、こんなイレギュラーな状態じゃどうなるかわかつたもんじゃないし……)

元々、彼女には実体肉体と呼ぶべきものがない。極めて特殊な魔術礼装を核に受肉したような状態である彼女の存在は、ある種の奇跡なのだ。

その肉体は魔力によつて維持されており、何もしなくとも常に消費されてしまう。そのため、枯渇する前に何らかの方法で魔力を補給しなければならぬ。それは自身がサーヴァントとなつた今も変わらず、図らずもマスター不在で現界してしまつたサーヴァントのような状態にある。

今までは極力魔力の消費を抑え、魔術などは一切使わず日常生活に終始してきたがそれも限界が近い。このままでは、あと一昼夜と持たずに彼女は消滅してしまうだろう。

(さすがに、こんなところで消えるわけにはいかないしね。となれば、仕方がないか)

素直に管理局に自分の状態を申告すれば、何らかの形で魔力を融通してもらえるかもしれない。

だが、その決断を下すにはクロエは管理局というものを未だ知らなさ過ぎた。表向きは治安維持機構のような存在のようだが、巨大な組織には必ず裏や闇が付きまとう。果たして、自身が肉体を持たず魔力によつて実体を構成していると知られて、ただで済むか確信が持てない。

人として扱われればいいが、体のいい実験材料とみなされてはたまらない。あるいは、これをきっかけにカルデアに不利益があるようなことになつても困る。

だからこそ、クロエは可能な限り自分の情報を伏せざるをえなかった。まさか彼女も、管理局に自身と似たような身体が存在がいるとは思ひもしなかった。下手に調べると怪しまれるのではと警戒したが、裏目に出た結果だ。

とはいえ、クロエは自身の判断は今でも正しいと思つている。ただ、そうして普通の人間として振る舞つている以上は、魔力を融通してもらふことはできないだろうと考えるのは自然なことだった。

(ここで私が頼れる相手は少ない。その中でつてなると……やつぱり、アイツに頼むしかないか。面倒なことにならないようできれば避けたかったんだけど、流石に本当に“通りキス魔”するわけにもいかないし、やむを得ないか)

いくらクロエでも、局内を歩いている女性を適当に選んでキスするつもりはない。色々融通の利くカルデアならまだしも、キツチリとした治安維持組織の内部でそんなことをしたら下手をしなくても事件扱いされるだろう。

運良くクロエが犯人だとわからなければいいが、さすがにそこまで楽観的にはなれない。

要は、思い浮かべている人物にキスをするのと、局内で通りキス魔をするのと、どちらがより面倒を避けられるか。これはそういう話で

あり、もちろん答えなど分かり切っている。

「事情は……まあ、アイツならあんまり深くは突っ込んでこないでしょ。だからこそ頼めるわけなんだけど……」

ボヤキながらスライド式の扉が開くと、そこには「壮観」としか表現のしようのない上下にどこまでも続く本棚。当然、右を見ても左を見ても本！ 本！！ 本!!! 円筒状の本棚が果てしなく続く様は、まさに「無限書庫」の名に偽りなしといったところだろう。

扉から先に通路はなく、そのまま一步を踏み出せば奈落の底まで真っ逆さまだろう。だが、クロエは躊躇なく床を蹴り円筒状の空間に身を躍らせた。するとどうしたことだろう、飛行能力を持たないはずの彼女の身体は落下することなく床を蹴った勢いをそのままに宙を進む。

そう、ここ無限書庫内部は所謂「無重力空間」なのだ。初めのうちはクロエも戸惑ったりしたのだが、連日通っていればいい加減に慣れる。姿勢の維持も板につき泳ぐように書庫を進んでいく。

よく目を凝らせば、ちらほらと人影が浮かんでいることに気付く。基本的には司書のような許可を得た者でなければ入れない場所であり、それを証明するように彼らの周囲には数冊の本が浮かんでいる。この世界で言うところの「魔法」により、本を開かずに内容を確認し、それを分類わけするのが司書たちの基本業務の一つだ。

クロエは無論司書ではないが、一応許可をもらって通わせてもらっている。何しろ、彼女の身分を保証する人間がここに勤めているのだ。寄る辺のないクロエを慮り、現責任者は快く許可を与えてくれた。

その点には感謝しているのだが、もう少し明るくならないだろうかとは思う。

いや、明かりが乏しく薄暗いのは、収められた書籍が光で焼けないようにという配慮だということくらいは理解している。ただ、どうにも目に優しくない。長いこと詰めていると、絶対に目を悪くしそうだ。

「さて、どこにいるのかなつと………あ、いたいた」

目を凝らし、目当ての人物を探すがすぐに見つかった。これは割と運がいい。何分とにかく広いので、下手をするといつまで経つても見つけられないなんてことも十分にありうるのだ。

「ユーノ」

「ん？ ああ、クロエ。どうしたの？」

「どうしたの、じゃないわよ。もうお昼よ。一回切り上げて食べに来なさい。それとも、私が持ってこようか？」

「ああ、もうそんな時間なんだ。って、ここ一応飲食禁止なんだけど……」

「だったらもう少し時間を気にしなさい。仕事熱心は結構だけど、食事も休憩もなしじゃむしろ効率悪いでしょうが」

「……はい」

薄い蜂蜜色の髪の中性的な顔立ちの少年に向かって、腰に手を当てながらお姉さん風に苦言を呈する。

クロエが書庫内に入る許可をもらえた最大の理由がこれだ。目の前の少年、ユーノ・スクライアは書庫最年少司書なのだが、年齢に見合わない能力の持ち主でもある。というか、一応暫定責任者である司書長はいるものの、はつきり言っただけは彼はお飾りに近い。管理職としての能力はもちろん十分にあるのだが、書庫内を把握できているかという……。

現状、書庫内を最も把握しているのはこのユーノだ。年が若すぎることや管理職として求められる能力が十分でないことから一司書として扱われているが、もう少し年齢を重ね、その間に管理職としての教育を受ければ、数年以内に彼が司書長の座に就くことはほぼほぼ確定事項となっている。

そんな彼だが、年齢に対して不相应なまでに早熟というか……仕事に没頭すると時間を忘れてしまうのだ。おかげで、まだようやく二桁に達したばかりという年齢でありながら、食事や休憩を抜きがちなのである。

周囲としてもそのあたりは心配なので気にかけるようにはしているが、如何せん回りも忙しい。そこそこ頻繁に局の関係者である彼の

友人たちが来ては世話を焼いてくれるが、流石に毎日とはいかない。なので、とりあえず世話になっっている間くらいは手伝いを……とクロエが手をあげれば即断即決。あつという間に、ユーノ専属の世話係になり今に至る。

こうしてユーノに食事や休憩をとるよう促すのはまだ序の口。「あともう少し」と言っでごねる彼を時に蹴り飛ばし、時に襟首つかんで引きずっていくのも、彼女の仕事のうちだ。あとついでに、調べた書籍を戻したり、彼が書いた書類を出しに行ったりなんてことも含まれるが。

「ほら、わかったらさっさと本戻していくわよ」

「……はい」

「あら、随分素直になったわね。初めのうちなんて、散々駄々こねてたのに……」

「人を子どもみたいに言わないでよ」

「いや、アンタまだ十分子どもでしょうが」

「え？ あ、そつか……いや、そうじゃなくて、流石に僕だって学習するってこと。ここで渋ったら次は蹴りか拳骨か、はたまた……そう思ったらおとなしく言うことを聞くしかないでしょ」

「人聞きの悪いこと言わないでよね。私だっではじめはちゃんと言葉で伝えたわよ。なのにアンタがあれやこれやと屁理屈こねるから、仕方なく……ね？」

「ちよつと舌を出して小首を傾げてもダメだから。仕方なく、で暴力は肯定されないから」

「あんたを引きずって出てきたら、あとでみんなから拍手喝采されたけど？　なのは……だっけ？　その子たちはアンタに甘いつて」

なんとなく聞き覚えがあるような、ないような名前を引き合いに出す。とはいえ、これ自体は事実だ。基本、彼の関係者は甘いというか優しいので、そういった強硬手段に出ない。加えて、彼自身頭がいいので大抵の相手は丸め込めてしまう。特に無限書庫に勤めている者たちはインテリばかりなので、その手の理屈に弱い。

が、そんなことはクロエの知ったことではない。聞き分けのない子

どもには強硬手段も辞さない、あれは暴力ではなく愛の鞭なのです。
「みんな……」

「とにかく、しっかり食べてしっかり休息。きつちり一時間休むまで
書庫には戻さないから、そのつもりでいなさい」

「いや、一時間って、そんなに……」

「一時間の休憩は規則に定められたことよ。あんたも民間協力者？

とはいええ、しっかり規則は守りなさいよね。休める時は休む、戦場の

鉄則よ」

「いや、ここそんな物騒な場所じゃないんだけど……」

「職場環境としてのブラックさなら、私の知る限り下から二番目だから大差ないわ」

無論、栄えある……いや、ないワースト一位は彼女の所属するカルデアである。

——足りない人手

爆破や襲撃で職員激減、交代要員も乏しく常にカツカツです

——過酷な任務

事実上の大量虐殺も任務のうち

——積もる残業

基本24時間、勤務か待機。休憩返上もざら

——消える休暇

いつ何をやらかすかわからない連中揃い

——見合わない給料

そもそも使う当てがない、というかいまや

紙切れ同然だ

——外出許可は出ず

環境的に外に出られないか、出ても何

もないのが基本

——評価はされない

公にできず、しても信じてもらえ

ない

——残ったのは記憶と胸の痛

みだけ

世界レベルで丸つと消えて

るからね

そして――もう、帰ることはできない。

「どんなところなのさ？」

「……………うん、ブラックを超えたブラック。そう、最早ダークネス」「どんだけなの!？」

そうとしか言いようがないのである。何が悪いかと言えば、誰も悪くないことが性質が悪い。何しろそれは、どうやっても改善のしようがなかったということの意味するのだから。

無限書庫には改善の余地がいくらでもあるが、カルデアのそれはいくら振り返つてみても改善点が見つからない。改善するためには、それこそ最初の爆破を回避するかそういうレベルの話になってしまふ。

「ユーノ、ちよつとこつち来て」

「へっ、クロエ!？」

「……………さて」

「どうしたの?」

「ああ……………うん。なんというか、ちよつと頼み、というかお願いがあるんだけど」

「お願い?」

無限書庫を出て食堂に向かう途中、人目がないことを確認したうえで少し外れた通路に引つ張り込む。

驚いたユーノだったが、すぐにクロエの様子がおかしいことに気付く。普段は飄々として掴み所のない、小悪魔然とした振る舞いの彼女が、どうにも落ち着かない様子でいる。

「何も聞かずに、私に魔力を分けてほしいの」

「魔力を? まあ、それは構わないけど……………」

実際、それ自体は大したことではない。それほど魔力量の多い方ではないユーノだが、多少融通した程度でこれからの仕事に支障をきた

すほど少なくもない。

多少の疑問はあるが、聞かれたくないのなら敢えて聞こうとは思わない。少なくとも、短い付き合いだがクロエは悪い人間ではないという事は確信している。偶にからかってきたり悪戯を仕掛けたりしてくるのは……ちよつと頭が痛いのが、十分に後から笑い話にできる範囲だ。

いや、書庫内をミニスカートで動き回り、ギリギリ下着が見えない範囲で健康的なフトモモを見せつけてきたり、薄着で上目遣いに距離を詰めてきたりするのには、心臓に悪いので勘弁してほしいが。

女の子と認識はしていても異性としては見ていない相手とはいえ、ユーノも男の子。特に精神面が早熟なこともあってか、多少なりとも反応してしまう。その度に、脳裏に一人の幼馴染の姿がよぎっては、途方もない罪悪感にかられるのだ。

なぜ彼女の姿が浮かび、ものすごく悪いことをした気持ちになるのかは、本人もまだよくわかっていないが。

とにかく、頼み自体は問題ないので、さつそく魔力を分け与えるための魔法を起動。結界魔導士であり、防御やサポート系を得意とする彼にとってみれば、片手間にできる程度のものである。

魔法はつつがなく発動し、翡翠の光がクロエの体を包む……が、当のクロエは眉間に皺を寄せている。

「はあ……やっぱりか」

「どうしたの？」

「うん。まあ、そうなんじゃないかなあとは思ってたんだけど、案の定ただ魔力を分けてもらっただけじゃ意味がないみたい」

「え、うまくいかなかったのかな？　じゃあ、もう一度……」

「ごめん、ユーノのせいじゃないわ。というか、そういう問題じゃないのよ」

もう一度魔法を発動させようとクロエに手を差し出すユーノの手を抑え、頭を振る。

「あなたたちの魔力の要……リンカーコアって言ったっけ？　それで出力された魔力だと、私には合わないのよ。ま、可能性として考慮はし

てたけど、できれば外れてほしかったわ」

「そうなの？」

「あんまり詳しくは言えないけど、例えるならあなたたちのリンカーコアは肺で、魔力は空気。それに対し、私たちのは心臓と血液に近いわ。確か、ユーノ達って魔力を生成するんじゃないかって、大気中の魔力を取り込んで貯めるんでしょ？」

「うん。正確には、魔力素だけどね。魔力素を取り込んで、連結させることで魔力に変換。それから外部に出力するのが、基本的なリンカーコアの機能だから」

「やっぱり、その違いか……」

似たようなことはクロエたちの「魔術回路」でもできる。ただ彼女たちの場合、それとは別に生命力を魔力に変換する「炉」としての機能も有している。彼女たちの認識では、魔力とは個々の魔術師や世界の生命力を変換したものととしての意味合いが強い。故に、クロエは自身の魔術回路と魔力を心臓と血液に例えた。

そして、聞く限りユーノ達のそれは肺や空気を連想させる。おそらく、この辺りの違いがクロエにユーノの魔力が馴染まなかった理由と関係しているのだろう。

「えっと、よくわからないけど僕の魔力じゃクロエには意味がないってこと？」

「変換する方法があればいいんですけど、今は言っても意味がないし、そういうことになるわね」

「じゃあ、どうすれば……」

(やっぱり、こうするしかないか)

ある程度予想できていたことだが、できればすんなりいつてほしかったというのが本音だっただけに、落胆は禁じ得ない。

とはいえ、今のクロエには時間がない。このままで、次の朝を迎える前にクロエは消えてしまう。こんな、どことも知れないような場所で消えてしまうわけにはいかないのだ。

見れば、ユーノも何とかしようと思ってくれているらしく、真剣な表情でぶつぶつと何事かつぶやいている。だが、歴史学や考古学が専

門の彼にすぐに回答が出せるとは思えない。クロエ自身、自分に関する情報を制限しているのだから、なおのことだろう。十分な情報があった上で、相応の時間をかけて研究しなければ魔力の質を変え術が確立できるはずもない。

だが、クロエには一っだけ方策がある。極力避けたい選択肢ではあったが…やむを得ない。

「ユーノ、考えてくれているところ悪いけど、一応方法があるわ」「そうなの?」

「まず、目を閉じなさい」「え?」

「いいから閉じる!」
「う、うん」

「一応確認するけど、恋人だったり好きな相手はいる? もちろん、この場合の好きな相手は恋愛的な意味だから」

「……いない、けど」

(微妙な反応ね。明確に意識はしてないけど、好意自体はあるってことかしら? たたく、男の子なんだからはつきりしなさいよね!!)

多少顔を紅潮させているが、突然の予想外の質問に戸惑っているようにも見えるので、いまいち判然としない。

クロエとしては、もしもそういう相手がいるなら苦しいが別の方策を考えようかと思っていたのだが……こういう曖昧な反応が一番困る。

(……仕方がない、か。あんまり時間もないし)

「……クロエ?」

「ユーノ、詳しいことは言えないけど、私には今魔力が必要で、それがないと命に関わるわ」

「命って!?!」

「だから、何とかする方法があるから大丈夫って言ってるの! で、これからすることはそういう事情の所謂人工呼吸的なアレだから。アంతは特に気にしなくていいし、特別な意味もないから勘違いしないように。そうね、自分で言うのもどうかと思うけど、犬にでも噛まれ

たと思いなさい。それが、さつき言った通り人工呼吸か何かでもいいけど」

「は、はあ……で、なにをするの?」

律儀に目を閉じたまま疑問符を浮かべるユーノの頬にそつと両手を添えた。驚いたように身体を硬直させるユーノだが、それを無視して距離を詰め、優しく……だがしつかりと唇を合わせる。

「……………んっ」

「フガッ!」

(逃げるな!)

単に唇を合わせた程度では足りない。そこから魔力……ひいては生命力を吸い上げるにはそれなりに時間があるのだ。なので、頬に添えた手にしつかりと力を込めて逃がさないように抑える。

そう、魔力を直接融通できないとなれば、あとはもうその元となる生命力を分けてもらうしかない。通常、魔術回路のない人間でも身体は多少の魔力を宿すものだが、ユーノ達相手にそれが通じるかは不明。身体に宿った魔力を分けてもらうだけならわずかな粘膜接触で十分なのだが、生命力を直接分けてもらうとなると勝手が違う。

(案の定、ね。これはまだもう少し時間がかかりそう)

少しでも効率上げるため、舌を使って唇をこじ開けた。二人の間でピチャピチャとかすかな水音が生じ、クロエの下がユーノの口内を蹂躪する。当然、ユーノは閉じていた目を見開いて大慌てだ。突然のことに驚く気持ちもわかるし、逃げようとするのは自然な反応だろう。が、クロエも命がかかっているのでそこは引いてはやれない。

あらかじめしつかり説明すべきか迷ったが、ユーノの性格上、詳細を知ったら尻込みしそうなのでこうして一気に推し進めた次第だ。まあ、クロエとしても気心知れた半身イリヤならいざ知らず、最近知り合ったばかりの男の子相手にそういったことを事細かに話すのは、さすがに気が引けたというのものもある。

しかしそこへ、一つの運命が軽やかな音を立てて歩み寄ってきていたなどと、いったい誰が予想できただろう。

「ユーノ君、差し入れ喜んでくれるかなあ♪」

無限書庫へと続く廊下を歩いてきたのは、偶々時間が空いたので幼馴染兼魔法の先生であるユーノの様子を見に来た時空管理局嘱託魔導士の高町なのは、その人。

彼女がユーノに会いに無限書庫に顔を出すのはいつものこと。割と暇さえあれば顔を出しているのです。こうして無限書庫へ向かう廊下を歩いているのはよくあることだ。ただ、この日だけは「間が悪かった」。

「フンフフ〜ン♪」

上機嫌、鼻歌交じりに廊下を進むなのは。トレードマークのリボンで結った髪をピヨコピヨコ揺らしながら、大事そうに差し入れの入った小箱を抱えている。

中身は彼女の両親が経営する喫茶「翠屋」の人気商品であるシュークリームとクッキー。無限書庫司書の皆さんにも好評な定番の差し入れだ。まあ、大半の司書にとっては脳を活性化させる「糖分」として有難がられていることを、当のなのはは知らない。

そして、気付かなければいいものを……まだ若いというより幼いというべき年齢の嘱託魔導士とはいえ、稀有なAAAランクの砲撃魔導士として、すでに戦闘訓練と実戦をこなす彼女の磨かれた感覚はそれを捉えてしまった。

あまり目立つことのない、無限書庫へと続く廊下につながる通路で密着する二つの人影。

決して大きくはなく、背格好はほぼ自身と同じ。おそらくは同年代であろう影を視界の端でとらえたなのは、よせばいいのに反射的にそちらに視線をやってしまった。

(…… え、 あ れっ て？)

………もしかして、キス………してる？ わっ、わわっ?! ど、どうしよう! えっと、じっと見たりしちや悪い、よね? でも、ちょ……ちよっとだけなら……)

なのはももう小学五年生。漫画や小説などでも、恋愛ものが好きなお年頃。姉はともかく、兄には恋人がいるし、もう心を決めてしまった友人もいる。そのためか、どうしても視線を切ることができなかつ

た。

マジマジと見るのはいけないと思ったからか、視界の端で観察してしまつたのが運の尽き。初めは角度的によく見えなかつたそれも、歩みを進めていくことで明瞭に。通路の影に隠れるようにして合わさつた影は思ひのほか小さい。てつきり、もつと年上だと思つていただけに、より一層視線がそちらに向かつてしまう。

（二人とも私と同じ年くらい、だよな？ す、すごい。こつちだと私たちくらいでも働いてるけど、そういうのも進んでるん、だ……）

そこで気付く、気付いてしまつた。なのはに背を向ける形になつてゐる若干赤みを帯びた白い髪の少女の向こうに、よく見知つた……決して見間違ふはずのない薄い蜂蜜色がいることに。

「……ユーノ、君？」

「~~~~~つ！！」

はっ!? な、なのは!? まつて、これはちがつ!!」

その瞬間、なのはの胸の奥で何かがはじけた。

「~~~~~つ!!!」

何かを叫んだ気もするし、声にならなかつた気もする。だがそれすら認識することなく、手から差し入れの小箱を落としたのは我武者羅に來た道を戻る。遠い背後から、なのはを呼び止めようとする声に気付くことなく。

—— どうしてなのかわからない。

—— なぜ、逃げるように走り出したのか。

—— ただ、その場にいたくなかつた。

—— ユーノが自分の知らない誰かとキスをしていた。

—— それを認めたくなかつた。理解したくなかつた。

—— 一つ確かなこと、どうしようもなく胸が苦しいこと。

—— いや、認めたくないがそれとも
う一つ……

らしいに「黒く」染まっていた。

(違うー・違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う——！)

ユーノ君に恋人がいたって関係ない！ 私たちは友達で！ だから、「おめでどう」って祝福して！ それから、「なんで教えてくれなかったの」ってちよつと文句を言う！ それだけ!! 私が、なのはがしていいのはそれだけなの！ それだけの、筈なのに——どうして、どうしてこんなに嫌な気持ちになるの。どう、して……こんなの、高野なのは私じゃない。こんなの、絶対間違ってる……)

その日、なのはは「食欲がない」と言っつて、自室から出てこなかった。

自分がどうやって自宅に帰ったのかすらわからないまま、自分の中に生じた「あつてはいけない感情」を消し去ろうと否定し拒絶続けて。

だが夜が明けても、彼女の中からそれが消えることはなかった。

「なのは……」

「あつちやー……ユーノ！ アンタ、恋人いないんじゃないのー！」「ち、違うよ！ なのはは幼馴染で……」

「幼馴染のキスシーン見て泣く女の子なんていないわよ!! このトーヘンボク!!」

「でも、僕たちは本当に……」

(……いや、照れて誤魔化してる風でもないし、つてことはまだ無自覚？ あつちの「なのは」って子はわからないけど……ああもう！ こつちだつてそんなに余裕ないつてのに……とはいえ、私が蒔いた種なんだから、せめて関係修復くらいはしないと、かあ)

何も解決していないのに増える問題に、深く溜息を吐くクロエだった。

とはいえ、世は「万事塞翁が馬」。何がどう転ぶかわからないもの。

結果的に、なのはの様子を心配したフェイトたちが前日彼女が無限

書庫に向かったことからユーノに連絡を取り、そこからクロエはイリヤたちと再会できたのだから、悪いばかりではない。

まあその後、誤解を解くのにまた一悶着があったのだが……結果論ではあるものの、二人がお互いを「幼馴染」あるいは「異性の友達」という認識から一つ先に進むきっかけになったのだから、まあ結果良ければすべてよし、という奴だろう。

ただし、当のなのははというと、全てが終わった後にこう絶叫したそうなの。

「ユーノ君の初めて取られた——つ!!!」

と。それを本局の真ただ中でやってしまったものだから、さあ大変。

あまりにも意味深な内容に管理局は騒然、ある事ない事噂が飛び交い……ユーノとなのは、二人揃って特大の雷を落とされたのであった。

以来、なのははこの時の話題はタブー……局員の間でも闇に葬られることに。

ついでに、色々誤解が解けた後もなのははどうしてもクロエへの苦意を拭えず、特にユーノとクロエが揃うと子猫を守る親猫みたいに警戒心むき出しになるのであった。

フエイト・テストタロツサ・ハラオウンの場合

——えっ!? それじゃママ、そのあと一ヶ月近くも逃げ回ったの? でも、学校とか局でのお仕事の時とか、それだと困るんじゃない? ……。

もちろん、学校とかでは普段通りにしてたよ。普通におしやべりだっけするし、訓練や任務の時は内心なんておくびにも出さずにきっちりこなしてた。

そのあたり、流石だとは思っただけど……今考えると、十歳そこそこの子どもがすることじゃないよね。

——ママ、小さい頃一人でいることが多かったんだよね? 確か、おじいちゃんが怪我したって……。

うん。私も当時のことは聞いた話でしか知らないけど、翠屋の経営がやつと軌道に乗り始めた時と重なって、仕事とお見舞いで恭也さんや美由紀さんまで忙しくしてたんだって。だからなのは一人で留守番してることが多かったみたい。

まだ小さかったから手伝うこともできなくて、だからせめて邪魔にならないように、困らせないように……そうやって、寂しさとかを隠すようになったのが根底にあるんだと思う。

——そっか……。
でも……。

——でも?
よく任務とかで一緒になってたヴィータは「見てられない」って言うってたっけ。

——そうなの?
うん。ふとした拍子にすごく苦しそうな顔をしてたり、かと思えば泣きそうな目をしてたりしてたんだって。

——やっぱり、その時からパパのことが好きだったのかな?
……どうだろう。クロのことがきつかけになったのは確かだし、幼馴染とか友達とかから『異性』として意識はするようになったと思う。でも、すぐに恋愛感情になったかって言うと……。

——そうじゃないのに、苦しそうにしてたの？

なのはにとつて、ユーノは色々な意味で特別だったからね。立香たち風に言えば『運命の人』だから。

あ、運命って言っても『赤い糸』とかそういう意味じゃないよ。この場合は、『人生の分岐点』っていう意味。

——運命の、分岐点？

そう。例えば、私との出会いがなのはの人生に与えた影響はそんなには大きくない。

——ええ!? そんなことないと思うけど……。

でも、考えてみて。仮に私と出会わなかったとしても、ジュエルシードの回収を進めていけば、いずれアースラが到着してクロノやリンディ母さんと出会うことになる。そうなれば、当然魔導士としての道、管理局に入る未来を提示される。

なのはがどの道を選ぶかはわからないけど、十分に管理局に入る可能性はある。

まあ、今みたいに戦技教導官や戦闘魔導士をやっているかはわからないけど。

——そう…だね。翠屋の跡を継いでいたかもしれないけど、そつちも十分にあり得ると思う。

だけど、ユーノは違う。ユーノと出会わなければ、なのははそもそも『魔法』と関わることもしなかった。もちろん、管理局や魔導士とも無縁のまま。

——そつか、人生の分岐点ってそういう意味なんだ。あ、じゃあ私にとつての運命って……。

一人とは限らないけど、間違いなくなのはだと思うよ。なのはに出会えたことは、ヴィヴィオの人生ですごく大きなことだから。

——……うん。だとしたら、私がこうしていられるのもある意味パパのおかげかな？ だって、パパがママと出会ってくれなかったら、私はきつとこんなに幸せではいられなかったから。よくし、今度一緒にお風呂に入って背中流してあげようつと！

(それを言ったら、私もかな。なのはと出会っていなかったら、きつと

私は「あの時」もう一度立ち上がることはできなかった。それは、なのはが何度も手を差し伸べてくれたからだ。そして、その出会いを作ってくれたのがユーノ……今度、菓子折りでももってお礼に行こうかな？

本人はきつと訳が分からなくて混乱するだろうけど)

——でも、それでなんで逃げることになっちゃうのかな？ 特別な人がキスしてたのがショックっていうのはわかるけど……。

こればっかりはなのはじゃないとわからないんじゃないかな。もしかしたら、なのは自身にもうまく言葉にできないかもしれないけど。

ただ、自分の気持ちが上手く掴めなかったって言うのはあるかもね。なのはも、友達に恋人ができたなら祝福しなきゃ、なのにできない、したくない……って言って、自己嫌悪レベルで思いつめてたから。

——……やっぱり、好きだったんじゃないの？

……うん、そんな気がしてきた。

まあ、あの時点ではユーノが自分の傍からいなくなる、っていうことに対する不安とかが強かったみたいだけど。ユーノは最初に他ならぬ『高町なのは』を必要としてくれた、魔法っていう自分にできることをくれた人。その人が離れて行ってしまふのが怖かったんだと思う。

今思うと、昔のこともあったのは、魔法や『必要とされる』ことに少なからず依存してたのかもね。

——そういえば、前に立香さんが私とパパのことをママの『重石』だっけって言ってたっけ。それと、今のママは安心して見ていられるって。

「重荷」じゃなくて「重石」、か。ああ、その言い方は立香らしいね。

ユーノはよく『なのはは空が似合う』って言ってたけど、立香は逆に『どこかに飛んで行ってしまいそう』って言ってた。きつと、立香にはなのはが凧か風船にでも見えたんじゃないかな。

糸を離すとどこかに行ってしまうようなのは、でも今は二人がい

る家が帰る場所になって、なのはをここに繋ぎ止めてくれる。

—— えへへ、そうだとしたら嬉しいな♪ でも、学校や局のお仕事で一緒にいることも多かったんだから、話もできたんじゃないの？
それがね、日常会話なら普通に答えてくれるのに、なのはって私たちかユーノの話をしようとする逃げちやうんだよ。多分、私たちも多少なりとも力が入ってたから、それを察したんだと思うけど……引き際が良すぎて、ね？

—— ママ……クロエさんの『案外ヘタレ』が否定できないよ。

実際、ユーノが日本の結婚できる年齢の18歳になってプロポーズした時も、例の『空の人間だから』っていう理由で返事を保留……というか一度は断ったんだ。ユーノもそのあたりわかってたから、めげずに『いつまででも待ってる』ってスタンスだったけど。

ヴィヴィオのことで覚悟が決まった後はトントン拍子で進んだけど、そうでなかったら今も結婚してないんじゃないかな？

—— ママに呆ればいいのか、パパを尊敬すればいいのか迷います。

どっちもでいいんじゃないかな。

—— ママの株が結構下がって、パパの株が鰻上りです……まったくもう！ というか、あれだけ『お話聞かせて』『話を聞いて』っていう人が、それってどうなの？

本当にね（クスクス）。

—— いや、それよりむしろどうやって誤解を解いたの？ 話をしようとしても、その前に逃げちやうんでしょ？

そのあたりはほら、『人の話を聞く』のと『人に話を聞かせる』のが達人的に巧い人がいるでしょ。

—— ああ！ そういえば、八神司令に聞いたことがある。立香さんのところに『カヨイオサナツマ』っていうのしてたんでしょ？

……… はやてとは今度、念入りにお話ししないといけないね（ニッコリ）。

—— ソ、ソウデスネ。ん？ でも確か、カルデアが海鳴に浮上したのって、もつと後だったんじゃない……。

あれ、まだ聞いてないの？

——うん。

そっか……ただ、そのあたりは結構ややこしいというか難しい話になるから、また今度ね。とりあえず、立香……というかその意識体？

とでも言えばいいのかな。まあ、状態としてはレイシフトに近いんだけど、そっちだけカルデアより先……それこそP・T事件の時から海鳴にいたんだよ。

——そ、そうだったの!?

まあ、その時に色々、ね。結果的に、その時の縁がいろんなどころに影響を出してるんだから、本当に『縁は異なるもの』だよ。

——ふくん。でも、それなら納得かも。なにしろ、あの“立香さんだもんねえ。

ちよつと気になったんだけど、“あの”ってどういう意味？

——どうして胃に穴が開かないんだろうとか、いつか血を吐いて倒れるんじゃないかなあとか……うん、コミユカもそうだけどどんなメンタルしてるのかな、あの人って。

(ごめん、立香。何一つとして否定できない、というか共感してしまう私を許して)

——あれだけキャラの濃い人たちを繋ぎ止めて、間を取り持つだけでも凄いのに……いつ帰ってもいいのに結局誰も帰ろうとしないうって、とんでもないよね。

まあ、ね。局からも、交渉人とか心理系のセラピストにならないかって話はちよくちよく来てるみたいだし。

——じゃあ、立香さんがママの説得を？

ううん。あの時点では私を介して少し接点があるくらいだったから、アドバイスをもらって……っていう形。

——でもそれだと、あんまり詳しい話とかもできなかつたんじゃない……。

そうなんだけど、そこはイリヤたちがアサシンのカードとか使って抜け出して、こっそり情報交換してたみたい。

——ああ、なるほど！ 元々、イリヤさんたちは立香さんと契約

してたんだもんね。

その時はまだ秘密にしてたから、私たちは知らなかったけどね。だけど、最初に立香の話が出た時にちょっと動揺してたんだ。

——まあ、無理もないよね。知らない世界に飛ばされたと思ったら、そこに知り合いがいて、そつくりさんとかじゃなくて本人なんだから……。

うん。でも、リンディ母さんたちは後で悔しがってたっけ。もしもあの時に繋がりに気付いていれば、交渉の時にあそこまでやり込められたりしなかったのって。

——ああ、カルデア側は情報を持っているのに、管理局側はほとんど情報なしだもんね。

そう。その上、イリヤたち以外にも情報源がいて、交渉を始める前から圧倒的不利な立場だったわけ。

だけど、立香も酷いんだよ。交渉の席に、わざわざカエサルを連れてくるんだから。

——……………本気過ぎてドン引きです。

リンディ母さんも交渉事とかは得意だけど、あれは相手が悪いよ。交渉が終わった後、すごく打ちひしがれてたんだから。

——……………ちなみに、何を持っていかれたの？

詳しいことは機密だから話せないけど、主なところだと中型の次元航行艦一隻と無人世界の開拓権、かな。もちろん、その時の交渉一回で決まったことじゃなくて、何度か交渉した末でだけ。

——もしかしてそれって、シャドウ・ボーダーとムンドウス・カルデアのこと？

そう。シャドウ・ボーダーの方は水陸両用車みたいなのが前身で、ヴィヴィオが言っているのは買い取った艦を改修したものだね。

正式名称は『次元航行兼虚数潜航艦スペース・ボーダー』……管理局がカルデアを傘下とかじゃなくて対等に扱っている最大の理由。

——え、サーヴァントの人たちじゃなくて？

確かにサーヴァントは脅威だけど、それを敵に回してでも独占する価値のある技術がカルデアには溢れてる。まあ、武力で強引について

うのが下策なのは事実だけどね。だから、組織の規模の差を背景に傘下に加えるのが妥当な線だと思う。

でも、カルデアにはそれが通じない。本拠地はムンドウス・カルデアだけど、中枢機能はむしろスペース・ボーダーの方、再建したカルデアもこつちにあるしね。

そして、いざとなればスペース・ボーダーに乗って逃げちやえる身軽さが、カルデアの最大の武器だと私は思う。何しろ一度虚数空間に潜られたら、私たちじゃ追跡することはおろか補足することもできないんだから。

——そっか、そんな状態でゲリラ戦なんてされたら最悪だもんね。

そういうこと。だから管理局はムンドウス・カルデアを一つの次元世界、カルデアを国家ないし政府機関として扱ってる。いくつかある条約には批准していない世界と同じで管理世界ではないけれど、対等に交渉する相手として。

まあ、管理世界への渡航に制限がかかってすごく手間がかかるけどね。その代わりと言っては何だけど、管理局法が及ばない治外法権になってる。それはつまり、法の縛りを受けない代わりに、法によって守られないということ。少なくとも、管理局法では。

だから侵入した犯罪者の引き渡しは要求できるけど、例え殺されていたとしても文句は言えない。そんなわけで、私としてはあそこにだけは近づいてほしくないんだ。

なのに、どういうわけか変な情報を仕入れてカルデアにちよっかいかける人が多くて……。

立香たちが無事だからいいけど、その度に返り討ちにあって壊滅っていう報告が上がってくるのはちよつと、ね。

——内実を知っている身としては、どんな理由であれあそこに入るのは自殺行為にしか思えないんだけどねえ。今は確か、各地で似た地域・時代の人たちで自分たちのエリアを作ってるんだっけ？

うん。神霊系をはじめとした特に力の強い人たちとか、何人かで協力する形でテクスチャを構築して星の表面に張り付けてるんだって。

だから、ほとんどの地域は海に覆われているんだけど、部分的に色々な環境が点在してるっていう、普通ならありえない世界になってるんだ。

もちろん、スペース・ボーダーが停留している本部に残ってる人も結構いるよ、作家組とか。逆に、どこかに根を下ろさずに色々なところを渡り歩いてる人もいるけど。

ヴィヴィオは行ったことがあるんだっけ？

——本部だけなら、立香さんに連れて行ってもらったことがあるよ。でも、他のエリアには行ったことがないなあ。つて、違う違う。そうじゃなくて、話が逸れちゃったけど、聞きたかったのはママの誤解が解けた後のこと。確か、ママたちみんなクロエさんに奪われたって……。

そ、そのことなの！？ いや、まあ…ね。ひと段落ついてクロも羽目を外したみたいで、まずなのはが……。

——ああ、だからクロエさん『間接キスで返してあげたでしょ』なんて言ってたんだ。あれ？ でも、その間はイリヤさんとキスしてないの？ 一ヶ月も魔力もったのかな……。

あくまでも、キスは一番効率がいいっていうだけだから。

イリヤは他の人の10倍くらい効率がいいから、その間は他の方法で何とかしてたみたい。まあ、なのはのことが片付いてからはキスで魔力をもらうようになったんだけど……：そういうえば、妙にイリヤがほっとしてたのが気になったなあ。別にクロとキスしたかったわけでもないはずなのに、どうしてだったんだろう……。

——ふくん。で、そのあとみんなに？

……うん。とりあえず、あの時の海鳴にいる関係者のファーストキスは大体クロだよ。例外は、はやてだけなんじゃないかな。

——八神司令？

確か、一冊に暮らすようになる前、ヘルパーさんってことで通ってた士郎さんが疲れて居眠りしてた時になって……：いつの間にかキスされてたことに、本人が一番ビックリしてたけど。

——な、なるほど。八神司令はその時から士郎さんのことが好き

だったんだあ。

何しろ、16歳の誕生日に休みを取ってわざわざ地球まで婚姻届けを出しに行ってたからね。

——そうなの!? でもそれって、六課を立ち上げる前なんじゃ……。

うん。だから、はやてが結婚してるって知らない……というか思いもしない人が多くてね。

知らずにスバルが『恋人とかいないんですか?』なんて聞いて、『おらんなあ。ちゅーか、おつたら不味いやろ。人妻やで、私』って答えてすつごく驚いてたっけ。

あれは……ヴィヴィオが来る前のことだから、知らないのも当然だけど。

——そうだったんだあ……

そんなわけで、はやてだけは比較的ダメージが少なかったんだけど……他は被害甚大。特にアリサってあれで結構乙女だから、いまでも気にしてるみたいなんだよねえ。クロの話が出る度に文句言ってるし。

——まあ、気持ちはわかるかな。

ヴィヴィオも気を付けないとだめだよ? 女の子同士ならスキンスップのうちとでも思ってる節があるから。

——うん、そうする。それで、そのあとは?

そのあと?

——だから、カルデアが到着するまでは何事もなかったのかなって。

……ううん。あつたよ、ある意味特大のことが。

——特大?

そう、特大。事件としては幸い小規模だったけど、私たちにとって最初の挫折。

なのはの砲撃と私のスピード、どっちも自信も信頼もあつた。そこに知恵と戦術が加われば、どんなことでも、何が相手でもきつと何とかなる。たとえその瞬間は負けたとしても、次があれば……当たれば必ず、そう思ってた。

そう信じていた私たちが、初めて味わった決定的な敗北。なのはの砲撃も、私のスピードも、知恵と戦術すらも、何もかもが通じない：そんな相手。

そう。あれは、なのはの誤解がようやくやく解けてからしばらく経った、ある梅雨の日のこと……

* * * * *

「妙な魔力反応？」

「ええ。正確には、魔力反応の他にも転移反応に似たものが観測されているわ。今フェイトとなのはさんが確認に向かっているとこよよ」

ちよつとしたおつかいを済ませて居候先のハラオウン家に戻ったクロエを迎えたのは、少しばかりの緊張をはらんだリンディだった。気付いていて聞かないのもどうかと思ったので確認してみれば、この通り。

とはいえ、それ自体は別に驚くほどのことではない。正しくは、海鳴周辺で…に限定されるが。

なにしろ、一年と経たないうちに二度もロストログア案件に見舞われた海鳴は、ある種の特異点として管理局に認識されている。そのため、臨時支局まで設けて経過観察を行われているほどだ。

クロエたちのこともそうだが、それ以外にも細々としたアレコレが散発的に起こったりしている。

だから、これ自体は海鳴に駐屯ないし在住している管理局関係者から見れば、日常業務の延長に過ぎない。

クロエもそのあたりの説明は受けているので特に動じたりはしない。ちよつとしたゴタゴタがあったこともあり、クロエ自身はなのはたちの模擬戦は回避しているが、イリヤたちから大体のことは聞いている。幼いとはいえあの二人が太鼓判を押すほどの実力を備えたなのはたちなら、早々滅多なことはないはずだ。

「ふくん。あの子たちなら大丈夫だとは思うけど、サポートの方は？」
「とりあえず結界魔導士に結界を張ってもらって、二人ほどではない

けど腕利きをクロノに出してもらったわ」

「つまり、サポート体制は万全、と」

「ええ。できればヴォルケンリッターたちにも来てもらえたらなお良しだったんだけど……」

「それは過保護過ぎじゃないかしら？」

少し不満そうに嘆息するリンディに、思わず肩を竦めてしまう。なのはとフェイトに加えて八神家のヴォルケンスまでとなると、それはさすがに過剰戦力というものだろう。これだけのメンツを揃えなければならぬほどとなると、それこそ一級危険指定のロストログリア案件だ。

母親として心配なのもわからないではないが、クロエの反応が妥当なところだろう。

「……ちなみに、その様子って見られる？」

「ええ。というか、私も念のために見るつもりだからよければ一緒にどうぞ？」

魔導士ランクこそ高いが、典型的に戦闘向きとは言えないこともあってカリンディの表情には陰りがある。劣等感の表れというよりも、子どもたちを荒事になりうる場所に送り出すことに思うところがあるのだろう。

一局員としてはその合理性と必要性を理解しているが、感情はまた別の問題ということか。

察しの良いクロエはそのあたりをしつかり理解しつつ、あえて言及するようなことはしない。あまり、自分たちも人のことを言える身ではないことを理解しているからだ。管理局の体制や在り方を批判したところで、盛大なブーメランになるだけなのだから。

「そうさせてもらうわ。イリヤたちから話は聞いてたけど、バタバタしててあの子たちの戦ってる様子って見たことないのよね」

「あら、そういえばそうだったかしら？」

「ええ。だから、ちようどいいしお手並み拝見と行きましょう」

冷蔵庫から出してきた麦茶を注ぎ、すっかり観戦体勢のクロエ。まあ、管理局的には非殺傷設定すらできない者を前線に出すわけには

いかなないので、本人が協力を申し出てもよほどの緊急事態に人手不足が加わらない限りは許可など出せないだろう。

だがそこへ、補足するようにリンディから情報が追加された。

「……そういえば、これまでも似たような反応を何度か観測しているわ」

「へえ。じゃあ、類似の案件があったってことね。それなら、おおよその危険度も予想できるか……」

「そうね。過去の例に照らし合わせるなら、危険は少ないと思うわ。どれも、直接交戦するようなことにはならなかったし」

「そうなの？ なら、今回も荒事にはならないかしら」

残念、というのはいさすがに不謹慎だと自覚しているので口にはしない。しかし、続く情報でクロエの表情が一変した。

「ちなみに、そのうちの一度はイリヤさんと美遊さんよ」

「……………なんですって？」

イリヤと美遊が海鳴に出現した時に似た反応、というのも気になるが、一番重要なのはそこではない。

単純に二人の時に似た反応というのであれば、カルデアがようやく何らかのアプローチをしてきたという可能性が高い。密かに立香と接触を持ったことで、カルデアに正確な情報をもたらされたことが要因だろう。どうやらなかなか痕跡を追えずにいたらしいが、今は立香から繋がる縁を手繰る形で追跡できないか試しているという話は聞いている。それがついに形になるうとしているのかもしれない。

それ自体は喜ばしいことだ。この予想が正しければ、遠からず帰還することができるかもしれない。

問題なのは、それが過去に二人以外にも観測されたことがあるという点。

立香のことを指している可能性は低い。立香がこちらにいつもの“夢”という形で紛れ込むようになったのは、リンディたちが地球を訪れる直前。彼女たちでは、それを観測することなどできるはずがないのだ。

ならば、リンディの言葉はいったい何を指しているのか……。

「それ、どういうこと？」

「あなたたちならもしかしたらと思っただけど、やっぱり知らないのね。闇の書事件のことは聞いている？」

「概要くらいなら」

「その終盤、二度あなたたちに似た反応が観測されたわ。一度目はリインフォースと戦うのはさんに助力してくれた、白銀の甲冑を着込んだ金髪の騎士。そのあと、消えようとするリインフォースの前に現れた士郎君にとても良く似た赤毛の青年だった」

（金髪の騎士ってなると絞るのが難しいけど、お兄ちゃん似って……あの人？）

闇の書事件については本当に概要程度しか聞いておらず、詳しいあらましなどは知らない。だから、どういった形でかわったかはわからない。だが、現状サーヴァントとして存在しているイリヤたちに似た反応を見せたということは、同類と考えていいだろう。

その中で該当する人物となると、前者はともかく後者については一人しか浮かばない。

それが何を意味するかは事件の詳細を確かめなければわからないが、その時やイリヤたちに似た反応が改めて観測されたとなると、無関係を決め込むわけにもいくまい。

（お願いだから、金ピカや太陽みたいな面倒な王様系とか傍迷惑な神霊系じゃありませんように。鬼種なんて以ての外だし、文化系もなんだかんだで癖が強いから勘弁してほしいわ……）

特に、最近は四天王どころではないくらいに増殖している黒幕系が現れた時には、立香のことをばらしてでもしつかり手綱を握ってもらわなければなるまい。

というか、それを言い出すと大概の連中は絶対何かやらかすので、希少な常識と良識を弁えた面々であってほしい。具体的には、勝利の女王とかだと大変うれしい。

「……どうやら二人が結界に入ったみたいね。魔力反応は……動いていないわ。この様子なら、今回も穏便に済みそうね」

「そうであってほしいわね、切実に」

リンデイとそろってソファに腰掛けながら、傍らでちょこんと座って同じくモニターを見上げていた子犬形態のアルフを膝にのせ、その豊かで艶やかな毛並みをモフる。

以前はよくフエイトと一緒に現場に出ていたそうだが、最近は家事手伝いが主な仕事になっていっているらしい。今回も、なのはが一緒ということもあつて同行しなかつたようだ。

それはともかく、不安に駆られて荒みかけた心を落ち着けるにはちょうどいい精神安定剤だ。カルデアにもフォウがいるがアレは中々撫でさせてくれないし、ロボはそもそも立香以外の人間を近づかせないので、モフる以前の問題だろう。

そういうしているうちに、二人が結界の中心部間近まで迫つていった。

とはいえ、まだ対象を視認するには至らない。何しろ場所が場所、市街地真つただ中だ。ビルが乱立するコンクリートジャングルでは視界が悪い。

そのため、展開された結界のおかげで人の姿がないことをいいことに、二人は低空を飛行して現場に向かっている。

だが、そろそろ見えてきてもいいはずなのに一向に対象が見当たらない。

クロエたちが見ているモニターの中では、二人が困惑した様子で顔を見合わせている。

しかしそこヘレイジング・ハートとバルディッシュ、二人の愛機が同時に警告を発した。場所は……

「上！」

「L a!!」

反射的に距離を開けた二人の間を、何かが高速で通り過ぎる。

落下したそれは間もなく地面に激突。濛々と舞い上がった粉塵が姿を覆い隠してしまったため、いまだに相手の詳細はわからない。とはいえ、奇襲を仕掛けられたのだから少なくとも穏便に済むということはあるまい。

故に、幼いながらも訓練と経験を積んだ二人は揃って愛機を構え警

戒態勢をとる。

相手のことは何もかもが不明だが、できれば話し合いによる解決が望みなのだろう。警戒はしていても自分から仕掛けるつもりはないようで、画面越しにも戦意が薄いように感じられる。

それが果たして吉と出るか凶と出るか……。

だがモニターに向けられたクロエの視線は、先ほどまでとは比べ物にならないほど厳しい。

アルフを撫でていた手もいつの間にか止まり、かすかな震えと共に強張っている。

(一瞬しか見えなかったけど、今のはまさか……)

できれば見間違え、あるいは先の奇襲は戯れか何かであってほしい。そうでなければ、色々和不味いことになる。

しかし、そんなクロエの願いが報われることはなかった。

立ち込める粉塵の中から何かが飛び出しフェイトに襲い掛かる。

高速機動を得手とする彼女らしく即座に回避、同時になのはも移動。すぐさま二人は対象を挟み込むように展開し、並行してレストリクトロックとライトニングバインドで捕縛した。

二人の手元にはそれぞれ桜色と金色の魔力の光が輝きを放っている。

いかに心優しい少女たちとはいえ、流石に二度も問答無用で攻撃されてまで無抵抗でいようとは思わない。それ故の拘束だが、かといって何もわからない状態で腕づくで制圧するのにも抵抗があるらしい。

こうして迎撃できる体勢を整えた上での拘束が、二人にとつての気持ちの落しどころなのだろう。

「あの、時空管理局です」

「お話、聞かせて……」

「二人とも今すぐ逃げなさい!!」

何とか呼びかけようとする二人に、クロエの焦りを多分に含んだ声が割って入る。

「え、クロ?」

「クロちゃん、何を言って……」

「四の五の言わず逃げなさい！ あんたたちじゃ、そいつには勝てない!!」

訳が分からず困惑する二人だが、その間に対象はバインドを強引に破壊。空戦能力はないのか、重力にひかれて落下を開始する。二人は地面に激突する前に保護しようとして追いかけてようとするが、その表情が強張る。

なにしろ、地面から十数メートルの場所を現在進行形で落下しているそれは、手に持った長物をなのは目掛けて大きく振りかぶっているのだ。

「なのはっ!」

咄嗟にフェイトが叫ぶ。それとほぼ同時に長物が放たれ、なのはに襲い掛かった。

「きゃあっ!?!」

反射的にシールドを展開したが、生半可ではないはずの強度を誇るはずのなのはのシールドは容易く粉碎。シールドが破られたことで体勢が崩れたのが幸いし、直撃は避けられた。

そして、彼方へと消えていく長物の正体を天性の動体視力でフェイトは捉えていた。

(よかった、なのはは無事だ。でも、今のは…槍？ だけど、魔力の発動は感じなかった。カートリッジが間に合わなかったとはいえ、なのはのシールドをただの槍の投擲で碎くなんて…)

疑問は尽きないが、とはいえこれで話し合いの余地がないことは確定だ。これでは一度制圧してからでないと話もできない。

クロエが言っていたことが気にはなるが、フェイトは心を固めてまだ落下中の敵目掛けて用意していたスファイアから砲撃を放つ。

「トライデント…スマッシュャー!!」

手元から三叉に分かれた金色の奔流。それは途中で再度角度を変え、標的目掛けて殺到する。

(防御…しない?)

空戦能力がないようなので、回避できないのはわかる。だが、防御態勢すら取らないなどあまりにもおかしい。

その間にも三叉の砲撃が合流し着弾。煙を帯びながら、敵であろうものが地面に向かって落ちていく。

「これで、終わった…のかな?」

「フェイトちゃん」

「なのは、大丈夫?」

「うん。シールドにあたって少し逸れたから…それで、さっきの人は?」

「防御もせずにスマツシャーが直撃した。ダメージの程度はわからないけど、これで終わってくれたらいいんだけど」

「そうだね……」

「そういえば、さつきクロが何か言ってたけど、あれってどういうことなのかな?」

「さあ?」

お互いの無事を確認し、揃って首をかしげる二人。思わぬ形で戦闘状態に入ってしまったため意識から外していたが、余裕が出てきたことで思い出したのだろう。

一度は切った音声通信を再度つなげようとするが、それより早く彼方から何かが飛来し、二人の意識がそちらに向く。

「あれって……」

「さつきの槍? ……まさか!」

視線を転じれば、そこには特にダメージを負った様子もなく立つ敵の姿。

「無傷…いったいどんな防護服を着てるの?」

「わからないけど、すごく強いのは間違いない。話は……」

「Ha:hahahaha!!!」

「できそうにないね」

「……ならまずは一度止まってもらってから、お話しさせてもらおう」
「うん」

一筋縄ではいかない相手と理解し、気を引き締める。だが、二人は知らない。その認識ですら、まだまだ甘いということに。

彼女たちはもつとクロエの言葉に耳を傾けるべきだった。クロエ

は言ったのだ「勝てない」と。その意味と、眼下の敵の状態を冷静に分析していればあるいは、答えとはいかずともヒントくらいは得られたかもしれないのだから。

時を同じくして、一向にフェイトたちと通信が取れないことにクロエは大いに慌てていた。

「あーもう！ 人の話ちゃんと聞けつてのに!!」

「ちよつと落ち着きなよ、クロ」

「そうよ。いったいどうしたっていうの？」

「……よくもまあそんなに悠長にしてられるわね」

何とか宥めようとするアルフとリンディに、クロエの険しい視線が向けられる。

無理もないということはおわっている。状況を理解しているのはクロエただ一人。二人には何が何やらわからないのだから、その反応は当然だろう。

しかし、ことは一刻を争う。急がなければ、それこそ取り返しのつかないことになる。

「いや、そりゃフェイトの砲撃を直で貰って立ってるのは驚いたけどさ」

「そうね。確かに驚異的な防御性能だとは思うけど……」

「耐えた？ その認識がそもそも間違ってるわ。あいつは『耐えた』んじゃないくて、そもそも『効かない』のよ」

「それって、どういうことさ」

「あの子たちの火力は認めるわ。実際、聞いていた以上だと思う。でも、それじゃ『意味がない』」。

たとえば今の十倍……いいえ、それこそ星をも砕く一撃があろうとも、あの子たちの攻撃は通じないのよ。

一切ダメージが通らない相手を、いったいどうやって倒すっていうの」

「ダメージが通らないですって？ でも、そんなこと……」

「問答する時間も惜しいわ。アイツはフェイトの攻撃を受けて無傷で立っている、それが現実よ。今はとにかく、なんとしてでもあの二人

を下がらせなさい。

いい？ これは戦いなんかじゃない。羽虫を鬱陶しく思っただけなら払うなりはしても、そこに脅威をおぼえたりしないでしょう。これは、『そういう』ことなのよ」

そう、これはもう強い弱いの問題ではない。なのはたちがどれほどの力を持っているように関係ない。

これは、それ以前の問題。力も速さも、知恵も戦術も、勇気や勝利への意思……そういった全てを無意味なものにする、絶対的なまでの理不尽。それが、今あの二人の目の前に立ちはだかっているものの正体だ。

正直、リンデイとしてはそれをやすやすと受け入れることはできない。クロエの話は彼女からすれば要領を得ず、ただ結論だけを突き付けられているに等しいからだ。

とはいえ、目の前の少女の真剣さと危機感も伝わってくる。決して、ふざけて言っている訳ではないことも明らかだ

「……仮にあなたの言っている通りだとして、どうしろというの？」
「なのはとフェイトを下がらせて、サポートに回っている連中にも手は出させない。これは最低条件よ」

「でも、そうなればいずれアレは結界の外に出るかもしれないわ」
見たところ、どうにも意志や理性といったものを感じさせない。まるで本能で暴れまわる獣のようだ。

だから、リンデイの懸念ももつともだろう。結界内で暴れているだけならいいが、そこから出てくるようなら周囲への被害は相当なものになることが予想される。何としても、そうなる前に鎮圧する必要がある。

そしてそのための方策が、クロエにはあった。

「……………確か、イリヤと美遊はクロノのところに行ってるのよね」

「ええ。ちよつと確認したいことがあって、臨時支局まで」

「なら、急いで呼び戻して」

「……二人なら、なんとかできるのね？」

「少なくとも、なのは達よりは。あの子たちだと勝機はほぼゼロだけど、イリヤたちの攻撃なら通る」

「理由は……今は聞かないでおくわ」

クロエの言葉にそれなり以上の信憑性を感じたのだろう。彼女の言うことが確かなら、なるほど問答する時間も惜しい。

ただ、一つ懸念事項がある。

「だけど、流星に今すぐ現着とはいかないわ。その間はどようするの?」

「……私が足止めする」

「できるの?」

「イリヤたちほどではないけどね。少なくとも、なのはたちと違ってダメージを与える手段があるわ。なら、足止めくらいにはなるでしょ」

「……わかりました。アルフ、お願いできる?」

「う、うん」

「フェイトたちをはじめ、関係各所には私から連絡します。あなたたちは、急いで現場に向かつて」

「英断、感謝するわ。行くわよ、アルフ」

「お、おう!」

困惑気味のアルフを引きずる形でテラスから飛び出すクロエ。その姿は、いつの間にか黒と赤を基調とした戦闘服に代わっていた。

本来の大型の狼形態をとったアルフは、そんなクロエを背負って海鳴の町を飛翔する。その背中で、クロエはこれからのことに少しばかり頭を痛める。

（私たちがいるから出てきたのか、それともアレが出てくるから私たちが呼ばれたのか……ま、この辺りは卵と鶏の関係だから今は考えるだけ無駄か。

できればいろいろ隠しておきたかったけど、そうも言ってもらえないわよね。あの子たちのことも放っておけないし、何よりマスターが気にかけてる子たちだもの。サーヴァントとして、しっかり働かないとね）

その後、リンディを介して状況報告は上がってくるが、内容は芳し

いとは言い難い。

なのもフェイトも攻撃が通じないことは薄々理解していたようだが、万が一にも外に出さないよう足止めすると言つてきかないらしい。心意気は認めるし、実際せめてクロエが到着するまでの時間稼ぎが必要なのは事実だ。

とはいえ、状況を考えれば無謀と言わざるを得ない。

特に、空中での足場の代わりになるビル群という立地が悪い。おかげで、よほど高空まで行かないことには十分アレの間合いに捉えられてしまう。逃げられてしまう可能性を考慮し、ある程度までしか距離を取らないのだから、クロエからすれば気がでない思いだ。

（まあ、下手に距離を取り過ぎれば今度は「戦車」を出しかねないわけだけど。あっちならダメージは通るかもしれないけど、どっちの方がマシなのやら……）

今のところや槍と体術だけで戦っているようだが、アレはアレで出てくると厄介だ。アレの突進力は、なのはたちの砲撃を真正面から粉砕し得る。

まあ、戦車を出していない今でも十分すぎるくらいに状況は最悪だ。

攻撃が通らないだけでなく、敵の速力はフェイトをも凌駕しているのだから。

「そんな、フェイトが……」

（飛ぶと走るじゃ単純に比較はできないけど、トップスピードならかなり良い勝負ね。私としては、むしろそっちに驚きなんだけど。とはいえ、やっぱりあっちの方が体捌きなんかじゃ何枚も上手か。せめて、フェイトが完成していれば違ったんでしょうけど……）

いまだ幼いフェイトでは、自身のスピードを最大限に活用しきれていないと言わざるを得ないのだ。対して、敵の方は彼女と同等かそれ以上の速度を完全以上に御している。

その違いが、フェイトが置き去りにされるといふ形で表れているのだ。まさか、あのフェイトが速さの土俵で後れを取るなど、思いもしなかったことだろう。

「……………アルフ、ここまででいいわ。アンタも下がってなさい」

「いや、だけど……」

「まだまだやってみらうことがあるんだから、言うことを聞きなさい」
派手にドンパチやっているおかげで、ビルの上に二人が姿を現す瞬間がある。遠めに見た限りだが、いい具合にボロボロだ。まあ、むしろその程度で済んでいるとも言えるが。

黒化英霊やシャドウサーヴァントに近い暴走状態なのだろうが、それでも根底にある甘さが影響しているのだろう。なんだかんだ、女子どもには甘いところがあるのだ、あの大英雄は。

「……わかった。でも、ここからどうするってんだい？」

「こうするのよ。投影、開始」

右掌を上に向け呪文を詠唱。すると、一瞬靄のようなものが生じたかと思えば、瞬く間のうちに巨大な構造体が姿を現した。

「は……はあっ!？」

(……やっぱり、結構負担が大きいわね。とはいえ、せめてこれくらい
の精度がないと話にならないわけだけど)

「あんた、それどこから……」

遙か遠方を見通す弓兵の『鷹の目』は、なのはたちを追ってビル群から飛び上がった敵の姿をとらえている。

そこ目掛けて、巨大な構造体を大きく振りかぶり力の限りぶん投げる。

「いつくわよー！ どっ……せい!!」

猛烈なスピードで飛翔するのは、翡翠色の宝石のような代物に岩石をコーティングしたような形状の巨剣。

銘を虚・千山斬り拓く翠の地平。斬山剣とも称される、神造兵装だ。

本来必要な工程のすべてをキャンセルすることで投影可能なそれだが、今回は一部の工程はあえてキャンセルしていない。この一回だけでも、アレに『脅威』を感じてもらおう必要があるのだ。

あと少しでなのはたちを槍の間合いにとらえようかという寸前、放

たれた巨剣が迫る。

それを、今までなのはたちのあらゆる攻撃をすべて無防備に受けていた敵が初めて……迎撃する。

「ッ！」

「防衛、した？」

「いまのは……クロ？ どうして……」

肩で息をしながら、驚きをあらわにする二人。無論、クロエから返ってくる答えはない。

代わりに、それまで戦っていたはずなのはたちに見向きもせず、眼前の敵がクロエ目掛けて疾駆する。

「そう、アンタはそうするわよね。なのはたちの攻撃はアンタに通じない、どうせ敵とすら思ってたなかつたんですよ。でも、紛い物の張子の虎とはいえ、私が放つたのは神造兵装。これには脅威を感じた、だから私に狙いを切り替える。アンタならそうすると思っただわよ、ギリシヤの大英雄様!!」

両手に愛用の双剣「干将・莫邪」を投影し構える。ダメージは通らないが、もつとも扱い慣れ、投影速度に優れた得物が時間稼ぎには最善だ。この相手と戦うなら、いったい何度武器を失うことになるかわかったものではない。

彼にダメージを与えられる武装は限られ、その投影はクロエにも大きな負担になる。当然、投影するにもわずかなタイムラグが生じてしまう。

それは、この相手には致命的だ。だからこそその干将・莫邪という選択、倒すためではなく生き残るために。

脅威となりうる手札がある、それを教えることで引き付け、後はイリヤたちが来るまで徹底的に粘る。それがクロエの作戦だった。

(イリヤ、美遊……お願いだから早く来てよね)

挑むは『不撓不屈の大英雄』ヘラクレスと並び称される、『俊足の大英雄』アキレウス。

クロエの命をとした時間稼ぎが、始まろうとしていた。

高町なのはの場合

——……つていうところまでは聞いたかなあ。

……フエク
イ〜ト〜ちやくん。どうしてそんなことまで話しちゃうかなあ、もう
〜。

ヴィヴィオ、一応確認するけど他には何も聞いてないんだよね。私
の、その……

——恥ずかしい話？ それとも、秘密の失敗談？

……それ、どっちも同じだからね。

——とりあえず、フェイトさんに聞いたのはそれくらいかなあ。
あれ？ もしかして、実はもつとある？

な、ないない！ ホントにないから！ ヴィヴィオも、ヴィータ
ちゃんとかアリサちゃんに聞いちやだめだからね！

——（語るに落ちてるって、気づいてないのかなあ？）

う〜……こうなったら、私もフェイトちゃんの恥ずかしい話を
……。

——えっ!? そんなのあるの、聞きたい聞きたい！

ん〜、例えば……フェイトちゃんが昔男の人を拉致監禁してたこと
があるとか？

——イキナリ犯罪臭マシマシ!? え、それホントの話なの？

フェイトさんって、実は危ない人だったとか？

にやははは……まあ、一応形の上ではそうなんだけど、実際にはP・
T事件の時にアルフの変身を立香さんが見ちゃって、止む無く……だっ
ただけだね。

それに監禁って言っても、フェイトちゃんが拠点にしてた部屋から
は出られなかったけど、それ以外は割と自由だったらしい。……と
いうか、立香さんが自由過ぎてアルフが呆れたくらいだったわけだけ
ど。

——自由？

とにかくすることがなくて暇だったからって部屋の掃除をしたり、

料理始めたり……まるで逆に居候してる気分だったって。

この辺は、エミヤさんの薫陶の賜物かなあ。コンビニ弁当とか久しぶりで新鮮だったけど、エミヤさんの料理に舌が慣れちゃっててすぐに飽きたんだって。で、フェイトちゃんも食事とかちやんとってなかつたらしいし、お節介というか面倒見の良い人だからね、放っておけなかつたんだと思う。それでお粥とか野菜スープとか、消化にいいものを作ってあげてみたいだよ。

まあ、それでも監禁されてる側の立場でそういうこと始めるあたり、そういう時のあの人の「あえて空気を読まない」スタンスは凄いやね。凶太いというか、鋼の心臓というか……。

——あゝ、なるほど。でも、立香さんの料理って食べたことないなあ……。

私も食べたことはないけど、アルフが言うには「普通」だって。特別美味しくはないけど、別に不味くもない。男料理としては「こんなもの」レベルらしいよ。リンディさんと比べるのは可哀そう、とか言ってたつけ。

あ、でも……

——でも？

フェイトちゃんは今でも偶に作ってもらってるらしいよ。それも、当時と同じメニューで。

しかも！ 珍しいことにフェイトちゃんから「おねだり」して。

——ええっ!?! あの、人を甘やかしてばかりのフェイトさんが「おねだり」!?!

ビックリでしょ。私も初めて知った時は驚いたよ。あのフェイトちゃんがすつごく申し訳なさそうにしながら、それでもハッキリとワガママ言ってたんだから。……正直、あれは真夏だったけど雪が降るかと思いました。

——わかる、気持ちはずつごくよくわかる。

ふふっ♪ 懐かしいなあ。顔を真っ赤にして恥ずかしがってる割に、フェイトちゃん全然引き下がろうとしないんだもん。立香さんは「もつと上手な人がいるから……」って任せようとするんだけど、「ヤ

ダ「立香が良い」の一点張り。折れて作ったとしても、無理にクオリティをあげると「あの時の味じゃない」って涙目になるから作り直し。ようやく納得のいく味になった時のフェイトちゃん、すごくホツとした顔してたっけ。安心したような、リラックスしたような……そんな顔。あの頃のフェイトちゃん、本当に張り詰めてたから……立香さんがいてくれて、随分救われてたんだと思う。

きつと、懐かしんでいたのは味じゃなかったんだね。もつと別の、フェイトちゃんにしかわからない何か……。

おふくろの味……って言ううちよつと違うけど、ニュアンスは近いんじゃないかなあ。

———そういうものなのかなあ……というか、私は未だにフェイトさんがワガママを言う姿が全く想像できない。

無理もないと思うよ。なにしろ、リンデイさんやクロノ君がヤキモチ妬いたくらいだから。

まあ、立香さんもフェイトちゃんにはリンデイさんたちに甘えるように言ってたみたいだし、段々できるようにはなっていたんだよ？ ただまあ、やっぱり「流石」としか言いようがないけどね。あのフェイトちゃんに自分からワガママを言わせちゃう人間力、見習おうと思つてできることじゃないよ。

曲者揃いのサーヴァント達を繋ぎ止めて、何のかんの言いながら力を貸さずにはいられない。そんな、カルデアのマスターだからこそできたことだと思う。

———へえ……フェイトさんの思い出の味、かあ。私も食べてみたいなあ……。

あー、それはちよつと難しいかな。フェイトちゃん、他のこととはともかくこれに関しては凄い独占欲だから。私もお願いしたことあるんだけど、「取らないで」って泣かれたもん。

立香さんは立香さんでフェイトちゃんにただ甘だしねえ。というか、フェイトちゃんを甘やかすのが半ば趣味みたいになってるから、あの人。遠慮して恥ずかしがるフェイトちゃんをあの手この手で甘やかそうとして……

——その結果、うちに逃げてくる、と。え、それも昔から？

そうだよ。「ダメになりそう」って言つて、私のうちとかはやてちゃんのところによく逃げ込んでたんだから。今ならともかく、普通にハラオウン家に帰ればいいのに、どうしてだったんだろうねえ。

——いやあ、それはクロノさんがヤキモチ妬くのが分かつてたらじゃないかなあ……。

あ、なるほど。

そういえば、クロノ君に遠回し……というか、要領を得ない感じで相談されたことがあつたっけ。年頃の女の子の気持ちがどうか……。

——ちなみに、ママはなんて答えたの？

……………立香さんに相談してみようって言いました。

——ママ、それは……。

言わないで。そうだ、あの時クロノ君「君に聞いたのが間違つていた」ってすぐに帰っちゃったんだ。

——当然だと思います。

……はい。

——でも、それでようやくわかった。クロノさん、なんであんなに立香さんにツンケンしてるのかと思つたら、そういうことだったんだあ。

まあ、他にも色々あつたからねえ。

エイミーさんの話だと、お風呂に入っていたところにフェイトちゃんが入ってきて驚いた拍子に頭を打つたとか、寝惚けたフェイトちゃんがお布団にもぐりこんできて眠れなかったとか……。

——それ、立香さん関係あるの？

……全部、一緒に暮らしてた時に立香さん相手にやってた……というか、そこで習慣付いちやつたみたい。

フェイトちゃんって家庭環境のこともあつて小さい頃は男の人とほとんど接点がなかったから、その辺の羞恥心とか一般常識薄かったんだ。立香さんは立香さんで、フェイトちゃんのこと小さな女の子くらしいの認識だったし、張り詰めてたフェイトちゃんのケア優先で甘や

かしかかかってたみたいだから。

まあ、流石にそのままだとまずいからアリサちゃんを筆頭に指導が入ったけど。

でも、寝惚けてるともぐりこんでくるのは今でもだね、テイアナが言ってたし。とはいえ、同じ人には二度やらないよ。目が覚めた時にすつごく残念そうな顔するだけで。誰のぬくもりを求めてたかは、お察しかなあ。

——フェイトさんって動物に例えるなら犬かと思ってたけど、実は猫？

どっちもじゃないかなあ。

ちなみに、この話がばれてイリヤさんたちにはすつごく冷たい目で見られて、ルビーたちには「下手しなくても事案ですねえ」って言われて崩れ落ちてたけど。

——な、なるほど……あ、イリヤさんで思い出したけど、最初に戦ったサーヴァントがアキレウスさんってホントなの？

あゝ、暴走状態だったし、そもそもまるでダメージになってなかったけど……一応、そういうことになるのかな。

——やっぱり、ダメージが通らない？

全然。シューターにバスター、フェイトちゃんとのコンビネーション、せくんぶ無効。ブレイカーはタメが長すぎて撃てなかったけど、撃つても同じだったと思う。あの人、そもそも神様関係の力がないと戦いにならないし。

はやてちゃんにクロノ君、守護騎士たちも応援に向かってくれてたけど……きつと、誰が来ても同じだったよ。

——踵が弱点なんだよね？　そこを狙えば……。

フェイトちゃん以上のスピードで動ける人相手に、そんな狙い辛い場所をピンポイントでついているのは厳しいよ。

その上、暴走状態とはいえ相手は一つの神話体系で双璧を為す大英雄だもん。狙えたとしても、充てるのは至難の業かな。正直、ミッド・ベルカを問わず次元世界共通の天敵なのは間違いない。

——天敵、かあ。

ああ、でもヴィヴィオなら可能性はあるかな。

——そうなの？

……うん。ヴィヴィオは聖王家の血筋、そして聖王家は聖王教会のこともあつて次元世界全体レベルで信仰を集めてる。それこそ、ある種の神様扱いだね。

——まあ、確かに。でも、祈られても正直困るといふか、祈つてなんとかなるなら神様なんていらんじやないかなあというか……あれ？ アキレウスさんにダメージが通るのは神様の血縁とかじやないといけないんだよね。そんなのでも大丈夫なの？

うくん、そのあたりの基準が私にはいまいちよくわからないんだけど、信仰を集めた結果として神性スキルを持った人もいるらしいから。

——ふくん……というか、結局なんでアキレウスさんが出てきたの？ 海鳴に縁なんてないよね？

ああ、それはカルデアが原因。イリヤさんたちを探すために、縁を辿る形でレイシフトしたメンバーの一人なんだつて。もちろん、立香さんと再会する前の話だよ？

ちなみに、選考基準は“生存能力の高さ”。アキレウスさんみたいに頑丈だったり、戦闘続行スキルを持つてたりする人を中心に選んだつて。もちろん、いくら頑丈でもバーサーカーは除外してみたみたいだけ。

あとは、特別にエミヤさんとかもメンバーに入つてたみたい。距離を取つても、やっぱりお兄ちゃんつてことなのかなあ……。

——その人たちが皆来て、暴走しちやつたの？

ううん、実際に来れたのはそのうちのさらに一部の人だけ。

まあ、その中からよりによつてアキレウスさんが来て、真つ先に出てきたつていふのはねえ……。クロちゃんだけでも海鳴に残つてくれて本当によかつたよ。

* * * * *

息つく暇もなく繰り出される怒涛の連撃。それらを辛うじて手にした双剣で捌きながら、踏ん張り切れずに数歩後退を余儀なくされるクロエ。

既にその体はボロボロで、全身に負った傷から流れた血が赤い外套をさらに紅く染めている。

「ちっ！」

今も、紙一重で逸らした筈の穂先がかすかに頬を抉った。舞い散る鮮血、反射的に閉じそうになる瞼を意志力で押し留め、矢継ぎ早に繰り出される槍をとらえる。

既に、額から流れた血が右目を塞いでいるのだ。ここでさらに左目を一瞬でも閉じれば、それが致命の隙となる。

自身の核となったカードにつながる英^{義兄の可能性}霊から引き継ぎ変化した「心眼」と、検証の過程を省いて即座に最適な行動を導き出せる■■としての本能のおかげで何とか凌いでいるが、それも限界が近い。

(まだなの、イリヤ！ 美遊！)

クロエの手札の中で、アキレウスに傷を負わせられるほどのものは極めて少ない。また、投影するには少なくない負荷が伴い、その分僅かだが通常のそれより時間を要する。当然ながら、このような極限状況下で使えるようなものではない。せめて、優秀な前衛でもいれば話は別なのだろうが、なのはやフェイトにそれを期待するのは酷だ。どちらも、前に出て敵の攻撃を受け止めるタイプではない。

せめてもの救いは、相手が暴走状態で狡猾な立ち回りをしてこないこと。クロエの立ち回りもあり、死角となった右側から攻められることはまずない。相手にわずかでも状況判断能力があれば、当の昔に詰んでいることだろう。

とはいえ、完全に死角への攻撃を無くすことはできない。事実、今も喉元に致命の一刺しが迫っている。

「こんのっ！」

回避も防御も間に合わないと判断し、皮膚に触れるかどうかというところで転移が発動。

アキレウスの背後に出現したクロエは、斬りかかるよりも後退を選

扱。どのみち当たったところでダメージにはならないのだ。今は何よりも時間を稼がなければならぬ。

とはいえ、本来なら核となった英霊の絶技と組み合わせるなどして「攻め」に使うべき転移を緊急回避に使用している時点で、自身の底を晒しているも同然だ。

既に満身創痍の身では、時間稼ぎもそう長くは続かない。ただでさえ核となった英霊は基本能力が低く、クロはその力を借りているだけに過ぎない。

対して、相手は一つの神話体系における頂点を争う大英雄。暴走状態とはいえ、とてもではないが単独で渡り合える相手ではない。

せめて、的確な指示と支援をしてくれるマスターでもいてくれれば……

(何考えてるんだか、マスターを引つ張り出すなんて本末転倒だつての。はあ、せめて斬り決る戦神の剣が発動してくれればいいんだけど……)

残念ながら、クロエの周囲を回る鈍色の鉄球に変化はない。勇者の不凋花は、アキレウスにとって生前からの体質に過ぎないのだろう。そこに切り札という認識はなく、故に逆光剣は反応しない。まあ、反応したところでダメージが通るかはまた別の話になるだろうが。

一縷の望みを託して戦闘に入る前に用意しておいた兵装だが、どうやら意味はなさそうだ。

いや、ないものねだりをして仕方がない。

とにかく今は時間を稼ぐべく、少しでも距離を取るために後退を……とは思うが、彗星走法ドロメウス・コメーテースの前ではそれも虚しい。基本性能の差を見せつけるように、一足で距離が詰められる。

勢いをそのままに放たれる刺突。鷹の目を以てしても目で追えたものではないが、本能に従い心臓をガード。

白黒の双剣が砕かれ、後方に大きく弾き飛ばされる。

地面の上をバウンドしながら最速で干将・莫邪を再投影。アスファルトに突き立て勢いを殺すと共に身体を起こす。転がりながらも目

はしつかりとアキレウスを捉えていた。ただでさえ速い敵から視線を切るなどという愚行を犯すつもりはない。

その甲斐あり、追い抜かんばかりの勢いで迫る敵影に反応することができた。

「くあつ!？」

振り下ろされる槍撃を交差させた双剣でいなす。同時に、胸から血が噴き出した。深手ではないが、どうやら双剣の守りを超えてわずかに切っ先が届いていたらしい。

その程度のことには気付く余裕すら、今のクロエにはない。それどころか、自身の傷の状態すら完全に把握しているとはいいがたい。あるいは、既に致命傷の一つや二つ負っているかもしれない。それでも、ここで立ち止まって諦めるわけには……

——クロ、下がって!!

心身に活を入れ直そうとしたところで、耳に馴染んだ半身の声が聞こえた気がした。

その真偽を確かめるより早く、クロエは体勢が崩れるのも構わず後方に飛ぶ。そこへ

「ベルレ騎英の…フォン手綱!!」

白い、流星の如き光が駆け抜け目前に迫るアキレウスを飲み込んだ。

「今のは、美遊?」

「クロ、無事!？」

「……遅いわよイリヤ」

力が抜けたようにしりもちをつく彼女の横に、転身状態のイリヤが降り立つ。傍らにはフェイトの姿もある。察しの良いクロエは、この時点でこれまでとこれからの流れを理解した。

ライダー騎兵のカードをインストール夢幻召喚した美遊が先行する形でアキレウスをクロエから引き離し、その上でクロエはフェイトが回収、残ったイリヤと美遊でアキレウスと戦う。そんなところだろう。

「……難敵よ。使えるカードは限られてる。メドゥーサも神性はあるけど、とても有効打を与えられるランクじゃない」

「うん。やるなら、ランサー 槍兵とバーサーカー 狂戦士。美遊もすぐに切り替える」

答えるイリヤの手には、既にバーサーカー 狂戦士のカードが握られている。

「わかっているならいいわ。あとは任せるわよ、正直…もう、限界だわ」
「ゆっくり休んで。フェイトちゃん、クロをお願い」

「う、うん。でもイリヤ、本当に大丈夫なの？」

「信じて…としか言えないかな。それと、終わるまで絶対近づかないで。たぶん、巻き込まないように戦う余裕はないから」

「……」

「とりあえずフェイト、早めに治療を受けられるところまで運んでもらえない？ 私、致命傷寸前の傷が結構あるんだけど」

「あっ！…ご、ごめん！…すぐ連れて行くから、少しだけ我慢してー」
（治療が終わったら、質問攻めは确实ね。ま、最低限の情報提供の許可はもらってるからいいけど）

慌てて…だが慎重にフェイトに運ばれながら、クロエは先日立香マスターから受け取ったカルデアからのメッセージを思い出す。要約するならば、可能な限り情報は漏らさないこと、しかし止むを得ない場合にはその限りではない。この状況は、その「止むを得ない」という奴だろう。

クラスカードの本来の使い方、インストロル 夢幻召喚も見せてしまったし、どうしてなのはたちの攻撃が利かなかったのか、なぜクロエはそれを知り、イリヤたちの攻撃は通るのか、聞かれることは多い。

それらすべてをはぐらかすというのは、流石に無理があるだろう。（それと、マスターにはいろいろ確認しないとね。多分、直接何がどうこうすることはないと思っただか、単に言い忘れてたかだろうけど、色々聞いておいた方がいいでしょうね）

闇の書事件の際に表れたという、イリヤたちに似た反応を示す二人。特に、一人には大いに心当たりがある。

确实ではないが、立香が何らかの形で関与している可能性は高い。彼自身、有事に備えて召喚の準備だけはしてあるらしいから、一度ならず使ったことがあっても不思議はない。

そして、離れていく大地に視線を向ければ、そこには見慣れた転身の光。

「クラスカード、狂戦士……夢幻召喚!!」

手にするのは身の丈を優に超える岩の斧剣。数あるクラスカードの中でも、なぜか特にイリヤと相性の良いサーヴァント。

ギリシヤ神話において、アキレウスと並び称される不撓不屈の大英雄、真名を「ヘラクレス」。

「ルビー、狂化時間設定五分!」

「了解です! でも気を付けてくださいよ。これから五分間、本当に敵味方区別なしですからね」

「気を付けるも何もないと思うけど……なのはちゃんたちはクロが上手く抑えてくれると思うし、美遊は段取り通りにしてくれるはず」

「ぶっちゃけ、そうでもしないと勝ち目ほぼゼロですけどね」

アキレウスとヘラクレスの力はほぼ同格だ。そうになると、暴走状態とはいえほぼ本来のスペックに近い状態で現界しているアキレウスに対し、置換したヘラクレスだとしても分が悪い。所詮、借り物の力ではオリジナルには及ばないのだ。

ならばどうするか、「狂化」というクラススキルを最大限に活用するしかない。理性を失う代わりに各種ステータスを向上するこのスキルを用い、差を埋める。カルデアのキャスターたちの力を借り、調整を施したカードの機能の一つだ。

プランは単純明快。狂化したヘラクレスの力でイリヤがアキレウスを抑え、槍兵「クー・フリーン」を夢幻召喚した美遊が隙について宝具「刺し穿つ死棘の槍」で心臓を貫く。

今の彼女たちができる範囲では、これが最善の戦法だ。

「いくよ……狂え!! ヘラクレス!!」

結論を言えば、一応とはいえイリヤたちはアキレウスを倒すことに成功する。

ただその際に、イリヤは「十二の試練」が発動するところまで追い込まれることに。致命傷を受けたイリヤになのはとフェイトは大いに動転し、カードが排出されると同時にケロツとした様子で起き上がったことで場はさらに混迷を極めた。

その後、クロエの予想通り三人は質問攻めに晒されることに。

カードのことを話すには英霊やサーヴァントのことを話さないわけにはいかず、カルデアのことは語らない代わりに、自分たちとカードの関係に関する話をするので誤魔化した。ただこの話をする Archer のカードやクロエの話をしてはいけないわけにはいかなかったが……話してもそこまで危険はないだろうと思える程度には信用している。

実際、話せばクロエも含めて守護騎士たちに近い存在ということに納得してもらえたのは僥倖だろう。

ちなみに、かつて現れたサーヴァントは「アーサー・ペンドラゴン」と「千子村正」だった。

どちらも召喚された理由に心当たりはないと答えておいたが、実を言えばある程度見当はついている。前者は「闇の書の闇」とやらが騎士王の「巨獣」判定にでも引っ掛かったのだろう。まあ、あれは「ビースト」ではないようだが。

後者についてはあまりにもタイミングが良すぎる上に、人材としても適材に限りなく近いので、大方立香が召喚したのだろうと推測。あとから確認すれば大当たり。本当は「両儀式」を召喚したかったらしいが、触媒なしだと完全ランダムなのだそうだ。なので、八神家の方の士郎を触媒代わりにして召喚を試みた結果らしい。

どうしてピンポイントに必要な人材が分かったかと言えば、なんでも花の魔術師^{マーリ}が一枚かんでいたそう。アレは夢魔なので、立香の夢に介入することができるからそれ自体は驚かないが……なんでも、聖夜にレムレムしていた立香の夢を誰かの夢と間違えて繋げてしまった結果らしい。

だが、絶対嘘だと思う。誰と繋がったかは立香も苦笑いを浮かべるだけで教えてくれないが……サーヴァントと接触して以降、フェイトが「よく覚えてないけど不思議な夢を見た気がする」と言っているの察しはつく。

で、まったくの余談なのだが……

「大変だったみたいだな。リンディさん、せつかくですし何か作りま

「しょうか？」

「あら、お願いできる？ 報告書とか作らないといけないから、ちよつと手が離せそうにないの」

「ええ、任せてください。冷蔵庫の食材、適当に使っちゃいますけど……」

「大丈夫よ。ああ、なのはさんたちも良かったらどう？ 桃子さんには私から連絡しておくから」

「あ、はい。お願いします」

というわけで、八神家のメシ使いが頑張った子どもたちのためにその腕を振るうことに。

結局出番がなかった妹分兼一番弟子を助手に、さっそく調理に取り掛かるその後ろ姿はイリヤたちにとつても見慣れた……そして懐かしいものだった。なので、つい郷愁の念が沸き上がってしまったのも無理からぬことだろう。

ただ、結果的にはそれがいけなかった。

「わーい♪ おに……土郎さんのご飯だー！」

「さあて、今日のご飯はな〜にかなあ〜」

「うん、楽しみ」

「あれ？ イリヤちゃんたち、しろ兄が料理上手なん知つとつたっけ？ 私、話したおぼえないんやけど……なのはちゃんたちにでも聞いたん？」

「「あつ……」」

「ううん、私話してないよ」

「私も」

一斉に集中する懐疑の視線。誤魔化すのは………無理だった。

以前から何となく土郎に向ける三人の態度というか雰囲気は怪しいと思っていたはやての女の勤が冴え渡り、悪足掻きも虚しく白旗をあげるのにそう時間はかからなかった。というか、はやての目から光が消えた段階でギブアップ。何というか、怒りを湛えたパールヴァティーを彷彿とさせる雰囲気は呑まれたのだ。

その結果、カルデアのことはバレなかったがイリヤたちの出自は白日の下に。ついでに、クロエのカードの正体も。

士郎自身、映像越しに何か感じるものがあつたらしい。

とはいえ、あくまでも三人の兄はあくまでもそれぞれの世界の士郎であつて、こちらの世界の士郎は「同じだけど別人」ということで納得してくれた。

ただ、はやては先ほどまでの雰囲気かウソのように「家族が増えたでー!!」と大喜びだったが。

八神はやての場合

私から見た立香さん？ そらまた、難しい質問やなあ……。

——そうなんですか？

とりあえず、個人的には尊敬しとるよ。私も結構色々言われる方やと思うけど、立香さんを知つとる身としては己惚れる気にはなれへんもん。

——いやあ、立香さんの懐の深さというか包容力は、もうわけわかない次元ですし……。

そやね。正直、あの人のコミユ力と包容力は空恐ろしいもんがあるからなあ。まあ、そうでもない、あんだけ濃いメンツを繋ぎ止めるんは無理なんやろうけど。

ああ、そういう意味ではちよう興味があるなあ。よく「立場が人を育てる」言うけど、あの人の場合どつちなんやろね。持って生まれたものなのか、それとも必要に迫られて身についたものなのか……元から資質があつたことは間違いないやろうけど。

——じゃあ、何が難しいんですか？

……：局員としては、さっさと契約解除してほしいと思う部分はあ
る。

戦力以外にも、色々有用な人たちなんは確かやけど……：年に何回かはシヤレにならん騒動起こすからなあ。それこそ、下手すると世界崩壊級のポカやらかす女神とかおるし。

知つとる？ そのたびにリンデイさんとかクロノ君、ついでにカリムや私のところに苦情や嫌味がくるんやで？

んなこと言われても知るかいな。私ら別に、あの人たちの後見人でもなんでもないつちゆうねん。パイプがあるんは事実やけど、カルデアに干渉する権限とかあるわけないやん。

偶にツテ使うて、協力したりされたりしてるだけなんやから。

……：堪忍な、途中から愚痴になってもうた。

気を取り直して……：客観的に見れば、リスクとリターンは釣り合ってるか、リターンに傾くとは思う。せやけど、ハイリターンにふさわ

しいだけのハイリスクなんも事実や。立場的に、どれだけリターンが魅力的でもあのリスクは無視できん。せやから、局の上層部がチャンスさえあれば色々削ぎ落すか、根本的につぶしてまおうと虎視眈々なんも、理解はできる。

反面、通常手段が通じんような相手には滅法強いからなあ。うん、やっぱり“劇薬”か“爆発物”つちゆう表現がしつくりくる。危なっかしくて手元にはおいておけんし、近くにあってもぶっちゃけ迷惑や。せやけど、いざという時のために残しておきたい……そんな存在やね。

不安材料をなくしたいと思う部分があるのと同じくらい、万が一のための保険として確保しておかずにはいられん。難しいつちゆうのは、そういう理由からやね。

まあ、立香さんというより、これはカルデアに対する印象やけど。

——なるほど……じゃあ、もし仮に立香さんがカルデアを辞めたとしたらどうですか？

速攻取りに行くに決まってるやろ！サーヴァントつちゆう付属価値がなくても、あの人の経験に胆力、対人能力は値千金や。下手な高ランク魔導士より遥かに価値がある。ま、その場合リンディさんたちと争奪戦になりそうやけど。

むしろ、余計な危険物が無い方が安心できるくらいやね。サーヴァント込みの場合やと……悩むなあ。マシユさんとかならまだしも、他の人たちやと責任負いきれへんもん。

——やっぱりマシユさんは一緒にいてほしい感じですか？

そやね。あの人の最大の弱点は“弱い”ことや。魔術とか全部込みでも、瞬殺できる自信あるで私。たぶん、リインやキャロも同じやろ。ガチンコ最弱トリオの私らでも、どんな距離から始めても秒殺確定やからなあ。

フェイトちゃんはスタイルの関係上護衛とか不向きやし、色々な意味でマシユさんが最適なんは間違いない。

で、マシユさんが一緒における状況で、なおかつ他にサーヴァントがおらんつちゆう前提の話やけど……開始十秒以内に勝負は決まる

なあ。時間内に立香さんを無力化できれば勝ち、できなければサーヴァント召喚されて詰む。

——え？ それで詰んじゃうんですか？

もちろん、すぐにとは限らんよ。そこは召喚されるサーヴァント次第やけど、一騎でも召喚されたらその分時間を稼がれる。その間に次の召喚をして、後はそれを繰り返してればいずれは……

——あく、詰みますね。

まあ、実際には魔力供給の問題とかあるから、そう単純な話でもないやろうけどね。

——そっかあ……ちなみに、局員としての視点を抜きにしたらどうですか？

うーん、ユーノ君やクロノ君みたいに友達つちゆう程親しいわけやないからなあ……せやけど、色々な意味で恩人なんも間違いない。

まず何はともあれ、アインスのことではホンマにお世話になったから、足を向けて寝られへんね。

——村正さんを召喚して、防衛プログラム（ナハトヴァール）の修復機能だけを分離したんでしたっけ？

正確には、もつと概念的なもんらしいけどな。

私らにはなじみが薄すぎていまいち理解できんけど、村正さんが目指したんは『業』を断つ刀……『宿業からの解放』なんやて。その一刀で、リインフォースと夜天の書を縛つとった『呪い』から『解放』した、そういうことらしいんよ。

——本命は別の人だったんですよね？ 確か、式さんでしたっけ？

あの人はあの人で、私らには理解不能な能力もつとるからなあ。なんやねん、『モノの死』が視えるって。理屈の上では意志や時間すら殺せるらしいから、ピンポイントで修復機能だけ殺すとかもできるのかもしれへんけど。

まあ、あくまでも「かも」の話や。

あの時点では、立香さんも特定のサーヴァントを召喚するなんてできへんかった。せやから、依り代つちゆう縁を利用して士郎……いや、

ここは敢えてしろ兄ってよぶべきやな。

にしても、昔の愛称で呼ぶんはなんやこそばゆいなあ。何年ぶりやったつけ……結婚するより前からやから、もう十年近くになるなあ。今度、久しぶりに呼んだらどんな反応するやろ……っと、話が逸れてもうた。とにかく、しろ兄を触媒に村正さんを召喚したわけや。

まあ、カルデアからの魔力供給を受けられへんかった時期やから、自力での宝具の発動はできんかったわけやけど。

——ええっ!? そうだったんですか!?

あれ、知らなかった? ぶつちやけ現界するので精一杯で、あと一時間もせんで退去してまうくらいギリギリやったんよ?

——でも、それじゃどうやって……。

おるやろ、とびつきりに親和性の高いのが。

——あ、士郎さん!!

そ。士郎に靈基を貸して……感覚的には、イリヤちゃんたちの^{インストリアル}夢幻召喚に近いかなあ。一時的に村正さんと士郎を上書きして、足りない分の魔力を士郎が負担する。そうやって都牟刈^{ツムカリ}を使ったわけやね。たぶん、そのことも見越した上での村正さんの召喚やったんやろうなあ。

まあ、副産物として士郎が刀鍛冶に目覚めたりしたわけやけど……。

——今やアームド系デバイスマイスターの中でも、一番に名前が挙がる人ですもんね。そういえば、ミカヤさんにも「紹介して」って頼まれたっけなあ。

それでも、本家本元にはまだまだ及ばんわけやけどな。

——でも、それだけやっててもアインズさんは……。

うん。元々、アインズの基礎構造と複雑に絡んでた部分を斬り離れたわけやからね。人間の体に例えるなら、内臓ごっそりなくしたようなもんや。

でも、本来なら自壊してまうはずのところを、曲がりなりにも維持できた。ならあとは、失くした部分を埋める方法を探すだけや。っ

て、それが一番大変なわけやけど。

とにかく、そんなわけでアインスは休眠っちゅう形で機能を停止させて、無限書庫をはじめ色々模索……どうなったかは、ヴィヴィオもよう知つとるやろ？

——はい。

まあ、たった数年で……とは思わへんかったけどな。

正直、十年以上かかるんは覚悟しとったし、最悪私が生きてうちには再会できん可能性もあった。せやからリインが生まれたわけやし、カルデアの協力含めて色々あった今でも本調子とはいかんからなあ。

——確か、ユニゾンはもう……。

この先、奇跡的に完全修復できたりせえへん限り、戦闘への参加は無理やね。まあ、大した問題やないよ。家族が生きて一緒に暮らせる、それで十分やし、これ以上を求めたら罰が当たる。

……うん、やっぱり立香さんにはいくら感謝しても足りんわ。

まあ、当の本人は事件の後無理な召喚で魔力切れ起こしてぶっ倒れてたわけやけど。

いやあ、立香さんが倒れたって知った時のフェイトちゃんの慌てようときたら……。

——そういえば、フェイトさんっていつから立香さんのことが好きだったのかなあ？

少なくとも、私がフェイトちゃんと知り合った頃には、見てるこっちが恥ずかしくなるくらいオーラ出とったで？　まあ、本人がどの程度自覚してたかはわからんけど。

——でも、理想の夢の中には立香さんがいたんですよね？

いや、アレどうもマーリンさんの仕業で、立香さんだけ夢やなくて本人だったらしいで。

その時のことが原因で夢が混線して、サーヴァントの暴走体との接触をきっかけに立香さんの過去を夢で見る……ちゅうか追体験やね。そういうことをするようになったみたいなんよ。

ホンマに、あのロクデナシはいらん事しかせえへんわ。

——ですなあ……。

いや、実際アレ相当きつかったと思うんよ。立香さんの旅：特に
異聞帯^{ロストベルト}関連とか、しんどいどころの話やないで、ホンマに。

——それは：はい。私もチラツと聞いたことがあるくらいだけ
ど、それでも……。

アルフが言うのとつたけど、魘されて飛び起きたことも一度や二度や
なかったんやて。

夢やから詳しくは憶えてなかったみたいやけど、悲鳴を挙げながら
目を覚ますくらいならまだ良かった方。目を覚まして早々に吐いた
り、酷い時には過呼吸起こしてそのまま気絶したりしたこともあつた
とか……。

……それに、立香さんも実は相当きつかったはずや。マシユさんた
ちの前では気丈に振る舞ってたみたいやけど、実際にはかなり追い詰
められてたんちゃうかな。

ほら、立香さんってフェイトちゃんのことにかく甘やかすやん。
あれな、半ば趣味になつとるけど、それとは別に精神安定を兼ねてた
んやないかと思うんよ。

こつちの夢はイリヤちゃんたちと契約した頃から見たらしいん
やけど、その時点では変な言い方やけど幽霊みたいな感じだったと
か。それが変わったんが、ロシアのロストベルトの後にあの人を虚数
空間からサルベージしてからって聞いている。

ただ、この辺時系列がめちゃくちゃでなあ……あの人を引き上げて
からフェイトちゃんとの出会って、P・T事件の終結はさらにその後や。

——あゝ、確かに流れがおかしいですねえ。

まあ、あんまり深く考えんようにしとこ。

とにかく、フェイトちゃんと出会ったのは立香さんがおそらく一番
精神的にしんどかった時っちゆうことや。フェイトちゃんが立香さ
んに救われてたのは間違いないけど、それは立香さんも同じやつたん
やと思う。

せやから、マシユさんとは違った意味でフェイトちゃんは立香さん
の「特別」なんよ。立香さん言うのとつたよ、「何も事情は教えてくれな
かったけど、フェイトが頑張ってるのだけはわかった」「それを見てた

ら、立ち止まってなんていられなかった」って。

——　　「そういえば、フェイトさんも」とても大切なことを教えてもらった」って言ってたっけ。いいなあ、私もステキな恋とかしたいなあ。

恋するんは結構なことやね。でも、実は色々大変だったんよ？

いまでこそああやけど、随分長い間立香さんはフェイトちゃんを子ども扱い、フェイトちゃんもマシユさんをはじめ、カルデア女性陣に劣等感覚えとつたし。

何より厄介だったんが10歳つちゆう年齢差や。考えてみ、20歳の男の人がどう見ても他人の10歳の女の子と二人で歩いとつたら……

——　　………事案？

通報されても文句は言えん。実際、職質されかかったことも一度や二度やないらしいし。その度にフェイトちゃん、申し訳なさそうにしてたんよ。

で、年齢的に釣り合いが取れないこととかも含めて、それはもう悩んでなあ……まあ、そこはリンディさんがフォローしたんやけど。

確か「残念だけど、年齢差が縮むことはないわ。でも、年齢差が生む溝は時間が埋めてくれるものよ」ってな。

——　　「どういことですか？

考えてみ、確かに10歳と20歳やつり合いは取れんかもしれない。せやけど、15歳と25歳やつたら？

——　　「うくん、十分危ないと思うんだけど……」。

チツチツチツ……確かに数字としてはそうかもしれないけど、もう一年経てば日本の法律なら普通に結婚できるんやで。

あ、でも今は違うんやっただけ？ いやあ、危ないところやった。もう二年もやなんて、待てたか自信ないなあ……」。

と、まあ何が言いたいかというや。そういう年齢の夫婦も、十分ありうるっちゆうことやね。

——　　………な、なるほど。

さらに進んで20歳と30歳ならだいたい現実味を帯びてくる。ま

してや30歳と40歳とか、それ以上なら？

——あ、普通にありだ。

せやろ？ 私と士郎かて7歳差や。結婚した時は16歳と23歳、世間的に見れば結構危ない夫婦やけど、今なら23歳と30歳。おかしいことなんてなくんにもない。要はそういうこつちや。

——確かに、今の二人が並んで歩いてても誰も問題視はしませんよね。というか、なんで八神司令を引き合いに？

まあ、私もリンデイさんのアドバイスには結構励まされた口やからね。

……白状するとな、私自分の気持ちとか伝える気はなかったんよ。長くは生きられへんと思ってたし、それで大好きな人の心に傷をつけるのは嫌やった。

せやけど、恋は叶わなくても家族になら……それで、ついポロつと口をついてもうたんよ。「兄妹やったらよかったのに」って。まさかなあ、そんな何気ない一言が士郎の人生を変えるとは思わなかった。

私を助けるために、守るために……士郎はそれまでの自分、切嗣さんから受け継いだもの、それら全てに背を向けることを選んだ。元々は、完成した闇の書を私ごと虚数空間に落として処理するつもりだったはずなのに……。

——えっと、ロストログアを使って身代わりになろうとしたんですよね。

うん。本来は権力者の保身のためのもんをユニゾンの瞬間に使って入れ替わり、自分の中に封印。あとは当初のプラン通り虚数空間へポイ。まあ、この場合は身投げやけど。

犠牲はどのみち一人、それなら私やなくてもええ……そこで自分を犠牲にするのが士郎らしいっちゅうか、なんちゅうか……ホンマに馬鹿なんよ。そんなんして、私が喜ぶわけないってどーしてわからんかなあ。

……いや、わかってる。ホンマにどつちかしか選べへんのなら、あるいは私が身代わりになって士郎が助かるんやったら、たぶん私も同じことをする。

まあ、それにしたって「闇の書の力を手に入れよう」として失敗した黒幕」つちゆう建前まで用意してたあたり、変に用意周到と思わん？

——そのままだと八神司令に責任問題とかが来るかもしれないから、「被害者」ポジションにするために、そういう建前を用意したんですって？

そう。しかも、矛盾したりせえへんように蒐集を始めようとした段階でヴィータたちに全部バラして、口裏合わせしとったんよ。その上で「はやての未来のために一緒に死んでくれ」やで。アインスマでそれに乗ってまうし……。

——愛されてますね、八神司令。

……そうやね。やり方はともかく、士郎は命を捨てる覚悟で私を愛してくれた。まあ、当時は兄妹愛やけど。

実を言うと、割と責任感じとるんよ。私の無責任な一言のせいで、士郎にそれまでのすべてを捨てさせてもうた。

だからってわけやないけど、愛してくれた分だけ愛したいし、貰った以上の幸せをあげたい。士郎にとって生きるつちゆうことは溺れてるのと同じで、幸せであることを苦しく思ってしまうことは知ってる。

それでも私は、その苦しさを忘れてしまえるくらいに士郎を幸せにしたいんよ。

……って、勢い余ってなにいきなり愛を語ってるんやろ、私。恥ずかしい……そもそも何の話……

——いえいえ、ごちそうさまです。それで、元は八神司令が立香さんをどう思ってるか、ですな。

ああ、せやったせやった。アインスのことで感謝してるって話やったっけ。

あと付け加えるなら……ご迷惑おかけしました、やな。本人は全く気にしてなさそうやけど。

——何かあったんですか？

結果的に士郎のプランは失敗に終わったわけやん。そうになると、さっきの「責任問題」は当然私のところに来る。

誰も彼もがリンディさんやクロノ君みたいに「罪を憎んで人を憎ま
ず」とはいかん以上、私やシグナムたちのことを憎んでる被害者、恨
んでる遺族は今もいる。私自身、復讐されても仕方ないとは思って
るしな。

いや、自分から身を差し出そうとは思わんけど。そうだったら、士
郎をはじめ家族を幸せにできなくなってまうからな。

そもそも、私らのことは「特秘事項」扱いやから詳しいことを知れ
る人は限られとる。

でも、それも完全とはいかん。例えば、昔の被害者がシグナムたち
を見ればそうとわかるわけやし、情報漏洩を完全に防ぐのは無理や。
まあ、それでも実際に行動に出る人は少ないけどな。とはいえ、それ
はゼロとイコールやない。

——もしかして、狙われたりとかするんですか？

何年かに一度くらい、な。まあ、それなりに対策もしてるから大抵
は事を起こす前に止められるんやけど、これまた絶対つちゆうわけ
もない。

で、サーヴァント関連の騒動が起きてる頃に隙が出来てもうて
なあ。それに立香さんを巻き込んでもうたんよ。

未熟な子どもの頃とはいえ、ホンマに情けない。

* * * * *

「立香！」

局での任務を終え、帰宅する途中で受けた緊急連絡。転送ポートを
出たところで待ち受けていたリンディの車に乗り、八神家へと駆け込
んだフェイトを待っていたのは、あまりにも重く静まり返った空気
だった。

「っ!？」

一室のベッドに横たえられたその姿に、フェイトは知らず知らずの
うちに息をのむ。

その姿が、あまりにも普段通りだったから。見たところ怪我らしい

怪我はなく、本当にただ眠っているだけのようで……。二年前、わずかな時間一緒に暮らしていた時に何度も見たそれとほとんど変わらない。釣られるようにして懐で眠ってしまったその寝顔は……。本当に、今すぐにも呑気な欠伸と共に目を覚ましそうに見えた。

だから、この目が二度と開かないかもしれないなんて、信じられないし……。考えたくもない。

(……………そうだ。こんなの、嘘だ)

いま、自分がどんな表情をしているかさえ、フェイトにはわからない。頬が濡れる感触がないことから、泣いていないだろうことはわかる。なんとなく、口角が吊り上がっている気がするから、案外苦笑いでも浮かべているのかもしれない。

一歩前に踏み出すと、足元がフワフワしておぼつかなかった。それでも進もうとすると、視界が激しく横にブレた。フェイトは気づかなかったが、アルフと一足早く駆け付けたのは慌てた様子で支えようと手を伸ばす。ただ、無意識のうちに身体がそれを補正したので、二人は手を引っ込める。

そのまま、危うい足取りで進んでいくと……。ベッドわきで両手を握りしめていたはやてが目を涙でいっぱいにしてながら振り返った。

「ごめん……。ごめん、フェイトちゃん。私の、せいで……」

「……寝てる、だけなんだよね」
「……」

「立香って、結構だらしないんだ。掃除とかも大雑把だし、料理だってたいして上手くないのに目分量だから、味が薄かったり濃かったりで安定しない。部屋の片付けも適当で、良く物の場所が変わるんだよ。だから、時々部屋の中をひっくり返して、また散らかすんだ。」

それで、もつとしつかりやろうつて言うのと、困ったみたいに笑うんだよ。私が立香を閉じ込めた時とよく似た顔で……。ああすれば誤魔化せると思ってるのかな、まったくもう」

目の前の現実を否定するように、拒む様に口から溢れる文句とも小言とも取れない言葉の数々。

普段の彼女から考えられない……。だからこそ、どれだけ相手に心を赦

しているかがわかる言ノ葉。きつと後にも先にも、フェイトがこうも遠慮なく不満を口にできる相手は、現れないだろう。

フェイト・テスタロッサ・ハラウンにとって、藤丸立香は初めての友達高町なのはとは別の意味で特別だった。およそ好印象など持たれるはずがない出会いにもかかわらず、彼はあるがままのフェイトを受け入れた。

彼女の行いを拒絶することもなく、その思いを否定することもなく、疲労が蓄積する中温かく出迎え、時に傷ついて帰ってくる少女に寄り添い、気丈に振る舞おうとするフェイトのすべてを甘く優しく包み込み、何も語らないフェイトに大切な言葉を送り、最後にソツとその背を押してくれた人。

そんな彼だからこそ、フェイトは申し訳ないと思いつつもワガママを口にしてしまう。

その生い立ちと来歴故に、誰かと関わる時に無意識に抱いてしまう「嫌われてしまうのでは」「幻滅されるのでは」といった感情を彼にだけは抱かない。不当に自由を奪うなどという真似をされながら、そのことを忘れたわけでもないだろうに、何事もなかったかのように受け止めてくれる。だから、つい甘えてしまう。

これ以上迷惑をかけてはいけないとわかっているのに、むしろ恩返しをすべき相手のはずなのに、いつもいつももらってばかりで、そんな自分が情けなくて……でも本当は、それがうれしかった。

その温もりが失われてしまうかもしれないなど、脳裏をよぎるだけで心臓が止まりそうになる。

願わくば、慣れない悪口に怒って目を覚ましてほしい。何事もなく、いつもの居眠りだったと笑い話にしてほしい。なのに、そんな願いはどれだけ言い募っても叶わない。

気付けば、いつの間にか言葉は途切れ途切れになり、合間に嗚咽が混じるようになっていた。

「特に、寝る時がそう。床で寝てる時もあった、いつも……ちゃんと、した場所で……寝ようって……そう、言ってるのに、っ！ また、こんなところで寝て！ はやてたちに……迷惑、かけて……立香！ ねえ、立香

「！起きて、起きてよ!! ねえってば!!!」

「フェイトちゃん……」

「なのはさん。いまは、好きなようにさせてあげて」

ついには力なく横たわる身体に縋りつき、泣きじやくるフェイト。なのははそれを見ていられなくなったのか、声をかけようとするがリインディに止められる。彼女には、フェイトの胸中が理解できるのだろう。今のフェイトには、感情を吐き出すことが必要なのだ。

「はやてさん、辛いとは思うけど……何が起こったのか、説明してもらえろ?」

「……もちろんです。私も、このままでいるつもりはありませんから。シヤマル」

「はい」

守護騎士の参謀役であるシヤマルの口から語られる、今回の事件の概要。

現場になったのは八神家行きつけのスーパーの前。偶々立香と出会い、フェイトを介してとはいえ知らない仲ではないということもあり、軽い雑談などしているところでそれは起こった。

後から考えれば、幻術魔法による偽装だったのだろうとわかる、足元に転がってきたサッカーボール。幻術魔法はその性質上、特に魔法の気配がつかみづらい。なのはやフェイトを超える膨大な魔力を有し、ミッドとベルカ双方の魔法をSランクで扱えるはやてであっても、例外ではない。何とはなしに拾い上げ、手に取ることでようやく気付いた彼女は、反射的に防御魔法を展開しようとしたが……結果的に、これが悪手だった。

はやての魔力の発動に呼応する形で幻術が剥がれ、剥き出しになったのはどす黒く染まったガラス玉。それが鈍い光を放とうとした瞬間、誰よりも早く動いたのが立香だった。

話をするためにはやての間近にいたこと、なにより緊急事態や危険に対する経験値が豊富だったからこそ、彼は直感的にはやての手からそれを叩き落した。そのおかげで発動に先んじてはやての手から“それ”は離れたが、立香はそうではなかった。わずかに、それこそ指

先が微かに触れている程度だったが、確かに彼は触れていたのだ。

「その時、あなたたちは？」

「立香さんのお話の邪魔にならないよう、少しだけ離れていました」
「……………」

サーヴァントの暴走体の出現により、管理局は海鳴市周辺に警戒網を展開し、なのはたちも有事に備えて可能な限り二人以上で行動するようにしていた。学校帰りに夕食の買い出しに出ていたはやてもその例に漏れず、シヤマルとザフィーラを伴っていたのだが……外ばかりを気にして、周囲への警戒が僅かに緩んでいたことは否定できない。それだけ、全く別法則の力を行使する彼らの存在を、危険なものとして警戒していたということだ。

シヤマルと彼女にリードを引かれたザフィーラが僅かに離れていたために起こったとも言えるそれは、不運な事故と言わざるを得ない。もし仮にはやてが攻撃されたとしても、即座に対応できる備えはしていた。ただ、暴走体の性質上こういった姑息な真似はしてこないため、シヤマルたちも直接攻撃への対処に意識が傾いていたのだ。

「その後の状況は？」

「容疑者は拘束して、今はシグナムが監視しています。なんとというか、その……………」

「どうやら、闇の書時代の被害者らしく。どうか、寛容な対応を」

「あの人もどうか、あの人がどうか……とにかく、被害者なんは変わりません。私からも、お願いします」

はやてを狙い、無関係な立香を巻き込んだことには思うところがあがるが、その発端は自分たちの過去。主であるはやての意向もあり、それが彼女たちの方針だ。はやてを筆頭に、揃って頭を下げるシヤマルとザフィーラ。不満そうではあるが、やはりヴィータも同様だ。

「わかつているわ。それで、立香くんの身に何が起きているかは？」
「精査した限り、外傷などはありません。魔法の痕跡はありますが、今現在はなにも……………」

「あなたがそう言うなら、間違いないわね。ということは、彼が目覚めないのは外的な要因ではないということかしら」

「二応、クロノ君とユーノ君には立香さんと例のガラス玉のデータを送ってあるんで、何かわかれば……」

そうして話し合いを続ける管理局組と同様に、イリヤたちもまた心配そうに視線を送る。ただ、彼女たちは現状立香との関係を隠しているため、表立ってそれをするわけにもいかないが。

(どうしよう、美遊)

(……事件が起こったと思われる時間に、確かに契約の「ゆらぎ」は感じたけど、現状は特に異変もないし……静観するしかないと思う。クロは?)

(同感。とりあえず、毒や病気の類じゃないのは確かね。それだったら、マスターなら弾いちやうはずだし。考えられるのは呪いか精神干渉だけど、今現在その手の気配がないってことは、どっちも可能性は薄いかもしれないわ)

(それって何もわからないのと同じってことでしょ!?)

(だから、いまユーノとクロノが調べてるんでしょ。たぶん、クロノは容疑者……というか犯人周りの捜査、ユーノは例のガラス玉方面からでしょうね。とにかく、もう少し情報がないとこっちも動くに動けないわよ)

(でも、場合によっては情報を開示することも視野に入れた方が良くと思う)

立香の身の安否は、イリヤたちのみならずカルデア全体の最重要事項だ。彼の身に何かあれば、それこそカルデアに召喚された全サーヴァントが退去することになりうる。

故に、美遊が守秘義務を破つても情報開示を考慮すべきと提言したのは当然のことだ。情報を隠すことよりも、立香の身の安全の方がはるかに重要度が高いのだから。

その後、しばらくしてようやくフェイトも吐き出すものを吐き出せたらしく、少しだけ落ち着きを取り戻した。

とはいえ、休憩や食事を促しても頑として立香の傍を離れようとはしなかったが。なので、妥協案として簡単につまめる軽食を用意し、ベッドの傍で食事をとらせることに。

なのは一度帰させたが、リンディはフェイトの養母ということもありそのまま残っている。もちろん、立香との関係性を話していないので、イリヤたちもなのは同様帰宅。クロノとエイミイは捜査のため帰れないということもあり、三人＋アルフで出前を取って食事を済ませた。気が気でない時間が数時間過ぎ、時計の針が夜10時を回った頃……ユーノから例のガラス球について報告がもたらされた。

「簡単に言ってしまうと、地球で言うところのカメラやビデオといった、撮影・録画機材に近いロストログアだね」

「そんなものもロストログアなわけ？」

「ロストログアって言ってもピンキリだよ。世界の一つや二つ消してしまうくらい危険なものから、ほとんど無害なものまでね。それこそ、モノによつてはお金さえあれば入手出来てしまうようなものもある。まあ、どうしても希少性が高くなるから、比例して高価にはなるけど。闇の書事件で士郎さんが使ったのだって、売れば一財産になるから」

特に、彼の使ったそれは危険性は低いが、モノがモノなので一般には流通されない類だ。当然裏ルートを使って入手したということであり、金額はさらに跳ね上がる。どうやって費用を工面したのか……はやてを救うという目的に対する、彼の本気度がうかがい知れる。

「でもユーノ君、それでなんで立香さんは目を覚まさないの？」

「確かに、聞いた限り無害そうやけどなあ」

「元々はその場その瞬間の風景や音なんかを記録・保存するものなんだけど、そこはロストログアというべきか、ちよつと性能が無駄に段違いなんだ」

「？」

「カメラなら映像、ビデオならそれに加えて音が記録されるけど、このロストログアは残る五感、嗅覚・味覚・触覚すら保存できるんだ。それどころか、使用者がその時に抱いていた感情すらも。

つまり、綺麗な風景を見た感動とか、嬉しい出来事があった時の気持ちなんかをそのまま記録できるってこと」

「それは、ステキやなあ……」

無駄に性能がいいという意味は分かったし、なるほど確かにそこにはロマンがある。はやてが思わず感心したのもうなずけるというものだろう。そして、そこまで高性能なら確かにロストログアの名に偽りなしだ。

とはいえ、それでもやはり現状に対する回答にはなっていない。そんな代物がどうして、立香が昏睡し続ける原因となりうるのか。

「で、本題はここから。実は、今回使われたものには機能に一部改造の痕跡が見つかってる。それが、人の感情を保存できるという部分。クロノや技術部からの報告待ちだから確定ではないけど、おそらくそこを利用して、その……」

「我らへの恨みや憎しみを徹底的にねじ込んだのだろう。それも、一人や二人ではあるまい」

言い淀むユーノから、容疑者を引き渡したことで監視役より解放されたシグナムが深々と息をつきながら後を繋ぐ。

「そうなの、ユーノ君？」

「……うん。クロノの調査だと、被害者や遺族に片っ端から集めて回ったみたいなんだ。ほとんどの人は詳しいことを知らなかったみたいだから、立件されることはないだろうけど」

「それはええ。被害者の人たちからすれば当然の感情や。そういうん含めて、全部背負う覚悟はどうにできてる。せやけど、そうなるか一人や二人どころか数百人で収まるかも怪しいな」

「詳しい数はまだ調査中だけど……」

「最低でも数百人分の恨みや憎しみ……そんなん呪いと同じや。リンデイさん、この通信フェイトちゃんは？」

「今は繋いでいないわ」

「さよか。ならシャマル、はつきりと言うて。数百人分の負の感情に触れたとしたら、どうなると思う？」

はやてに問われ、しばし黙考するシャマル。医務官として局に勤める彼女だが、そういったことは専門外ではある。とはいえ、患者の精神ケアも職務のうち。精神科医の真似事くらいならできないことはない。

だからこそ、おおよその見当がついてしまう。その中から、せめて少しでも希望を見つけ出そうと考えているのだろう。しかし、時計の針が10周したうえで彼女が出した結論は、希望とは程遠いものだった。

「……まず、もちません」

「っ！」

「人によって抱く感情の程度はそれぞれでしょうし、時間の経過で薄まっている人もいるかもしれませんが。だとしても、何百人分という怨嗟をあの一瞬で叩きつけられたりしたら、ひと一人の心なんて簡単に……」

「……さよか」

「むしろ、昏睡程度で済んでいるこの状況の方が驚きなくらいです。良くて心と脳が壊れて植物状態、最悪ショック死していても不思議じゃないんです。

立香さんの脳波に今のところ大きな乱れはありませんし、呼吸や循環といった生命維持に必要な機能も問題なく働いています。外部からの刺激に対しても反応していますから、脳死などでないのは明らかです。でも、目を覚ますかと言われたら……」

絶望的、と言わざるを得ないだろう。

「希望があるとすれば、改造したロストログアの容量がそれほど多くない可能性ですけど」

「どうなん、ユーノ君」

「そこも、技術部からの報告待ち。ただ、映像とかを保存する機能は削って、感情の保存に特化させたみたいだから……」

相当な容量があると考えるべきだ。

場の雰囲気、自然重苦しいものになる。普段は明るく元気なアルフですら、今は消沈した様子だ。彼女も立香との付き合いはフェイトに並んで古い。彼には、恩義すら感じてもいた。そんな相手が二度と目覚めないかもしれないとなれば、フェイトのことを抜きにしても沈み込まざるを得ないのだろう。

ただそんな面々に対し、イリヤたちはと言えば……密かに肩の力を

抜いていた。

(あくよかった、それなら大丈夫そうかな)

(うん。マスターがその程度でつぶれるなんて考えられない)

(金ピカだったら「その程度の雑念飲み干せずして、我のマスターが務まるか!」とか言いそうよねえ)

なるほど、数百人分の怨嗟：それは生半可なものではないだろう。ひと一人の心を容易く砕くに足るのだろう。

しかし、それはあくまでも相手が常人であればの話。藤丸立香は常人にあらず。正確には、常人ではいられなかった。元をただせば彼は普通の、どこにでもいる一般人。だが、立香が歩んだ過酷な旅路は、彼に只人であることを赦さなかった。

未来を勝ち取るために進み続けた彼が背負った業は、生きるために積み重ねた罪過は計り知れない。今更、その程度で膝を折る資格など彼にはない。

また、彼は契約したサーヴァントたちの内面を夢に見ることがある。高潔な者もいれば非道を為した者もいる、中には「この世全ての悪」として祀り上げられた者まで。

たかだか数百人分程度の怨嗟に飲まれてしまうようでは、彼らから逆流してきたものに耐えられない。

(でも、どうしてまだ目を覚まさないのかな?)

(……案外、夢の中でさらに寝てたりとか?)

(ありそうねえ……私はさらにそこから別の夢に紛れ込んだに一票)

(フェイトちゃんのためにも、早く起きてほしいんだけどねえ)

ただそうになると、色々厄介なことになる。常人では到底耐えられない「感情の爆弾」と称すべきそれを受け、ケロツと目を覚ませばさすがに怪しまれるだろう。

どこまで誤魔化しきれるかはおわからないが……と思っていたところへ、けたたましい警報音が鳴り響いた。

「どうしたの!」

「サーヴァントと思われる反応を確認! 数は……三、四……多い、計6ヶ所!」

東京支局に連絡を取ったりリンディに返されたのは、間が悪いことこの上ない報告だった。

今までにも何度か確認された反応が、今回に限って6。これまでは同時でもせいぜい2つが限度だったというのに……。

(マスターの変化に反応した可能性もあるわね)

(うん。暴走状態とはいえ、みんなマスターのサーヴァントだから)(私たちも感じたんだもん。こっちにこれたのが身体と力だけでも、あの人たちが反応しないはずないよね)

「……やむを得ない、わね。クロノに代わり、私が指示を出します。まずはイリヤさん美遊さんクロさん、あなたたちに臨時の囑託魔導士として協力を要請します」

「はい」

「しよーがないわね」

対サーヴァントという意味では、この三人に勝る者は管理局関係者の中にはいない。そこで、臨時の囑託魔導士資格という形をとり、協力態勢をとっているのだ。

とはいえ、これでカバーできるのは三ヶ所まで、残る三ヶ所にも対処しなければならぬ。しかし、サーヴァントに対処するには生半可な戦力では心許ないのも事実だ。そうなると必然、出せる人員は限定されることになる。

「この三人はそれぞれ指定のポイントへ、加えてなのはさんとヴィータ、それにシグナムも同様に！ 残るメンバーには支援を……」

「私も、行きます」

編制を決め、行動開始を支持しようとしたところで割って入った声。

それは最近の彼女からは考えられないほど、暗い影を伴ったものだった。

「フェイトちゃん、さっきの話……」

「え？」

「ううん、なんでもない。でも……」

「大丈夫。私は、大丈夫だから」

「全然、大丈夫な顔してへんよ」

「でも、サーヴァントは危険だ。だから、私たちも普段から二人以上いるようにしてたんでしょ」

「それは、そうやけど……」

「今の三人に私とアルフ、それにザフィーラを加えればツーマンセルが組める。はやてには後方で支援をしてもらって、リインとシヤマルにはその護衛と補助をしてもらうのが一番の筈。違いますか？」

確認するようにリンデイの目を見据えるフェイト。確かに、言っていることは正論だろう。

しかし、つい先ほどまでの彼女の取り乱しようを考えると、どうしても不安をぬぐえない。今は落ち着いているようだが、彼女が精神的な脆さを抱えていることをリンデイは知っている。滅多なことでは表面化することのないものだが、果たして……

「お願いします。ここにいても、私には何もできない。何かしていないと、気が変になりそうで……」

「……わかりました」

「あ……」

「でも、後退を指示したら従うこと。これは絶対よ、守れるわね」

「……はい」

「では、編制を変えます。なのはさんにはアルフ、ヴィータにはザフィーラ、フェイトにはシグナムとペアを組んでもらいます。フェイト、あなたのところはシグナムがリーダーよ」

「お願いします、シグナム」

「ああ」

頭を下げるフェイトに、シグナムも静かにうなずき返す。その一方で、彼女は視線をリンデイに向ける。

本来なら、戦力バランスや連携のことを考えると編制はもつと別の形が最良だった。にもかかわらずこの形にしたのは、フェイトに対する不安の表れ。それを理解しているからこそ、言葉には出さないが、母親である彼女に向けて「任せろ」とでも言うように視線を向けたのだ。

そうして散開し、それぞれバックアップの武装局員を伴って現場へと向かっていく面々。

戦況は、良くも悪くも予想通り。サーヴァント戦に慣れているイリヤたちはある程度対応できているが、不慣れな残りのチームは悪戦苦闘を強いられていた。特に、やはりフェイトが動きに精彩を欠いている。

ペアのシグナムがフォローしてくれているからこそ落ちずに済んでいるが、危うい場面は何度もあった。

(これは、やっぱり退かせるべきでしょうね)

フェイトの思いを汲んでいかせたが、これ以上は本当にただでは済まなくなる。

そう考え指示を出そうとしたところで、リンディは自身の傍らの変化に気付いた。

立香のことを放置するわけにもいかず、彼の眠る部屋から指示を出していたのだが、起きるはずのない彼が身じろぎをしたのだ。

(まさか……)

「ふわあく……あれ、ここどこ？ カルデアじゃないし、俺の部屋……でもないよな」

「立香くん、あなた……」

「あれ、リンディさん？ どうしてここに……というか、ここどこですか？」

あまりにも呑気な立香の反応に、なんというか気が抜けてしまいうになる。

人の気も知らないで……というのが正直なところではあるが、何はともあれ目が覚めたのは良いことだ。

たとえばそれが、どれほど不可解であったとしても。しかし、同時にこれは好都合でもある。以前から、彼には聞きたいと思っていたことがあるのだ。

「……ははやてさんのお家よ」

「はやて？ ああ、そういえばはやてと話してたんだっけ、それで……」

「一つ、聞いてもいいかしら」

「はい？」

「あなた、何者なの？」

率直な、だからこそ無駄な要素を一切省いた問。それに対し、困惑の色を浮かべて首をかしげる立香。リンデイはそれが素の反応だと読み取り、もう少し詳しく説明を試みる。

「フェイトのことで、あなたには感謝しているわ。でも、だからこそ少し調べてみたの。そうしたらわかったことがあった、それは……」

(あく、そりゃ調べればわかるよなあ)

「あなたのことが『何もわからない』ということよ」

それはそうだ。だって、立香はそういった情報操作の類を一切していない。というか、できない。

こちらの世界にこれといったツテはないし、別段裏工作の手練手管を持っていないわけでもない。

ならば、当然彼のことを調べればフェイトと会った二年前の春以前の彼の足跡を終えるはずがないのだ。

「あなたが善良な、危険な人物ではないのはわかっています。でも、逆に言えば直接会って話をしてわかる以上のことがわからない。そして今回のこと」

「え？」

「目が覚めたのは良かったし、フェイトも喜ぶわ。でも、あなたが受けたものは二度と目を覚まさなくなってもおかしくない……というより、普通ならそうなって当然のものよ。なのに、どうしてあなたは平気なの？」

「どうしてと聞かれても……ただ、話を聞いただけですよ」

「はっ？」

「いや、どれくらいいたのかよくわかりませんが、四方八方から色々言われても困るんですよねえ。俺、聖徳太子じゃないし……いや、実際には声じゃなかったっぼいけど、とりあえず一つ一つ聞いていて、終わったと思ったら目が覚めました」

「……………」

予想だにしない返答に、開いた口が塞がらないといった様子のリンデイ。

まさか、数百人分に及ぶであろう怨嗟の一つ一つに耳を傾け、それを宥めていったとでもいうのだろうか。

いや、立香の様子だと本当に「話を聞いただけ」のようにも思えるが……それでもこれは異常だ。

「どうかしました?」

「重ねて聞きます、あなたは何者なの」

さりげなく警戒を続けながら、改めての問い。こんなこと、フェイトがいる前では聞けない。フェイトは立香に心を赦しているし、実際彼は善人なのだと思う。

しかし、彼女と養子縁組をし、母親となったからには見過ごせない不審。加えて、これだ。この機会は、ある意味では好機と言えるだろう。

「何者かあ……なんと叫んだものか。でも、今はそれよりフェイトたちの方が重要じゃありません?」

(っ! しまった!?)

予想外の目覚めだったこともあり、投影していたモニターを消し忘れてしまったことに遅ればせながら気づく。

だが、そんなリンデイの焦りをサラツと流し、立香はモニターを流し見ておおよその状況を把握する。まあ、クロエたちからある程度この街で起きていることや管理局のことを聞いていたからこそ、スムーズに状況を把握できたわけだが。

「とりあえず、そつちの対処が先ですね」

「……何をするつもり?」

「目には目を歯には歯を」じゃないですけど、サーヴァントにはやっぱりサーヴァントでしょう?」

「サーヴァント……なぜ、あなたがその言葉を?」

リンデイの問いには答えず、立香は財布から出した一枚の紙を広げ床に敷く。

そこには、極めて複雑な魔法陣が描かれていた。

「カルデアからの魔力供給は…よし。これならいけるか。問題は誰が来てくれるかだけど、やるだけやってみよう」

「待ちなさい！…なにを……」

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。」

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

「これは、詠唱？」

確かに、ミッド式・ベルカ式を問わず高度な魔法や複雑な魔法には詠唱という方式が使われることはある。

しかし、実用性を重視する傾向から、長文詠唱というのはまずありえない。やるとしても、たいていの場合は今立香が詠唱したくらいで終わるものが大半を占めるだろう。

にもかかわらず、立香の詠唱はさらにさらに続いていく。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。」

繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する」

魔法陣に魔力が注ぎ込まれ、紙面上の陣がまばゆい光を放つ。

魔術師ではないリンデイにはわからないことだろうが、全力で魔術回路を回転させている立香は全身を駆け巡る異物感に脂汗を流しながら耐え、さらに回転をあげる。

「——告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。」

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

眩い光と荒れ狂う風が部屋の中を蹂躪する。目を開けていることすら困難な中、リンデイは辛うじてうつすらと開けた瞼の隙間から、声を出すことも忘れて揺ぎ無く立ち続ける立香を見ていた。

「誓いを此処に。」

我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者」

そして、最後の一節が紡がれる。

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——

——！」

締めめの詠唱と共に、光と風が爆ぜる。

まるでそれまでの激しさが嘘のように静けさを取り戻し、光が散

り、風の余韻が吹き抜けていく。

同時に、気付く。今までは立香とリンディの二人だけだったはずの室内に、複数の気配が現れていることに。

「まさか……サーヴァント?」

「じゃあみんな、ちよつと手伝いを頼めるかな」

これが時空管理局と人理継続保障機関「フィニス・カルデア」、二つの組織の邂逅だった。

* * * * *

「ん……」

「あ、目が覚めましたか、先輩」

「マシユ? ああ、今度はカルデアか」

目を覚まして飛び込んできたのは、見慣れた真っ白な天井と可愛い後輩。

“向こう側”では結構な騒動にはなったが、何とかことをあまり大きくせずに収められたのは僥倖というべきだろう。まあ、一部サーヴァントがそれはもう大暴れしてくれたわけだが。

「“今度は”ということは、また“あちら”…海鳴、でしたか?」

「うん。悪いんだけど、ダ・ヴィンチちゃんたちに連絡してもらえる?

実は、俺のことがばれちゃった」

「そうなんですか?」

「まあ、それ自体は成り行き上仕方なかったと思うけど。でも、報告は必要だろ?」

「そうですね。では、行ってきますが先輩は?」

「俺は“アリスア”を引っ張ってく」

「……そうですか。先輩、あまり無理強いはしないでくださいね」

「向こうが逃げなければね」

そうして、それぞれ報告のための準備に入る二人。

十数分後、会議室の一つに集まった一同に対し、立香は今回のことのあらましを報告した。

「では、特に死者は出ていないんですね」

「うん、その辺は大丈夫。怪我人は出たけど、玉藻の宝具である程度回復したから」

「加えてロードまでいらしたんですね？ あのお二人のコンボは非常に強力ですから……」

何しろ、方や自陣に対する強力な支援効果、方や敵陣に対する強力な阻害効果。味方を強化し、敵を弱体化させる、基本と言えば基本だが……あの二人の規模でやられると悪辣極まりない。

「で、前線には騎士王と聖女のオルタコンビ？ アハハハハ、何それ超派手！ いいね、いつそ清々しい♪」

「ふむ、私はむしろ同情するよ。彼女たちが暴れたとなれば、更地では済まないだろう」

「いえいえ、やはり第一印象に必要なのはインパクト！ 最高のファーストコンタクトではないでしょうか」

カルデアの三大頭脳、技 術 顧問ダ・ヴィンチ、経営 顧問ホームズ、情報 顧問シオンがそれぞれコメントする。一番常識的そうな発言をしたホームズだが、実に楽しそうな顔をしているので説得力は皆無だ。

どいつもこいつも飛びぬけて優れた頭脳の持ち主だが、それと同じくらいにロクデナシである。

「……まあ、一緒に召喚されたカエサルさんの交渉の助けになったようですから、間違っではないのでしょうか」

「フオ……」

「うん、まあリンディさんが本気で凹んだのは……悪いことしたかなあ？」

「ところで、フェイトさん……でしたか。彼女も無事なのですか？」

「うん。ただ、しばらく離してくれなかったけど……」

「それは、無理もないかと……そういえば、アリシアさんはなにかないのですか？」

そういつてマシユが水を向けたのは、さつきからずっとだんまりを決め込んだ黒髪の14・5歳の少女だ。

「……ありません。ええ、ありませんとも。というか、私に何かコメン

トする資格なんてそもそもないんです。なので、早々に退席させてください。というか、今すぐお願いします！」

早口でまくし立てる彼女だったが、答えはあまりにも無常だった。

「え、ダメ〜♪」

「要請は受理されません」

「というわけだ、諦めたまえ」

「こんのロクデナシども！ 立香！ マシユ！」

「フェイトに会うって約束してくれたらいいよ」

「その、ごめんなさい……」

「シット！ 味方がいない……！」

お行儀悪く舌打ちするが、だからと言って誰も同情はしてくれない。

そもそも、彼女はあちら側に対する貴重な情報源なのでいてくれな
いと困るのだが。

「とはいえ、今回のことでだいぶ縁が強まったのも事実。そうだろう
ダ・ヴィンチ」

「うん。あと数日中には浮上できるよ」

「良かったですね、アリシア。これでようやく娘と会えますよ」

「だから！ 会いたくないって言うてんの！ いや、会わせる顔がない
のよマジで！ 今更どんな顔して会って、何を話せてのよアンタ
ら?! しかも、私この有様なんですけどお!! そもそも私ってわから
ないと思う！」

「……まあ、確かに」

「実際、カルデアで保護した時とは色々変わってるからなあ……まあ、
ギルの若返りの薬を飲んだんだから当然だけど」

カルデアが彼女を保護した時、既に彼女の身体は病に蝕まれ手の施
しようのない状態だった。だが、そこで思いついたことがあった。〃
現在〃がだめなら〃過去〃にしてしまえばいい。退去の前にギルガ
メツシュが残っていた若返りの薬を使い、肉体年齢を逆行。病に侵
される前の状態にすることで、一命をとりとめたのだ。

その結果、外見的にはティーンエイジャーになってしまったが。

また、虚数空間を漂っていた反動か記憶に混乱が見られ、ほとんど自分のことを思い出せなくなっていた。

そこで、かろうじて思い出せた名称の中から「アリシア」の名を名乗ることに。もう一つ「フェイト」という名も覚えていたのだが、こちらは徹底的に拒否。曰く「私には資格がない、そんな気がする」と。しかし、そんな記憶の混乱も立香があちら側の話をする中で回復。今では完全に思い出せており、管理局や魔法、次元世界の情報源として重宝している。いや、元々大変優秀な頭脳の持ち主なので、それとは関係なくカルデアのスタッフとして頼りにしているが。

とはいえ、これにも全く問題がないわけではない。

一つは、さつきから本人が激しく主張している通り、頑としてフェイトとの面会を拒絶していること。

もう一つは、彼女があちらでは相当に重い罪を犯していること。

まあ、前者はともかく後者はカルデアが彼女の素性を黙ってしまえばバレないので問題なし。

やはり、一番の問題は前者の方だろう。

「ですが、アリシアさんの気持ちもわかります。薬の作用なのか、肉体の若返りに伴い精神も外見相応になっていますし、記憶の方も思い出したといっても……」

「……実感がない、なんて言えるわけがないじゃない。私は散々あの子に酷いことをして、心無いことを言った。そんな私が、^{アレシア}いったいどの面下げて会えばいいってのよ」

そう、それが問題だ。一部サーヴァントにも見られることだが、肉体年齢以降に起こる出来事について知ってはいても、実感が伴わない。アリシアもまた、それと似たような状態にある。

フェイトに言ったことも、やったこともすべて覚えている。覚えてはいるが、それに対する現実感が薄い。自分の行いとわかってはいるため罪悪感はあるが、どちらかと言えばそれは「実感を持ってないことに対する罪悪感」だ。

「でも、大事なこと……思い出したんでしょ？」

「それは……」

「確かに、プレシアはアリシアに何もできなかったのかもしれない。でも、一つだけでも願いをかなえることができた。そのことを思い出した。もうあなたにとって、フェイトは人形じゃないんだろ」

「……………怖いよ。若返ったといっても、この体はちゃんと年を取る。いずれ、私はかつての私に追いつく日が来る。その時、私はまたあの子を……………」

傷つけるのではないか、それが怖いのだ。

「それに、今あの子は幸せなんでしょう？ 新しい…いえ、本物の母親の下で、優しい家族と、大切な友達に囲まれて…………私の存在は、それを乱す。ようやくつかんだあの子の幸せを、邪魔したくない。あの子に何一つ与えようとせず、逆に多くを奪った私だからこそ…………これ以上、奪いたくないのよ」

「アリシアさん…………」

確かに、理解できないわけではないわけではない。特に今のフェイトは、リンデイのことを「母」と呼びたいと思ひ、だがなかなか踏ん切りがつかずにいる微妙な時期。会うにしても、タイミングを計る必要があるだろう。

「まあ、とりあえず当分は秘密にするしかないんじゃないかな。アリシアのことは、慎重に扱うべきだろうし。」

というわけで、立香君もそのつもりで

「…………了解」

まさに不承不承といった様子でうなづく立香。納得していないのは明らかだが、流石に軽率な行動には出ないだろう。

「ですが、聞けば聞くほどすごいですね。サーヴァントの中には幼い姿の方もいるので、私たちが言えたことでもないかもしれませんが、十歳にもならない子どもが働くというのはどうなのでしょう？ そんなことをさせるくらいなら、管理外世界でしょうか？ そちらへの干渉をやめるべきなのは？」

「それができれば苦労はないでしょうね」

「まあ、実際そうしたくてもできないというのが実情だろうねえ」

「どうということでしょうか？」

「さあ？」

「なに。初歩的なことだよ、諸君。管理外世界へ伸ばす手を引けば、なるほど人手不足は大いに緩和され、優秀だからと子どもを現場に出さなければならぬ状況は改善される。おまけに内側に力を注げるようになる分、管理世界の治安の向上にもつながるだろう」

「いいことづくめのように聞こえますが……」

そう、一見するといいいことばかりだ。だが、世の中そんなうまい話があるわけないし、わかっていてやらないはずがない。

ならばどうしてやらないか。単純に、「やりたくてもできない」のだ。

「では、そうなった時管理外世界はどうなると思うかね、ミス・キリエライト」

「え……管理局が手を引く、だけではないのですか？」

「管理局が手を引くということは、治安を守る存在はいなくなるということだ。そうなれば……」

「犯罪者や違法研究者連中はこぞって管理外世界に出ていくでしょうね。私が言えたことじゃないけど」

「あ……」

「そっか……」

「その通り。それ即ち“犯罪の温床”という」

「やりたい放題好き放題できるとなれば、多少の不便も気にしないだろうしねえ」

「ええ、私でもそうするでしょう。研究者にとって、横やりの入らない環境は貴重ですから。多少の不便は許容しますよ」

「加えて、中には人が住んでいる世界もあるだろう。そこは当然彼らの食い物にされる。まあ、明るい未来を望むのは難しいだろうね」

外の世界だからとそれを無視するのも一つの選択ではあるだろうが、無責任の誹りは免れまい。何しろ、元凶となる犯罪者や違法研究者は、元は管理世界の住人なのだから。

「さらに、だ。そこで力をつけた連中が、最終的に管理局に戦争を仕掛ける……という可能性も否定はできない。」

つまり、管理外世界への手を引つ込めるということは、長期的に見れば巨大なリスクを負うことになるというわけさ」

「かといって、マシユが言ったように外に手を伸ばせば内側が手薄になる。内と外の両立を図ろうにも、現状ですら子どもを現場に出さなければならぬほどの人手不足。まあ、無理な話じゃないかなあ」

だからこそ、管理局は外へ外へと手を伸ばす。伸ばさざるを得ない。犯罪者や違法研究者がどこかの世界に拠点を設けないうちに把握するため、既に把握している世界で違法行為に及んでも迅速に対応できるように。

たとえばその結果、管理世界の治安維持が手薄になり、人手不足を補うために幼い子どもを使うことになったとしても。そうしない結果生じるリスクの巨大さに比べれば……。

「ちなみに、彼らが言うところの『質量兵器』とやらの導入も、安易に導入すればいいというものでもないと思っうね」

「同感だ。ある程度の訓練で誰にでも使える利便性、常に一定の効果を発揮する安定性は有効だろう。魔導という才能に依存する技術より優れた点が多い。だがそれは、裏返せば『誰にでも使ってしまう』ということでもある」

「公的機関が手を付ければ、いずれは一般にも流れるでしょうね。自然、犯罪もそちらの割合が増すでしょう。それに、いずれは大量破壊兵器の保持に至るのは目に見えていますし、そのままカタストロフを迎えるシナリオも十分にあり得ます。ええ、そのシナリオは実につまらない」

「彼らは歴史に学んだのさ。だからこそ、質量兵器とやらの導入に慎重になる。」

まあ、それとは別にアレが消費文明の申し子というものもあるだろう。一度手を付ければ、巨大な利権が絡むことになる。企業などからの干渉を抑えたいという思惑もありそうだ」

「目的のための手段の筈が、手段のために目的を作るようになりかねない……地球の戦争に経済活動の側面があるのと同じさ。それを恐れているんだらうねえ」

聞けば聞くほどに、現在の管理局の体制が熟慮の上で作り上げられたものであることがわかる。

確かに、すぐにでも状況を変え得る方法はあるが、それには大きなリスクを伴う。今の管理局の在り方は、リスクと現実をすり合わせた結果の苦肉の選択なのだ。

「……」

「さて、重い話はやめやめ。どうせ話したって好転しないなら、楽しい話をしよう」

「はい、というわけで、カットカット」

「ふむ、いまここで語ることはないな。私としては、新たな謎解きの機会に胸が躍るのだが……」

やっぱり、ロクデナシはどこまで行ってもロクデナシだった。事件や謎を歓迎するなというに……。

「そうね。実際どうなの、サブフェスやれそう？」

「うくん、カエサルが交渉してくれてるとはいえ、先立つものがないから」

「黄金律を持った方は召喚されていませんしね」

「場所だけじゃなくて、設備費とかその他諸々色々いるしなあ」

「最悪、場所さえあればあとは何とかなるよ。今回は主催がオジマンディアスだからね。いざとなれば、魔力送りまくって複合神殿を継続展開。そこを会場にすればいいし」

「まあ、あれで結構気前がいいからやってくれるだろうけど……」

たぶん、ニトクリスからは相当に文句を言われるだろうが。

とりあえず、まだ時間があるので資金稼ぎから進めて行くしかあるまい。

並行して管理局との交渉も進めて行かなければならないことを考えると、色々大変ではあるが。

まあそれも、人理焼却や濾過異聞史現象を巡る旅に比べれば軽いものだろう。

アルフの場合

オーツス！ 久しぶりだな、ヴィヴィオ〜！

——うん、アルフ久しぶり〜！

それで、今日はどうしたんだ？ 聞きたいことがあるって話だけ
ど。

——ごめんね、忙しいのに。実は……。

ほうほう、昔のフェイトと立香ねえ……って言っても、あんまり今と変わらないよ。立香が甘やかそうとして、フェイトが抵抗して、でもちよつと誘惑に負けて甘えて、そのままなし崩し……で、最終的にキャパオーバーして逃げる、これがワンセット。

強いて言えば、年々抵抗力が落ちてると、反比例してキャパが広がってることかね。昔だったら週一くらいで「もうムリーツ！」ってクールダウンしに行ってたのが、いまは少なくとも一ヶ月は持つ。フェイトも成長したもんだ。

——それ、成長って言うの？

言うぞ。少なくとも、フェイトにとっては立派な成長だ。

まあ、どちらかという素直に甘えられるようになったのが、かもしれないけど。なにしろなあ、昔はほんとに恥ずかしがって、遠回りというか、ややこしいというか……自分に言い訳しまくって、ようやくってパターンがほとんどだったんだぞ？

立香相手でもそれなんだから、お母さんたちだとなおさらだ。まあ、未だにお母さんたちにワガママやおねだりを言うのは苦手だけど……。

ああ、成長とえば、立香がフェイトを子ども扱いしなくなったあたりからだな、逆にフェイトが甘えさせようとするようにはなったのは。膝枕してやったり、添い寝してやったり……寝てばっかりなのが立香らしいけど。まあ、そうはいつても八・二くらいで逆転されるんだけどさ。

この辺りは、年季の違いかねえ。

——ふくん……でも、カルデアが浮上してすぐの時とかこじれた

りしなかったの？ 仕方なかったとはいえ、立香さん色々隠し事してたわけだし。

その点に関しちや、あたしならもアイツのと言えないしな。というか、隠し事っていうならあたしたちが先だし。

初めて会った時、何も教えずに閉じ込めたあたしたちをアイツは受け入れてくれた。なら……ってわけじゃないけど、フェイトもそうしたいって思ったんだ。

プレシアのことだってそう。あいつは、全部知った上でフェイトを見守ってくれた。本当に必要な時には手助けできるように準備だけはして、フェイトがフェイトらしくいられるように。

知れば知るほどさ、隠し事されてたことへの文句なんて消えていつちまったよ。

まあ、フェイトが自分の生まれのことを話した時の反応は、今思い返しても頭が痛いけど。

——それって、アリシアさんのクローンっていう話だよ。でも、立香さんはプレシアさんから聞いてたんでしょ？ なのに、何か変なこと言ったの？

言ったというか……聞かれたんだよ「寿命とか大丈夫？」ってね。

はあく……フェイトもそうだけどあたしも何言われたのか正直わからなかったよ。いや、質問の意味自体は単純だし、心配されるのもわかる。でも、先に言うこととか聞くことがあるだろ。

まったく、フェイトがどれだけ勇気を振り絞ったと思ってるんだか！

……どれだけ良い奴でも、生まれが普通じゃないってだけで距離を取られることはある。はつきりと偏見の目を向けられなくても、同情されたり哀れまれたりすることも少なくない。

フェイトはね、立香にはそんな目で見てほしくなかったんだ。今まで通り、ありのままの自分を見てほしかった。当然話すのは怖かったし、一度は隠そうとも思った……というか、あたしが勧めただけけど。

でも、アイツのことが大好きだったからこそ誠実でありたかった。だから勇気を振り絞ったってのに、返ってきたのは期待してたのとも

覚悟してたのとも違う、そういうの全部すつとばした先の質問だよ？
——あく、それは確かに……まずは安心させてあげべきだよ
ね。

そうだろ！ 呆気に取られながら、フェイトが辛うじて「え？ だ、大丈夫だと、思う。定期的に検査してもらってるし……」って答えたら、そのまま矢継ぎ早に「じゃ、食べちゃいけないものは？ しちゃいけないこととかある？ あと、他に気をつけなきゃいけないことは？」だよ。

で、一通り体質的な問題がないってわかったら「ああ、よかった」って一人で安心しやがるんだ。こっちはすっかり置いてきぼりさ。

流石にフェイトも、これには文句を言ってる。「他にあるでしょ！ 私、普通じゃないんだよ！」って。

——立香さんは、なんて？

あつげらんかんとした顔で「ん、そうはいつでもサーヴァントには割とそういう人いるからねえ。というか、そもそも人間じゃないものもいるんだから、いまさらというかなんというか……」だと。

……アイツにしてみれば、フェイトの生まれも個性の一つだったってことさ。だから特に驚いたりはしないし、励ましたり安心させたりするよりも、周りの人間として気をつけなきゃいけないことの確認を優先した。それは興味が無いからじゃなくて、フェイトのことを大事に思ってくれてたからこそなんだけどさ。

——でも、そのあたりはプレシアさんに聞いてたんじゃやないの？
フェイトがアリシアとは違うってわかった段階で、アイツはフェイトと距離を置いてたからね。それに、時間が経ってから判明することもあるかもしれない。だから、改めてちゃんと確認する必要があると思っただら。

まあ、気持ちはわかるんだ。マシユは生まれのこともあつて寿命が短かったわけだし、アイツがイの一番にその辺のことを確認したのは、ある意味当然のことなんだろうさ。

でもねえ、そんな事情あたしらは全然知らないわけだ！

——認識の齟齬からくるすれ違い、かあ。

まあ、結局立香は立香のまんまだったってことさ。それに安心して泣き出したフェイトをアイツが抱き留めて、ますます泣いちゃったんだっけねえ。

——それだけ、嬉しかったんだね。

信じてはいたけど、やっぱり不安は拭えないもんだからね。

そのあとはマシユとかフランとかを紹介してくれてさ。ってか、イリヤとかも割と似たような出自だし……そこであたしもようやく合点がいったよ。立香が何で最初にあんなことを聞いて、最初のステツプをすっ飛ばしちゃったのか。

アイツからしてみれば、普通じゃない生まれ方をした奴を受け入れるかどうかなんて、当の昔に答えが出てたんだよね。

——そっかあ……とところで、フランとはその時から？

色々と同じ合うもんがあったんだろうね。フランは会う度にフェイトを膝にのせて頭を撫でてくれたもんさ。よくボサボサになってたけど、嬉しそうにはにかんでたよ。

実際、フェイトもフランの言ってることはすぐにわかるようになったみたいだし、能力も含めて相性が良かったんだろうね。フランも電気変換みたいなことできるしさ。

ああ……それを見て、マシユがうらやましそうしてたっけ。

別に仲が悪かったわけじゃないんだけど、立香のことがあってギクシヤクしてたからなあ。マシユの方はそうでもなかったみたいだけど……フェイトが緊張気味だったというか。

——今の二人からはちよつと想像できないなあ。

色々あったからねえ。

マシユは守ることに特化してて、正真正銘立香のパートナーだった。フェイトはそれがすっごく羨ましかったんだよ。そのうえ年齢的にも釣り合ってるし、美人でスタイルもいいと来たもんだ。今ならフェイトも負けてないけど、流石に子どもの頃はねえ……。

だけど、生い立ちのこともあって他人の気がしないのはフェイトも同じだった。立香を支えられるようになって意味では、目標ですらあったわけだ。元々相性自体は悪くなかったから、時間はかかっ

たけど打ち解けてからはすぐに今みたいな感じになってたよ。

——相性っていうと、ママはフランのこと少し苦手そうにしてるよね。あれ、なんでなの？

別に性格が合わないとかじゃないんだけど……能力的にね。フランはそこにいるだけで周囲の余剰魔力を吸い上げちまう。だから、アイツがいるってだけで収束魔法ブレイカーが使えなくなるんだよ。

なのはからすれば、問答無用で切り札を封じられちまうわけだから、苦手意識を持つちまうのも無理はないんじゃないかねえ。

まあ、"アレ"に比べればかわいいもんさ。なのは、アイツのことは心底苦手だから。

——ああ、あの人はねえ……。

同じバーサーカーでも、随分違うもんさ。フランは話すのが苦手だけど、結構交友範囲広いし。

——確か、エリオの他にナカジマ家のみんなとも仲がいいよね。フランからしてみれば、弟妹ができたような感覚だったのかもね。戦闘機人なんて、特にだろうさ。まあ、その中でもフェイトへの思い入れは特に強みたいだけど。

——今でも、久しぶりに会うと抱き上げてグルグル回ってるもんね。

実は、しばらくプレシアにはあたりがきつかったらしいよ。

——ああ……それは、仕方がないのかなあ。

あたしも、アイツがフェイトにやったことを赦したわけじゃない。ただ、今のアイツにそれを言っても仕方がないとは思ってるけどさ……いや、思えるようになった、かな。

——そういえばエリオで思い出したけど、エリオとキャロがカルデアでニアミスしてたってホントなの？

うん、ホントだよ。先にキャロがカルデアでしばらく厄介になって、保護隊に行ったのとはぼ入れ替わりでエリオが来たんだ。

——なんでまた……。

別に狙ったわけじゃないんだけどねえ。タイミングについては、ホントに偶々。

キヤロは召喚士だけど、制御に関しては問題を抱えてた。これが普通の召喚なら管理局のカリキュラムでもなんとかなったんだろうけど、なにしろものが「竜」だからね。局には適切な指導をできる奴がそもそもいなかったんだ。

大きな力を持つていながら、それを制御できない。だから、当時のキヤロはいろんな部署をたらいまわしにされた。そこをフェイトが引き取ったわけだね。

とはいえ、それだけじゃ問題の根本的な解決にはならない。

だけど、カルデアにはドラゴンライダーが何騎かいる。そこで、フェイトが立香に頼んで……

——それでマルタさんのところに？

そういうこと。正確にはフェイトが相談して、立香がマルタを紹介したんだけどね。

能力もそうだし、マルタには妹がいたからよく面倒見てくれるはずだって。実際、その見立ては正しかったと思うよ。キヤロ、フェイトの次くらいにマルタのこと慕ってるし……でもまさか、その結果あんなとは思わなかったけど。

——……ああ、召喚関連だけじゃなくて……

そう、勢い余って「48の聖人技」とか「ヤコブの手足」とかまで手解きされちゃったわけ。その上、竜つながりでケツアル・コアトルまで「私も混ぜるデース」とか言って首突っ込んでくるし……「52の喧嘩殺法」まで仕込まれなかったのが、せめてもの救いかねえ。

あんまり適性はないはずだけど、いまでもそんじよそこらの連中に後れを取ったりはしないだろうし。

——ルールーが言ってたよ。召喚士なのにステゴロの殴り合いとか……って。

そういやアイツ、初めて会った時に盛大にぶん殴られたんだっけ……同情するよ、割とマジで。

それはともかく、マルタたちのところで鍛えられて、色々ものになって来たところでキヤロは保護隊にいったわけだ。

エリオがフェイトを説得して管理局に入ることが決まったのが、ほ

ぼ同じ頃。フェイトは心配症だからね。怪我しないように、ちゃんと元気に帰ってこられるように……っていろいろ注文を付けたんだけど、それにこたえらるとなれば当然指導の専門家に任せるのが一番だ。とはいえ、スカサハのところじゃ命が危ないし、孔明は専門外。消去法で残ったのがケイローンってわけさ。

フェイトも、ケイローンなら大丈夫……と思ったんだけどねえ。同門ってことでアキレウスが参加してきたのはまだいい。だけど、なぜかクー・フリーンが絡んできたあたりから怪しくなってきたわけだ。

——たしか、李老師と胤舜さんにも習ったんだよね。

そう、「東の槍が西の槍に劣ると思われては困る」とか言って……。単体なら割と無害なんだけど、張り合う形でどんだんエスカレートしていったねえ。結果、古今東西の槍術ごった煮状態の出来上がりだ。拳句の果てに、どこから聞きつけたのかスカサハが乱入してきて、例の「できなければお前の命を貰うまで」になったわけさ。キャロの時でも頭を抱えたけど、これにはフェイトも卒倒しかけたよ。

——結局、一番危ない人が出てきちやっただもんねえ……。

立香は立香で「やつぱりなあ」とか呑気なこと言ってるし……予想してたんなら止めろよ!!

——え、予想してたのに放置したの？

正確には、「絶対何か起こる」と思ってたんだと。フェイトもそれに英霊って連中と関わってきたから、「予想通りに行くわけがない」ってことくらい理解してると思ってたらしいんだ。

だから、エリオを預けたって聞いた時は「思い切ったことするなあ」って感心してたらしい。

——フェイトさんにそんな度胸、あるわけないのに……。

流星にフェイトも怒ってねえ、しばらく口をきいてやらなかったんだ。

——え、フェイトさんにそんなことできるの!? 寂しくて死んじゃわない？

うん、実際本人もダメージ食らってた……というか、フェイトの方がダメージデカかった気がするなあ。船に乗ってる時は「仕事」ってことでけじめをつけて我慢できるんだけど、自分から距離を取るなんて一度しかしたことないし。よく耐えたもんだよ、いやマジで。

マシユもフェイトに加勢したもんだから、立香は立つ瀬なし。それで、フェイトのことを拝み倒してたのには笑ったもんさ。

ついでに、ケイローンも監督不行き届きだったって一緒に謝ってたよ。なのはもとりなして、ようやく矛を収めたんだけどさ。

フェイトもいい加減限界だったし、見かねたつてのがあったんだろうけど。

——フェイトさんのことがあったのはわかるけど、ママって先生とも仲いいよね。

もちろん、ケイローンが頭下げてるつても無関係じゃないさ。

一指導者として尊敬してるみたいだからな。実際、昔は教導について良く相談してたみたいだよ。

——今だと、教育論みたいなのを討論してることが多い気がするなあ。

大賢者様相手に討論とは……なのはも、教導官として一人前になつたつてことかねえ。

そーいや、今年はスカサハとかと公開討論会でもやるか、みたいなことを言ってたような……絶対、最後は乱闘になる気がするんだけどなあ。

——それつてもしかして今年のサバフェスの話!? ねえねえ、会場つてもう決まった? 八神司令にこの前会った時、お仕事で行けそうにないから、アンデルセンの新作だけでも……つて頼まれてるんだけど。

……言つとくけどあのガキ、見てくれはあんなだけ地球じゃ超有名人だからな。地球じゃ流せないけど、アイツの新作なんて世に出たらどれだけの金が動くことか……つて今更か。アリサたちも毎年参加してるし、お母さんもちやつかりいろいろ仕入れてるもんなあ。

——カルデア、色々な人がいるもんね。騎士カリムも紫式部の

ファンだし……。

ホント、どうするんだろうな。趣味で個人所有する分には問題ないけど、文化的にはとんでもない損失だぞ。

かといって、世に出せば混乱必至。どうやっても騒動と無縁ではいられないんだから、クロの奴が「絶対苦勞する」ってフェイトに忠告した気持ちがよくわかるよ。

* * * * *

7月も半ばを過ぎ、季節は夏真っ盛り。世の学生たちも夏休みに突入したが、某妖怪たちと同じで学校も試験もない身のイリヤたちには関係のない話……というわけでもない。

彼女たち自身には関係なくとも、最近できた友人たちは日々勉強に勤しむ小学生。夏休みになれば、当然時間の空きが増す。その分なのはたちは訓練や研修、任務が入ることも多くなるが、それでも普段よりは遊びに行く機会は増える。

まあ、イリヤたちも無事カルデアと合流を果たしたことで以前ほど暇ではなくなったが、今のところ誰もトラブルを起こしていないこともあり、カルデアも開店休業状態。長年にわたり立香がフェイトたちと縁を深め、そこへイリヤたちが加わったことで、この世界に浮上してからというものかつてないほどカルデアの存在は安定している。あるいは、この地^{セカイ}に腰を落着けることもできるかもしれないほどに。

となると、カルデアとしても時空管理局と無関係ではいられない。カルデアの運営に直接かわることのない末端職員やサーヴァントたちは久しぶりの休暇を満喫しているものの、三人の「顧問」を中心とした運営に携わる者たちは日々管理局との折衝中。なんらかの「協定」が結ばれるまでの間は、敵ではないが味方というわけでもないため、カルデアは一応管理局の監視を受けていた。

まあ、イリヤたちが信用を勝ち取り、カエサルが下地を整えておいたおかげで、通常からは考えられないほどスムーズに話は進んでい

る。近いうちに協定は結ばれ、監視も解かれることになるだろう。

今後長い付き合いになる可能性も高いため、管理局にはカルデアに対する良い印象を深めてもらうに越したことはない。というわけで、管理局関係者と良好な関係を築いているイリヤたちには、カルデアから正式に指令が下された、いや、指令と言ってもそう堅苦しいものではない。ただ、形式としてそういう形をとっているというだけだ。

で、その指令というのが元も子もないことを言ってしまうと「なのはたちともっと仲良くなりなさい」ということだ。

そんなわけで大義名分を得たイリヤたちは、早速なのはたちに誘われて遊びに出かけることに。目的地は完成間近のテーマパーク「オーluston・シー」、夏休みの自由研究課題の取材を兼ねて内覧会に参加させてもらえることになったのだ。

ただ、本来ならなのはたちにイリヤたちを含めた子どもたちと、その保護者だけで行く予定だったのだが……

「そっか。じゃ立香さんも来れるんだ」

両組織の交流の名目で相変わらずハラオウン家に居候：ならぬホームステイしているイリヤの報告に、なのはが後部座席に身を乗り出すようにして食いつく。

「うん、昨日までバタバタしてたから現地集合になっちゃったけど」

「よかったあ。でも急なお誘いだったから、迷惑じゃなかったかな？」

「大丈夫じゃない？ あんまりそういうの気にしない人だし」

「うん。むしろ、忙しかったからこそちょうどいい気晴らしになる」

本来は定員8名ほどの車だが、同乗者の大半が子どもということであつた。少々無理をして、運転席と助手席を除けばくつつくようにして座りながらおしゃべりに花を咲かせる。

だがそんな中、密かにほっと息をつく少女が一人。

「よかったわね、フェイト。立香さん、来てくれるって」

「う、うん……」

「散々迷って悩んで、それでも勇気を出してよかったでしょ？」

「そう、かな。無理させちゃったんじゃないかって思うと複雑だけど……」

(まったくこの子は……優しいっていうのも考え物よね。せつかく自覚したってのに……)

立香が昏睡しもう目を覚まさないのではないか、その温もりが永遠に失われてしまうのではないかという現実には直面したあの日、フェイトは自身の胸に宿った感情を明確に意識し、それに一つの名前を付けた。

以来、顔を見るだけで照れてしまつてろくに目も合わせられないフェイトだったが、幸いというべきかなんというべきか、急に忙しくなつた立香は彼方此方駆けずり回り会う機会はめつきり減つた。

初めは少し安堵していたフェイトだが、心が落ち着けばすぐに寂しさが募りだす。そんなフェイトを見かねて、アリサが提案したのだ。オールストン・シーの内覧会、棹に一つ空きがあるが立香を誘つてみてはどうか、と。

「でもアリサ、どうして急に棹が一つ空いたりしたの？」

「あ、それは……」

困つたように頬を掻きながら窓の外に視線をやるアリサ。フェイトは不思議そうに首を傾げ、隣の席のすずかは微笑ましそうに見つめるばかり。そこへ、クロエが何やら意味深な表情を浮かべながら助け舟を出した。

「フェイト、それを聞くのは野暮つてもものよ」

「どういうこと？」

「自分の胸にでも聞いてみなさいな」

「? ? ? ? ?」

言われたとおりに手を当ててみるが、やはりさっぱりわからない。

「と、とにかく! 久しぶりに会うんだから、今日は思いつきり楽しみなさい! いいわね!!」

「う、うん! それはもちろん、みんなと一緒になんだから楽しいに決まってるよ!」

「そういう意味じゃないっての! あーもう! この子は本当に……」

「まあまあ、アリサちゃん」

「アリサちゃん、どうしたのかな？」

宥めるすずかと妙なところで鈍感力を発揮するなのは。

そんななのは、イリヤと美遊がちよつと残念なものを見る目を向けていた。

「……ユーノ君も苦労するなあ」

「うん。むしろ、こっちの方が重症」

「我が子ながら、この子はもう……」

「ふえ？　なんでお母さんまで呆れてるの？」

「なのはさんは、もう少しそっちのお勉強もした方がいいかもしれないわねえ」

他人のことでこれなのだから、自分が当事者になったらどれだけ察しが悪くなるのやら。

「だけど、フェイトがマスターをね……一応言っておくけど、よく考えた方が良くわよ。絶対苦労するから」

「あう……」

「え？　でも、立香さんは良い人だと思うけど」

「もしかしてアレ？　誰にでも優しくして、〃みんな好き〃とか言っちゃうタイプとか？」

クロエの忠告に、反射的に赤面したフェイトに代わりすずかとアリスが反応する。

二人のコメントはそれぞれ間違っているわけではないが、いまクロエが言っているのはそこではない。

「あく、若干そういうところはないでもないけど……」

「どちらかというと、マスターの周囲が問題。ただ、こればかりは実際に体験してみないと実感がわかないかも」

「……言葉って、こういう時無力だよねえ」

「まあ、これからもマスターと付き合っていくなら、遅かれ早かれわかることよ」

「この前はちよつと関わったただけだったし、カルデアが来てからは忙しくてそもそも接点なかったからね」

「まあ、覚悟だけはしておくといいと思う。振り回されたり、巻き込ま

れたりする覚悟を」

「……なんか、微妙に不穏なこと言うわね」

とはいえ、実際そうとしか言いようがないのである。語り部として人理に名を刻んだ英霊ならばあるいは、彼らの出鱈目ぶりを正しく伝えることもできるのかもしれないが……イリヤたちの語彙力と表現力では、無理な話だ。

それに、フェイトはなんだかんだで物分かりがいいとは言えないところがあるので、「諦めた方が良い」といわれて「はい、そうですか」とはならないだろう。それもわかつているから、「覚悟しておけ」としか言えないのだ。

色々気になることはあるが、イリヤたちにも守秘義務があるのでカレデアの詳細は語りたくても語れない。そのあたりはなのはたちも理解しているので、話題を変えるついでに先に貰っていたパンフレットを開く。カラフルに彩られた紙面を目で追い、どの順路で見っていくか楽しそうに確認していく。そうしておしゃべりに興じていれば、移動時間などあつという間だ。

気付けば、車はオールストン・シーへと続く一本道の上。今回、はやてが仕事の都合で夜まで合流できないことを惜しみつつ、間もなく車は駐車場へと入っていく。そして、そこにはすでにアリサの両親とすずかの母の姿があつた。

「おはようございませす」

リンデイの挨拶を皮切りに、次々に車から降りてくる子どもたち。それぞれ挨拶を口にするが、あつという間に母親同士での姦しいやり取りが始まる。

「もう、お母さんってば……」

「仕方ないよ。みんな忙しくて、なかなか会えないんだし」

「そういえばパパ、立香さんは？」

「ああ、彼なら……ほらそこに」

「あ、立……香……っ！」

少し離れたところで褐色の肌の偉丈夫と話し込んでいた立香へと視線を向けた瞬間、フェイトの呼吸が止まる。

「どうしたの……って、ああ」

「あれ、珍しい。マスターさんが眼鏡かけてる」

そう、今日の立香はカルデアのエンブレム入りのシャツの上からパーカーを羽織り、デニムのパンツをはいたラフな格好なのだが、アクセントとして眼鏡をかけている。

「立香さんって、目悪かったっけ？」

（あれって、確かシグルド謹製のじゃなかった？）

（うん。度は入ってないけど、原初のルーンで色々な機能を盛り込んだ奴だよ）

（眼精疲労の回復と集中力の増進効果もあったはず。マスター、実はかなり疲れてるのかも）

「フェイトちゃん？ おくい、フェイトちゃん」

「……………」

「ダメね。完全にフリーズしてるわ」

初めて見た見た眼鏡姿の衝撃は、なかなか大きかったらしい。

「そらマスター、あまり待たせるものではないぞ」

「わかってるよ。みんな、おはよう。元気そうで何より」

『おはようございまーす！』

「フェイトも、今日は誘ってくれてありがとう」

「……………」

「ほら、フェイト」

「ひゃっ!? あ、うん、忙しいのに来てくれて、こちらこそありがとう」

「あ、そのバッグなのはと色違いなんだ」

「う、うん！ そうなんだ！ この前二人でお買い物に行った時に

……立香も、その…眼鏡、似合ってる」

「そうかな？ かけられないから、どうにも違和感があるんだけど……」

眼鏡の位置を直すのが、どうにもしっくりこない様子の立香。ただ、フェイトは相変わらず…というか、眼鏡の効果もあっていつも以上に立香を直視できず目が泳ぐ。当然、頬を赤く染めながら。

そんなフェイトの様子に、立香は先日電話で内覧会に誘われた日の夜のことを思い出していた。電話口で受けた時はまだ予定がはつきりしない部分もあったため返事を保留したが、実を言えば当初は断るつもりだった。

理由は簡単だ、フェイトが自分に向ける感情がはつきりと形を得たことに気付いていたからである。

自意識過剰や勘違いなどであればよかったのだが、残念ながら立香は感情の機微というものに聡い。というか、聡くならざるを得なかった。なにしろ、ただでさえ曲者揃いのサーヴァントたち。なかでも、特に気難しい連中を相手にしていく上では、この能力の向上は必須だった。

だからこそわかってしまう。フェイトが自信に向ける感情がどういうもので、彼女の本気の度合いが。

(いい子だとは思っただけど、さすがに十歳の子どもはなあ……)

というのが、嘘偽らざる立香の本音だ。

恋に恋する年頃とか、年上への憧れとか、甘えさせようとしてきたこととか、その辺がいろいろ化学反応を起こした結果なのだろうとは思う。一過性の「子どもの恋」と切って捨てることは簡単だが、当人にとっては重大事。不誠実な対応をしていいものではない。

(傷つけない、なんてのは論外。傷つけることを前提として、どうやってそれを最小限にとどめるかを考えるべきなんだろうけど……)

現状、できることなんてなーんにもない。

そもそも、別に告白されたとかそういうことではないのだ。立香が早々に気付いてしまっているので、さてどうしたものかと考えているだけに過ぎない。

フェイトの方からアクションがあれば対応できるが、まさか何もしていないのに「君の思いにはこたえられない」もないだろう。

とりあえず、予定がはつきりしないこともあるし、断るのがベターだろうと考える。これ以上距離が近づくのは、お互いのためにならないだろうと思えばこそだ。

あるいは、せつかくの機会なのでテーマパークなどに行ったことの

ほとんどないマシユに譲るか、子ども好きのアタランテにでも……と
考えたところで、背筋に悪寒が走った。

反射的に右手を向くと、そこには底知れない闇を宿した目を向ける
プレシア。

「立香。わかってると思うけど、フェイトは凄く勇気を振り絞ってあ
なたを誘ったと思う。そんなあの子の気持ちを無碍にするようなら
……焦がすわよ」

「……………わかりました」

がつくりうなだれて、立香は白旗をあげた。同時に、これは何が何
でも予定を開けなければ命が危ないとも悟る。

そんなに気にかけるのなら、早くと会ってやればいいのにとぼやき
ながら。

それから立香は、カルデア職員としてというよりもマスターとして
の役目である、サーヴァントたちの福利厚生充実活動にそれまで以上
に励むことに。前日まで寝る間を惜しんで走り回り、なんとか今日と
いう「空白」を捻出することに成功したわけだ。

はにかみながら喜んでくれるフェイトを見れば、頑張った甲斐は
あったと思う。立香としても、どうせなら傷つけるよりは喜んでほし
いし、フェイトには幸せであってほしい。ただ、また一層フェイトの
気持ちに区切りをつけることが難しくなったことには、内心頭を抱え
ているが。

「さて、ではマスター。私はもう行くぞ」

「うん、ありがと」

「あ、あの、アーチャーさん……」

「……イリヤスフィール、それにクロエと美遊。名目上はマスターの
護衛ではあるが、気にせず楽しんでくるといい。そのために、わざわざ
試作品の礼装まで引っ張ってきたわけだしな」

と言っても、別にいつものように立香の服が礼装というわけではな
い。今回礼装に該当しているのは、腕時計やネックレスといった小物
だ。

プレシアが記憶を取り戻したところからデバイスやバリアジャケット

トの技術・理論をもとに開発を進めていた品で、ようやく試作品ができたのでちようどいいとばかりに実地データを取得するために持ち出したわけである。

また、今回イリヤたちが立香の護衛役ということで、他のサーバーヴァントは派遣されていない。

まだ管理局との協定が結ばれていないデリケートな時期に、余計なことはしたくなかったからだ。霊体化していても、管理局の管轄ではないとしても、霊体化して不法侵入……というのは心証が悪い。幸い、カルデアが浮上してからは暴走体騒動も終息に向かい、今ではすっかり落ち着いたものだ。

そういう事情もあり、今回の護衛役は同伴者であるイリヤたちに任されたのである。まあそれも、エミヤの言う通り名目上のものでしかないのだが。

「は、はい……」

「……では、これで失礼する」

躊躇いがちにうなづくイリヤに対し、少々バツが悪そうな表情を浮かべながらも、送迎用の車に乗り込むエミヤ。

そんな彼の後姿を見送りながら、アリサが小声でクロエに話しかける。

（あの人もサーバーヴァントなの？　どこの英雄？　肌の色とかからすると、中東とか？）

（ある意味、アリサもよく知ってる人よ）

（あの人は、クロの力の源泉。つまり……）

（えっ!?　じゃあ、あの人が士郎さんの未来なの!）

（正確には、未来の可能性。それも、たぶんもうたどり着くことのない）

（いやいやいや！　全然似てないじゃない!）

（パツと見た感じだと似てないけど、髪を下ろして表情を緩めてやれば案外そうでもないわよ）

（そうかしら？）

（そうかなあ……）

どうしてもイメージが重ならないらしく、いぶかしそうに首をかしげるアリサ。すずかも同意見らしい。

「まあ、念のためはやてには忠告しておきましょうか。士郎さんのこと、しっかりと捕まえておけて」

「そう、だね。その方が良い気がする」

実際、「可愛い子ならだれでも好き」とか言っちゃう口なので、十分注意すべきだろう。あるいは、今のうちにしっかりと教育するとか。

「立香さん、昨日まで忙しかったんですよね。ご飯とか大丈夫なんですか?」

「ああ、そこはエミヤがいてくれたからね」

「あの人が?」

「八神家の方の士郎と同じで、エミヤも家事全般なんでもござれだから」

「厨房の主、総料理長、カルデアのメシ使いとはあの人のことよ」

なのはの問いへの回答で、ようやく少しは信憑性を感じられたらしい。家事全般が得意、というあたりで納得するというのが、何とも彼らしい話だが。

「総料理長ってことは、他にも料理する人っているの?」

「サーヴァントは食事を必要とはしないけど、生前は普通に食べたわけよ。だから、その頃の感覚で食堂を利用するサーヴァントは多いわね」

「アーチャーさんが総料理長なのは、あの人が一番レパートリーが豊富だからかな。パールさんがアシスタントで、西洋系の料理長がブーデイカさん、東洋系はキャット。あと、紅閻魔ちゃんが顧問。これがいつもの厨房のメンバーで……」

「都度、料理が出来て暇な英霊が手伝いに入る感じ」

『ふくん……』

正直、厨房組のサーヴァントたちに関して言えば口頭で名前を言われてもさっぱりわからない。なので、後日改めてちゃんと確認しようと思うのであった。

「まあ、エミヤも言ってた通り、護衛とかのことは気にせず楽しもう」

「ま、早々荒事なんて起こるもんじゃありませんよ、カルデアじゃありませんし」

「そうだねえ。せっかくのテーマパークだし、今日は思いっきり楽しんでおー！」

(なんだろう、なんだか妙なフラグが立った気がする……)

ことさらに危険のなさを再確認するカルデア組。ただし、美遊はそこに不穏なものを感じ取っているようだし、なのはたちも「カルデアじゃあるまいし」というあたりに首をかしげている。なにしろ、それだとカルデアでは荒事が日常茶飯事と言っているようなものなのだから、当然の反応だろう。

まあ、実際にその通りなわけだが。

その間に保護者たちもひと段落ついたようで、さっそくゲートへと向かって進み始め……ようとしたところで、立香が違和感に気付いた。

「フェイト」

「えっ！ な、なに？」

「もしかして、怪我してる？」

立香の問いに、ちよっとうつぶき気味にもじもじし始めるフェイト。答えとしては、それで十分だった。

「朝練やってるんでしょ、その時？」

「う、うん……」

答えながら、実はこっさり立香の視界に映らないよう身体の影に隠していた左の肘を見せる。

そこには、よく見なければ気付かないほどうつすらと擦り傷が残っていた。立香も、フェイトが隠そうとしなければ気付かなかっただであらう程、それは目立たない傷。

(怪我自体は軽いし、放っておいてもすぐ治るだろうけど……)

「……んっ」

「あ、ごめん」

「だ、大丈夫、だから……」

立香の指先が擦り傷に微かに触れた瞬間、フェイトの口からわずか

に声が漏れる。怪我をしたところは敏感になるもの。軽傷だからと、触れてしまったのは軽率だったと反省する。同居していた時には手当も良くしていたので、こうして至近距離で傷の具合を確認したりすることに双方疑問はないらしい。

ただし、当のフェイトは立香の手が離れたことに若干名残惜しそうにしているが。

「……まあ、せつかくだし」

「立香？」

疑問符を浮かべるフェイトを他所に、試作品の礼装に魔力を流し術式を起動。即座に治療系の魔術が発動し、かすかに残っていた傷跡が完全に消える。

あまり褒められたことではないが、せつかく可愛らしく着飾っているのだ。加えて、今日は全力全開で楽しむのが正義な一日。この程度の傷でそれにケチがつくわけでもないが、ないに越したことはない。幸い、一般開放されているわけでもないので、駐車場はガラガラ、当然周囲に人はいない。

「これ……」

「内緒だよ」

立香のささやき声に、フェイトの顔が上気する。そんな反応を傍で見ていた面々はというところ……

「わぎとね」

「わぎと、かな」

「フェイトちゃん、甘え下手にもほどがあるよ」

「うん、まどろっこしい」

「でも、甘えられるだけ進歩したらしいし、良いんじゃない別に」

そう、あの傷は残っていたのではなく「敢えて残した」のだ。

面と向かって甘えるのはやっぱり恥ずかしくて、申し訳なくて……だから、口実になればと。わぎわぎ身体で隠したのも、そうすれば立香なら気付いてくれると密かに期待していたから。

ただし、そんな皆のやり取りにまったくついていけない少女が一人。

「? どういうこと?」

先ほどまでより、なお一層濃い呆れの視線がなのはに集中する。

「ダメだなあ、この子は」と、皆の心の声の一つになった瞬間だった。

「……ごめんね。私、いつも立香に手間をかけさせてばかりで」

「これくらい、大した手間でもないよ」

「でも、今日のことだって、迷惑だったんじゃ……」

「……まったく。いいかい、迷惑っていうのは例えば『人をいきなり豚に変える』とか、『何かにつけて全裸になる奴』とか、『渡すお菓子に一服盛る』とか、そういうのをいうんだよ?」

「ねえ、立香。それも、迷惑とかって問題じゃないんじや……」

この瞬間、なのはたちの心の声の一つになった「迷惑のハードル高っ!?!」と。

「ちよつと、カルデアの風紀とか規律ってどうなってるのよ」

「規律は圧政」

「風紀? 何それ美味しいの?」

「つていうのが山ほどいる魔窟、それがカルデアよ」

ないわけではないが、あってもあんまり意味をなさない（諦観）。

そもそも、常識や既成概念といったものを粉碎して突き進んだ結果至るのが英霊の座（極論）。

英霊の影法師たるサーヴァントを縛るには、あまりにも頼りない言葉だ（力説）。

まだ輪ゴムの方がなんぼかマシだろう（確信）。

守ってくれるに越したことはないが、守られて当たり前と思っただけいけない。むしろ、積極的にそう言ったものを壊したり、裏をかい取りしたがるアウトローやへそ曲がりも多い。

中々一括りに語れる存在ではないが、確実に言えることが一つある。それは、どいつもこいつも「自分ルールに忠実な連中」ばかりなのである。そんなのが百人単位で集まれば……收拾がつくわけないのだ。むしろ、未だに空中分解していかないのが奇跡なのだから。そして、その奇跡の要となつたのが……

（ま、それこそ言葉で言っただけのものでもないしね）

きつと、直接肌で感じなければわからない。それが一体、どれほど得難い奇跡なのか。

まあ、なのはたちがそれを知る日は……案外遠くないかもしれないが。

「なあ立香君。頼まれた通りの場所を斡旋はしたが、本当にあそこでよかったのか？ 自然豊かな場所と言えば、それはそれで間違っではないが……」

「どうかしたの、パパ？」

「いやな、彼に聞かれたんだ。とにかく広くて人の少ない、できれば涼しくて景色のいい場所はないかって。なんで、いくつか紹介したんだが……」

立香が選んだのは、その中でも最も広い北海道の釧路平野の一角だった。なんでも、畑や牧草地が少なく、夏には海霧が発生するという点も含めて都合がいいらしい。選考基準が意味不明すぎる。

「いや、以前ハワイでやった時は暑さでやられちゃう人もいたんで、今回は避暑の方向で行ってみようかなあと。霧が出るってことは、霧が出て不思議に思われなくていいことでもありますし、いろいろ隠すにはうってつけなんですよ」

「……なあ、それは本当に大丈夫なのか？ カルデアの催し物、という話だが」

「二応、内容自体は平和なものですよ。『期間中はロクに戦わない』っていうのが参加条件でもありますし。ただまあ、念のため用意だけはしておこうかなあと。ハワイをはじめ、いつも何か起こるし（ほそつ）」

「立香、何か言った？」

「いや、なにも。誦い文句は『サーヴァントの、サーヴァントによる、サーヴァントのための夏の祭典。サーヴァント・サマー・フェスティバル、ここに開幕!!』。あ、長いから通称『サバフェス』ね」

「えつと、具体的にはどんなことをするんですか？」

「割と手広く色々やるよ。普通に会場近辺の観光とか行楽だったり、宿泊施設や飲食店の経営なんかをする人もいるし。とはいえ、やつぱ

りメインはアレかな」

「アレ？」

「いわゆる、同人誌なんかを作って交流する感じ」

「どうじん…し？」

昨今はずいぶん一般にもその固有名詞も普及し、市民権を獲得してきてはいるものの…縁のない人たちからすれば、やはりちよつと腰が引けるものがあるのだろう。実際、聞いたはずかをはじめ、みんな微妙な顔をしている。

まあ、年齢制限のある頒布物の発行は禁止されているので、少なくともいかがわしいイベントでないのは確かなのだが…やはりここは、理解を得るために一番手っ取り早い方法を選ぶよりほかあるまい。

「ちなみに最大手というか、スター的なのがシェイクスピアとアンデルセンの『童話が大人』」

「ちよつと待って！　今なんて言ったの!？」

「シェイクスピアって、あのシェイクスピアですか？　ハムレットとカリア王、ロミオとジュリエットの？」

「アンデルセンって、童話作家さんだよな？　そんな人たちまでサーヴァントに？」

「作家系…というか、文化人系のサーヴァントは結構いる。他にも、作家ならアレクサンドル・デュマに紫式部、音楽家ならモーツァルトとサリエリ、画家の北斎」

「この辺の人たちは、毎回すごい列ができてるもんねえ…」

「しかも、今のご時世『表現の自由』があるからねえ。昔は規制やらなんやらでできなかつたことも、今なら思う存分やれるってわけ。北斎なんてもろね。古今東西の画法を嬉々として学んでるし、たぶん…というか間違いない生前よりクオリティ上がってるわよ」

「そんなわけで、サブフェスのお約束の一つに『購入した品は個人で楽しみましょう』っていうのがありまして…」

「万が一にも市場に出たら、下手すると大混乱を招く」

面白そうな話をしてるなあ…と聞き耳を立てていた母親チーム

も含めて全員が思った「そりやそうだ」と。

「だから、今回から入場はチケット制になったんだけど、色々お世話になってますし良ければ手配しますが……」

「ください！ ぜひー！」

「わ、私も！ みにくいアヒルの子とか、人魚姫が大好きで……」

「す、すごい食いつき……」

「にやははは……アリサちゃんたち、バイオリンのお稽古とかしてるから」

「そういえば、すずかもはやてと同じで読書家だもんね」

あまり芸術方面には明るくないが、なのはは歌に関してはちよつと耳が肥えているので、興味がなわけではない。異世界出身のフェイトも音楽室でモーツアルトの肖像画くらいは見たことがあるし、なかなかの親地球家なりンデイの影響を受けているため、立香のことを抜きにしても気になるところだ。

当然、それは保護者たちも同様。むしろ、知識がある分子どもたち以上に興味津々だろう。結果、八神家の分を含めて各家庭分のチケットを手配することに。

ただ、懸念事項が盛り沢山なので、その辺の対策もしっかり行うべきだろう。

（参加してもらおうのはいいけど、アマデウスさんとかシエキクスピアさんに会わせていいのかな？）

（あいつらも大概屑だけど、アンデルセンも考え物よ？ 口を開けば悪口雑言しか出てこないんだから）

（他にも黒髭をはじめ危険人物は山ほどいる。マスターには早急に「接触禁止サーヴアント一覧」を作ってもらわないと）

ゲストが気持ちよく過ごせるよう努めるのもホストの務め。そのためにもやるべきことは多い。

イリヤたちも、友人たちが訪れた際には付きっ切りで警護に当たることを誓うのであった。

クロノ・ハラオウンの場合

プレシアの扱い？　なんだ、そんなことを心配していたのか。

——そんなことって……私にとってはおばあちゃん的存在というか、親戚のおばさんというか、そんな感じの人なんですけど……。いや、すまない。言い方が悪かったな。

君が心配するようなことは何もないよ。そもそも、プレシアのことを局は知らない。

まあ、知っていたとしても、カルデアとの間には協定があるからね。あちらが彼女を手放さない限り、局はプレシアに手を出せない。そして、カルデアが彼女を放逐することはないだろう。

——仲間、ですもんね。

あそこも一枚岩とは言えないが、なんだかんだで結束が固いからな。サーヴァント同士は色々複雑だろうが、それでも「立香契約者さんの道を開く」という点で同じ方向を向くことができる。スタッフ組は特にだろうさ。一番危険な場所に二人を送り出さざるを得なかったからこそ、全力でサポートに当たったあの人たちの結びつきは強い。

正直、そのあたりは少し羨ましく思うよ。組織の規模が大きくなる、どうしても利害や思惑が複雑化するからね。目指す未来は同じでも、考え方の違いで反目することも少なくない。

それに、実際的に考えてもプレシアは得難い人材だ。彼女の魔導とエネルギー研究、そして生命工学の知識は貴重だし、その関係でカルデアの機密にも触れている。局からどれだけ圧力がかかったとしても、決して手放せない人材の一人だよ。

だから、ヴィヴィオが心配するようなことにはならないさ。

——よかったあ……でも、クロノさんはいつからプレシアさんのことを？

僕が彼女のことを知ったのはずいぶん後のことさ。というより、カルデアの職員ですら詳細を知らない人の方が多かったそうさ。

——……それは、フェイトさんも？

ああ。むしろ、フェイトにだけは知られないように徹底的に会わないようにしていたらしい。それこそ、フェイトがカルデアに招かれた時は適当に理由をつけて前日から外出していたほどだ。万が一にもバツタリ出くわさないように拠点候補地、つまり無人世界の視察に出る念の入りようだよ。

——それはまた……じゃあ、本当にカルデアの一部の人しか知らなかったんですね。

……いや、実を言えばどうもアルフは知っていたらしい。

——そうなんですか？

年齢が食い違うから普通はわからないだろうが、アルフは鼻が利く。意識体ではなく立香さん本人と会った時から、覚えのあるにおいがすることには気づいていたらしい。加えて、一度だけ接触したことがあったそうだ。

とはいえ、アルフとしてはプレシアに好意的になれる理由もない。

——だから、何も言わなかったんですね。

そういうことだ。

——でも、こういうっちゃうとあれですけど、良くアルフは何も言いませんでしたね。あ、フェイトさんにじゃなくて……。

プレシアの方から頼まれたそうだ。「少しだけ時間をちょうだい」と、その後なら「煮るなり焼くなり好きにして構わない」とも。

……意外か？ アルフがプレシアの頼みを聞いたことが。

——その……はい。

当然だと思うよ。僕もその話を聞いた時は同じことを思った。

フェイトのことを想えば、殺そうとは思わないまでも二度と近づかせないように、関わらせないようにしようとしただろう。

まあ、言われるまでもなくプレシアもそのつもりだったし、その点で二人の考えは一致していた。だからこそ、でもあるんだろう。

——でも、結果的にフェイトさんはプレシアさんのことを知ったわけですよ。それはどうして……

……思いの他、フェイトが早く気付いてしまったから、だろうな。

——気付いた？ それって、プレシアさんに？

いや、自分自身のことさ。プレシアは、いつかフェイトがその問題に直面することを見越していた。だから準備をしていたんだ、パラケルススの力も借りてね。

……正直、仮にも義兄…家族でありながら気づいてやれなかったことは情けないと思う。本当なら、僕たちも気づいてやるべきだったのに。

定期的に検査はしていても、フェイトの身体にこれといった異常や異変が現れることはなかった。そうして数年が過ぎて、惰性的になっていたんだろうな。いつの間にか思い込んでいたんだ、「フェイトは大丈夫だ」と。

——あの、それっていったい……。

プライバシーにかかわることだが、君も無関係ではないし……一応保護者に確認を取って、許可がもらえれば話そう。待っていてくれ。まあ、多少早い気はしないでもないが……。

——……なんなんだろう？ 私にも関係がある、フェイトさんの身体のことってなると……やっぱり、人造生命関連だよな。でも、フェイトさんも何年もかけて検査して異常はなかったし、私も同じ。だとしたら……。

……どうやら、お許しは出たようだ。まあ、僕の口から話すのは不適切かもしれないが、適度に距離のある人間の方が良い場合もあるだろう。プレシアの話をしている今がちょうどいいタイミングなのも事実だ。

——はあ……。

思い当たることがないって顔だな。

まあ、そうだろう。実際、フェイトが気付いたのだから意味では想像の翼を広げ過ぎた結果だ。プレシアもまさかそんなに早くフェイトがそのことに思い至るとは思わなかったんだ、君がわからないのも当然だろう。

そうだな、少しヒントを出そう。それは単純な時間経過では関わることのない、身体に関連する「何か」だ。そして、それは一人では発生しないこともある。

——？？？

そう難しい話じゃない。誰かを想い、その人と想いが繋がればいずれは行きつく場所であり、通過点。女性にとっては、人生における一大事。

——結婚、ですか？

惜しい、もう少し先だ。ああ、セクハラというのは勘弁してほしいんだが……つまり、妊娠だよ。

——妊、娠？

気付いたのは、雫が忍さんに宿つて順調に大きくなっていつている最中だった。フェイトもよく見舞いに行つては、僕たちに情感たつぷり報告してくれたものだよ。なにしろ、あの子にとっては何もかもが初めて尽くしだった。結婚も妊娠も、フェイトにとっては恭也さんと忍さんが身近な人たちの中では初めての経験だったからね。

もちろん、街中で妊婦を見かけることはあるし、局の知り合いがそういうことになることもある。だが、やはり身近な人というのは意味合いが違う。

足繁く通っている中で、たぶんフェイトも色々考えていたんだろうな。ちょうど、中学卒業も近づいていた時期だ。はやてが士郎との結婚を考えていたように、フェイトもいよいよ立香さんに思いを告げようと考えていたんだろう。あるいは、どうやって「女性」として見てもらおうか、とね。

だが、そこで気付いてしまったんだ。もしもフェイトが望んだとおりの未来が訪れるとすれば、いずれは……

——結婚して、子どもができる……。

そう。その時に思ったんだろう、果たしてその子を「無事に産んでやれるのか」と。

——えっ、でも検査では全然問題なんて……。

ああ、なかった。だが、成長と妊娠は別物だ。成長はあくまでも個人のものであるのに対し、妊娠は「自分とは違う生命を宿す」ということ。悪阻をはじめ、身体に与える影響は男である僕には想像できないほど大きい。

寿命の問題はなく、身体も順調に成長していく。ある意味、人造生命としてプロジェクトFは完璧だった。しかしそれは、一個人の中で完結するからこそその完璧だ。もしそこに、別の要素が入ればどうなるか……これまでのデータなんて、当てにはならない。

敢えて悪い言い方をするが、赤ん坊は母体にとって「異物」だ。母子で血液型や性別が違うのなんて普通のことだし、臓器移植で適合するとも限らない。そもそも、半分は他人の遺伝子で構成されているんだから、当然の話なんだが。

ごく普通の生まれ方をした健康体の母体ですら、妊娠と出産の負担は大きい。時代が時代なら、それこそ命懸けだ。

ましてやそれがプロジェクトF、人造生命ならどうだ。妊娠中母体に与える影響、出産時の安全性、生まれてきたとしてその後の子どもは……不安要素なんて掃いて捨てるほどある。

あの当時のフェイトにとって、忍さんは「願う未来」そのものだった。そんなあの人が悪阻をはじめとした心身の変調に苦しんでいるのを見て、自分に投影したからこそ気付いたんだ。自分は「子どもを産めるのか」と。

もちろん、子どもを作ることが人生や結婚のすべてじゃない。子どももない家庭もあるし、養子をとったり、場合によっては代理出産というのもある。

でも、フェイトは「産めないかもしれない」という可能性を恐れた。立香さんのことが大好きだったからこそ、その人の子どもを産めないかもしれないことを、そんな自分があの人と結ばれていいのか、とね。

要は、自分のことにあの人を巻き込みたくなかったのさ。

——でも！ それを言ったらマシユさんだって……。

そう、その点で言えばマシユさんも同じだ。どちらも前例がない、だから想定はできても実際に何が起こるかわからない。

……そこで「なら自分が前例になればいい」と考えるのはまだいい、それが前向きなものならな。だが、あの時のフェイトは誰かに貧乏くじを引かせるくらいなら自分が……と考えたわけだ。

……確かに、そういうところあるかも。

ここから先は完全に想像の領域だが、おそらくフェイトは体外受精か何かで子どもだけ作るつもりだったんだろう。どんな理由であれ、あの子が立香さん以外と……というのは考えにくいからな。

そして、そのデータを元に自分は身を引いてマッシュさんに立香さんと幸せな家庭を、と考えたんだろう。方式は違うが、データの流用はできるだろうし、ゆくゆくはエリオや他の子どもたちのためにもなる。それが一概に間違っているとは言わないが、後ろ向きな気持ちで選択していいことじゃ……ないだろう。

そもそも、それで生まれてきた子はどうなる。フェイトのことだから、しっかりと愛情を注ぐだろうが……。

——あの、相談とかは……。

してくれなかったよ。何もかも自分で考えて、勝手に決めて……まったく、どうして一人で抱え込むんだ。そんなに僕は、僕らは頼りなかったのか……。

——少しだけ、わかる気がします。迷惑を、かけたくなかったんじゃないかなって……。

友人や仲間、ましてや家族の未来と一緒に考えることの何が迷惑なんだ。立香さんがアレだけ甘やかして、僕たちにも少しはワガママだつて言えるようになったのに、肝心なところで……。

——……………そうですね、私でもきつと怒ったと思います。

当然だ。事実、最終的には足掛け5日に及ぶ総がかりの大説教大会になったからな。

ただ、それが結果的に立香さんの認識を変えることになったんだから、地球で言うところの「塞翁が馬」という奴なんだろうが。

——え、そうなんですか？

ああ。フェイトも自分の気持ちに区切りをつけようとしたんだろうな。立香さんに会いに行つて、姿を見ただけで何も言えずに引き返す……そんなことを何度か繰り返していたらしい。あの人は人の心の機微には恐ろしく聡いから、会えば気付かれる……というのもあったのかもしれない。結局、何も切り出せないまま距離だけ取るように

なった。

まあ、フェイトは結構抜けているからな、泣きながら走っていくところを見られたらしい。

いつか自分のせいで泣かせてしまうことは覚悟していても、アレは不意打ちだったんだろう。立香さんからすれば、どうして泣いているかだってさっぱりだ。

だから、あの人は懸命に考えてくれた。どうしてフェイトが泣いているのか、どうしたら泣き止んで、笑って……あの子が幸せになれるのか。気付くと、「小さな女の子」という認識はなくなっていたらしい。

——結果的には、押しダメなら引いてみろって感じですかね？好意をぶつけるのではなく、相手の意識を自分に向けさせる。今までは逆のアプローチ、という意味ではそうかもしれないな。

そもそも、フェイトは当時15歳だ。「小さな女の子」という認識は既にだいたい無理がある。むしろ、そう思おうとしていたんじゃないかな。まあ、それが「異性」となるとまた話は別だし、実際ある意味本番はそれからだったわけだが。

——……なるほど。それで、プレシアさんはそれを予期していたと？

実感が伴わないとはいえ、彼女はフェイトの生みの親であり、実際にアリシアを産んでいる。だからこそ気付いていたんだ、フェイトが抱えるリスクに。

そして、その対策を練り続けていた。あの当時はまだ完成はしていなかったが、もう完成形は見えていたらしい。

ああ、もちろん今はもう完成している。いずれ君が子どもを産む時が来ても、データもその頃には十分に取れているだろうし……

——……クロノさん、流石にそれはセクハラ。

そ、そうか、すまない……。

——で、もしかしてその時にプレシアさんが？

あ、ああ。僕たちも、立香さんですらフェイトがなぜ泣いているか気づいてやれなかったが、あの人だけはわかったんだ。その事態を予

期していた、彼女だけが。

まあ、初めは誰かに託すつもりだったようだが、色々あってね。結局、本人がフェイトの前に押し出されたわけだ、「責任を果たせ」とね。数年ぶりの親子対面だったが……もどかしいと言ったらなかったよ。プレシアはしどろもどろ、フェイトも言葉がなくて、気まずい空気のまま随分な時間が流れた。

最終的にはプレシアも覚悟を決めてね。おっかなびつくりフェイトの頬に触れて「馬鹿な子。そうやって一人で勝手に抱え込んで、思いつめて……そんなところばかり、私に似なくてもよかつたのに」と言っていたのをよく覚えている。本当に、あの二人はよく似た親子だよ。

だからこそ、プレシアも念を押し込んだらうな。「気をつけなさい。でないと、あなたはいつか私と同じ過ちを犯してしまうかもしれない。私の轍を踏んではだめよ」……自分自身の罪に苦しんできた彼女だからこそその言葉だよ、アレは。あれを見たら、フェイトの家族としては「局に引き渡せ」とは言えないさ。

——それは、アルフも？

ああ、きつと。過去を赦したわけじゃないが、フェイトのためにも来への道をプレシアは作った。少なくとも、今のプレシアは昔「時の庭園」で見た彼女とは違う。

アルフもそう思ったからこそ、プレシアに対して何も言わないんだろうさ。

——なるほどなあ、それで今の関係になるわけですね。

そういうことだ。フェイトとプレシアはぎこちないながらも親子になって、フェイトと立香さんは大人と子どもから……あく、脱却した。

——別に、そこは男性と女性になった、でいいんじゃないですか？

いや、うん……表現が生々しすぎるかと思ったんだが、最近だとそうでもないのか？ 僕はどうもその辺の匙加減が……ゴホン。それはともかく、僕義兄にとっては極めて複雑なことに、フェイトの思いはよ

うやくあの人に届いたわけだ。

——そこは素直に喜んであげればいいのに……。

……別に、あの人のことが気に食わないというわけじゃないさ。いやまあ、相談事があると真っ先に立香さんのところに行くことには、思うところがないわけではないが……。

——ヤキモチですか？

……言わないでくれ。自覚はあっても、言語化されるのは辛い。

——別に嫌いなわけじゃないんですね。

……正直に言えば、尊敬すらしている。僕はあまり人付き合いがうまくい方じゃないからな。あれだけ多様な個性の塊に対し、それぞれに合った対応の仕方をできるというのは、純粹に凄いと思うよ。

あの人の場合、八方美人とは別物だからな。

とはいえ、それはそれこれはこれだ。

義妹と結婚する……というだけならともかく、もう一人というのは良い気分じゃない。

——でも、法的には問題ないんですね？

というか、管理局法に婚姻に対する厳密な規定はない。次元世界ごとに文化も歴史も違うから、各世界の法が適用される。そして、多くの世界で重婚は認められている。それどころか、制度上は同性や近親も可能だ。色々問題はあがあるが、当事者たちがすべて理解した上でなら外野が口を挟む道理はない、というわけだな。

——あ、そうなんですね。

まあ、普通に暮らしている分には関わることはないからな、知らないのも当然か。一応審査や指導が入りはするが、よほどのことでもない限り弾かれることはないよ。そもそも、結婚可能年齢すら規定がないんだからな。

——えっ!?

……やはり知らなかったか。一部例外を除けば、多くの世界で結婚を可能にする条件は大きく分けて「就労していること」「一定以上の学位を取得していること」「規定以上の財産を所有していること」の三つ。他にも細々としたものはあるが、とりあえずこのうち二つを満た

してさえいれば、それこそ君の年齢でも結婚は可能だ。同時に、これらが成人の条件でもある。

なにしろ、世界毎に成人の条件も違うんだ。どんな文化でも通じるようにしようと思うと、こうするしかない。

まあ、逆に言えばどれだけ年を食っていても、「働かず」「学もなく」「資産もない」人間は成人とは認められないわけだが。

—— 厳しい、のかな？

大人の定義は「自分自身に責任を持つ」ことだ。つまり、自分のことにすら責任を持ってない者を大人とは呼ばないよ。

それと同じで、結婚にしたって当事者たちがお互いに責任を負えるなら何の問題もない。まあ、近親に関しては遺伝的なアレコレがあるから、少々審査やその際の指導は厳しくなるがね。

だが、慣習として一夫一妻が基本なのも事実だ。僕も圧力はかけているが、それでもフェイトも色々言われているしな。義妹には穏やかな幸せを得てほしいと思うのが、義兄心だよ。

—— 圧力、かけてるんですね。でも私としては、立香さんが二人で留めていることにも驚きなわけ……。

まあな。清姫をはじめ、あれだけ押し強い連中に迫られながら二人以外には一切手を出さないんだから……男として、頭が下がるのは否定しない。求められれば手あたり次第、とかだつたら僕も認めなかつたよ。二人以外に手を出さないのが、何よりの本気の証ともいえる。それは理解しているつもりだよ。

それにしても、どうやって納得させたんだ？ というか、納得しているのか？ あるいは、何かしらの方法で黙らせたのか……未だに謎だ。

—— あ、あはは……そういうえば、マシユさんとは揉めなかつたんですか？ フェイトさんとは仲良しですけど、あの人つて実は結構ヤキモチ妬きですよ？

それを言えばフェイトもだが……彼女に関しては、むしろ積極的に後押しをしていたと聞いている。

—— へ？ そうなんですか!?

……マシユさんは、誰よりも近くで立香さんを見ていたからな。だからこそ、気付いていたんだろう。最初のロストベルトを超え戦っていく覚悟を決めたとはいえ、立香さんが精神的に追い詰められていたことに。

——ああ、確かその時なんですよ。フェイトさんと出会ったのって……。

マシユさんが言っていたよ「ある日を境に、先輩の顔色が良くなつたんです」と。そしてフェイトに「先輩を救ってくださいって、ありがとうございます」ともね。

あの人にとって、懸命に頑張るフェイトは救いだつたんだろう。戦い続けて、進み続けることが自分の責任だとわかっていても、その重さに押しつぶされそうだったとしても不思議じゃない。彼は現場に立ち、マシユさんをはじめサーヴァントたちに指示をだす立場。ある意味、誰よりも重い責任を負っていたはずだ。それは、とても一人が背負えるような重さじゃない。

背負うものの重さは比べ物にならないだろうが……苦しくても辛くても、フェイトは頑張っていた。

自分よりもずっと小さな女の子が懸命に足掻いているんだ。それを目の当たりにして、倒れるわけにはいかないよ。倒れてしまったら、それこそ情けなくて死にたくなる。男が意地を張るには、十分な理由だ。

立香さんがつぶれることなく前へ前へと進めた一因には、きっとフェイトがいたんだろう。

パートナーだからこそ、それに気付いたんだ。気付いていたのなら、拒めるはずがない。

あの人が背負った責任は、何一つとして軽減されてはいないんだ。きつと、これから先もずっと背負って進み続けなければならぬ。誰もあの人に「赦し」を与えられない以上、重みが増すことはあつても、軽くなることはないんだからな。

そんな立香さんを、共に支えてほしいと思つたんじゃないだろうか。同じものを背負うことはできなくても、倒れそうな心を支え合え

ると。

——そう、なのかな？

まあ、真相は二人でなければわからないだろうがね。

——ところで、フェイトさんもヤキモチって妬くんですか？ あんまり見た覚えが……。

ああ、色々遠慮する性質だからあまりハッキリとは見せないし、ヴィヴィオに覚えがないのも当然だろう。

それこそ、よほどフェイトにとって大切なことでもない限りは……待てよ、一人だけ例外がいたな。

——例外？

ああ、レヴィのことは知っているか？

——はい。エルトリア関連の事件で……っていうのは聞いています。

あの子の姿かたちはフェイトのデータを基にしている。つまり、フェイトの写し身だ。たぶん、そのせいなんだろうな。本当はしたいのに、恥ずかしかったり遠慮したりできないことをレヴィがやると、それには随分とヤキモチを妬いていたな。

——本当はしたいこと、ですか？

レヴィたちは元がネコだし、特にあの子は割と本能的とも言えるのか……そういう傾向が強かったんだ。だからか、要所要所で仕草がネコっぽいんだよ。

例えば、丸くなって寝ていたりな。普段は微笑ましい限りだし、フェイトもまるで妹のように扱っていたんだが……ある時、立香さんがソファで舟をこいでいると、その膝の上でレヴィが丸くなって寝ていたんだ。

——うわあ……まさにネコ。

そうだ。で、それをフェイトが見つけてしまつて……「代わつて、代わつてよお……」「私だつてしたいのに……」と涙目で、な。

レヴィも強情だから、引き剥がそうとしてもおとなしく従うはずもなく「ここはボクの場所！」「なんかキモチイ〜♪」と言って離れようとしなないんだ。多分、フェイトの影響もうけていたんじゃないかと思

う。

——なんか、面白そう。

ちなみに、なのはとはやても似たようなことはしていたぞ。

——え？

シユテルがカルガモのヒナの様に「師匠、師匠」とユーノの後をついて回ると、なのはが「ユーノ君は私の先生なのー！」と邪魔をしては、後になってそんな自分に自己嫌悪、一人で勝手に沈み込んでいたな。

——あく、そういえば今でもヤキモチ妬いた後はダウンナー傾向ありますね。パパに愛想つかされるんじやくって、そんなことあるわけないのに。

相変わらずらしいな。どうせ、そのあとユーノに励まされて泣きつくんだろう。

——クロノさん、正解。マーキングでもするみたいにくつついてます。

進歩のない……縄張りを主張するまでもないだろうに。

で、ディアーチェははやてに対抗して料理に手を出したんだが、「知っている」と「できる」は違う。当然うまくいくはずがないんだが、そこで見かねた士郎が教えてやってな。

——じゃあ、そこでヤキモチを？

いや、はやてはそのくらいでは動じないよ。はやてのデータを使っているからか、メキメキ上達したあたりまでは微笑ましそうに見ていた。

ただ、ディアーチェが「大義であった、我の臣下にしてやろう！

光栄に思うが良い！」とか言い出したあたりから雲行きが怪しくなつてな。こう……目から光が消えて「目え開けたまま寝言が言えるやなんて、王様は器用やねえ」と、エターナル・コフィンも真つ青な冷え切った声で……すまない、これ以上は。

——あ、はい。(いったい何があったんだろう……)

とまあ、そんな調子でな。自分と同じ顔の持ち主が、程度の差はあれ好意を抱いている相手に侍れば、それは心中穏やかではられない

だろうさ。

——そういうものかあ……。

いずれ君にもわかる時が来るさ。ちょうど、同じ顔に心当たりもあるだろう？

——まあ、確かに。でも、そういえばエルトリア関連の事件ってあんまりちゃんと聞いたことないんですね。

ん？ まあ、アレはカルデアと協定が結ばれて初めての事件……というか、事件中に協定が結ばれて、それからあちらと共闘した形だからな。カルデア関連は、一応機密扱いになるからそれも当然だろう。

——え？ でも私、チラツと聞いちゃってるんですけど……。

ああ、心配しなくていい。それはあくまでも「カルデアの詳細」を知らない相手に限ってだ。君も立派なカルデア関係者だし、別に話す分には問題ないよ。なんなら、今からでもかいつまんで話そうか？

——お願いします！

* * * * *

夏休み早々に企画された、建設中の臨海テーマパークでの社会科見学。

母親チームはカフェでのんびりとおしゃべりを楽しみ、子どもたちは男性保護者組に見守られながらかしましく取材に勤しんだのだが、夜になって状況は急変した。

臨海テーマパーク「オールストン・シー」近くのホテルの一室で、遅れて合流する予定のはやてを待っていたところ、そのはやてが移動中に何者かに襲撃されたとの一報が舞い込んだ。

幸い無事だったはやては、窮地を救ってくれた容疑者の姉を名乗る女性「アミティエ」と共に、容疑者である「キリエ」を追うことになった。のはとフェイトも、東京支部のクロノから緊急出動の要請が入り、容疑者確保のため現場へと向かう。

しかしその中に、イリヤたちの姿は含まれていなかった。

「……こういう時、しがらみっていうのは面倒よね」

「仕方がないよ。立香さんたちが勝手なことしたら、それこそ大変なことになっちゃうん…ですよね？」

「ごめん。ここでトラブルを起こすのは、ちよつとね」

ぼやくアリサと、確認するように立香の方をうかがうずかずか。二人に対し、立香も申し訳なさそうに頭を振る。

管理局との交渉は大詰めを迎え、協定の締結まであと少しというところ。もう一押しではあるのだが、だからこそ繊細な時期でもある。ここにきていらぬ反感を買えば、ご破算…とまではいわないが、余計な足踏みをする羽目になるのは明白。それは結果的に、双方にいらぬ禍根を残すだろう。

立香もフィニス・カルデアという組織の一員、勝手な行動は許されない。

「なのはちゃんたち、怪我とかしないといいけど……」

「はやての話だと魔法への対抗策を持つてるみたいだし、少し危ないかもしれないわね」

あまり悲観的なことは言いたくないが、事実から目を背けるわけにもいかない。

とはいえ、立香とてここで何もせずにいるつもりはない。

「……よし」

「マスター？」

「直接手は出せなくても、できることはあるよね」

悪戯っぽい笑みを浮かべながら、立香は「パチンツ」と指を鳴らす。すると、音もなくそれは現れた。

「お呼びで……いいですね、この『できる忍』感。凄腕になった感じが堪らない」

「……やっぱりいた。来なくていいって言ったのに……」

「つてかあんた、そもそも凄腕なんじゃないの？」

呆れた様子で深々と溜息をつく関係者一同。

その後ろでは、唐突過ぎる忍者の出現に目を丸く…はしていなかった。何しろ、海鳴は魔導士以外にも古流剣士や吸血種、霊能力者に超能力者、幽霊と妖怪、果てはアンドロイドまでいる魔境の地。当然、忍

者だっている。

驚きはしても、「まあ忍者くらいなら」と耐性がついているのだ。間違っても、そんなものに耐性がついている小学生を「一般人」とは呼ばない。

「我が主、ご用命を」

「動けるアサシンを動員して、都内をくまなく探してほしいんだ。探し物は、これ」

そういつて立香が提示したのは……

「名刺、ですか？」

「いやー、実はどこかで落としちゃったみたいでさー。ここんところ忙しかったから、心当たりが多すぎるんだよねー。というわけで、手当たり次第に探してほしいんだー」

「承知。探し物は名刺、都内をくまなくですね。では、ロビン殿にも協力を仰ぎましょう。ところで、余計なものを見つけてしまうかもしれないんですが……」

「不可抗力だよね。一応、何を見つけたかは教えて。どこかに不発弾とかあったりしたら危ないし」

「うへえ……すごい三文芝居見ちゃった」

「あの、リンデイさん。これっていいんでしようか？」

「あら、名刺には個人情報がいっぱいよ。失くしたら、急いで探さなくっちゃ。まあ、その途中で不発弾とか、待機中の『機動外殻』とかが見つかったりしたら、通報するのは市民の義務よね」

「うわあ……」

協定が結ばれていないから表立って協力はできない。勝手に首を突っ込んで、管理局からの不興を買うだろう。

だが、まったく関係ない探し物をしている中で偶々事件に関係するものを見つけたとしたら、どうだろう。知らない仲ではないし、リンデイの言う通り通報するのは市民の義務だ。

「強かというか……いい性格してるわねえ、彼」

「うふふふ♪ 頼もしいじゃないですか。規則を守るのは大事ですけど、縛られてはいい仕事はできないもの」

アリスとすずかからは若干引かれているが、大人たちからの受けは上々らしい。

とはいえ、如何にアシンを動員したとしても、範囲が広ければ成果が出るには相応に時間がかかる。

流星に初戦には間に合わず、管理局組は敗退。相手は未知の技術とエネルギーを用い、魔導に対して綿密な調査の上で対策を講じられていては形勢不利もやむを得ないだろう。多少の負傷はあれども、管理局組に重傷者を出すことがなかった分「上手く負けられた」というべきだ。強いて言えば、アミティエ：アミタが重傷なことと、敵の目的だった夜天の書を奪われてしまったことが、最大の失点だろう。

アミティエは本局で治療を受け、残りの面々は件のホテルに集合、今後の対策を練っている最中だ。そんな中、微妙に蚊帳の外のカルデア組はというと……

「マスターさん。協定っていうのは、まだ……」

「状況が状況だから、急いで締結できるよう動いてくれるってダ・ヴィンチちゃんか」

「そうですね……」

「担当はリンディさんの関係者らしいし、そっちは時間の問題でしようね。問題なのは向こうの出方だけど……」

現状、アシンたちもまだキリエの発見には至っていない。ただ、都内で何ヶ所か工廠のようなものが発見されていた。

主犯の「キリエ」の他に協力者と思われる「イリス」、そして無人の機動外殻とやらがあちらの戦力。仲間が少ない分、現地で補充可能な戦力の充実を図っている可能性が高いことから調査を進めていたが……想定以上に手を広げているらしい。

「ロビンはなんて？」

「やるなら一度にまとめて、見つけ次第潰していくやり方だと後々面倒になると言っていました」

「流星、ゲリラ戦と破壊工作の名手。なら、今は百貌たちに張っかけてもらうのがいいか」

「今のままだと、私たちは手が出せません。場所だけ報告して、局に対

処してもらおう形になります」

「あちらも、手が足りているとは言えないからなあ……」

最善はすべての工廠を見つけた上で一網打尽にすることだが、次善は敵が動き出す直前に可能な限り潰す方法だろう。しかし、それをするには管理局側の戦力が厳しい。質ではなく、量が……だ。

まあ、管理局とカルデア、両組織の協定が敵が動くより早く結ばれれば、もっと積極的に動くこともできるだろう。それも含めて、時間との勝負ではあるのだが。

「でも、キリエさんたちは対策をしつかり準備してきてるんだよね。私たちも厳しくないかな？」

「それはないんじゃないかしら？ 私たちがこっちに来て、まだ数ヶ月。戦闘回数だって数えるほどよ。対策を講じるにしたって、時間も情報も足りてないと思うんだけど」

「クロの言う通りだと思う。なのはたちの記録を見る限り、守護騎士たちが来てからも周辺を警戒していた。これはたぶん、私たちに對してだと思う」

「情報不足はお互い様。なら、条件はイーブンかしらね」

不敵な笑みを浮かべて肩をすくめるクロエだが、立香はその様子に違和感を覚える。何というか……

「クロ、なんか怒ってる？」

「別に怒ってないわ。ただ、あのキリエって人が気に食わないだけ。うじうじイリヤを見てみたいで、イラッと来るのよねえ」

「さらっと私に流れ弾が!？」

「別にさ、自分の事情とか話すのは構わないわよ。貸してって言ってる割に、やっтерることが実力行使なのも含めて、ね。油断させるためのののか、それとも焦ってるのかは知らないけど。ただ、どうにも……だから赦してくださいさ……」

「……なるほど、言われてみればそんな感じはする」

「本当に覚悟があるんだったら、〃赦し〃なんて求めんなっての。恨まれても憎まれても、許されないのを前提に進むのが覚悟じゃない？ そもそも贖罪って、〃赦される〃ためじゃなくて〃責任を取る〃た

めにするもんじやないの？ やったことの責任を取って、それを見た人が赦すかどうか決める。『赦してほしい』なんて、そんなの自分の都合でしょ。マスターだって、『赦されたい』なんて思っていないじゃない？」

「……………」

その問いに、立香は困ったように笑いながら頬を掻く。確かにクロエの言う通り、立香は自らの行いに対して『赦し』など求めてはいない。滅ぼした側の責任から逃げるつもりはないが、何をどうしたところで『赦される』とは到底思えない。それだけのことを、自分たちはしてきたのだと自覚しているから。

かつて失った『友』が言ったように、それは決して『なかったこと』になんてできないのだから。

きつと、藤丸立香が赦される日は永劫訪れない。だって、赦すか否か、それを決められる人たちはもうどこにもいないのだから。

「……………言いたいことはわかるけど、ちよつと厳し過ぎじゃない？」

「マスターは甘すぎるのよ。だからその分、私たちが厳しくするの」「確かに、それで釣り合いが取れるのかも」

「美遊まで…………。私は、そこまで言わなくてもいいんじゃないかなって思うんだけど」

エルトリアの状況には、かつての故郷と重なる部分があるため美遊としては同情しないでもない。だが、美優は知っている。人類すべてへの裏切りと知りながらなお、妹美遊のために『悪』であることを選んだ兄人を。

だからこそ、最終的に彼女はクロエの側に立ちキリエを擁護しようとはしない。

———家族のためと謳うのなら…………

———星を救わんとするのなら…………

———その行いに伴う責任、そのすべてを背負う覚悟を持つべきなのだ。

そのために必要なのは、確固たる芯。果たして、キリエにはそれがあるのだろうか…………。

「アミティエが子ども扱いするのもわかる」

「うーん、でもアミタさんももう少しちゃんと話をすべきだったんじゃないかなあ……」

「他人様の家庭の問題よ、私たちが口出しするようなことじゃないわ。そんなことよりマスター、いざ動けるようになったときどうするか、そっちの方が重要じゃない？」

クロエの言い分は実に最もだ。なので、さっそくカルデアと連絡を取り今後のことを話し合う。いつ局側からの要請が来てもいいように。

そして、事態は思いのほか早く動き出した。

新たに発生した三つの巨大な魔力反応。それらが高速でオールストーン・シーを指して動き出したのを確認したのだ。

間違いなく、オールストーン・シーが戦場になる。

そうになると、多少距離が離れている程度では危険だ。リンディはアリサやすずかをはじめとした民間人たちに、避難を指示しようとしたのだが……そこで立香が待ったをかけた。

「どうせ避難するなら、より安全な場所を紹介しましょうか？」

「あの……マスターさん、それってもしかして……」

「美遊、セミラミスに連絡とつてくれる？ この部屋にいる人たち、まとめて回収してほしいんだ」

「わかりました」

「いいのかなあ……」

苦笑いを浮かべるイリヤを他所に、手早く手配を済ませる美遊。

一応かいつまんで説明しているうちに、アリサたちは唐突に生じた光に飲まれて姿を消した。

「ど、ど、ど(よこ)————っ!？」

「つて、今頃は叫んでるかしら？」

「まあ、驚くよねえ……普通は」

「あなたたち、いつの間にあんなモノを……」

テラスから頭上を見上げれば、そこには天地が逆転したかのような巨大構造物。

こんなものが、今の今まであらゆるセンサーに引つかかることなく自分たちの真上に浮遊していたなど、リンデイにとつては頭の痛い限りだろう。

ハンギングガーデンズ・オブ・バビロン

「虚栄の空中庭園、カルデアがこつちに来てすぐに準備を始めて、先週ようやく完成したんです。言ってませんでしたっけ？」

「……聞いてないわ、まったく」

「でも、やっぱりいつもよりずいぶん小さい」

「そうね。準備期間も短かったし、仕方ないんじゃない？」

「セミラミスさんは不満そうだったけどね。このようなみすぼらしい庭園で満足できるかって」

思い浮かぶのは、明らかに不満そうな女帝の顔。

本人としては、どうせ作るならもっと大規模にしたかったらしいが、建材を調達するためのコネすらないのが実情なので、今はこれで我慢してもらうしかない。

「増築は追々、ね。あ、さつきも言った通りぶっちゃけ空中要塞みたいなものなんで、早々落とされることはないと思いますよ。そこは安心してください」

（むしろ、セミラミスの方が危ないけどね）

（そこはまあ、天草さんが何とかしてくれるんじゃないかなあ？ 胡散臭い人だけど、別に悪い人じゃないし……）

今一つ信用ならない男ではあるが、根本的な部分は善良なので当てにしている……はずだ、たぶん。

「それで、リンデイさん。協定の方は？」

「……ええ、無事に締結されました。では、時空管理局総務部次長として、事件解決のためカルデアに協力を要請します。つきましては、敵性無人兵器『機動外殻』への対処をお願いしたいのですけど」

「非殺傷設定とかでできませんし、そうなりますよね」

管理局としては、殺傷能力の高すぎるサーヴァントたちに犯人確保を任せることはできないのだろう。それこそ、よほどの事情がない限りは。

まあ、この要請自体は想定のうち。立香たちもそのつもりで検討は

していた、何の問題もない。

「さて、とりあえずは状況確認か。マシユ？」

「はい、こちらでもモニターしています。オールストン・シーに接近しているのはキリエさんの他、大きな魔力反応が三つ。加えて、機動外殻と思しき大規模構造体が確認されています」

通信で呼びかければ、待機していたマシユが必要な情報を簡潔に送ってくれる。

工廠が確認されたこともあり、てつきり物量頼みで仕掛けてくると思っていたのだが、予想が外れた形だ。とはいえ、十分修正可能な誤差でしかない。

「なら、予定を変更して藤乃さんとリップ、それにランスロットを召喚する。マシユは……」

「私も急ぎ現場に向かいます。それまで、くれぐれも危ない真似は慎んでくださいね、マスター」

「わかってる。あ、あと例の『ブースター』も持ってきて」

「シオンさんには洩られるかもしれませんが、何とか説得します。ですが、なぜ……」

「順調に事が済めばいいんだけど……ほら、だいたい二転三転するし」
「……そうですね。念のため、備えておくに越したことはありません」

悲観主義と笑いたければ笑えばいい。なにしろ、一度だって何も問題なく事態を解決できた試しがないのだ。

そして、そんな立香たちのやり取りに「ホロリ」と涙をこぼすリンデイなのであった。

EX01 P. T事件

P. T事件のこと？　って言われてもなあ……俺、特に関わってないよ、それでもいいの？

——あ、いえ、聞きたいのは事件のことというよりもフェイトさんのことというか……。

ああ、そっち？　まあ、そうだよな。あの当時、俺ずっと部屋の中にいたからホント何が起こってるのかとかさっぱりだったし。

——当事者と同居していながら、まったく知らないっていうのも逆に凄いですけどね。

それ言ったら高町家の人たちも一応そうだけど？

——う、そうでした。じゃあ、それが普通？　いや、少なくとも普通ではないと思うし……あ、せつかくなんでその前の話も聞きたいです。確か、事件の前からこっちは繋がってたんですよね？

一応はね。確か、イリヤたちを召喚した頃からだから、第五特異点のあたりだったかなあ？　まあ、そうは言ってもほとんど臆気で「そんなような夢を見た気がする」程度なんだけど。

——そうなんですか？

うん。正直、不鮮明な上に断片的で、今振り返れば「アレがフェイトで、あつちがなのはだったんだらうなあ」って思うくらいで、当時は………ちっちゃな女の子のイメージばかりで、自分の趣味嗜好にすごい不安を覚えたつけ、そういえば。

——（地雷踏んだ!?　虚ろな目でブツブツ何か言ってるし……こは話を逸らさないと!）　え、ええっとその……た、例えばどんなイメージだったんですか？

え？　そうだな……草原と二人のちっちゃな女の子とか、なんか元気に喧嘩してる三人の女の子とか？

——それってもしかして……。

フェイトとなのは……なんだと思う。あとは、こっちははやてだと思っただけど誰かと料理してる様子なんかも見覚えが……。まあ、フェイトと出会う前にこういう夢を見たって話をして、それで「たぶ

んそうなんだろう”って推測しただけなんだけど。

——そうなんですネ……フェイトさんのアルフと遊んでる姿かな？　で、ママと一緒にするのはアリサさんとすずかさんで、八神司令は土郎さんに料理を教わってるところ？　ママたちにとって、幸せだったり大切な思い出だったりする場面ですね。

(実は結構……というか、悲しいイメージの方が多いくらいだったのは、言わない方がよいなあ)

——なるほど……でも、じゃあ本当に断片的なイメージだけだったんですね。

なにしろ、大まかな背格好くらいで顔も怪しいから。

フェイト以外は草原なんて行く機会はそうそうないし、同じようなのはくらいしか誰かと喧嘩する機会がないから、消去法で特定してる感じだしね。最後のも、フェイトはともかくなのはなら十分可能性はあるから、俺が個人的に「そうなんじゃないかなあ」って思ってるだけなんだ。

——それで、プレシアさんを引き上げた後に海鳴に？

そういうことになる。それまでは正直「記憶喪失直後！」みたいな感じで、全然自分自身と繋がってない感じだったんだけど、あの時からは自分が誰で、どういう状況なのかはある程度把握できるようになったんだ。

正直、はじめはいつもみたいに誰かの夢に紛れ込んだと思ってたんだよなあ。

——それがいつものことっていうのも凄いですけど……でも、だからこそ驚いたり慌てたりせずにいられたわけなんですよね。普通、いきなり見覚えのない場所に脈絡なく放り出されたら混乱しますし。

まあ、そうだろうね。そのあとのことは誰かから聞いたこともあるんじゃない？　場所が割と背の高いビルに囲まれた路地裏だったから、とりあえず状況確認がてら開けた場所に出ようとして……

——そこでアルフの変身現場にバツタリ遭遇？

そうそう。とりあえず何とか誤魔化そうとしたんだけど、アルフの誘導尋問が見事で……

——ノリツツコミみたいなやり取りだったって聞いてますけど、アルフに。

……すみません、見栄はりました。実際には「……見たね」「……いえ、拙者何も見ていないでござるよ」ところで、狼狽してやっぱり目立つかねえ?」「そうですね、あのサイズだとしても……あっ!?!」「やっぱり見てんじやないか——
っ!!!」「しまった——
っ!?!」って感じでした。

——立香さん……。

いや、その……うん、俺もまだ混乱してたんだよ。

——そういうことにしておきますけど……それで捕まって、フェイトさんのところに監禁された、と?

そういうこと。理由も事情も教えてはくれなかったけど、あれはフェイトなりに俺をそれ以上巻き込まないようにつて気を遣ったんだらうね。

——フェイトさんらしい気もしますけど……そういえば、フェイトさんの第一印象ってどんなだったんですか?

……これはオフレコにして欲しいんだけど。
——はい。

……暗い子だなあって。

——えっ? 第一印象それなんですか!? こう綺麗だなあとか、可愛いなあとかは! ほらそこ! 目を逸らさない!!

——なんか、綺麗どころには慣れてるといふか……。

——(そういえば、サーヴァントの人たちってだいたいみんな美形だったつけ。目が肥えるのもわかるけど……でも、未来の結婚相手の第一印象が『暗い』って……確かに、フェイトさんには聞かせられない)

もちろん、今ヴィヴィオが言ったような印象もすぐに持ったよ。それこそ「将来的には美の女神もかくや」とかね。実際、当時だってステンノやエウリュアレと並んでも遜色なかっただらうし、鼻根目抜き

にしてもイシユタルやアストライアにも負けてないと思うよ。

まあ、あの当時は暗い顔をしてたり、思いつめた顔をしていることが多かったから、どうしても…ね？

——それはわかりますけど…でもそこはフェイトさんの方が綺麗、って言うてあげるべきじゃないんですか？

そこはもう個々の好みの問題だと思う。というか、そんな恐ろしいこと口が裂けても言えません。万が一誰かの耳に入ったら、後でどうなるか…

——（まあ確かに、控えめに言っても大騒動確定ではあるかなあ）
まあ、そんな感じで一緒に暮らすようになって…

* * * * *

「あの、とりあえずここから出ない分には、自由にしてもらっていいので…」

「まあ、こつちの都合につき合わせてるのは悪いとは思ってるからね。何か欲しいものがあればいいな」

「お金の心配はいらないので、遠慮なく言ってください」

「じゃ、とりあえず新聞買ってきてもらえる？ あとは着替えと、他には…いや、ちよつと待って。メモ渡すから」

（な、なんて図々しい奴…！ いや、ほしいものがあれば言えって言ったのはあたしだけ！ あたしだけ！ にしたってこいつ、自分の立場とか置かれてる状況とかわかってんのか!?!）

『遠慮なくって言ったじゃん』と言われれば確かにそうだが、それにしただって図太いことに変わりはない。

しかし、立香にも言い分はある。今彼は、何よりも情報が必要としていた。彼女たちが自身やそれにまつわる情報を一切明かそうとしないため、自分が置かれている状況の情報を得ることは難しいが、この世界”の情報なら得られるはず、と考えて。

相変わらず魔術の腕前は素人に毛が生えた程度だが、ある意味彼ほど多様な術式を知る者は少ない。能力の低さは最早どうにもならな

いとしても、知識を詰め込むことはできる。そして、知ればその分だけ生存率が上がる。対処はできなくても、逃げ回るなり危険を避けるなりすればそれなりに時間を稼げるし、時間さえ稼げば誰かが立香を助けるだろう。

そのため、立香は古今東西のキャスターたちから多種多様な術式を徹底的に叩き込まれている。応用も自身の魔術への活用もできないし、そんなことは誰も期待していない。彼に求められたことはただ一つ、〝生き残る〟こと。ただそのためだけの詰込みだ。

しかし、だからこそ立香は気づいていた。〝フェイト〟と呼ばれる少女が用いる魔術らしきものが、全く未知の代物であることに。無論、彼とて自分が古今東西全ての術式に精通しているなどと思っていない。所詮は付け焼刃に詰め込んだ知識だ、漏れも抜けも探せばいくらでもあるだろう。

だがそれにしても、フェイトたちの用いるそれはあまりにも〝かけ離れていた〟。アレはそもそも〝魔術〟というくくりで考えるべきものではない。それくらいのは、立香にでもわかる。

(特異点か剪定事象か、それとも異聞帯？ あるいはもつと遠い、別の……いずれにせよ、知らないことには始まらない。何かすべきことがあるのか、それとも単にまぎれただけなのか、それすら現状じゃわからないんだから)

密かにカルデアとの通信を試みしたが、空振りに終わっている。なので、彼にできることと言えば情報の現地調達くらいだ。見た限り、マンシヨンの一室からは〝現代日本〟といった風景が望むことができる。

これだけの文明があるのなら、新聞くらいはあるだろう。できれば雑誌も買ってきてもらいたいところだったが、知っている雑誌が存在してるかさえ怪しいので、とりあえずは〝新聞〟だけにとどめた。

「さて、とりあえず今できることはやったし、あとは……………寝るか」

なるほど、わからないことだらけの状況だが、そんなことは割といつものこと。この程度では、藤丸立香は慌てないし動じない。急いだ

ところで焦ったところで、一切の利がないのは明白なのだから。

故に、立香はリビングに備え付けられたソファに身を預け、瞼を閉じる。

割といつでもどこでもレムレムしていると思われがちな立香だが……それはそれで間違っていない。ただ、果たしてマシユは知っているのだろうか。彼の睡眠が二種類……いや、三種類に大別されることに。

一つは、何らかの干渉により意識を奪われるなり夢の中に迷い込むなりした場合。要は、他者からの干渉によって眠るパターンだ。

もう一つが、唐突に「意識が落ちる」パターン。それこそ、まるでブレーカーが落ちるかのように、立香は意識を失ってしまうことがある。

もちろん生来のものではないし、極度の緊張状態を強いられる任務中はそんなこともない。だが、逆に任務のない状況では度々これが発生するようになった。ロマニ・アーキマンが健在の頃に彼はこれをストレス性、あるいは心因性のものと診断した。要は、弱った心を守るための緊急措置として、過剰な電力の使用でブレーカーが落ちるように、過剰なストレスに対する防衛反応として意識が落ちてしまう。

こうなるようになったのは、果たしていつからだったのだろうか。うろ覚えだが、なんとなく特異点の旅も佳境に差し掛かった頃から頻度が上がっている。このことを知るのは、現状ダ・ヴィンチとホームズだけのはずだ。あるいは、ゴルドルフ新所長には報告がいつているかもしれないが……他の職員には秘密にするよう頼んでいる、特にマシユには。

何しろ現状、立香の役目を代替できる人物などいないのだ。彼がどのような状態にあらうとも、動けるのなら彼は任務を遂行しなければならない。選択肢など、ありはしないのだ。

そして、最後の一つが……

「解体、開始……」

小さく呟くと、途端に意識が分解されていく。それは、魔術とすら

呼べない自己催眠の一種、意識の清掃解体。フィールドストリッピング

自己催眠によって意識を解体し、ストレスを識域もろとも消し飛ばすという手法。元は、カルデアに召喚されたアサシンの一人から教わった方法。尋常ならざるストレスにさらされる立香には、ある意味では何よりも必要なものだった。

散り散りになった意識は約二時間程度で自然再生し、生まれ変わったかのような気分で目を覚ます事になるが、一時的にはいえ自らの人格を無意味な断片と成す行為への抵抗感から好んで使用する者は滅多にいない。つまり、そんなものが必要になるほど彼、藤丸立香は追い詰められているのだ。

それこそ、通常の睡眠ではほぼ意味をなさないほどに。この術の使用には賛否が分かれたが、あとはもう最後の手段に頼るしか彼の心を保たせる方法がなかったことから、「薬物に頼るよりは……。」ということで黙認されている荒療治だ。当然、こんなことマッシュに教えられははずもない。

(本来、こんな安全を保障できない場所で使うのはまずいんだけど……)

この術の使用について厳しく指導されている立香だが……今の彼にはこれが必要だった。

立香は見事ロシアのロストベルト、その空想を切除することに成功した。だがそれは、すなわち一つの歴史を、世界を、そこで懸命に生きる人々を、なにもかもを“なかった”ことにするということ。それはあるいは、ただ“殺し”“奪う”ことよりもずっと残酷なことかもしれない。何しろ切り捨てられた彼らのすべては、一切の痕跡を残さず消えてしまったのだから。

そして、現場に立ち、それを指示したのは他ならぬ立香自身。その事実が彼に与える精神的な負荷は計り知れない。

特異点を巡る旅も十分に過酷だった。だが、あの旅はただ前だけを見て進み続けるだけでよかった。

しかし、今は違う。彼の後ろには、戦う相手の命どころか何の罪もない全ての生物、積み重ねられた歴史の骸が積み重なっている。そし

て、今後もさらに同じことをしなければならぬ。異聞帯を滅ぼす不毛の旅路は、まだ始まったばかりなのだから。だがその現実はあまりにも重く、意識の清掃解体を行いストレスをいったんリセットしたところで、あつという間に立香の心を押し潰すほど降り積もってしまった。

故に、彼は定期的に意識の清掃解体を必要としている。でなければ、いつどこで意識が落ちるかわからないから。

そうして、立香とフェイト、そしてアルフの奇妙な共同生活が始まった。

基本、フェイトとアルフは夜中まで部屋を開けていることが多く、一日の大半を立香は部屋で一人で過ごすことに。ストレス対策の睡眠とは名ばかりの代物を行う上では都合が良いが、それにしたって時間はありまっている。

なので、立香がこうなるのはある意味自明のことだった。

「……………」
「暇だ」

そう、彼は暇だった。それこそ、売れば一財産になるくらい暇だった。

シャドウ・ボーダー内は気を休めるには不向きなため「暇」と思う余裕すらなかったし、カルデア本部が健在な頃はサーヴァントたちが騒がしくしたりトラブルを起こしたりしていたので、任務外でも暇を持って余すようなこともなかった。おかげで、どこぞの社畜かワーカーホリックの様に暇だとかえって落ち着かない体質になってしまった。

特に、この部屋に監禁されてからというものの驚くほど穏やかな時間が過ぎて行っている。

騒動やトラブルの種どころか気配もなく、無断で布団に忍び込んできたり自分の都合に巻き込んできたりするサーヴァントもいない。不当に拘束しているという負い目があるからか、フェイトは立香が申し訳なくなるくらいに気を遣ってくれている。アルフも未だに警戒している部分はあるながらも、それなりに配慮してくれる。

正直、とても「監禁」と呼べる状況ではない。おかげで、立香の気はすっかり緩み……こうして絶賛暇を持て余してしまっているわけだ。

「新聞や雑誌は全部目を通しちやったしなあ……」

加えて、この部屋にはテレビをはじめとした娯楽がない。新聞やそこで知った雑誌は定期的にフェイトたちが差し入れてくれるが、そんなもので潰せる時間はごくわずかだ。かといって、新聞や雑誌ならまだしも、テレビのような高価な品や、完全娯楽目的の品を要求するのめ気が引ける。

となると、あとできることと言えば……

「とりあえず……身体でも動かすか」

これといった器具もないので、腕立てや腹筋といった物がなくてもできる運動に時間を費やすのが最近のマイブーム……まあ、それしかできないからなのだが。そして、それも終わってしまったえば、いよいよ本格的にやることがない。

「というか、今の俺っていわゆる『ヒモ』なのでは？」

その認識に至った瞬間、立香の身体に電流が走った。そして凹んだ。

ヒモ、つまり女性に働かせ、金銭を貢がせたり養われたりしているダメ人間。今の立香は、「監禁」という状況を差し引けば否定のしようがないくらいにヒモだった。

だって働いてないし、家から一步も出てないし、日がな一日雑誌や新聞を読んでいるか、筋トレをしているか、あるいは寝ているか……立香は思った、「コレはヤバイ!!!」と。何というか、人として。

しかも、相手はまだ十歳になるかどうかといった幼い女の子。ただでさえ事案待ったなしなのに、この体たらく。このままでは、人として最低限の尊厳すら失ってしまう。

決断すればあとは早かった。立香はさっそく行動を開始したのである。

「……アンタ、何やってんだい？」

帰宅したアルフが目にしたのは、腕組みをしてしやがみながら片脚を前に蹴りあげる謎の動作（いわゆるコサックダンス）を繰り返す同居人の姿。思わず、目がごみを見るようなものになったとしても仕方がないだろう。それ位意味不明だったのだ。

「……いや、暇だったからつい」

「……まあ、それについてちやあたしの責任だからいいけど、ホント何やってんだい？」

「なんというか、いまできることだけでも思ったら大してできないからまた暇になって、なんとなく……かな？」

「はあ？」

「あ、そうそう。アルフ、ちよつとこれ買ってきて」

「あんた、ホントにどういう神経してんだい？」

「しようがないだろ、俺外に出られないし」

それを言われると弱いので、釈然としないながらも買い出しに出かけるアルフ。

しかし、彼女も途中で気付く。立香が渡したメモに書かれていたものそれは……野菜を中心とした食材一式と最低限の調理器具、さらに各種掃除用品エトセトラ。

その意味と意義がわからないほど、アルフも鈍くはない。

「あれ、この匂いつて？」

アルフに遅れて帰宅したフェイトを待っていたのは、なんだかお腹の辺りをキュツとさせる香り。

特別芳しいわけではないが、疲れた身体と食欲中枢を刺激するには十分だった。

「あ、おかえり」

「……」

「おかえり」

「っ！ えつと、その……た、ただいま」

「うん、よろしい。お腹すいてるでしょ。手洗ってちよつと待ってて、今できるから」

「おーい立香ー！ とりあえずシートとかは交換したけど、もう夜だ

ぞ！　つてかここ洗濯機とかないぞー！」

「明日出かける前にコインランドリーで洗濯して、それ持ってきてくれれば干しとくから大丈夫」

「……地味に人使い荒いな、あんた」

「ん？　……俺は立っているなら神も悪魔も、鬼も王も使う主義（ドヤアツ）ー！」

「ハイハイ、ソウデスカー」

「あ、信じてないな。ホントなのに……」

（いつの間にか、仲良くなってる？）

出会いが出会いだっただけに微妙な関係だったのがウソのように打ち解けているアルフと立香。

思いもしない事態に呆けたように立ち尽くすフェイトだが、その間にも立香は決して手際よくとはいえないものの、あっちへパタパタ、こっちへウロウロとせわしなく動き回る。

ある時は手に箒が握られ、またある時は雑巾がけをしながら。

そうして遅ればせながら、ようやく思考能力が回復したフェイトも立香が何をしているのか理解した。

「家事、してくれてるの？」

「まあ、暇だしね。というか、養ってもらって何もしてないってマダオ一直線だし……」

「でも、そんなこと気にしなくても！　それにこの匂い、もしかして……」

「それこそ気にしなくていいよ。コンビニ弁当とか久しぶりで新鮮だったけど、ぶっちゃけ三日で飽きたし」

「ご、ごめんなさいー！」

「あ、いや、責めてるわけじゃないんだ。二人とも忙しいのはわかってるし。でもそれなら、俺が作れいいわけだ。むしろ、気付くのが遅れてごめん。まあ、俺もたいして上手くないけど良ければ食べてくれると嬉しい」

フェイトを椅子へと引っ張っていくと、またウロチョロ動き出す立香。寝室の方からは、シーツをはじめとした洗濯物を抱えたアルフも

出てくる。元々、必要最低限の衣類くらいしか持ってきていないので、替えのシャツやタオルなどはなかったはず。聞けば、フェイトが帰ってくる前に立香に買いに行かせられたそう。

フェイトも何か手伝おうとするが、粗方終わっているとわれ所になさげに椅子に座る。そして、間もなくフェイトの前にそれが差し出された。

「スープと……これは？」

「お粥とかおじやというか……まあ、ライスをスープで煮詰めたもの……みたいなの？ あれ、おじやと雑炊の違いって何だっけ？ まあ、とりあえずちゃんと味見はしてるし、不味くはないと思うから」「にしても、噛み応えのなさそうなもんじゃないかね」

「アルフ、せっかく作ってくれたのにそんなこと言っちゃダメだよ！

ごめんなさい、えつと……」

狼らしく、肉や噛み応えのあるものを好むアルフらしい言葉だが、流石に失礼と思って窘める。

が、当の立香は「まあ、当然の反応だよ」とばかりに苦笑を浮かべているだけで気分を害した様子はないことに安心する。自分たちの都合でしぼりつけている自覚と罪悪感があるからだろう。

そして、実際せっかく作ってくれたのだから食べないという選択肢はフェイトにはない。まずはスプーンでスープを一口する、その味は確かに「不味く」はなかったが、かといって特別美味というわけでもない、本当に普通の味だった。強いて言えば塩分控えめにし、野菜を細かく刻んで消化に良いよう配慮されたそれは、「優しい味」と称するのが正しいだろうか。

ただそれ以上にフェイトは、身体の芯に何か暖かなものが染み込んでいく気がした。

「……えつと、美味しい、です」

「ならよかった。さ、冷める前に食べよう」

フェイトの言葉が世辞だということにはわかっていたが、あえて突っ込むような真似をせず自分もスプーンを取る立香。食べてみれば案の定、食堂の主のそれには到底及びもつかない中途半端な品。

ただ、フェイトのスプーンが淀みなく進んでいる様子を見るに、チヨイスは間違っていないなかったらしいと安堵する。日に日に疲労の色を濃くするフェイトの顔色は決して良いとは言えず、出された弁当や冷凍食品の進みも良いとは言えない日が続いていた。

だからこそこのメニュー。立香もストレスが原因で食が進まず、正直味の濃いコンビニ弁当などは吐き戻しそうできつかったが、無理矢理にでも腹に入れなければ始まらないという経験のおかげで、苦にはしても無理ではなかった。

だからこれは、ほぼフェイトのために考えたメニューだ。料理に限らず家事全般を仕込んでくれた、小言の多い赤コートのオカンには感謝せざるを得ない。

これをきっかけに、立香とフェイトたちの関係は少しだけ変化した。

相変わらずフェイトは自分たちのことは何も語らないが、少しでも早く帰ってきて家事を手伝ったり、食後に一緒に洗い物をしたり、あるいは外でどんなものを見て聞いたかといった他愛のない話をするようになった。

立香は静かに二人の話に耳を傾け、時に相槌を打ったり気になった点に言及し話を広げたりしている。若干人見知りの気があるというか、引つ込み思案などのあるフェイトだが、立香相手には驚くほど自然に言葉が続いた。心を赦しているからではなく、立香が「話を聞く」のが上手いからだろう。

立香との交流は間違いなくフェイトの心の疲労を軽減していたが、それでも根を詰めれば疲労は蓄積する。立香も休養を勧めようと思っただことは一度や二度ではないものの、自身より遥かにフェイトに近い存在であるアルフが勧めても聞き入れてくれないことから、あえて言及しなかった。

フェイトは意志が固い：というか、もはや頑固や意固地の段階に入りつつある。だからあまりこの話題に触れると、むしろさらに頑なにさせてしまうと気づいていたからだろう。必要とあらばズケズケと相手の内面に踏み込むことも辞さない立香だが、フェイトの場合それ

はかえって彼女を追い詰めてしまうから。

とはいえ、立香としても今の状態を放置することはできない。さてどうしたものか……と思索していた折のこと。

「……ん、ちよつと、寝すぎちゃったかな？ アルフは……」

重い瞼を開け、倦怠感が澱む身体を何とか動かしてベッドから出るフェイト。頭もはつきりしておらず、体調が好調からは程遠いという自覚はある。まだ体調を崩してこそいないが、それも時間の問題だろう。

そうとわかっていてもなお、フェイトは休息をとろうとは思わない。彼女にはやるべきことが、やらねばならないことがあるのだ。それがたとえ、「正しくない」ことだとしても……笑ってほしい人が、いるから。

「アルフ、もう出ちやった？ 立香、アルフは……立香!？」

寝室から出てきたフェイトが目にしたのは、リビングの床で横たわる立香の姿。

（病気？ それとも転んでどこかにぶつかつたとか？ えつと、この場合どうしたら……）

頭を強く打った場合、急に抱き起したりすればかえって症状が悪化する。と教えてくれたのは、今はもういない彼女の家庭教師だ。そのことを思い出し、慌てて駆け寄りながらも直前で踏みとどまるフェイト。

見たところ外傷はないようだが、どうして倒れているのかわからない以上断定はできない。まずは熱の有無を確認しようと手を伸ばしたところで、ガバツと立香が体を起こした。

「ごめん、心配させた？」

「……寝たふり……ううん、倒れたふりだったの？」

流石にフェイトも眉間に皺をよせ、険しい表情を見せる。まあ、立香からすれば懸命に怒った表情ですら可愛らしいとしか映らないが。まあなんというか、はつきり言って立香を慄かせるには迫力が足りない。

「さて、どうかな？」

さすがに本当に意識が飛んでいたとは言えないので、こういう時は適当に誤魔化して話を進めてしまうに限る。

「とりあえず、せっかくだからそこに座って」

「? それで、なんでこんなことを……ちゃんと説明」

「ほら、ごらん。今日はいい天気だ」

「え、天気?」

食い気味に言われて窓の外を見上げれば、そこには雲一つない青空が広がっていた。

そしてフェイトにはそれが、なんだかとても久しぶりな色な気がした。空を飛ぶことができる身であるにもかかわらず、随分と空を見ていなかったような気さえする。だからだろう、こんな当たり前のことを思ってしまったのは。

(空って、こんなに青かったんだっけ……)

「晴れた日の午前中、ここには気持ちのいい日差しが差し込むんだ。夏だと暑いだろうけど、この時期なら昼寝にはもってこいだよ。というわけで、はい」

「……枕?」

「今日はお休みです。そのままもう一眠りしなさい、命令です」

「なっ、ふ、ふざけないで! 私、やることが……」

「それで今日か明日か、それとも明後日か……近いうちに倒れることになっても?」

「それ、は……」

「君が頑張ってるのはわかってる。でも、今日頑張って数日倒れるのと、今日休んで最後まで走り切る。どっちがいいか、わからないフェイトじゃないだろう?」

「……」

立香の言わんとすることはわかる。だが、それでも……と、心が焦ってしまうのも事実だ。早く、早く、一日でも早くあの人の願いを叶えたい。もう一度、笑ってほしい……そのためなら、倒れたって。

しかし、そんなフェイトの悲壮な思いを他所に、立香は再度床の上に寝転ぶ。

「じゃ、おやすみ」

「つて、寝ちやうの!?　だ、だったら私、もう行くからね!」

「うん、それが君の選択ならそうするといい」

「……え?」

「俺に君の選択を歪める権利も資格もない。できるのは、提案することだけ。だから、これはお誘い。いい天気だし、一緒に昼寝でもどう?　つてね。一緒に寝るもよし、寝ないもよし、場所を変えるのもいい。全部、フェイトの自由だ。君が決めていいんだよ」

「私の、自由……」

その言葉が、なんだか不思議と胸の奥深くにストンと落ちて行った。

(私の自由、私が決めていいこと。しなきゃいけないでも、するべきでもなくて、〃してもいい〃こと)

それは、とても久しぶりに届いた響きな気がする。

だからだろうか、気付くと枕を下ろし、立香に寄り添うようにして体を横たえていた。

(ああ、あつたかい。今日は本当に、いい、天気…だ…)

瞼を閉じれば、あつという間に眠りの世界へと落ちていく。その日フェイトは夕方になるまで、都合7時間以上眠り続けた。目が覚めた時には大いに慌てたし、よくよく考えれば寝顔を見られたことへの羞恥心に真っ赤になったりもしたが、随分と体が軽くなった気がする。

だから、彼女は失念していた。一緒に眠ったと思っていた立香が眠る自身の身体にタオルをかけ、眠るまでの間そつと髪を梳いていくれたことに。

小さな変化が降り積もる日々。

いつの間にか、立香が眠っているとつられて眠ってしまうようになった。頭を洗うのが苦手なフェイトは、アルフの帰りが遅い日には立香と一緒に風呂に入って頭を洗ってもらうようにもなった。まあ、後者については立香も非常に困っていたのだが、「まあ子どもだし」ということで自分を納得させていたわけだが。

そうして自分のことも、相手のことも、何も知らせず、何も知らない

いままわずかずつ二人の関係性は変化していった。初めは監禁した側とされた側、次第に世話をする側とされる側へ、そして……気付けば、なんと呼べばいいかわからない間柄になっていた。

やがてフェイトは怪我をして帰ってくるようになった。ある時は手を、またある時は肩を、酷い時には全身を鞭で打たれたような姿で。その度に立香はアルフとともに手当てをしてきたが、ある日アルフは帰ってこなかった。

誰よりもフェイトを案じていた彼女がフェイトの傍にいない。その異常性を立香はよく理解していた。

「フェイト」

「なにも、聞かないで」

フェイトは頑なだった。いや、固く閉ざした……というのが正しいのだろう。

そもそも、これまでも何度か立香は対話を試みたことがある。だが、彼女は自身にまつわることは徹底して何も語ろうとしない。普通に話ができるようになったし、食事をはじめとした家事のことで感謝もされている。そういったことについては、恥ずかしがったり控えめながらに自分の思いをちゃんと口にしてくれる子だ。きつと、しつかりとした大人に厳しくも優しく育てられたのだろう。

ただ、外で一体何をしているかや彼女の関係者の話になると固く口を閉ざす。そこに、彼女なりの配慮が多分に含まれていることはわかる。立香を巻き込まない、その一点においてフェイトは大変頑固だった。

実を言えば、いつそ空気を読まずに踏み込むべきかと思つたことは一度や二度ではない。だがきつと、それはフェイトを追い詰める結果にしかならないことは容易に予想できた。

ただでさえ、最近の彼女は悲壮感すら漂っている。これ以上追い詰めるようなことはしたくない。むしろ、少しでも心身を安らげられる場所を提供すべきではないか。そう思つた立香は、あえて踏み込むことをしなかった。

代わりに、彼が選択したのは……

「あつ……あの！」

「何も言わなくていいから。今はゆつくり眠るといい」

「……………うん」

フェイトをベッドに横にならせ、その頭をやさしくなでる。立香にしてやれることはあまりに少なく、この程度このことしかできない自分に歯噛みする。

それでも、立香はせめて精一杯の思いやりを込めて絹の如き金の髪に触れる。この健気で優しい子が、少しでも張り詰めた心を緩められるように。

「フェイトは、偉いね。その年でこんなにも頑張つて……君は、本当に立派だ」

「私は、そんなんじや……」

「それは、君がよくないことをしているから？」

「っ!? それ、は……」

「答えなくていい。ただ、君の様子を見ればなんとなくわかる。正しいと思えることをしているなら、君はもつと誇らしく胸を張っているはずだ。そうじゃないつてことは……そういうことなんだろうつて、俺が勝手に思つてるだけ」

フェイトにとってその指摘は、ある意味とても恐ろしいものだった。立香の指摘が正しいからこそ。

だって彼女は、立香に自分が「悪いことをしている」と知られたくなかった。なぜかは自分でもよくわからないが、この人に軽蔑されたくないと思う自分がいたのだ。

しかし、そんなフェイトの不安は杞憂に終わる。立香はそもそも、善悪で他人を差別するような精神性をしていないのだ。

「たとえ君のしていることが正しくないとしても、それでも君が誰よりも頑張つていることを俺は知っている。それも、きつと自分以外の誰かのために。それは、事の善悪とは別の問題だよ。一生懸命頑張つている、その事実はちゃんと評価されるべきことだし、俺はそんな君を尊敬している」

「尊、敬……私、なんかを？」

「だから、君はとても立派だと思う。誰かのためにそんなにも頑張れる君は、いつかきつと……みんなに愛される女性ヒトになる」

「愛……して、もらえるのかな？」

顔を枕に埋めたまま、か細い……涙声ナミナが漏れてくる。

「うん、きつと……」

「私、頑張ってるよね？」

「ああ、ちよつと頑張りすぎなくらいに」

「頑張ったんだ、母さんに喜んでほしくて、もう一度笑ってほしくて。頑張つて、頑張つて……でも、なんでこんなに辛いのかな、苦しいのかなあ？ 私はまだ、母さんに笑ってほしいだけなのに……」

それは、初めてフェイトが零した自身にまつわる話であり、心からの慟哭ナミナだった。

甘えることをせず、弱音を吐くことなく、痛ましいほどに強くあるうとした彼女が見せた弱さ。

そこから先は、もう言葉にはならなかった。縋りつき、ひたすらに泣きじやくるフェイトを、立香はただ黙って受け入れる。

立香は彼女の家庭環境について無知に等しい。何も知らない者が、賢しげに語っていいことではない。

その日、フェイトは泣きながら眠りについた。そんな彼女に寄り添いながら、立香はこの日々の終わりが近いことを理解する。

だからこそ、決めたのだ。自分がこの子のためにできることはあまりにも少ない。ならせめて、できる限りのもの言葉と想いを送ろうと。

(ドクター、あなたもこんな気持ちで俺たちを見ていたのかな)

フェイトの寝顔に、今は亡きかけがえのない人のことを思い出しながら。

明くる朝、フェイトは立香に別れを切り出した。もう自分はここには帰ってこない。だから、あなたももう自由だ、と。思いつめた表情のまま、その姿は今にも泣きだしそうに見える。

そんなフェイトが最後に紡ぐ言葉が、立香にはなんとなく分かった。「ありがとう」か「ごめんなさい」か、そのどちらか。そしてきつと、この子は後者を選ぶ。だからその前に、伝えることにした。精一

杯の思いを。

「立香！ 今まで本当に」

「ありがとう、フェイト」

「ごめ……え？」

「俺と出会ってくれて、ありがとう。君と会えて、本当に良かった」

「どう、して……」

訳が分からないとばかりに呆気にとられるフェイト、きっと彼女は思いもしないのだろう。毎日懸命に、それが正しくないと知りながらも頑張り続けてきた小さな女の子。その背中に、立香がどれだけ救われたかなど。

「君が、頑張っていたから、かな。だから俺も、頑張るよ。色々大変なことでも苦しいことも、辛いことだつてあるけど……それでも、俺も頑張つていくから。」

だからフェイト、君も——「頑張つておいで」

「頑張らなくていい」と弱さを赦すのではなく、「頑張れ」と励ますのでもなく。「頑張つてもいいんだ」と自身の思いを認めてくれた言葉。母のため……そう思いながらも、果たしてそれは許されるのだろうか、心のどこかで揺れていた。でも本当はやっぱり、母のためにできる限りのことをしたかった。

きつと、「頑張らなくていい」と言われても弱さを見せることはできなかっただろう。「頑張れ」と言われれば、さらに追い詰められてしまったかもしれない。だが、立香は「頑張つておいで」と言ってくれた。フェイトの頑張りとは、「頑張りたい」という思いは正しいのだと、そう言ってくれたのだ。頑張りそのものではなく、その奥の思いを許してくれた。

「他ならぬ、君自身のために。いつか、この日のことを思い出した時に、自分に胸を張れるように」

「……うん、うん……！」

あふれる涙をぬぐいながら、何度も繰り返す。今の思いを、なんと言葉にしているかわからなかった。

「そうだ、もう一つ君に伝えないといけないことがある」

「伝える、こと？」

涙でぬれた赤い瞳で見上げる女の子に向けて、立香は心に深く刻まれた言葉を贈る。昨夜、「辛い」「苦しい」と零した彼女のため……今すぐでなくてもいい。いつか彼の言葉が、この優しい少女の救いになればと願って。

「ある人が言っていた。命とは終わるもの。生命とは苦しみを積み上げる巡礼だ、って」

「……じゃあ、私たちは生きている間ずっと、苦しまなくちやいけないの？」

「いいや、それは違う。確かにあらゆるものは永遠ではないし、最後には苦しみが待っているのかもしれない。」

でもそれは、断じて絶望なんかじゃない。限られた生をもって死と断絶に立ち向かうもの。終わりを知りながら、別れと出会いを繰り返しつづめるもの」

そう、それは決して苦しいだけの道ではない。生きるということとは誰かと出会うということ。出会いとは、魂の欠片の交換だ。受け取った欠片は自分自身と混ざり合い、次の誰かに新たな欠片となって引き継がれる。

そうして人はどこまでも遠く、どこまでも広く繋がっていく。たとえ生命が終わったとしても、自分という存在は終わらない。それが人間という種の輝きであり、それこそが歓びなのだ。

だからこそ、最後には別れが待っていると知りながらも、どんなに辛く悲しい離別を経験しても、人は出合いを繰り返し返す。

出会った誰かと「愛」を育み、別れの先で「希望」と繋がることを知っているから。

今のフェイトにとって生きることとは辛く苦しいものかもしれない。だがいつかきつと、それだけではないことに気付く日が来ることを願って、この言葉を贈ろう。

「……輝かしい、星の瞬きのような刹那の旅路。これを、愛と希望の物語と云うんだよ」

「よく、わからないよ……」

「大丈夫、いつかきつとわかる日が来る。たくさんの人と出会って、別れて……そうしていつか気付く。君の人生は、ただ目が覚めているだけで」

——眩く、輝いていることに。

他ならぬ、フェイト・テスタロッサの輝きに救われた立香だからこそ、断言できることだった。

そうして、別れの時が訪れた。立香はフェイトの頭を優しく撫でて、「さよなら」と一足早く部屋を後にする彼女に一つ訂正を入れる。「フェイト。いいかい、覚えておくといい。こういう時はね、『またね』って言うんだよ」

「でも、私はもう……」

「この国には『縁』という言葉がある。簡単に言っちゃえば、人と人とのつながりだったり、めぐりあわせのこと。それは、どこでどう絡み、結び、繋がるかわからない。一度は切れた縁が、思いもかけない所でひよっこり顔を出したりするものさ。俺も君も、まだまだ人生は長い。だから、何かの拍子でまた会うことがあるかもしれない。だからここは、『またね』が正しいんだよ」

そうして二人は別れた。この時のフェイトにとっては今生の、立香にとっては一時の別れ。

フェイトに遅れて立香も部屋を後にするが、最後に人の気配のしなくなった部屋を振り返る。

「じゃあ、行ってくるよ。ドクター、パツシイ」

同時に、それまでであった現実感が薄れていく。どうやら、この長い夢はようやく終わりを迎えたらしい。それにどんな意味があったのか、それがわかるのはずいぶんと後のこと。

それでも、金色の優しい光との出会いには、確かに意味があったのだ。

「さあ、世界を滅ぼす旅を続けよう」

自分もまた、胸を張って進めるように。もう一度あの子と会った時に、恥ずかしくない自分であるために。

そう、なんとなくだが、フェイトとはまた会う気がしていた。

そしてその予感も、現実のものとなる。以降、立香は度々この世界に紛れ込む。ある時は数時間、またある時は数日にわたって。

そうになると、寝床くらいは必要になる。

とはいえ、立香に裏工作の類を行う手練手管などない。なので、誰とは言わないが頼りになる悪い大人たちに相談し、とりあえず住居くらはい確保することに成功する。

そして、フェイトとの別れから数ヶ月後、冬のある日……とある街角で二人は再会することになる。

* * * * *

その日、フェイトは人生初の敗北を喫した。

決して負けられない戦いだった。全身全霊を費やし、それでもなおあと一步のところが届かなかった。

母の願いを叶えられなかったことへの申し訳なさが胸を満たす中、だが不思議なことに少しだけ……そう、ほんの少しだけ「誇らしかった」。

確かに結果は伴わなかったけれど、それでも……

(ねえ立香、私……頑張ったよ。負けちゃったけど、それでも今の自分ができるだけのことはしたって、そう断言できる。君は、褒めてくれるかな?)

彼が贈ってくれた言葉の意味はまだほとんどわからないけど、この誇らしさは本物だと思う。

誰の為でもない、母の為ですらない……最後まで頑張った、自分自身への。

そして、だからこそ思う。今まさに海に落ちた自分を引き上げた、白い少女に。

「……………君は、スゴイね」

それは自身の全力をうち破った相手への、惜しみない賛辞だった。

EX02 闇の書事件

闇の書事件について、か……。まあ、私を除くわけにはいかないな。……そうだな、うん。わかってる、わかってるんだが……。はあ。

——（あれ？　なんか、予想外の反応。なんでこんなに落ち込み気味？）

ああ、すまない。私としても色々と思うところがあるというか、複雑というか……。な。

——そう、なんですか？

己の罪も咎も理解しているつもりだ。だから、この身が消え果るその日まで、私は贖い続けなければならない。許されるかどうかの問題ではなく、それが私にできる……。ただ一つの責任の取り方なのだ。

だが、その贖罪の道に我が主や騎士たちを巻き込んでしまっていることには、正直忸怩たる思いがある……。と言うと、また主や將に怒られてしまうのだろうか。

——というか、表立って怒らないのなんてザフィーラぐらいなんじゃ……。

そうだな。ヴィータはそれこそ將のお株を奪う勢いで烈火の如く怒ってくれるだろう。

——シヤマルさんならやんわりと……。でも、笑っていない目で怒りますよね。ザフィーラだって、表には出さないだけでしたっけ怒ると思いますよ。

末っ子たちには「何を水臭い」と滾々と説教されそうだな。それも、寂しそうな顔をして……。説教以上に、そんな顔をされては困る。

だから、実を言うとこのことは今まで皆には言ったことがないのだ。すまないが、オフレコで頼む。

——まあ……。はい。

だがな、それでもやはり……。申し訳ないという思いは拭えない。特に、士郎には。

——（なんで士郎さんなんだろう？　そりゃ、厳密には夜天の書の関係者ではないわけだし、わからないではないけど……。それならり

インさんやアギトだつてそうなわけだし)

……その様子だと、聞いていないのだな。

——あの、何を……。

士郎もまた、私の……闇の書の被害者なのだ。ハラウン家の様に……あるいは、より直接的な。

——え……。

主はやての先代の時のことだ。先代は……なんというか、力に対して貪欲な方だった。積極的に騎士たちに蒐集を命じ、それこそ殺生も厭わないほど強引に蒐集を進めておられた。

しかし同時に、狡猾な方でもあった。管理外世界では蒐集の効率が悪いことから管理世界を主に狙いながらも、管理局の手が及ぶのを遅らせるために主要な管理世界は避けるといったようにな。

結果、開拓地の集落を壊滅させるといったようなことも少なくなかった。

——それって、トーマの故郷みたいな……？

確か、スバルが保護した子だったな。うん、あの二人は生い立ちが似ているかもしれない。なにしろ、その一つにいたのが……士郎だったのだから。

——っ！

彼らは勇敢に戦った、大切なものを守るために。だが、開拓に従事する者たちの戦闘能力はそう高くはない。そんな、ささやかな抵抗はかえって先代の怒りを買ってしまったのだ。蒐集や戦闘による死者は決して多くはなかったが、生じた炎を先代は放置した。その結果……集落は炎に飲まれた。

士郎はな、その集落の唯一の生存者なんだ。

……いや、管理局とは別に闇の書を追っていた衛宮切嗣が遅ればせながら駆け付けなければ、それこそ命はなかっただろう。燃え盛る集落の中、助けを求める声を置き去りに、無残に焼かれる命を見捨てることで……士郎は、辛うじて衛宮切嗣に命を拾われたのだ。

——……そんなことが、あつたんですね。でも、こういつたらなんですけど、どうして士郎さんは、その……。

今なお我らとともにいるのか、か？ 当然の疑問だ。ただ、その様子だと土郎の来歴は知らないようだな。

——あ、はい。土郎さん、自分のこととか全然話しませんし。私にとつては、美味しいご飯を作ってくれる食堂のおじさんってイメージで、逆に他のイメージってほとんどないんですよ。クリスマスはああですからお世話になることもないし。

おじ……いや、懐かしいな。お前は知らないだろうが、当時局内報で「管理局一美味しい食堂」として報じられたこともある。なにしろ、六課解散の半年前の時点で高級士官用の食堂に勧誘されたこともあったし、一流ホテルやレストランから散々声をかけられもした。まあ、結局蹴つてしまったわけだが。

——そう考えると、私スゴイ贅沢な環境で育つてたんですね。そういえば、ヴィヴィオを引き取ることを決めた後、なのはも随分と悩んでいたな。『ヴィヴィオが土郎さんの味を基準にしちゃったらどうしよう……』とな。がっかりさせたくないからと、こつそり土郎に教わったりしていた……しまった!? これは言つてはいけないんだった。すまないが……

——？ ヴィヴィオは何も聞いてませくん♪ ただ、ママに『いつも美味しいご飯ありがとう』とは言うかもしれないが。

そうしてくれ。

——で、六課解散後は八神家の専業主夫、と。あ、でも確か、お知り合いのレストランとかホテルにヘルプに行くことはあるんですよ。しかも、ほとんどが一流とか高級とかがつく。で、偶に騎士カリムとかの依頼で刀剣系のアームデバイスを手掛けてるんでしたっけ。

ああ、なんでも受けていると大変なことになるからな。主の提案で、知り合いの紹介に限定しているんだ。そうでもしないと、限界ギリギリまで受けてしまうからな、土郎は。

まあ、デバイスマイスターとしては事実上、半ば将の専属のようなものだが。

——加えて、アインスさんがマネージャーとして調整してるんで

すよね。

……そうしないと、他の仕事もどんどん入れるからな。いくらリンやアギト、主やシャマルも家事を手伝うとはいえ、ヘルプにデバイスにと……自分のキャパシティは平気で無視する男だ。本当に、頭が痛い。

——あ、あははは……そういえば、ミウラさんに聞いたんですけど、八神家道場に通うようになったのは土郎さんの紹介って本当なんですか？

ああ、そうだよ。ミウラのお父上とは店を開く前、当時働いていた高級ホテルのヘルプに行った時に知り合ったらしい。開店間もない頃や、ニュースや雑誌で取りざたされて忙しい時には今も手伝いに行っている。

かけがえのない、土郎の良き理解者だ……つと、話が逸れたな。

——あ、そういえば……たしか、土郎さんの過去でしたよね。

ああ。

——でも、私が聞いちゃってもいいんでしょうか？

昔のことを話すなら、そこに触れないわけにもいかないさ。土郎も、わざわざ話さないだけで別に秘密にしているわけでもないからな。

——それなら、まあ……。

衛宮切嗣に拾われた後は、彼に頼み込んで助手としてついて行っていたらしい。

一人でも多くを助けるために……ただそれだけなら、局員を目指すという手もあった。だが、土郎は知っていた。

管理局は法の下に動く組織だ。だからこそ、動きたくても動けない時、手が回らない場所、対処できない事案というものが存在することを……身を以て、な。

だからこそ、アイツは衛宮切嗣の後を追おうとした。管理局の手が及ばない場所、動けない時、対処できない事柄を処理する……それは、一般的な倫理や道徳で見れば善しとはされない、いうなれば「闇の正義」の執行者として。

——— そうですね、衛宮切嗣さんってどんな人だったんですか？

……難しいな。直接面識のある者自体が少ないし、士郎自身まだ当時は幼かった。彼の人物像、在り方を正しく把握できていたかということ……だから、情報はどうしても断片的なものになる。

それでも、一言で言うなら「傭兵」だろうな。依頼を受け、金銭を報酬に活動する……とはいえ、どちらかと言えば「殺し屋」あるいは「暗殺者」というのが妥当かもしれない。

法の目をかいくぐる違法研究者、強力な力を有した武装組織、そういった連中を相手に真っ向から仕掛けるのではなく、彼らの死角を、盲点を突く形で無力化する。例えば、どんな手段を使っても。そういう男だったようだ。

ただ、根底の部分でなにを考えていたかはよくわからない。彼は戦場にも赴いていたようだが、どれも戦況が最も激化した時期だったらしい。同時に、ロストロギアの収集にも精を出していたようで、闇の書事件の後彼の集めたそれらは管理局が預かることになったが、相当な量があったそうだ。

これだけ派手に動いていた分、界限では相当に悪名が広まっていたらしいがな。何しろ、同業者からすら「外道」の烙印を押された男だ。管理局でも、危険人物の一人としてマークしていたようだ。

ただ、裏で一部の高級局員や聖王教会の上役とも繋がっていたのだと思う。そうでなければ、騎士たちが動き出す何年も前から、主の下に士郎がたどり着けるはずがないからな。

——— じゃあ、士郎さんはずっと切嗣さんの指示を受けてたんですか？

……いや、士郎が主と接触した時にはすでに帰らぬ人だったらしい。確か、患っていた病が急激に悪化したのが原因だったと聞いている。

そして、衛宮切嗣が病に倒れる前に受けた仕事を士郎が引き継いだのだと。まあ、士郎自身その仕事が誰からもたらされたかまでは知らなかったようだが。彼は士郎を助手としていながらも、徹底して依頼主などとは会わせなかったそうだ。

——切嗣さんなりに、士郎さんのことを心配してたんですかね？
まあ、それも完全ではなかったようだが。おそらく、騎士カリムなどはその当時の士郎と面識があるはずだ。

——え、そうなんですか!?

なんでも、主に付き添って聖王教会に行った……というか、相当に抵抗するから連行したらしいが。その際、騎士カリムに明らかに動揺し、騎士カリムも少し驚いていたそうだ。それに、シスター・シャツハも難しい顔をしていたと聞いている。まあ、ヴェロツサは無反応だったようだが。

——どんな関係だったんでしょうね？

それが、何を聞いても三人とも答えてくれないのだそうだ。士郎はあからさまに話題をそらすし、騎士カリムは鉄壁の微笑みで寄せ付けず、シスター・シャツハは不機嫌そうな顔で「あんな人は知りません」の一点張りだ。

——結構複雑な間柄なんでしょうか？

実を言うと、主は少し騎士カリムを警戒していてな。

——え？ でも、お二人って仲いいですよ。こう、姉妹みたいというか……。

無論、邪見にしているとかそういうことではない。ただ、士郎のことに関しては、ということだ。

なんでも、騎士カリムの士郎を見る目が怪しいとかなんとか……。

——まあ、士郎さんぶつきらぼうに見えてあれで結構ドン・ファンですもんね。

一途な男だから、主以外の女性に手を出すような真似はしないだろうが、それはそれとして他意なく「可愛い女の子は好き」とかいう男だからな。困ったものだ。

まあ、それはともかく。そういった経緯で、士郎は主に接触した。そのあとのことは知ってる通りだ。士郎はヘルパーとして主の下を通うという形で監視し、主の覚醒を待った。そこで監視役に徹しきれず、料理をはじめアレコレ教えていたのは、実に士郎らしい話だが。

——でも、その間に何かがあったんですよね。だって、そうじゃ

なかつたら……

ああ。いつからかはわからないが、士郎はきつとずっと悩んでいたのだと思う。

夜天の書……いや、闇の書の悲劇は繰り返されてはならない。他ならぬ士郎自身が、誰よりも強くそう思っていたはずだ。

だが同時に、願っていたんだ。どうかこのまま、主が覚醒の日を迎えることがないようにと。

そして、一つのきつかけがあつた。主の誕生日の少し前、夜二人で星を見上げながら贈り物には何が欲しいかと。

——八神司令は、なんて？

………「本当の兄妹になりたい」と。

それ以前から、主は「しろ兄」と呼んで士郎を慕っていた。だが、同時にわかつていたんだ。士郎がご自身を見る目が、時折ひどく辛そうな、あるいは苦しそうな目をしていることに。

はじめは、その目がひどく嫌だったのだそうだ。同情か、憐みの目で見られているのではないかと。士郎以前にもヘルパーはいたが、そういう目で見られるのが嫌で長く同じ人物に通ってもらつたことはいらないらしい。それこそ士郎も、しばらくしたら……そう思っておいでだったそうだ。

しかし、主は聡い方だ。だから、お気付きになられたのだろう。士郎の目が、今までの誰とも違うのだということに。そうして二人の関係は続き、いつの間にか兄妹の様になつていた。主ご自身も、いつから「しろ兄」と呼ぶようになっていたかは憶えておられないそうだ。

——それで、「本当の兄妹」なんですね。

主は、ご自身の命が長くないことを察しておられた。きつと、大人になることなく……と。

あの頃から、主は士郎を好いていたよ。だが、ご自身の幼さや長くない余命をよくご存じだった。だから、恋人やそれ以上など望むべくもない。ならせめて「兄妹」に、「家族」になりたいと願つたのだ。

家族ならば、きつと士郎は長くご自分を憶えていてくれるだろうから。士郎の「疵」としてではなく、優しい「思い出」として。

きつと、主も心のどこかで気付いておられたのだろう。士郎の「歪さ」に。だからこそ……

——歪さ、ですか？

我らは、士郎にとつて仇だ。それと家族になるなど、普通ではない。

——でも、リンディさんやクロノさんは……。

確かに、お二人にとつてもそうだろう。だが、士郎にとつて我らはより直接的な仇だ。

なにしろ、直にその目で見ているのだからな。騎士たちが、自身の故郷を蹂躪する様を。

だというのに、士郎は一度として我らに恨み言を口にしたことがない。それどころか、自分から過去のことにも触れたこともない。

そして、騎士たちが主を救うべく誓いを破ろうとしたあの日、己の知る全てを明かして懇願したのだ。主を救うために、共に死んでくれと。

——そういえば、映画でもヴィータさんたち言っていました。ママたちが夜天の書のことを話そうとしたら、「ごちとら全部承知の上でやってんだ」って。

そういえば、そういうものもあったな。

——それでヴィータさんはママに、シグナムさんはフェイトさんに……。

ああ、アレは事実だよ。主は二人にとつて何なのかと問い、あの子たちは「友達」と答えてくれた。

だから、将たちは二人に託そうとしたのだ。騎士たちを、兄を失つて一人残される主と、あの大馬鹿者の真実を。

——確か、元々は士郎さんが黒幕扱いにする計画だったんでしたっけ。

士郎はそのつもりだったし、確かに主をお守りする上ではそれが最善だ。

だが、同時にそれは主を酷く傷つける最悪の嘘でもある。なにより、主ならいずれその嘘にお気付きになる。その段になって、真相究明に動かれてはことだ。万が一にも真相にたどり着かれでもして、そ

れを公表されたらどうなる。せつかくの嘘が台無しだ。

ならばいつそのこと、信頼できるものに真実を委ねようと決めていたのだ。どうか士郎の思いを汲んで、真相を闇に葬ってもらうために。

——でも、ママたちは納得しなかった。

泣きながら怒っていたよ。「そんなのないよ」「そんなに愛しているのにどうして」とな。

ふっ……衛宮切嗣も、まさか士郎が主のために命を捨てるとは思わなかっただろう。

もしかすると彼は、士郎を救うためにあの仕事を受けたのかもしれない。士郎の歪み、そのきっかけとなった闇の書。その悲劇の連鎖を止めることで過去に決着をつければ、あるいは……と。

しかし、実際には士郎は自らのうちに封印することで主の身代わりとなり、当初の予定通り虚数空間に身を投じることで連鎖を断とうとしたのだから。

——そういえば、士郎さんはどんな夢を見てたんですか？ やっぱり、八神司令との日々？ それとも、故郷の……

……いいや。士郎には夢は見せていない。

——え、どうして……。

簡単な話だ。士郎を取り込んだ時、私は知ってしまった。その心のうちは、故郷のような焦土となり果てているのだと

——焦、土？

実感がわかないかもしれないが、士郎はそもそも生きるのが辛いのだ。息をしているだけでも苦しく、幸福であればあるほどに……。士郎にとって、生きるということは溺れているのと同じなのさ。ある意味、誰かの不幸に直面した時だけ自らの生に意義を見出せる。そんな歪んだ男なんだ。

私はそれを、士郎を取り込んだ時に知ってしまった。初めはせめてもの感謝と思い、優しい夢を見せようと思っていた。だがその過去を、心の在り様を知って……。どうして夢を見せようと思う。

なにも見せず、ただ静かに眠らせる。それこそが、それだけが私に

できる唯一のことだった。あの時、私は本気で思っていたんだ。// 死
“こそが、士郎の救いなのではないかと。

さつきとトーマの名前が出たが、あの二人は似ているようで似ていない。

実を言うとな、あの子の生い立ちを聞いて一度士郎と会わせてはどうかという話になったことがある。だが、私と主、それに士郎が反対したんだ。きつとあの子は、士郎を受け入れられないだろうから。

——そう、でしょうか？

ハラオウン提督の様に遺恨を飲み干したのではなく、士郎はそもそも我らに恨みや憎しみを欠片も抱いていない、抱くことすらできない。

トーマはきつと、大なり小なり犯人を憎んでいるはずだ。そしてそれは、人として当然の感情でもある。

だからこそ、彼にとって士郎は理解できない“ナニカ”に映るだろう。ハラオウン提督ですら、昔は士郎のことを苦手にしていたからな。

——私の知ってる範囲だと、割と仲良くしてる気がするんですが……。

性格的に相性は悪くないからな。放っておけない妹を持つ身として、シンパシーもあるだろう。海鳴にいた頃は、恭也と三人で縁側でよく茶を飲んで、妹たちに「枯れている」「若さが足りない」と酷評されていたそうさ。

要は、士郎の歪みに関連する感情にさえ折り合いがつけられればいいんだが……言うほど簡単ではない。提督の場合、すでに過去の遺恨は飲み込んでおられたのも大きいだろう。

だが、トーマはそうはいかない。あの子が士郎と会うのは、まだ早い。

——もしかして、さつきちよつと落ち込んだのって……。

まあ、そういうことだ。士郎には言わないでくれ。きつと、余計な気を遣わせてしまうだろうからな。

それに、別に責任を感じてばかりというわけではないんだ。昔に比

べ、士郎はずいぶんと穏やかに笑うようになった。今思えば、昔はどこかぎこちなさがあつたが、さすがは我らが主だ。

——— どういうことですか？

さて、夫婦のことだからな。私からは言えないよ。

——— え〜！ ここまで話しておいてそれはないですよ〜！

（かつて主はやては事件の後、士郎を散々詰つた上で「苦しいなんて思えないくらい、最高にハッピーにしたるから覚悟しとき」と宣言しておられた。そして、プロポーズの言葉は「まだまだこれからや。もつともつと、世界一幸せになるんが私らの未来なんやから、楽しみにしててな」だったと。

ありがとう、衛宮切嗣。主はやてと士郎を引き合わせてくれて。そして、見ているか。あなたが思っていたものとは別物だろうが、それでもあなたの息子は———

* * * * *

「モグモグ……それで、こんなところで何してるのさ。あ、これ美味しい。モツキュモツキュ……」

「どれどれ、ヒョイパク」

割と年季の入ったアパートの二階、ワンルームの和室の中央に置いたちやぶ台には似合わない彩り豊かな洋食の数々に箸を伸ばす立香と金髪的美青年。普通ならせまつ苦しい部屋に男二人ではむさくるしいことこの上ないはずなのだが、目の前の爽やかイケメンの前では「むさくるしい」の「む」の字も出てこない。

いくつかの皿に盛られた可視化された女子力の塊を箸でつつきながら、作り手と持ってきてくれた少女へ感謝の念を送ることも忘れない。

ただし、いくら美味しいからと言っても際限なく食べるのはだめだ。

「ムグムグ……ふむ、これはなかなか……ヒョイパクヒョイパク」

「あ、取りすぎ!?!」

「いいじゃないか。何日か分まとめて持ってきてくれてるんだし」

「と言っても、あくまでも俺が一人で食べる前提だから！ 大食漢の同居人は想定されてないから!!」

そのまま、醜いおかずの奪い合いに発展するが、相手が悪い。すました顔で優雅に、しかし確実に戦果をもぎ取っていく眼前の超絶イケメン王子様。圧倒的顔面偏差値と身体能力の差に、もはや悔しさすら覚えない。

まあ、彼とて鬼ではないので、しっかり立香の分のおかずは残してくれているわけだが……数日分がほぼ一日で消費された事実は消えない。

だから、箸を咥えながら恨みがましい目を向けても仕方がないだろう。

「……サーヴァントは食事いらないんじゃないやなかつたっけ？」

「それはちゃんとした契約者がいて、なおかつ十全な魔力供給が受けられればの話だね。足りない分は、別の方法で補うのが魔術の常道だろう？ かといって、魂喰いなんて論外。となれば、後は食事での補給になる」

「ぐう……」

「ぐうの音も出ない……というわけではないみたいだね。まだまだ余裕じゃないか」

甲冑姿のままズツとお茶を啜る騎士様。なんというかこう……和室ということも相まって死ぬほどミスマッチだった。

「……」応聞くけど、私服というか現代風の服ってあるの？」

「ん？ これなら……」

そういつて現れたのは真っ白のタキシード。似合っている、それはもうすごく似合っている。絵本か恋愛小説か、はたまた少女コミックの世界から現れたかのような非の打ちどころのない王子さまっぷり。なんというかこう、意味もなくキラキラ輝いていそうに見える。その輝きは百万ドルの夜景かキラキラ王妃様にも比肩するだろう。おかげで、危うく目がつぶれるところだった。

とはいえ、そんな恰好で街を出歩けるかと言えば……

「無理だよなあ……」

一步外に出れば、逆ナンとスカウトの嵐に見舞われること間違いなしだろう。

それ以前に、TPO的に不釣り合いだ。不適切ではないが、浮いてしまう。

「……はあ。とりあえず、明日何か買ってこるか。安物になるけど、勘弁してよ王様」

「すまないね、苦勞を掛ける。この礼は、いずれ必ず」

居住まいを直し、真面目な顔と感謝の言葉には確かな誠意が感じられた。

「でも、そんなに貧乏なのかい？」

「こつちにいる時間がものすごく不定期なんだ。数時間の時もあれば、数日いる時もあるからね。おかげで、バイトも入れられやしない。だから、基本は日雇いで何とか……」

一つ溜息をついて、残り少ないおかずを口に運ぶ。ゆっくり咀嚼して味わいながら、白米を一口。

白米のお供には著しく向いていないが、贅沢は言わない。むしろ贅沢を言えば罰が当たる。この場合、パンを用意できないくらい赤貧の立香が悪いのだ。ちなみに、炊飯器は中古のものをさらに値切りまくり、米は品質の怪しさに目をつむって購入している……健康面には著しい不安があるが、やむを得ないのだ。だって、先の理由でお金がない。

「……とりあえず、僕も仕事を探そう。何か紹介してくれないかい？」

「ホストでもやる？ 絶対即日ナンバーワンになれると思うけど」

「ハハハハ！ 君の冗談は面白いね」

（目が笑ってない……冗談にしないと『マジ許さん』と目が言ってる）

まあ、彼は彼でいつここを去るか分からない身の上だ。腕力は折り紙付きだし、立香同様日雇いの肉体労働が妥当なところだろう。

（天下の騎士王、ブリテンの赤い竜、アーサー・ペンドラゴンが極東の地方都市で日雇いの肉体労働……イギリス人が知ったら発狂するな）

この点に目をつぶりさえすれば、だが。

「それで話を戻すけど、なんでこんなところにいるのさ？」

「いつもと同じさ。獣の気配を追っていたらこの世界に出た」

「つまり、ビーストが現れる？」

「さて、それはどうだろう。ここはあくまでもただの通過点かもしれないし、たまたま立ち寄った可能性も否定はできない。逆に、ビーストが顕現することも否定できないのだけど。あるいは、もつと別のナニカかもしれないが」

「……………」

アーサーの言葉に、難しい顔をして考え込む立香。何も起きないに越したことはないが、何か起きたとして果たして自分には何ができるだろう。あるいは、立香がこの世界に紛れ込んだのはそれに備えてなのかもしれない。

とはいえ、現状ではサーヴァントを呼ぶことは非常に困難だ。念のため、できる限りの準備はしているが、それでも…………。

それに、一つ気がかりなことがある。

(フェイト…………)

「二ついいかい、立香。さっき、君にこの差し入れを持ってきた子だけど、彼女は何者だい？」

あの年で、随分と良い足運びをしていた。筋も良さそうだし、既に相当な腕だろう。そんな子が、戦いの気配を帯びていたのは、穏やかとは言えない」

アーサーの言わんとすることはわかる。立香には、見ただけで相手の力量がわかるような眼力はない。

ただ、数多の経験からフェイトがアーサーの言うところの「戦いの気配」を帯びていることは察することができた。

アーサーの見る目は確かだろうし、戦いに赴くことへの不安はあるが、ある程度の実力があるというのは安心材料だろう。とりあえずは、アーサーの質問に答えることにした…………のだが。

「ふふっ…………」

「どうしたの？」

「いや、随分とあの子に入れ込んでいるようだからね。もしや……」
「そういうのではありません。あくまでも、フェイトは友達。あるいは……恩人だよ。今俺が立っていられるのは、フェイトと会えたからだ。フェイトを見ていると、俺も頑張らなきゃなってると思う。あの子に恥ずかしくないように、さ」
「そうか、それは良かった。友人として、君の性癖を受け入れるべきか矯正すべきか、どちらなのかと……」
「お……い……」

思わずドスの利いた声を出せば、
「もちろん冗談さ」と肩をすくめる騎士王であった。

「ところで、これは彼女の手作りかな？」
「ん？ いや、確かりンディさん……保護者の人が作ってくれたものらしいよ。」

男の一人暮らしは栄養が偏るからって気を遣ってくれてるんだ
「なるほど。どちらかと言えば、懐事情のせいで偏りがちみたいだし、有難いことじゃないか」

「そう思うなら少し自重して」

ジト目を向ければ「善処しよう」とにこやかに返してくる。

しかし、こういう話をしているとどうしてもフェイトと再会してからのことが思い出される。

何とか日雇いの仕事で借りる部屋と最低限生きていく上で必要な物品を揃えられ、この世界での不定期の滞在にも慣れた冬のある日。

肉体労働を追い、貰った給金にちよつとホクホクしながら「帰りにコロッケでも買って食べるか」と、ささやかな贅自分へのご褒美 沢を考えていた時、懐かしい金色が目飛び込んできた。

なぜか一度だけ見たアルフの狼形態の縮小版のような子犬を連れ、あの時よりも少しだけ背が伸びた女の子。だが、身にまとう雰囲気があの時とは別人のようだった。

張り詰めて張り詰めて、今にも切れてしまいそうだった危うさは最早なく、共に過ごす中で垣間見えた穏やかさが見ただけで伝わってくる。それは本来の、フェイト・テストアロッサの姿だった。

あの優しい少女は、今はもうありのままにあることができる。そのことに、「本当に良かった」と立香は深く安堵した。同時にこうも思う「ほら、やっぱり」と。

もう一度会える気がしていた。

あの時フェイトに言った言葉は正しかったのだと。

フェイトもまた驚きに目を見張り、やがて目尻にうつすらと涙を浮かべながら立ち尽くしていた。

ゆつくりと立香が歩を進めれば、「アワアワ」と慌てだす。どうやら、頭が真つ白になって何を言えいいかわからなくなってしまうているらしい。助け舟を出すべきかと思っただが、その前に子犬がフェイトの後ろに回ってグイグイ足を押ししていることに気付く。

どうやらここは、フェイトから切り出すのを待つべきだろうと察し、手を伸ばせば届く距離で足を止める。

そして、最後の一押しとばかりに勢いをつけた子犬により、一步を近づくとフェイト。

間近から立香の顔を見上げた彼女の混乱はいよいよ頂点に達したようだったが、それでも辛抱強く待つ。少し視線を下げれば、「それでいい」とばかりに子犬が満足げに首を縦に振っていた。

そうして待つことしばし、ようやく少しだけ落ち着いたフェイトはしっかりとした眼差しで立香を見る。

「スー、ハー……は、初めまして！ フェイト・テストロツサです！あの！ 良ければ、私と友達になってくれませんか？」

不安に瞳を揺らしながら、それでも最大限の勇気を振り絞っただろう言葉。もちろん、答えなど決まっている。

「藤丸立香です。俺でよければ、喜んで」

差し出された手を優しく握れば、心底ほっとした様子でほほ笑むフェイト。そこにはかつてあった鬨りは微塵もなく、それだけでこの半年が彼女にとってとても優しく暖かなものだったとわかる、そんな笑顔だった。

それをもたらしてくれた、フェイトを救ってくれた、顔も知らない誰かに立香は心からの感謝をささげた。

その後、久しぶりの再会ということもあって互いの近況について伝え合う。

もちろん、言えないことは多いがそれはフェイトも同じようなのでお互いさまということにしておく。

その時はそれで別れたのだが、翌日フェイトは立香のアパートに突撃を仕掛けてきた。驚くべき電撃作戦だった。

なんでも、今お世話になっっている保護者の人が差し入れを用意してくれたというのだ。ちなみに、フェイトも毎回手伝っていたらしく、しかも徐々に比率がフェイトメインに変わっていき、一年も経つ頃にはほぼフェイトが作っていたと知ったのはずいぶん後のことだ。

とはいえ、この頃には全く知らないことだし、知っていたとしてもせつかく作ってくれたものを無碍にするなどできるはずもない。そもそも、割と赤貧の立香にとっては何よりの救援物資だ。有難く頂戴し、持ってきてくれたフェイトを含め、あらん限りの感謝を伝えた。

とりあえず外で話すのもなんだからと、若干世間体に不安をおぼえつつも部屋に入れて昨日の近況報告の続き。ちなみに、その日例の子犬は同行していなかった。後に子犬ことアルフは「馬に蹴られたくなかったからねえ」と語る。その言葉が示す通り、彼女はフェイトが立香のところに来るときは決して同行しなかった。

それはともかく、話す中でフェイトは今お世話になっている人たちに感謝しつつもいささかの遠慮があることに気付く。

(フェイトの性格上、遠慮するとか甘えろとか言っても……無理だよなあ。でも、本音はもつと仲良くしたいと見た！となれば、フェイトにもできそうなところから……)

と思案し、一つの提案をする。

「そういえば、その人たちってこの辺の地理には明るいの？」

「え？ あ、どうだろう。ある程度は知ってると思うけど……」

実際にはあまり街に降りたことはなかったのですが、情報として知っている程度。フェイトもそのことを知っているのです、表現に気を遣いながらそのように答えてくれる。となれば、あとはしめたもの。

「だったら、買い物の時とか一緒に行って案内してあげるといいよ。」

フェイトはこの街のこと、それなりに知ってるでしょ？」

「ま、まあそれなりに……」

（慣れてきた頃を見計らって、今度は逆に自分から誘うように仕向けて、そのあとは……）

恥ずかしそうにしつつもソワソワしているフェイトに、それが彼女の本心に沿っていることを確信する。

遠慮して甘えられないのなら、少しずつ削ってなし崩しに甘えさせてしまえばいいのだ。ちょうど、半年前に立香がやったように。

そのまま若干悪い顔をしつつその後のプランを考える立香。最終目標は、フェイトがワガママやおねだりができる関係性。余計なお世話かもしれないが、フェイトの幸せには必要なことだろう。

と思っていたのだが……

（まさか、すぐに感謝の手紙がくるとは思わなかったよなあ）

次にフェイトが来た時の差し入れの容器に忍ばせてあった手紙には、立香への感謝と今後もフェイトをよろしくという文面が書かれていた。どうやら、出かける際にフェイトが勇気を振り絞って案内役を買って出た時の様子に、少しばかり違和感を覚えそれとなく聞いたらしい。普段、どれだけフェイトのことをしつかり見ているのかということだ。

加えて、おおよその狙いまで看破されたのには戦慄を禁じ得ない。

正直、「この人コエー！」と思ったのは秘密である。

ちなみに、お返しとばかりに「私たちがわからないことも多いし、なのはさんも歴史文系や国語科目は苦手らしいから、そっちは立香さんに教わったら？」なんてアドバイスもしていたらしい。とはいえ、フェイトの性格を考えると難しいだろうなあと思っていたようなのだが……

「なんか、ごめんね。色々やつてもらっちゃって」

「ううん。前は私がお世話になったんだから、少しくらい返させて」

「俺にできることがあれば何でも言っていいいんだよ。例えば、勉強とか。なくんて……」

「じゃ、じゃあ、お願い……していい？」

(え? でジマ?)

差し入れを持ってくる際に掃除や洗濯の手伝いをしてくれるようになり、割と雑というか適当な立香に対し、女の子らしい細やかな気配りを見せるフェイトには正直感謝していた。

なので、少しでもお礼ができないかと思つての提案は、見事に保護者の方のアドバイスと合致。

結果、「差し入れを持っていく↓そのまま家事手伝い↓勉強を教わる」という流れが定着。立香は文系の方が得意だったことと、サーヴァントとの付き合いのおかげで歴史系に強かったのが幸いした。特に歴史系は割と雑学まみれになりがちだったが、フェイトからは「面白い」と好評を博す。

実際、後に内容をかいつまんで聞いた彼女の友人の一人は「この予備校の名物講師よ! 私にも教えなさい!」と騒ぎ立てたとか。まあ時々、「沖田総司女性説つて、斬新すぎるでしょ」と呆れられたりもしたが。

余談だが、妹分のためにわざわざ異世界の歴史を学んだ、多忙なはずの某真つ黒クロスケがorzしたとかしないとか。

そんな感じの日々を送っていたある日、立香はフェイトに続きちよつと思わぬ再会を果たした。それが目の前の騎士王様である。

この部屋には風呂もシャワーもないので、近くの昔ながらの銭湯を利用してゐる。夜通しの仕事を終えたその帰り道、「そういえば今回は長いなあ」とこちら側に思いのほか長くいることをかみしめていると、現界したばかりの彼とバツタリ遭遇。とりあえず、行く当てもないだろうしと部屋に招いたのが今朝のことだ。

今日もフェイトが差し入れ兼家事手伝い兼勉強を教わりに来たのだが、その間は霊体化して身を潜めていた。なにしろ、甲冑姿の外国人とか怪しいにもほどがある。

そうして現在に至るわけだが、立香もアーサーの言うことには薄々気付いていた。だから、これは丁度いい機会なのかもしれない。

「ねえ、アーサー」

「なんだい?」

「一つ、頼まれてくれないかな」

半年前に続き、また今回も何もできないことに忸怩たる思いはある。

フエイトはきつと、あの時と同じように頑張っているのだろう。違いがあるとすれば、それはしっかりと胸を張って誇れることだということ。今の彼女を見れば、あの時とは違うことが良くわかる。

だから、止めようとは思わない。あれで意志が強いというか頑固な子だし、その意思は尊重したい。

とはいえ、やはり心配なものは心配だ。しかし、立香自身にできることはないとしても……

「できる範囲で良い。フエイトを、助けてほしい。この通り」

「……まったく、頭をあげてくれ。そんなことをしなくても、友の頼みを無碍にするはずがないだろう。この剣にかけて、君の小さな友人を守ろう」

そう言い切ってくれる友には、本当に感謝しかなかった。

とはいえ、立香たちもまさか事件の舞台がこの星の外にまで及んでいるとは思ひもしなかった。

おかげで、少なくともアーサーのしている範囲でフエイトたちが荒事の渦中に晒されるようなことはなく。

時は進み、世は聖夜。誰もが祝福されるべきその夜になってようやく、彼らはその機会を得たのだ。

「お願いヴィータちゃん！ 話を聞いてー！」

「闇の書は悪意ある改変を受けて壊れてる。このまま完成させても、はやては……」

「……それがどうした」

「え？」

「それがどうした、つってんだ！ こちとら、そんなもん全部承知の上でやってんだよー！」

はやてが入院する病院の屋上で、何とか守護騎士たちの説得を試みようとするのはフエイト。だが、返ってきた答えは予想外のもの

だった。

病室で見たはやてと守護騎士たちの間に確かに感じられた絆。だからこそわからない、どうして破滅の未来しかないとわかっていながら、闇の書を完成させようとするのか。思いもしない答えに絶句する二人に、感情を押し殺すように震えるヴィータの肩に手を置きながら、シグナムが問い返してきた。

「こちらからも一つ聞きたい、テストロッサ。主はやては、お前たちにとってなんだ」

一瞬、その質問の意図が見えずに困惑する二人だったが、答えは簡単だった。

「……友達だ」

「今日初めて会ったばかりだということにか」

「時間なんて関係ないよ。会って、お話しして……私はやてちゃんと友達になりたいと思った。それ以上の理由なんて、いらないよ」

「……………そうか。確かに、その通りなのかもしれないな。お前たちはどう思う？」

「……私はいいと思うわ。この子たちなら……信じられる。ヴィータちゃんは？」

「正直、気に入らねえ……だけど、馬鹿みたいに人の事情に首を突っ込みたがるこいつらだったら……だあもう！ おい！ 高町な……のは」

(あ、私の名前……)

「はやてを頼む。あたしたちはもう、一緒にいられねえから」

「それって、どういう……」

「散々あなたたちに迷惑をかけておいて、こんなことを言えた義理じゃないのはわかってるわ。だけどそれでも、はやてちゃんのこと……どうか、お願いします」

「なにを……何を言っているんですか!? シグナム！」

「初めて会った時から、お前たちには迷惑をかけてばかりだったな。

拳句の果てに、我らの嘘につき合わせ、お前たちに重荷を背負わせるのだから……詫びねばならないことばかりだ。許せ、とは言わん。だが、どうしても必要なのだ。真実を知る者が」

訳が分からず問い質せば、返ってきたのはこの事件の真相。守護騎士たちが何を思い、何を願い、何を為そうとしてきたのか。

それは、騎士として、家族として、愛する者のためにできる精一杯の足掻きだった。

そうして役者が揃う。はやてを横抱きにした士郎が遅れて姿を現せば、そこには両目に一杯の涙を湛えたのはとフェイト。

状況についていけず困惑をあらわにするはやてだが、士郎はその意味を即座に理解した。「秘密にするって言っただろ」と思うも、守護騎士たちの意図もわかる。だからこそ、彼も腹を括った。嘘を塗り重ねるのではなく、せめて最後は……。

「ごめんな、こんなことしかしてやれない、ダメな兄貴で」

「……ちやう、そんなんちやうやろ！ どうして、こんな……！」

(ダメだな、俺は。結局、お前を泣かせることしかできないんだから。

昔カリムアイツに言われたとおり、俺は間違っているんだろう。どうしようもなく歪で、破綻している。だけど、それでも……)

これから家族がやろうとしていることを理解し、滂沱の涙を流すはやて。それが彼女の望みから遠くかけ離れたものだとは承知していたが、やはり胸が痛んだ。

同時に脳裏に浮かんだのは、随分前に数度だけあった金髪の少女。穏やかな微笑みと声音で……彼の歪みを指摘した優しい人。彼女の言葉の正しさは理解していたつもりだが、改めて思い知る。結局は彼女の言う通り、間違えてばかりの人生だった。こんな自分の行く末を案じ、「いつでも頼っていいんですよ」と言ってくれたというのに、懐かしさがこみ上げると同時に申し訳なく思う。

だがそうとわかってても、決意は揺らがな。どれほどに歪で、愚かだったとしても……誰かを守りたいという思いは、間違いの筈がないのだから。それに、なにより……

「……兄貴は妹を守るもんだからな」

間もなく、書完成のために守護騎士たちが別れの言葉と共に消えていった。それと共にはやての前に浮かび上がった闇の書は漆黒の輝きを放ち、はやての身体を包み込んでいく。

だが突如としてはやてと士郎が入れ替わり、寸前のところで光に飲まれたのは士郎の方。思わず手を伸ばすはやてだが、「これでいい」とばかりに士郎が本当に安らいだ笑顔を浮かべて消えていく。

ずっと頭の中を「なぜ？」という言葉が駆け巡っていたが、ようやく気付いた。はやてがかつて口にした願い、彼はそれを叶えようとしているのだと

「あ、私…そんな、そんなつもりで……」

伸ばされた手は届くことなく、虚しく宙を彷徨う。

やがて黒い光の中から姿を現したのは、どこか見覚えのある銀髪の女性だった。

「どうかお聞き訳を、我が主。これは我らの、そして士郎の望みなのです」

「せやけど！　しろ兄も、みんなもいなくなったら、私はまた……」

「いいえ、一人ではありません。あなたには身を案じる友と、無限の可能性があるので。今は寂しくとも、きつと彼女たちがあなたを支えてくれるでしょう。いずれは新たな家族を得る日が来るでしょう。あなたは、幸せになれる。幸せになってよいのです。それが、我らの願い。ですから……」

「でも！　そこにはみんながおらん！　みんながいない幸せなんて、そんなん幸せやない！」

「はやて……」

「はやてちゃん……」

泣き叫ぶはやてに、なんと声をかければいいのかわからないフェイトとなのは。理屈としては目の前の銀髪の女性、闇の書の管制人格の言うこともわかる。だが、納得できるはずもない。他ならぬはやてが、それを受け入れられずにいるし、彼女たちもそれでいいとは思えないのだ。

「お聞き訳を、我が主。我が儘はご友人に嫌われます……なににより、士郎にとってはこれこそが救いなのです」

「なにを、言つて……」

「この男の心は空っぽです。いいえ、それどころか一度は壊れた、ツギ

ハギだらけのその心は……酷く歪なのです。彼にとって、この世界は苦界と同じ。生きることは苦行であり、幸福は自らを苛む毒でしかない。あなたとの日々ですら……ならばせめて、唯一持てた人間らしい望みを叶え、夢を見ることさえない静かな眠りにつく。それこそが士郎への救いではありませんか」

その言葉を、はやては否定できない。薄々勘付いていた、士郎の異常性、心の歪さ。

しかし、確かな形を伴って突き付けられたそれは、はやてにとって自らを貫く刃に等しい。

士郎との時間は、間違いなく幸せだった。あるいは、士郎にとってはそうでなかったと言われた方がまだましだったかもしれない。だが、実際には彼も幸せを感じてくれていた。嬉しいことだ、嬉しいはずなのに……それが彼を苦しめていたというのなら、己の存在は害にしかならないのではないか。

(しろ兄と一緒にいたい、たとえ短くてもみんなと幸せに……それは私の我儘なんやろか。その我儘に突き合わせて、あまつさえしろ兄を苦しめて……私のために死ぬ。だとしたら私は、生まれてくるべきやなかったんじゃない……)

「違う、違うよはやて！ 生まれてくるべきじゃなかったなんてあるはずない！」

「そうだよ！ お願いだから、そんなこと言わないで！」

「二人とも……でも、私は……」

声が漏れていたのか、懸命にはやての考えを否定する二人。

確かにその通りなのかもしれない。でも、そうだとすると……大切に大好きな人たちに死を選ばせる。そんな自分が、何よりもはやては許せないのだ。

だがそこへ、聞き覚えのない声がはやての思考を遮った。

「本当に、それでいいのかい？」

「あな、たは？」

「なるほど、死が救いになることもあるだろう。大切なものを守るために死を選ぶ、それは尊い選択かもしれない。少なくとも、僕にはそ

の選択を否定することはできない。

でも、果たして……それはこの子の望みなのかな？」

「何者か知らないが、余計なこととはするな。主のご意志に沿っていないことは承知している。だがそれでも、我らは選ばなければならないのだ。主を救うために消えるか、諸共消えるか。士郎も同じだ。己を犠牲にするか、主を犠牲にするか。そして、我らは前者を選んだ。たとえそれが、主への裏切りだとしても」

「なるほど、時には選ぶこと自体が答えになる。だとすれば、それが君たちの答えか。だけど、君たちに選択の自由があるのなら、彼女にもまたその自由があるべきじゃないのかな。」

もう一度聞こう。本当に君は、君たちはそれでいいのかい？」

目深にフードをかぶった青年の問い。

いいはずがない。それでいいはずがないのだ。そんな決断も、そんな未来も認められない。

どれほど正しくても、どれだけの愛情の果ての選択だったとしても、助けたい人を泣かせる答えが正しいはずがないのだから。

ならばその選択に、その意志に、騎士の王は敬意と共に剣を取る。

友との約束を果たすため、愚かしくも尊い決断をした少女たちの道を開くため。

折しも、一人の少年が駆け付けたことでその選択は現実味を帯びることになる。

闇の書が完成していながら主が意識を失っていないという、過去に前例のないこの状況。ならば、「夜天の魔導書」を「闇の書」たらしめる防衛プログラムさえ一時的にでもダウンさせることができれば、管理者権限の行使が可能になるはずだ、と。

方法は単純にして明快、とにかく徹底的に負荷をかける。要は、魔法の使用と魔力ダメージで「処理を落ち」させろということだ。

とはいえ、夜天の書の防衛プログラム「ナハトヴァール」は強力だ。生半可なことでは一時的にでも機能を停止させることは難しい。

幸いだったのは、管制人格ごと管制融合騎が現在融合しているのが正規の主ではないこと。加えて、正体不明の騎士が飛行こそできない

がちよつとわけわからんレベルで強かったことだろう。

なにしろ、相当に強力なはずの魔法の直撃を食らっても「対魔力が作用しない？」と驚きはしても、「割と効くけど、問題はなさそうだ」とケロッとしているほどだ。技術のベクトルの違いか、それもと法則の違いか、いずれにせよ対魔力が作用しないとしても、「耐久：A＋」は伊達ではない。

その上、動きはフェイトに迫るほどに早く、見えない得物による一撃はなのはのバスターにも劣らないときた。

しかし、外部からの攻撃だけではどうにも埒が明かない。斬り伏せれば解決するのなら機会はあったが、狙いはそこではないのだ。そこで、内外から負荷をかけようという話になるのは当然の帰結。

とはいえ、管理局からの応援が来るにはまだ時間がかかる。つまり、現状のメンバーでやりくりするしかない。

まず、ユーノは夜天の書へのアクセスを試みるはやてのサポートで手が離せず、これは他の誰にも代われない重要な役割だ。ユーノと同時に駆け付けたアルフは残りのメンバーに比べ、使い魔ということもあり能力が一段劣ることから、無防備な二人の守りを任されている。現状最大戦力の謎の騎士を失うのは論外。強力な前衛がいるのなら、後衛を重視するのが手堅い判断だろう。フェイトも強力な火砲支援はできるが、それはどちらかと言えはなのはの領分。

結果、フェイトが夜天の書と繋がっているはやてを介して入り込むことに。

紆余曲折はあったものの、その作戦自体は功を奏し、無事はやては管理者権限を掌握、夜天の書本体から防衛プログラムを切り離すことに成功。一度は書完成のために消えた守護騎士たちも復旧し、あとは切り離された防衛プログラムを破壊するだけ……とはなったのだが。「遅れてきた僕が言うのもなんだが、あなたはいつたい……」

クロノの指摘は、ある意味その場にいる全員……どころか、この状況をモニターしている管理局関係者も含めた共通の疑問だった。なにしろ、何らかの魔法などを使用した形跡もないまま海上を突っ走り、なのはの砲撃の直撃を食らってもピンシヤンしている管制融合騎

と互角以上に斬り結んでいたのだ。

問い質す間もなかったから仕方がないのだが、大筋の作戦が決まった以上は聞かないわけにもいかない。

「僕かい？ ああ、そういうえば自己紹介もまだだったか」

そう言つて、彼は目深にかぶっていたフードを取る。

「あらやだ……すつごい美形」

思わず、といった様子で本音が漏れるシャマル。とはいえ、声に出さないだけで、みな似たり寄つたりの反応だった。なにしろ、子どもたちでさえも「王子様みたい」と内心で思っていたのだから。まあ、実際には「王様」なのだが。

ちなみに、アースラ女性局員が発端になり、謎の騎士ファンクラブが管理局内で結成されたりするのは全くの余談だろう。

「僕はアーサー。ここには……そうだね、友人の頼みできたんだ」

「友人？ それはどういう……」

「……すまないが、どうやらあまり時間がないらしい。あれは僕が探していたものとは違うようだ。それがハッキリしてしまったせいで、ここにいられる時間はもう残されていないみたいだからね」

答えるアーサーの身体からは、光の粒子のようなものが舞い上がりつつあった。

「最後まで共に戦えないのは残念だが、露払いくらいはしていこう」

そう言い残し、展開されていた魔法陣から飛び降り海上に降り立つ騎士王。

風の鞘を解けば、その手に握られた無骨な白銀の聖剣が姿を現す。

「シール・サーティーン十三拘束解放——デンジョン・スタート円卓議決開始！」

宣言すると同時に、彼の周囲に12の人影のようなものが浮かび上がる。

遠間からではよくわからないが、人影が揺らぐと同時に剣が微かな光を放つ。

そして、アーサーが最後の封を解く。

「是は、世界を救う戦いである」

するとどうしたことか、白銀の刀身は失われ燦然と輝く黄金の剣が

姿を現した。

剣はますます輝きを増し、それに呼応するように小さな光が立ち上る。そして、剣の光が臨界に達したのと、防衛プログラムを覆う闇の繭が取り払われたのは同時だった。

「――約束された勝利の剣!!」

姿を現した醜悪な姿の防衛プログラムに向けて放たれる一閃。

それは巨大な光の奔流となって襲い掛かり、ナハトヴァールを覆う多層防壁の悉くを飲み込んでいく。

あまりの光に思わず目を閉じたなのはたちが目を開けた時、もはやそこにアーサーの姿はなかった。

まるで幻のように消え失せた騎士。だが、彼は確かにいたのだ。

最後に放った一閃により半身を蒸発させたナハトヴァールを、何よりの証拠として残して。

* * * * *

「……行っちゃった。やっぱり、ちょっと寂しいな」

「君は、本当にこれでよかったの?」

重い曇天が空を閉ざす中、大きな木の下でフェイトとよく似た少女……アリシアと呼ばれた女の子に語り掛ける立香。

フェイトたちのことが気がかりで清掃解体をさぼったつけか、唐突に意識を失って目覚めれば見覚えのない草原の真ただ中。「またか」とか悠長に考えながら当てもなく彷徨っているうちに、フェイトとこの少女にバッタリ遭遇。フェイトは驚きながらもどこか納得した様子でいたのだが、「この際だから甘えちゃえく♪」というアリシアに背中を押され、恥ずかしがりながらも膝の上のせてもらったり、髪を梳いてもらったりしてはにかんでいた。で、そのフェイトを見てアリシアは「私の妹カワイイ、萌えー!」「サイコー、マジ天使!!」と大はしゃぎ。それですますますフェイトが照れて……まさかフェイトも、これが本物だったなどと思いきもないだろう。

そうしてひと段落ついたところで、今度は何やら立香にはよくわか

らない会話が繰り広げられ、アリシアからフェイトはいつも持ち歩いている三角形の小物を受け取って駆けて行ってしまった。別れ際に、立香に抱き着いたうえで顔をぐりぐり押し付けていた……その後ろでアリシアが、何かジェスチャーしていたが意味は察したくない。「抱き寄せる」とか「キス」とか口パクしていた気がするが、チョット意味がワカリマセン。

で、フェイトの後姿を見送りつつ密かに「俺こっちだと蚊帳の外がデフォなのかなあ?」とぼんやり思っていたところに、先のアリシアのつぶやきである。

「だって、私はお姉ちゃんだもの」

「そっか、お姉ちゃんなんだ」

「うん。本当はもつとお話したいこととか、したいこと……いっぱいあるんだけどね。でも、フェイトは進まなきやいけないから。だから……これでいいの」

事情とかその辺はさっぱりわからない立香だが、彼女の言葉には「なるほど」と感じさせるものがあった。というか、カルデアには「年の父上」とかもいるので、おかしいことは何も無い。

「と……ころ……で………」

「ん?」

「お兄さん、フェイトのことどう思ってるの?」

こういう時、一癖も二癖もあるサーヴァントたちとの交流の中で磨き上げられたコミュニケーション力が恨めしくなる。

アリシアが何を聞きたいのか、わかりたくないくらいにわかってしまふ。誤魔化すこともできなくはないが……なんとなくあまり不誠実なことはしたくなかった。

「……かわいいと思うし、いい子だと思うよ。控えめすぎるのは、考え物だと思うけど」

「……………だったらなんでさつきはキスしなかったの? というかもつと先ま「やめようかそういうの!」ちえっ」

ちよつと食い気味に止めに入る。フェイトそつくりのさらに幼い外見でそういうこと言われるのは、何だかスゴイ悪いことをしている

気分させられる。

「ふうん……じゃあ、やつぱりまだ対象外？ でもフェイト、将来絶対キレイになるよ！ いや、今もすっごくかわいいんだけど……これから先もつともつと！ 周りの男が放っておかないこと間違いなし！ お姉ちゃんのお墨付き！ 買うなら今！」

「そんな通販じゃあるまいに……それ以前に、フェイトは別にそういう意味で俺のことを好いてるわけじゃないからね」

「言い切るんだ。もしかして経験豊富？」

「……………まあ、ある意味？」

なにしろ、愛の重い連中には心当たりがたつぷりある。

そこまでではなくても、好意を向けてくるサーヴァントはそれなりにいるのだ。おかげで、その辺の見極めもいつの間にかできるようになっていた。何しろ、下手なことと言うと地雷を踏んでしまうことになりかねない。

これは、生き残るために磨かれた生存能力の一端なのである。

「……むむ、ライバル多いんだ。フェイトには頑張ってもらわないと」

「いやだから、フェイトもそこまでは思っていないって」

「いまは、でしょ？ この先はどうかなあ？」

クロエほどではないが、ちよつと小悪魔っぽい笑みを浮かべるアリスア。ただ、頑張つて背伸びしてる感が強いので、微笑ましいだけだが。

（とはいえ、この先か……フェイトとのかかわり方、少し考えた方が良いのかな？）

突き放すとか疎遠になるよう仕向けるとかいうわけではないが、応えられないのなら責任をとれないことをすべきではないだろう。こんな幼い女の子の前で声には出せないが、なにしろ……

（俺「勃たない」しなあ……あ、なんか泣きたくなってきた、グスン）意識が落ちるのと同様で、どうもこれも心因性らしい。ロストベルトを超えていくうちに、あるいはコヤンスカヤに一服盛られたのも影響しているのか、そんなことになってしまった。

なので、立香はマシユの想いにも応えるつもりがない。それが全て

というわけではないのはわかっているが、一般的な幸せというものを考えるのなら……自分は不適切だろう、と。

まさか数年後、二人がかりで誘惑されて落とされることになるとは思ってもいない立香であった。

「……ところで、さつきフェイトが夢とか言ってたけど、ここって夢なの？」

「え？ まあ、そんな感じだけど……」

「そうかあ、夢かあ……」

「驚かないの？」

「まあ、慣れてるから」

言っている意味がよくわからないのか、不思議そうな顔をするアリア。顔立ちは瓜二つなのだが、仕草や表情はあまり似ている感じがしない。性格の違いが表れているのだろう。

あるいは、そっくりさんを見分けることに慣れているせいかもしれない。なにしろ、カルデアには同じ顔が割とわんさかいる。間違えると大変なことになる場合があるので、非常に重要な能力なのだ。

とそこへ、実にうっさん臭い声が出た。

「やあやあマスター君、どうだい今日の夢見心地は……って、なんだい？ その何とも味のある顔は」

「夢見心地ってそういう意味か？」と突っ込んでやろうと思ったのだが、それ以上に「うわっ、でやがった」という思いが顔に出てしまったらしい。契約で繋がった立香を介せば、こういう離れ業もやってのけるのだこの花の魔術師は。真正のロクデナン

「………とりあえず、さっさと帰るよ。この馬鹿ナイトメア」

「あいたたたた……耳、耳を引っ張るのはやめておくれよ。最近君、割と容赦ないよね？」

「ここがフェイトの夢の中だとするなら、即刻退去。もちろん俺もだけど、女の子の夢に男が入るとか十分セクハラ案件だからね。というか、まさかこの状況マーリンの仕業じゃないよね？」

「え、夢は人権の管轄外じゃないかい？」

「答えになつてない！ いいから、とにかくお得意のクロロホルム魔

術でさっさと出る！」

「やだなあ。アレはより深く眠りに誘うためのもので、起きるのには使えないよ？ それに、良いのかい私の話を聞かなくて」

今すぐフェイトの夢から叩き出してやりたいが、こういう以て回つた言い方をする時は重要な話の場合がある。そうじゃない時もあるが。

後者なら立香の精神衛生以外には問題ないが、前者だと聞かないわけにはいかない。

そして、今回は前者だった。相変わらず蚊帳の外のまま終わったことの顛末を聞いて一安心したのも束の間、実はまだ終わっていないことを知ることになった。どうやって情報収集したのかは割と謎だったのだが、この夢はフェイトのものでありながら見せているのはこの事件の中核だとか何とか。そこで、夢を介してその中核から必要な情報を抜き出したらしい。

相変わらず抜け目ないといふかなんといふかな話だが、それでも助かったのは事実。

目を覚ました立香はさっそく行動を開始。街で何度か見かけた少年を縁に目当てのサーヴァントを召喚することに成功した。まあ、どうやって接触をすればいいかわからず、魔力切れ寸前の身体で真冬の雪の降る空の下を駆けずり回る羽目にはなつたが。だがその甲斐あり、車いすを走らせる件の少年縁の少女を^{八神はやて}発見。

足りない魔力は少年に霊基を貸し、彼の魔力を借りることで賄い何とか宝具を発動できたのだから十分だろう。

ただし、ただでさえ魔力切れ寸前なうえ、氷点下を下回る屋外を走り回って汗をかき、着替える余力もないまま布団にダイブ。その結果、思いつきり風邪をひいて様子を見に来たフェイトを心配させることになるのだが……終わり良ければ総て良しということにしておう。

とりあえず、甲斐甲斐しく世話を焼いてくれるフェイトが天使に見えた立香だった。

(うん、女神はない)

だってあの連中、とことんトラブルメーカーなんだから。

フロリーアン姉妹の場合

懐かしいですねえ、もうあれから10年以上経ちましたか。

あの小さかったなのはさんにもこんな大きなお子さんがいて、時間の流れを感じますねえ……。

——いや、お姉ちゃん？　ちよつとそれ、おばさんっぽくない？　失礼な!?　そんなことありませんっ……ありませんよね？

——（まあ、子どもたちの友達からすれば、十分おばさんなんですよけど……女として、素直に認められないのも事実なのよねえ）
あ、まだまだ全然若い？　20歳どころか十代でも通る？

いやですねえ、そんなお世辞ばかり（テレテレ）。……大変良
い子なヴィヴィオさんには、フロリーアン農場自慢のお野菜を山盛
り・特盛・てんこ盛りのYTTで差し上げましょう！

——うわあ、うちのお姉ちゃん……チョロ過ぎ。

だ、誰がチョロいですか!?　そういうキリエこそクロノ執務官……
あ、もう提督でしたね。事件後、提督に優しくされてコロツといきそ
うになっていたでしょう！

——はあっ!?　そんなことあーりーまーせーくーんー！

あーりーまーすー！　生まれた時からキリエを見てきたこのアミ
タが言うのだから間違いありません。アレは絶対にコロツといつて
ました。

だって、義弟くんとお付き合いを始める直前のキリエがあんな感じ
でしたから！

——ちよつ!?　……ふふん。ままままったく、アアミタもとんだ節
穴ね。ま、まあ、それはそれとしてその話、口外禁止だから。変な誤
解されても困るし。そう、誤解はいけないわ！

（私だけ口止めしても意味がないでしょうに。レヴィあたりから漏れ
そうな気はしますが……妹の家庭崩壊を黙って見過ごすわけにもい
きません。ここは、お姉ちゃんがちゃんと根回ししておかないと。

お父さんの墓前に、妹の離婚報告とか絶対したくありませんしね）

——ほら、ヴィヴィオちゃんがアワアワしてるじゃないの。はい

はくい、大丈夫よ。別に喧嘩してるわけじゃないから。というか、それを言ったらお姉ちゃんはどうなのよ？

———どうとは？

———立香さんのこと。ちよくと熱っぽい目で見てた気がするんだけどお？

完全無欠にキリエの勘違いですね。

———………言い切るじゃないの。

後ろめたいことなんて何もありませんから。

そりやまあ、キリエのことを「昨今珍しい孝行娘」と言ってくれましたし、色々と相談には乗っていただきましたが……主にキリエ関連で。そのことには感謝していますけど……好意とかはありませんでしたよ。あくまでも、お友達としてです。

———ふうん………というか、基本「猪突猛進」壁は乗り越えるものじゃなくて砕くもの」な突撃思考のお姉ちゃんが、やけに大人な対応をしてくてたから不思議だったけど……あの人の入れ知恵だったのね。私が言うのもなんだけど、あれだけ迷惑かけておいて普通に相談に乗るとか、どういう懐の深さしているのかしらん？

あまり行為の善し悪しには突っ込まない人ですからね。目の前で起こったことなら別かもしれませんが、過ぎたことは引きずらないというか、その奥の「想い」を重視する方ですから。

———………そんな顔しながら「好意はない」っていわれても、説得力ないわよ？ あくあ、お義兄ちゃんってばかりそく。

失礼な。好感はありますが、好意がないのは本当ですよ。……ただまあ、今思い返すと若干の違和感はあるわけですが。

———違和感？

ええ、なんというかこう……変な言い方ですが、「調整」されたよ
うな……。

———はい？ つて、ヴィヴィオちゃんもなんで思案顔？ え？

ティアナちゃん……確かなのはちゃんの教え子よね。その子も似たようなことを？ ほうほう「昔、馬鹿なことをしてかす前に止めてもらった」「ちよつといいかも……」と思ったことは否定しないけど、そこ

までチョロいつもりはない」「ただ、振り返ると他にも細々と色々あったし、好きになつてもおかしくない気はする」「なのに、不思議と好意は湧いてこない」と。どういうこと？

まさかとは思いますが、『好感』が『好意』に発展しないように動いたということでしょうか？

——そんなことしてたの？

……正直、当時は全く違和感はなかったですし、特に距離を取られたということもなかったはずですが、どうにも拭い難い違和感が付きまといまして……当たるはずの弾丸が微妙に逸れて行ったよ
うな。

——それって、自分の撃った弾？ それとも相手？

……強いて言うなら相手の、でしょうか。こう、胸に弾が当たると覚悟していたら外れていつて肩透かしを食ったような感じですよ。

——そういえばあの、フェイトちゃんの好意を何とか有耶無耶にしようとしたのよね。もしかして、他の人にもそういうことにならないよう立ち回ってたの？ 狙いはわからなくはないけど、器用なことするわねえ。

……こういうのも弄ばれたというのでしょうか？ いえでも、別に何をされたわけでもありませんし……。

——恋心に発展する前に芽を摘む、ある意味優しさかもしれないわねえ。本人、応える気がなかったわけだし。

そう、ですね。過去から現在のどの関係性にも特に不満はありませんし、今私は「幸せです」と断言できますから、これで良かったのでしょうか。

——下手したら、今頃三人かそれ以上で襲ってたかもしれないわけだし、良かったんじゃない？ というか、立香さんの英断というべきかしら。人間関係が泥沼になる前に処理してたんだから。

そ、それはそれでゾツとしませんね。

——（お義兄ちゃんに悪いから言わないけど、その場合パパも応援してくれてた気はするけどね。ハーレムとかどうかと思うけど、立香さんだったらそれでも上手くやれそうだし……）

って、はい？」「襲うってどういうこと？」あくえく、そのく……キリエパス！

——ちよつ、そんな無茶ぶりされても困るんですけどお!? えつと、なんというか……一度に何人も女の子とお付き合いますとか不誠実なことしていると、怒られるわよっていうお話。

(それだと、マシユさんとフェイトさんのお二人と結婚している立香さんの現状は十分「黒」なのですが……そのあたりが落としどころでしょう。さすがに、十歳の子どもにする話ではありません……つて、そういえばフェイトさんも「二股されてるんですか」と保護している子どもたちに心配されたことがあると言っていましたね。

あの時は笑い話のつもりでいりましたが、まさか私が似たような思いをする羽目になろうとは……当然、立香さんの男性機能回復に使える薬や技術がないか相談されたのとも言えません。断固黙秘ですよ、キリエ)

——ま、まあ人間関係つていろいろ大変なのよ。ヴィヴィオちゃんはいろいろ目立つし、気を付けた方が良いわよ。もちろん、それはそれとして自分磨きを怠っちゃダメ♪ しなくてもキレイくなズッコい人もいるけど、お姉ちゃんとかなのはちゃんとかね。

なのはさんとはともかく……わ、私もですか？ え、あとユーノ司書長？ あく、それはく……。

——あの人はあの人ですごいわよね。中性的というか、衣装次第じゃお化粧抜きで美女になれるもの。まあ、それはそれで大変なんでしょうけど。

(そういえば、異性どころか同性からも狙われているというお話を聞いた覚えが……「ユーノ君となら性別の壁を越えられる!」「彼は男性ではない。ユーノ・スクライアという性別なのだ!」「抱かせてくれ……何なら抱いてくれてもいい!」とかいう人が多くて、言い寄る女性への牽制よりそっちの駆除が大変だとなのはさんが愚痴っていました(け)

——ゴホン。とにかく、ズルい人は世の中にはいるし、例の人”と大人モードっていうのを見るにヴィヴィオちゃんもそっち側だ

と思うけど……それでも、いざって時にモノを言うのは日々の努力、その積み重ね。実際、私の方がお姉ちゃんより結婚も子どもができるのも早かったしね。

くっ、それを引き合いに出されると分が悪いですね。私の場合、むしろキリエに後押ししてもらったわけですから……。

——（でも、うちの旦那様も最初はアミタに見惚れてたのよね。熱血ノリのせいですが）「男友達」な付き合いになってたけど………あ、思い出したら何だか腹立ってきた。今日はちよつと「いぢめ」てやろう、そうしよう）」

どうしました、キリエ？ 何やらこちらをジツと見て……。

——べつにく。つと、話が横道に逸れちゃったわね。お姉ちゃんとしては、あの頃の思い出って何かある？

思い出というわけではありませんが、ある意味一番インパクトがあったのは美遊さんの世界や剪定事象の話でしょうか。正直、聞いた時は肝が冷えるどころか身が凍るような思いでしたよ。

——あゝ、それね。アレ聞くと、エルトリアはまだだいぶマシって思えるわよ。星が「命を育む船」として終わっているんじゃないかと、星が「今生きる生命を見限った」世界とか……土台から全否定ですものね。

そちらも恐ろしいですが、私は剪定事象という概念に戦慄しましたよ。

あの当時のエルトリアの状況は、それこそ『先の展望が見えた』と言われてもやむを得ないものでした。条件に当てはめて考えるなら、十分剪定される可能性がありましたからね。

——でも、結果的にエルトリアの惑星再生は進んでる。だから剪定されなかったのか、それともそもそもこの宇宙にそのシステムがないのか……ダ・ヴィンチちゃんは後者を支持してたっけ。

ええ。魔術論的に見るのなら、この宇宙は並行世界とも異なる別世界。立香さんの世界とは枝葉末節の差異によって生じる並行世界ではなく、そもそもの幹から異なるということでした。地球に関して言

えば、たまたま同じような流れを進んできたのだろう、と。

だからこそ、世界のシステムも違っていているそうで……こちらには基本、抑止力などは存在しないんだとか。ただ、「あの人」のこともあるので、立香さんたちの存在を通してあちらの世界のシステムを取り入れている可能性は否定できないそうですが。

——ま、世界のシステム自体をどうこうすることは私たちにはできないし、どういうシステムで世界が運営されているのか、しっかり見定めてやっていくしかないんでしようけど。

あ、「あの人」で思い出しましたが、あと立香さんの人材運用術、あれは圧巻ですね。なんとというかこう……。

——仲の悪い人たちを仲が悪いまま回すとか……普通出来ないわよ。精々、お互いに関わらないようにしっかり分けるくらいしか思いつかないもの。

そうも言っていられないほどギリギリの状態だったというのもあるのでしよう。破綻した場合のリスクは計り知れませんが、かといって仲良くさせようと思つてできるかと言えば……。

——いや、無理でしょ。酒呑ちゃんと頼光さんとか、スパルタクスさんと皇帝さんたちとか。

ですねえ……ああ、思い出しました。これはイシユタルさんとエルキドウさんなんですが、召喚されるなり殺意極高の嫌味の応酬が始まり、立香さんがとりなして渋々戦闘に向かったのですけど、お互い隙あらば殺してやろうと虎視眈々なんですよ。イシユタルさんはエルキドウさんを敵陣深くに置き去りにして巻き込む気満々ですし、エルキドウさんも戦いながらどさくさに紛れて不意打ちできないか狙つてたそうで……アレでどうして上手く回るんでしょうね。

——うわあ、やりそう……。

立香さんが言うには、どちらも能力的には超一流なのが肝なんだとか。一応優先順位の一位は間違えませんが、お互いを殺そうとするのはいくつかなんだそうで……そして、そんな片手で殺そうと思つて殺せる相手ではないからこそその超一流、巻き込まれたり不意打ちを

赦したりするような不手際は侵さないらしいですよ。

連携するわけではなく、協力するわけでもなく、信頼も信用も全くないまま、周りの能力とスタイルから行動を予測、併せて自分がやりやすいように立ち回る。要は、お互いに相手のことを利用して好き勝手にやっているわけですね。ああいう人たちの場合、その方が上手く回るんだそうです。

——チームワーク、カルデアでは虚しい言葉よね。

別にそういう人ばかりなわけではないでしょうが、一部はその方が効率的なのでしょう。まあ、サーヴァントは各々がその道の超一流揃い、そんなカルデアだからこそ成立するやり方でしょうが。

他だと絶対破綻しますし、カルデアでも立香さんがマスターでなければ不可能なのではないでしょうか。

——実際、「あの人の道を開く」って点で方針が一致しているからこそでしょうね。横の信頼はなくても、縦の信頼がある。あの個性の塊たち相手に、それだけの信頼関係を結べているってのがすごい話だけど。

あの人たちに自由にやらせる肝の太さ、いがみ合う人たちの間に入る緩衝材としての忍耐力、適材適所に配置するだけでなく今いる人材でやりくりする調整力……どれも感服します。

——案外、他の職場だとパツとしなかつたりしてね。手に負えない問題児専門に特化してたりとか……。

上司の方に怒られていたり、職場の片隅で肩身が狭そうにしてたりする立香さんですか……違和感が凄いですね、イメージできるものですね。

もしかしたら………そういう可能性もあったのでしょうか。

——ある意味、究極の昼行燈なのかもね。平時では特に必要とされないし、カルデアみたいな特殊な環境下でのみ光る、的な。

* * * * *

「レヴィ……って言ったっけ。その子には『ダメ』とかよりも、『こう

した方が良いよ”って教えた方が良い。ほら、そこって照明が水や魚、ガラスに反射して綺麗でしょ、だから”綺麗だよ””壊したらつまらないよ”ってね。そうそう、それでそのあとは……”

リンデイから要請されたのは「機動外殻」への対処。そこには当然犯人一党への対応は含まれていない。なので対人戦には直接関与できないが、口を挟むことはできる。

今まさにオールストン・シー内の水族館エリアで自分と瓜二つの「レヴィ」を名乗る水色の少女と大立ち回りを演じているフェイト。だが、管理局員として公共施設などの破壊は論外。自分で壊すのもそうだが、犯人が壊すのを可能な限り防ぐのも職務の内。そのため戦いが極的になり、代わりに説得を試みているがまるで聞く耳を持ってくれない。管理局がばらまいたサーチャーなどから送られてくる映像を見るに、人の話を聞かないやんちゃ娘……といった様子のレヴィにほとほと手を焼いているフェイトを見かねてアドバイスする立香。頭の痛い問題児連中の誘導術において、立香の右に出る者はいない。レヴィなど、要点さえとらえれば素直な分やりやすいくらいだ。あの手のタイプは、”気持ちのいいこと””楽しいこと”が鍵になる。やめさせたいことがあるのなら”面白くない”と思わせ、より”楽しそう”なことを提示するのが一番。早速立香のアドバイスを実践してみれば、それまでフェイトがいくら「物を壊さない」「遊んじやいけない場所です」と言っても聞かなかったのがウソのようにあっさり屋外へと飛び立っていく。

呆氣にとられながらも慌てて追いかけるフェイト。向かう先は水上ステージ。開けたあの場所なら、フェイトもあまり周りを気にせず戦うことができるだろう。

「どうですか、先輩？」

「フオウフオウ」

「うん、フェイトの方はうまくいった。手が出せないのは歯がゆいけどね……」

「こればかりは、仕方がありません。他のお二人の方はいいんですか？」

「やり取りを聞く限り、どっちも意志が固そうだ。少なくとも『戦わない』っていう選択肢はなさそうだからね」

あるいは、相手の目的がもつとはつきりわかれば何らかの取引を持ち掛けることもできるだろうが……不明点が多すぎる。立香は感情の機微に聡いのであって、心を読むかのような洞察力があるわけではない。現状からでは、相手の狙いも目的も判然としない。目当ては夜天の書だけではない、ということくらいだろう。

こういう時頼りになる探偵もまだ確信を得ていないらしく、いつもの調子で思わせぶりなことしか口にしない。

「フェイトさんですが、今リンディ次長がデバイスを届けに向かったそうです。これで少しは状況が良い方向に向かうとよいのですが……（コソコソ）」

「ん？」

（それと、どうやらアリシア……プレシアさんがこちらに来ているそうで）

（そうなの？）

（はい）

あちらはあちらでフェイトが心配でいてもたってもいられず、会わないと言い張りながらも来てしまったらしい。今はリンディの進路を妨害する瓦礫や戦闘の余波にこっさり対処しているようだ。裏方に徹していないで、さっさと会いに行つてやればいいのにと常々思う。

だがまさか、プレシアの匂いに気付いたアルフに追われる羽目になるとは……。

「他の様子は？」

「上空の個体名称『アメテイスター』はリップさんに圧縮され沈黙、レヴィさんとともに現れた『トゥルケーゼ』は藤乃さんが各部を掘り切ったものの復元を繰り返しています」

「再生……あるいは再構築能力か」

「はい。おそらく核になる部分があるということ、シヤマルさんが探査を……あ」

「どうしたの？」

「たつたいま部分ではなく全体、核も武装もまとめて雑巾絞りにしたと。どうやら、無事機能を停止したようです」

「夜の遊園地」というシチュエーションに加え、相手は巨大ロボットの。基本的に清楚かつ慎み深く落ち着いた物腰の大和撫子な藤乃だが、結構そういうのは好きだ。とりわけ、怪獣大決戦的な感じとか。

おそらく、それではつちやけ過ぎてしまったのだろう。二人の戦いを見た局員の皆さんは、さぞかし驚いているだろうが。

「俺近くにいないんだけど、魔力大丈夫？」

「実はかなり消耗しているらしく、今はシャマルさんが介抱してくださいています。湖の騎士」として、あの穀潰しにぜひ見習ってほしいです」

「フオッフオ〜……」

(召喚早々リンデイさんに粉かけたの、まだ怒ってるんだ……)

曰く「あまりに美女だったのでつい」「未亡人に目がくらんだ」と頭の沸いたことを宣う円卓ランズロットの恥さらし。そりやマシユも怒るというものだ。

TPPOを弁えて……いや、そもそもナンパをするなど言いたい。

「で、そのランスロットの方は……」

「管理局の皆さんの支援を受け、個体名称 “グラナート” への騎士ナイト・オブ・オーナーは徒手にて死せずの発動に成功。現在は待機しているようです……シグナムさんをはじめ、女性局員の皆さんには即刻離れていただきますので、円卓の品位は保たれたと思います」

「マシユ……GJ！」

「はい、危うくアルトリアさんに顔向けできなくなるところでした」「フオウ！」

やたらと派手に遠距離攻撃をまき散らしていた “トウルケーゼ”ではなく、重装甲な分動きの遅い “グラナート” の方を担当させたのでそちらの心配はしていなかったが、別の不安もマシユの気配りで杞憂に終わったらしい。

とはいえ、まだまだ状況は流動的だ。

サーヴァントたちが機動外殻を抑えた分、管理局は空いた人手を犯

人確保に向かわせているものの、いまだキリエの確保には至っていない。とはいえ、おおよその位置も移動経路も把握できていることから時間の問題だ。

また、なのはとフェイトは多少危うい場面もありつつ、それぞれのそつくりさんを撃破。はやての方はまだ戦闘が続いているが、守護騎士たちが向かっているのでこちらでも決着は近いだろう。

それらの報告を聞きながら「このまま終わってくれればいいんだけど……」と思いつつ立香が足を向けたのは、なのはが運ばれた救急車。重傷というわけではないが、いささかならず消耗していることからの処置だ。

ただ、割と我が身を顧みず無理・無茶・無謀を重ねる性質の人物をよく知るイリヤたちから、なのはのことを頼まれている。なので様子を眼に来てみれば……

「で、何をやってるのかな、二人は」

「あなたは……」

「り、立香さん？」

なのはだけでなく、入院着を着たアマタの姿。

その二人が「無茶だ」の「無理です」だの、明らかに不穏な会話をしている。どうやら、イリヤたちの見立ては正しかったらしい。

「なのはさん、状況は我々に有利に進んでいます。ですから……」

「それは……わかっています。でも、キリエさんには魔導が通じません。だから、アマタさんに協力してもらってレイジング・ハートにフォーミュラを乗せてもらいました。これなら、ちゃんと届きます」

「しかし、ぶつつけ本番というのはあまりにも無茶です」

「それもわかってます。だけど、無茶だから引つ込んでろ」って言われても、私は従えません。アマタさんだって同じです。マシユさんと立香さんはどうですか？」

言わんとすることはわかる。マシユも、かつてカルデアを奪われた時は……いや、それ以降も無茶を承知で戦った。だから、その点において彼女に反論することはできない。

だが同時に、無茶をした結果を知ることこそ、言わねばならないこ

とがある。

「……………お気持ちはわかります。ですがその結果、取り返しのつかないことになるとしても?」

「それは……………でも、諦めて後悔するのも、それで誰かが泣いているのを見るのも嫌なんです! 私の魔法は、そのための力なんです!」

「……………体を壊すことになるかもしれないよ、私の様に」
「え?」

「私もフェイトさんと同じように、作られた命です。ですが、私を生み出した技術はフェイトさんのそれには到底及びません。元の寿命は30年ほど、そこからさらに実験や投薬、戦闘による負荷で著しくこの体は劣化していきました」

「そ、んな…………」

「待ってください! ですが、今のあなたは…………」

マシユの告白にショックを受けた様子なのはだが、現在のマシユの様子と矛盾することに気付いたアミタが割って入る。マシユの後ろで、立香が複雑な表情を浮かべていることに気付かないまま。

「正直、理由はいまだ定かではありません。それでも私は確かに、一度死んだはずなんです。なのに、気付けば人並みの寿命を得て今私はここにいます」

「よかった…………」

「ですが、私はその後も戦い続けました。そのことに後悔はありません。無茶だったことは自覚していますが、アレは必要なことであり…………私の意志でした。今も、必要とあらば私は戦います。私は先輩のサーヴァント、そのためにここにいます。」

そんな私に、あなたを止める資格はないのでしょうか。でも、申し訳なく思っているのも本当なんです」

「申し訳ない? それは…………」

「先輩やダ・ヴィンチちゃん、私を大切に思ってくださいっている皆さんに。」

重ねた無茶は、確かにこの体を蝕んでいます。私はいずれ、一人で立って歩くことすらできなくなるでしょう。それが十年後になるか、

二十年後になるかは……今後の私次第でしょうが
「っ！」

「私はそれを承知でここにいます、その日が近づくことになっても戦わなければならぬ時のために。」

なのはさん、あなたももしかしたら私と同じになるかもしれません。無茶を重ね続けなければいつか、その代償を支払うことになります。私の様にいずれ歩くこともできなくなるかもしれませんが、あるいはもっと別の障害を負うかもしれない。場合によっては……かつての私の様に、命を落とすことも。

もう一度よく考えてください。今は本当に、そこまで無茶をしなければならぬ時なんですか？」

「だけどー！でも、それは……！」

マシユの言わんとすることはわかる。なのはとて、そんな未来は恐ろしくてたまらない。

だがそれと同時に、こんなところで引き下がることはできない。悲しい物語が悲しいまま結末を迎えるのを、黙って座視するのはもう嫌だから。

(……やっぱり、これじゃ止まらないか)

二人のやり取りを見守りながら、立香はそう思う。

言葉というのは難しい。伝えたい言葉が伝えたいままに伝わらないこともある。あるいは伝わったとしても、相手の心に響かなければ意味がない。

大切なのは、どうやって相手の心に届かせるか。そのために、どんな言葉を選ぶのか。

マシユの言葉は確かになのはに届いたが、彼女の意志を変えるには至らない。

きっとこの子は、自分の痛みにならいくらでも我慢できてしまえる子。同時に、他者の痛みを我慢できない子。

優しい子なのだろう。強い子なのだろう。だが同時に……周りが見えていない。それに気付かせるのが、大人の役目なのだろう。たとえそれが、どれだけひどい言葉だとしても。

「なのはの気持ちは分かった」

「先輩!」

「フオッフオウ!」

「ありがとうございます。できるだけ、怪我とかなないように頑張りますから」

「頑張る、か……怪我をして帰ってきた君を見たら、ご家族はどう思うかな」

「っ!」

「家族だけじゃない。友達が、君を知る人たちが……君に力を与えたアミタをはじめいろいろな人が、傷ついた君を見て悲しいを思いをすることになる。それは、一つの立派な悲しい物語の悲しい結末だと思うけど?」

残酷なことを言っているという自覚はある。家族の話題など、本来なら立香に言えたことではないだろう。

だが、数多の英霊たちと縁を結び、彼らの過去を、生き様を、在り方を見てきた立香だからこそ、わかるのだ。なのはが進もうとしている道、その周りに置き去りにされてしまった人たちの嘆きが。

このままだと、彼女はそれに気付かないまま突き進んでしまうかもしれない。それは本来、なのはが最も見たくなかったものはずなのに。

「いいのかい、本当に」

なのはの想いは尊重しよう。別に、彼女の行動に『善し悪し』をつけようというのではない。

ただ、選ぶ前にもう一度よく考えた方が良くと思う。その選択に、選択した結果生じるであろう影響に、本当に後悔はないのかと。

「倒れた君を見ることになるかもしれない家族の気持ちを、考えたことはあるかい?」

立香はあまりなのはの過去を知らない。少なくとも、記憶している範囲では。だからこれは、完全に偶然の産物。

あるいは、夢を通して垣間見た記憶が言わせた言葉だったのかもしれない。

いずれにせよ、その言葉はなのは心の最奥、最も脆弱な部分を貫いた。

ずっとずっと前、まだ彼女が魔法と出会うはるか前。〃一人ぼっちで何もできなかった頃の自分〃 その頃の家族〃を嫌でも想起させる。

目を見開き、呼吸も忘れて立ち竦む。

立香はそれに気づきながらも、あえてさらに踏み込む。あとで盛大に嫌われるかもしれないが、それすらも覚悟して。

「そしてもう一つ。過去の事件のことは俺も少し聞いているけど……君はもしかしたら〃自分がもつと強ければ〃、あるいは〃自分さえもつとしっかりしていれば〃とか思っていないかい」

「どう、して……」

それはある意味凶星だった。〃もつと強く〃 〃もつと早く〃……この手を伸ばさせていれば。それは、魔法と出会ってからというもの、ずっと頭の片隅にあった思い。

〃どんなことをしても助けなければ〃。

〃私が必ず……助けるんだ〃。

一人の少女の胸に刻まれた、何よりも強い思い。

それはようやく見つけた、自分にできること

それを立香は、あえて踏み砕く。

「はつきり言うけど、それは思い違いだ」

「え……」

「君が思うほど、君の手は大きくないし、もつと伸ばせたところではたかが知れている。俺たちの手が掬い取れるものは、決して多くはないんだよ。

過去を振り返って反省するのは良い。〃ああすれば〃 〃こうすれば〃と模索するのもいいと思う。

でも、そうすれば〃できたはず〃 っていうのは単なる錯覚だよ。君の魔法は、決して特別じゃない」

「そんな……そんなこと！」

「リインフォース・アインスに対し、君の魔法は届いていた。それで

も、彼女を止める以上のことはできなかつただろ？

どれほど力をつけたところで、それは変わらない現実。結末を変え
るためには、必要な力が違うんだ」

「っ……っ！」

「プレシアは特に顕著だと思う。そもそも救うための時間が、なかつ
たんだ」

それは、反論のしようがない現実。

初代リインフォースに対し、なのはができたのは彼女を止めはやて
が管理者権限を握る隙を作ること。

プレシアにできたことがあるとすれば、ほんの少しだけの延命。

どちらにも意味はあるだろう。だが、それ以上のことはできない。

少なくとも、高町なのはには……二人は救えないのだ。彼女たちを
救えたのは、救える可能性があつたのは、常にほかの誰かだった。な
のはがどれだけ力をつけ、魔法を巧みに操り、ことに備えたとしても
…その事実が変わらない。

しかし、思い違いをしてはならない。それは決して……

「でもねなのは、それは君の罪じゃない」

「え？」

「君はその時々で全力を尽くしたんだろ。できる限りのことを、精一
杯。それとも、何かやり残しがあるのかな？ あるいは、手を抜いて
いたとか？」

「そんなことありません！」

「そう。君は自分が傷つくことを恐れず、誰かのために手を伸ばした。
なら君はもつと……そんな自分のことを認めていいんだ。

だってそれは、誰にでもできることじゃないんだから」

そう、なのはの一番の思い違い。それは、彼女が今日まで〴〵してき
たこと〴〵がどれだけ特別だったのかわかっていないこと。

「それは紛れもない、得難くも尊い善性……君の魔法だ。プレシアも
アインスも、君には助けられることができなかった。だけど、フェイトを
救ったのは君だ。はやてが、守護騎士たちが救いの機会を得られたの
は君がいたからこそだ。」

世の中、本当に「その人じゃなきゃできない」ことなんてそうはない。大抵のことは、別の誰かでもできるんだ。あるいは、君が為しえたことも「たまたま」君だっただけなのかもしれない。でもそれは確かに、君が為しえたことなんだ」

どこぞの破戒僧風に言うのなら、「間が悪かった」のではなく「間が良かった」だけかもしれない。

それこそ、別の誰かでもたどり着けた結末かもしれない。かつて、カドック・ゼムルプスが言ったように。

だがそうだとしても、なのはが勝ち取った現実には変わりはない。

「君が全力を賭して勝ち取ったものは、間違いなく最善だった。そもそも、あの時「ああしていたら」もつと良い結果になっていた……かもしれない」というだけなんだよ。もしかしたら、もつと悪い結果になっていたかもしれない。それは、俺たちには知りようもないことだ。

だから、「たられば」に意味はない。手にした現実が俺たちのすべてで、そこに至るまでに君が最善を尽くしたのなら……胸を張っていいんだよ。君自身がそれを認めてやれないでいたら……いつか君は、自分が嫌いになる。それは、とても悲しいことだ。君にとつても、周りの人たちにとつても……なにより、救われた人たちが」

立香は知らない。なのはが「誰かを助けられる自分」でなければ好きではない」ことを。

それでも確かに、立香の言葉はなのはの心に一石を投じていた。

「家族や大切な人たちに、あの日と同じ思いをさせていいのか」

「手が届かなかった人はいる。自分では救えなかった人もいる。だけど、救えたものは確かにあった」

「為しえた結果以上に、そのために全力を尽くした心こそが……一番の魔法なのだ」

とまあいいことを言っているのだが、実を言うと一番の目的は別にあつたりするわけで……。

「先輩、そろそろ……」

「うん。じゃ、「時間稼ぎ」終わり」

「……………へっ?」

「それじゃ婦長センセイ、よろしく願います」

「救命の時間です。傷は私が癒します。何もかも全て、元通りにします」

「なのはさん、どうか大人しく休んでください。でないと……命にかかります」

「あの! それってどういう……って、どこからともなくベッドが!」
「あなたが患者ですね。私が来たからには、どうか安心なさい。私があなたを救います。ええ、たとえ——あなたを殺してでも!」
「殺しちゃ死んじゃうと思うんです——つ?!」

何だかよくわからない、だが有無を言わせぬ圧倒的目力めちからと迫力に気圧されている間に、恐ろしいほどの手際の良さでなのはをベッドに縛り付けるクリミアの天使(狂)。

あまりの暴論に涙目になりながらなのはは叫ぶ。だが、それを治療拒否と受け取ったのか、ナイチンゲール女史は手を優しく彼女の肩に置き……指を食い込ませた。

「肩が痛いっ!? 肩っ、肩が——っ!!」

「痛みは生命の証。よかった、あなたはまだ生きている」

「あんまりよくないんですけど!?!」

「その灯が潰える前に、私は最善を尽くしましょう」

「わかりました! わかりましたから! だから! お願いだから手をどけてください!?!」

「あ、あの……なのはさんもこう仰っていますし……」

「ダメです、アミタさん。巻き込まれます」

「下手すると、実力で排除されるから」

「そ、そんな……」

あまりにもあんまりな状況に、流石に割って入ろうとするアミタだがマシユと立香に止められる。

実際、下手に口を挟むと彼女にまで飛び火するのだから、当然の配慮だろう。

こと治療行為において、彼女の辞書に“妥協”や“譲歩”といった

言葉はない。むしろ、邪魔する者は物理的に黙らせる。先ほど彼女が語ったように、それが患者自身であつても、たとえ“殺す”ことになつても。ナイチンゲールは治療を遂行する。それこそが、“鋼鉄の白衣”たる由縁なのだから。

「恐れることはありません、どうか安静に。あなたは怪我人、早急な治療が必要です。承諾できないというのなら……四肢を砕きます」

「お願いだからお話を聞いて——っ!？」

なのはの悲痛な叫びが木霊すが、それは無理な注文というもの。

生前がどうだったかは知らないが、今の彼女はバーサーカー。そもそも、その言葉は自分に向けて言い聞かせているだけなのだ。会話など成立するはずがない。それを証明するように、ホルスターから拳銃を抜いて最後通告が下される。

「さあ、選りなさい。安静にするか！ あるいは“撃たれて”から安静にするか！」

「ふ、ふえええええ!？」

高町なのは、生涯の天敵との邂逅であつた。

ついでに、後の主治医シヤマルは語る、「なのはちゃんにはアレくらいでちょうどいいのよね」と。

あと、フェイトの手前あまり大きな声では言えないのだが、密かに立香に対して若干の苦手意識を持つに至つたきつかけでもある。こう、まんまと嵌められたのがトラウマになっているのだ。

ようやく観念したなのはを縛り付けたベッドを担ぎ上げ、ズンズンとその場を後にするナイチンゲール。

もちろん、誰一人として異議を申し立てる者はいない。そんなことをしたが最後、それこそ命がないと悟つたのだ。

時を同じくして、管理局優位に傾いていた状況が一変する。

キリエの共犯者と思われていたイリスの裏切り。彼女たちを包囲していた魔導士たちは、“生命エネルギーの結晶化”により無力化。また、オールストーン・シーの目玉である巨大鉱石内から出現した何かを連れ、イリスは現在移動中とのこと。

未知の攻撃に対し、管理局は解析と対抗策の構築の真つ最中。とはいえ、ここでイリスたちを放置することはできない。危険を承知で再度包囲・逮捕に動き出そうとする管理局に、カルデアから待ったが入った。

「アハハハ！ これといった対策もなしに仕掛けるとかナイナイ。そんな行き当たりばったりは当然カット！ 我らに計あり、是非ご清聴を」

場所は移って海上。

巨大鉱石から姿を現したのは、なのはたちとさして年も変わらぬ金髪の少女だった。その周囲に浮遊するのは、五基の盾とも剣とも取れる兵装。さらにその周囲には、はやてとの戦いから離脱したディアーチエと、一度は局の手に落ちたレヴィ・シユテルの姿。

イリスの一喝で少女は目を覚めますが、すぐ不自然な形で動きが止まる。その間にイリスがユーリと呼んだ少女に拳を振るっていることから、穏やかならざる間柄であることがうかがい知れる。

しかしそこへ……

「動かないで」

「えっと、このまま指示に従ってもらえると嬉しいんですけど……」

管理局からも割と信用されているイリヤと美遊が呼びかける。

だが、返ってきた反応は素っ気ないものだった。

「は？ たった二人でどうするつもり？ それじゃ、私たちを捕まえることはおろか、戦いにすらならないでしょうに……まあいいわ。邪魔をするなら、片付けるだけよ。ユーリ！」

イリスの指示と共に、ユーリを中心に光が広がる。

イリヤと美遊はその光をもちに浴びたのだが……

「な、んで……どうして、どうして何も起こらないの！ 生命力を結晶化させて奪い取るこの子の能力、それをどうやって……!?」

「……うん、その手の攻撃は私たちには意味がない」

「魔導士の皆様と違い、魔術師やサーヴァントにとって魔力とは生命力と同じものですから」

「うーん、なんかもぞもぞって感じはするし、ちょっと気持ち悪くはあ
るんだけどねえ……」

「ま、ぶつちやけ自分の生命力に干渉されるなんて、魔術的に論外です
しね。せめて、他者封印・鮮血神殿ブラッドフォート・アンドロメダくらいでない」と

そう、同じ魔力という名称を用いても、魔術師と魔導士では本
質からして違う。

魔術師が用いる魔力とは、自らの生命力を魔術回路で変換したも
の。大気中の魔力も使用するが、それにしたところで星の生命力の一
端という意味合いが強い。その制御を持つていかれるなどという不
手際、犯すはずがない。

「ちいつ、やつぱり情報不足は痛いか……でも、多勢に無勢は変わらな
いわ。それで一体……」

「戦う気はない。今回の私たちの役目は……」

「足止めだもんねー」

「何を……っ!」

何かに気付き、反射的に頭上を見上げるイリス。そこには、いつの
間にか移動していた空中庭園。そして、そこから落下してくる一つの
影。

イリスは正体を見極めるより早く撃ち落とそうとするが、イリヤと
美遊がそれを阻む。

そして、瞬く間のうちに距離を詰めたそれは3mに迫る体格をフル
に使い、ユーリを拘束する。

「ユーリ! 早く引き剥がしてそいつを……」

「まよえ……さまよえ……そして……とぎせ! 万古不易の迷宮!!」
ケイオス・ラビュリントス

海面に着水する直前、逆に海面を突き破って出現したのは小さな島
ほどもある巨大な石造物。それはまるで包み込むように、あるいは巨
大な生物の罅の様に二人を飲み込んだ。

「これは……」

「世界最古の迷宮とされるクレタ島のクノッソスの迷宮。内部は極め
て広大、危険な魔物も無数に跋扈している。付け加えるなら、二人は
今その最深部」

「え〜……無暗に飛び込むとホントに危ないので、ちゃんと準備してから挑むのをお勧めしますよ。いや、ホントに」

わざわざ解説してやるのは、一度仕切り直しを図るため。管理局としても一度態勢を整えるなり、ユーリやイリスへの対抗策を用意するなりする時間が必要なのだ。

カルデアのサーヴァントなら問題なく対抗できるようだが、管理局としてはその要請を出すのは最終手段なのだろう。今回はシオンから、イリスにとって重要な存在であると思われるユーリを分断・隔離する作戦を提案され、それを承認したに過ぎない。

もちろん、最善はこの場でのイリスの確保だが……大きすぎるリスクは犯せない。

(やってくれる……！)

実際、この場であの迷宮とやらに挑むには何もかもが足りない。一見すると小島ほどのサイズだが、それが氷山の一角でしかないことがわかっているのだ。海中には、信じられないほど巨大な構造物が存在している。

ディアーチエたちも、そもそもイリスを信用していないようで利用するのは難しい。

イリスは臍をかみながら、いったん仕切り直すべくその場から姿を消した。

自らの邪魔をするものを、必ずや排除して……復讐を果たすことを誓って。

EX03 それぞれの恋愛事情

——というわけで！ ママたちの恋愛事情とか聞きたくて来ました！

また単刀直入というか、ぶっちゃけたねえ……。でもそうかあ、ヴィヴィオもそういうことに興味を持つ年かあ。そりや私も年を取るわけだねえ。

——あのお、しみじみしてるとこ申し訳ないんですが、できればマキをお願いします。ママの里帰りの合間に、ちよこつと抜けてきた状況なもので……。

あれ？ なのはちゃんには秘密なの？

——だって、照れたり恥ずかしがったりで教えてくれないんだもん。

あゝ、なるほどねえ。フェイトちゃんも似たようなものだろうし、赤裸々に話してくれそうなのははやてちゃんくらいかあ。

——あとは客観的な感想とか聞いてみたいなあっていうのもあります。本人たちに聞いても、砂糖吐きそうになるのが目に見えているので。

どこも見てるこつちが恥ずかしくなるくらいにラブラブだしねえ。いやあ、みんなまだまだ若いなあ。

あ、でもはやてちゃんのところは最近割と落ち着いてきたかな？

結婚前から同居してるし、家族歴は10年どころじゃないから。

——そうですね。何というか、新婚の初々しさと長年連れ添った熟年夫婦感、両方ある感じです。

その点で言えば、フェイトちゃんもなのはちゃんもまだまだ新婚気分が抜けてないよね。結婚してもうそれなりに経ってるのに、落ち着くのはまだ先かなあ。

でもそういう話が出たってことは、ヴィヴィオも実は結構悩んでたりする？

——……割と目のやり場に困るというか、気付かないフリをするのも楽じゃないのです。フェイトさんの場合、サーヴァントの皆さん

に牽制が必要なのはわかるので仕方がないと思うんですが、ママにはもうちよつと娘の目を気にしてほしいなあ、と。

高町家の長女も大変だあ。

——ヴィヴィオさんも結構苦労しているのですよ。……あ、参考までに、エイミイさんたちにもそういう時つてありましたか？

私とクロノ君も長い付き合いだからねえ。姉弟兼親友兼仕事上の相棒関係から夫婦になったようなものだし。

——あれ？ 恋人期間は？

なかったわけじゃないけど、確かちやんと付き合った時間は一年なかったんじゃないかな？

クロノ君つてば、仕事人間過ぎてプライベートに何していいかわからない子だったからね。休みの日でも隙を見ては仕事しようとするし、艦や臨時支局から出禁食らった完全オフの日でも訓練か勉強、ニュースと事件のチェックばかりだったんだから。

私が強引にでも連れ出さないと、ホント「プライベート？ 何それ美味しいの？」状態。まあ、海鳴に来てからは恭也さんとか趣味の合う人もいたし、ヴェロツサ君も連れ出してくれたから、少しはマシになったけど。それでも、なかなか休みが合わないから、もっぱら私が連れ出していたのですよ。

——でも、クロノさんが自分の買い物をするのつて、あんまりイメージできませんね。

まあね。実際私の買い物メインで、クロノ君荷物持ち。ついでに、私がクロノ君の服を見立てたりするつて感じだったから、そのイメージも間違つてはいないよ。

映画とか娯楽施設とかにもほんと疎くてねえ。任せつきりにはされないけど、こつちで候補を絞らないとフリーズしちゃうの。だからもっぱら私が「これとこれが面白いけどどつち見る？」「おススメはここどこ、どこに行く？」つて提案して、その上でクロノ君が決めるつて感じ。

——プライベートでも副官なんですね。というか、完全にデートですよ、それ。

そうそう。まあ、アレで律儀だから偶には自分でプラン考えたりしてくるんだけど、微妙に自信なさそうなのが可愛いというか……。

——（結局こっちでも惚気られるのかあ……）

とまあ、そんな関係が続いてただけ……クロノ君真面目だからねえ。中途半端はいけないと思ったのか、関係をはつきりさせるために告白してくれたんだ。でも、正直告白前も後もあんまり変わらなくって、一年くらい経ってプロポーズされたわけ。

——なるほど、それで恋人期間が抜けてるわけですか。

そういうこと。その点で言えば、私たちの関係ははやてちゃんに近いかな。闇の書事件の後からは同居してたし、それまでも半ば士郎さんは八神家の一員だったわけだしね。

違いがあるとすれば、私たちと違ってはやてちゃんは計画的だったこと。すっかり外堀埋めて、数年計画で落とすにかかっているんだもん。既成事実を積み上げて、中には「あれ、まだ結婚してないの？」とかいう人もいたんだよ。守護騎士たちも率先して「我が家の嫁」って吹聴してたし……「まるで追い込み漁だ」って言ったのは誰だったっけ？

——黒いよ!? 八神司令……というか八神家コワツ!? って、あれ？ でも、ティアナさんたちは結婚してるの知らなかったって言うてましたけど？

あの子たちが訓練校に入ったのって、はやてちゃんが結婚したくらいの頃でしょ？ 目的を達成した以上、それ以上手を打つ必要がなかったんじゃないかな。

それに、訓練校とかは陸の色が濃地上本部いし、その後も陸士隊だったら噂とか聞いたことがなくても仕方ないと思うよ。はやてちゃん、本局寄りで陸とはあの頃あんまり繋がりがなかったしね。エリオとキヤロはそもそも噂を耳にする機会自体なかっただろうし。

——なるほど……。

なのはちちゃんに関しては……まあ、ユーノ君の忍耐勝ち、かな。あと、なのはちちゃんが結構めんどくさかった。

——それ、割とよく聞くんですよねえ……。

なのはちゃんってば、ユーノ君のこと好きなくせに「私にはもったいない」とか「悲しませたくない」とか言つて尻込みしてるんだよ。周りから見れば相思相愛なのにだよ？

しかも、ユーノ君は好意を示しつつも答えは急がないっていうスタンスで覚悟決めてどっしり構えてるし。

——不安とか、なかったのかな？

なかったわけじゃないみたいだよ。クロノ君とか立香さんとかとは、男の子同士でなにかあったみたいだしね。

でも、そこはなのはちゃんの一番の理解者というべきか……なのはちゃんの答えを待つっていうことだけは決めてたみたい。

いやあ、いい男に育つたよ、ユーノ君。

出世街道驀進して民間協力者ながら若くして一部門の長だつていうのに、局の外では歴史学者として学会でバリバリ活躍。職場が職場だから色白で線が細いけど、実は結界魔導士としてもクロノ君と訓練できるくらいの腕は維持してるし、アレで結構力あるんだよね。

——そうですね。地味に体幹いいですし、重いものもひよいつと持ち上げてくれるんですよ。

元々は遺跡発掘が生業の部族の出だからね。今でもフィールドワークに出てるみたいだし、直接戦闘向きではないだろうけど基礎体力はかなりのものだと思うよ。

ヴィヴィオくらいの頃には魔法学院の修士課程を修了してるし、学歴もすっかりあるんだよね。

つまり社会的地位を確立した高学歴高所得、線の細い中性的な美形でありながらいざとなれば守ってくれる頼り甲斐もあり、柔和な性格でリーダーシップも発揮できるわけだ……言つててなんだけど、ユーノ君って実在の人物だよな？ こう、実は空想の産物とかじゃない？ 女のバカな夢が山盛り詰め込まれたみたいなプロフィールになつてるんだけど……。

——いや、それを言つたらフェイトさんもじゃないかと……。

確かに、あの子も大概男の子の夢の具現化だしなあ……。待てよ、それを言つたらなのはちゃんたちだって似たようなものか。それぞ

れタイプは違えど、属性山盛りなことに違いはないし。改めて考えると、あの子たちって濃いよねえ。

———そ、それについてはノーコメントで。自分で言うのもどうかと思いますが、私も属性過多ですから。

失われた王家の血統で、親はエリート公務員と高名な学者さん。名門校に通う優秀な若手競技選手であり、無限書庫司書をはじめいくつかの資格を取得済み。本人も明るく闊達な美少女……確かに、負けず劣らずか。

まあそれはともかく、そんな超優良物件のユーノ君だから当然人気もあるわけんだけど、彼自身はなのはちゃん一筋。なのに、当のなのはちゃんは足踏みしてるんだから、面倒臭いつたらないよ。

———それは、はい。我が母ながら、心底メンドクサイと思います。しかもね、それを聞いた美由紀ちゃんがやさぐれて大変だったんだよ。私も何度愚痴に付き合ったことか……。

———え、美由紀さん？
そうだよ。中学生くらいになるとね、やっぱりそういう話題が増えるわけ。

フエイトちゃんとはやてちゃんは心に決めた人がいたし、小学生のうちから手を打ってたりしてたとはいえ、周りも中学生になるとそういうことへの興味も強くなるわけですよ。女の子たちだけで集まっ
て恋バナに花を咲かせたり、ね。

私はまあクロノ君がいたわけですし？　むしろ、色々相談される側
なんだけど……妹たちが年頃の女の子らしくキャツキヤウフフして
いるのを聞いては凹み、相談されないことに荒んでいく友人を放置は
できません。

———（なんだろう、すぐくリアルに想像できる）

恭也さんに「なのはのことより、自分の恋人を探せ」とか言われた
時なんて、「ユーノく、私をお嫁に貰って〜（泣）」とか言い出しちゃ
うくらいだからね。

———……ちなみに、その時ママは？

目から光が消えたね！ シュテルもそうだけど、身内にも容赦はな

いみたい！

自分はふさわしくないと思ってるから他の人がちよつかいかけるのは我慢できるみたいだけど、近しい人だと抑えられないってことかな？ 今はもう抑える気がないみたいだけど。

———ですなぁ。場合によっては、私にもヤキモチ妬きますし。完全にタガが外れておりますな。

まあ、あのまま進展がないよりかはいいんだらうけど。ホント、ヴィヴィオは二人の恋のキューピッドだよ。

なにしろ、ヴィヴィオがいたからこそなのはちゃんも覚悟が決まったわけだしね。

———そういえば、良く私がいたから覚悟が決まったって聞きますけど、具体的に何があったのかって知らないんですよ。

まあ、あの頃はヴィヴィオもまだ小っちゃかったからね。

………ヴィヴィオが聖王家の血統であることは、割と早い段階でアインスは気づいてた。とはいえ、流星に聖王のクローンなんて爆弾情報は早々口外できない。特に聖王教会の場合、色々刺激しちゃう危険もあるから。

それにやろうと思えば、紅と翠の虹彩異色の子どもだって作れないことはないからね。だから、確信を得るまでははやてちゃんとアインス、後は極一部の人にしか知らせてなかったみたい。もちろん、なのはちゃんやフェイトちゃんにも秘密。

二人のことをママって慕っているからこそ、ありのままのヴィヴィオを受け止めてもらうのがいつていう判断だね。

そういえば、もう「フェイトママ」とは呼ばないの？

———うー、実は今でも言いそうになることが……。

言っただけなら？ 喜ぶと思うけど。

———でも、そうすると色々外聞が……。

まあ、捻った目で見ればユーノ君が二股してるとか、フェイトちゃんが浮気してる……みたいに見えないこともないか。

———はい。今でもフェイトさんのことは大好きですし、もう一人のママって思ってますけど、だからこそ気をつけなきゃいけないと思

うわけで。

なるほど、確かにちよつと野暮だったかもね。

じゃ、話を戻そうか！

そんなわけでアインスが中心になって密かに調査して、公開意見陳述会の前には確信は得られてた。でもだからこそ、六課は板挟みになってたんだ。

あの時はまだヴィヴィオとレリックの関係は不明だったし、聖王のゆりかごをスカリエッティが確保してるなんて知らなかった。だから、地上本部が狙われる可能性が高いっていう判断が有力で、六課もそっちの警備に向かうのが当然。

でも、現代では遺伝子情報を手に入れるのが難しい「聖王のクロール」なんてものをわざわざ作ったからには、当然何かしらの思惑がある。聖王教会の過激派が神輿にして権威を高めようとしているのか、あるいはどこかの誰かが……

——諸王時代のように兵器として使おうとしている、ですね。

どっちもありうるし、どっちも実際にやられたらすごく危険なことに変わりはない。六課はレリック関連と騎士カリムの予言への対策部隊で、地上本部を守るのは最重要事項。でも、だからと言ってヴィヴィオを軽視することはできない。心情的にも、実際的にもね。

一応、前線メンバーの一部を六課に残す案もあったんだけど、地上本部側に却下されたんだ。あれだけ騎士カリムの予言を重視しておきながら、警備に手を抜くつもりかって。正論っぽく聞こえるし、一応は正論なんだけど、レジアス中將たちが予言自体信用してなかったことを考えると、実際にはほとんど嫌味だね。

そんな中、エース・オブ・エースなのはちやんが六課に残るのなんて論外だったわけだ。
——え、でもあの時……。

ちよつとした裏技。替え玉を使ってなのはちやんは地上本部の警備に行ったように見せかけて、実は六課に隠れてたんだ。

出力リミッターとかもあったからできたことだね。リミッターなしだと、流石に誤魔化すのはきつかったと思う。何しろ、空戦S+の魔力だから。

………あの、それって相当不味いんじゃない？

ま、普通に懲罰ものだね。管理局は戦時でもない限り基本刑殺とかないけど、良くて降格、場合によっては不名誉除隊だってあり得た。

———そんな……。

それがなのはちゃんの覚悟だったんだよ。これまでのキャリアもこれからの未来も、全部捨ててもなのはちゃんはヴィヴィオを守りたかった。なにもかも覚悟のうえで、なのはちゃんはヴィヴィオを守るために行動することを選んだ。謹慎してる間に通信したけど、教官のくせに命令無視なんてして、教え子たちに合わせる顔がない”って苦笑してたっけ。

———謹慎だけで、済んでたんですか？

ん、まあ結果的にはヴィヴィオを守り切るのが正解だったわけだしね。強引なこじつけだけど、三提督からの秘密任務扱ってことになっただって。まあ、対外的には六課防衛戦の負傷で療養ってことになってたから、謹慎処分のことを知ってる人はほとんどいないけど。

実際、高強度AMF下でガジェットの大群と戦闘機人を相手にしての大立ち回り。ブラスターステムまで使って心身ともにボロボロだったから、療養っていうのも嘘じゃないしね。

———ベッドの上のママたちのことは、私も覚えてます。腕にギプスをはめて、包帯でぐるぐる巻きになって本当に痛そうなのに、それでも「ケガはない？ よかった」「ちゃんと守れた」って嬉しそうに笑ってたんです。

なのはちゃんらしいというか、なんとというか……。

そういえば、あの時ユーノ君もいたんだよね。なのはちゃんが前に出てユーノ君が結界と支援……はじまりのタッグ再結成だ。

———あの、もしも六課が襲われなかったらどうなってたんですか？

……替え玉がばれなければそのまま誤魔化してただろうけど、ばれたら最悪嚴重な魔力封印の上で除隊もありえただろうね。

三提督の秘密任務っていうのも、ヴィヴィオがスカリエツティの計

画で重要な役割があることが分かったからこそ、後付けできた言い訳だし。

——じゃあ！ ママは本当に……

うん。自分のこれまで^{過去}とこれから^{未来}を投げ打つ覚悟だったと思う。はやてちゃんたちは「本当にいいののか」って相当に念を押しづらいし、リンデイさんもだね。それでも、なのはちゃんはヴィヴィオを守ることを優先した。それどころか、「無限書庫司書長夫人っていうのも悪くない未来でしょ」って笑うんだもん。みんな、最後はそれで納得しちゃった。

むしろなのはちゃんね、「私の我儘のせいでみんなに迷惑をかけてごめんなさい」って頭を下げてたんだ。少しでも飛び火しないように「独断」っていう形にするつもりだったみたいだけど、それでもはやてちゃんなんかは「監督責任」を問われるのは避けられないだろうからって。ま、当の本人は「そんなんええ！ ちゅーか、絶対やめさせたりなんてさせへんからな！」って、なんとしてでも局に残れるよう手をまわしてたんだ。

とはいえ、今も局にいられるのははつきり言って「偶々」だね。スカリエツティが仕掛けてくれたから、ヴィヴィオを守る選択が正しかったと裏付けられたし、無事捕まえられたから「言い訳」を並べることができた。

まあ、ゆりかごについては「必要以上に破壊した」って突っついてくる人もいるけど……実はあれ、わざとなんだよ。そこにスカリエツティがいらないことは予想してただけけど、「念のため」って言って侵入して、ガジェットに襲撃されたから「応戦」したっていう形で駆動炉とか中枢を徹底的に破壊。こっちは本当に騎士カリムからの任務だったわけだけど。確かに強力な力だけど、もうこの時代にあんなものは必要ないから。

——ママは、どうしてそこまでして……。

月並みだけど、愛してたからだだよ。ヴィヴィオが大切に、愛していたからこそなのはちゃんは「守る」ことを選んだ。本当に、ただそれだけ。そして、その覚悟が結果的にユーノ君の想いと向き合う勇気を

なのはちやんにくれた。

だからヴィヴィオ、そんな顔しちやダメ。なのはちやんは今間違はなく幸せで、それはヴィヴィオがいたからこそ得られたものなんだから。

というか、処分が確定するまでの間やめた後のことを積極的に考えたくらいなんだよ。桃子さんに弟子入りして、「翠屋二代目店長」を目指すのもいいし、これまでのコネを使って「翠屋二号店」を開くのも捨てがたい、ってね。

あとは……そうだね。「知っていた」からかな。

——知ってたって、なにを？

「ゆりかごの聖王」になることの意味を。その果てにある可能性の一つを、私たちは知っていた。

だからこそ、なのはちやんは強く思ったんだと思う。ヴィヴィオを「あの人」と同じにさせちゃいけない、させたくないって。

まあ、その結果「あの人」から「お母さま」呼びされるとは思わなかっただろうけど。

——あ、今も会う度に「ヴィヴィ！ お母さまが認知してくれません！」お姉ちゃん、ほしくありませんか？ ほしいですよね！

ほしいと言ってく下さい！」って泣きついてくるんですよ。正直……勘弁してほしいです。

「姉」というか、むしろ「母」だよな。

——まあ、フェイト「ママ」と違って絶対に呼びませんけど!!

なのはちやんはなんて？

——「こんな大きな娘を持った覚えはありません！」「私の娘はヴィヴィオであってあなたじゃありませんから！」って。別に嫌ってるわけじゃないと思うんですけど、グイグイ来るのには辟易してるみたいです。

まあねえ……手順とかすっ飛ばしてるからなあ。いや、生い立ち的に「母恋し」っていうのはわかるんだけど……。

——とりあえず、この話もうやめませんか？

うん、そうしよつか。

「でも、プライベートなことだったら全然♪　というか、お話ししたいこと、いっぱいあるんだ」

(ワクワク)

「じゃ、とりあえず……はやては最後で」

「なんで!?!　ちゅーか、むしろ話題の中心は私と違う?　ほらこれ!」

そういつてはやてが指さすのは、自身の左手薬指に収まった一見するとシンプルな、だが目を凝らすと精緻な模様の彫り込まれた白金の指輪。その意味するところは一つ、だからこそアリサはスルーする気満々ののだが。

「だって、どーせ旦那とのラブラブ新婚生活の話でしょ。　というか、あからさまな新婚アピールがウザイ」

「まあ、さつきからこれ見よがしに指輪を見せてるもんね、はやてちゃん」

「ごめんはやて、ちよつと弁護できそうにない」

「あ、あははは……」

“そんな”とテーブルに突っ伏すはやてと、苦笑しながら背中をさすってやるすずか。

まあ、わかり切ったことではあるが幸せいっぱい浮かれまくっているらしい。幼馴染にして親友の幸せは大変結構なことだが、色恋と縁遠い身としては「うぜえ」と思ってしまうのも本音なのだ。

アリサも興味はあれど、諸事情からあまり縁がないというか、縁を結ぶわけにいかないというか……。

そういう複雑な事情があるからこそだろう。あと、もう少し控えめというか、隠す気があれば聞く気になったかもしれない。

とはいえ、目の前でしょげられるとやはり気になって落ち着かない。さすがにちよつと言い過ぎたかな、と思ったのか、アリサの方から話を振ってくるあたり、つくづくツンデレ。

「ま、ちよつとくらいは聞いてあげるわ。　興味がないって言えばウソになるしね」

「まあ、私たちの年で結婚ってミッドでも滅多にないし」

「にやはは、わかってたつもりでも、やっぱりこの年で友達の結婚式に

出るって変な感じだったしね」

なにしろ、まさかまさかの16歳の誕生日その日にプロポーズ。その夜には入籍を済ませ、新郎新婦にとつて少々特別な意味を持つ聖夜に挙式をあげるといふ、実に華々しい夫婦生活のスタートを切った幼馴染だ。今現在の様子が気にならないはずがない。

アリサやすずかとは生活の拠点が遠く離れてしまったし、なのはやフェイトは仕事の関係からそうそう休みが合うわけでもない。ましてや、こうして五人勢ぞろいするなど本当に久しぶりなのだ。

「で、実際どうなの？ 新婚生活っていうのは？」

「あ、そういえば新婚旅行はもう行ったの？」

「うん、行ったよ。士郎の故郷に寄って、そのあとは知り合いに紹介してもらったリゾート。普段忙しいから中々新婚気分も味わえへんかったけど、満喫させてもらったわ」

「いや、新婚気分も何も、アンタたち昔から一緒に暮らしてるじゃない」

「チツチツチ！ 甘いで、アリサちゃん。やっぱり結婚したのとしてないのでは大違いや」

「わあっ、やっぱりそうなんだ……」

「具体的には、夜の爛れた性活g…あべし!？」

「ヤメイ！ 真昼間から何言ってるのあんたは！」

ちよつと花の16歳がしてはいけない表情を浮かべたはやてに、アリサのハンカチが叩きつけられる。

「うゝ、軽い冗談やのに」

「あ^{新婚}んたが言おうと生々しすぎるのよ」

「まあ、ラブラブしとるのはほんとやし、あえて否定はせんけど」

「……………何かしらこの余裕、妙な敗北感をおぼえるんだけど」

「「まあまあ」」

ジト目を向けるはやてはあくまでも余裕綽々で、それがなおさら釈然としない。

両サイドからなのはとフェイトが宥めてくれなければ、今頃もつと気持ち荒んでいたかもしれない。

「……ま、幸せならそれでいいわ。どうせ、不満の一つも……」

「不満？ あるよ」

「え？」

「あるの？」

「そらあるよ。自分やない誰かと一緒に暮らすんや、不満なんて出て当然。それとどう折り合いをつけるか、あるいはお互いの間でどんな妥協点を見出すか。それが夫婦生活の肝や。一緒に暮らしてるだけやと見えてこんかったもんが、結婚した途端に見えてくる。結婚は……深いで、一月で人を哲学者にしてくれる」

「フツ」と遠い目をするはやてからは、言葉にできない何かが生み出ている。

それは不快や嫌気とはかけ離れた、静かで落ち着いた…重みのある幸福のオーラだった。

「ふ、ふくん。例えば？ 士郎さんが方々でフラグを立てるとか？」

「そんなん昔からや」

（言い切った!?!）

（前だったら少しは動揺してたのに、この落ち着き……はやてちゃん、いつの間にかこんな貫録を）

「あゝ、相変わらずなんだなゝ」と呑気なことを考えているのはを除き、全員がはやての変化に戦慄を禁じ得ない。

「そ、それじゃ、何が不満なの？」

「まあ、とりあえず………士郎のご飯が美味しすぎる」

「「「あゝ……」」」

「前は誇らしかったし、今も誇らしいことに変わりはないんやけど……なんちゅーか、台所に立つ姿が様になり過ぎて腹立つ」

はやての料理の師匠は士郎だ。幼き日、彼と出会って間もない頃、母との思い出を辿る様に残されたレシピを前に悪戦苦闘するはやてを導き、「八神家の味」を共に復活させてくれた。感謝してもしきれないし、いつか追いつき追い越したい背中であることに変わりはない。

今まで、なかなか追いつけないことに「悔しい」思いはしていた

が、結婚してもなお「家事の主」として不動の座に君臨する姿に、なんというか……すごく納得がいかないのだ。

「そらな、ほとんど私が外で稼いで、士郎が主夫してくれてるんやから、そうなるのも当然なのはわかる。せやけど、やっぱり日本人だからやるか。台所は女のもの、的なイメージがあるみたいなんよ。」

あと、新妻ムーブできないのがめっちゃ悔しい。むしろ士郎の方が「おかえり。飯と風呂、どっち先にする？」って聞いてくるんやで」「妙に似合うんだよね、士郎さん」

「なんとなく、はやての悔しさが分かった気がする」

「いったい何度私が『じゃ士郎で』と言いつつになつたことか……」

「おくい、結局爛れてんじゃないの、脳内ピンクも大概にしなさいよ」
これは、一緒に暮らしている守護騎士たちもさぞ気を遣うことだろう。

「でも、不満がそういうことならちよつと安心かな。だって、仲良しだからこそだろうし」

「まあ、浮気の心配はハナからしてないけどね」

「当然や。そもそも、シヤマルにシグナムつちゆう極上の美女と一緒に暮らしとる状態で、私だけを愛してくれとる士郎に浮気の手配なんてあるわけないやん」

そして、守護騎士に浮気などしようものならその瞬間血を見るのは明らかだ。騎士たちが、はやてへの裏切りを赦すはずがない。たとえ相手が士郎であろうとも、その点は譲らないだろう。

（可能性があるとすればカリムやけど、あんな清々しい敗北宣言されたら、疑う気にはなれへんしなあ）

士郎との結婚が決まった後、一人呼び出されてカリムにあった時のことだ。結局彼女は士郎との関係性を明かしてはくれなかったが、「士郎は、本当に幸せそうに笑うようになったわ」「それは私にはできなかったことで、はやてだからできたこと」「だからはやて、決して彼の手を放しちやダメよ」と少しだけ寂しそうに微笑んでいた。

きつとカリムは士郎を幸せにしてやりたかったのだろう、はやてがそうであるように。もし彼女が士郎に手を伸ばすことがあるとすれ

ば、それははやてが彼の手を離れた時だ。

(ま、そんなんするつもりないけどな)

「でも、士郎さんにその気はなくても、近づいてくる人はいるんじゃない？」

「関係あらへん。誰が来ようと、私が士郎の一番であり続けられたいだけや！」

「はやてちゃん、スゴイ」

「うん、カッコいい」

“おゝ”と手をたたく幼馴染一同。

「じゃ、外の心配はしてないわけね」

「そやね。心配はしてない……あ、でも」

「……でも？」

「やいのやいの言うてくる連中は……そろそろ我慢の限界や」

その瞬間、はやての表情が一変した。幸せそうなそれから、凄絶な鬼の如き微笑み。

笑っているはずなのに、目も口元も一切笑っていない。子どもが見たらトラウマ間違いなしだ。

正直、あまり聞きたくはないのだが、ここまで来た以上聞かないわけにもいかない。というわけで、止む無くアリサは貧乏くじとわかつてそれを引く。

「ぐ、具体的には？」

「……ほら、士郎ってデバイスマイスターとしても料理人としてもビジネスネームつかつとるやん」

「そ、そうだね。“エミヤ”の名前は色々刺激するから、“センジ”って名乗ってるんだっけ」

「そうや。だから、士郎のことなくんも知らん連中が色々言うてくるわけや。やれ“あんな男、君にはふさわしくない”だの、やれ“悪い男に騙されている”だの。そろもう言いたい放題にな……まあ、それ位ならまだ我慢はできる。あの連中はただ無知なだけや、士郎が奥ゆかしいのにも原因はある。でも、我慢できんのは、どこから調べてきたのか、“君に復讐するつもりだ”とかアホな事ぬかす奴や」

「もつとダメ——!?」

八神はやて、神々の痕跡すら定かではないこの世界にありながら、彼女は複数の神から加護を受けた稀有な存在だ。基本的に目に見える恩恵はない。ただし要所要所で運が良かったり、妙なトラブルに巻き込まれたりする身だが、加護との明確な関連性は不明のまま。

だが、少々例外がある。それは、彼女に加護を与えた神々の中でも妙な相性の良さを発揮した「天の女主人」に由来する二つの力。

山脈震撼す明星の薪

アンガルト・キガルス
グガランナ・ストライク
と
天の牡牛

彼女はこの二つを、限定的ながら使用することが可能なのだ。

「お、落ち着きなさいよ！ いいの、神様の力をそんなことに使つて！」

「そ、そうだよはやてちゃん！ さすがに怒られちゃうんじや……」

「心配あらへん。競争相手は周回遅れ、刃向かう奴は二度と立ち上がれなくなるまで叩き潰せが、イシユタル様の教えや！ なあんにも問題ない！ むしろ、もつとやれと言つてくれるに違いない！」

((言いそ——!?))

カルデアきつてのトラブルメイカーだけに、十分にあり得る可能性だった。

その後、何とかはやてを宥めすかし、辛うじて概念惑星による砲撃も、黄金の大蹄も回避された。管理局は、今日も騒がしくも平和である。

「そういえばアリサ、すずか。高校生活はどう？」

「どうって言われても、ねえ？」

「うん。みんながいなくなつてすっかり寂しくなつたけど、それ以外だとあんまり」

「まあ、しゃーないか。編入生もおるやろうけど、基本的にはそうメンバーに変わりはないやろし」

この辺り、大学までエスカレーターの聖祥ならではのつまらなさだろう。

これで受験などがあればいろいろばらけたりもして代わり映えもするのだろうが、ほとんどの生徒はそのまま進学する。なのはたちの様に外部に出る方が珍しいのだ。

「強いて言えば、男たちが一層色気づいて告白が増えたくらいかしら」
「校舎別なの？」

「選択授業とか委員会、部活によっては一緒になることもあるから。あと行事もだね」

「あゝ、その辺は中学の頃と同じなんやね」

聖祥は中学から男女別れるが、それでも完全に隔離されているわけではない。さすがが言ったように、男女で交流する機会は一応設けられている。ただなのはたちの場合、その頃から管理局の仕事が入っていたため、委員会や部活には不参加、選択授業も本当に興味があるものしかとっていなかった。実質行事の時くらいしか男子と接触を持つ機会がなかった。おかげで、男子の間でアリサとすずかも合わせ「女神」と称される中、さらに「幻の三女神」と呼ばれ、見かけたら幸運の証、挨拶出来たらしばらく話題に事欠かないという妙なプレミアが発生していたことを、当の本人たちは知らない。

「私たちがいた頃は、告白ってそんなになかったよね」

「いや、それなりにあったわよ。アンタたちの場合、さっさと帰っちゃうから知らないだろうけど」

「あ、そうなんだ」

ただ、どちらかという精神的に早熟な女子から男子への告白の方が多く、まだ気恥ずかしさが勝る男子の告白はそう多くなかった。そこへ男子たちも追いついてきたらしく、高校に上がると共に比率がほぼ同じになったわけである。

とはいえ、基本学校外も忙しくしていたのはたちの場合、男子には告白のために彼女たちを発見すること自体が難しかったのも事実。校舎が別の為、下駄箱にラブレターといった古典的な手法も使えない。おかげで、なのはたちが告白を受ける場面というのはそうなかった。

強いて言えば、“偶々”の機会を逃さず告白に踏み切った猛者が稀

にいた程度だろう。

しかし、すずかとアリサの場合、委員会や部活にもそれなりに参加している関係から、当然比例して告白される機会が多い。だからこそ、進学と共に頻度が増したこと実感しているわけだ。

「ま、もちろん全部ごめんなさいノーだけど」

「ありや…いい男はおらん？」

「というか、幼稚過ぎるのよね。周りが周りだから、理想が高くなってるのは否定しないけど」

お金持ちの名家の出身であり、なのはたちとの関わりで同年代より何となく精神年齢が高めな二人だ。同年代の一般的な男子では、子どもっぽく見えてしまうのも仕方ないだろう。

彼女たちにとって身近な同年代の基準がユーノなものも、男子たちにとっては不運の一つだ。彼を基準にされては、たいていの男子は子どもにしか見えまい。

「あ、でも最近すずかが家で男を飼い始めたわよ」

「二………はあっ!？」

「あ、アリサちゃん……」

あまりの爆弾発言に、目をむいて驚く三人。3対の視線にさらされたすずかは、顔を真っ赤にして抗議しているが、それが事実である何よりの証明だ。

「飼うとか、そういうのじゃないから……」

「ちゅーことは、男がおることは否定しないんやね」

「うう……」

「と、とりあえず、経緯を聞いてもいいかな？」

「そ、そうだね。まずはお話聞かないと」

「えっと、あんまり驚かないでほしいんだけど、高校に上がってすぐの頃に……その、襲われて」

「ちよっ……」

「襲、われ」

「大丈夫なの!？」

「ほ、ホントに大丈夫。恭也さんとノエルたちが何とかしてくれたか

ら」

なんでも、親戚筋との間で以前からあったトラブルが原因となり、いよいよ痺れを切らした相手が強硬手段に出たらしい。さすががノエルの運転する車で習い事から帰宅する途中、行き倒れの少年を発見。介抱しようとして近づいたところ、その少年は隠し持っていたナイフで襲い掛かったのだが、それ自体はノエルが対処し事なきを得る。

ただし、少年は困だった。護衛でもあったノエルの意識が少年に向いた瞬間、潜んでいた本命が動きあわや…というところで、父や叔母のルートから情報を掴んだ恭也が駆け付け鎮静化。

月村家とその一族は故あって一族同士の繋がりが強い。だからこそ、できれば穏便な解決を凶ろうとしていたのだが、こうなってはさすがにそういうわけにもいかない。速やかに対処はなされ、もうすずかや周囲の人間が危険にさらされることはないだろう。

そこまで聞いて安堵したなのはたちだが、気になる点が一つ。

「じゃあ、その困になった子が？」

「うん。行く当てもなくて、うちで保護してるんだ」

「えっと、大丈夫なん？」

「良い子だよ。ファリンたちに聞いて色々家のことも手伝ってくれるし、猫たちもなついてるんだ」

「ま、元々孤児だったらしくてね。利用するために引き取られたんじゃないかって話よ」

その生い立ちには同情するし、一度の過ちで危険人物扱いするのも良くはないと思う。そんなことを言い出すと、フェイトや守護騎士たちも危険人物扱いしなければならなくなるからだ。

とはいえ、やはり親友の身は心配になる。なにしろ、どんな理由があれずかか一度その少年に命を狙われているのだから。そんな皆の危惧もわかるが、すずかには件の少年を放っておけない理由があった。

「……あの子も、ちょっと普通じゃない生まれみたいなんだ」

「そう、なの？」

「うん。私を襲おうとした時、あの子の目…蒼かった。凄く、怖いくら

いに綺麗な蒼。意志みたいなものは感じられないのに、でもはつきりとした殺意。

それが、すごく印象に残ってた。きつとこの子は望んで、自分の意志であんなことをしたわけじゃない。もっとなにか、どうしようもないものがあつたんじやないかって」

生い立ち…というよりも、出自の関係から彼女はそう言ったものに少しばかり聡い。だからこそ、わかったことだった。

「目が覚めてからも、しばらくは茫洋として意識がはつきりしないみたいだった。でも時々、あの時に似た目をしていることに気付いたんだ。その度に、あの子は凄く苦しそうだった。

どうしても気になって、お姉ちゃんとか恭也さんに調べてもらって…：那美さんが教えてくれた。昔、蒼い目を持った特殊な退魔師の家系があつたんだって。もう名前も残ってないけど、あの子は多分その末裔なんだと思う」

「……………」

「詳しいことはわからないけど、代わりにあの子が教えてくれた。私たちを見ていると、偶に頭の中に『殺せ』って声がするんだって。色々調べて分かったのは、私たちが『一族の力』を使う時なんかにそれが顕著なこと。それどころか、那美さんの霊力にも反応してた。

たぶん、『普通じやないもの』を排除しようとする本能みたいなものがあるんだと思う。

あの子、泣いてたんだ。『うるさい』『殺したくなんかない』って…：それを聞いたら、放つてなんて置けないよ」

確かに、少年には何の咎もないだろう。むしろ彼は、懸命にその本能に抗おうとしている。とはいえ…：

「でも、そんな体質なら、すずかのところにいるのはやつぱり…：」

「何なら家で預かろうかって言っただけどね」

「もう、それはアリサちゃんにも原因があるよ」

「何があつたん？」

「悪かったわよ。あの時は私も気が立ってたし、つい『次すずかに手を出したら、首輪つけて閉じ込めるわよ』って言っちゃったのよね」

「それですつかりアリサちゃんに怯えちゃって……」

聞けば、中学生になるかならないかくらいの少年らしい。そんな微妙なお年頃が、年上女性にそんな風に脅されたら、おかしい恐怖心が植えつけられるのも無理はないだろう。ただでさえ難しい生い立ちな上に、アリサは妙に威厳というか風格があるのだから始末に負えない。

「とうか、なんで首輪？」

「……いや、第一印象的に…首輪が似合いそうだなあつて」

「二「うわあ……」」

「ちよ、引かないでよ!? 割と傷つくんだけど!?」

「アリサ、とりあえずエリオには近づかないで」

「フェイトもそんな汚物を見るような目で見ないでよ!?」

ちなみに、まだ人前には出てきたがらないので写真を見せてもらったところ、確かに「子犬」っぽかった。それも、*「雨に濡れた子犬」*的な庇護欲を誘うタイプの。

「一応、意識がはつきりしてる時は自制できるみたいだし、しばらくはうちで面倒を見ようかなつて。うちは姉妹だったからお母さんも可愛がつてるんだよね。お父さんなんか、いつか一緒にお酒が飲みたいなんて、気の早いこと言ってるし。お姉ちゃんも、いいわよね、弟♪ つて揶揄って遊んでるんだ」

「だれも反対してないなら……」

「いいの、かな？」

「まあ、写真を見た限り本人もまんざらやなさそうやし、アリサちゃんのところでもホンマに飼われるよりかはマシやろ」

「それ引つ張るのいい加減やめてよね!？」

当分の間、このネタで弄り倒されることになるアリサであった。

「とりあえず、ちゃんと生きて行けるように責任を以て面倒を見ようと思う。そのうち皆にも紹介するね」

「自分好みに育てて収穫、なんてことのないようにね」

「アリサちゃん!」

先ほどまでの意趣返しとばかりに揶揄うアリサ。

だがまさか五年後、どこに出しても恥ずかしくないようにと気合を入れて教育した結果、あまりにも『自分好み過ぎる』成長を果たした少年にすずかが葛藤することになるとは思いもしなかった。ついでに、子犬だと思っていた少年は立派な（夜限定の）『オオカミ』になり、すずかとそういう関係になってしまおうという、とんだ予言になってしまふのだが……人生とは、わからないものである。

まあ、すずかも満更ではなかったのでよしとしよう。それはそれとして……

「ま、そもそもすずかの好みは立香さんだし、その心配はないわよね」「アリサちゃん、それ秘密やん!？」

「あ……」

「すず、か……う？」

まるで油の切れたロボットのようなきこちなさですずかの方を見やるフェイト。

知っていたらしいはやてと、ついうっかり口を滑らせたアリサの表情が凍る。

言葉の意味を理解し、親友の胸の内を察して瞳を潤ませるフェイト。自分はいつたい、今までどれほど無神経だったのだろう。すずかが立香のことを好きなどと思ってもせず、アレコレ相談して……どれだけ彼女を傷つけたことか。すずかが何も言わなかったのは、きっとフェイトに遠慮して……とそこまで思ったところで、当のすずかは一つ溜息をつくと、ほほ笑みながら首を振る。

「フェイトちゃん。たぶんフェイトちゃんが思ってることは、全部勘違いだよ」

「で、でも……!？」

「確かに、私は立香さんが好きだった」

「でもそれは、『立香さんのこと』が好きだったんじゃない。私は、『私を受け入れてくれる』、その確信があったから好きになった」

藤丸立香の懐の深さ。神も魔も、悪も怪物も受け入れてしまえる度量。夏のあの日、すずかはそれを知った。

伝説に語られる鬼を、知らぬ者のいない怪物を、手に負えぬ神すら彼は受け入れてしまえる。

そんな彼なら、すずかもまた受け入れてくれるに違いない。それは期待ではなく、確信だった。

不安に怯えることなく、安心して好意を向けられる相手。だから好きになった。

しかし、それは違うのだ。

それが不純だとか間違っているとか、そういうことではなく……。

「でもそれは、私が欲しいモノじゃない。フェイトちゃんを見て、それに気付いちやっただ」

「わたし、し？」

「そう。だって、フェイトちゃんは立香さんが好きだけど、別に生まれのこととかを受け入れてくれたから好きになったわけじゃないでしょ」

「それは…もちろん」

「私もね、それが欲しかった。『嫌わない』人を好きになりたいんじゃない。私は『好きな人に受け入れてほしい』んだって。だから、謝らないで。そして———ありがとう。私に、大切なことを気付かせてくれて」

そう言っただけで笑み隠さずかの顔は、本当に透き通ったものだった。

「まあ、それはそれとして………アリサちゃん？」

「ひっ!？」

「今日は、ちよつと口が軽すぎるんじゃないかなあ？　いくらみんなと会えてうれしいからって、ハメを外し過ぎるのは良くないと思うの、私」

「ご、ごめんなさい!？」

極寒の眼差しに、すっかり縮こまって借りてきた猫のようになるアリサ。

口は禍の元という言葉を、深く深く実感した瞬間だった。

とはいえ、謝罪の言葉一つで済むほどアリサの罪は軽くない。この

話をしたら絶対にフェイトが気にするとわかっていたからこそ秘密にしていたのだ。そんな口の軽い悪い子には、相応の罰が必要だろう。

「まったくもう、アリサちゃんにも困ったものだよね」

「た、助けてなのは！ フェイト！ はやて——！！」

（普段怒らへん人が怒ると怖いって、ホンマなんやね）

（うん、すずかちゃんは怒らせないようにしよう）

「アリサ…えつと、その…：頑張って！！」

「中身のない励ましなんているか——つ!?」

襟首つかまれて、見た目にそぐわない力を発揮してアリサを引きずっていくすずか。

十分後、外傷はないもののすっかり憔悴しきったアリサがすずかに連れられて戻ってきたのだが、誰もあえて藪を突こうとはしなかった。

「グスツ、ヒグツ…う、裏切り者。これだから女の友情は…薄情者」

…：エツグ

（アリサちゃんがマジ泣きしとる）

「えつと、近況報告の方はどうしようか？」

「とりあえず、すつかり異性関係の話になっちゃったし、二人のことが聞きたいな」

なんというか、今のすずかに逆らう胆力はフェイトとなのはにもない。

とはいえ、だからと言って素直に話すのは恥ずかしいわけで…

「じゃあ、フェイトちゃん」

「は、はい！」

「立香さんとはどう？ 私としては、フェイトちゃんにはしつかり幸せになってほしいんだけど」

「そ、その！ 母さん…あ、プレシア母さんが色々準備をしてくれて、とりあえずあの時の私の心配とかは杞憂みたい」

「そっか。じゃあ、もう何の気兼ねもなくアプローチできるね、良かった」

実際には、立香の方も似たような理由でフェイトの思いに応える気がなかったのだが、この数年の間に色々あった。

フェイトの騒動が記憶に新しいが、フェイトが立香の背負うものの意味と重さを知ったりもしたし、他にも本当に色々。

当初はとりあえず、マシユと二人でどちらが先に立香の「男」を反応させるかで勝負になった。立香が二人の思いにこたえる気がないのは、男性機能が原因。なら、それを回復させた方が……という話だ。だが実際には全戦全敗、ピクリとも反応しない。おかげで、割と女として自信を喪失したものだ。さすがにそんなことはいくら親友でも口にはできない。あと、立香の名誉のためにも。

なのでつい最近、本格的に活動拠点を本局に移してからはなりふり構わない方向にシフト。具体的には、もうどっち「が」ではなく、どっち「でも」いいから立香のリハビリを優先したのだ。要は、二人がかりで誘惑することを考えたのである。

結果、効果はあった。二人の愛が、立香を苛んだ重荷を上回ったのである。本人は自己嫌悪でしばらくふさぎ込んでいたが、大いなる一歩であることに違いはない。二人ももうこの際なので、「どっちも必要」ということで折り合いはついている。片方になって元の木阿弥になつては、それこそ元も子もない。

何しろ、二人以外には相変わらず反応しないのだ。どうせなら立香の唯一になりたいが、その結果振出しに戻るのは困る。なにより、戦友というか同志のような連帯感が生まれてしまって、今更……というのもある。

(い、言えるわけないよ……恥ずかしすぎるし、なによりあの時のことなんて……／＼／)

ただ、問題もあった。確かに立香の封は解かれたのだが、解かれた以上はあふれ出すのが人の性。

今まで溜め込んでいたものを吐き出すかのように、それはもう激しく立香は求めてくれた……と思う。なにしろ、その時のことをフェイトもマシユもあまり覚えていない。薄らぼんやりとは憶えているのだが、記憶がはつきりしないのである。

憶えているのは、身体と魂を隅々まで満たす多幸感と脳が焼き切れるかのような壮絶な快楽の余韻だけ。そして、目を覚ました時の「ドロドロ」になった三人の姿。

加えて、その後も事あるごとに大体そんな感じ。どうやら、立香は色々ギリギリなこともあり、生存本能が働いてすごいことになっていられるらしいと知ったのはしばらく後のこと。ちなみに、草食系と見せかけてそこは肉食な「フレット」のユーノも致すときは凄いらしいと知ったのは、無事結婚したなのは夜の生活について相談された時のことだ。無限書庫も激務なので、無理もないとは思うのだが……現役教導官が根を上げるほどなのだから、推して知るべし。まあ、それを言うとは現役執務官とデミ・サーヴァントの双方を上回ってしまう立香も大概なのだが。

当面の目標は、意識と記憶を失うことなく乗り切ること。正直、何が起こったかすらいまいち覚えていないので対策の立てようもないのだが。バルディッシュに記録してもらおう手もないわけではないが、万が一を考えると恐ろしすぎる。

(すごく幸せだったのは憶えてるけど、中身を覚えてないのがもどかしい!?! だから思い出したい、あるいは憶えておきたい……だけど、ちよつと怖い。私はどうしたら……!!!)

「あ、とりあえずフェイトちゃんに新妻はやてちゃんからアドバイスや」

「な、なに!?!」

「新妻アピールがウザいわあ」

「フェイトちゃんのことやから、いざという時テンパって頭真っ白になりそうやん」

(ギクツ!?)

実際、最初に立香を誘惑しようとした時、例の事情から困り果てた彼を「戸惑っている」と勘違いし、「カワイイ」と思ったのも束の間、「ここからどうしたら……」「何をするかはわかってる、わかっているけど……っ!!」とテンパりフリーズしたのはよく覚えている。まるで見てきたようなはやての指摘に、フェイトの額から脂汗が滝のよ

うに流れ落ちる。

「そういう時はな、いつそのこと立香さんに全部委ねてまうのがええよ。無理して見栄張って失敗すると、後々支障が出るからなあ」

「いや、フェイトにはまだそういう話早いでしょ」

「とうかはやてちゃん、生々しすぎるよお!!」

「う、うくん、昼間からする話じゃないと思うなあ」

(それをして何も覚えてないんですが!?)

実はとつくにその先に進んでいるとは思いない幼馴染たちであつた。

「まあ、はやての与太話はおいておくとして……実際どういふ状況なの?」

「い、一応受け入れてはもらえたと……思う」

「それは、フェイトちゃんから告白したってこと?」

「ま、まあ……でも、それとは別に、ずっと一緒にいてほしいって……」

「「「おおっ!」」」

フェイトから告白するのは想定済みだったが、まさか既にそこまで言っていたとは……みな顔に喜色が満ちる。

実際、機能の回復とともに立香も腹を決め、「殴られても」どころか「殺されても」と覚悟を決めて二人に思いを告げた。とはいえ、二人の間には固い結束が生まれた後だし、そもそも立香が背負うものはどちらか一人で支え切れるほど軽いものではない。

彼らが背負うものの一端を背負うことを選択したフェイトには、それが良くわかる。

だからこそ、二人で支えようと決めたのだ。どこまでも平凡でありながら、一人で背負うにはあまりに重いものを背負ってしまった人を。

「それじゃ、立香さんの恋人はフェイトなわけね」

「えっと、それは、その……」

「え、違うの?」

「まさか、二人?」

「え、それはちよう……」

歯切れの悪いフェイトに、みな表情に陰りが生じる。本人たちは納得しているが、それが普通の反応であることは理解できる。だから、なんとさえいえばいいかわからずうつむいてしまうフェイト。

しかしそこへ、アリサが有無を言わせぬ口調で問いを発した。

「フェイト、一つだけ聞かせなさい」

「う、うん」

「あんたは、それで幸せ？ 後悔はない？」

「……………ないよ。これは私が、私たちが選んだことだから。私だけじゃ、立香を支えきれない。たぶん、マシユだけでも…………だから、二人で支えるんだ。三人で支え合って、幸せになる。それが、私たちの選択」

ハッキリと、顔をあげて断言する。それだけは、誰にも否定させない。たとえ、自分の身と幸せを案じる親友であっても。そんなフェイトの想いを汲んだのか、それまで厳しかったアリサの表情が僅かにほころぶ。

「そ、ならいいわ。おめでとう、フェイト。幸せにね」

「今でも幸せだけど…本当に幸せになるのは、これからだもんね」

「えっと、いいの？」

「いいのよ。フェイトが自分で考えて、納得して出した答えなら、それで。それに、あの人が背負ってるものがどれだけ重いかなんて、私よりあんたたちの方がよく知ってるんでしょ」

「それは…………」

「確かに、それを言われるとなあ…………」

彼女たちも、少なからず立香の道程を知っている。そして、フェイトの選択の意味も。

だからこそ、アリサの言葉に何も言えない。ならばあとは、親友の前途を寿ぐだけだ。

どうかこの優しい親友の幸せが、翳ることのないように。

「そういえばフェイトちゃん、アレはどうなったの？」

「あれって？」

「ほら、前に言ってたでしょ。立香さんが全然困ってくれないって」

「あ、ああ……そのこと」

以前より、立香はフェイトのことを甘やかしてばかりで、多少の我儘や失敗くらいではその鉄壁のほほえみを崩すことができずにいた。いつでも、どんな時でも受け止めてくれるのはうれしい。そういう意味で、立香に対して不満など抱いたことはない。

不満だったのは、自分自身。「迷惑をかけて嫌われたら……」と恐れる反面、「困ってくれない」ことに対し寂しさも覚えていた。まるで、自分は彼にとつてとるに足りない存在であるかのように感じられたのだ。

「迷惑をかけたくない」だが「少しは困ってほしい」、そんな相反する思いがフェイトの胸の中で渦巻いていたことを、親友たちは知っている。そもそも、「立香を困らせられるようになれ」と言い出したのはアリサだ。

「そうよね。付き合うようになったわけだし、その辺少しは変わったの?」

「ま、まあ、ちよつとは困らせられたよ。うん」

「ほお……あの立香さんを困らせるとは、フェイトちゃんも成長したんやね。で、何やったん?」

「え」

「どうしたの、フェイトちゃん?」

「い、言えるわけない!! Yシャツ一枚で誘惑したなんて、言えるわけないよ!!」

正確には、どうしても誘惑する勇氣を持たずにいたため、景気付けと勢いをつけるために慣れない酒精を一气飲み。酔った勢いで突撃し、ついでにどこかで聞きかじった「濡れ透け」なるものを実践したのだ。

ただ、体質的にアルコールに強かったのか、辛うじて理性が残っていたのは幸いだったのか不運だったのか。いずれにしろ、迫りながらもブレーキをかけたのは彼女の生来の優しさ故だろう。内心、不安に押し潰されそうになりながら、「本当に嫌ならそう言って」「でも、少しでもいいと思ってくれるなら……」と覆い被さりつつ踏み止まっ

た。そして、拒絶されないことに安堵し、半ば強引に唇を奪ったこともしつかりばつちり覚えている。まあ、自分からやっておいてキスがきつかけで完全に酔いが覚め、素面に戻って最後はテンパってはやての言う通り頭真っ白になってしまったのだが。

正直、今思い出しても顔から火が出そうなほど恥ずかしい。しかし同時に、心の片隅で「ようやく困らせられた」と少し嬉しかったのも事実。

最近、親友たちに言えない黒歴史が大量生産されている気がするフェイトだった。

何しろつい先日も、ちよつとやらかしてしまつたばかり。とはいえ、正直そつちに対する助言が欲しかったのも事実。詳しくは言えな
いまでも、かいつまんでなら……と口を開く。

「じ、実は……ちよつと変身魔法を使つて」

「あ、もしかして大人の姿になつたんやな。いやあ、私もやったことあるで。士郎がな、それはもう目が泳ぎまくつて……」

「惚気はいい！ それで、やっぱり大人に？」

フェイトの対抗馬はマシユだ。いくら双方納得しているとはいえ、それでも二十代半ばも近づきつつあり、まさに大人の女、あるいは女盛りのマシユの色気は最近スゴイ。相変わらずショートなおかげで住み分けはできているが、それでも劣等感のようなものを抱くのは無理もないと言えるだろう。十代半ばの青臭い小娘と二十代の大人の女性、些か分が悪い……と十代半ばの少女たちが思うのも仕方がないことだ。

だが、フェイトが考えたのは全く逆のことだった。

「ううん。それだと、やっぱり本物の大人のマシユには勝てる気がしない。だからいつそ、逆にいこうかなつて」

「え、それつてつまり……」

「出会つた頃の姿になつて、その……くつつきました」

すずかの想像は正しく、九歳当時の姿を取つたのだ。ただし、誘惑したことは……さすがに言えなかつたが。

「なるほど、大人の魅力で勝負するのは確かに分が悪いかもしれない

わね」

「いや、発想はわかる。せやけど、それはちよつと……」

「絵面がすごいね」

「うわあ、うわあ……／＼／＼」

二十代半ばの青年にくつつく齡一桁の少女……犯罪臭がスゴイ。しかも、片方は恋愛感情で頭がいっぱいと来た。その様を想像したのか、全員が頬を引きつらせる中、なのはだけはなぜか耳まで真っ赤になっている。

どうやら、彼女にとっては十分刺激的な光景になるらしい。

まあ、実際にはもつと過激なことをしていたわけだが。恥ずかしそうに衣服をたくし上げたり、半裸の幼い肢体を密着させたり…挙句、そのまま上目遣いに「興奮、する？」と小首を傾げて問いかけるとか。

「えつと、フェイトちゃん。立香さんはなんて……」

「俺を変態にしないで……」って、頭を抱えてた」

(無理もないわ……)

(それは、流石の立香さんも困るよね)

(フェ、フェイトちゃんが大人だ！)

実はとつくに大人の階段を駆け上っていることを、なのはは知らない。

(嘘やなさそうやけど、全部は話していないと見た。それに、さつきから時々フェイトちゃんが「女」の顔しとるし、実際にはもつと進んでそうや。ふっふっふ……フェイトちゃんもやることやってたんやね)「なんかさつきからはやてちゃんの表情が妙に優しいのが気になるんだけど……」

「確かに。あと、微妙な上から目線が鬱陶しいわね」

「さつきからアリサちゃん、私にあたりキツない？ 私にかしたん

？」

「べつにく……あんた達がしつかり青春してるのがうらやましいとかじゃないから」

「そうだよ。アリサちゃん、婚約者さんがい」

「なのは、次アイツのこと口に出したらめるわよ」

「ふえっ!? なんで!？」

「このド天然娘! 私がいツのこと嫌いなもの知ってんでしようが!!」

さながら連続殺人鬼のようなドスのきいた目で睨みつけるアリサ。歴戦の勇士と言っても過言ではないはずなののはだが、思わず身の危険を感じてしまった。とても、幼馴染に向けていい目ではない。

「仲の悪さは相変わらずみたいやね」

「まあ、どうしてもソリの合わない人はいるから」

カルデアに関わっていると、そういうのが良くわかる。そして、アリサにとってはその婚約者がそうなのだろう。

「でも、悪い人じゃないんだよね」

「……そうね。成績は優秀だし、スポーツも得意よ。たしか、サッカーでU-15の代表にも選ばれてたはず。顔立ちも、まあ美形と言えはそうね。クール系というか、クロノさんに近い感じ。性格も……悪いわけじゃないわ」

「なのに嫌いなもの？」

聞く限り、これと言って欠点のなさそうな人物のようだが。

「嫌いというか………生理的に無理」

「そこまでいうほどなの……?」

「いつそキモオタ系の方がマシ」

「韓信さんと「万倍マシね」」

「おお、食い気味に言い切ったわ」

「黒髭となら……悩むわね」

「そ、そこまでなんだ……」

ほんとうに、どれだけ嫌いなのだろうか。

「どこがそんなにダメなの？」

「……………」

俺様なとこ」

「俺」

「様?」

「あ、あるよね、そういうところ」

「あ、すずかちゃんは知ってるんや」

「まあ、ちよつとだけね」

能力があり、家の力も強く、親も甘いからこそ、これと言って苦勞なく生きてきた弊害ですっかり「自分が世界の中心」みたいな考えの持ち主に育ってしまったらしい。昔からその傾向はあつたらしいが、最近は特にその傾向が強まっているとか。また、「お前は女らしく大人しくしている」と男女差別と紳士をはき違えた態度も目立つ。

向こうは向こうで負けん気の強いアリサが気に食わないらしく、「俺の邪魔をするな」「一々口を出すな」と取り付く島もない。こんな二人では、確かに仲良くできないのもうなずける。

「アイツが欲しいのは、ステータスとしての女性。自分に逆らわない、従順で、大人しい、意見を持たない、お淑やかで儂げな庇護欲を誘う大和撫子……私にできると思う?」

「「無理」」

「当然よ! 後ろで守られるお姫様なんて私のガラじゃないっての! 私だつたらむしろ、自分で剣持って敵陣に突撃してやるわ!!」

その場合パートナーに求める役目は、共に戦い背中を預ける戦友か、思う存分戦えるよう支えてくれる副官か、らしい。少なくとも、件の婚約者殿には無理な注文だ。

割と我が強い者同士ではあるが、両者の一番の違いは自分が一番中心であることに拘りがあるかないか。勝負事には全力で勝ちに行くし、白黒はつきりつけたがる気質のアリサだが、必ずしも自分が一番や中心であることに拘りはない。まあ、どうせなら「一番」の方が気持ちがいいとは思っているが、そうでないならそれはそれで構わないと思っっている。仲間と協力したり、誰かを支えるというのにもやりがいを感じるからだ。

ただしあちらの場合、プライドの高さから自分が「一番」であることに執着する。まあ、だからこそ代表チームのストライカーとして活躍している面もあるので、一概に欠点とも言えないが。

それでも、どうしても生理的にアレだけは無理なのだ。

「そういえば、前からいつか解消してやるって言ってたけど、どう?」

「パパの実家のババ……ほん、偉い人が決めたことだから、簡単には無理ね。でも、もう見通しは立ったわ。高校卒業までには、円満に解消してやるわよ」

「円満？」

「えつとね、一応婚約者つてことで周りに紹介してるから、強引に破談にすると色々と風聞が悪くなっちゃうんだ。そうすると、会社の方にも影響が出ちゃうわけだね。アリサちゃんもそうだし、相手の人も」
「なるほど……」

「ま、嫌いと言っても社会的に破滅しろ、とまでは思っていないからね。お互い後腐れない方がすつきりするでしょ、縁を切るならきつちりしつかり切りたいし。できれば二度と顔も見たくないのよね、そのための努力は惜しまないわ」

と、大人の対応を考えていたアリサだったが、高校卒業を前にまさかの電撃破談。しかも、アリサのように慎重に手回しをした上でのそれではなく、後先考えず「お前との婚約を破棄する」というぶった切り。

しかも理由というのが「俺は真実の愛を知った」「彼女が、俺に大切なことを教えてくれたんだ」「俺に愛されているというお前の勘違いにはもううんざりだ。お前のような傲慢な女、愛したことなど一度もない」と、どこかで聞いたようなもの。

想定外というか、いくらなんでも想像の外の現実に思考が停止し、気付けばすべてが終わった後。とりあえず、現実に戻った彼女がまず叫んだのは……

「あんたはどここの乙女ゲーの攻略対象で！ 私はどここの悪役令嬢だ――

!!

だった。

そして、その手回しとは無縁の婚約破棄のおかげで割を食ったのがアリサ。互いに社会的な評価は高かっただけに、先手を打たれたことからすつかりアリサが悪者扱い。表面的な事実しか見ない者、分かっている噂に乗って自らの利益を追求する者が多く、味方があまりいなかったのが痛い。

隙を見せた者は追い落とされ、食い物にされるのが世の常。むしろ、利益追求のためにバニングス家を叩きに動いた連中をこそ褒めるべきだろう。表面しか見ない連中はただのバカだが。

とはいえ、そうとなればアリサも容赦する気はない。売られた喧嘩は全力で買うファイター、それが彼女の本質だ。むしろ、逆境から逆転してこそ腕がなるといふもの……と言わんばかりに早速反撃開始。互いに傷なく、円満に解消しようという配慮を示したのが間違いだった……というよりも、家のこととか色々気にして表面だけ取り繕っていたのが失敗だった。その結果、あの『俺様男』に「アリサが惚れている」とか「愛されていると勘違いしている」といった有り得ない誤解を生む羽目になったのだと反省。

しかも、父の実家からは『丁度いい試練』とばかりに勘当扱いされ、学費くらいしか出してもらえないことに。なので、自力で仲間を集め、数少ない味方やありったけの個人的なコネを使い、大学在学中に起業。飛ぶ鳥も落とす勢いで会社を発展させ、舐めたこととしてくれた馬鹿に一瞥もくれずに駆け上がったという、これまたどこぞの成り上がりストーリーを展開するのであった。

ついでに、これが地球初となる管理局との交易会社となるのだが……まだまだ未来のお話。

「というわけで、私の話はおしまい。」

あとはなのは、そっちはどうなのよ。ユーノとはいい加減少しは進んだんでしょうね」

「す、進むも何も、私とユーノ君は幼馴染の友達で……」

「その言い訳は聞き飽きたわ」

「ついでに言うのと、『空の人間だからいつ墜ちるかわからない』つちゆうのも耳タコや」

「なのは、ユーノはいつもなのはのことを一番に考えてくれてるよ。無限書庫で働いているのだから、かなりの比率でなのはの力になりたいたからだと思う」

「なのはちゃん、そろそろ観念した方が良いよ」

口々にそう言ってくる親友たちに、なのはもたじたじだ。

「なのはももう気付いてるんでしょ。自分がユーノのことをどう思ってるか」

「それは……」

「そやな、例えばクロちゃんがユーノ君と」

「ダメ！ それはダメ……あ」

「なによ、全然取り繕えてないじゃない」

「なのはちゃん」

「……ダメ、やっぱりダメだよ。ユーノ君は優しい。でもだからこそ、私のことで責任を感じてくれてる。私はその優しさに、甘えちゃいけない」

「責任？」

「それは、なのはに魔法を教えたこと？」

(コクツ)

「だけど、それは……」

「フェイトちゃん」

何か言おうとするフェイトを制するはやて。彼女には、フェイトが言おうとしたことが分かった。

なのはがいたからこそ解決できた事件があり、彼女に救われた命は数えきれない。それは本当に素晴らしいことだ。そんななのはに魔法を教えたことは、称えられこそすれ、咎められることではないのではないかと。

しかし、違うのだ。だってそれは……

「フェイトちゃんが言おうとしていることは正しいと思う。せやけど、それは管理局員、あるいは公僕としての正しさや。個人の正しさとはまた別。ユーノ君が感じとる責任は、個人のもの。なのはちゃんに魔法を教えた結果、一人の女の子から平穏を奪ってしもた。そのことを言ってるんやろ？」

「……うん。私自身はそのことを不幸とか、奪われたなんて思っていない。だけどユーノ君は違う。優しく、責任感が強いから、だから自分を赦せない。そんなユーノ君に『好き』なんて言ったら、きつと……」

今まで以上に、彼の人生を縛ってしまおう。それは、なのはが最も望まない未来だ。

「私はもうユーノ君から一杯貰った。だからこれ以上は、欲張りになる」

「……つたく、この子は」

（ユーノが責任を感じてるっていうのは、確かに本当だと思う。クロノからも、立香からも聞いたことがある。

だけど、それとは別にユーノはなのはのことが好きなんだ。好きで、責任を感じているから、押し付けようとはしない。ただ静かに好意だけを示して、なのはが降す決断と、その時を待っている。

でも本当は、決断なんて必要ない。なのはだって、ユーノのことが好きなんだから。なのに、どうして……)

互いを向いているにもかかわらず、こうも二人の想いは重ならないのだろう。より正確には、ユーノの好意を無意識のうちに気付かないふりをしている、というべきか。それが、フェイトは無性に悲しかった。

「じゃあ、少し話を変えよっか」

「すずか……」

「だって、これ以上言ってもなのはちゃんを追い詰めちゃうだけだよ」

「せやね。確かに、意固地になられても困るしなあ」

「つたくしよーがないわね。じゃなのは、ユーノの愚痴とかないの？」

「ふえ？」

「だから愚痴、不満でも文句でもなんでもいいけど」

「ぐ、愚痴って言われても、私別にユーノ君に文句なんて……あ」

「あるのね」

ちよつと意外に思わなくもないが、これは丁度いい機会だ。吐き出すものを吐き出させてしまえば、あるいは何か進展があるかもしれない。

「え、えつと、その……」

「この際だから言っちゃいなさいよ。ほら、どうなのよ」

「……………実は」

「「ふんふん」」

「時々……ユーノ君といるのが辛い」

「「え」」

想定外の答えに、全員の表情が凍り付く。が、それも束の間……

「だ、だってユーノ君ってばすっごく無防備なんだよ！ さらつと手を握ってくるし！ 優しい目で微笑みながら、なのはは凄いな」とか言ってくるし！ あ、あんなことされて、勘違いする女の子がどれだけいると思ってるのかな!!」

（いや、それは……）

（普段からなのはちゃんがやってることやん）

教導の時は別としても、異性同性を問わず、「凄いな、頑張ってるね」と手を握ったり、上目遣いをしたりは日常茶飯事。時には、手元のモニターを触れ合えそうな距離でのぞき入りもする。基本、誰とでも距離感が近いのだ。それは、相手を男性と認識はしていても、異性と捉えていないからこそ。要は、なのはにとってユーノ以外の男は異性ではないのだ。

そんな彼女に、過去いつたいどれだけの男性が弄ばれてきたことか……本人に自覚がないのが始末に負えない。

「まったくもう！ 私が普段どれだけ我慢してるか、ユーノ君は全然わかってない！」

（むしろ……）

（わかってないのはなのはちゃんの方なんじゃ……）

アリサとすずかも顔を見合わせ深々と溜息。唯々、ユーノの苦労が偲ばれる。彼がそんなにも距離感を詰めて接する相手など、なのははしかないというのに。

ちなみにその頃、偶然にも野郎共で駄弁っていたユーノがくしやみ一つ。ちやうど「最近なのはに避けられてる気がするんだ」「目を合わせようとするすると真っ赤になって逸らされるし、人込みではぐれないようにと思っって手を握ろうとしたら変な声をあげて引っ込められるし……僕、嫌われるようなことしたのかな」という話をしている時だった。もちろん周りからは「ないない、それはない」と呆れ気味に

否定されていたが。

とりあえず、なのはに言いたいことは一つ。

「「ごちそうさまでした」」

「どういう意味!？」

あるいは「リア充爆発しろ」のどちらかだろう。

「せやけどなのはちゃん、ユーノ君のことはホンマに気を付けた方がええで。ユーノ君、めっちゃ人気あるんやから」

「やっぱりそうなの?」

「うん。地位と能力もそうだけど、加えて、ユーノって無限書庫勤めだから日に当たらないでしょ。元の体質もあるんだろうけど、ちよつとズルい位に肌とか髪がきれいなんだ」

「あ、それ私も思った。やっぱりあれって、ケアとかしてないわけ?」
「ユーノがそういうことすると思う?」

正真正銘の本の虫、仕事中毒なだけに、小まめに手入れをしている姿がまず浮かばない。

正直、女としての自信を喪失してしまいそうになったのも一度や二度ではないのだ。

「で、でも私この前、資料整理でお金がもらえるんだからぼろい職場だ」みたいなこと言ってる人たち見たよ!

思わずバスターしそうになったけど、何とか我慢したからよく覚えてる」

「それはそれで怖いんやけど……まあ、我慢したんならよしや。気持ちちはようわかるし」

「いや、というか情報馬鹿にするとか、そんな頭の沸いた連中ホントにいるの?」

「もしかしてその人たち、ガチガチの武装隊じゃないかな? なのはみたいに捜査とかに参加しない、武装隊一本の人たちだと直接情報を受け取ったりしないこともあるだろうし……」

「指揮官ならともかく、脳筋タイプの一兵卒やと情報のありがたみはわからんかもしれへんからなあ」

無限書庫が正式稼働するようになってもう数年であり、まだ数年

だ。以前は碌に活用されないままでもなんとかやってこれたからこそ、軽視する傾向も根強い。とはいえ、情報のありがたみを知る部署や指揮官クラスに、そんな蒙昧はそうはいない。まあ、フェイトの言う通り武装隊の下っ端にそういう傾向が濃いのも事実だが。

そして、当然わかる人にはユーノの重要性も有能さもわかるわけだ……。

「話そうか迷ったんやけど、実はこの前お世話になった指揮官さんにユーノ君を紹介してくれて頼まれたんよ」

「え……な、なんで！」

「娘さんとお見合いさせたいんやて。ちなみに、この手の話は結構来る。親戚の子やったり、友人にやったり……なかには、本人がうちゆうこともな。多分、クロノ君とかリンデイさんにも来てるんちゃうかな？」

「……………」

あからさまにショックを受けるのは。それでも、ボソボソと何やら自分に言い訳しているのが聞こえてくる。

「あとな、美味しそうな油揚げを狙っとるのはトンビだけやないよ」

「ちよっと待ちなさい、はやて。それどういう意味？」

「ユーノ君のファンは多いっちゅうこっちゃ。それこそ、性別問わず」

「「え」「」」

「確かにユーノ君……ちゅうか無限書庫を軽視する武装隊はおる。せやけど、逆にファンも多いんよ。中性的っちゅうか、綺麗な顔しとるからなあ。線も細いし、普段接点のないタイプやからこそクラツと来るんやろ。」

でまあ、比較的無害なところやと、ユーノ君の写真持って血走った目でハアハアしてるだけなんやけど」

「いや、それも十分危ないわよ！」

「話の流れ的に男性、だよな？」

「そ、そういうことがあるっていうのは聞いたことがあるけど……」

「デープなところやとユーノ君の純潔が欲しい、あるいは純潔を捧げたいとか言い出す人もおるとか。あ、ちなみにこれ、シグナム情報

な」

「「うわあ……」」

一番その手の冗談を言いそうにない人がソースなだけに、信憑性が半端ない。

人の趣向はそれぞれなれど、幼馴染の男の子がその対象にされているというのは……。

「まさか、まさかユーノ君！ 本当は男の人が……!?!」

「いやいや、それはないでしょ!」

「なのはちゃん、正気に戻って!?!」

「ダメだよ！ それ、ユーノには言っちゃダメだからね!!」

「できれば何とかしたいってシグナムも言うてたんやけど、別にまだ何もしてへんのに理不尽なことはできんって悩んでたんよ。どないしたもんやろ……」

後日、なのはがかつての「ユーノ君の初めて取られた!?!」に続く爆弾発言第二弾「ユーノ君のお尻は私が守るんだから!」をぶちかますことになるのだが……まあ、そういうこともあるだろう。

そんなこんなで話は横道わき道に逸れながらも、それなりに盛り上がる。

途中アリサが……

「立香さんがいなくなったら、ユーノがなのはと結婚して、なのはとフェイトが結婚してたかもねえ」

なんて冗談を言い出し、すずかは首を傾げながら……

「ユーノ君がなのはちゃんとフェイトちゃん、二人と結婚するってこと? そんな器用には思えないけど……」

「いや、そうじゃなくて……ユーノがなのはの婿、フェイトがなのはの嫁って意味」

「ああ、ユーノ君が二股するんやなくて、なのはちゃんが両手に花するんやね。確かに、有り得たかもしれないへん」

「いやいや、何言いだしてるのみんな!?!」

慌てて待ったをかけるのはだが、その傍らでフェイトは「立香が

いないなんて考えられない」と思いつつも……

「あ、でもなのはとなら別にそれはそれで……ユーノのことも嫌じゃないし」

と言い出し、「まんざらでもないみたいな反応しないでよ、リアクションに困るじゃない」とアリサに突っ込まれるのだった。

イリスの場合

やっぱり、悪魔の娘はアクマか……。

——のっけから酷い言われよう!?

安心しなさい、本気だから。

——そこは冗談にしておきましょうよ!?

いやだって、よりにもよって「あの時」のことをわざわざ「私」に聞きに来るとか、どんな拷問よ。

——それはまあ……そうなんですけど。

……ま、そもそも聞く相手が少ないんだから仕方ないってのはわかるけど。所長に会うのはそもそも無理だし、ユーリもキリエも操られてたか利用されてたか。いうなれば被害者側でしょ。

なら、犯人側の当事者の中で話を聞けるのは、私位だもんね。

——イリスさんも利用されてたって意味では……。

そうだとしても、私はキリエほど優しくない。あの子は極力迷惑をかけないようにって考えてたけど、私は地球もそこで暮らす人たちも、全てを巻き込んでやるつもりだった。

「被害者」って括りに入れるのは、少しばかり無理があるわ。

——……。

そんな顔しないの。

そりゃね、真相を知った時とか、事件が終わった後とかは罪悪感やら自分のバカさ加減やらで、正直死にたい気持ちだったけど……今はそれなりに自分の中で折り合いもついている。エルトリアの惑星再生と復興、それが私の贖罪であり責任の取り方。今までも、そしてこれから。この命がある限り、私は……贖いの花を植え続ける。

——で、でも！ 皆さん赦してくれてるんですよね！ 事件のことだって、ちゃんと償って……。

そういう問題じゃないのよ。これは、私自身の気持ちの問題。いくらユーリやキリエが赦してくれても、罪を償ったと誰かが認めてくれたとしても、私はそれじゃ納得がいかない。

言ったでしょ「死にたい気持ちだった」って。今もそういう気持ち

ちはある。でも、そんな『逃げ』は私には許されない。ユーリもキリエも、みんな私に生きてほしいと望んでくれてる。そして、幸せになつてほしいとも。

……私は、せめてみんなの思いを裏切りたくない。

だから、気持ちの折り合いをつけるために必要なのよ。気兼ねなく、とはいかないまでも、私が笑っているためにはね。

——そういう、ものでしょうか。

分からなくていいわ。あなたには、分かる必要のないことだから。つて、話がいきなり逸れちゃったわね。あの事件の時のことつてなると……正直、途中から何もかもうまくいかなくて苛立ってたわね。

——それはやっぱり、カルデアが介入してきたあたりからですか？

そう。それまではおおむね順調だったのに、途端に想定外の事態ばかり起きるんだもの。

ユーリとの分断に始まり、動こうとすれば用意していた工廠の半分以上が機能停止、限られた戦力を動かせば魔導士たちがサーヴァントを引き連れてるのよ。情報不足が一番の問題だったけど、それ以外にもこつちが打とうとする手を悉く先んじて潰してくるんですもの。頭が痛いどころの話じゃないわ。

——あれ？ でも確か、サーヴァントの皆さんつて立香さんが近くにいないと魔力供給に難があるんじゃないか……。

基本的にはね。『偽臣の書』つて言ったかしら？ サーヴァント一騎あたり一つそれを用意して、主要メンバーにそれぞれ持たせてたのよ。代理のマスター権と、魔力供給の代行のためにね。

——そんなことできるんですか？ マスター権はともかく、魔力供給しようにも似て非なるものつて聞いてますけど……。

ええ、リンカーコアの魔力と魔術回路の魔力は、名称こそ同じだけど本質が異なる。だから、本来なら魔導士にサーヴァントへの魔力供給はできない。やろうとすると、生命力そのものを持っていかれることになるそうよ。

だけど、あそこにはダ・ヴィンチやシオン、そしてプレシアがいた。

魔力の質が違うのははじめから織り込み済み。書に変圧器みたいな機能を持たせて、リンカーコアの魔力を魔術回路のそれに交換できるようにしたのよ。ま、変換効率は相当悪かったみたいだから、主要メンバー位の魔力持ちじゃないと、使い物にならなかったみたいだけど。

——あゝ、そういえばプレシアさんって元はエネルギー関連の技術畑の人でしたっけ。

そういうこと。加えて、プレシア自身もリンカーコア持ちだからサンプルには困らないって寸法よ。その上、カルデアには「頭脳の怪物」共がいる。時間さえあれば、それくらい訳ないんでしょね。

——なるほどなるほど……ちなみに、誰がどのサーヴァントを連れてたかは。

確か、はやてちゃんがアルジュナ、シグナムが沖田、ヴィータが金時、フェイトちゃんがアタランテ、なのはちゃんが？を連れてたはずよ。

————能力的な相性優先、ですかね？ シグナム&沖田
パワーファイター金時、スピード特化同士フェイト&アタランテですし。なのはママの場合、飛べるオールラウンダー？がいると助かるから。

どうかしら、性格面も考慮してたと思うわよ。フェイトちゃんとアタランテは子ども好き同士仲が好いし……あ、でも昔は子どものフェイトちゃんをアタランテが気に掛けるって感じだったっけ。

——私的には、ヴィータさんと金時さんはよくケンカしてるイメージというか、子ども扱いされて怒るヴィータさんと、それを笑って流す金時さんって印象ですね。

ああ、そういえばあの時もそんな感じだったわ。

とりあえず、シグナムのところは「斬り合いの場で主義主張なんて何の意味もない」「戦場に事の善悪なし、ただひたすらに斬るのみ」って考えに結構共感してたみたいよ。

ま、なのはちゃんとかは沖田のそういうところがちよつと苦手みたいだけど。

——あゝ、ママは「お話聞かせて」の人ですからね。やる時はや

る人ですけど、それでも相手の想いとか気持ちとか、そういうのを「知らん」って切って捨てられる人じゃないですし。普段はむしろ仲が好いくらいなんですけど……。まあ、恭也さんとかは人斬りモードの時でも特に気にしないみたいですが。

ふくん、そうなんだ。フェイトちゃんなんかは、ああいうマインドセットは見習うべきかも、みたいなことを言ってたわね。なのはちやんもはやてちゃんも、根本的などころでブレない子たちだけど、フェイトちゃんは結構揺れるからねえ。

——へえ〜……。じゃ、八神司令のところは？

特に、性格的な相性の善し悪しはなかったような……。とりあえず、はやてちゃんの広域攻撃とアルジュナの宝具の組み合わせが「鬼」だったわ。

——アルジュナさんの宝具って言うと、あの「パーまとめてドツカシユン」な奴ですか？

いや、私が見た時は投げた光球による「破大気圏外からの精密同時狙撃手」みたいな感じだったわね。

——発動形態の違いでしょうか？

知ってるようで、案外あいつらのことってあんまり知らないのよね。

——言われてみれば、確かに。宝具を複数持つてる人とかもいるらしいですけど、あんまり知らないんですよね。

そういえば、あの連中普段は何して過ごしてんの？ やっぱり、どこかしらで問題起こしてるとか？

——いやあ、流星にそんな連日騒動を起こしてるわけではないと思うんですが……。

だからと言って、いつもいつも全員がスペース・ボーダーに乗ってるわけでもないんですよ。

——みたいですね。その時々に行く先に応じてある程度メンバ―を選んで、必要に応じて都度召喚してるみたいです。なので、ほとんどの人たちはムンドウス・カルデアの方に残ってるってフェイトさんに聞きました。まあ、だからこそあそこにちよつかいかけるのは

自殺行為らしいですけど。

あ、そういえばあの子、今はスペース・ボーダーに乗ってるんだっけ。

——はい。以前はクロノさんのクラウディアに乗ってたんですけどね。機動六課が解散してしばらく経ったくらいから、でしょうか。立香さんたちも、一通りの管理世界をカルデアで観測し終えてからは管理外世界の観測をして回ったり、カルデアの方で見つけた^{特異点}“ナニカ”への対処をしたりで、結構色々飛び回ってるみたいなんです。そこに便乗させてもらってるらしいです。

フェイトちゃんの専門って確か……

——^{ロストロギア}古代遺物の私的利用とか、違法研究とかの捜査ですね。どっちも、管理局の目が届きにくい管理外世界に拠点があることも多いので。

なるほど。局の船だと色々縛りもあるけど、外部の船ならかえって緩い部分もあるからいいとこどりしてるわけか。ま、愛しの旦那様と一緒にいられるわけだし、一挙両得でしょうね。

でも、流石に一人でつてことはないわよね？

——あ、はい。シャーリーさんが一緒ですし、確かティアナさんも一時期乗せてもらってたって聞いてます。

………苦勞したでしょうね。

——執務官として独り立ちした今も偶にお世話になるみたいですが、ウエンディと一緒に物凄く疲れた顔してました。あと、状況によっては借りた捜査要員とか武装隊の人たちも乗せてもらったりするとか……割と不人気で、人手の確保が難しいって困ってますが。結婚しているとはいえ、フェイトちゃんは人気者でしょうから大喜びで参加しそうなものだけ……場所が場所だし、むしろ当然の反応ね。

——でも、シャーリーさんは楽しそうにしていますよ。

……案外大物ね、あの子。

ま、いざとなればカルデアからも人を出してくれるでしょうし、何とかなるでしょ。

というか、良くカルデアが部外者を乗せてくれるわね。

——あく、なんかその辺いろいろ訳アリみたいですよ。詳しくは知りませんが、協定とかに関わることなんじゃないかと……。

ふくん……まあ、管理局としては少しでも技術を盗みたいところでしょうし、カルデアとしても局との関係を悪化させたくないとか、その辺の思惑の結果かしら？ いずれにせよ、乗せても盗まれない自信があるんでしょうね。

——そうなんでしょう？

なにしろ、あつち側の技術の基礎理論すらわかっていないような状態ですもの。そんな状態で、最高レベルの技術の塊を盗もうなんて無謀もいいところよ。火の起こし方も知らないままで、ロケットエンジンの構造を盗む方がまだ楽なんじゃない？

——それなんて無理ゲーですか？

だからこそその自信なんですよ。

だけどそうになると、本当にあの連中のプライベートが謎ね。スペース・ボーダーに乗る機会自体が少ないなら、普段何して過ごしているのやら……。

——……とりあえず、いくつかサークルみたいなのはあるみたいですよ。

サークル？ それって、サブフェスとかでやる？

——そういうのじゃないのもあるみたいです。商人系みたいな、割と近いカテゴリーの人の集まりとかがあるらしいですよ。『アレ』などところだと、海賊会とか悪人会とか。

カルデアらしいというか、なんとというか……犯罪臭を隠そうともしないわね。

——その中に、趣味人の集まりもあるって聞いてます。カルデア裁縫部……って言ったかな？ サバフェスで出品したりとか、カルデア・コレクションとかもやってるみたいです。フェイトさん、その人たちと懇意にしているみたいで、結構な衣装持ちなんですよねえ。私たちも、良く色々着せてもらってます。ほら、こんな感じで……

（これ、細部はかなりアレンジされてるけど、ベースはウチの古い民

エルトリア

族衣装じゃない。そういえば、フェイトちゃんにエルトリアの服飾の資料とか頼まれたことがあったわね。何のためかと思つたら、そつちに流してたのか。ま、その衣装をさらにどう使つたかはおおよそ察しがつくけど)

—— そうだ、ちよつと聞いてみたかつたんですけど……
なに？

—— イリスさんって恋愛マスターなんですか？
ぶはっ!? ど、どこでそれを……っ!

—— キリエさんとアマタさんから。
あんのふたりは〜!

—— 違うんですか？ お二人とも、イリスさんのアドバイスのおかげで今の幸せがあるって言つてましたけど。

いやまあ、確かに多少のアドバイスはしたけど……。

(少なくとも、恋愛「マスター」なんて言うほど大層なものじゃないわよ。というか、あの当時なら私だつて恋愛経験なんてなかったわけだし、今思えば「耳年増」もいとこだったのよねえ)

—— ああ、やつぱり！ キリエさんが「先生が良かったから」つて自慢してましたよ♪

(そう言つてくれるのは嬉しいし、髪の手ケアやファッション、笑い方に立ち振る舞い……色々指導したのは本当だけど、過大評価が過ぎるわよ、まったく。

……ああ、思い出した。そういえば、昔似たようなことをフェイトちゃんにも聞かれたっけ)

もしかして、フェイトちゃんからも聞いてる？

—— はい。立香さんのことで色々相談に乗ってもらつたつて。

……一応聞くけど、あの子の本棚とか見たこと、ある？

—— ……ぷいっ (目逸らし)

誤解のないように言つておくけど、アレは私のせいじゃないわよ。

—— え、違うんですか？

違うわよ！ というか、普通「男をダメにする100の方法」とか「女の包容力」とか、「ママみ道」なんて怪しい本をだれが薦めるか!?

——で、ですよね……。

アレはね、立香さんに甘えてほしいフェイトちゃんの暴走……いえ、迷走の結果よ。

——あ、そういうば偶に「立香ばかりズルい」とか呟きつつ読んでますね。

……その様子だと、進歩はなさそうね。

——10分もしないうちに逆転されて、「悔しい……でも幸せ」「違う、そうじゃないの」とか言いながら膝枕されたり、膝の上で髪を梳いてもらったりしながら蕩けた顔してます。

仲のよろしいことで……。

——で、そんなお二人をマシユさんが微笑ましそうにお茶を入れたり、立香さんの肩を揉んだりしてますね。

本当に、仲の良いことで……。

* * * * *

「え、立香もう戻ってるの!」

「うん、しばらく前にね。無事ユーリって子と接触できたみたい」

新たに得た情報を基に、装備の更新のために一度本局へと向かっていたフェイトだったが、そちらの目途がついて戻ってみれば、早速の朗報に表情が綻ぶ。

迷宮アステリオスの主が手ずから用意したマップと、頼りになるサーヴァントたちがいるとはいえ、それでも迷宮の概要を知れば不安は拭えない。モヤモヤとしたものを抱え、気が急いでいたのは誰の目にも明らかだった。

しかし、立香の無事を聞いて安堵したようで、ほっと息をつく傍ら目尻にうつすらと涙が浮かんでいる。それだけ、心配していたということだろう。そんな妹的存在の様子を微笑ましそうに見やりながら、エイミーはより詳しい情報を伝えてくれる。

「話はあるまでできなかつたみたいだけど、夜天の書の紙片みたいなのをもらって帰ってきて、そっちはレヴィが解凍してる。今は確か談

話室の方で休んでるはずだから、会いに行つて来たら？」

「うん！ あ、でもいいのかな……」

「装備のこととかは報告が上がってるから、こっちは大丈夫。気にせず行つておいで。でも、場所分かる？」

「う、それは……」

あたりを見回せば、見慣れない様式の荘厳な回廊。天井まで軽く10メートル以上あり、道幅も相当なもので、柱や壁の装飾は素人目に見ても大変手が込んでいる。つい先ほどまでいた、一切の無駄をそぎ落とした機能美そのものと言える本局の廊下とは似ても似つかない。何処かの王城を思わせる作りに、若干の気後れを感じないでもない。

そして、初めてここに足を踏み入れたフエイトには、当然土地勘などあるわけもなく……。

「バルディッシュ…は、まだむこうか。^{本局}なら、モニターに地図出しておくから、それを見ていくといいよ」

「ありがとう、エイミィ。ところで、この灰色になってるところは？」

「入っちゃダメな場所だつて。入った場合、命の保証はないつて女帝さんが」

「わ、わかった」

立香と夢で繋がっているからか、その言葉が冗談ではないことを理解してわずかに頬がひきつる。あるいは、チラツと見たこの庭園の主の恐ろしいほどに整いながらも酷薄な笑みを覚えているからか。

いずれにせよ、不用意なことはすまいと誓う。今重要なのはその点だ。

「まあ、物騒ではあるけど指揮船大型クルーザーよりずっと堅牢だし、前線基地としては申し分ないんだよね。隠蔽能力も相当なものみたいだし、使わせてもらえるなら有難く使わせてもらおう」

「うん」

実際、通常のセンサーなどでは観測することができず、目視も基本的には不可。少なくとも、地球の様々な機関に怪しまれる心配はない。そして、(主曰く「小ぶりな」)庭園の防御性能は一級品だ。機動力こそ乏しいが、その分守備と迎撃に関しては並外れている。

関係者を安全に收容し、現場に迅速に指示を出すという点では現状これ以上は望めない。

それを使わせてくれるというのだから、多少の物騒さには目を瞑るべきだろう。実際、基本的なルールさえ守っていれば多少出歩いても問題ないのは、先んじて色々見学させてもらったアリサたちが証明している。

「あ、そういうええなのはとはやては？」

「二人とも戻ってきてるよ。なのはちゃんはちゃんと治療を受けたからもう大丈夫。レイジングハートの方はエルトリア式フォーミュラとの同期がてら微調整中、そっちはマリーがやってる。はやてちゃんも、ついさつき戻ってきた。たしか、そっちはダ・ヴィンチちゃんが見てくれてるんだっけ？」

「うん。私の方はシオンさんが」

「残ったナノマシンだとフォーミュラは使えないらしいけど、いったいどうするつもりなんだろうね、あの二人」

「わからない。でも、二人とも物凄く頭がいいらしいから、何か考えがあるみたい」

「“万能の人”レオナルド・ダ・ヴィンチ……地球の歴史上でも屈指の“智慧の怪物”か。で、シオンさんはその人が認めるほどなんだから、どっちも何とかしちゃうんだろうけどね」

「そ、そうだね」

(ん?)

スカートの前足を両手で押さえ、若干頬を染めながらモジモジした様子を見せるフェイト。

そのことを少し不思議に思いつつも、早く立香に会いたくて気が急いでいると解釈したエイミィは、これ以上恋する乙女を引き留めては悪いと、笑顔を向ける。

「ほくら、私のことは気にせず早く行っておいで」

「ご、ごめんね。行ってきますー!」

(ひらひら)

パタパタと走り去っていく背中に手を振りながら、その様子に首を

かしげるエイミー。

スピードを出すために腕を振るのではなく、両手でしつかりとスカートを抑え、両足は気持ち内股。短めのスカートなので、それがめくれない様にと気を付けているようにも見えるが、やはり若干の違和感を拭えない。

先ほどの少しモジモジした様子と合わせて考えると……

(トイレでも我慢してるのかな?)

まあ、女同士とはいえ、言葉にして聞くようなことでもない。

そのまま臨時司令部として借りている部屋へと向かえば、道中どこか疲れた様子のクロノと出会った。

「どしたの、クロノ君?」

「……エイミーか。いや、ちよつとな……」

「? ? ?」

「アレを見てくれ」

そういつて右手でうつむいた顔を抑えつつ、左手親指でぞんざいに示した方向を見やる。そこには……

「えつと……どこまでついてくる気なの、シユテル」

「どこまでもお供します、師匠」

「いや、そもそもどうして師匠?」

「異なことを。あなたはなのはの魔導の師なのでしょう?」

「まあ、一応は」

「そして、アレンジしているとはいえ、私の魔導のベースはなのはのもの。つまり、あなたは私の師も同然」

「言わんとすることはわからなくもないけど……」

困惑した様子でコリコリと頭をかくユーノと、自信満々に自論を展開するシユテル。

その後ろでは、なのはが餌をほおばったハムスターの様に頬を膨らませている。

「むう……ユーノ君はなのはの先生なの!!」

「ええ、ですから私の師でもあるのです」

抗議しても、シユテルは柳に風とばかりに受け流す。表情の変化に

乏しいクールな彼女に、子どもっぽい抗議は意味をなさないらしい。「ま、まあ、僕が誰の師匠で、誰の先生なのかは一度置いておくとして……」

「置いちやダメ〜！ とつてもとつても大事なことなんだよ！」
「な、なのはあ……」

珍しくというかなんというか、普段が年齢不相応にしつかりしている分、こうして年相応の幼さを見せられると新鮮というか、悪い気がしないというか。そんな反応すら「カワイイ」とか思ってしまうあたり、自覚はなくともすでに十分やられてしまっているユーノ。

なのはに抗議されて困っているのが半分、もうちよつとそんな彼女を見ていたい気持ちが半分。

まあそれはそれとして、とりあえず今は二人に解放してもらおう方が先決だ。

「えつと、その…とりあえずトイレに行きたいから、その話はまたあと」

「お供します」

「とでねってハイイ!？」

「ちよつ!?! なに言ってるの、シユテル!?!」

予想だにしない爆弾発言に、目をむいて驚く二人。

だが、そんなユーノとなのはを他所に、シユテルはいたって冷静だ。

「何かおかしいなことも?？」

「イヤイヤ、どう考えてもおかしいでしょ!?!」

「ユ、ユーノ君トイレに行くんだよ！ それなのに……」

「ふつ、なっついていませんね、なのは」

「なんか見下された!?!」

「師のお世話は弟子の役目。湯浴みでも御不浄でも、どこまでもお供して当然でしょう。よもや、師のお世話ができないとでも?？」

「いや、そんなこと別にしてもらわなくてm」

「な、なのはだっつてできるもん!？」

「なのはも何言ってるの!?!」

そのまま、どっちがユーノの（下の）世話をするかでもめ始める二

人。

間に挟まれたユーノからすれば、ある意味恥辱の極みだろう。同時にその視線が「タスケテ」とクロノの背中に突き刺さるが、本人は我関せずを貫くつもりらしく見向きもしない。

さらに、その奥では……

「待て小鴉！ 貴様、そんなものを持ってどこに行くつもりか！」

ディアーチエに服の裾をつかまれながら、迷いのない足取りで突き進むはやて。その手には、タライとシャンプーやせっけん、バスタオル等々……要はお風呂セット一式。当然、そんなものを持って行く先など一つしかない。

「何言うてんねん、王様。もちろん、お風呂に入りに行くに決まっとるやん。こんだけのお城……ん、お城？ まあええ、とりあえずこんな場所のお風呂なら、そら大層ご立派に違いない。温泉とお風呂の国『日本』の生まれとして、ここはしつかり堪能せな」

「そういうことを聞いているのではないわ、戯け!! いま、風呂はあの赤毛の男が入っているはずだと言っておるのだ！ そして、貴様は既に一度湯あみを済ませていよう！」

「いややなあ、こんなん兄妹の微笑ましいスキンシップの一環やん」「そんな爛々とした目をして、どこが『微笑ましい』か!! どう見ても、獲物を前にした獣の目ではないか!!」

怒鳴りつけるディアーチエだが、気にした様子もなく引きずるようにして進むはやて。むしろ、心外そうな表情を『作って』いる。

「人聞きの悪い、こんなか弱い女の子捕まえて『獣』はないやろ」

「曲がりなりにも我と打ち合える貴様の、どこがか弱いクワア!？」

「そもそも、何が問題なんよ。この国では、11歳までは男の子は女湯に入ってもええことになっとる。なら、その逆も然り。私まだ11歳、オツケー、モーマンタイ、問題なし！ ちゅーわけで……行く！」

「そういう問題ではないわ！ 貴様には、恥じらいというものはないのか！」

「あのトーヘンボクが恥じらって落とせるなら苦勞せんわ」

引き留めようとするディアーチエと気にせず進むはやての向こう

では、守護騎士たちが乾いた笑みで傍観に徹している。一人ザフィーラだけは、風呂の方を向いて「強く生きろよ」と誰かに向けて呟いているが。

そして、間もなく……

「「クロノ（君）!!」」

「執務官」

「そこの貴様!!」

「僕にどうしろと言うんだ……」

「お兄ちゃんは大変だあ」

当事者一同から呼びつけられ頭を抱えるクロノと、それに苦笑いを浮かべるエイミイなのであった。

時を同じくして、エイミイにモニター上に表示してもらった地図を頼りに談話室を目指していたフェイトは、旅の道連れと遭遇していた。

「フォオ？」

「君は確か……フォオウ、だよな」

「フォオウ！」

名前を呼ばれ、元気よく返事をするフォオウ。しかし、そこでふと疑問に思う。

（あれ、私この子と会ったこと、あったっけ？）

カルデアがこちら側の世界に浮上してからこっち、折衝などはほとんどリンディイなどを中心とした上層部が担っていた。また、フォオウ自身があまり人の多い場所に来たがらなかったこともあり、これまで接点らしい接点はなかったはず。なのに、一目見ただけでフォオウの名前が浮かんだことに疑問を覚える。

（立香に写真を見せてもらった、んだっけ？ それとも、マシユと話をさせてもらった時かな？）

似たような生い立ちということから、マシユのことは紹介してもらっている。なので、そのどちらかが割と有力なように思える。ただ、あまり自信はない。振り返ってみても、そういった話題が出た覚

えがないからだ。

忘れてしまったのか、それとも本当にそんな話題は出なかったのか。

ただ、記憶の片隅に引つかかりのようなものはある気がする。それは既視感デジヤブにも似た、何かの残滓。

「フオウ！ フオウフオウフオウ？」

「えっと……ごめんね。なんて言ってるか、良くわからないんだ」

「フオウ？」

何かをしきりに訴えてきてはくれているが、その意味までは拾いきれない。

だがなんとなく、「そんな恰好でいいのかい？」的なことを言われたような気がする……ようなしないような。

しかし、もしもそうだとすると……

「……見たの？」

「フオア！」

（ち、違うよね？ 確かに、この子の角度からなら見えたかもしれないけど……）

今は肩の上に乗っているが、発見した時は当然床の上。フオウはかなり小さいので、出会ったときは見上げる形になっていた。それなら確かに、見えていても不思議ではない。

しかし、使い魔の類でもないであろうフオウに、そんな知性があるとも思えず……。

ただ何となく、スカートを抑える手に少しばかり力が籠る。

そうしているうちに、目当ての談話室の入り口が見えてきた。

「立香く、いる？」

ちよつとした会議室くらいの広さがある談話室をのぞき込んでみれば、壁際に置かれたソファの上で横になった立香の姿。見慣れた、でもどこか安心感を与えてくれる寝姿にほんの少しだけ微笑みを浮かべたのも束の間、すぐにフェイトの表情が凍り付いた。

「え……」

「フオ？」

「なに、してるの…レヴィ」

「ん、むにやむにやzzz…」

一瞬青いタオルケットか何かかと思つたそれは、立香の上に覆いかぶさるようにして寝息を立てるレヴィだった。

仰向けになつた立香の上で丸くなり、頬どころか全身を摺り寄せるネコの如き仕草と涎を垂らし緩み切つた表情。警戒心の欠片もない、リラックスの手本のような様子には微笑ましさを覚える…のだから、今のフェイトにはそれどころではない。

まるで、自分の居場所を奪われたかのような寂しさと虚無感、続いてそれを我が物顔で占拠する相手への怒りとも違う熱い感情が胸をいっばいにする。

何かを思考する間もなく、気付けば魔法さえも発動して接近し、立香の上で丸くなるレヴィを引き剥がしにかかつていた。

「なんで、なんでレヴィがそこ立香の傍にいるの〜!!」

「ふにやつ!? なんなんだ、奇襲とは卑怯だぞ! ボクのベッドを取ろうとはふてえ野郎だ!」

「それはベッドじゃなくて立香なんだつてば!」

「やー! ここはボクが先に見つけたんだ! だからボクの場所!」

反射的に細い四肢を使って立香にしがみつくとレヴィ。

フェイトも負けじと力を入れ、何とか引き剥がそうとするが上手くいかない。

「レ、レヴィのじゃないでしょ!」

「じゃあ、誰のなのさ!」

「そ、それは…」

ここで「私の」と言えないのが、フェイトのフェイトたる由縁だろうか。

その一瞬のスキを逃さずレヴィはフェイトの手を振り払い、再度立香の上でリラックスモードに入る。ただし、その手はしっかりと立香の身体に回され、足も右足に絡みつけている。無理に引き剥がそうとしても、即座に力を入れて抵抗する気満々だ。

というより、全身を使つて立香に抱き着いている、というのがフェ

イトにとっては一番の重大事。やりたいと思っても、自分では恥ずかしくて到底できないこと。もう羨ましいやら、妬ましいやらで頭の中はぐちゃぐちゃだった。

「んふ〜、なんかキモチ〜♪ よ〜し、ここをボクの専用ベッドに決〜めた♪」

「だ、ダメダメダメダメ！ そんなの絶対ダメ！」

「なんでフェイトが決めるのさ。別にフェイトのじゃないだろ〜」

「そ、それは！ そう、だけど……」

自分に素直な者と、事情はどうあれ素直になれない者。勝負は、初めから決まっていた。

が、それで諦められるほど、フェイトは「物分かり」が良くない。

「な、なら代わって！ 代わってよお〜！」

「え〜、やだあ〜！」

「少し、少しでいいから〜！」

「え〜〜〜〜！ やだあ〜〜〜〜、やだあ〜〜〜〜、やだあ〜〜〜〜、やだあ〜〜〜〜！」

再度始まる引つ張るフェイトとしがみつくレヴィの攻防。その間、立香の身体は相当な力で締め付けられ、あるいは、ガツクンガツクン！と揺らされることになるのだが、一向に目覚める気配はない。

フェイトたちはそのことに気付く余裕もないわけだが、通りかかった管理局員やカルデア職員はその限りではない。

「彼、良くあの状態で寝てられますね」

「あ〜……立香君はね。一度寝ると二時間は何しても起きませんか
ら」

「そうなのか、アルフ」

「まあね。そういえば、昔起こそうとした時も、叩こうが殴ろうが、何しても起きなかったっけ」

「なんとという図太さ……」

呆れた様子 of 局員たちだが、真実は違う。立香のそれは、精神の清掃解体によるものだ。こうなると、二時間の間は精神が意味のない断片に分解されたまま。何をどうしたところで起きないのも当然だろ

う。

職員たちはそれを知っているが、迂闊に話すわけにもいかないので誤解するままにしているのだ。

まあ、それはそれとして……

「そういえば彼女、レヴィでしたか。確か、例の紙片を解凍してたんじゃないありませんか？」

「もう終わったみたいですね。どうやら中身は動画データみたいで、今は再生するためのプログラムを用意しているところですよ。多分、もう直そつちも準備ができますよ、ブレゼさん」

「ムニエル、俺ムニエルですから。にしても早いですね。でも、なんであんなところに？」

「なんでも疲れたく、寝るく、とか言ってたそうで……」

「それでちょうどいいベッドを見つけたと」

おおよその経緯はわかった。とりあえず、立香に関してはほっといてもいいだろう。しばらくはどうやっても起きないし、彼にとつてはこの程度トラブルのうちにも入らない。

それに、局員にしても職員にしてもやることはいくらでもある。言つては何だが、どうやっても深刻な事態になりそうにない些事に、一々関わつてはいられないのだ。

というわけで、大人たちは早々に談話室での出来事をスルーすることに決めて立ち去っていく。アルフも、アレはアレでフェイトが積極的になるきっかけになればと放置することに。

そのためフェイトは孤軍奮闘を強いられ……結局、レヴィを引き剥がすことを断念。

「むふふくく♪ ヴイクトリく、というわけで僕は寝るく。フェイトは……まあ、好きにすれば」

「もく……立香だつて疲れてるのに」

とはいえ、冷静になってみれば睡眠を妨害していたのは自分も同じなことに気付き、あまり強くも言えないフェイトだった。

しかし、こうして冷静になってしまったからには再度引き剥がしにかかることもできない。とそこで、フェイトはソファから落ちた立香

の右腕に気付く。だらりと下がった腕は床についているので宙ぶらりんというわけではないが、結構無理のある状態だ。

(このままじゃ、返って疲れちゃうよね。でも、どうしたら……)

とりあえず、ソファに戻してみようとするが元からそれほど幅がないのですぐにまた落ちてしまう。床に激突しそうになる腕を慌てて抱き留め、ホッと一息つく。

肉付きこそまだまだ薄いのが、それでも僅かにふくらみだした胸を押し当てている自覚などないままに。

(あとは、身体の上だけど……)

だがそこには、今も堂々と立香の身体の上でうつぶせになっているレヴィの背中がある。

もしそれをした場合、見ようによっては立香がレヴィを抱きしめているようにも見えるだろう。

(なんか……やだな、それ)

想像しただけで、とても嫌な気持ちになる。それが身勝手なものとかわかっていながら、どうしても納得がいかない。頭の片隅で、「こんな我儘、いけないのに……」とわかっていながらも。

そこでふと、フェイトに一つの案が浮かび上がった。

(あ、そっか。なら、このまま私が支えていればいいんだ)

横に戻せば落ち、上に乗せるのもダメ。ならば、立香が目覚めるまで彼が疲れないよう支えていればいい。

穴だらけどころではない理屈なのだが、フェイトにはそれが無上の妙案に思えた。

早速ソファの横に女の子座りし、立香の腕……その肘から先を両腕で抱きしめる。目の前には立香の、男性らしい骨ばってゴツゴツした手。何度も頭を撫で、頬に触れ、優しい温もりを与えてくれた大好きな人の手。

だがよく見れば、細かな傷がいくつも残っていることに気付く。初めて会った頃には気づかなかった、再会し心に余裕が生まれてからようやく気付いたもの。だがあの頃は、日雇いの仕事でついたものと思っていた。あまり、「普通の男性」というものと接点がなかったか

らだ。肉体労働をしていれば、そういう傷がつくこともあるのだろう。男性なら、別に不思議なものではないのだろうと。しかし、今はもうそうではないことを知っている。

同時に、藤丸立香が尋常ならざる人生を歩んできたことも。だって、そうでなければ元の世界から遠くかけ離れた場所になど、現れたりしないはずなのだから。

(ねえ、君は^{立香}どんな旅をしてきたの?)

フェイトはまだ、立香がここに至るまでの道筋を知らない。知りたいたいという思いと裏腹に、聞いていいのかどうかわからない。

できれば知りたい。知って何ができるかわからないが、かつて彼がそうしてくれたように…寄り添い、支えになれたらと思う。

立香の平凡さを、フェイトはよく理解している。彼は決して特別ではない。

フェイトやなのはのような稀有な才能はなく、はやてのような持って生まれた大器もない。ありふれた、どこにでもいるような人。

彼にできることは、おおよそ誰にでもできることだろう。能力的には誰でも代われるはずなのに、誰にも代わることのできない不思議な人。なぜかはわからないが、フェイトは立香がそうであることを知っている。

それでも、藤丸立香が平凡な人間であることに変わりはない。誰にも代われない何かを為し続けてきたその重みは、きつと彼を…だからこそ、支えたいのだ。重荷を分かち合うことはできなくても、倒れそうになる身体と心を。

(あ、ダメだ。やつぱり、こうしていると眠く…)

一緒に暮らしていたころからの習慣なのか、眠っている立香の傍にいと心が緩んで無性に眠くなる。

知らずフェイトの身体から力が抜けソファに身を預ける。反対に、腕には力が籠りキュツと立香の腕を抱き寄せ、無意識のうちに彼の手に頬を摺り寄せる。もう間もなくフェイトの意識は眠りの海に沈むだろう。

だがその直前、聞き覚えのない声…でも、どこかで聞いたような声

が聞こえた気がした。

(知りたいのかい? なら、今日も見せてあげよう。彼の旅路、我が契約者の^{罪過}功績を)

(^{なにやっつてんだよ}フオウフオウ、^{このバカナイトメア}フオツフオウ!)

(あいた!? ころ、やめないかキャスパリーグ! 僕はほら、マスターのために思ってたね。断じて、こんな面し…もとい、可愛らしい子で遊ぼうなんて思ってたないよ?)

(^{清姫に焼か}フオアフオウ、^{れて死ね}フォーラー!!)

(…でも、きつと彼女はマスターの支えになる。いや、既に…というべきかな。君も、それに気付いているんだろう)

(……)

(夢とは消えるもの。だけど、覚えていなくても残るものはある。その果てに何を選ぶかは、彼女が決めることさ。僕が用意できるのは機会だけ、それをどう使うかは僕のあずかり知るところじゃないよ)

(^{つくづくゴミックズ}フオウツフオ)

(ハハハハ! 今夜はそうだね、趣向を変えてハロウィンとかどうだい? ほら君、以前友達の関係者のコンサートのチケットを渡そうとして、トラウマ刺激したことがあっただろ? その理由がわかるよ)

友人の関係者でもあるプロから「上手い」とお墨付きをもらいつつも、恥ずかしさからあまり人前で歌いたがらないフェイトだが、この日を境に立香に対しては割とよく披露するようになる。

理由はよくわからないが、「優しい歌をいっぱい歌ってあげたい」と思うようになったのだ。あと、チケットを融通してくれる友人^{なのは}には悪いが、当分彼を誘うのはやめておこう、とも。

それから数十分後。無事清掃解体を終え、意識を覚醒させた立香は……困惑の極致にいた。

(どういう状況、これ)

身体の上にはだらしない表情で寝こける水色^レの少女^{サイ}、右側にはソファの傍で座りながら立香に身体を預けるようにして穏やかな寝息を立てる金色^{フエイト}の少女。

この時点ですでに割とアレなのだが、状況はさらに一步以上踏み込んでいた。

「ん〜、ソーダ飴おいち〜、むにやむにや……」

（くっ！ そんなしがみつかないで！　そしてそのまま身体を擦り付けないで！

これがアレか、良く言う「最近の子どもは発育が云々」というやつか!?)

自分が子どもだった頃の同世代がどうだったかは、ほとんど意識していなかったこともありあまり覚えていない。だが、なんとなくイメージ的に10歳前後だと「ツルツル」として「ペツターン」な気がする。にもかかわらず、今まさに身体を押し付け、あまつさえこすり付けるレヴィからは「やくらかな感触」だけでなく、わずかながらも起伏、凹凸の存在が感じられる。

そして、レヴィの肉体はフェイトのデータを基にしている。少なくとも、身長や体格などはほぼ同じだ。特に、布越しながら伝わってくる感触がそれを裏付けている。

なんでわかるかって？　カルデアが浮上するまでは、稀にはあるものの一緒に風呂に入ったりしていたからだ!!

もちろん、いつも一緒に入っていたわけではない。そもそも、立香が海鳴で借りていた部屋は「トイレ共同風呂なし和室ワンルーム」のボロアパート。風呂に入ろうと思えば最寄りの銭湯に行くしかないのだが、偶にフェイトと一緒にいる時があった。

で、海鳴の銭湯は大概「女湯への男児入浴は11歳まで」とされている。そして、その逆も同じ。フェイトが男湯に入ってきて立香がその面倒を見る、という形になったため、極力見ないようにしつつもある程度は把握してしまったのだ。ちなみにこれ、小鴉とか子狸と呼ばれる人物の入れ知恵である。

なので、視覚的にはある程度理解してしまっていた立香だが、そこに感触が加わってしまい、より一層のリアリティが生じてしまったのだ!!

（なんだろう、別に俺悪いことしてないよね？　すっげえ罪悪感とい

うか、イケナイことをしてる感がヤヴァイ……それに)

チラリと横を見れば、そこには穏やかな寝息を立てるフェイトの寝顔。

それ自体は何とも微笑ましい限りなのだが、問題なのは彼女の口元だ。そこでは、今まさに立香の人差し指と中指に、フェイトが舌を這わせている真っ最中。

「ん、はあ……ちゅぱ、あ、れろ……ちゅ……ちゅ……ふ、あ……」

(なに、ホントなんなのこの状況!?)

小さな、だが熱く弾力のある舌が指先を舐り、唾液を絡ませ、時に吸い上げる。

本人はおそらく飴かアイスでも食べている夢を見ているのだろう、たまに甘噛みされるし。

だが、されている立香からすれば落ち着かないことこの上ない。

「……んっ、ちゅう……はあ」

「っ!」

おもむろに指の腹を舐めあげられ、続いて指先にフェイトの小ぶりの唇の感触。それらに身体がビクツと震える。

指先は全身でも特に神経の集中した、敏感な個所の一つ。そんなところに舌を這わされる感触は、何とも形容しがたい。くすぐられるのとまた違う、むず痒いような、あるいは熱く包み込まれるような……。

馴染みのない感覚に身体が驚いてしまうのは仕方がないだろう。せめもの救いは、それでもなお一切反応しないある一部分だ。

(あ、あつぶねえ! いつもはちよつとあれだけど、今だけは体が反応しないのに感謝だ! いや、マジで!?)

「……ふう、ふう……はむ。ちゅ、ちゅぱ……んん、れろ……あ」

(でも絵面がヤベエ!! 絶対これ見ちゃいけないし、見られちゃいけない奴だ! 死ぬ、社会的に!)

全力でフェイトから目をそらす、現在進行形で吐息が指先にかかり、耳に息遣いが聞こえている。そもそも、一瞬だけ視界に入った淫靡な姿が脳裏に焼き付いて離れない。

いや、淫靡[〃]と感じている時点で、^有ギルティ^罪なのは理解しているが……だって、しょうがない。まだまだ[〃]幼さ[〃]が優勢とはいえず、それでもフェイトはいっそ[〃]奇跡的[〃]と称していいほど整った顔立ちをしている。そんな子が、瞼を閉じながら自分の指にぎこちないながらも舌を這わせている光景というのは……あまりに背徳的過ぎる。

一心不乱とか、情欲の色とか、熱っぽさとか、そういったものがないのが救いなのかもしれないが、それらを抜きにしても十分すぎるほど[〃]アウト[〃]だ。

(何とかフェイトに起きてもらって、あとついでにレヴィにも降りてもらわないと……)

「……んんー！」

(つて、腕に力入れないで!? やくらかい感触があ〜!)

立香の身じろぎを感じ取ったのか、逃がさないとばかりにフェイトの腕に力が籠る。おかげで、前腕あたりにフェイトのささやかな膨らみの感触が……。それでもなお、立香の身体は反応しない。それは果たして、喜ぶべきなのか、嘆くべきなのか……とりあえず、どつちもできねえ、というのが立香の本心だった。

「お〜い、フェイトさんや〜い。お願いだから起きてくれ〜。このままだと俺、死んじゃうから。社会的に、場合によっては生物としても^{サーヴァント}通りかかる人物によつては、本当にその可能性を捨てきれない。

だが幸いなことに、元から無理のある体勢だったこともあってか、フェイトの眠りは浅かったらしい。

少し呼び掛けたただけですぐに閉ざされた瞼が反応し、間もなくうつすらと開かれた隙間から赤い瞳がその姿をのぞかせる。立香にはそれが、天からの祝福に思えたものだが……

「んう……あれ、立香? あ、私……そうか、寝ちやつてたんだ」

「無理な体勢で寝てたから、痛いところがないかとか聞きたいことはあるんだけど……とりあえず手、放してもらえる?」

「て? ひゃわっ!? ぐ、ごめんね! 私……つわわ!」

「フェイト!」

驚きのあまりのけぞり、そのままバランスを崩すフェイト。咄嗟に

立香も手を伸ばそうとするが、上に乗ったレヴィのおかげで間に合わない。

結果、フェイトはそのまま後ろに向かってひっくり返ってしまう。幸い、後ろにテーブルなどはなく、敷かれた毛足の長いカーペットがクッション代わりになり、あまり大きな音を立てることなく、「コテン」と倒れるフェイト。

頭を打った様子などがないことに一安心し、レヴィの背中に左手をまわして体勢を保持しつつ上半身を起こす。そうして、まだ頭がはつきりしないのか、倒れたままのフェイトに右手を差し出そうとしたところで立香は慌ててそっぽを向く。

「立香?」

「フェイト、それ」

固有名詞を使わず、フェイトのスカートを指さす立香。そこには、ひっくり返った勢いで盛大に捲れた丈の短いスカート。その意味を理解し、声にならない悲鳴と共にフェイトは身体を起こしスカートを抑える。

顔がものすごく熱く、自分がこれ以上ないほど真っ赤になっていることが嫌でも理解できる。それこそ、顔から火が出そうなほど恥ずかしい。

一緒に風呂に入った時に裸を見たり見られたりはしているので、いまさらと思うかもしれないが……これはそういう問題ではないのだ。だって、いまフェイトは……

「立香」

「……なに?」

「…………見た?」

「見てない」あるいは「何のこと」と誤魔化したい。というか、真実はどうあれ、ここは誤魔化すべき場面だ。

なので、立香もそうしようとしたところで、談話室の入り口の前を通り過ぎる白い人影を発見してしまった。

(あれは、清姫!?)

あまりの間の悪さに意識が遠のきかける。

よりもよつて、ここで清嘘つき絶対焼き殺すガール姫とは。

彼女の前で嘘をつけば、その瞬間自動的に令呪が一画消費される。今はこちらに気付いていないようだが、その状態で嘘をついた場合どうなるかはわからない。気付かず行ってしまうのか、それとも嘘の気配に反応するのか。

いまは無駄に令呪を消費してよい状況ではない。微かな希望に縋るなど愚の骨頂だ。

フェイトには悪いが、彼女自身尋ねてこそいるが真相は既に承知しているだろう。先の問いは、「そうでないと良い」という希望…あるいは願望の現れだろう。

だから、ここは真実に殉じるしかない。自分一人ならともかく、万が一にもフェイトを巻き添えにするわけにはいかないのだ。

「……………ごめん」

「…………ふ、え…見られ、ちゃった。全部、全部う…………」

羞恥で顔を真っ赤にしながら、涙目になってうつむくフェイト。

無理もない。早ければ、もう十分「思春期」と言つていい年頃だ。思春期の女の子が、色々と思うところのある男に「そこ」を見られるというのは、あまりにもショックが大きかろう。

しかし、立香にも言い分はある。

立香自身は悪いことはしていないと思うが、状況的に悪いのは自分男だと思うし、そこに異論はない。

問題なのは、どうしてフェイトは…………

(なんで、なんで…………履いてないんだあ〜！)

そう、スカートの下にあるべきものがなかったのだ。ある意味、「最後の砦」ともいうべきものがフェイトにはなかった。おかげで、普通スカートがめくれたところで見えるはずのないものが見えてしまった。アレさえあれば、「下着を見る」という十分ギル有罪ティながらも、まだマシな結果で済んだというのに。

裸体を見るのと下着を見るのでは、また罪の程度、あるいは種別が違うだろうが、それでも割と最近まで一緒に風呂に入ったかいた間柄だけに、そちらならまだ何とかなっただろう。

だが、長い付き合いで、一緒に風呂に入ったこともある身でありながら、今まで一度も見ることのなかった、見えるはずのない領域を今日、立香は見てしまった。そこは、ある意味背中以上に本人の目の届き難い場所だろう。

人間、こういう時ばかり記憶に焼き付いてしまうのはどうかと思うと、現実逃避せずにはいられないくらいにくつきりはつきりと。

(それにしても、あんなところにホクロがあるとはなあ……って、そんなことはどうでもいい！ というか削除！ 今すぐカットだ、カット！

……カット？ そういえば、フェイトに履かないそんな趣味はないはず……でも、そういうことをやらせそうなのは心当たりが……)

正直、これ以上この件を掘り下げるのはよろしくないとわかっているものの、だからと言って無視もできない。

止む無く、立香はスカートを足の間にしっかりと挟み込み、体育座りをして微動だにしないフェイトに声をかける。

「フェイト、シオンに何か言われた？」

「ぼそぼそと、蚊の泣くような声で語られたのはフォーミュラに関するところとある顛末。」

ナノマシンの量が足りず、フェイトはやてではフォーミュラを使うことができない。できれば、事件解決のためにフォーミュラを取り入れたいところだが、局にも余裕がないためそちらにまでは手が回らない。そんな時、カルデア側から技術協力の申し出があった。それが、ダ・ヴィンチとシオンである。

二人はそれぞれのアプローチでフォーミュラの活用案を用意し、それをはやてとフェイトが使わせてもらうことになった。

そう、ここまではいい。問題なのは、シオンがフェイトに協力する際「パンツ下着履かせない」と言い出したこと。一応これ、シオン一流のジョークなのだが……真顔で言ってくるので慣れていないと判断が難しい。

カルデアの面々なら、戯言と切って捨てるか聞き流すので問題ない

のだが、今回の被害者は生真面目なフェイト。どうやら、真正面から鵜呑みにしてしまったらしい。

(とりあえず、後でシオンはゞよう)

娯楽の何たるかを知り、無駄や無意味にもそれなりに理解はある彼女だが、元が技術屋だけに「意味のない機械」「無駄な道具」というものは受け入れがたい。要は「意味もなく回り続ける機械」とか、「無駄ばかりでいつまで経っても目的を達成しない道具」を見せると……割と発狂する。今度、シオンにはそういうのを山ほど見せてやろうと決意する立香だった。

あとついでに、遅れて目を覚ましたもののまだ寝惚けているレヴィが「見たいの?」とスカートをたくし上げようとしたり、それを「しなくていいから!!」と必死に止めたり、そこによくやぐ騒動を収めたクロノたちが居合わせて誤解を生んだり……なんてこともあったが、まあ余談だろう。

とりあえず、紆余曲折はあった物のようやくユーリから託された紙片の再生が開始。

管理局とカルデア、そしてディアーチェたち一行は事件の裏側を知ることになる。

イリスの過去、ユーリとの確執の真実。それらは十分に衝撃的なものであったが、逆に言えばイリスを説得し、ユーリとの関係回復のための道筋が見えたことを意味する。それが一つの希望なのは確かだろう。

ただ、立香の表情は険しい。

そんな立香をようやく立ち直ったフェイト(さつきまでなのはに抱き着きながら「全部、全部見られちゃったよお……」と凹んでいた)が、心配そうに見上げている。

やがて、何か考えがまとまったらしく、フェイトを安心させるように微笑み、続いてアマタへと視線を転じる。

「確認なんだけど、エルトリアとの通信とかはできる?」

「ユーリのデータのおかげで一応は可能になりましたが……ああ、この情報の裏付けをとるんですね。母さんなら知っているでしょうし

……」

「まあ、それもなんだけど……」

「他に、何かあるんですか？」

「惑星再生委員会とかのことも調べてほしいんだ。あと、マクスウェル所長のことも」

「ですが、あの方はもう……」

「先輩も、そう思われますか？」

「うん。たぶん、生きてる気がするんだよなあ」

『ええっ!？』

その場にいるマシユを除いた一同の声が重なる。

どこからどう見ても、フィル・マクスウェル所長はユーリの手で死んだようにしか見えない。

なるほど、それは当然の反応だろう。しかし、立香とて根拠なくそんなことを言っているわけではない。

「なんとなくだけど、パラケルススとコロンプスを足して水で割ったような印象が……」

「……ですね。確かに、一筋縄ではいかない方だと思います」

「なんというかこう、自分なりの善意とかで行動してる割に、周りにとっては大迷惑なタイプというか……何度転んでもめげずに立ち上がって進み続ける、超がつくくらいのポジティブというか」

「……だが、だとしても彼は死んだ。それは間違いないのでは？」

所見を述べる立香に、みなを代表してクロノがその事実と言及する。

だが、甘い。魔術の世界では、一度や二度殺したくらいでは死なない連中など掃いて捨てるほどいる。

「でも、イリスは身体を取り戻したよね？」

「それは、まあ……」

「意識というか、精神というか、そういうのを保存する技術があるのなら、多分あの人は自分にもそれを使ってるはずだ」

「そう言い切る根拠は？」

「だってあの人、自分が死ぬの織り込み済みだったでしょ」

「そうですね。だからこそ、イリスさんとユーリさんを戦わせるためのメッセージを用意できたわけですし」

「そんな人が、簡単に死ぬとは思えない。最低でも、自分が復活するための仕込みはしてるはずだ。エルトリアに予備の身体があつたりするとか。あ、でも、それならもう復活してないとおかしいか」

「いえ、何らかの条件付けをして、それが満たされた時に起動するようにしている可能性もあります。そのまま目覚めても、居場所がないでしょうから」

「ああ、確かに……」

（どうして、そんな可能性がどんどん浮かんでくるんだ、この人たちは……！）

立香とマシユ、二人の間でさも当たり前前のように交わされる議論に、思わず息をのむクロノ。

いや、それは何もクロノに限った話ではない。その場にいるほとんどの面々が、「復活できる」ことを前提に話をする二人に圧倒されていた。

死は覆しようのない絶対のもの。一度死んでしまえばそれで終わりのはずなのに、その前提をないものとして考えることができる。それは二人が特別頭が切れるからではなく、そもそもその前提条件が彼らとは違っているのだ。

いったいどんな経験、どのような修羅場を超えれば、その可能性を即座に考慮できるのか。

とはいえ、圧倒されているものばかりではない。

「……驚くべきことではあるが、確かにあり得ないとは言えないか」「そうね。私たちだって、ある意味では似たようなものだし」

シグナムとシャマルの二人が立香たちの考察に同意を示す。特に口にはしないが、ヴィータやザフィーラも同様だ。彼らもまた、消滅と復活を繰り返してきた者たち。

自分自身のことを考えれば、その可能性を頭から否定することはできないだろう。まあ、似たような存在というのにはちよつと心当たりのないもので、当初は頭から外していたようだが。

「ユーリと、あと夜天の書にも執着してたみたいだし、こっちで出くわす可能性もあるかな？」

「十分にあり得ると思います。イリスさんを追いかければ、必然的にユーリさんを追うことにもなるでしょう」

「欲張りっぽいもんなあ。ユーリの復活に反応して、イリスを目印にして追いかけてくる、とか有り得そう」

「でしたらやはり、マクスウェル所長の存在も前提に対策を講じた方が良いかもしれませんね」

「その場合、二人とも手に入れる算段がついているはずだよな。場合によっては、機動外殻とイリス、それにユーリ……あと、ディアーチェたちが操られる可能性も考えた方が良いかな？」

「我らが操られるだ?!」

「なんだよそれー！ 僕たちを操ろうなんて凶々しいぞー」

「ですが、あながち否定はできません。実際、ユーリはイリスの支配下に置かれているわけですから。我々も、十分に注意して事に当たるべきでしょう」

「おのれ、忌々しい……!!」

そのまま作戦会議は続く。事件が再度動き出すまで、あともう少し……。

ユーリ・エーベルヴァインの場合

……困りました。実は、私には話せることがあまりないんです。

——そうなんですか？

はい。事件の最中、私はほとんど迷宮の中にいたもので、詳しい経過などはあまり……。いえ、一応経過なんかは後から聞いているのですが、それはヴィヴィオが聞きたいこととは違うでしょうか？

——まあ……あ、じゃあわかる範囲でお願いします！

そう、ですね……私自身に関しては、ディアーチエたちが立香に迷宮のマップを借りて助けに来てくれました。

——そういえば、イリスさんにウイルスコードを打ち込まれてたんですよね。でも、それなら迷宮から脱出しようとはしなかったんですか？

あのウイルスはあくまでも“指示に従わせる”ためのものなんです。ですから、逆に言えば指示がなければある程度自分の意志で動くことができます。まあ、禁則とかもあったので、実際にできることはほとんどなかったんですが。

とはいえ、迷宮内はほとんど異界のようなもの。外部からだと私にまで指示が届きません。

なので、イリスが脱出を指示するためには、まず私のところまでたどり着く必要があります。

——ああ、なるほど。それで、立香さんはユーリさんと接触してそれを知ったわけですね。

はい、そうなれば当然対策します。具体的には、空中庭園を迷宮の真上に持ってきて防衛に回すと同時に、アヴィケブロンに迷宮そのものをゴーレム化させたそうです。

——ゴーレム・ケテルマルクト王冠：叡智の光、ですね。コロナに教えたいんですけど、守秘義務があつて話せないんですよえ。

仕方ありませんね。でも、確か近々カルデアへの渡航許可が下りるのでしよう？

——はい。まあ、その時のことが楽しみでもあり怖くもあるんですが……多分というか、ほぼ確実にアインハルトさんとかチャンピオンから質問攻めにされるでしょうし……。

えつと、その……頑張ってください。

——あはは……でも、それだけ防備を固めているとなると、ユースンさんに関してはほぼ万全だったわけですね。

そう、でしょうか？　でも、あの時の私には「接近する敵性体を排除する」という指示が与えられていたので、イリス以外の誰かが近づいてくるとオートで攻撃してしまう状態だったんです。立香の時も、危うく……。

——え、それじゃディアーチェさんたちはどうやって？

接触してゆっくり解除……とはいきませんから、魔力ダメージで強引に、ですね。

横槍が入らないように迷宮内で戦うことになったんですが、そうすると私はともかくディアーチェたちにはほとんど逃げ場がありません。

私を助けようとしてくれているのはうれしかった。でも、それ以上にあの子たちを傷つけてしまうのが辛くて、悲しくて……。

——ああ、魔力ダメージ狙いとなると、サーヴァントの力は借りられませんよね。となると、本当に3人だけで？

……はい。管理局にも余裕はありませんでしたし、ディアーチェ自身も「手助けなどいらぬ」って突っぱねてしまっただけ。

——なんとというか、王様らしいですね。

意地っ張りにも困ったものです！

——でも、それで無事ユースンさんは解放された、と。そのあとは……。

できればイリスに会いに行きたかったんですが、あくまでも力業でウイルスを機能停止させたにすぎません。となると、またいつ再起動するかわからない私が戦場に出るわけにもいかず……。

なので、人の姿を保つので精一杯だった三人を介抱していました。迷宮内には危険な魔物もいましたし、アステリオスも守ってはくられて

いましたが……。

——でも、結果的にはそれでよかったのかもしれないね。

そう、ですね。あのまま外に出ていけば、それこそまた操られていたかもしれない。

まさか、所長が生きているとは思いませんでしたから。

——まあ、普通はそうだと思いますよ。

ですが、立香たちは所長の生存を前提にして行動していました。

あちら側では、死体を確認した程度では安心材料にならないんだとか……。

——“不老不死”とか“不滅”とかが言葉遊びじゃないですからねえ。聞けば聞くほどにとんでもない世界ですよ。

他にも、シオンの古巣にはロストロギア染みた兵器がいくつも死蔵されているという話ですし、物理法則そのものを改竄、ないし無視する能力者もいるとか……：ビースト人類悪に至っては、場合によっては次元世界そのものを滅ぼし得る可能性があります。

——私たちの世界にビースト憐憫の獣Iに近い存在が現れたら、それこそ宇宙そのものを新生させようとするかもしれないかもしれませんもんね。

ビーストIIであれば倒せる可能性もあるでしょうが、それでも次元世界規模になったらいったいどうなるか……。

——他のビーストでも似たようなものの気がしますけど……：というか、改めて立香さんたち、良くあんなの倒せましたよね？

全ての人類悪の踏破に関わったのが、半神でもなければ英雄でもない。ましてや、魔人や超人の類でもない、平凡な人だということです……：いえ、立香はある意味“人間の代表”なのだ、誰かが言っていました。世界奇跡の大多数を占める“ありふれた人”の一人だからこそなしたことなのだろう、と。

運命や神といった超越存在に選ばれた、あるいは人並み外れた才覚や大器を持って生まれた、ある意味で“人間以上”とも言える特別な存在ではなかったからこそ……。

——そういえば立香さん、マクスウエル所長になんかそんな感じのこと言ってたんですよね？

ん、どうでしょう。私としてはちよつと違う印象を受けましたけど……でも、立香らしい言葉だったと思いますよ。結局、所長は最後まで一人でした。誰かを“利用”することはしても、誰とも“協力”しようとしなかった。あの人は間違いなく天才で、様々な面で卓越した人でしたが……孤独であることに気付いていなかったんです。

対して、立香は自らの平凡さを理解し、向き合い、決して逃げようとはしなかった。だからこそ彼は多くの出会い、数多の縁、紡がれた絆を握りしめてきたんでしょう。自分一人では何もできなくても、力を貸してくれる誰かと手を取り合う。その平凡さこそが、彼の唯一にして最大の武器。

立香が言ったように、私たちには仲間がいて、所長には誰もいなかった。きつと、それがすべてだったんだと思います。

——でも、それじゃあユーリさんにとっては、ディーアチエさんたちに助けてもらって、介抱してたら事件が終わってた感じですか？……まあ、そうとも言えますね。所長が捕まって、安全が確認されてから外に出て、イリスとは思いのほか早く話が出来ました。クロノ提督が、色々便宜を凶ってくれましたから。

——クロノさん、優しいですもんね。

はい。あ、でも……

——でも？

その後にもいろいろゴタゴタがあって、そちらは私も手伝わせてもらったんです。便宜上、そこで貢献したから、という形だったらしいですよ。

私の他にも、キリエやディーアチエたちもかなりグレーゾーンの立ち位置でしたから。点数稼ぎ、と言ってしまおうと言いが悪いですけどね。

——何かあったんですか？

イリスが夜天の書に不正アクセスしたのが原因で、夜天の書に蒐集された人たちの記憶の残滓が形を得てしまったんです。中にはかなり状態の良い残滓もあって、フェイトは懐かしい人と会えたりもした

みたいですけど……でも大半は記憶も意識も不完全で、危険性が高いことから鎮圧して回ることになったんです。

とはいえ、大きな事件の後で負傷している人も多かったですから、なおさら人手不足。というわけで、動ける私たちも協力することになったんです。一応「闇の欠片事件」と呼ばれるものですね。

——あ、それなんか聞いたことがあるかも……でも、そういうことなら気兼ねなくカルデアに協力を求めればよかったんじゃない……。

いえ、それが、その……

——？　？　？

カルデアの方も色々立て込んでまして……

——サブフェスが近いから……じゃないですよ。

………立香が言ってたそうです、「騒動は終わってからの本番です」って。初めはみんな、「何言ってるの？」という反応だったようなんですが……。

——…なんとなくわかりました。あれですよ、騒動に便乗してやらかした人がいるんですよ。

はい。あの時は、イリスが用意した工廠をバベツジと始皇帝、あとメカエリたちが占拠したそうで……そのまま怪しげな機械兵団が量産される寸前だったみたいです。

——で、立香さんたちはその後始末と事態の收拾でてんやわんや、と。相変わらずですね。

あ、今も似たようなことやってるんですね。

——騒動を起こす人、それに乗っかる人、裏で画策する人……色々いますから。いつだったか、「ハロウィン」が近づいた頃に立香さんが錯乱しまして……それを見かねた始皇帝さんが、チェイテピラミッド姫路……なんでしたっけ？　とにかく、その上に咸陽……というか『聖軀』を落としてペシヤンコにしちやっただんです。

お、おおう……。

——本人としては多分「憂いの元は断ってやったぞ、喜ぶがいい」って感じだったんでしょうが……

エリザベートが納得するとは思えませんね。

——はい。実際、立香さんに「助けて子ジカ〜！」って泣きついて、そのまま始皇帝さんをお城…の跡地から退去させようとしたんですが、そこでも色々あったみたいです。

いつもいつも、苦勞してますね。

——善意でやってくれたことが結果的に……というのがまた。まあ、普段良識派な人も、偶にはつちやけますしね。今更と言えば今更なんですけど……でも、それじゃあ立香さんたち抜きでその事件を？はい。あ、でも、後々聞いた話では、プレシアがこっそり動いていたらしいですよ。

——プレシアさんが？

なんでも他の欠片そっちのけで、自分の欠片を率先して消して回っていたとか。私たちも、プレシアの欠片とは結局一度も遭遇しませんでしたから。もちろん、プレシア自身にも会いませんでしたよ。

——よくそこまで徹底できましたね。

——どうやら、シオンに協力を仰いでいたようで……。

——あく、なるほど。シオンさんの分割思考って、もうほとんど未来予知レベルですもんね。

——本人が言うには「予知」ではなく、「演算」「計測」の結果らしいですけど。

——それはやっぱり、フェイトさんに会わせないために？

——そうですね。でも、途中から手段が目的になってたらしいですけど。

——？？？

——フェイトに会わせないために欠片を消していたのが、いつの間にか自分の欠片を消すのが目的になってたみたいで。

——なんでも「わかる、今ならエミヤの気持ちがよくわかる！」「自分との対決とか、ホント碌なもんじゃないわ!」「何やってんだ、いつか^未の私^未——!!!」「消えろ！この黒歴史!!」と叫びながら大暴れしていたとか。

——よ、良く管理局に見つかりませんでしたね。

——そのあたり、割と謎なんですよね……。シオンがうまく誘導してい

たのか、あるいはハッキングでもしてたんでしようか？ それとも、誰かサーヴアントが協力していたのかもしれないね。

まあ、こうやって話しているとシリアスに聞こえませんが、本人は真剣だったと思いますよ。後々、シオンが当時の記録を見せてくれたんですが、あの時のプレシアはこの世の終わりみたいな顔をしてましたから。

「いつまで目を逸らしているつもり。本当は……フェイトを憎んでないでいなかつたくせに」

「許せなかつたのでしよう、アリシアを残して幸せになつてしまうことが」

「だから、フェイトを拒絶した。あの子がいれば、あの子を愛せば、私は幸せになれる。幸せになつてしまふ。たつた一人、アリシアを置き去りにして」

「だからアンタはフェイトを憎んだ。そうしてないと、あの子を愛してしまふから……」

「ふざけんな！ アンタの弱さに、娘まきこんでんじやないわよ!!」
泣きながら、そう叫んでいましたよ。

——そう、だったんですね。でもそれじゃ、フェイトさんは……先ほど言った通り、プレシアとは全く会わなかつたようです。頑張った甲斐はあつた、というべきなのでしょう。プレシアにとつては、フェイトとだけは鉢合わせないように細心の注意を払っていたでしょうし。

代わりに、というわけではありませんがリニスには会つたようです。あと、アリシアとも。

——あ、そっか。蒐集された人の記憶を再現しているなら、そういうこともありますよね。

面白い……というのとフェイトに悪いですけど、でも微笑ましかつたですよ。フェイトがリニスやアリシアを紹介するというよりも、二人が「これからもフェイトをよろしくお願いします」って挨拶して回つてる感じです。

フェイト、照れるやら恥ずかしいやらで……もう可愛いつたらな

かったです。

——むむむ、ちよつと見てみたいかも……。

確かあの時の記録があったはずなので、今度ちよつと見せてあげますね。フェイトには秘密ですよ？

——は〜い♪

でもまあ、良いことばかりでもなかったんですよ。特に、
“はかなりきつかったですし……”

——あれ？

イレギュラーと言いましょうか……蒐集されたわけではないんですが、夜天の書とわずかながら接触した人がいたんです。その人の記憶まで再現されてしまつて……

——あのお……それつてまさか……

立香です。

——げっ!? な、なにが出てきたんですか？

天を衝くほどに巨大な、不気味な肉塊の柱。そこに幾筋もの太い亀裂が走り、無数の赤黒い目玉が飛び出していました。正直、
“悍ましい”という言葉では到底足りません。

——魔神柱……。

まあ、完全には再現されていないのが救いではあったんですが、それでもかなり苦戦しました。早めにカルデアに伝えていれば情報ももらうこともできたでしょうし、そうすればもう少し楽だったと思うんですが……あの当時は、関連があるなんて夢にも思いませんでしたし。

——まあ、それはそうですね。

でも、完全な状態からは程遠かったので、主要メンバーが2・3人いれば何とか倒せるくらいだったんですけど……問題は数でした。なにしろ、72本もいて……

——き、きついですね。

だけど、復活してこないだけまだましなんですよね。立香の時は、それこそ倒したそばから“新生”していたわけですし。

——その上、本来の性能はもつと上……割と悪夢ですね。

本当に……私たちですらしばらく夢に出てきつかったですから。

——というか、いくら弱体化していても、知らずに戦うには危なすぎますよね。

あ、いえ……そこは、フェイトがいたので。

——ああ、そういえば立香さんと夢で繋がってるんです。見た瞬間、フェイトが「魔神、柱？」とつぶやいていたのが印象的でした。良くわからないなりに彼女が色々教えてくれたからこそ、誰も大きなけがをすることなく乗り切れたんだと思います。

——「騒動は終わってからが本番」が割とシャレになってませんね。

本当に……。

* * * * *

結界により無人となった夜の市街地を疾走する異形の騎影。その背に乗った立香は、眼前の光景に呆れとも驚きともつかないため息を漏らす。

時間の関係もあってロビン達でも見つけきれなかった工場にて生み出された、量産型イリスがその進路を阻まんと押し寄せているのだ。その物量は最早「大群」の域にとどまらない。道幅のほぼすべてを埋め尽くす同じ顔が、さらに十数メートル先まで続いている。加えて、立ち並ぶ建物の窓という窓に砲身が並び、さらには屋上まで。

これでもかと言わんばかりの「包囲殲滅」の意志。

とてもではないが、単騎で突破するには重厚過ぎる布陣だ。だが、数名の仲間と共に異形の躯体に揺られる立香の面おもてに焦燥の色はない。むしろ、どこか気安い様子で少々高い位置にある厳つい顔に語り掛ける。

「結構な数だけど、いける？」

「支障ない」

「じゃ、よろしく」

「承知」

言葉少ななやり取り。しかしそこには、互いに対する確かな信頼が見て取れた。

だが、それに対し異を唱える者が一人。

「ちよつとこの後輩！ 何項羽様に偉そうな口きいてんのよ!!」

「えく、でもぐつちゃん、俺一応マスターなわけで……」

「ぐつちゃん言うな！」

「じゃ、ひなパイセン」

「そういう問題じゃない!! というか、気安いにもほどがあんのよ、アンタ！ 私は精霊、お前は人間。決して相容れない存在だって自覚ないわけ?!」

「お、落ち着いてくださいヒナコさん……」

なにやら憤慨する眼鏡の女性とそれを宥めようとするマシユ。ただし、怒られている当の立香自身は、反省するどころか楽しそうですらあるが。

「だいたいアンタは、どうしてこう……私がその気になれば、お前なんて一秒もかけずに殺せるのよ。恐ろしいとは思わないの?」

「だって、その理屈で言ったら俺みんなのこと怖がらないといけないじゃん。俺を殺す程度のこと、誰でも秒もかけずにできるんだし」

「それは！ まあ、そうだけど……」

「そんなことで一々怖がつてたらもたないよ」

「私たちがやらないと信じていると? 随分と甘いことを……」

「……まあ、やりそうなのになんか心当たりはあるけど……」

実際、どこぞの王様や鬼あたりなら、割と唐突に殺しにかかってきても不思議じゃない。

立香としてそのことは当然承知している。故に、無条件に自らの身の安全を妄信しているわけではない。彼が仲間たちを恐れないのは、殺しにかかってくる者がいるように、彼を守ろうとする者がいることを知っているからだ。

「でも、なんだかんだ言っても……守ってくれるでしょ?」

「っ！ほんとに、お前は……!!」

「ふっ……主導者よ、あまり妻をいじめてやるな。これなりに、汝の身

を案じているのだ」

「こ、項羽様!?!」

「うん、知ってる。なんだかんだ言って優しいよね」

「余計なこと言うな後輩!!」

「そして、無論私もまた妻同様汝を守護する者だ。その道を開くため、我が機能のすべてを發揮しよう。まずは、この騒乱を速やかに収拾する」

宣言するや否や、人馬型の躯体が更なる加速を見せ何の銜いもなく敵陣目掛けて突っ込んでいく。

普通に考えるなら無謀もいいところ。四方八方から包囲され、逃げ場を失い、袋叩きにあって押し潰されるのが目に見えている。しかし、立香は項羽の呐喊を止めようとはしない。むしろ、彼が心置きなく突き進めるように、全身全霊でその躯体にしがみつく。

「マシユ・キリエライト、周囲からの攻撃は汝が対処せよ。主導者を守り通せ」

「はい！ シールド・エフェクト発揮します！」

「項羽様はただ前のみを……邪魔はさせません」

「……いざ、滅ぶべくして滅ぶべし！」

全身から閃光が放たれ、敵陣に綻びを産む。無論、敵もただ座して待つわけはなく、次々に放火が放たれるが、三対の腕に握られた剣を縦横無尽に振るい全て叩き落していく。

その間にも、周囲の建物に陣取った者たちが凶弾を続けざまに撃ち放つ。しかし、それらはすべて立香の前に立ったマシユの盾によって防がれ、項羽の足を狙ったものも見えない障壁によって阻まれる。さらに、二振りの剣が空を舞い、不逞の輩を引き裂いていく。

項羽の疾走はさらに速度を上げ、まるで一本の矢の様に敵本隊へ深々と突き刺さった。

「力を以て山を抜き、気迫を以て世を覆う！ 我が武辺、此処に示さん

！ セリヤア——ツツ！」

その瞬間、項羽の周辺から敵が消滅した。

否、消えたのではなく影すら追えぬ速度で最前列の量産型イリスが

粉碎されたのだ。

項羽はそのまま勢いを緩めることなく駆け、敵陣の奥深くへと分け入っていく。

時に三対の刃で、あるいは馬蹄で、そして閃光で容赦なく蹂躪していく様は、いつそ非現実的でした。

立香たちに同伴し、その光景を上空から見ていた魔導士たちは後にこう語る。

「あれはもう、削るとか貫くとかじゃなくて……『抉る』っていう表現が正しかった」

その言葉の正しさを証明するように、敵陣中央に引かれる一本の線。それはさながら、古の聖人による奇跡を思わせる。

速度はますます加速し、項羽の背から振り落とされたいよう懸命にしがみつくと立香の視界には、もはや何のパーツだったか判然としない破片が無数に飛び交っていた。ただその向こうで、上空の魔導士たちに狙いを定める量産型イリスがいることに気付く。

声を出す余裕はない。歯を食いしばって何とかしがみついている状況だ。ここで口を開け、わずかでも力が緩めばそれこそ振り落とされかねない。足手まといなのは承知しているが、それでもこれ以上足を引く張るわけにはいかない。

故に、立香は一瞬目があつた虞美人に向けて、有りつ丈の意志を込めた視線を送る。

彼女はそれを……割と嫌そうに受け止めた。

「つたく、面倒ね。地獄を見せることになるけど、いいわけ？」

「はいはい、分かったわよ。マシユ、一応連中に警告してやりなさい。あの距離だと、巻き込むわよ」

虞美人の意図を読み取り、急ぎ項羽の後を追う魔導士たちに退避を進言するマシユ。初めは戸惑った様子の子の魔導士たちだが、マシユの真剣な訴えを受け、多少緩慢な挙動ながらも離れていく。

「ヒナコさん、どうぞー！」

「……そんな身体でも、お前たちにはしつかりと終わりがあるのね。
——羨ましいこと。」

これは、滅びの定めにすら見放された、我が永遠の慟哭。空よ！
雲よ！ 憐みの涙で命を呪え!!」

その瞬間、虞美人の身体が「爆ぜた」。

粉々どころか、赤い霧と化して消えていくその刹那——悍ましい「ナニカ」が空に向かって放たれる。——悍ま

それは赤黒い雲を産み、間もなく呪詛の雨となって降り注いだ。

それは、自らの肉体を破棄する事で限界を超えた魔力を暴走、産み出された呪詛によって引き起こされた異常気象。項羽が敵陣を突破し呪いの驟雨が終わった後には、夥しい数の鋼の軀が市街地に散乱していた。

最早、動く影は一つたりともありはしない。

ようやく進路上の安全が確認され、現場へと戻ってきた魔導士たちは思わず息をのむ。

千ではきかない数の敵が、一人残らず殲滅されている光景はなるほどある種の「地獄」だろう。

ましてやその周囲には、未だ降り注いだ呪詛の残滓がこびりついている。直接地面に立たなくても、上空を通り過ぎるだけでその悍ましさに吐き気を催してしまうのを、誰が責められるだろう。

「これが、英霊」

「本気……いや、本物のサーヴァントの力……」

彼らとて、カルデアが浮上する前の暴走体との戦いには参加していた。だからこそ、サーヴァントという存在の強力は理解しているつもりだったが……認識を改める。どれほど力があるうとも、確かな意志のもとに振るわれるそれとは比べるべくもないのだと。

所詮、確たる意思もなく、ただ本能的に敵を排除するために動く存在など獣にも劣る。なにより、彼らは真名により発動するタイプの宝具を使用することができなかった。切り札を封じられた状態だったことを、それがどれほど彼らの戦力を削いでいたかを、嫌でも実感させられる。

「でも彼女、思いっきり身体粉々になってたけど、大丈夫なのか？」
「あ、今マシユさんから通信が来た。彼女は人間じゃなくて……えっと、精霊種とやららしい。砕けた身体も、もう再構成してるって。ほら」
「んな無茶苦茶な……」

通信を介して送られてきた映像には、確かにケロツとした顔で復活している虞美人の姿。

一度消滅して復活したというのであれば、守護騎士たちにも過去に似たようなことはあったが……あまりにもあっさりとそれをしていくことに驚きを隠せない。むしろ、宝具を使う度にこれを繰り返しているのだから、確かに「無茶苦茶」と言いたくもなるだろう。

「そーいや、サーヴァントの話聞いてアルフが驚いてたっけなあ。

『あれ、マジだったのか』って」

「何のことだ？」

「なんでも昔、『立っているなら神も悪魔も、鬼も王も使う主義』とか言ってたらしい」

「ああ、全部いるんだっけか……改めて聞くと、すごい話だよな。にしても……」

「どうした？」

「この人、微妙に縮んでないか？」

「……どこ見てんだよ。後でどやされるぞ。というか、そんなわけあるか。ほら、もういくぞ」

「お、おう」

虞美人は宝具を発動する度に改めて肉体を再構成するわけだが、人は真面目に再構成する気があまりないらしく、その都度身長や体重などが若干変動することを彼らはまだ知らない。

ついでに、この点に言及すると「別にこんなのテキトーでいいのよ、テキトーで。一々姿形に拘るとか、これだから人間は……」と鬱陶しがるのであった。

とりあえず、一番規模の大きい集団を殲滅したことで、敵も組織だった動きが出来なくなっている。機能的には可能なだろうが、それをするための“数”の確保が難しくなっているからだ。

元々、ロビン達の働きで全ての工廠の破壊とまではいかなくとも、ある程度は潰せたのが効いている。今も、進撃する項羽を足止めしようとして攻撃してきているが、数が少なく散発的なものになっている。当然、この程度で彼の足を止めることなどできるはずもない。

「マシユ、状況はどう?」

「概ね、想定通りに進んでいます。ですよね、項羽さん」

「演算結果との誤差0.3%未満、問題なく推移している」

そもそも、項羽の力の本質は未来予知染みた行動と状況の先読み、超高速演算能力にある。

そんな彼が保証しているのだから、今のところ問題はないのだろう。とはいえ……

「……なによ、項羽様の仰ることに文句でもあるわけ」

「そういうわけじゃないんだけど……みんなの心情的にはどうかなって。ほら、うちつていろいろ濃いし」

「なるほど、確かに彼ら^{英雄たち}の行動は、我が演算を以てしても正確なる未来の予見は難しい。ましてやそれが、複雑かつ難解な“人の心”に関わるとなればなおのこと。主導者の懸念も、当然のものと言えるだろう」

「むう……」

本当は文句を言いたいところだが、項羽自身が納得してしまっているので言えない……という様子だろうか。

「確認します。………とりあえず、現状大きな問題にはなっていません。強いて言えば、金時さんがヴィータさんを子ども扱いして怒らせているくらいでしょうか」

「ゴールデンだしねえ……まあ、それで喧嘩になるとも思えないし、問題はなかな」

少なくとも、金時が子ども相手にムキになるということは考えにくい。ヴィータはこういうと怒るだろうし、「わかったわかった」と子ども扱いする金時にさらに憤慨するのだろうか……それ以上にはなるまい。

「なのはさんとフェイトさんも、概ね良好なようです。さすがのサー

ヴァント鑑定眼です、先輩」

「まあ、上手くいつてるならいいけど……レオニダスは？ リンディさんたちに迷惑かけてない？」

ちよつと不安だったのは、超広域結界の要でもあるリンディとユーノの護衛に回したレオニダスの存在。良くできた人なのは確かなのだが、如何せんとにかく「暑苦しい」上に彼は生粋の「脳筋」だ。

そして、彼が守っているのはこれでもかと言わんばかりの「インテリ」型。一応「計算」のできる人でもあるレオニダスだが、あくまでも「脳筋」だけ計算もできる。あるいは「自称「頭脳派」の脳筋」なので、微妙にソリが合わないのではと心配しているのだ。ただし、マシユは立香の懸念にちよつと納得がいかないらしい。

「レオニダスさんが迷惑をかけるなんてありません」

「……問題ないならいいけど」

ちなみにその頃、防衛戦という得意分野を任されたこともありテンション高めなレオニダスに、「あらあら、よろしくお願いしますね」と余裕の対応をしていたリンディだったが、ユーノだけはちよつと、本当にちよつとだけその暑苦しさに腰が引けていたのだが……まあ、些細なことだろう。

彼の周りにはいないタイプだったのだから、無理もないと思う。

「つて、そういえばシグナムの方は？ 沖田がやたらとやる気だったから行かせたけど……」

「それが、その……固有の意志を持つ個体がいたようなのですが「？」

「口上の途中で斬りかかってそのまま……シグナムさんも『言わんとすることはわかるが、アレはさすがに……』と」

「あ、沖田その辺の空気読まないからなあ……」

大方、「斬り合いの最中に名乗るようなバカで助かった」とか考えて、早々に斬り捨てたのだろう。今頃、本人は意気揚々と「沖田さん大勝利ー！」しているのだろうが、シグナムに若干引かれてしまったのは無理もない話だ。

「主の命令を第一にする」 「やむを得ないとあらば不本意な方法

も辞さない”など、割と気質が似ている部分もあるためいけると思っただが、あくまでもシグナムは”武人”であるのに対し、沖田は”人斬り”。その辺の違いなのだろう。

まあ、それでも”若干引かれる”程度で済んだのだからまだマシだ。これがなのはたちだったりしたら、間違いなく”ドン引き”されていただろうから。

あと、拷問とかが利きそうにない相手なのも幸運だ。サラリと拷問を提案してくる上に、”石抱”が軽いジャブ扱いなので、結構怖いなのである。

「ギクシヤクしたりしてる？ それだったら、何か方法考えるけど……」

「いえ、それが……いつものように『こふっ!?』と」

「鉄板ネタですね、ありがとうございます」

「シグナムさんもさすがに驚いたらしく……」

そりゃいきなり人が目の前で吐血すれば、驚きもするだろうさ。

まあ、結果的にそのおかげで微妙な空気が壊れたらしいので、怪我の功名という奴だろう。

「となると、ユーリの方はディアーチェたちの結果待ちだから、あとは……」

「イリスさんの確保に向かったクロノさんは、どうやら空振りだったようです。今はキリエさんが……」

「上手くいってくれるといいんだけど……」

「……はい。すれ違いは、悲しいですから」

イリスとユーリもそうだが、特にイリスとキリエだ。

イリスとユーリに関しては、過去の誤解が解消されれば関係回復の可能性は大きく開ける。まあ、イリスはその時辛い現実と向き合うことになるのだろうか……これは、避けては通れないことだろう。

問題なのは、キリエとの関係。イリスがキリエを騙し利用していたのは事実だが、まったく友情を感じていなかったかという点、そんなことはなかったように思う。二人のやり取りやイリスの言葉の端々に、彼女の目的や意図に関する”ヒント”が見え隠れしていた。イリ

スはちやんと、キリエに機会を与えていたのだ。

過ちを犯す前に踏み止まる、イリスの本心に気付く、そのためのヒントを。

キリエを利用する為だけに行動するのなら、それは不要どころか害悪だ。それがわからないイリスではないだろう。

わざわざそんなことをしていたということとは、それは……

(気付いて踏み止まってほしかったのか、あるいは……)

止めて、ほしかったのだろうか。本当のところはイリスにしかわからない。もしかしたら、本人にもわからないかもしれない。カルナやアンデルセンでも引っ張ってくれば分かるだろうが、それは無粋に過ぎる。

だが、ある意味イリスと対峙したのがキリエなのは幸運というべきかもしれない。

辛い現実に向き合い、乗り越えイリスに向かってなおも手を伸ばそうとするその姿は……きつと、彼女の救いと力になってくれるだろうか。

「ふんっ、人間は面倒ね。そんなことしていいいで、さつさと捕まえるなり叩き潰すなりしてしまえばいいでしょうに」

「……まあ、合理的に考えるならそうなんだろうけどね」

虞美人の言うことにも一理ある。実際、話ならすべてが終わった後からでもできるのだ。

でもきつと、全てが終わった後に話すのと、今話すのでは、その意味合いが大きく違ってくる。

人間とは、そういう不合理な生き物なのだから。

まあ、もしもキリエの説得が上手くいかなかった時は、そうすることになるのだろうか……それならそれで何とでもなる。既に趨勢はある程度決しつつある、もしこれが覆ることがあるとすればそれは……。

「部外者の介入だけど、できればそれは……」

ないに越したことはない。特に、イリスにとっては今真実を知るの
は衝撃が大きすぎるだろう。

できればキリエと和解し、それからゆつくりと真実を知ってもらおう方が良い。

とはいえ、世の中というものは早々上手くはいかないもので……。

「先輩、動きがありました!」

「やつぱり、出てくるよね」

イリスとユーリ、この二人を管理局に確保されるのは「彼」にとって望ましくないことだろう。

ならば、そうなる前に動くのは予想の範疇。驚きはしない。しないが……やはりいい気分はしないものだ。

「アミタさんが接触したようですが……」

「確保できなかったんだね。あの人、戦闘能力自体はなさそうだったけど……」

「どうやら、イリスさんの能力を使って、戦闘可能な体で復活したようです」

「ああ、そう来たか……」

確かに、考えてみれば同然の帰結とも言えるだろう。一度目は生身の身体であったから殺されたのだ。ならば次があれば、早々殺されたりしない……戦闘可能な体を求めたとしても不思議はない。

「加えて、なのはさんたちに興味を持っているようです。魔導とエルトリア式フォーミュラの融合、彼が目指したものを手にしているのが理由かと」

そのあたりのやり取りについては、立香も通信越しに聞いている。

曰く「みんな、私の子どもにしてあげよう」とかなんとか……今更他人様の在り方について四の五の言うつもりのない立香だが、許容できないものはある。彼のいう「子ども」とは、要は「道具」ということだろう。自分が使った方が、より効果的・効率的だと、そう確信しているが故に。

その自信は事実だとしても……相手の意志を無視し、あるいは捻じ曲げ、利用するやり方を許す気はない。その先に、フェイトたちの笑顔はないのだから。

(もしそんなことになれば、フェイトはきつと初めて会った頃より

ずっと悲しい顔をすることになる。そんなこと、見過ごせるわけがない）

フェイトはきつと否定するだろうが、立香は何度もフェイトに救われてきた。

初めて会った頃はその「辛くても、苦しくても頑張ろうとする姿」に、再会してからは「ありふれた日常」を象徴する笑顔に。それが踏みじられ、曇ることなどあってはならないのだ。

あの子は誰よりも、幸せにならなければならない。幸せであってほしい。マシユ・キリエライトの存在が何にも勝る「支え」であるように、フェイト・テストアロツサこそが藤丸立香にとって何よりの「救い」なのだから。

「項羽、先回り…いける?」

「無論」

「ですが、主戦場が空では私たちだと……」

今のメンバーでは空中戦への対応は難しい。魔導士たちの速度は、サーヴァントにもそう引けを取らない。

目があるとすれば項羽の光線と虞美人の宝具だが、それだけだと少々心許ない。あるいは項羽の演算能力ならそれでも当てられるかもしれないし、虞美人の宝具なら敵を範囲内にとどめることができば何とかなるだろう。しかし、前者は不確定要素が多く、後者は味方まで巻き込む恐れがある。

できるなら、もう少し確実性の高い手段が欲しいところだが……。

「マスター、上手い作戦とは言いがたいが、少し聞いてもらえるかい?」
「どうして、あなたがここに……」

(やれやれ、誰のことが放っておけなかったのやら)

互いにやるべきことをやる代わりに馴れ合いはしないというドライな姿勢を貫く彼が、立香に対し能動的に協力を求めてくるというのは珍しい。聞いても答えてはくれないだろうが、ある程度予想はつく。

直接的な接点はないし、そもそも世界線どころか世界の枠組み自体が異なるが、それでもこちらとあちらの間にまったく繋がらないわ

けではない。そうであれば、こうして立香たちがこちら側に来ることもなかったのだから。

魔術師
キヤスタークラスをはじめとした知恵者たちの見解では、「」の手前まで遡れば繋がりはあるのではないかという。ならば、士郎とエミヤがそうである様に、「彼」もまたこちらの自分と無縁ではないのだろう。

だからこそ、何か感じるものがあつたのではないか。

そうして耳を傾ければ、その内容は彼らしくもない慎重さや綿密さとは無縁のもの。

だが、その「らしくなさ」が好ましい。

「いいね、やろう」

即決だった。

作戦はよく言えば単純明快、悪く言えばこの上なく杜撰だった。

復活した「フィル・マクスウエル」に苦戦するなのはたちに、ただ一言「地上付近に追い込め」と伝えただけ。

戦闘中に微に入り細を穿つ作戦など伝えられても困るだろうが、それでも不明瞭に過ぎる。

とはいえ、割と手詰まり感があつた中では貴重な光明だ。

故に、彼女たちはその指示通り多少の被弾は覚悟の上でマクスウエルを地上へと追いやつていく。無論、頭のいい彼が何らかの狙いがあることに気付かないはずがない。

狙いそのものはわからなくても、何かを狙っているのならそれにはまっつてやる理由はない。

「何を狙っているかは知らないが、無駄だよ。人間の体では無理な機動も、今の私ならば可能だ。大した火力だが、だからこそ当たらない。それはもう痛感しているはずなんだがね」

余裕を見せるマクスウエルに、なのはも臍を噛む。当たりさえすれば通し、落とす自信はある。

しかし、彼の言う通り「当たらない」。イリスと同様のフォーミュラやヴァリアントシステムに加え、フローリアン姉妹の「アクセラ

レーター”の強化・発展型とも言える “アクセラレーター・オルタ”の存在が大きい。生身の身体では耐えられない加速にも、今の彼なら耐えられる。加えて、フェイトたちのデバイスの改修をカルデアが担ったことで、管理局がその分のリソースをレイジングハートに注げるようになったことが、結果的に不利に働いていた。搭載したヴァリアントシステムはある程度安定域達したが、その分原理的に無茶な運用が利かなくなっている。不安定な状態であれば、あるいは限界以上の運用もできたかもしれないが……。

故に、たとえどれほど追い込んで、最後の最期で生身の人体では不可能な超高速で逃れられてしまう。

だが、そうだとしても……

「通す……必ず通して見せる！ レイジングハートが、アミタさんが、みんなが力を貸してくれてる！ だから！ 絶対に!!」

「やれやれ、なかなか思い通りにはいかないものだね。まあいい。まずは、教育から始めよう。アクセラレーター・オルタ!!」

「…アクセラレーター!」

マクスウエルの身体から光が溢れるとともに、なのはもコンマ数秒遅れてアクセラレーターを発動。

しかし、人体と躯体、原型と発展型の差から追いつくには到底足りない。

なのはにできることと言えば、立香たちからの要請通り彼を地上付近に縫い留めることくらいだ。

(戦技に関して、この人自身は素人の域を出ない。だけど、技術の差を性能が覆す。手は、なくもないけど……)

実際、技術的にはなのはから見てもマクスウエルのそれは非常に拙い。情報量の差から当初こそ翻弄されていたが、既に彼の戦いの癖や傾向は掴んでいる。所詮、彼は技術屋であって戦士ではないのだ。

だが、彼が生み出し、あるいは改良を加えた技術に技量の差をひっくり返されてしまっている。

また、なのはが彼の癖をつかんでいるように、マクスウエルもまた彼女の戦法を分析し対策していた。どういった場面で何を使い、どこ

で大技を使ってくるか。高い次元で技量が完成に近づきつつあるからこそ、読まれてしまう。その読みを利用して裏をかくということもできなくはないが、それは最後の手段。失敗すれば、それにすら対応されてしまう。

だからこそ、確実に当てられるチャンスを狙っているのだが、その隙が作れない。

しかしそれならば……

(ならそのチャンス、僕が作ろう)

(……っ！ 誰かいる?!)

背後にあらわれた気配に、反射的に振り向くマクスウェル。そこにいたのは、赤いフードを目深に被った顔の見えない誰か。だが、それは本来有り得ないこと。超高速領域で動く彼に追いつがることなど、本来なら人間にできることではない。

「流石に、動けば気付かれるか……だが、もう遅い」

「馬鹿な、どうやってこの速度に……」

「生身じゃないのはお互い様さ」

そう、マクスウェルが鋼の身体を持つように、彼もまたもはや人ならざる者。生前、生身の頃であれば耐えられなかったことでも、英霊となり霊基の身体となった今なら耐えられる。

今もそうだ。固有時制御タイムアルターによる数倍に加速された体内時間流。これにより、マクスウェルへの追隨を可能にさせている。

「だれだ、君は」

「誰でもいいさ、すぐ無関係になる。さあ、ついてこれるか——
時のある間に薔薇ローズを摘め」

振り向き対応しようとするより早く放たれる、ナイフによる無数の連撃。

多少の被弾を覚悟でガードしつつ、痛烈な蹴りが放たれ距離を生む。

「驚いたよ。まさか、私のセンサーをすり抜けるとは……だが、せっかくの奇襲も無駄に終わったようだ」

「そうだな。確かに、僕の仕事はもう終わりだ」

「なに？」

「あとは任せる、ファンタズム・パニッシュメント 神 秘 轢 断」

「っ!? なんだ、これは……なにをした!」

ガクリと途端に身体から力が抜ける。否、躯体が誤作動を起こしたかのようにマヒしているのだ。

ファンタズム・パニッシュメント 神 秘 轢 断、それは彼の有する第二宝具。自身の起源である「切断」「結合」の二重属性の力が具現・カタチとなったナイフ。その真価は物理的な切断力ではなく、魔術回路ないし魔術刻印、或いはそれに似たモノを体内に有する相手に対して致命的なダメージを与えること。

マクスウエルの場合、鋼の躯体を得たことが仇となった。

彼の身体は一種の“精密機械”と言っている。故に、彼の体内には無数の回路が張り巡らされている。それが、ナイフの効果により出鱈目につなぎ直されてしまったのだ。これでは、思うように動けなくて当然だろう。むしろ、ショートを起こしていないことが奇跡とすら言える。

そしてその隙を、待ち構えていた者がいる。

「全力全開! エクシード…ブレイカ——!!!」

「卑怯と思うか? なら、それがお前の敗因だ」

その言葉を最後に、マクスウエルの視界が桜色の閃光で埋め尽くされた。

そうして、事件の真の黒幕ともいうべき『ファイル・マクスウエル』は確保された。

今はなのはを追いかけてきたフェイトと立香たち一行も加えて、護送班の到着を待っている。

「してやられたよ。まさか、彼女を囮に使うとは……なかなか悪辣じゃないか」

「負け惜しみですか?」

「事実を指摘したつもりだよ」

マクスウエルの言葉に、立香は黙って肩をすくめる。何しろ、否定

する言葉を持ち合わせていない。

実際、懸命に戦う年端もいかない少女を囚にするなど、普通なら思いもしないだろう。だからこそ、マクスウエルもまたその可能性を考えていなかった。故に、誰よりも裏をかくことに長けた彼はそこをついたのだろうか。

許可を出したのは立香だが、改めてその悪辣さには苦笑を禁じ得ない。立香でなければ、苦笑では済まないだろうが。

「むう……」

正直、親友を囚にされたフェイトとしては思うところがないわけではない。しかし、結果的にマクスウエルの確保につながったし、なのも「気にしていない」と言っているのだから、あえて口にしようとはしない。

「ファイル・マクスウエル所長。あなたを逮捕します」

「逮捕、ねえ。では、取引といこう」

フェイトの宣言に怪しくも余裕の笑みを浮かべるマクスウエル。そしてそれは、決してハツタリなどではなかった。

なんでも、地球の軌道上を回る衛星の一つを砲撃型の機動外殻にし、首都に向けて狙いを定めているというのだ。

取引というのは、今大気圏外に向けて射出されたロケットを見逃すこと。それさえすれば、狙いを解除するというのだ。だが、そのロケットには彼の記憶のバックアップが積まれており、これを見逃すのは彼を逃がすのと同義でもある。

かといって、衛星砲による攻撃など見過ごせるはずが……

「どうぞ」

「立香っ!?!」

「……君は、本気で言っているのかい？ 如何に凡庸とはいえ、攻撃が放たれればどうなるか、それがわからないほど愚昧なのかな？」

「ほらほら、御託はいいからどうぞ」

「ああ、もしや結果で遠隔操作はできないと踏んでいるのかな？ だとすれば、考えが浅い」

微妙にかみ合わない会話を続ける二人だが、フェイトも立香に挑発

しないように言おうとするが、言葉にならない。正しくは、不思議と「説得しよう」と思えないのだ。

だが、結界で遠隔操作の類が阻害されているのも事実。そのこともあって、落ち着きを取り戻したフェイトだが……その時、遠い夜空の向こうから一条の閃光が放たれた。

「君の望み通りの結果だ。どうだね？」

「どうもこうも……予想の範疇ですし。ダ・ヴィンチちゃん、お願い」「よろしい、そのオーダーに応えましょう！」

通信越しに返ってくる自信にあふれた声。

と同時に、地上から一つの星が打ち上げられ、閃光と星が空でぶつかり合い……消滅した。

「ばかな……」

「何を驚いているのかな？ 予想しているのなら、防ぐなり落とすなり出来て当然だろう。なにより……我が叡智、我が万能は、あらゆる叡智を凌駕する。故にこそこの私、ウォモ・ウニヴェルサーレ万能の人なのさ。私を超えなければ、私以上の万能を示したまえ。君はちよつと足りなかったね♪」

「それで、もう次はありませんか。うちの頭脳犯の読みだと、ここからあと20通りの展開を予想してるんですが」

彼らによれば、先の砲撃も遠隔操作ではなく、あらかじめ仕込んでいた時限式だろうとの見方が有力だが……そこまで教えてやることはあるまい。

「……予想、していたというのか」

「当然でしょう。少なくとも、自分たちにできる範囲のことなら対策くらいありますよ」

「……」

「どうやら、ここまでみたいですね。あなたは研究者、技術屋としては超一流なんでしょうが、策謀家としては『それなり』以上ではないみたいだ」

少なくとも、カルデアの策謀家・策略家たちに比べればかわいいものだ。

彼は優れた研究者あるいは技術屋らしく、「極めて合理的」な人物であるからこそ、合理的に策を弄すること。しか「できないのだから」。

合理的な思考というのは、無駄や不確定要素を排しているからこそかえって読みやすい面がある。まあ、読み切るには常識や固定観念といったものを削ぎ落とさなければならぬので、例えば立香の様に常識をはじめその他諸々が一度ぶっ壊されていたり、そもそも「常識なんか知ったこっちゃやねえや！」な連中でもない限り、言うほど容易なことではない。常識や良識を正しく備えた人物であればあるほど、それらに縛られてしまうからだ。

ちなみに、犯罪界のナポレオン曰く「意図的に遊不確定要素びを組み込めるようになって、ようやく超一流の域に入れるのだよ」とのこと。なんでも、遊びを入れることでどこまでが計画通りなのか読めなくすることができるとか。

当然、不確定要素を入れれば計画通りにいなくなる可能性が高まるわけだが……

「計画通りに行くのはもちろん楽しい。だが、計画通りいかないものたちのしくぞく」

らしい。というか、不確定要素がどう転ぼうと計画に寄与するくらいでない、超一流とは呼べないわけだ。

とはいえ、その遊びの入れ方にも個々の傾向や好みが現れる。そういった“思考の癖”を見抜かれれば、そんな“遊び”も意味をなさないわけだが……マクスウェル所長にそこまで教えてやる義理もないだろう。

「私が君に劣ると……？」

「まさか、俺とあなたじゃ比べるべくもない。俺なんかより、あなたははるかに上ですよ」

「では……！」

「そう、あなたは確かに卓越しているのだと思う。でも、一人の人間に考えられること、できることの範囲は限られる。それがどんな天才だったとしても、ね」

「……」

「俺にできないことができる仲間がいる。俺には考え付かないことに気付く人たちがいる。だから、あなたは負けたんだ」

「君は、一足す一が十にも百にもなると考える口かな？」

まるで揶揄するように語るが、微妙に覇気に欠けるのは敗北を受け入れたからか。

「違いますよ。あなたはそもそも勘違いをしている。同じ人間が複数いるのなら足し算にしかならないだろうけど、俺たちはそれぞれ別の人間、異なる個性だ。短所を補い合い、長所を引き立てるそれは足し算じゃなく、掛け算だよ」

それこそが、立香にとつての真実だ。自分にはない考えに刺激を受け、さらに発想は飛躍する。できないことを埋め合うことで、戦略の幅が広がる。

力を合わせ、知恵を出し合うというのは、単純な足し算の問題ではないのだ。

「とりあえず、あの物騒なのをどうにかしないと」

「なのはさんが向かっているようですが、それでもまだ時間はかかるでしょう」

「鉄砲玉じゃないんだから……もうちょつと落ち着いた方が良くない、あの子？」

正直、いつか我が身を顧みず、取り返しをつかないことになりそうで怖い。

誰か……そう、彼女が決断する際に一步踏み止まらせる、そんな重石になってくれる人が必要なのではないかと思うくらいには。

フェイトも似たような不安を抱えているのか、しきりに首を振って同意を示している。

いつそ、シエイクスピアかアンデルセンあたりと引き合わせて、心を一度折るのも手では……なんて物騒なことを考えつつ……。

「ケイローン、聞こえる？」

「ええ、感度良好、という奴ですね」

通信越しに、穏やかな声音が返ってくる。

流星に、大気圏外まで攻撃を届かせられるサーヴァントはそういない。だが、彼ならば……

「場所わかる？」

「先ほどの一射で特定しています」

「いける？」

「無論、いつでも」

「さっすが、大賢者」

「当然でしょう。空に浮かぶ射手座。それが私であるならば、私は常に矢を番えている。」

つまり宝具はもう発動済みです。真名を発動させる必要すらない。

何故なら、矢は既に放たれているからです」

静かな自信を見せるケイローンだが、それを大言壮語と笑う者はいない。

彼の言葉はすべて事実。そして、ケイローンの宝具は文字通りの意味での「星の一射」。

衛星軌道が何のその。彼の矢は、その遙か先から放たれるのだから。

「じゃ、任せた！」

「禍津の蠍よ、肅清は既に訪れた！ 星と共に散るが……おや？」

時を同じくして、首都東京の（推定）十数万キロメートル上空……というかも宇宙。

何も無いはずの宙域で突如、空間が波紋状の揺らぎを見せたかと思うと、細身の人影が姿を現した。

「まったく、この私を除け者にしようなんていい度胸してんじやないの」

現れたのは、身の丈の倍もある黄金の弓を携えた女性。

彼女は若干の不機嫌さと、それ以上の高揚で目を輝かせつつ眼下に浮かぶ青い星を睥睨する。

「最近ちよくつと私への敬意とかが蔑ろにされてる気もするし、ここらで優雅に華麗に大胆に……女神の威厳つてものを見せてあげないとね!!」

赤い瞳が金色に染まり、その掌中に金星の概念をつかみ取った。手にした概念惑星を巨大な弓、マアンナの弾倉に詰める。そして、大きく弓を引き絞り……

「とっておき、喰らいなさい！ 大いなる天から、大いなる地に向けて！ 打ち砕け！ 山脈震撼す明星の薪!!」
アンガルト・キガルシユ

概念惑星の一撃が放たれる。それは宙を貫き、衛星軌道上に存在した射手を飲み込んだ……までは良いのだが。

最初に気付いたのがケイローンだった。

「おや？ マスター、アレを」

「へ？ なに、あのめつちや見覚えのある…流星？」

「進路上で、なにかが瞬きましたね」

「で、そのまま……海に？」

「先輩、まさかとは思いますがあれは……」

「え、嘘？ 俺の見間違いでしょ？ そうだと言ってマシユ!!」

「現実を受け止めてください、マスター。間違いなく、女神イシユタルの山脈震撼す明星の薪です」
アンガルト・キガルシユ

冷静に現実を突きつける大賢者。間もなく金色の光が東京湾上に突き刺さり、巨大な光の柱が屹立する。

だが、問題はここからだ。ランクにして「A++」にもなる宝具の一撃。それも、概念惑星などというトンデモ級の代物。そんなものが海に突き刺さればどうなるか……子どもでも分かることだ。

「り、立香？ あれって津波なんじゃ……」

産み出されたのは、あまりにも巨大な水の壁。それが恐るべき速度で湾岸部へと迫ってきている。

否、このままでは被害は湾岸部だけにとどまらない。それこそ、首都全体が飲み込まれてしまう恐れすらある。

そんなことになれば、それこそ衛星砲の一撃などとは比べ物にならない被害が生じるだろう。

そしてその時、カルデア関係者一同の心の声の一つになった。

『や、やりやがったな、あの駄女神——つ!!!』

まだ管理局との関わりが浅いということもあって、喚ぶメンバーに

はかなり配慮した。戦力的不安はあったが、折角殊更厄介な連中を呼ばないようにしたというのに……。

それもこれも、こういうことになるのが目に見えていたからだっただけだ。

(いや、喚ばなくても来ることを想定していなかった俺の責任か)

結果から言えば、東京が津波に吞まれることはなかった。氷結系魔法を有するクロノとはやてを中心とした管理局一同はもちろん、立香も動員できる限りのサーヴァントを召喚。

管理局とカルデア、マッシュを中心に双方の総力を以て津波に対処し……無事事なきを得た。有りつ丈の令呪を使用した甲斐はあっただろう。フエイト丸見え事件あの時、嘘について令呪を無駄打ちしなかったのは、結果的に正しかったのだ。

で、当然「大戦犯」とでもいうべきイシユタルには、罰が与えられた。

普段はあまり起こってしまったことへの言及はしない立香だが、流石にこれを見過ごすわけにはいかない。手始めに、某王様の宝物庫から借りてきた「私はダメな女神です」と大書された粘土板を首から下げての市中引き回しの刑と相成った。

「うう………酷いわ……あんまりよ。私はただ、ちよつと女神の威厳を見せようとしただけで、あとはちゃんと事件解決に協力しようとしたのに………こんな話に誰がした……あ、私か……私だったわ……ふ、ふふふ……笑いなさい、笑うがいいわ……」

「ね、ねえ立香。悪気はなかったんだし……許してあげてもいいんじゃないかな?」

「甘やかしてはいけません」

「……まあ、毎度のことですから」

(い、いつもなんだ……)

それは、さすがにちよつと弁護できない。

とはいえ、これにて事件解決……とはいかないのだから、頭の痛い話である。

とまあ、それはそれとして……

「オーホホホホホホホホ！ 無様、実に無様ですわねイシユタル！

あまりにも滑稽な姿に私^{わたくし}、腹筋がねじ切れそうですわ！ オ——

—— ホツホツホツホツホツホツホツホツ！！ ゲホツ、ゲホゲホ……まっ

たく、実にあなたにお似合いでしてよ！」

「黙れこの金ドリル!!」

勃発した女神たちのステゴロ……いったいどうしたものか。

アリサ・バニングスと月村すずかの場合

クヌクヌ！ 母娘揃ってほんとによく伸びるほっぺだこと！ この似た者母娘おやこ！

——（うくん、よく似てることは同意するけど、体質は関係ないんじゃないかなあ……血縁ないわけだし）

だいたいね、私が遅いんじゃないやなくてなのはたちが早いだけなのよ！ 私まだ23よ。こつち地球じゃまだ結婚してない人の方が多数派だつての！ それを、人を嫁き遅れみたいに言ってくれちゃって……クヌクヌクヌクヌ!! そのモチモチほっぺ、伸びきるまで伸ばしてやるわ！

——まあまあ、アリサちゃん……ヴィヴィオもそういうつもりじゃなかったと思うよ？ いや、流石に「アリサさんは結婚しないんですか？」はストレート過ぎると思うけど。

……すずかは余裕よね。プロポーズはまだと言え、実質秒読み段階なわけだし？ アイツが大学出るまで院生として一緒にキャンパスライフを満喫できるんだから、それも当然なんでしょうけど。

にしても、『瓢箪から駒』というか『嘘から出た実』というか……まさか、本当に自分好みに育てて収穫するとは思わなかったわ。

——そ、そういうつもりじゃなかったんだけど……な、なんでかなあ？ ア、アハハハ……。あ！ でも、別に志貴君と一緒にいたくて大学院に行ったわけじゃないんだよ！ そつちは本当に偶々で、まだ勉強したいこともあったから……。

ふくん……まあ、そういうことしておくわ。

——う……。

しっかし、傍から見ている分には健気に頑張る忠犬って感じで微笑ましかつたけど……どうしてあんなに二の足踏んでたのよ。見ている側としては、なのはとは違った意味でもどかしいったらなかったわ。

——それは、その……やっぱり、弟みたいに思ってたから。

……気持ちはわかるけどね。この件に関しては、私が昔余計なこと

を言ったせいもあるから、あんまり蒸し返しはしないけど……はぐらかされてはしよげてるのは、なかなか哀れみを誘ったわよ。

——うう、反省してます。

だけどホント、頑張ってたもんねアイツ。それが報われたのは、姉貴分……とは言わないけど、親戚のお姉ちゃん的立場としては、嬉しい限りよ。

なにしろ、あの恭也さんのしごきに耐えるだけじゃなくて、たった数年であそこまで強くなっちゃうんだから。ホントにびっくりよね。

確か、条件次第では恭也さんにも勝てる可能性があるんだっけ？

——実際に確かめたわけじゃないみたいだけど、そう言ってた。志貴君の居場所が割れてなくて、なおかつ遮蔽物とかの多い限定空間なら……らしいよ。でも、手の内は知られてるから相当厳しいみたい。

そういうえば、弟子とはいっても、別に御神流使うわけじゃないのよね。

——うん。どちらかというところ、そういう意味で言えば「教え子」の方が妥当かな。志貴君が身体で覚えてた技術を研ぎ澄まして、より巧い使い方を教えたって感じだし。

結果、不意打ち闇討ち上等の「アサシン暗殺者スタイル」の出来上がり、と。

すずかを守るようになりたかったアイツからすると不服かもしれないけど、こればかりは向き不向きがあるもんね。

——でも、気配を消したり、気付かれずに近づいたりするのはほんとに巧いんだって。土郎さんや美沙斗さんは「天性のものだろう」って言うってたし、美由紀さんも「絶対後手に回りたくない」ってぼやいてたから。

御神の剣士に太鼓判押されるとは……ほんとに暗殺者としては超一流レベルなんじゃないの、アイツ。

——目の前にいたはずなのに、見失っちゃうんだよね。恭也さんは、「正面から暗殺」できるレベルを目指してるらしいけど。

いや、思いつきり矛盾してるんだけど……そのうち、カルデアのア

サシンレベルに到達しちゃうんじゃないの？

——そうはならないと思うよ。スイッチが入ると確かに少し怖いけど、でも本当は凄く優しい子だから。死に近いところにいるからこそ、命の大切さをよく知っている。

ま、大分健康体になったとはいえ、今でも時々貧血になったりするもんね。病弱ってわけじゃないんだろうけど……。

——うん、運動には基本的に支障はないんだ。ただ、古傷のせいで時々……ね。

治らないの？

——今の地球の医療技術だと、改善はしても完治は難しいみたい。管理局か、カルデアの治療を受けられれば違うかもしれないけど。

管理局のオーバーテクノロジー染みた技術もそうだけど、カルデアには医神「アスクレピオス」がいるもんね。

サイヴァントとして今の状態だと蘇生薬は作れないらしいけど、それでも十分トンドモ級の治療と製薬の腕があるわけだし……できないことの方が少ないレベルでしょ。

ま、いくら顔見知りとはいえ、だからこそ早々外部に出すわけにはいかないでしょうね。

——だね。本当に命に関わるならまだしも、そこまでじゃないわけだし……折り合いをつけていくよ、家族みんなで。……まあ、会う度に「診せろ」ってせっつかれるんだけど……。

相変わらず、珍しい症例に目がないわけね。

……そういえば、最近はもうスイッチが入ったりはしないの？ 昔は、割と頻繁にそっちに引っ張られてたみたいだけど……。

——ちよつとした自己暗示を教えてもらったんだ。眼鏡を基点にして。

ああ、あの眼鏡って確か……

——そう、神咲の人たちに用意してもらったやつ。元々、眼の発動を抑えるためにかけてるから、それと連動させてる感じだね。

じゃ、眼鏡を外すとスイッチが入るの？

——眼鏡を外して、なおかつ何か武器になる物を握ると……ついでうのが正確かな。まあ、眼鏡をはずすだけでもスイッチは入りやすくなるんだけど。

ふくん……でもまあ、それなら特に問題はないのかな？

——（武器なしで、なおかつ二人つきりだと“オオカミ”モードになっちゃうんだけどね。衝動が欲求と結びつくというか、そっちに転換しているというか。積極的になってくれて、実は結構嬉しいんだけど……ヴィヴィオがいる前じゃ言えないなあ）

……はあ、とりあえず順調そうで何よりね。羨ましいこと……。

大学卒業してからというもの、ますます忙しくなっちゃってこっちはそれどころじゃないってのに。

——え、黒桐先輩とは何もないの？

……別に。というか、そもそもそういう仲じゃないし。元大学の先輩後輩で、今は雇用関係ってだけよ。

ま、まあ、色々サポートはしてもらってるし、特に調べ物には重宝させてもらってるけど……。

——ご飯とかは？

遅くなった時とか、偶に一緒することはあるけどそれだけよ。こっちは雇い主だから払いは持とうとするんだけど、“先輩だから”って頑として受け取ってくれないのよね。

まったく、確かに元先輩ではあるけど……会社立ち上げたらさっさと辞めたくせに何言ってるんだか。

——懐かしいね。知り合って半年くらい、だっけ。大学辞めて、その数日後に面接に来たの。

普通順序が逆でしょうに、せめて就職決めてから辞めなさいっての。

さすがが手伝ってくれていたとはいえ、まだ仲間も少なかった頃だからどのみち即決してたとは思うけど……。

——（素直じゃないなあ、嬉しかったくせに。先輩が何も言わずに大学辞めたから、すごく心配してたの知ってるんだよ？）

まあ、実際雇って正解ではあったんだけどね。

事務処理能力はそれなりだけど……なんなのかしらね、あの調査力。いったいどこから、どんな方法で情報仕入れてるのか、割と謎なんだけど。

月村重工

——あ〜……うちでもまだ掴んでない情報とか持っていたりするもんね。お姉ちゃんもスカウトしたいみたいなんだけど……。

やらないわよ。

——ふふっ♪ 大丈夫、取ったりしないから。

なんか含みがある気がするんだけど……まあ、いいわ。

——（でも、こつちも時間の問題かな？ 意地っ張りだからアリスちゃん自分からは中々切り出せないけど、黒桐先輩はそうじゃないし。実はちよつと相談されてるのは……まだ秘密かな）

って、すっかり内輪の話になっちゃったわね。そもそも何の話してたんだっけ？

——確か……なのはちゃんたちの学生時代の話じゃなかったかな？

あ〜、そうだったそうだった。で、なのはたちに告白しては玉砕する連中の話になって……。

——はやてちゃんは特にだけど、三人とも結婚が早かったけど私たちは？ って話になったんだよね。

にしても、今振り返ってもあの連中の蛮勇っぷりにはいつそ頭が下がるわ。

私とすずかとはともかく、あの三人を相手に芽なんてこれっぽっちもなかったっていうのにな。まあ、一緒に暮らしてる土郎さんともかく、立香さんとユーノに関しては見かけることさえ滅多にないし、フリーだと思うのは無理もないんだろうけど。

——まあ、仕方ないよね。実際に告白に踏み切った人は少なかったけど、三人とも人気あったから。

本人たちは割と無自覚だったけどね。

なのはは特にだったけど、はやてとフェイトも無防備というかなんというか……。

——男の子ってことはわかってても、「異性」っていう認識がな

かった感じだよね。

あゝ、それで思い出した。何度か、なのはたちの「好みのタイプ異性は”って聞かれたことがあったわ。

ストレートに聞くのが恥ずかしくて遠回しにしてるんだけど、バレバレだったから笑いを堪えるのが大変だったのよね。

——…ちよつと可哀そうじゃないかな？

笑いを堪えてたこと？ でも、しょうがないでしょ。聞いたところで芽がないことに変わりはないんだし…：…言いたかないけど、無駄な努力つてもものよ。

そもそも、私が笑いを堪えてたのは「無駄な努力」だったからじやなくて、遠回しなくせに全然隠せてないことだし。時間ばかりかかって当時はじれったいったらなかつたけど…：…今思い返すと微笑ましいわね。

——ア、アハハ：だけど、それならなんて答えたの？

嘘ついて諦めさせるのも考えなかつたわけじゃないけど、別に嘘吐くほどのことじゃないから正直に答えたわよ。

具体的には、ユーノと土郎さんの特徴をね。

——そっか…：…だから一時期、図書室に通い詰める人とか、校内の雑用に精を出す人が増えたんだね。

誰が誰を狙ってるのか、あからさまになった瞬間だったわね。

——あれ？ でも、その割には立香さんの真似をしてる人がいなかったような…：…。

…：…それね。聞くけどさすが、アンタなら立香さんの特徴…：…なんて伝える？

——優しい人、かな？

ふくん、他には？

——うくん、あとは何があつてもめげずに頑張れる人とか？

ふんふん、ヴィヴィオは「包容力のある人」ね。

私ならそうね…：…ノリの良い人とか凶太い人つてところかしら。

——…：…なんだろう。間違つてはいないと思うんだけど、微妙にしつくりこない。

でしょ？ 私もね、答えようとしたら同じことを思ったのよ。微妙に的外れというか、そのまま遙か彼方に飛んで行ってるというか。それでも一応当時の私なりの所見は伝えたけど、的を射ていないもんだから……。

———そつか、だから立香さんのイメージと結びつかないんだ。

私も話しててドンドン違和感が増していったね。いつそ「普通の人」とでも言おうかと思っただけど……。

———あ、ヴィヴィオがすごい勢いで首振ってる。

そう、普通のはずなのに全然普通じゃないのよ、あの人。

ま、聞きに来てた（蛭）勇者と聞き耳立ててた連中は「それなら俺たちにもチャンスが……！」って色めき立ってたけどね。

———え、管理局でも似たようなことが？ ああ、ヴィーハター神ちゃん家たちとかエイハミーラさんオたちウに……。

まあ、驚くようなことじゃないわよね。

大方、ある程度方向性が定まったアプローチを仕掛ける連中が増えたんじゃない？

———なのはちゃんたちのことだから、全部スルーしてそうだけ……。

大正解？ やっぱりね。

———でも、三人に相手がいること、言わなかったのかな？

はやてなら言えるでしょうし、フェイトも中学卒業の前後から距離が縮まったけど、なのははかなり経つまでちゃんとかくつついてたわけじゃないでしょ。

———そうだね。それは確かに……。

あ、そういえば昔、はやてが周りに士郎さんのことでやいのやいの言われてキレかけたことがあったわね。もしかしてあれって、そういうこと？

———たぶん、そうなんじゃないかな。聞かれて答えて、それに納得できない人たちが文句をつけたんだと思う。

まあ、親しくしてないとわからないこともあるから、無理もないとは思っただけど……。

——でも、フェイトちゃんが立香さんのことで怒ってるのって、あんまり覚えがないよね。

ま、仮に「パツとしない」とか言われても、フェイトなら怒ったりはしないんじゃない？

あの人の平凡さも普通さも、フェイトはよくわかっている。というか、あれだけの経験をしておいてそうあれることがあの人の凄さなんだけど。

——だね。むしろそういう「普通さ」を幸せそうに、愛おしそうに話すんだよね、フェイトちゃん。

え？ 前にフェイトと出かけた時に「あんな男と縁を切るべきだ」とかいう人がいた？ それはまた……というか、子どもの見ている前で言うことじゃないでしょうに。

——それで、フェイトちゃんは何んて？

朗らかに「参考にします」と……嘘、とは言わないけど……字面通りの意味じゃないわよね。

——むしろ、その人との付き合いを考え直す、っていう意味じゃないかな。

ま、理解する気のないことを理解させるのは至難の業だし、それが正解なんでしょうけどね。

怒って反論しても、十中八九聞く耳持たないでしょ、そういう奴は。立香さんの場合、特に良さとかが伝えにくいからね。仮に伝わっても、「ありふれた美点」にしか思えないでしょうし。

——その「ありふれた美点」を持ち続けられること、そしてそれが「有り得ないレベル」に到達していることが、立香さんの凄さなんだけどね。

まあ、無理もないと思うわ。私も正直、昔はちよつと「どこが良いの？」って思ってたし。

——そう、だね。私も、あの夏までは「普通の優しいお兄さん」って思ってたから。

カルデアのこととか隠してたから、当然と言えば当然なんでしょうけど。

でも、初めてサバフェスに行った時に思い知ったわ。普通なんだけど、全然普通じゃない”って。

やってること一つ一つは普通のことなのに、それに伴う難易度とか、あの人たち相手に “普通であり続ける” こととか……そういうった諸々がどれだけ難しいのか、よくくわかったもの。

ま、私が見て分かったのなんてたぶん氷山の一角なんでしょうけど。

——え、なにかあったのかって？ 例えば……はぐれたアルフが間違えてギルガメッシュさんの部屋に入って、危うく殺されそうになつたりとか。

あれ、未だに謎なのよね。アイツ、何でマツパであんなにエラそうなのよ。まあ、あそこまで行くといつそ清々しいけど。

——凄いよね「我が玉体の輝きは同量の金剛石を凌駕する、恥ずべき点など一点たりともありはせんわ」って言いきる自信。

まったく見習いたくないけどね。

しかも、立香さんが「とりあえず…服を着ろお！」ってタオルを投げつけたら「何を言っている？ ここは、我が威光を目の当たりにしてきた榮譽に感涙する場面であろう」って心底不思議そうにしてるのよ？

挙句の果てに、「刺激が強すぎるんだって」ってぼやいたら「……なるほど、貴様の言にも一理ある。この輝きを直視すれば、目が焼かれるか」「まったく、雑種共は不便よな」って勝手に納得する始末。

まあ、そのまま上機嫌でいなくなってくれたからよかった…んでしょうけど。

——他にもね。酒吞さんがフェイトちゃん目の目を見て「綺麗やなあ。ひとつ、うちにくれへん」って言いだして。

あれ、今思い出しても割と寒気がするのよね。悪気のない悪意というか、純粹に「ほしいと思ったから言った」って感じなのがまた……「二つあるんやから一つくらいええやないの」って、艶っぽく笑いなから言うから余計怖いのよ。

——もちろん立香さんが止めてくれたんだけど、そうしたら今度

は「そうや、目え言うたら旦那はんの目、くれはったら我慢してもええよ?」って。

しかも、今度は中々引き下がらなくてね。「目えが二つでも一つでも、たいして変わらへんやろ」「その分、うちがちやあんと守ったるさかい」よ。立香さんは立香さんで否定しないし……

——ああ、そうそう。「事実だけど、それでもこれ以上足手まといにはなれない」ってね。立香さん、自分の弱さとか平凡さから目を逸らさないんだ。誰だって、そういうところからは目を逸らしたいだろうし、取り繕ったり言い訳したりしたいはずなのに……しないんだよね。

ある意味、普通の人にはきつい環境よね。周りはどういつもこいつもその筋の超一流揃い、嫌でも自分の普通さを突き付けられるんだから。そこで見栄を張るわけでも強がるわけでもなく、「せめてその平凡さを発揮しないと」って言えるのは、逆に普通じゃないわ。

ん? それで、酒呑童子が引き下がったのかって? まあ、一応は。だけど……

——「やっぱりほしい」って言って、後ろから……。

ラーマさんが守ってくれなかったら、あの人今頃お腹に風穴開いてたんじゃない?

しかも、特に酒呑童子のこと咎めないし……。

——むしろ「今はこれで我慢して」って飴玉あげてたよね。

酒呑童子は酒呑童子で「代わりのもんもろてもうたし、ここは旦那はんの顔立てとくわあ」って悪びれもしないのよ。流石にラーマさんも「罰を与えなくていいのか」って言ってたんだけど……。

——「それで酒呑が反省とか後悔とかすると思う?」って逆に聞かれたんだ。そしたらラーマさん、少し考えて「……:……:……:ありえんな!」って断言してたっけ。

生粋の鬼、真正の魔……それがどういものなのか、その一端を思い知らされたわ。

目が欲しい、欲しいから殺すっていう発想もだけど、それ以上にそれが「当たり前」のことみたいな精神構造が私には理解不能よ。

そりやね、一応指示には従うわけだし、能力的に頼りになるのはわかるけど……どういう神経してるのかしら、あの人。

——少なくとも、自分から契約を切る気はないんだと思う。いつだったか「契約を破棄するとしたら、みんなに見限られた時」って言うてたし。

で、あの連中も基本的に契約を切る気はなし、と。多分、立香さんの命がある限りは契約続行なんでしょうね。

——……怖いこととかもあつたけど、でも楽しかったな。本当に色々な人たちがいて、メディアさんにアレコレ着せてもらったりとか、紅先生のお宿で仲居さん体験させてもらったりとか。

ああ、あつたあつた。でもあの人、「潤うわあ」とか言うてちよつと危ない感じだったのよね……フェイトは今でも親しくしてるみたいだけど。

あとは、フェイトが立香さんに手を叩かれたりとかね。

——あ、別に喧嘩したとかじゃないんだよ。ただなんというか、フェイトちゃんが知らずに静謐さんに触りそうになって……

それを立香さんが慌てて止めようとしたら結果的に、ね。

ただ、静謐さんの体質とか知らないから、フェイトがそれはもう落ち込んでね。『嫌われた』『怒らせるようなことしちゃったのかな？』って、グルグルと悪い方に悪い方に考えちゃったわけ。それで形はどうあれ気持ちをぶつけられれば良かったんでしょうけど……表面的なところはしっかり取り繕ってたのが、見る側としては痛々しいっただけだったわよ。

——静謐さん、立香さんとの距離感がすごく近いから。傍から見ると恋人に見えないこともなかったんだよね。だから、なおさら。まあ、その誤解自体は割とすぐに解けたんだけど。

——静謐さんの肩にとまった小鳥が死んじゃって……あれは、ショックだったな。静謐さんも、すごく悲しそうにしてて……。

触れてくれる人に、触れても死なない人に依存っぽいことになっちゃうのもわかるのよね。

そういえば、依存っつて言えばフェイトも結構そういう気があると

思ってたんだけど……

—— たぶんだけど、立香さんのおかげじゃないかな。

え？ だけどあの人、フェイトのこと思いつきり甘やかすじゃない。正直、結構心配してたのよ。

—— んー、むしろだからこそだと思っ。中途半端に優しくしてたら依存してたかもしれないけど、むしろキャパをオーバーするくらい全力で甘やかされると、「このままじゃイケナイ」って自立心と危機感が煽られるんじゃないかな。

……なるほど、納得できる部分はあるわね。だとしたら、流石の一言だわ。人間関係の達人は伊達じゃないわね。

にしても、こうして思い返すとイベント内容以外にもいろいろあったわけだけど……

—— だけど？

物騒なことがあったのって初めだけで、2回目以降は普通にサバフェスを楽しめてるのよね。

もしかして、「サーヴァント」っていうのがどういうものなのか、肌で感じさせる狙いでもあったのかしら？

—— どうだろう？ とりあえず私としては、バスで空港に迎えに来てくれたゲオルギウスさんが持ってた旗がすべてな気がする。

ああ、アレね。

……いや、どこそのツアーコンダクターが持つみたいな旗だったんだけど、そこに「カルデア・トラベル」って書かれてたのよ。

ね、笑えないでしょ？

* * * * *

今回、カルデアより招待された「サーヴァント・サマー・フェスティバル」、通称「サバフェス」に参加すべく空路で北海道に降り立ったのはたちだが、実を言うと直前まで調整やらなんやらで色々大変だったのだ。

なにしろ、サバフェスは準備期間を含めれば一週間の長丁場。本番

は最終日だが、準備期間中も至る所で面白おかしいイベントが盛り沢山。フルに満喫しようと思えば、当然最初から最後まで最終日まで分刻みのスケジュールで動き回るくらいでなければならぬ。まあ、子どもたちに夜更かしは推奨できないので、サークル参加せずバカンス満喫中のサーヴァントが中心となる、深夜帯のドンチチャン騒ぎはご遠慮くださいだ。

ともかく、そういう事情もあつて真面目に初日の早朝に現着するよう動いていたわけだが、ここで問題になったのが同伴者だ。

先日の事件の事後処理や後始末の関係で、管理局方面の大人たちはまだまだ手が離せない。当然、エルトリア組も聴取などしばらくは自由に動き回るわけにはいかない。かといって、自営業の高町家はもちろん、経営者一族である月村家にしろバニングス家にしろ、大人たちとしても長期の休みというのはなかなか取れるものではない。一応興味はあるようなので、何とか一日か二日ほど時間は捻出しているようだが……初日はどうしても都合がつかなかった。

とはいえ、流石に地球の一般常識的に小学生が関東から北海道までという、長距離移動をするのは色々問題がある。なのはたちなら大丈夫そうだが、詮索されても面倒だ。

主催者ホストに相当するカルデア側が保護者役を寄せればよいのだが、立香をはじめとした職員や良識派サーヴァントたちは暴走しがちな問題児の監視・監督、あるいは自らの出し物で手が離せない。

なにぶん、こちら側に浮上してから開催地の選定をし、急ピッチで開催にこぎつけた次第。しかも、その間にエルトリアに端を発した事件やそれに乗じてやらかした連中の後始末……ぶっちゃけ、修羅場どころの話ではねえのである。はつきり言って、この状況で外部に人を出せというのは無理難題もいところだ。できて、最寄りの空港に迎えを寄こすのが精々。

だがそこへ、渡りに船とばかりに一人の女性が現れた。

「正直、特に予定もありませんし……私でよければ」

「ごめんなさいね、美沙斗さん。せっかくのお休みなのに……」

「まあ、向こうにつけば立香君もいるし、なかなか面白そうないイベント

みたいだから満喫してこい」

「「「よろしくおねがいしまーす!」」」

というわけで、長期の休みを取って帰省（のようなもの）をしていたのはの父方の叔母「御神美沙斗」が、保護者として同伴してくれることになった。

美沙斗が発着ロビーでの受付などをしてくれたおかげで、特に不審がられることもなく千歳空港に到着。

そこからは旅行者の守護聖人ゲオルギウスが運転するマイクロバスに送迎されるという、有難すぎて逆にちよつと困る扱いをされることしばし。

北海道らしいどこまでも続くかのように思える平原で突如濃霧に覆われ、抜けた先に待っていたのは……

「霧トシネルを抜けるとそこはピラミッド雪だった?」

「名作を引用すればええってもんやないと思うけど……」

「あ、頭がどうにかなりそうだわ……」

平原の真つただ中に脈絡もなく現れた巨大ピラミッド。まあ、正確には複合大神殿といふべきなのだろうが……詳しい知識を持たない彼女たちの目が中央に聳え立つ、ことさら巨大なそれ四角錐に行ってしまうのも無理はないだろう。

なのはとフェイトも、海外生活の長い美沙斗でさえも「ポカ〜ン」と開いた口が塞がらないでいる。

魔法に関わり、先日の事件で色々慣れたつもりだったのだが……まだまだ甘かったことを痛感させられた。

そして、立ち並ぶ石柱の間を進み、その奥に鎮座する豪華な門の前でバスから降りれば、良く見知った顔が出迎える。

「あ、ようやく来たわね」

「?」　なんで呆然としているの?」

のつけから度肝を抜かれたのはたちを他所に、ゲオルギウスはイリヤたちに案内役を引き継ぐと、そのままバスを運転して何処かへ。

「皆さま、お気を確かに」

「まあ、当然の反応なんじゃないかな?」

「普通、ひと月やそこらで建設できるものじゃありませんからね〜」

「ほおら！ とりあえずは宿に行つて、荷物を下ろすわよ。キリキリ歩く」

呆然とする気持ちはわからないでもないが、いつまでもそうしていても仕方がない。クロに促されるまま、大型トラックの倍はありそうな高さの門をくぐる。正直、いつたい何が通ることスライクを想定しての構造なのか、はなはだ疑問だったが。

抜けた先には、外観にそぐわないまさに「エジプト」あるいは「ピラミッド」といった内装の長い廊下。一瞬にして中東あたりに来てしまったかのような錯覚に陥り、転移に慣れているはずのなのはたちですらそのギャップに対応しきれない。あるいは、仕事モードになつていれば違つたのかもしれないが。

そうして、イリヤたちに案内されるままたどり着いたのは、某スタジオ製作の大ヒットアニメにでも出てきそうな純和風建築の……ちよつと建築学的にあり得ない気もしないでもないお宿。出迎えたのは、なのはたちよりもさらに幼い外見の舌足らずなしゃべりをする女将さんだった。

「チュチュン、ご主人からお話はいかがついでちよ。

ようこそ、お客様。出張「閻魔亭」、精一杯おもてなしするでち」
通されたのは、まさに「わびさび」といった趣の純和風の部屋。高級ホテルのような絢爛さはないが、落ち着きの中にも味わい深い、見る者が見ればそうとわかる高価な調度品がさりげなく配置されている。

なのはやはやてなどは一応……あくまでも「一応」だが、中流家庭の出身。なので、馴染みのある和風建築にようやく人心地ついているようだし、フェイトも物珍しさから周囲をキョロキョロ……。ただし、上流階級のアリサやすずかなどはポンと置かれている急須の造形や何気なく部屋を彩る欄間の精緻さから、「なにこの高級品?」と目が点になっている様子。

気にしだすといつまで経つても気が休まらないので、色々見ないふりをしつつ荷解きを済ませ、お茶を飲んで一息入れる。その頃には、ようやく冷静さを取り戻してきたのだが……。

「頭が痛くなってくるわね……」

「日本からエジプト、そしてまた日本……ちよつとついていけないかも」

「私も色々渡り歩いてきたが……スゴイ、としか言いようがないな」

周囲を取り巻く環境の変化に、ついていけずに旅の疲れとは別の疲労を滲ませるアリサとすずか、そして美沙斗。ついでに美沙斗の場合、妙にでっぷりした人語を解す雀たちも地味に驚かされた。

魔導士組はまだそういったことには慣れている方なので順応も早い。代わりに宿に来る前までのことが頭をよぎる。

「凄い圧力だったけど、なんだったんだろうあの人……」

脳裏をよぎるのは、遥か高みの玉座に坐したまま未だかつて体感したことのないような「圧」を放つ青年の姿。言動は極めて尊大で、なのはたちを見定めるかのように睥睨しながらも、それが当たり前であるかのように感じさせる「格」の持ち主だった。

割と物怖じしない方であるのはですら思わず委縮し、フェイトも一瞬呼吸を忘れてしまうほどの存在感。おかしな言い方に聞こえるかもしれないが、その在り様は容赦なく下々を照り付ける「太陽」を彷彿とさせた。

「はやて、すごく睨まれてたみたいだったけど大丈夫？」

「……いや、たぶん睨んでたわけやないと思う」

「え、そうなの？」

「ああ、アレたぶん睨んでたんじゃなくて注視してただけよ」

「オジマンディアスさん、眼付鋭いからねえ」

「でも、目を逸らさなかつたのは大したもの」

今回のサバフェスで主催を務めるとともに、時間の関係で会場を用意できないことから自らの宝具でこれを都合したのが、彼の「太陽王」オジマンディアス。寛大で鷹揚な一面とは別に、かなり苛烈で容赦がない人物でもあるので、念のために挨拶をと足を運んだのがつい先ほど。

なのはたちはその圧倒的なまでの「王氣」^{オーラ}に終始圧倒されていたが、はやてと辛うじてアリサだけは睥睨する彼に噛み付くことができ

た。そんな二人の反応に気を良くしたのか、それまでの鋭い眼差しをわずかに緩めると、 ``フツ`` と笑みを浮かべて……

「フリーパス貰ってもうたけど……」

「気に入られた、ってことでいいのかしら？」

とりあえず、スタッフフォンリーな場所まで ``入ってよし`` と主催者からのお墨付きをもらったのだから、良しとしよう。

実は一緒になんか子猫っぽいのも下賜されそうになったのだが、そこはイリヤたちが必死に止めた。今の時代の地球で、あんなのをもらっても扱いに困るだろう。ましてや、成獣になったりしたら目も当てられない。まあ、何年かかるか分かったものではないが。

「さて。それじゃ、一休みした後はどうする？」

「閻魔亭だけでも見るところは結構あるもんね。浴場に大広間^{風の}、奉納殿……」

「屋上庭園も見所」

（ソワソワ……）

「……とりあえず、立香さんに会いに行こうかしら」

（ツ!?!）

「そうだね。招待してくれただけじゃなくて、こんな素敵なお部屋を紹介してくれたお礼もしたいし」

（パアツ!）

（フェイトちゃん、ワカリヤスツ!）

なのはも、ようやく今朝出来上がったばかりのパンフレットを見つ、特に異論はない様子。

とはいえ、何分彼も忙しく動き回っているようなので、場所の特定は難しいとのこと。なので、立香を探しがてらパンフレットとイリヤたちの意見を参考に、今後の予定を検討することで決定……したのだが。

「ん？　なんか、外が騒がしくない？」

「言われてみれば……」

「誰か廊下を走つとるんかな？」

「ちよつと、様子見てみるね」

“トタトタ”と板の間を駆ける軽い足音。気になってフェイトが襖を開けると同時に、“ナニカ”が勢いよく飛び込んできた。

「キヤツ!？」

不意を突かれ、ひっくり返るフェイト。板の間ではなく畳の上に倒れたことでダメージが軽微だったのが幸いだ。

ぶつめた後頭部をさすりながら目を開けつつ、心配そうに集まってくる親友たちに、“大丈夫”とばかりに微笑みを向ける。そしてそんなフェイトの身体の上には、反射的に抱き留めた小さな人影が……。

「誰だろう、この子?」

「小さいわね……ヴィータくらいかしら?」

「いや、もうちよい下やないかな。たぶん、小学生未満やと思う」

「でも、どうしてそんな子が……」

((……まさか))

ありふれた黒髪に、丈の合っていないダボツとした服装。フェイトに覆いかぶさるような形になっているため、現状分かることと言ったらこれくらい。

にもかかわらず、イリヤと美遊、そしてクロの三人の目に焦りとも困惑ともつかない色が浮かぶ。まるで、何かを察してしまったかのよう……そしてそれは、身を起こしつつ未だに抱き留めたままの子どもを見たフェイトもまた同様だった。

(なんだろう、この抱き心地。凄く覚えがあるというか、離し難いというか……)

「……」

「えつと……大丈夫?」

なんとなく手を離す気にならないまま、そつと声をかける。

すると、肩がピクリと震えたかと思うと、子どもはゆっくりと顔をあげ……

「ふえ……お姉ちゃん、だれ?」

涙目で見上げてくるあどけない顔に、途端に胸の奥がキュツとなった。切なさや愛おしさが湧きあがり、繊細なガラス細工を扱うかのよう優しく、しかし安心させるように思わずしっかりと抱き寄せる。

「私はフェイト、フェイト・テスタロッサ・ハラオウン。君は？」

「そうそう、こんなところでどうしたのよ？」

「お母さんは？」

「はぐれちゃったのかな？」

色々と疑問点が多いだけに、フェイトに続き次々に質問が放たれる。

当然、未就学児と思われる子どもがそんな矢継ぎ早に聞かれても答えられるはずがない。明らかに混乱した様子で、視線が右往左往。

そして、なのはたち自身、自らの失敗には気づいてもどうしていいかわからない。誰も彼も、兄や姉はいても弟妹はいない。強いて言えばヴィータやリインフォース・ツヴァイがそれにあたるが、ヴィータが幼いのは外見だけの話。リインも、誕生当初こそ赤ん坊並みだったが、あつという間に成長してしまったので、彼女たちに幼子の世話の経験値を積ませるには至らなかった。

なので、(一応)一児の母である美沙斗なのはたちの視線が殺到する…のだが。

(わ、私を頼られても困る!?)

確かに出産と育児の経験があることにはある。しかし、色々あつて幼い娘を兄夫婦に預けてしまった身なので、実を言うと子どもの相手というのはそれほど経験がないし、過去の重い目もあつてむしろ苦手な部類だ。正直、そんな期待の眼差しを向けられても…というのが本音だろう。

だがそこへ、助け舟…とは違うかもしれないが、クロが今一番重要であろうことに質問を絞る。

「とりあえず、なんでここに来たのか、それから教えてくれるかしら？」

「せやけどクロちゃん、まずは名前聞いた方がええんちゃう？」

「いいのよ、察しはついてるから」

「? ? ? ?」

(この子、もしかして……)

疑問符を浮かべるのはたちだが、なんとなくフェイトにはこの子

どもの正体が分かった気がする。

常識的に考えてあり得ないとか、おかしいことだらけとか……そういうことはわかっているのだが、どうしても「そう」としか思えないのだ。

「えつとね！ お姉ちゃんたちが怖くて、追いかけてくるんだ！」

「……それって、警察沙汰な？」

「でも、それなら『怖いお姉ちゃん』じゃないかな？」

当然と言えば当然の疑問。しかし、答えはすぐにもたらされた。

「うふふふ、うふふふふ、うふふふふふふふふふふ……」。

ど

—

こ

—

で

—

す

—

か

—

♡
」

「あらあら……困りました。もしもマスターの身に何かあれば……私が鬼になってしまってもいいかもしれないのに。ですが……ええ。あの子の身に何かあつてからでは遅いというもの。ここは久方ぶりに、かくれんぼの必勝法を用いる時でしょう」

「なるほど、アイツらか」

「あーうん、そりゃ逃げるよね」

襖の向こうから漏れ聞こえる不穏な声。表面的には実に朗らか、あるいは穏やかなのだが……なぜだろう、不思議と背筋がゾワツと来る。

思わずフェイトも廊下に背を向け、子どもを抱く両手に力が籠る。体格差の関係から、思いつきり胸に顔を押し当てているのだが、まだあまりそういったことを気にする年ではないからか、あるいは相手の

年齢故か、特に気にする様子はない。まあ、押し当てられている本人も今はその身に迫る脅威への恐怖と本能的な安心感が先に立ち、ギョツとフェイトにしがみついている状態なのでいいのだろう。

そして、フェイトもなんだかそれがすごくうれしかったりする、理由はよくわからないのだが。

「とりあえず、あの二人をどうにかしないと……」

清姫と頼光

「いないふり…はダメそうだよね」

「このままだとまとめて消し炭にされるわよ。私たちはまだ何とかなるけど、アリサとすずかはそういうわけにはいかないでしょ」

「だけどこの場合、嘘を吐くのも下策」

「嘘発見器清姫さんがいますからね〜」

いい加減長い付き合いなので、声だけでも廊下の追跡者が誰かはわかっている。まあ、だからこそうまくまい手が浮かばないのだが。

「こうなったら、腕づくで撃退するしかないわね」

「え、でもそれは、流石に乱暴じゃ……」

クロの発言に、すずかが一般論を口にする。なるほど、確かに有無を言わず撃退するのは乱暴すぎるだろう。

しかし、それも時と場合、そして相手次第だ。

「マスターがいることを知られるのだけは避けたい。けど、嘘をつけば清姫にバレる」

そして、生半可な理由ではあのバーサーカー共が納得して離れるとは思えない…というか有り得ない。

不審がられるはするだろうが、それでも今はこうするよりほかに手がないのだ。

「へ？ マスターって……まさか!？」

「いくわよイリヤ、美遊！　なのはたちも手伝いなさい！　アイツら、一筋縄じゃ行かないわよ！」

勇んで飛び出そうとするクロと、その後にくくイリヤと美遊。

三人が襖を破って飛び出そうとする直前、幼さを滲ませながらも驚くほどの威厳を備えた凜とした声が廊下に響き渡る。

「何をやっているんでちか、清姫！」

「べ、紅閻魔先生!？」

「頼光もでち! 源氏の棟梁ともあろう者が、どういいうつもりでちか!」

「あ、あらあら……紅閻魔殿、これはその……」

「〃不戦たたかわずの約定〃はサバフェスの大前提。ましてや、このお宿で乱暴狼藉を働こうというのなら、この紅閻魔容赦はしないでち。無論、それを弁えてのことではね」

(美遊これって……)

(うん、好機! 殺るなら今!)

(なんか字が違う気がするけど……紅先生に便乗して押し切る!!)

そのまま紅閻魔に乗っかる形で清姫と頼光に戦いを挑む魔法少女たち。戦う理由は一言もしやべっていないので清姫嘘見器には引つかからず、紅閻魔の力もあつて源頼光にするものぞ。とりあえず、狼藉者をしつかり追い払ってくれるであろう、安心のセキュリティを期待して立香が「閻魔亭」を紹介したのは正しかった。あ、いや、おもてなしとかもちろん評価はしているのだが……。

とにかく、そうして無事二人を追い払った……のはいいのだが、そうなるとう当初の問題に立ち戻らざるを得ない。

「なあ、フェイトちゃん。この子、ホンマに立香さんなん?」

「た、たぶん、そうだと思っただけ……」

直感的にそうだという確信はあるのだが、理屈に合わないのだからちよつと自信のないフェイト。

しかし、契約で繋がっているイリヤたちが保証するのなら間違いはない。

つまり、このちっちゃいのは……正真正銘、藤丸立香に相違ないということだ。

「……とりあえず、この様子だと身体だけじゃなくて記憶と精神も逆行してるわね」

「え、まず気にするところそこなの!？」

すずかをはじめ、みな驚きを隠せないようだがさもありなん。一々人が子どもになったり大人になったり、あるいは性別が変わったりし

たところで驚くに値しない。それがカルデアクオリティ……慣れろ！

「うん。私たちのこともわからないみたいだし……でも、なんでフェイトちゃんにこんな懐いてるのかな？」

「さ、さあ……？」

とりあえず、膝にのつけて茶菓子など与えるフェイト。立香は立香で、リスの様にせつせとかじっている。

大変可愛らしいとは思うのだが、イリヤの問いに小首を傾げつつ、つつい膝の上の立香にデレツとしてしまうフェイトだった。頭を撫でたりほっぺをプニプニしたり……実に幸せそうである。

「とりあえず、状況から考えて一番怪しいのはやっぱりギルガメツシュだと思う」

「正確には、あのA・U・Oの宝物庫に収蔵されている若返りの薬でしょうね、可能性が高いのは」

「ですが、彼の王がそうそう自らの宝物を放出するとは思えません」

「確かに……本人も、基本的には“貯め込む”方針だし……」

「あ、でもギル君なら場合によつてはありうるんじゃないかな？」

「その辺が妥当かしらね。悪いけど、私たちはちよつと外に出てくるわ。その間……」

「うん。立香さんのことは私たちが見てればいいんだよね」

先ほどの状況を鑑みるに、幼い立香を連れて歩き回るのが上策とは言えないだろうことくらいわかる。

まあ、それとは別にフェイトが立香を離しそうにないというのもあるのだが……普段甘やかされている分、こうして面倒を見れるのが新鮮かつ嬉しくて仕方がないのだろう。

「ごめんね、みんな」

「本部への報告には私が行くから、イリヤとクロは情報収集をお願い」
「本部でも把握していない可能性もあるもんね」

「なら、イリヤは子ギルの方を当たって。そっちが一番可能性が高いし、私は色々聞き込みしてくるわ」

「わかった」

「なのはたちも、一応パンフレットを読み込んでおいて。注意事項のところに、接触禁止サーヴァントの他にも要注意人物との関わり方が書いてあるから熟読しておくように」

場合によっては、なのはたちに手伝わってもらおう可能性もありうるからだ。

そうしてイリヤたちが閻魔亭を後にしてから約一時間。

思いのほか早い帰還であったが、帰ってきた時には一名と一匹増えていた。

「よかった。今朝から行方が分からなくて、心配していたんですよ先輩」

「フオウフオウー！」

ホツと息をつくマシユとその肩で嬉しそうに鳴くフオウ。心から心配していたのがうかがえるその様子から、カルデア側もこの事態を把握していなかったことがわかる。

となると、イリヤとクロの情報収集の結果が重要になってくるわけだが……。

「イリヤ、小さいギルガメツシユの方はなんて？」

「ギル君も心当たりはないみたい。王の財宝からもなくなつてはゲイト・オブ・バビロンいないみたいだし……」

「なるほど……クロは何かわかった？」

「核心部分については何も。だけど、どうもこんなものが出回ってるみたいなのよ」

そう言つてクロがテーブルの上に広げたのは、A4サイズ用の紙。そこには正体不明の物品とその分量、必要となる器具や道具の一覧、そして手順が記載されている……要は「レシピ」である。

「これは？」

「たぶん、何かの薬の製造方法よ。どうやら、ほとんどのサーヴァントにこれみたいなの「ナニカのレシピ」か、「その材料」が配られてるみたい」

「つまり、これらを集めて行けば、先輩を元に戻すことが……！」

問題なのはレシピに何の薬か記載されていないことだが……まあ、

立香は毒に耐性があるので大丈夫だろう。

今の状況を見るに、面白おかしいことにはなるかもしれないが、命の心配はあるまい。こうして子どもにもなっているのも、“身体に害がない”からこそだろうし。彼の毒への耐性は、その辺ちよつと緩いというか抜け道があるのである。

「えつと、どうするの？」

「まずはこのレシピの材料を集める。どう変化するかわからないけど、子どものままだと連れて歩くわけにはいかない」

基本的に荒事の現場では足手まといにしかならない立香だが、“足手まといになりにくく、支援に支障のない位置取り”の見極めは絶妙に巧い。経験の賜物だろう。

ところが、今の立香は正真正銘の足手まとい。それどころか、彼の反応や挙動にまで注意を払わなければならぬ分、それ以下と言つていいだろう。一応戦闘は原則禁止ということになっているが、あくまでも原則だ。何が起こるかわからない状況で、下手に連れて歩くのはよろしくない。

清姫や頼光の様に立香個人に執着するサーヴァントもいることを考えれば、客人でしかないすずかやアリサの方が遥かに安全なくらいだ。

かと言つて、気難しい連中も多いことを考えると、立香という交渉役がいけないのは大きな損失。故に、まずは現状を脱し、彼の行動の自由を取り戻すことを最優先にするのは当然といえよう。

ただし、それを聞いてあからさまに残念がる少女が一人……。

「えつ……も、もう少しこのままでもいいんじゃないかなあつて……」

「……さつきからいつツツコもつか悩んでただけど……そろそろいかしら。フェイト、そもそもアンタなんで“膝枕されてる”のよ」

そう。部屋を出るときはフェイトが立香を愛でていたはずなのに、いつの間にか立場が逆転。戻ってきてみれば、幼い立香の細いフトモモに頭を預け、髪を梳いてもらいながら溶けているフェイトがいた。

「ち、違うの！　これには深い理由が……」

「おかげでようやく元に戻れたよ……つてあれ、どうしたの？」

「「「「立香 / 先輩 / マスター（さん）が女の子になっちゃった!」「」」「」」」

「あれ、私って男だったっけ？　なんかその辺の記憶が曖昧というか……」

そこにいたのは、結構いいスタイルをした赤毛の女性だった。しかも、自分の性別に関する記憶というか認識がだいぶ怪しい。それを示すように……

「ん……まあ、別にこれでも特に困らないし」

「いやいやいやいや！　ふつう困るでしょ!?!」

「フェイトちゃんも困るよね!?!」

「え!?!　私は、その……」

「フェイトも別に問題ないでしょ?」（ムニユ）

「あう……」

背後から抱き寄せられ、首のあたりに女性特有の柔らかさが押し付けられる。本来の立香よりいくらか背が縮んでいるらしい。

その分、振り返れば顔が近い。以前と違い、最近ではここまで近づくことがなかった分、間近に見る立香の顔に顔が熱くなる。そもそも、元々こういったスキンシップはあまり数も頻度も多くなかったのだが、最近はめつきりなくなってしまう。そのことに寂しさを感じなかったと言えれば嘘になる。それどころか、話す時も若干距離が開いた気がしていたところだ。

できればもつと触れてほしいし、傍にいさせてほしい。こうして微笑みかけてもらえれば胸が温かくなり、心が安らぐ。その意味で言えば、この状態はフェイトにとって願ったり叶ったりに近い状態なわけ……。

「モウコノママデイインジヤナイカナ?」

「重症……ううん、手遅れかもしれない」

寂しさが募っておかしくなったのか、あるいは久しぶりの刺激が強すぎておかしくなったのか……いずれにせよ、おかしくなっていることに違いはなさそうだ、だって目がグルグルしているし。

「……ですが、とりあえずこれで先輩も自由に動けます」

「フオウ！」

「……できれば、ある限りのレシピと材料を集めて一気に試したいところだけど……」

「このままの状態を放置するのも危険。急いで次の薬を飲ませた方が
良い」

「女の人ののが当然になるのも、ちょっとねえ」

「このまま意識が固定化されるかはわからないが、万が一にもされてしまつてはことだ。今は幸せ過ぎて錯乱しているフェイトも、正気に戻れば気付くだろう。」

「なので、多少の組み合わせ変更をしつつ、さっそく新たなレシピと材料を求めて行動を開始。」

例えば……

「あら、坊やじゃないの……って、坊や？」

「メデイアさん、あまりお気になさらず。それより今は、カクカクシカジカ……」

「……なるほど、そういう状況なの。生憎レシピには心当たりがないけど、材料ならあるわよ」

「譲っていただくわけには……」

「フオウフオウ！」

「別に構わないけど……」

「おお！ 奏者ではないか！ む？ むむ？ むむむむむむつ！

……よい、実に良いではないか!!

うむ！ そのな金色の娘と共に、余のハレムに加えるにやぶさかではないぞお!!」

「ハアハア！」と息を荒げながら迫ってくるローマ皇帝に、流石の立香も腰が引けている。

その後ろに庇われているフェイトも、ようやく正気を取り戻したらしく……

「で、でも！ 女の人同士なんですよ！」

「む？ それがどうかしたのか、童女よ？」

「ど、どうかしたのかって……」

「心して聞くがよい！ 真の英雄！ 真実の愛の前では性別など無意味である!!」

(ガ————ン!?)

「とりあえず、その両刀使いを排除したいのだけど、手伝ってくださいる?」

「……はい。このままだとフェイトさんの情操教育に大変な悪影響を及ぼしそうですから」

というわけで、こちらのブースを使用していたメディアをはじめとしたカルデア裁縫部の皆さんの協力の下、ネロには出禁をくらわすことに。そこで終わればよかったのだが、戦うフェイトの凛とした姿が琴線に触れたらしく、メディアは「きつと！ 絶対!! すっごく似合うわ!!」と、彼女を着せ替え人形にすることを要求。自分が満足するまで色々着せたら、薬の材料を譲るというわけだ。

まあ、荒事ではないので了承すれば……それはもう色々着せてホクホク顔のメディア。自分が着るためというよりも、「似合う子にさせて楽しむ」ために作るタイプなのである。初めは恥ずかしがっていたフェイトも、立香(女)に褒められて満更でもない様子。これこそが、フェイトはメディアに色々衣装を発注し、メディアもフェイトをモデルに使うという、win-winの関係の始まりであった。

他にも……

「あ、不良じゃないの」

「誰が不良だオラア！」

(た、確かに不良っぽい……)

「じゃあヤンキー」

「俺のどこがヤンキーだっつーんだ、このガキイ!!」

「そうやっていつもキレてるところがよ」

「キレてねえよ!!!」

(めっちゃキレとるやん!?)

気炎を上げる……どころか、本当に被った仮面のでっぺんから炎を噴き上げるアシユヴァッターマン。

管理局では「特別捜査官 候補生」という立場の彼女なので、ガラが悪いくらいでは動じたりしない：はずなのだが、流石に大英雄レベルの怒りに晒されれば慄かすにはいられない。たとえそれが、自分に向けられたものではないとしても。

とそこへ、おつとりとした声が……

「まったく、あまり子どもを怖がらせてはいけませんよ、アシユヴァツターマン」

「こ、これはパールヴァティ様。お見苦しい姿をお見せし、申し訳ありません」

（大人しくなった?! なにもんなんやろ、この人? 綺麗な人やし

……なんちゅーか、近いものを感じるような、そうでもないような

……あれ? せやけどこの感覚、前にも確か……)

「謝るなら私ではなく、そちらの子に。クロエさんもですよ、怒るとわかってるのにわざわざ言うものではありません」

「……悪かったわ。同じクラスだから、どうもね」

「悪いな、ガキ。なにぶん、こういう性分だよ。怒りと俺は不可分、怒りこそが俺の原動力だ。偏りすぎだつてのは自覚してるが、今更在り方は変えられねえ。こういう奴だと思つて、適当に流せ」

「謝つてるのかしらね、あれ」

「……ま、詫びと言つちやなんだが、持つてけ。そいつが目当てだったんだろ?」

そういつて投げ渡されたのは、一枚の紙。相変わらず何の葉かは判然としないが、それは確かに求めていたレシピだった。

「良くわかりましたね」

「おめえみてえなガキがわざわざ俺んところによって来る理由なんざそれ位しかねえだろ、それだけだ」

（見た目も言葉遣いもおつかないけど、頭ええし…実は結構気配り屋なんかな?）

「ああ、そうだ。私からもあなたに渡すものがあつたんでした」

「はへ? えつと、ばあるばてい、さん? も、レシピか材料持つてるんですか?」

「ああ、いえ、私は持っていないんですが……ちよつとこちらへ」

「はあ……」

「むむっ。この気配は……イシユタルさんですね。さすが、手の早い。コホン、それはともかく……あなたの人生が、良き星の下にあらんことを……チュツッ」

「っ！」

「何を……というとは実は私も良くわかっていないんですが……頑張ってくださいね」

先日の事件で出会ったイシユタルに続き、二柱目となる女神様からの祝福であった。ちなみにこの後、行く先々で女神と遭遇し、祝福と加護のオンパレードになるはやてであった。

同じ頃、なのはも……

「ふええええええええっ!?　なんで私こんなことになってるのお!？」

「よし、そこだ行け!　さっさとゴルゴーンを気絶させろ!」

「また貴様か、蛇遣い!　いい加減、私の血を諦めろ!」

「……なぜ私は、姪と共に神話の怪物と戦っているのだろう」

元をただせば、カルデアに医神「アスクレピオス」がいると聞き、そんな人がいるのなら立香を元に戻す薬も作ってくれるのでは…….
と思つて訪ねたのが発端。

ただし、実際に当の本人に会つてみれば……

「知るか。それは医者僕の管轄外だ」

「えっ!　で、でも立香さん……はそうでもないかもしれないけど、皆さん困ってますし」

「あなたの薬は万病に効くと聞いた。ならば……」

「だからこそだ」

「!?」

「マスターの身体に起こった変化は病ではない。ましてや傷を負ったわけでもない。医者僕の仕事は傷を治し、病を癒すこと。逆に言えば、それ以外は管轄外だ」

要は、傷病の類以外は専門外だし、医療の発展にも寄与しないので興味がないのである。

元々、「薬」ということで今回の事件の容疑者の一人に浮上した彼だったが、早々に外れたのもこれが理由だ。彼は医術の進歩にしか興味がない。故に、こんな「面白おかしい薬」など作るわけがないのだ。

ちなみに、同じく薬に精通しているパラケルススは真つ先に疑われ思い切りボコられた……。ただ、実は彼が主犯ではないとわかり、率先してボコリに行ったイリヤたちは申し訳なさそうにしていたものだが……

「まあ、匿名の依頼で協力はしたのですが」

「先輩、判決は？」

「ギルティ！」

というこで、申し訳なかったのもごくごく短い時間のことだったが。

まあそれはともかくとして、なのはたちとしてもただでは引き下がない。

協力を得られないのなら、せめて彼が持っている材料だけでも……と交渉したところ。

「今のところ使い道はないが、これで新しい薬を作れるかもしれない。それを譲るなど論外だ」

「だけど、それだと立香さんがこのままに……」

「何か問題でも？」

「はい……？」

「マスターが子どもに、女に、あるいは猫耳が生えた、または巨人になった。僕との契約において、何の問題もない。その薬が原因で病になったというのであれば、喜んで診よう。実に興味深い症例だ。むしろ、是非なつてほしい。その上で僕が診て、治療する……見ろ、何の問題もない」

「え、ええええええ？」

「筋金入りだな……最早これは狂気の域だろう」

「あとはそうだな、老人になった……というのであれば、少し困るな。まだ真の蘇生薬の再現には……そうだ、条件付きで譲ってもいいぞ」

「本当ですか！」

「ああ。これから薬の材料の採取に向かう、それに協力しろ。無事に採取できれば、この素材は譲ってやる」

というわけで、なのはと美沙斗は絶賛神話の怪物ゴルゴーンとの死闘の真つ最中と相成ったわけである。

その結果は……「骨折り損のくたびれ儲け」とだけ言っておく。なんだか段々、カルデアの医療関係者への苦手意識が増していくのはであった。

ちなみに窮地の真つただ中、正体不明の紫電が降り注ぎなのはの窮地を救ったりもしたのだが……紫電を放ったと思われる人物は、何やら仮面のようなものをつけていて……

「ほら、さっさと逃げなさい！ あんな怪物、一々相手にするものじゃないわよ！」

「えっ！ あの、あなたは……」

「私のことはいいから、さっさとするー！」

「は、はい！ ……あの、ありがとうございます！ このお礼はまたどこかで……」

「いらないわよ、そんなもの！ そんなこと気にしてる暇があったら行きなさい！」

……でも、そうね……金髪で赤い目の、頭はいいくせに物分かりの悪い……でも、優しい……本当に優しい子がいたら、仲良くしてあげてちょうだい。心配症でちょっと面倒なところもあるかもしれないけど、根気強く付き合ってくれればそれでいいわ」

「それって、どういう……いない」

凄くその人物像に心当たりがあつて振り返った時、既に仮面の女性の姿はなかった。どうやら、ゴルゴーンを誘導してどこかに行ってしまったらしい。

ただ、振り返る直前「あなたとアルフがいてよかった。今際の際、確かに私はそう思っていたのよ。私にそんなことを言う資格はないのだけど……ありがとう、なのは」という声が聞こえた気がした。

あとは、アリサと共に行動していたイリヤがちよつと目を離れた隙

に……

「こ、ここはあ！ アリサちゃん!？」

「ん、イリヤ？ あ、ごめんごめん。なんか、試食してみないかって言うからさあ」

「そんなことはいいいから、早くここを……!」

「待つが良い少女よ。ちょうど今出来上がったところだ、君も食べてぜひ感想を聞かせてほしい」

「あ、あばばばばばばばばば……」

古びたラーメン屋のような店内、カウンター席の向こうから振り向いたのは……黒い、長身でガタイの良い大男だった。

モジャツとした髪を黒い三角巾で覆い、腰から下を覆う黒いエプロン姿は確かにラーメン屋の店主……のはずなのだが、物凄く胡散臭い。ラーメン屋の店主というよりも似非神父がよく似合い、似非神父よりも殺し屋とかの方がもっと似合う感じで。

「さあ、食すが良い。我が珠玉の一品、当店が拘り抜いた特製…… 麻婆ラーメンだ!!」

「やつぱりいいいい!？」

「ふくん。見たまんま、ド直球の品みたいだけど……いいの？ 私、我慢じゃないけど舌には結構自信があるんだけど？ 感想を言えっていうんなら、思ったままを言わせてもらおうけど」

「ふっ、それはこちらのセリフだ。果たして君に、このラーメンの旨さ辛さが認識できるかな？ 当然、一口でも付けたならば完食してもらおう」

「確かに当然ね。どんな品であれ、出されたからには食べるのが礼儀つてもものよ」

「挑発に乗っちゃダメ！ この人、それこそ首から下を土に埋めて口から麻婆を流し込んででも完食させる人だから!!」

「はあ？ いろいろツッコみたいところだらけだけど、いくらなんでも失礼でしょ。そんな外道、いるわけじゃない」

「ふむ……いったいなせそのような認識を持つに至ったか、興味は尽きないな。記憶にある限り、君に食事を振る舞った覚えはないのだが……」

「さ、さっそくいただくとするわ」

「ダメ——っ！」

「そうだ、一つ言い忘れていた。君たちの探し物、見事完食できた暁には無償で譲り渡そう」

「っ!？」

「さあ、どうするかね、少女よ。我が身可愛さに友と主を見捨てるもよし、あるいは敢えて挑むも君の自由だ」

「あ——もう——!!! こ

の外道——!!!」

結果を言えば、その辛さに二人は轟沈した。ついでに、カロリーのにも爆死した。

「ふむ……かつての食糧不足を参考に、一週間分のカロリーを濃縮したのだが……比例するように辛味も増すとはな。いやはや、まったくうれしい誤算とは思わないかね？」

(……チ——ン)

そこには、まだほとんど中身の減っていない赤い地獄オレ外道マーゴを湛えたどんぶりに顔面から突っ伏す金と銀、二人の少女の軀ムクロが並んでいた。

そして、最後にすずかと美遊の二人はというと……うつさん臭いオッサンに絡まれていた。

「やあ、よく来たね子どもたち。ここはこの私、ダンディなアラファイフが贈る防犯啓発セミナーの会場だよ」

「行こう、すずか。怪しいキャッチセールスに捕まっちゃいけない」

「え、あの……え？」

「さつきからみんなスルーしてばかりでね……ワタシ、怪しいアラファイフじゃないよ」

(あ、怪しい……)

みなまで言わずともわかった、これは正真正銘の不審者だと。

「行こう」

「うん、いこっか」

「いやいや、せめて話だけでも聞いていっておくれよ。決して悪い話じゃないから、防犯だけに」

「河原に捨てられた雑誌以下の信用度」

「遠回しに有害図書扱いするのやめてくれないかな!？」

「公衆電話に張られたシールと同列」

「ヴィラン^{悪役}だって傷つくって知ってるかな!？」

「事案ですね、通報します」

「いくら何でも、女兒誘拐とかで捕まるのは不名誉すぎやしないかい!？」

飯にも悪の組織のボスだというのに、この扱い。まあ、犯罪界のナポレオンがそんなシヨボくも不名誉極まる、ある意味最低最悪の罪状で捕まるとか、涙があふれて止まらない（愉悦）。

「ホームズあたりが爆笑する、かも？ それはそれで見てみたいけど」「いいや！ 奴であれば、むしろ同情するだろう！ だって、その方が私へのダメージがデカいからね!!」

割とマジ泣きしてくるアラフィフ……正直、いい年したオッサンのマジ泣きとか見苦しいと言ったらなかったが。

とはいえ、流石に哀れになつて来たので話だけでも聞いてやることにしたのだが……

「……結構まとも……というか、普通にタメになる話で驚いた」

「当然だとも。何しろ、この私^{モリアーティ}の講義だ。

私は確かにヴィラン^{悪役}だが、同時に数学教授でもあったのだよ。その私の講義が、タメにならないというのはそれはそれで沽券にかかわるというものさ。

まあそれはそれとして……お嬢さんの家は資産家のようなだからね。この『邪悪教典 資産運用編（簡易版）』なんかオススメだよ？ どう使うかは、君に任せるが」

「は、はあ……」

なんとなく正体の察しがつき、困惑気味に受け取るすずか。

ちなみにその後、この邪悪教典シリーズは東京支局を通じて無限書庫にも収蔵され、法務関係を中心に管理局員必読の書となる。犯罪者は法の抜け穴を、邪悪こそが何よりも悪のなんたるかを知る。

故にこそ、悪と罪を取り締まる管理局にとってこの書物の有益性は

計り知れない。まあ、要はネット犯罪への対策のために一流ハッカーを雇うようなものである。

とまあ、もちろんこんな愉快なことばかりだったわけではない。

数日後からはそれぞれの家族なども参加するようになったし、比較的行動の縛りの薄いエルトリア関係者が顔を見せに來たりといった嬉しいサプライズも。その際、大神殿の天井に身の丈ほどもある筆を走らせる北齋の路上パフォーマンスを見たり、モーツアルトの演奏会に参加したりもした。当初の目当てだった即売会では、それぞれに目当ての作家系サーヴァントの本を無事入手もできた。

もちろん、都度サーヴァントたちから薬の材料やレシピを譲ってもらったり、条件達成に四苦八苦したりしたのだが……終わってみれば気分的にスタンプラリーに近い感じだったのだから、騒がしくも楽しい時間だったと言えるだろう。

まあ色々な正体不明の薬を試しているうちに、立香が小人や獣人になるどころか「ピピピピピピ！」と電子音っぽい感じでしか喋れなくなったり（不思議と意味は通じたが）、なぜか四つん這い（すなわち犬）になって立ち上がれなくなったり、喋りと仕草がオネエになったり、常時『泰山解説祭』になったり、あるいは豚になったりと……割と大変だったのだが。

他にも、ちよつとした行き違いが原因でフェイトが凹んだり、なのはがナイチンゲールに追い掛け回されたり、はやてがジャガーマンに「弟子2号じゃ——！」とさらわれたりと、とにかくせわしない数日間だった。

とはいえ、最終日を目前にようやく元に戻れてホッと一息。

この手の騒動になれているカルデア組は「あー、戻った戻った」と軽い調子だが、そうでない面々はというと……

「つ、疲れた……まったく、こんなことがしよつちゅうなの？」

「しよつちゅうじゃないよ、年に四・五回くらい」

疲労困憊といった様子のアリサのボヤキに、あつけらかんと答える立香。

「あ、でも今回は規模の割に細やかかな。俺しか被害受けてないし」
「そうですね。あと、割とシャレにならないのが年に1・2回くらいで
しょうか」

「イシユタルとかが世界崩壊級のポカやらかしたりするしね。まあ、
細々したのだと日常茶飯事だけど」

「「「「……………」」」」」

その言葉に、もはや絶句してしまう子どもたち。そして、ふかいふ
かくいたため息の後、アリサはフェイトの肩に手を置いた。

「……………」フェイト、諦めなさい。アンタがこの人
に迷惑かけるなんて、天地がひっくり返っても無理だから」

「そう、だね。もうこの際だから、前にアリサちゃんが言ってたよう
に、迷惑かけられるように頑張るくらいでちょうどいいんじゃないか
なあ?」

「せやねえ。まあ、それでもむしろ、立香さんやと息抜きにしまっ
もしれへんけど」

と、なのは以外からコメントされるのであった。

ところで、今回の騒動の犯人が誰だったのかというところ……

「おやおやあ? ようやくお気づきになりましたね。そう! 実は今
回の黒幕はこの私、ルビーちゃんなのでしたあ!! あつはあ♪ 実は
犯人は傍にいた、割とお約束ですよねー? 皆さんの右往左往する様
子、しっかりシークレットデバイスに記録してありますとも。あとで
編集してお渡しするので、是非お楽しみに♪」

「……………」とりあえず、イリヤ諸共れば終了かしら」

「ちよつ!?! え、私もなの!?!」

「いやですねえ、イリヤさん。私の不始末は、マスターであるイリヤさ
んの責任に決まってるじゃないですか」

「私一ミリも知らなかったのに!?!」

「さあ、行きますよイリヤさん! 私たちの愛と正義を、今こそ見せる
時!
ラフアンドパワー

愛と正義……………なんて独善的な響きでしょう! サイコーです!」

「なんで私まで

っ!?!」

チャンチャン♪

「まったく、随分引つ掻き回したみたいじゃないの」

「あく、じややっぱりこれって俺の仕業？」

「ふくん、記憶を消してたはずだけど……思い出したの？」

「いや、ただなくんかルビーが起こした騒動にしては違和感があるなあって……」

「……正確には、立香アンタがやったのはきっかけを作ったくらいね。それに乗ったのが、今回はたまたまルビーだった、それだけのことよ。覚えていると不都合があるから、記憶は弄ってもらったみたいだけど」

「目的は……みんなに楽しんでもらうのと、カルデアここがどういう場所か知ってもらうためってところかな」

「そんなところね。実際、普通に参加してたんじやここまで色々な連中と関わりはしなかったでしょうし。良くも悪くも、ね」

「……………まあ、楽しんでもらえたみたいだから、良かったのかな。イリヤには悪いことしちゃったけど」

「そう思うなら、今度埋め合わせでもしてあげることね」

「プレシアもありがと。無理言つて残つてもらつちやつて」

「……………別にいいわよ。あの子…なのは
に言いたかつたことも言えたしね」

「じゃ、そろそろフェイトにも」

「それはイヤ」

「頑固者……………いつか絶対、会つてもらおうから」

「そんな日は来ないわよ。あの子の人生に、フェイトもう私は必要ないわ。いえ、そもそもあの子には愚かな犯罪者の母親なんてものはいないの。フェイトの母親はリンデイ・ハラオウン一人だけ。それで、いいのよ」

「フェイトは、そう思っていないよ」

「…………馬鹿な子。フェイト・「テストロツサ」・ハラオウン…………そんな名前、さっさと捨ててしまえばいいのに」

「捨てないよ、フェイトは。過去のすべてが今のフェイトを形作つて、これから出会う全てが未来のあの子の礎になる。それを、知っているから」

「…………本当に、バカな子」

え？　なんでお父さんを「お父さん」って呼ぶようになったか？
うくん、エリオ君はどうだった？

——僕!?　僕は…その、はじめは「立香さん」って呼んでたんだけど、ジャック達に「キヤロは呼んでたけど呼ばないの？」って聞かれて、それで意識するようになって……。

あ、そうだったんだあ。私は小さい頃フェイトさんと一緒に遊びに連れて行ってもらった時、だったかな？

二人に手をつないでもらって、楽しくて、嬉しくて……でも、どこか寂しかった。はじめはそれがどうしてなのかわからなかったんだ。本当に幸せで、寂しく思うようなことなんて何もないのになって。

でもね、フェイトさんが飲み物を買って行っている時に、通りかかったおばあさんが「お父さんと一緒によかったわね」って声をかけてくれたんだ。

それだよやくわかったの。私はあの時間を「家族みたいだな」って思ってたんだって。でも、「みたい」でしかなかったことが寂しかった。本当の家族だったらよかったのに、例えば隣にいてくれる人を「お父さん」って呼べたら……そんな風に思ってたなら……

——思わず言っちゃった？

……うん。その時は恥ずかしいって思うよりも、凄く後悔した。お父さん、その頃はまだ結婚どころか誰ともお付き合いもしてなかったし、あくまでもフェイトさんに付き添っているだけだっと思ってたから。だから、「他人」の私に「お父さん」なんて呼ばれても嫌だろうなって。

楽しかったから、幸せだったから……それが一瞬の幻でも、「家族みたい」で満足しておけばよかったのになって、そう思ってたんだ。

もう会ってくれないんじゃないか、それどころかフェイトさんにも迷惑をかけちゃうんじゃないかって。そう思ったら頭の中ぐちゃぐちゃになつて私、今にも泣きそうな顔をしてたんだと思う。

でもね、そうしたらお父さん私の頭に手を置いて「うくん」って空

を見たかと思つたら「キヤロは俺のこと、なんて呼びたい？」って。

——似たようなこと、僕も聞かれたなあ。

やっぱり？ 私もね、これが最後ならって思いきつて「お父さんって呼びたいです」って言ったんだ。そうしたら「うん。じゃあ、これから俺がキヤロのお父さんだ」って。

正直に言うとな、私すぐには信じられなかったんだ。どうしてそんなことを言ってくれるのかわからなかったし、嘘か冗談なんじゃないかって不安だった。なにより、血の繋がりもないしあの日初めて会ったのに……だけど、お父さんが言ってたんだ。「人と人の関係は、お互いがどう思っているかだよ」って。だから、「お互いがそうなりたいと思っているのなら、すぐには無理でもなっていくことはできると思う」って、そう言ってくれたんだ。

——そうだね。一方通行じゃ意味がないけど、逆に言えばお互いに同じように思っていればそれがすべてなんだ。「家族」と思えば「家族」に、「きょうだい」なら「きょうだい」だし、「恋人」にだってなれる。そこに年齢も性別も、血の繋がりも関係ないんだ。ヴィヴィオも、そう思うでしょ？

もちろん、はじめから「親子」になれたわけじゃないよ。だけど、お父さんは私と親子になろうと努力してくれた。私もそれが嬉しくて、どんどんお父さんが好きになっていった。

昔は結婚とかそういうのは考えてなかったみたいだけど、心のどこかで求めてたのかもしれない。だから、あんなにあっさりと進んでいったのかもね。

——まあ「父さん」の場合、ジャックが「お母さん^{マスタ}」呼びなのもあると思うけど。アレに慣れたら、「お父さん」はむしろ普通だね。

エリオ君……。

——ごめんごめん。

そういえば、エリオ君はいつから？

——僕は……父さんにキャンプに連れて行ってもらった時かな。キヤロの話聞いて、やっぱり羨ましいって気持ちがあったんだと思

う。ああいう人だから、そういう気持ちに気付いてくれてたんじゃないかな。

待って、お父さんのキャンプでもしかして……あの？

——うん、ほぼ手ぶらで山に入って、第一声が「よし、まずは石を割ろう」から始まる奴。

……ねえ、あれってキャンプなの？ むしろ、石を割ったナイフで全部こなすってもうサバイバルなんじゃ……というか、エリオ君が妙に保護隊に馴染むのが早かったのって、そのおかげ？

——ま、まあ、そう……かな？ 仕留めた獲物を捌いたりとか、寝床代わりのシエルター作ったりとかには慣れてるから。というか、慣れた。

ああ、慣れてないと大変みたいだね。ティアさんが遊びに来た時のこと覚えてる？

——覚えてる。アレでしょ、家畜をメて捌いていくのを見て顔を青くしてた時。

そうそう。都会で暮らしていると、生きてる魚を持つこともないし、内臓処理なんでもっとしないから仕方ないんだけどね。「しばらく肉を見たくない」って言ってたっけ。

——僕も初めはそうだったなあ。今なら自然豊かな場所なら、遭難しても魔力なしで2週間は問題ないと思うけど。

妙に手慣れてるなあと思ってたんだけど、そういうことだったんだ。

——え、でも父さんなら木の皮を剥いで服も自作できるし、特に靴が上手だよ。僕なんてまだまだ……。

いや、お父さんの場合とにかく「一人の時に助けが来るまで生き残れるように」って必要に迫られて覚えた感じだと思うんだけど。

——そう、だね。戦闘能力はアレだけど、生存能力と逃走能力はぴか一だから。

……うん、エリオ君とお父さんが親子だなんてすごく実感した。

——（そういうキャラは、フェイトさんと天然なところが良く似てるんだけどなあ）

え、フエイトさんのことは「お母さん」って呼ばないのか？ うん、すぐく呼んでほしそうにしてるのは気付いてるんだけど……。

——わかる。僕も父さんを「父さん」って呼ぶようになったら泣きそうな目で見られたことがあるよ。こう「どうして立香は「父さん」なのに私は「さん」なの」って言いたそうに。たぶん、「キャロだけじゃなくエリオまで」とか「立香ばかりズルい」とも思ってたんじゃないかなあ。

私にとってフエイトさんって、「お姉ちゃん」と「お母さん」の間……ちよつとお姉ちゃん寄りだから。あとは「恩人」というか、「尊敬する人」っていうのもあるんだよね。

——父さんのことは尊敬してない？

その言い方はズルいよ。

——まあ、言いたいことはわかるよ。別にフエイトさんが「近寄りがたい」とかじゃないから「親しみやすい」は違うし、「頼りない」とも違うんだけど……。

そうそう。上手く言葉にはできないんだけど、肩の力を抜きやすいんだよね。フエイトさんにはどうしても、「がんばらなくっちゃ」って思っちゃうから。

あとはアレかな、年の問題？

——……確かに、あの頃のフエイトさんのことを「お母さん」って呼ぶのはちよつとね。父さんとは20歳くらい違うから抵抗がなかったのもあると思う。

昔のヴィヴィオくらい私たちが小さいか、なのはさんとヴィヴィオくらいの年の差があったらもしかしたら……でも、やっぱりずつと「フエイトさん」だったからっていうのが大きいかな。

私の場合、お父さんと会ってすぐに「お父さん」って呼ぶようになったし。

——僕はしばらくは「立香さん」だったなあ。「父さん」っていう呼び方に、ちよつと抵抗感というか蟠りがあったから、考えないようにしてたっていうのもあると思う。でも、キャロの話を聞いて羨ましくなっちゃったってことは、どこかでそう思ってたのかもね。

でもそつかあ、エリオ君のサバイバルスキルはお父さん直伝だったのかあ。

———そ、それだけじゃないよ！ 先生の所でもいろいろ教わったし、クー・フリーンさんもそういうの上手だから！

ケイローン先生のところってあれでしょ？ 通称「馬小屋」。

———……まあ、実際に馬小屋だから。キャロはマルタさんのところにいたんだよね、どうだったの？

うーん、ほとんどカルデア本部だったし、偶に他のエリアに連れて行ってもらったことはあったけど、あんまり特別なことはなかったよ。

召喚の練習をする時も、シミュレーターが基本だったから。でも……ふふっ。

———どうしたの？

練習を始めてすぐの時にね、マルタ様に言われたんだ。『いくらでも失敗しなさい』って。

———そうなの？

……本当は怖かったんだ。フリードたちのことをちゃんと制御できなくて、周りに迷惑かけて……また、居場所をなくしちゃうんじゃないかって。

そんな不安があったからやっぱり失敗しちゃったんだけど、マルタ様があつという間にフリードを止めてくれて、怒られると思ってたら『ぎ、気を取り直してもう一回行ってみましょう』って。

———まあ、マルタさんが相手じゃフリードも形無しだよな。

うん。今でも会うと、まずはお腹を見せて服従のポーズから入るくらいだし。

———（……すっかり上下関係が確立されている）

……何度失敗しても止めてくれる、できるようになるまで見守ってくれる。それが、凄く嬉しかった。

今思うと、私の不安なんて全然気にすることじゃなかったんだよね。私が何をどうしたところで……

———ああ、あそこ^{カルデア}じゃ『よくある騒動』の域を越えないよね。むしろ、カワイイ悪戯レベル？

たぶん、そんな感じだったんだと思う。

失敗しても大丈夫って思えるようになったら、いつの間にかフリードも安定していったって、そうしたら今度は色んな「竜関係」の人たちに会わせてくれたんだ。

——もしかして、召喚のため？

そう。マルタ様にタラスクとの召喚契約を勧められて、いけそうだからって他の人たちにも。

——ジークさんにお竜さん、あと翼ある蛇達ケツアル・コアトルと？

そうそう。それから、ケツアル・コアトル様も目をかけてくれるようになったんだ。

元々マルタ様から「接近された時の対策」を教えてもらってはいたんだけど、それを聞きつけて色々教えてくれたの。

エリオ君も、ケイローンさん以外にも教えてもらったんだよね。

——うん。クー・フリーンさんとかディルムツドさん、ああフィンさんにも習ったことがあるよ。ただ、それを聞きつけて老子とか和尚が来たあたりから大分混沌としてきたけど。

そうなの？

——……？
☒さんにガレスさん、レオニダスさんと弁慶さん、ヘクトールさんやカルナさん。

割とまだ常識的な人たちだと思うけど？ あ、ヴィヴィオも同意見みたい。

——そう、この人たちまではまだ良かったんだ。いや、詰め込み過ぎで身体が持たないという意味では大変だったけど。でも、問題はそこからだったんだ。

？ ？ ？

——ロムルスさんは言ってることがよくわからなかったし

ああ……独特だよ、あの人。

——ブリュンヒルデさんをはじめ、ワルキューレの人たちは僕を「勇士」に育てようとしてくるし

う……うん、認めてもらえたら名誉なことだけど、後が怖いよねえ。

——ジャガーマンさんが脈絡なく暴れまわるし

あの人、嵐神みたいなどころあるもんね。

——景虎さんは言ってることが極端すぎるし
そうなの？

——「要は考えても仕方がないということ、殺せ！」って言われ
てどうしろと？

……………シグナムさんの「届く距離まで近づいて斬れ」、
の同系列？

——段階が違うよ。なにより、スカサハさんと良玉さんが……
(ガタガタガタガタ)

な、なにがあったのエリオ君!? エリオく——ん!?

※少々お待ちください。

——ご、ごめん。ちよつとトラウマが……

(い、いったい何があったんだろう?)

※史書によれば、秦良玉は従者を美少年で固め、逆ハーレム状態に
なっていたらしい。エリオの錯乱と史書の記述に関係があるのかは
不明。

——そ、そうだ。前から聞きたかったんだけど……

(すつごく気になるけど、話を戻したらまたエリオ君がオカシクなっ
ちやいそうだし……どうしよう?)

——キヤロの動き方って父さんに似てるよね。

そう？

——うん。まあ、今は偶にしかそんな感じはしないんだけど、六
課時代に何度か「あれ？」って思ったことがあって。

そっかあ。でも、当然だと思うよ。あの頃の私、「お父さんだったら
こんな時どこにいるかな」って考えて動いてたから。

——そうなの？

ほら、お父さんってポジシヨン的には「フルバック」でしょ。

——まあ、分類するならそう、かな？

まだあの頃って自分なりの立ち回り方とか固まってなかったから、
困ったときはお父さんのやり方を思い出してたんだ。

——なるほど。確かに、父さんって「いてほしい所にいてくれる

“というか、すぐく守りやすいんだよね。”

それにね、私もお父さんの真似をするとすぐサポートしやすかったんだよ。だから、自分なりのやり方が固まった今でもそう思うことがあるんじゃないかな。

そういう意味では、お父さんも先生なのかも。

——へえ。

そういえば、カルデアも久しぶりだよね。

——そうだね。行くとなるとそれなりの休暇が必要だし。

日帰りとか一泊だと、帰ってこれるか微妙だもんね。大抵何かに巻き込まれるから。

——そうそう、この間なんて……って、どうしたのヴィヴィオ、そんな目を丸くして。

え？ 巻き込まれるの前提なのってそんなに変かな？ カルデアじゃいつも日常茶飯事のことだよ。

——だよね。まあ、疲れるし大変ではあるけど……帰って来たなああって感じる瞬間でもあるよ。

うんうん。トラブルのないカルデアなんてカルデアじゃないよね。

——“何もない時はない”って言っても過言じゃないと思う。あるとしたら、単に準備期間ってだけじゃないかな。

さつきからどうしたの、ヴィヴィオ。順応し過ぎててビックリ？ そうかなあ？

——ああ、確かに言われてみればそうかも。とにかくいろいろな人たちがいるし、その上みんなキャラが濃いから。ほら、この前天草さんが“願い叶える”系のロストロギアをちよろまかしたことがあつたでしょ。

あつたあつた。で、動ける人たちでしばき倒して連れ帰ったんだよね。

——カルデアでの経験がなかったら、きつと父さんに抗議とかしたと思うんだ。ほとんどペナルティとかもなしで、「次やったらまたしばくから」で終わりだし。

言われてみれば、そうかも。私たちはああいう人だって知ってるか

ら「妥当」だと思うけど、そうじゃなかったらもつと別の反応をしてたのかもしれない。

——そういう意味で考えてみると、大分鍛えられたよね。なんと
いうかこう：「許容量^{キャパシティー}」が広がったというか……。

大抵のことは「そういう考え方もある」って思っちゃうもんね。人それぞれ立場が違うし利害も違うから、管理局員として正しい判断と一般の人の反応が違うのも、それぞれの立ち位置の違いだから「当然」くらいに思うし。

——というか、全然理解できないことも「そういう思想」ってことで受け入れちゃってる部分もあるかも。

——悪い、ことではないよね？

た、たぶん。

——そういえば、近々アインハルトたちを連れて行くんだよね。えつと……いい経験になると思うよ。色々ショッキングかもしれないけど。

——みんなには強く生きてほしい……いや、冗談だつてば。ちゃんと僕たちもフォロースするから大丈夫。

え、ティアさんがなんとか仕事をねじ込もうと抵抗してるの？

まあ、その……無理もないんじゃないかな。

——そう、だね。別にみんなのことを心配してないとかじゃないけど、散々振り回されてたらしいから。

うん。私たちは小さかったから気を遣ってもらってたみたいで、日々の細々とした騒動くらいにしか関わってなかったんだけど、ティアさんは「一人前」だからって……。

——ヴィヴィオ、ティアさんの前ではくれぐれも「ぐだぐだ」ハロウィン“ユニバース”は禁句、いいね？

私たちも六課解散後から関わるようになったとはいえ、それまでに耐性がついてたからね。いきなりあの「トンチキ」に放り込まれたティアさんは、大変だったんじゃないかなあ。

——うん。思えば、六課に父さんたちが来た時も頭を抱えてたっけ……。

六課にお父さんはいなかったんじゃないか？ ああ、そっか。ヴィ

ヴィオが保護された時にはもう戻ってたから、入れ違いになってたんだっけ。

えつとね、最初の出勤があつて少しした頃からしばらくの間、六課に来てたことがあつたんだ。まあ、色々規制があつたからそのままではいかなかったし、その上でさらに期限もあつただけだね。

クロノ提督が手をまわしてくれてたみたいで、フェイトさん嬉しうだったなあ……。

* * * * *

「はあ……まさか部隊長が結婚してたとは……」

「ねえ……しかも、今の私たちと同じくらいの時にでしょ。結婚かあ……なんか実感湧かないなあ」

「そんなの私も同じだったの。自分のことで精いっぱい、恋愛それどころじゃないし」

未だに衝撃的な事実を受け止め切れていないらしく、額に手を当てて唸るティアナ・ランスター。相方のスバル・ナカジマも、なにやら呆気にとられた様子。

まあ、無理もあるまい。就業年齢の低いミッドチルダとはいえ、それでも十代半ばで結婚する例は稀だ。彼女たちの身近でも、そういった話を聞いたことはない。故に、自分自身に投影してみようとしてもさっぱりイメージできないのだろう。

まさに、想像することもできない領域の話である。

ただし、自分にも起こりうるかもしれない出来事から離れすぎていると、かえって落ち着いていられるようだが。

「そんなに驚くほどなんでしょうか？」

「うん。部隊長、とつてもお綺麗ですし……」

揃って首をかしげるエリオとキャロ。地位と能力を兼ね備えるということは、必然的に相応の収入があるということ。加えて、当の本人がどこに出しても恥ずかしくない美人で、性格については言わずもがなともなれば、早期の結婚も別におかしくないように思えるのだろ

う。強いて問題点を挙げるとすれば、守護騎士たちの存在だろうか？
なんというか、そう簡単には認めてくれなさそうにも思える。

「いや、美人なのはその通りだし、部隊長の収入なら全然余裕だとは思
うわよ。むしろ相手が働かなくても養えるでしょうし。でも、問題は
それだけじゃないというか……」

「だよねえ。むしろ、他の部分が何とかならないとできないことだし」
「? ? ? ?」

しかも、そのお相手がついさつきお世話になった『食堂の主』兼『
バックヤードの長』だというではないか。

前々から公的機関の食堂にしては随分美味だとは思っていたが、ま
さか一流ホテルや高級レストランからオファーがかかるほどの腕前
とは知らなかった。そして、それらの誘い全てを蹴ってこんな（と
言っては何だが）試験運用中の一部隊の食堂でその腕を振るうとは、
スキルの無駄遣いにもほどがあるだろう。

「……ねえ、一応聞くけどなのはさんとフェイトさんも結婚してたり
するの?」

「ええっ!」

「なんでアンタが驚くのよ、馬鹿スバル!」

「だ、だってえ……」

なのはのファン、というか彼女に憧れ目標にしている身として、驚
かすにはいられないらしい。

別に独身であってほしいとかそういう意味ではなく、なんというか
こう……憧れの人の結婚というのが、していても不思議ではないと思
いつつ、自身のそれ以上にイメージできないらしい。

「なのはさんは……どうなんでしょう? 聞いたことある?」

「ううん、私も知らない」

元々顔見知り以上の間柄ではなかったこともあり、返事は何とも歯
切れの悪いものだ。

ただ、二人の保護者でありなのはの親友であるフェイトの性格を考
えるのなら、なのはが結婚すれば我が事のように歡び、それを二人に
も報告してきそうなものなのでたぶんしていないとは思うが。

しかし、そこで察しの良いティアナが二人の言い方の違和感に気付く。

「なのはさんは、ってことはフェイトさんは違うってこと？」

「え、そうなの!？」

「あ、いえ、結婚はしていないんですが……」

「婚約はしていません……」

六課解散後、二十歳になったら結婚する予定らしい。なんとも死亡フラグっぽくて不穏だが、めでたいことには違いない。

外回りや捜査が多くて普段は接点の多くない上官だが、これまたはやてとは別系統の美女である。別に不思議なことはないし、二十歳という年齢もはやてのそれに^{16歳}比べれば実感を持ちやすい。

まあ、逆にあれだけの才色兼備を射止めるとなると、難易度の高さは計り知れないが。

なにしろ、「エース・オブ・エース」の銘^なを冠するのはや、レアスキル持ちにして若くしてキャリアの道を邁進するはやてほどではないとはいえ、フェイトもまた地上部隊にさえ多くのファンを抱える有名人だ。普通に考えれば、真正正銘の「高嶺の花」だろう。

前評判と違って親しみやすい人ではあるが、それでも彼女と並んで歩くだけでも大抵の男では気後れしてしまうに違いない。ましてや並び立つともなれば、どれほどの色男なのだろう。

あまり下世話な話や他人の色恋に首を突っ込むような趣味はないつमりのティアナだが、それでも流石に興味を惹かれないと言えは嘘になる。

なので、きつとこのちびっこ二人なら知っているだろうし、わざわざ自分が聞いたことを言いふらしもしないだろうという打算込みで、さも「興味はないけど……」とばかりに素っ気なく聞いてみることに。

ただし、返ってきたのは長い沈黙と、予想外の所見だった。

「……………普通の人ですね」

「はっ」

「え、そうなの?」

「普通、だよな？」

「うん、普通だと思う」

二人の反応に、確認し合うように顔を見合わせるエリオとキヤロ。隠したり誤魔化したりしている風でもないし、そんなに器用な子たちでもない。

つまり、今の所見はこの子たちの純粋な感想ということになる。

「……魔導士ランクは？」

「あ、リンカーコアを持ってないのでランク自体ないです」

「何のお仕事してる人なの？」

「管理局とも提携している、とある機関で……なんだろう？ 実働要員？ だけど、別に『父さん』が戦うわけじゃないしなあ……現地に派遣されて調査とか他の実働要員間の調整とかが主な任務、だと思います」

あんまりはつきりしないのだが、どうやら一応ちゃんとしたところに勤めてはいるようだ。ただ、聞く限り立場はそれほど高くないらしい。別にそれに重点を置くつもりはないが、『あの』フェイト・テスタロッサ・ハラオウンの婚約者と考えると、ステータス的に物足りなく思える。

なにしろ、彼女の名前には少々特別な意味がある。

本局において「総務統括官」を務めるリンディ・ハラオウンの娘であり、若くして次元航行部隊『提督』の座を得た俊英「クロノ・ハラオウン」の妹。上層部に多大な影響力を有する、謂わば『ハラオウン派』の令嬢なのだ。

本人や家族が気にしなくても、周りが生半可な男では許さないだろう。まあ、そういう意味で言えば次期ハラオウン派『幹部候補』のはやても似たようなものだろうが。

というより、今聞き捨てならないことをエリオが口にしなかったか？

「『父さん』？」

「え、アンタたちその人のことそう呼んでるの？」

「あ、はい」

「その、結構前から……」

それはつまり、婚約の話は昨日今日のことではないわけだ。なにしろ、二人はフェイトの被保護者。そんな二人に「父」と呼ばれるということは、家族周りとの関係も良好なことがうかがえる。なにしろ、二人から「呼ばされている」様子は見られず、心からの親愛を込めての呼称であることが伝わってくる。

政治が絡んでいるかはわからないが、相手の立場を聞く限りその線は薄い。いや、仮に絡んでいたとしても今の^二等^陸士^十のティアナのあずかり知るところではない。どちらにしろ、政治とは無関係に良好な関係を築いているのだろう。

(でも、戦闘能力も地位もないとなると、接点がまるで見えてこないわね。現地調査とかが主な任務って話だし、捜査関連？ そっちの方で優秀なのかしら?)

しかし、その後いくら話を聞いてみても謎は深まるばかり。何しろ、特技を聞けば「コミュ力」と返され、長所は「精神的に打たれ強い」こと、自慢は「逃げ足とスタミナ」と来たもんだ。ついでに、尊敬する点を聞けば「心が広い」ことらしい。

まったくもって訳が分からない。あの能天気なスバルですら「えーつと……」と言葉を濁すくらいには。

正直、ティアナとしてはフェイトや二人が騙されているんじゃないか心配になる。だが、騙すとしたらもう少しやりようがあるだろう。

(というより、騙す気ゼロよね)

騙すべき相手にこの筒抜け具合、まるで騙せていないのだからそんな気がないのは明らかだ。フェイトも周りもそろって人を見る目がない、という線も薄いだらう。

あと考えられるとしたら、フェイトの好みが「ダメな人間」や「口クデナシ」である場合だが……それなら周りが止めるはず。まさか、周囲の人間が軒並みダメ人間に引っかかってしまうタイプというわけでもあるまい。

なんてことを考えているうちに、いつの間にか場所はエントランス。

さあ、訓練だけでなくデスクワークも頑張るかあ、ついでに不慣れなちびっこやこの手の仕事が苦手な相棒のフォローも…と想って伸びをしたところで、ティアナはソファの上に奇妙なものを発見する。「なに、あれ?」

「ティア? 何か見つけた…あれ、子ども? こんなところに?」

そこにいたのは、黒髪と薄い紫色の髪の小さな子ども。年の頃はエリオたちよりさらに幼く、おそらく就学前…3〜5歳くらいだろうか。

そんな子どもが二人でソファに眠っているというのは、普通なら考えられないことだ。

彼女たちの所属する古代遺物管理部機動六課はその性質上、陸士部隊や警邏隊などとは違い決まった管轄地域はなく、必然的に地元住民と対応することも少ない。

このエントランスにしたところで、同じ管理局部隊や関連企業などからの客人を対象とした受付だ。そんなところに子どもが二人、いたい何の用があるというのだろう。というか、誰かが連れてきたと考えるべきだが、その「誰か」が見当たらない。寝ているために席を外しているのか、それともまさか…と考えたところで、子どもたちの顔を覗き込んでいたエリオとキャロが顔見合わせる。

「キャロ、この子たち…」

「やっぱり、エリオ君もそう思う?」

「そうとしか考えられないけど。でも、どうして…」

「二人とも、この子たちのこと知ってるの?」

「つてことはフェイトさん関連? 早めに保護者を見つけるなりなんなりした方が…」

「え〜つと…」

あながち間違つてもいないだけに、エリオもどう答えていいかわからず苦笑が浮かぶ。

とりあえず、キャロがフェイトをはじめ隊長たちに報告しようとしたところで黄色い光が閃いた。

反射的に光の先、背後を振り返る。するとそこには、なぜかソファ

「たぶん、若返りの薬を飲んでるんだと思います」

「だから子どもだっていうの？ 変身魔法の方がまだ納得がいくんだけど……いや、それにしたって脈絡なさすぎるけど」

「よくあることですよ」

「あるわけないでしょ!?!」

「あるよね?」

「うん、いつものことだよ。ジャンヌオルタさんとか、ギルさんとか」

ちなみに、今回子どもになったのは色々とある規制を抜けるため、「子どもならいいだろ」という意味不明の暴論を用いたためだ。

「えっと…そもそもこの子たち誰?」

「お父さんです」

「……つまり、フェイトさんの婚約者の人ってことよね? じゃあ、こっちの子は?」

「父さんの婚約者のマシユさんです」

「はあ?!?!」

法的に問題ないとはいえ、レアケースなのは事実。二人の反応も無理からぬことだろう。

とまあ、そんな具合でいい感じに場が混沌としてきたところで救世主が現れた。

「おくい、フェイトちゃんおる? 連絡事項があるんやけど……って、流星やなあ。もう見つけとったか」

「八神部隊長!?!」

「あの、これは……」

「ああ、気にせんでええよ。忙しさにかまけて、かれこれ3ヶ月以上ご無沙汰やったからなあ」

「普段は抑えていられますが、直接目にしたら自制が利かなかつたんですねえ」

「……すまん、二人とも。気持ちはよくわかるのだが、こういうものと諦めてくれ。私も未だに慣れないんだが、ここまで酷くなるのは稀らしいから……その、あまり気にしないでやってほしい」

すっかり慣れてしまっているが故にティアナたちの反応に気付かないはやてとリインに代わり、二人の気持ちがとてもよく理解できるアインスがフォローを入れる。情報端末を持つ姿は「出来る秘書」を彷彿とさせるが、その背に何やら重い影が垣間見えるのは気のせい
か。

どうやらフェイトもそうだが：それ以上に立香たちが関与することで発生するかもしれないカルデア関連の奇行・珍事に騒動・厄介事が舞い込むのではと心配しているようだ。この辺り、経験年数に倍近い開きがあるのと、初期のまだ多少でも自重のあつた頃から慣れてきた者とそうでない者との違いだろう。

はやてたちなどは多少のことなら「いつものこと」とさらっと流せるし、本格的に関わっていくことを決めたフェイトなどは開き直って楽しむ余裕すら持ちだしているが、アインスにはまだまだ遠い境地のようだ。

後年、アインスとティアナの間にカーボンワイヤーより堅い友情が芽生えるのだが：今は割愛する。

とりあえず、理解しがたいことばかりではあるが、事実を「字面」だけ受け止め、後は深く考えないようにすることで対処するティアナとスバル。

はやての下にはカルデアから報告というか連絡が来たらしい、ちょうどついさっき。それによると、そろそろフェイトが限界だろうということで六課に顔を出したので、二人も長くは滞在できないらしい。何より、あまりカルデアを開けるのは心配だ。事件や異常事態もそうだが、身内の暴走が特に。

とはいえ、流石に一日二日ではフェイトが可愛そう。そこで、プレシアの技術やレイシフトの応用やらその他諸々駆使した結果、向こう数ヶ月間にわたって数時間程度ならこちらに顔を出せるらしい。当然色々と管理局からは渋い顔をされたようだが、「子どものやることに目くじら立てるとは大人げない」ということで子どもの姿に。

本当にそれだけの理由なのかは疑わしいが、カルデア側で問題がない限りはほぼ毎日会えるということでフェイトはじんわり幸せそう

だった。

子どもになっちゃってしまっているので普段通りとはいかないだろうが、それでも会えると会えないは大違いだ。

ちなみに、マシユが顔を出すのは基本初日だけらしい。「フエイトさんの同僚の方にご挨拶を」とさっそく新妻力を発揮したわけだ。まあ、その後は二人の時間を優先してくれるあたり、普段マシユと立香はいつでも一緒だからこそその気配りだろう。

というのが、カルデア側からの連絡内容だ。

何しろ、今の二人は内面も含めて子どもになっているのでそんな小難しい説明などできるはずもなし。若返りの霊薬で25年分くらい逆行しているため、立香が4・5歳、マシユが2・3歳であることを考えれば当然だろう。

だというのに……

「なんちゅーか、懐かしい光景やなあ」

「そういえば、昔もこんなことがあったよねえ」

とりあえず新人たちや見物に来た野次馬たちを解散させた後、残ったはやてとなのはは視線の先の光景を微笑ましくも呆れたように見やる。

「フエイトちゃん、感想は？」

「……幸せ過ぎて辛い。具体的には恥ずかしい」

なのはに聞かれての返答。正直、*「ならやめればいいのに」*と思わないでもないが、きつと抗いがたい何かがあるのだろう。

はやてにとつての士郎のエプロン姿の様に、なのはにとつてのユーノの長髪から垣間見えるうなじの様に。

「はじめは二人を抱っこして満足しとつたのが、いつの間にか後ろから抱きしめられて蕩けとるし」

背伸びをしながら両腕をいっぱい伸ばして鎖骨に沿って腕を回す立香。フエイトからは顔が見えないが、身体が密着して耳元に頑張る立香の息遣いが聞こえてくる。それが嬉しくて、若干プルプルする体の震えが伝わってきて愛おしい。どうしてこれに抗うことが出来るようか……否、断じて否である。

しかも、マシユは慣れない場所にちよつと不安らしく立香の傍にくつついているのがまたいじらしい。

いや、幼馴染二人にまじまじと見られるのは顔から火が出そうなほど恥ずかしいし、心臓の鼓動が天井知らずに高まって苦しい。幸せなのは間違いないのだが羞恥と緊張、そして……いや、これは言うまい。

とにかく、フェイトの感情の許容量キャパシティの限界は近い。今はまだ幸せが勝ってポンコツ化しているが、いずれ限界を越えれば受け止め切れずにオーバーヒートして逃げだすだろう。良く避難先になっていたのはと、偶に駆け込まれていたはやてはそれをよく知っている。

「とりあえずフェイトちゃん、昨日も捜査や情報整理で遅かったんやろ。今日はこのまま上がってええから、ゆっくりし」

「で、でも……」

「あと、これ私の部屋の鍵や。限界超えたら使うとええ」

六課でなのはとフェイトはルームシェアしているので、必然的に二人を連れて行く部屋もその部屋になる。だが、そうなるかとオーバーヒートした時の逃げる先がない。まさか、あまり事情を知らない面々のところに駆け込ませるわけにはいくまい。

というわけで、はやてが自分たちの部屋の鍵のスペアを渡したのはファインプレーと言えるだろう。

なにしろ、まだ六課は立ち上がったばかり。部隊長であるはやてはやる事が山積みだし、なのはも新人たちの訓練をはじめ仕事は多い。抜けてフォローしてやることはできないのだ。

二人の年齢を考えれば致してしまう可能性は低いのが救いか。

とはいえ、何事も用心に越したことはない。いや、別に不穏な理由からではなく……

「はやてちゃん、簡易ベッドの手配してもらっていい？」

「ああ、ちっちゃいとはいえ婚約者同士で寝てるところに……つてなったら気まずいなあ。任しとき」

厳密に立香がいつまでいるかわからないので、そういうことがあってもいい様にとの処置だ。流石になのはとしても、二人で眠っている隅で寝るのは色々な意味で居た堪れない。

とはいえ、簡易ベッドを使ったとしても思った以上に精神的にクル
ことになったのだが……

(うう……独り身の寂しさが身に染みるよお)

と、彼女の姉が聞けば流石に怒りそうな感想を抱くのがあった。とは
いえ、そんなことを考える脳裏に蜂蜜色の髪がチラつくあたり、それ
はそれで意味があつたのかも知れないが。

ただ、全く別のところで同じく独り身の寂しさを味わうことになる
少女が一人。

「くー、くー……」

(なでなで……)

広い草原の真ただ中。自身の膝に頭を預けて眠るフェイトを撫
でながら、幸せをかみしめる立香。

彼としても、フェイトと会えない3ヶ月は中々に寂しく辛いもの
だった。一応通信で顔を合わせていたとはいえ、やはり直接接触れ合う
ことには到底及ばない。

昔から大切な女の子ではあつたが、ここまで思いが膨らむことにな
ろうとは……自分自身のことながら、今以て驚きを覚える。とはいえ
……

(夢の中で眠るとか、器用なことするなあ……)

流石の立香も、そこまではしたことがないと思う。フェイトに軟禁
されていたころのアレなどはノーカンだ。夢という形式ではあつた
が、そちらも一種の現実であつたのだから。そりゃ現実なら眠りもす
るだろう。

しかし、立香はもう少しTPOというものを弁えるべきではない
か。いくら割と凶太い性質とはいえ、物事には限度というものがあ
る。

そう、ちょうど今まさに青筋浮かべながらも二人の様子を必死に無
視しつつ、懸命に練習に励んでいる少女へ配慮とかすべきではないだ
ろうか。

「……………イチャイチャするなら、せめて見
えないところでやってくれませんか」

いい加減我慢の限界とばかりに構えを解いて抗議するティアナ。とはいえ、それは無理な注文というものだ。

「いやあ、そうしたいのは山々だけど……どこなら見えない？」

そう、だだっ広い平原で隠れるところなどどこにもない。ついでに、遮蔽物もない。強いて言えばティアナの背後だろうが、それも彼女が動いてしまえば同じこと。要は隠れたくても隠れられないのである。

「っ……ここは夢なんですか？」

「そうだね、経験上そうだと思う」

(どういう経験よ)

舌打ちしそうなのを何とか堪えて聞けば、これまた胡乱な返事が返ってくる。立香としても別に茶化しているつもりはないのだが、そう思うのも無理はないだろう。

「じゃあ、あなたは私の夢なんですか」

「たぶん違うと思う。大方、どこかの夢ブランド・ロクデナシ魔の仕業じゃないかな」

とは思うが、それは別に立香自身の特性によるものの可能性も否定できない。何しろ、彼の夢がどこか、あるいは誰かにつながってしまうのは割とよくあることだからだ。

出来れば何とかしてやりたいところではあるものの、制御できる類のものでもない。立香にできるのは、邪魔にならない様に隅で大人しくしていることだけだ。いや、命の危険がないから大分リラックスしているのは確かなので、危機感とかに乏しいのは勘弁してほしい。

「……いいです。夢だつて言うなら、思う存分練習できますから」
(覚えているかは微妙なところだと思うけどなあ)

何しろ物が夢だ。特殊な分覚えている可能性を否定はしないが、かといって断言もできない。

もちろん、それを無駄な努力と嗤う気もなかった。

「頑張るね」

「……才能のない凡人ですから、努力するしかないんです」

初対面では年下だったが、一応ここでは年上ということを目上として対応してくれるらしい。

立香に見ただけで技量を看破できるなんていう能力はない。強いて言えば、本能的に“危険度”がわかるくらいか。そんな立香だが、その動き一つ一つから彼女の実直さと生真面目さがうかがえる。

「そうだね。咄嗟のヒラメキや直感で最適以上の答えが出せる天才ももちろんいるけど、そうじゃないならできることを一つ一つやっつくしかない。」

俺も昔言われたことがあるよ。『何も空を飛べ、などと言っているではありません。煉瓦を手に取り、ここに並べろ。それは誰にでもできて、最も重要な事なのです』って。あ、こつちだと空を飛ぶのは特別なことじゃないんだっけ」

「……まあ、言いたいことはわかります」

要は、特別なことなどできなくても、誰にでもできることであつても、それを続けることが一番大事なのだということだろう。

そんなことはわかってる。それしかないのなら、それをする。凡人なのだから、できることを疎かにしてはいけない。

ただ、反復練習を続けながらふと聞いてみたくなつた。この口ぶりからして、きつと彼もまた凡人なのだろうと思つたから。

「……あなたは、どうなんですか？」

「ん？」

「フェイトさんの婚約者なんですよね」

「そうだね」

「そんなに凄い人と一緒にいるために、何をしてきたんですか？」

「……別に、フェイトといえるためについてわけじゃなかつたけど……」

ゆつくりと噛み締めるように、言葉を選びながら口を開く。安易に答えてはいけないことだと、ティアナの声音が雄弁に物語っていた。「上手くできないことだらけで……それでも……みんなに助けられるだけじゃ駄目だ……まずは自分にできることをやらなくちゃって。そうやって、頑張ってきたつもりだよ。」

まあ、時間が経てば経つほど自分が凡人だつて思い知らされるんだけどね。どんなにトレーニングをしても、魔術の勉強をしても……俺じゃ、みんなの足元にも及ばない。情報分析も、作戦立案も、俺より

優れている人はいっぱいいたからね。

だから……偶に一人になると……なんで俺なんか、他に適任者がいたはずだって……そんな良くないことを何度も考えた」

空を見上げながら紡がれる言葉は、全てティアナにとつても身に覚えのある事だった。

きつかけは兄の死、彼の魔法が役立たずではないと証明しなかった。そのために魔導士の道を志した。

だが、現実はいっだって思い通りにはいなくて。士官学校と空隊、どちらの試験も落ちてやっと陸士の訓練校に合格した。そこで出会った相手と3年以上にわたってコンビを組んでいる現状は……癩スバルだが数少ない悪くないことの一つだろう。

六課に来たことを後悔しているわけではないが、周囲の豊かな才能に眩しさを覚えることはある。確かな実力と実績を持つ隊長陣、今はまだ危なっかしさが目立つが誰も彼もが輝かしい未来を約束されたかのような才能を見せつける仲間たち。そんな中で、ただ一人の凡人……それは、中々に肩身が狭いものだ。

果たしてここは、本当に自分がいていい場所なのか、と。

だからこそ、証明し続けなければならぬ。自分はここにいていいのだと、凡人でも天才たちに追いついていけるのだと。

そうしなければ、これまでのすべてが崩れてしまいそうで……。

とはいえ、それはティアナが決して口にしてこなかった言葉であり思い。

それを、特に抵抗なく口にできてしまう相手には……正直、失望を覚えた。あのフェイトが選び、周りが認めたほどのだから、凡人だとしても「何かある」と思ったのだが、買い被りだったらしいと。

だが、その間にも立香の語りは続く。

「でもまあ……何にもできないのはどうあがいてもほんとのことだし。そこからは逃げられないのなら……せめて、強がらないと」

「え？」

「できることをする、それだけのこと。」

例えば凡人であるのなら、その平凡さを発揮しないとそれこそ役立

たずだ。

俺は誰かの代わりじゃなくて、藤丸立香としてみんなの信頼に応える。そう決めたんだ」

「自分として、信頼に応える……」

それは、思いの外深くティアナの心に染み入る言葉だった。何かとても、忘れてはいけないことのような気がした。

「大丈夫だよ。何があろうと、どれほど未来に不安があろうと、怖がることはない。

基本、人間は無力で……上手くいくことなんて滅多にない。大抵は骨折り損で、こんなこともあるさと、笑って誤魔化するのが日常だ。

それを思い知って、その強さに助けられた……短くも長い旅。それが俺のこれまでの人生だった。

とりあえず、自分にはまだできることがある。それを疑うことなく、この先を生きて行こうと思う。俺と一緒に生きる、そう言うてくれる人たちのためにもね」

目の端でとらえた微笑みは、どこか誇らしさを感じさせるもので……少し羨ましかった。

同時に思う。自分もいつか、彼のように笑える日が来るのだろうか、と。

(そのためには、どうしたら……)

自分自身ですら気付かない意識の底の底で、確かにティアナはそう思っていた。

それからというものの、あまり頻度は高くないが偶にティアナはこの夢を見るようになった。

特に、焦りや不安が強い時にその傾向があつたのは、あるいは二人の意識がシンクロしやすかつたからだろうか。過去、似た経験をした立香と、今まさにその経験をしているティアナであるが故に。

とはいえ、基本立香はティアナの練習に対してあまり口は出してこない。

魔導は門外漢だというのものもあるし、人に指導できるほどのものを修めてもない。なにより、なのはの指導力には一定の信頼を置いていた

というのもあるだろう。彼女が施す訓練なら、今はその意味がわからなくても、いずれティアナに必要になることだろうと。少なくとも、その指導方針や目指す先は正しいものであるはずだ。

しかし、ある時を境に立香のティアナの訓練を見る目は厳しいものになっていく。

元からティアナの焦りや不安を見抜いているかのように声をかけてくれていたが、素直になれない彼女は「どうも」「必要ですから」と言葉少なに返しつつも、本音では嬉しく思っていた。見てくれる人がいる、評価してくれる人がいる、それは誰にとつてもうれしいものだから。

それでも目の当たりにする現実には、一度は和らいだかに思えた不安と焦燥を煽り……ついに、とある任務の際にミスショットという形で現れた。

そこからだ、ティアナが遮二無二練習に励むようになり、比例して立香が声をかけることが減ったのは。同時に、現実でも顔を出した立香はティアナから距離を置くようになる。

そうしてついには立香が固く口を閉ざし数日が経った頃、彼はようやく重い口を開いた。

ただしそれは、それまでの暖かな言葉とは真逆のものだったが。

「ティアナ、無駄な努力”””って知ってる?」
「っ!」

思わず動きを止め立香を睨みつければ、ティアナに一瞥もくれずにフェイトを慈しむ立香の姿があった。

「どういう……ことですか!」

つい抑えきれずに声を荒げれば、ようやくゆっくりと立香はティアナを見る。しかし、目が合っても彼は全く動じない。それどころか酷く冷めた、様に見える目をティアナに向ける。

結果、視線を逸らしたのはティアナの方だった。

「そのままの意味だよ。今の君がしていることは、無駄な努力そのものだ」

「無駄? 無駄って何ですか! 才能がない人間には、努力する資格

もないっていうんですか！

ふざけないで！ あなたみたいな人に：凄い人の傍にいるくせに、才能がないって諦めてる人に言われたくない！！

努力は言い訳の言葉なんかじゃない！ 成果を出してはじめて “努力した” って言えるんです！ 自分なりに “努力してる” “がんばってる”、だから傍にいてもいい。そんな言い訳が……”

「なんだ、分かっているじゃないか」

「え……」

「努力すること、それ自体に意味がある。だけど、それは本人にとっての話だ。」

周りに努力を認めてもらうには、君が言う通り “成果” がいる。成果なしに評価してくれる人もいるだろうけど、ね。でも、努力と成果は切っても切れない関係だ。

だからこそ――

君のそれは “無駄” なんだ

ティアナの言い分を全てわかった上で、なお彼女のそれを “無駄” と断言する。

二の句を告げずにいるティアナを他所に、立香は問う。努力とは、と。

「ねえ、ティアナ。いったい、努力って何のためにすると思う？」

「……自分に足りないものを身につけるため」

「うん、正解。それは力だったり知識だったり、あるいは技術だったりする。もしかしたら、誰かとの関係かもしれない。でもね、あらゆる努力に共通するものがある。それはわかる？」

「……………」

分からない。努力とは向かう方向、求めるものによって変わる。

だから、全てに共通するものというのはいく考えにくい。

（時間？ あるいは継続する根気？ それとも……）

「答えは、 “自信” だよ」

「自、信？」

「そう。さつき、君も似たようなことを言ったよね。 “努力したから……” っていう奴、アレも間違っではないんだ。だって努力は、誰

にだってできる自信をつける行為なんだから」

かつて英雄王に言われたことがある。「凡俗であるのなら数多をこなせ。才能がないのなら自信をつけよ」と。つまりはそういうことなのだ。

そして、だからこそティアナの行いは「無駄な努力」なのだ。なぜならそれは……

「身にならないどころか『自信』にもならない努力なんて、『無駄』以外の何物でもないだろう？」

努力することが無駄なのではない、その努力の形が「無駄」なのだ。

「じゃあ……じゃあ、どうすればいいって言うんですか!? 私のやっていることが無駄なら、どうしろって……」

「だから、努力するんだよ」

「……………え？」

「自分が凡人だと思うなら、その平凡さを発揮しろってこと。

まずはできることの再確認、次にそれを一つずつやっていく。上手くないことばっかりだろうけど……何とかなるさ。なにしろ、まだ『何も終わっていない』んだから。

ほら、リピート・アフタミー『何とかなるさ』」

「なんとか、なる」

「もう一度」

「なんとかなる」

「もつとお腹に力を入れて」

「何とかなる！」

「もう一声」

「何とかなる!!」

「どう? 気持ち、肩が軽くない?」

言われてみて気付く、本当に少しだけ……気が楽になったように思えた。

「凡人にもできること、その1『強がり』だよ。

いいかい、何も君にしかできないことを……なんて高望みをすること

はないんだ。まずは、自分にできることを、自分にもできることを探して見つける。あとは簡単だ、レンガを積んでいくようにそれを積み重ねる。

そうしていけば……ほら、少なくともできることについては自信をもつて言えるだろ、『できる』ってさ」

まずはそこからだ、と。その言葉を最後に、その日の夢は終わった。目が覚めても、別に不安や焦燥がなくなったわけではない。ただ……少しだけ、自分のやるべきことが定まった気がした。

「……………そうね。まずは、できることから手堅く行こう」

自分の足元すら疎かにして、どうして高く飛び上がることができるだろう。なぜかはよくわからないが、ようやくそのことに気付くことができた。

「……………ティアア？」

「起きてたならちようどいいわ。スバル、朝練するから付き合って。ついでに、気付いたことがあれば教えてちようだい。自分だと、分からないこともあるだろうしね」

「う、うん！」

相棒の異変に気付き心配していたスバルだったが、今日のティアアはどこか肩から力が抜けている。

なにより、あつさりとスバルを頼ってくるというのは割と珍しい。それが嬉しくて、しばらく沈みがちだった心が浮き上がる。

それからさらに数日後の模擬戦後、ティアアはなのはが彼女に与えようとしていたものと、その根底にある思いを知ることになる。

* * * * *

「ティアアは行った？」

「ああ。でも、これでよかったのかな？」

人に教えたり導いたりというのは、どうにも経験がないので不安を隠せない立香。

しかし、そんな彼を他所に後ろから覆い被さる様に抱きしめてくる

フェイトはどこか嬉しそうだ。

「大丈夫だよ」

「その自信はどこから？」

「君に大切なことを教わった第一人者ですから」

嬉しそうに、あるいは自慢げに断言されると流石に立香としても照れる。というか、自分で言っておいて照れないでほしい。いくつになっても反応が可愛く、体を入れ替えて抱きしめたくなる。

「フェイトからも言っておけばよかったのに……ってわけにもいかないか。フェイトからだど、その気がなくても嫌味に聞こえるかもしれないか。なら、これも適材適所と言えばそうなのかも」

「そう、なのかな？ 特に意識してたわけじゃないけど……」

なんとなく、立香から伝えてもらった方が良いと思っただけだから言わなかっただけなのだが……立香が言うならそうなのかもしれない。彼のそういう機微を察する力は、本当に抜きん出ている。

まあ、それとは別に今更……というのもあったのだが。そして、立香はしつかりそちらにも気づいている。

「まあ、確かに『今更』と言えば『今更』だよ。夢なのをいいことにずっと『寝たふり』してたわけだし」

「ず、ずっとじゃないよ!? ほとんどの場合、眠くて起きられなかったのは本当だし……たぶん」

そう、何しろ意識すらあつたりなかったりだったのだ。意識はあるが身体が動かないような時もあるれば、本当に完全に寝入っていた時もある。なので、毎回寝たふりをしていたわけではない。

「でも、してたこともあるよね？」

「……………はい」

なんというか、タイミングを逸してしまつて今更『起きてました』とは言いがらかつたのである。

「バツが悪いからって部外者の俺に部下のことを押し付けたのかあ。フェイトも悪い子になったなあ」

「そ、そんなんじゃないってばあ！」

「ははっ……じゃあ、そんな悪い子にはお仕置きしないとね」

「え？ お仕置きって……」

「フェイトは、どうしてほしい？」

「こ、こんなところじゃ言えないよ……」

何を想像したのか、顔を真っ赤にして蚊の鳴くような声で抗議してくるフェイト。

もちろん、斟酌するつもりなどない。フェイトは「こんなところ」と言ったが、むしろこんなところ「だからこそ」遠慮はいらないというものだ。まあ、見た目的には平原というか草原なので、気持ちはわからなくもないが。

「でも、ここ「夢」だよ」

「っ!？」

「夢なら、まあ大抵のことは良いよね？」

「よ、良くないってばあゝ……!？」

——ティア、なぜか“ちびノブ”にも人気だもんね。

アレはアレで何なのよ。妙に強いし、“ノブノブ”言ってる割に意味通じるし、いつの間にか種類増えてるし……頭がどうにかなりそう
だわ。

——えつと……ほら、よく見れば愛嬌がなくもない、よ？

疑問符浮かべてる時点で説得力ないわよ！

だいたいね、この前なんてブツサイクなネコっぽい怪生物にまで絡
まれたのよ！

なんなのよ、グレート・キャッツ・ガーデンG・C・Gつて!? なんであんな狭いところに蠢うごめ

いてるのよ！ 暑苦しいやら、気色悪いやら……しかも、人のことを
勝手に“ネコ二十七キャット”とかいうわけわかんない組織のメン
バーにしようとするし!? “第5位の席を用意しよう”ですって、い
るかそんなもの!?! とうか、“ネコ”と“キャット”で意味被つて
んのよ！

——あれ？ 私、それ初めて聞いた。え、ヴィヴィオも？ その
…ネコ(?)のクラスと真名は？

……知らない。

——はい？

だから、知らないの。

カルデアのデータベースにも記録がないし、立香さんたちに聞いて
もみんな知らないって……。

——カルデアでも把握してないサーヴァントかあ……そんなの
いるの？ とうか、いいいの？

知らないわよ、あんなトンチキ。

そもそもサーヴァントかすら怪しいし。ま、もしそうだとしたら言
動の支離滅裂具合からして狂バーサーカーか、あるいは名状し難さから
降臨フオーリナーあたりだと思っただけ。

はあ………ハロウインと時期がズレてるのだけが救いだわ。

——ふんふん……ねえティア、ヴィヴィオが……。

……大丈夫、一通りぶちまけたら大分気が紛れたから。ああは言っ
たけど、あんな“チキチキ怪獣ランド”に放り込んでおいて知らぬ存

ぜぬするほど薄情じゃないつもりだし。というか、そんなことしたら寝覚めが悪すぎるし。

悪いわね、みつともない所見せて。スバルも、付き合ってくれてありがと。

——あははは。まあ、アタシでよければいくらでも付き合うから。

そ……とはいえ、あのトンチキ共も大概だけど、神霊系と魔性系との接触も極力避けた方が良いでしょうね。

——王様たちとは、たぶん多少は会わないといけないだろうしね。でも、他にも気を付けた方が良い人たちはいると思うけど？

それを言ったら大半の連中が要警戒対象よ。その中でも、つてこと。

何しろ、価値観云々以前に私たちとは視点が違うんだから。

——まあ、そもそも生き物としてのカテゴリから違うもんね。魚と鳥”ってレベルじゃないし。ん？ ケツアル・コアトルさんとかパールヴァティさんは常識的だと思う？

否定はしないけど、それでもそこはやっぱり神様だからね。どうしたって視点が俯瞰的なよ。

ケツアル・コアトルさんなんかは善神らしく人間の繁栄を願ってくれているけど、基本的には”人間”っていう”種”の規模で言ってるからね。よっぽどじゃないと、個々の人間には焦点合わせないわよ。

ま、神様に目をかけられるっていうのもそれはそれで考え物だけど。

——八神司令も、結構苦労してるもんね。

加護のおかげなのか、運が良かったり巡り合わせが良いのは確かかなんだけど、それと釣り合うくらいにはトラブルに見舞われるものね。

解決まで道筋が見えてた事件だったのが、唐突に裏組織との関連が見えてきて大事になったりとか。検挙してみたら、把握してない密輸物の中に捜索指定ロストログアが紛れてて暴走寸前だったりとか。追い詰めた違法魔導士が破れかぶれで魔法を使ったら、何故か近くの可燃物に引火してあわや大爆発とか。

……挙げだしたらキリがないわね。

私が把握してる範囲でもこれなんですもの。たぶん、実際にはもつとあるわよ。

——ま、まあだいたいみんな大きな被害を出す前に治められてるらしいし、それで評価が上がってるのも事実だから……。

そうね。最終的にはいい方向に向かつてるし、結果的に実績につながってるのは確かだと思う。まあ、しなくていい苦労をしよい込んでる感は否めないけど。少なくとも、私は御免被りたいわ。

——私も、かな？

そんな厄介なモノ押し付けておいて、“また活躍したみたいね、私の加護があるんだから当然だけど”とか言っちゃう人達よ？ 関わり合いにならないに越したことはないわ。

——あ、あははは……え？ 加護をもらうのが大変なのはわかったけど、視点が俯瞰的だと何か問題があるのか？

ああ、そのこと？

問題っていうわけじゃないんだろうけど……ね。あの人たちから見れば、私たち^{人間}の法とか道徳、そして倫理、そういうのが“あやふや”に見えてしまうから歯牙にもかけないってこと。

ま、^{人間}こつちが決めたルールでしかない”って言ったらそれまでではあるんだけど……。動物が人間のルールを守らないことを怒ってもしょうがないように、神様とか魔性^外が人間のルールに縛られないのも、ある意味当然なんでしょうけど。

——でも、結構尊重してくれる人もいるよね。

まあね。だけど、それは結局“合わせてもいい”ってだけでしかないわ。

数百年、あるいは数千年……それどころか数万年かそれ以上の時間があり続けてきたあの人たちにとって、数十年……下手したら数年のうちに移り変わる“人間のルール”は、一時の“流行り廃り”と同じように見えるんでしょ。

流行に乗っかることはあっても、それに縛られることはない。

百年程度の寿命しか持たない、十年も経てば“ひと昔”に感じる人

間とじやモノの見方が違うのは当然なんだろうけど。

その点で言えば、何百年も旅を続けてきたアインスさんたちが私たちに近い感覚を持つてる方が奇跡的に思えるわ。

※アインスははやての「私設秘書」扱いなので、局内での階級や地位は持っています。その分、割と自由に動けたりもしています。

——あ、そういうことか。

アンタが納得してどうすんのよ。

ま、そういうことだからあの人たちがこっちのルールを守ることを期待するのはやめなさい。合わせてくれたら御の字、くらいに思っておくのが一番よ。

——うん、すつごくしつくりきた。流石ティア。

うっさい。ま、不本意ながらフェイトさんのところで補佐やってた頃にたつぷり揉まれたから。

ああ……クラウディアの時は良かったなあ。クロノ提督に徹底的に（バインドで）縛られまくったのは大変だったけど良い経験になったし、任務内容は物騒なものも多かったけど妙なトラブル起こす連中はいなかったし。

それが、たった半年でフェイトさんに連れられてスペース・ボウダーに乗り込むことになったあたりから……怒涛の日々だったわ。フェイトさん受け持ちの案件とかクラウディアでの任務とは別ベクトルに物騒な事件はまだいいとしても、偶に本当に意味不明な事態が発生してその対処に右往左往……。

そもそも、あの人たち自由過ぎるのよ。小さなトラブルから割とシヤレにならない事件まで休む暇もなく起こすし……っていうか、カルデアの「小さなトラブル」自体が割と大騒動なのよね。「小競り合い」で山が吹っ飛ぶとかどうなってんのよ。……偶に本気で殺し合い始めるし、そうなる「地形が変わる」どころじゃなくなるのよね。

その上、騒ぎに乗じて動く連中はいるし、立香さんも行方不明になったり意識が戻らなくなったりで……はあ、なんでシャリーリーさんは普通に馴染んでたのかしら。私、執務官試験最に受かって独立するま後

で結局慣れなかつただけど……というか、良く試験受かつたわね、私。自分でビックリよ。

——で、でもそっちでもいい経験にはなつたんでしょ？

そりやね、散々振り回されたおかげで大抵のトラブルには動じなくなつたわよ。

訓練の相手が豊富だから得るものは多かつたし、荒事に限らなくてもあそこにいるのは誰も彼もがその道のスペシャリスト、その気さえあれば教わることはいくらでもあつた。

……ま、訓練の度に殺されそうになつたり、教えてくれる内容が高度過ぎて理解するのも一苦勞だつたけど。

——テイ、ティア？

ええ、シミュレーターだから大丈夫なのはわかつてる。別に死ぬわけじゃないし、傷を負つてもそれは仮初のもの……リアリティあり過ぎてトラウマものだつたけどね!? アレに比べればなのはさんの訓練は遥かに人道的だつたわ!! しかも、どいつもこいつも面白がつて追い詰めてくるし! 自分たちができるからつて要求内容がどんどんエスカレートするし!

なのはさんならちゃんと踏んでくれた段階をすつ飛ばし過ぎだつつーの! こっちは生身の人間なのよ! アンタ達みたいなキチガイと同じにすんなあ!?

——おくい……。

ホームズさんに捜査のコツを教わろうとしたら「わかつて当然だろ」みたいな顔してドンドン先進んでくし、テロ対策とか教わろうと思つたらいきなり超エゲツナイやり方を^{シミュレーター}実地で体験させられるし、なんとかついていこうと少し無理したら^{ナイチンゲール}長にベッドに縛り付けられるし、他にもアレとかコレとかソレとか……あ~~~~~

~~~~~私にどうしろつてのよ!!!

——(や、<sup>病み</sup>闇が深いよ、ティア……どれだけ溜め込んだの!?)

挙句の果てに、ようやく独立できたと思つたら「よし、行ってこい」とばかりにカルデアに派遣されるのもざら。

そりやね、応援要請してもみんな行きたがらないのは良〜く知つて

るし、っていうか要請する度に断られて頭抱えてたわけだけど。

だから、割と長くあそこにいた私にお鉢が回ってくるのもわかるのよ。

——— だけどね、長くいられたからって慣れてるわけじゃないっての!?

——— 毎回毎回私がどれだけ疲れ果ててると思う!?! 任務明け3日は部屋から出る気力も湧いてこないのよ!! わかる!?

——— ティア、近い! 近いってば!?

——— フェイトさんもそうだけど、立香さんもホント凄いわ。アレで凡人とか絶対嘘だわ。

——— いや、ホント才能ないと思うんだけど、精神的に……。見習いたくはないけど、尊敬はしてる。

——— あゝ、今思い返すと異動の前にあいさつに行った時のクロノ提督が妙に優しい顔で、やけに重々しく「頑張れ」って言ってたんだけど、どういふことなのか納得するわ。

——— ティア、今度スイーツバイキングとか行こう。アタシ奢るから。

——— いっそ、アンタの時間丸一日ちょうだい。

——— 大丈夫、デイナーまでしっかり付き合うよ。

……… 私、アンタが親友でホント良かった。

——— うん、本当は凄く嬉しいはずなんだけど……今はすごく複雑。

——— ヴィヴィオもごめんね、こんな愚痴ばかりで。カルデアは機密事項が多くて、言える相手が限られるからつい。

——— ほおら、ヴィヴィオも気にしてませんって言ってるし、もうこの話はおしまい! ところで、なんか昔のこととか聞いて回ってるんだよね? 誰にどこまで聞いたの?

——— ふくん、この前はエリオとキャロからJS事件の時のことをね。

——— いやあ、今思い出しても自分の迷走具合には呆れるやら恥ずかしいやら……。

——— ねえ、ティアって立香さんのこと好きだったとかしなかつ

たの？

またその話？ 何度も言ったでしょ、確かにお世話にはなつたけどそこまでチョロくないわよ。触れてくれるならオツケーな静謐さんじゃあるまいし。

まあ、多少の違和感がないわけじゃないけど……今更でしょ。

——いや、あの人が触れたら死んじゃうから。チョロいかもしれないけど難易度極高だから。

そもそもね、スペース・ボーダーに乗ってからというもの、フェイトさんやマシユさんとイチヤイチャしてるのをうんざりするくらい見せられてるのよ。よしんば恋愛感情があつたとしても、アレを見てたら横恋慕する気なんて失せるっての。

あとアレね、清姫さんとかとのやりとりを見てると……ねえ。よくもまあ、結婚まで行つてるのに諦めないわと、逆に感心するわよ。静謐さんなんかは触れてもらえれば一応満足するからいいけど、他の人たちはそうじゃないし。

——あく……私、あの人がちよつと苦手。悪い人じゃないと思うんだけど、時々なんというか……怖い。

いや、あの人は普通に怖いでしょ。モノに関係なく「嘔吐いたら焼き殺す」のよ。

——だね。迂闊に冗談も言えないのは、ちよつとなあ……。

ん？ 六課の隊舎が復旧した頃には、しよつちゆう立香さんが顔を出してたのはどうしてなのか？

——えつと、立香さんが離れてた理由は知ってるんだっけ？

そう。ちよつとヴィヴィオを保護する前後くらいに「あの人が」を召喚して、言つちやえばそれが理由。ほら、管理局もそうだけど、それ以上に聖王教會的にね。

なもんで、各方面への根回しやら想定される状況への対処の準備、その他諸々で顔を出す余裕がなかったのよ。あの時点では、まだヴィヴィオとの関連はわかってなかったしね。

何より、初めて召喚された「こちら側の英霊」だったから。本人も協力的だったらしいから、検査だったり話を聞いたりでさらに忙し

かったわけ。

今思えば、もつと早く情報を共有してたら色々違ってたのかもしれないわねえ。

まあ、親しい相手にも漏らせないくらいに厄介な情報だから仕方なかったんだけど。下手したら、それこそ教会：最悪管理局も含めて関係が悪化してたかもしれないし。

——だねえ。だけど、そうならなのはさんとの関係も変わってたのかなあ？

ああ、別に「あの人」が嫌いなわけじゃないもんね。とはいえ、やっぱりなのはさん以外の方が「ママ」は嫌と。

——相変わらず、ヴィヴィオは「なのはママ」が大好きだねえ。で、立香さんが六課に顔を出してた理由だったわね。

カルデアのごたごたが落ち着いたからってのもあるけど、そんなのはヴィヴィオなら言うまでもなくわかってるでしょ。なら聞きたいのは、どうして「大人」だったのか、違う？

——あ、やっぱり。

まず前提として、立香さんが小さくなってたのは地上本部が渋ったからよ。

でも、皮肉なことにスカリエッティの起こした事件のおかげで地上本部は大混乱。特に、事実上のトップだったレジアス中将のことが大きかったわね。色々なアレコレが公になって、中将なんか「せーせーした」とばかりに追及される以上のことを暴露しちゃうし……おかげで陸と海とを問わず、膿が出るわ出るわ。

——その上、自分から裁判をネット配信させたかと思つたら……。

地上の体制見直し案やら兵器の限定復活の有用性を説き出しちゃうんだもの。どういう神経しているのかしら。

まあ、それくらい胆力がなきや、長いこと地上の平和を守ることなんてできなかつたんでしようけど。

「辣腕」通り越して「豪腕」で「ワンマン」なところのある人だったけど、そんな人が必要だったのが地上の実情だった。そんな人



がいなくなるんだから、当然やり方を根本的に変えていかなきゃいけない。きつと、誰よりもそのことをわかってたんでしょね。

だからこそ、混乱が最小限になる様に、市民の安全が脅かされないようにって……。

——やり方とかはアタシも複雑なものがあるけど、その思いよくわかる。難しいよね、そういうのって。

本当に。

でも、沢山の人に慕われてたわ。実際、とんでもない量の嘆願書が提出されて、本来なら“不名誉除隊”になるところを、穏当に“退役”扱いになったんだから。本人は最後まで不服そうだったけど。

——責任を取らせろ、それがワシの仕事だ！ だっけ。

ゼストさんと再会して、長年の胸の悶えつかがとれたのかもしれないわね。

ま、最終的には大勢に土下座されて渋々納得してくれてたみたいだけど。

まあとにかく、そういうわけで上を下への大混乱だったわけ。

そんな中、騒ぎに乗じて許可を取り付けたから、わざわざ子どもにならなくても顔を出せたのよ。

\* \* \* \* \*

新人フオワードメンバーが六課着任後初の休日を得て、結局それを返上することになった事件と前後する形で立香が姿を見せなくなり、代わりに“ヴィヴィオ”という少女が保護されて数日。

良い料理はまず食材から、という信条に則って市場を訪れていた機動六課バックヤードの責任者は、その鷹の目で魚の品定めをしていたかと思うと、卸業者に向けておもむろに口を開いた。

「それで、何かわかったのか」

「それがさっぱり。どうも、すっかり警戒されちゃってるらしくてね。動き辛いなんの……」

よく見れば、業者は何ともこの場に不釣り合いな長い緑髪的美青年

だった。

「……似合わないな」

「それはこんなところを密会場所に選んだ君の責任じゃないかい」

「悪かった。だがまあ、やり手の査察官殿がこんなところで業者の真似事をしてるなんて、誰も思わないだろう？」

「まあ、それには同意するよ。この格好も中々に新鮮だしね、魚だけに」

別にたいして面白くもないので適当に肩を竦めるに留め、怪しまれる前にさっさと話しを進めにかかるのが吉だろう。そしてそれは、目の前の男も同じ考えらしい。

「君に言われた通り、レジアス中将周りを調べているんだけど……成果は芳しくない」

「やっぱり地上本部：特に中枢はガードが堅いな」

「よく知ってるような口ぶりだね」

「この十年、俺なりに色々やってきたからな」

「確か、切嗣氏は君にその手のツテは残さなかったと聞いているけど？」

「それでも、じいさんの『おつかい』で顔を合わせた情報屋とかもいる」

「なるほど……」

「どうやら、そういった数少ないツテを基点に目と耳を広げてきたらしい。」

また、彼の仕事関係から得られる情報もあるのだろう。食事と無縁でいられる人間はいない。一流ホテルや高級レストランのシェフやオーナーに顔が利くからこそ、高官の動静も多少は入ってくるということか。

「一応念を押しておくけど、あまり危ない橋を渡らないでくれよ。もし君に……」

「はやての足を引っ張るつもりはないさ。あいつの夢は、まだまだこれからなんだからな」

「それがないとは言わないけどね……」

「とはいえ、上に行けば行くほどキレイ事じゃすまなくなる。シヤマルは参謀役だけあつて腹芸もそこそこなすけど、根が騎士だからな。汚れ仕事には根本的に向いてない、そういうのは俺の領分だよ」  
「……わかった。でも、君自身のことでも大事にしておくれよ。君に何かあれば、騎士たちやクロノ君、そして僕も悲しむつてことを忘れてやしないかい。」

「なによりはやてのことだ。結婚してまだ3年で、ようやく20歳になるところなんだよ。未亡人にするのは、嫁不幸にもほどがあるんじゃないかい」

「それこそ杞憂だ。あいつを泣かせるのは、十年前で懲りてる」  
「……だといいいんだけどね」

何しろ、割と我が身を顧みないところのある友人だけに、このあたりに関しては信用できない。

表の情報網はともかく、裏の情報網は多くを得られる可能性がある分リスクも高い。何度かそれに助けられている身としては、あまり強く言えない部分でもあるが。

「それで、僕は今後ともレジアス中將を調べるつてことでもいいのかい？」

「いや、警戒されているのならそつちは望み薄だろ。今までに得られた情報で充分だ。少なくとも、クーデターの可能性はまずないんだろ」

「ああ、そこは間違いない」

「ならいつそ、本局の方を調べてくれ。そつちの続きは俺がやる」

「わかった、あまり無理はしないでくれよ。しかし、本局をかい？」

「……昔から、ちよつと気になつてることがあつてさ。思い過ぎならそれに越したことはないんだが」

「詳しく聞いても？」  
「なんでも、昔養父が漏らしていたことがあるという。管理局の上は腐っている」と。

仮にも妹分やその友人たちが務める組織だ、念のために調べてみたが……それらしいものは見当たらない。もちろん、大なり小なり後ろ暗

いことや犯罪紛いに手を出している者はいるが、巨大な組織ならそれは「必要悪」の範囲だ。眉を顰めることはあれ、あの養父が「腐っている」と評するほどとは思えない。

だからこそ、この十年調べてきた。調べてもわからないからこそ、目と耳を広げてきたのだ。

未だ核心は得られていないが、近年になってようやくその「匂い」くらいはつかめてきたように思う。てつきり上層部のどこかが腐っているのかと思っていたのだが、どうやらそれどころの話ではないらしい。

「気をつけろよ。かなり危ない橋を渡ることになる、ヤバそうなら深入りせず……ってどうした？」

「ふふっ……いや、あの君がその「危ない橋」を渡ることを任せてくれるのが嬉しくってね」

「……できるなら俺がやってる。俺じゃこれ以上は無理だから、こうして頼んでるんだ」

本当は極めて不本意なことなのだが、養父のことを知っているのか「匂い」の元にこれ以上近づけない。だからこそ、止む無くこの友人を頼っているのだ。

（はやてやクロノ君から聞いた昔の君なら、それでも自分でやろうとしただろうに。さてこの話、カリム姉さんが聞いたらどんな顔をするかな）

「なんか悪い顔してないか？」

「気のせい気のせい。しかし、今時紙媒体かい？」

受け取った紙の資料を検索魔法と読書魔法の併用で内容を把握し、魚の影に隠して焼却処分する。燃えカスから内容を復元することも不可能なよう、念入りに。

「データ上だどこから漏れるかわからないからな」

「だから、情報を手書きで、ね。あらゆるネットワークから切り離しても、印刷する時には外部と接続することになるし、そこからデータを復元することも不可能とは言い切れないか。うん、僕も見習うとしよう。」

ところで、例の発言は本当なのかい？」

「らしいな。まあ、詳しい事情を知らないならそんな評価もあるだろう」  
（それにしたって、はやてを「犯罪者」呼ばわりはいい気分がしないな）  
しかも、言っていたのが例のレジアス中将だ。元々地上本部から良い目で見られてはいなかったが、まさかここまで目の敵にされていたとは。

公にすればスキャンダルにもできるだろうが……

「俺が言うことじゃないかもしれないが、短気は起こすなよ」

「わかっているよ、それで色々と有耶無耶にされたら意味がない」

これをきつかけに芋づる式……となればともかく、小事の影に大事が隠蔽されてしまうのでは本末転倒だ。

なにより、誰よりも妹分の傍にいる男が堪えているのだ。兄貴分として、我慢せざるを得ない。

「まあ、どの口で……とは思うけどな」

「仮に言っていることが事実だとしても、人のことを言えた口じゃないだろうに」

「たぶん、あの男の世界は二つしかないんだ。『同胞』や『市民』っていう『守るべき存在』と、『それ以外』のどちらか。事件の中心にいたはやては『それ以外』なんだろうな」

「中心といえど中心だけど、事実上カヤの外だったんだけどね」

「それを知る奴は少ない。詳しく知ろうとすればともかく、そうでないなら『命惜しさに騎士を使って罪を犯した』としか見えないんだろ」

それを避ける為に、かつてこの男は酷い嘘をつこうとしたのだ。まあ、それは結局はやて自身によって否定されてしまったわけだが。

とはいえ、はやてを守るといふ誓いはいまも続いている。いや、今はより一層重みを増しているだろう。だからこそ、彼女を守るためにこうして方々に目と耳を広げてきたのだ。

「『正義のために悪を為す』ことを俺は否定しないし、できない。そんな資格はないからな。でも、少なくともじいさんは自分の行いが『悪』だと理解していたよ。だからこそ、俺が後を追うことに良い顔をしなかったんだし、できるだけ直接的に関わらせないようにしてい

た。それが、欺瞞だとわかった上で」

「……」

「実際、中將の手腕は本物だ。強引過ぎるように見えるやり口は、そうしなければ何も守れなかったからだ。反感や不満を背負ってでも、結果を求める気持ちは理解できる。必要なら、『罪』に手を染める覚悟も」

「加えて、彼は味方を守ることに拘った。だからこそ、多くの局員たちがついてきている。」

“もし自分の身に何かあっても、家族や仲間が中將が守ってくれる”。その信頼があるからね。まあ、流石に隅々までとはいかないようにだけど」

「これだけの組織だ、無理もない。ティアナには悪いけど、それがたまにたまティエーダ一尉の時だったんだろうな」

本来、地上において殉職者に対し「役立たず」などという暴言は許されない。レジアス中將が赦さない。

実際、調べてみればその言葉を吐いた人物は、間もなく管理局を追放されている。幼かったティアナは、そこまで気付いていなかったようだが。

「そういう意味では残念だよ。何かが違えば、彼ははやての良い味方になってくれたかもしれないのに」

「そうだな。同じ思いがあるのにすれ違って、対立しちまう。それが人間なんだろうけどな」

「だけど、僕はやっぱりはやての味方だからね。どうしても思ってしまうよ。」

局員として罪を犯したあなたが、ありもしない罪を償うために局に入った子どもを否定するのか、とね」

長年にわたって地上を守ってきた功績は尊敬する。罪を犯してでも守るべきものを守ろうとする覚悟にも共感する。法の守護者として、かつて罪を犯した者に拒否感を持つのも仕方がないだろう。

しかし、だからといって彼の行いが正当化されるわけではない。

色々複雑に入り組んでいるからややこしくなるが、『それはそれ、

これはこれ〴〵と分けてしまえば、案外難しくもないことも多い。

どれほど成果を上げていようと、レジアス中將が〴〵を犯していたのならそれは紛れもない〴〵だ。成果によって過程を洗い流し、大義によって手段を肯定したとしても、その〴〵が完全に拭い去られることはない。

はやてを〴〵犯罪者〴〵と呼ぶのなら、彼もまたそうなのだから。その自覚があるのなら、私的な場であろうと…いや、だからこそそんな言葉をつけるはずがない。

「それと、アインスから頼まれてた資料だ」

「悪いな、大変だっただろ」

「本当さ。何しろ教会にとっても重要な資料だからね、手続きが煩雑過ぎる。そのくせ、正直確証を得るには情報が乏しい」

「カルデアと連絡が取れないのが痛いな。あいつ等は直接会ったことがあるんだろ？」

「そうらしいね。だけど今は、新しく召喚したサーヴァントのことでゴタゴタしているみたいだよ。向こうは治外法権だから、本気で遮断されると手が出せない」

「…逆に言えば、それだけ厄介なことになってるってことか」

「テストロツサ・ハラオウン執務官は？ 彼女、立香さんの婚約者だろ。何か聞いてないのかい？」

「流石にそこで公私混同はしないな。フェイトも、〴〵しばらく来られない〴〵とだけしか聞いてない」

若干寂しそうにはしていたが、彼女もお互いの立場は弁えている。あえて深く追求しようとはしなかっただろう。

「情報だけ送るってわけにはいかないか？」

「下手に流出すると後が怖いからね。しかも、未確定情報だ」

「そうだな。余計な混乱を招く可能性は極力避けた方が良いか」

「この情報はどこまで？」

「今のところ、はやてと俺までだ。アインスは割と覚えているようだし、だからこそ〴〵ヴィヴィオ〴〵のことに気付いたわけだが、シグナムたちは昔のことはあまり覚えていないからな。今のところ気付いた

様子は無い」

「高町教導官にも？」

そのことを考えなかったわけではない。ただ、裏の取れていない情報である二人の生活を乱すのは本意ではない。

なのはを「ママ」と慕い、なのはも手探りながらもそれに応えようとしている。色々特殊ではあるだろうが、あれは「新米ママ」と「愛娘」の姿そのものだった。

「変に意識せず、自然体でいる方が良いだろ。なにより、違うならそれに越したことはないし、それならなおさら知る必要はない」

「もし、アインスの懸念通りなら？」

「……折を見て伝えるべきだろうな。」

ガジェットに破壊されたと思われる生体ポッドの発見、保護された聖王家の特徴を持つ子ども、そしてヴィヴィオが持っていたレリツク

「……どう考えても、楽しい方向には向かない組み合わせだね」

正直、可能性としては「懸念通り」の方が高いように思う。「違う」場合の話が多いのは、そうであってほしいという願望が多分に含まれていることは自覚している。

「それとユーノ先生に資料を依頼してあるから、当分はそっちの結果待ちかな」

「ユーノ、無限書庫か。確かにあそこなら……でも、話したのか？」

「いや、適当な理由をつけてね。とはいえ、先生は頭がいいから……」

「その上なのはとも親しい。案外、自力で気付くかもしれないな」

とりあえず、今ある資料を持ち帰ってアインスと精査すべく市場を後にする。

結局、カルデア側と連絡を取ることはできなかったが、できたところであまり成果は望めなかっただろう。立香たちとて、「彼女」の「目」を見ることはなかったのだから。

そうして時は過ぎ、公開意見陳述会が迫る。

六課の後見人の一人であり、聖王教会の騎士にして管理局理事でもある「カリム・グラシア」の有するレアスキル、プロフェーティン・シユリフテン「預言者の著書



“。それは最短で半年、最長で数年先の未来を、詩文形式で書き出した預言書の作成を行うというもの。この能力によって記された“管理局体制の崩壊”を暗示させる内容への対策として、そもそも起動六課は設立された。

そして、その発端となる可能性が最も高いと目されたのが公開意見陳述会である。

内部からのクーデターの線は薄く、可能性としては外部からのテロの線が濃厚だ。おそらく、六課が担当するロストログア“レリック”に関与しているジェイル・スカリエツテイの一味である可能性が高い。目的やその後の狙いは不明だが、それを皮切りに世界は大きく動くことになるだろう。

だが、そう想定されるのなら当然対策する。そのための機動六課だ。

故に、六課前線メンバーの総力を挙げて警備にあたる…べきなのが。

(ねえティア、なんか今日のなのはさん様子がおかしくない?)

(アンタもそう思う? なんとというか、妙に無表情というか……)

どちらかというところ、割とコロコロ表情が変わる方はずなのだが、ヘリポートにて地上本部への出発を待つなのは顔には驚くほど変化がない。もちろん、状況によっては表情を引き締めそれを維持することもあるが、それはあくまでも“真面目な顔”なのであって、所謂“無表情”ではない。

考えてみると、なのはの“無表情”というのは初めて見た気がする。ヴィヴィオという時の様に表情筋が緩んでいるわけでもなく、訓練時や任務の時の様に引き締められているわけでもない。絶妙なバランスで緊張と弛緩が混同するその表情は、なのはが見せたことのないものだった。

その後、フェイトが見送りに来たりもしたのだが……

(あれ、ヴィヴィオがいない。どうしたのかな?)

(そうだね。てつきり一緒に来るかと思ったんだけど……)

まあ、もう夜遅いのでそういうこともあるのだろう。

と思っていると、それまでフェイトと別れ際に少しだけ話をした以外にはずつと口を閉ざしていたなのはが、唐突に朗らかな表情を見せる。

「あつれ〜？ みんなどうしたの♪ もしかして緊張してる？」  
「ブフツ」

朗らかな表情に負けないとてもテンションの高い澁刺とした声が、より一層違和感を強くする。

ついでに、何とか口元を隠し必死に笑いを堪えようとしているリンだが、全然全く抑えられていない。

「もお〜♡ どうしたのライン、いきなり笑いだすなんてひどいよ〜♪」

「な、なのはさんが壊れた……」

「え〜！ 私はいつも通り、みんな大好きな高町なのはだよ♪」

「い、いえ、なのはさんは普段あまりそういうことは……」

「うんうん!!」

「きゅ〜……」

スバルは慄き、ティアナが精一杯の勇気を振り絞って指摘すれば、ちびっこ二人も高速で首を縦に振って同意する。見れば、フリードも薄気味悪そうにしているではないか。

さつきまでとのテンションの落差といい、元々朗らかで明るい人なのは確かだが、今はそれが明後日の方向に向いていることといい、絶対今のなのははオカシイ。まるで、眼に見えない ♪♪ マークや ♪♡ マークがあたりを飛び交っているかのようだ。

「クツ、クククク……」

「あの、ライン曹長」

「何かご存じなら教えていただけませんか？」

「い、いえ…別に隠しているわけではないというか、元から隠せるとは思っていないというか……なのはさんと毎日会っているみんななら、気付いて当然ですし」

「え〜、そんなことないよ〜♪ こんなにそっくりなのに〜♡ みんなもそう思うでしょ♪」

もう、飛び交うを越えて乱舞するかのように撒き散らされ出している。

そして、そんなことを聞かれても困る。今の言葉から偽物：とかそういうのだとはわかる。なんでとかどうしてとか聞きたいことは多いが、確かに「そっくり」ではあるだろう。少なくとも、双子でもこうはいかないというくらいにはよく似た顔立ちだ。

しかし、「そっくり」だからこそ違和感が半端ではない。ぶっちゃけ、「気色悪い」というか「怖い」。

「と、とりあえず、地上本部についたら基本お口はチャックですね。誰かに聞かれても、声が枯れたとかで誤魔化しましょう。まあ、やっぱりというか案の定というかですが。いいですね、「シュテル」……わかりました。不本意ですが、いくら身近で過ごしているとはいえ、師匠ならいざ知らず彼女たちすら騙せないのなら仕方ありません」

途端、それまでの空恐ろしい「澆刺さ」はどこへやら、つい先ほどまでの無表情に逆戻り。ついでに、その無表情さと実によく似合うクールな声。声そのものはなのはそっくりなのだが、全くそうは思えないのが不思議だ。

「しかし……レヴィの言う通りだったというのが少々悔しいですね」

「あく、言ってみましたね。試しに練習してみたら、「キモチワル!」怖い! シュテルン超怖い!」と震えていましたっけ。まあ、気持ちにはわかりますが」

「残念です。話を聞いてから数日、私なりに修練を積んだのですが（斜め上というか、完全に見当外れの方にかつ飛んでいましたからねえ）」

「あの、リイン曹長、これはいったい……」

「あまり詳しくは話せないのですが、要は替え玉作戦です」  
「「替え玉?」」

なんでも、なのはには六課隊舎を離れられない理由が出来てしまっただらしい。とはいえ立场上、地上本部の警備には向かわなければならぬ。この二律背反を解消するために講じられたのが、この「替え玉

“作戦なのだ。”

「燕青さん…じゃないよね」

「うん。ホームズさんでもなさそうだし……」

そう聞いてパツと浮かぶのは、カルデアにおける変身能力持ちや変装の名人たちだが、確実に違うとわかるので除外。そもそも、現在カルデアは外部との接触を断っている。六課隊長陣としても、一度は候補に挙げたのだが止む無く断念。

そこで、代替案として挙げられたのが……数年前になのはやフェイト、はやてのデータから姿形を構築した友人たちのことだった。

「私の身体はなのはのデータから構築されたものですから、姿形においては寸分の違いありません。その点において、替え玉としてこれ以上ない適任と言えるでしょう。」

まあ、生活環境の違いなどで多少の差異は生じていますが、誤差の範囲です。髪は似た色合いですし、瞳の色はカラーコンタクトで誤魔化せます。武装は調整済み、魔力光もフィルターを通せば問題ありません」

「寸分の違いも、ですか？」

「……どこを見ているのです、リインフォース・ツヴァイ」

「クエツ!」

思わずリインの視線が“偽なのは”こと“シユテル”の胸元に行くくと、瞬時に彼女の左手がリインの小さな体軀を鷲掴みにする。しかも、いつの間にか物騒な腕部武装“ブラストクロウ”が展開されていた。

「なにか、言いたいことでも?」

「ブンブンブンブンブン!! な、何もないです! 何も思っていないですよ!」

「そうですか。ところで、魔力光などに問題がないか、ここで試すというのはどうでしょう」

言うや否や、ブラストクロウの中央から淡く赤い光が漏れだす。

「そもそもなのはさんには、そんな武装は構想段階ですら存在しない筈では!」

ちなみに、どうしてリインが胸元を見たかというところ……その奥にささやかながら「詰め物」がされているからだ。

未だ惑星再生作業中のエルトリアと生命豊かなミッドや地球との生活環境の違いか、栄養満点の食事と日々の訓練の賜物か、あるいはもつと別の……。いずれにせよ、元は同じはずなのにいつの間にか差が出来てしまったらしい。

まあ、それはおいておくとして……。

要は、シユテルに正式な渡航許可を持たせてミッドに来てもらい、そこで変装してなのはと入れ替わったわけだ。なにしろなのはデータの基にした姿の持ち主だけに、変装は最小限で済む。無表情なのと口を開けば演技をしてもしなくても違和感の塊なのが問題だが、誤魔化せないレベルではない。

なのはと日々直接顔を合わせている六課メンバーならいざ知らず、映像や雑誌で知っているだけの局員はもちろん、短期の指導を受けた者でも「ちよつと様子が変だがそんな日もあるだろう」で通せる……はず。

なにより、シユテル自身に高い戦闘能力があるのありがたい。いざという時に自分の身も守れるし、協力してもらえらるなら心強い。そうなると思魔化しが難しくなるが、地上本部が襲撃されるような状況では細かいことは言いつこなしだ。言い訳は……後で何とかすればいい。

そもそも、変装や変身可能なサーヴァントを寄こしてもらうのも問題だったのだ。カルデアが此方側に浮上して早数年、管理局とて何もしていなかったわけではない。まだ有効な対策は確立できていないが、それでもサーヴァントを構成する「霊基」反応を検知するセンサーは開発されている。アサシンが本気で気配遮断すればまだしも、そうでないなら確実に反応するくらいの精度のものが。

そうになると、サーヴァントを替え玉にするのも考え物だ。いくらセンサーを騙して侵入したとしても、有事になれば気配遮断は解かざるを得ない。そうなれば、当然センサーが反応する。許可を得ずにサーヴァントが管理局の重要施設に入るのは大問題、後から確実にカルデ

アとの関係が悪化してしまう。

その点シユテルならまだ、取り繕いようがある。その意味で言えば、カルデアと連絡が取れようが取れまいが、結果は変わらなかつたかもしれない。

そしてその頃、なのはがどこで何をしていたかというところ……

「うう、シヤマル先生。どうしてもここにいなきやダメですか？」

シヤマルの城である医務室のベッドに腰掛け、絶賛手持ち無沙汰だった。

「当然です。なのはちゃんは本来ここにいないはずの人なんだから、ウロウロしてたら問題でしょ」

「は……い……」

実際、これは明確な命令違反。それによつて生じる諸々全て、悩みに悩んだ末なのはは覚悟してこの選択をした。だからこそ、自分からシユテルに頭を下げて助力を乞うたのだ。

もちろん、自分の行いが周りに多大な迷惑をかけることも理解している。事情を知るはやてやフェイトは背中を押してくれたが、ほとんどの仲間たちは何も知らされていない。知ること、命令違反を幫助した責任を追及させないためだ。だというのにここで外をウロウロしてしまつては、全てが水の泡。

そんなことはなのはも理解しているが、正直言つて落ち着かない。命令違反など、まだ魔法と出会つて間もない頃、ジュエルシードの一件の時にクロノやリンディの指示を無視して飛び出して以来ではないか。

あの時と違い今の彼女は一等空尉の地位を持つ戦技教導官、相応の責任を帯びた身だ。エース・オブ・エースとして、皆の規範になるべき立場でもある。

多くの人たちの信頼と期待に背を向けていることを思えば、罪悪感が募る。「命令違反」を問われた時のために、辞表含めすべて用意済みではあるが……だからこそ、今やれることがなくて落ち着かない。気を紛らわせる手段がないのだ。

「……後悔、してる？」

「……………いえ、それだけはしません。ヴィヴィオを守る、それが今の私にとっての“一番”ですから」  
かつて、フェイトが“一番”のために悪を為し、罪を背負うことを覚悟したように。

なのはは守りたいのだ、自分を“ママ”と慕う幼子を。

直接見たことはない。それでも、話に聞いた“彼女の在り様”を忘れたことはない。絶対に、ヴィヴィオに同じ思いをさせてはならない、させたくない。

そのためなら、自分の“過去”と“未来”を天秤にかけても惜しくない。それだけは、確かなことだから。

ちなみに、ヴィヴィオにはなのはは大事なお仕事があり、みんなとは別々に行動する……というような趣旨のことを伝えてあるので、彼女もここになのはがいることを知らない。

「なら、ドンと構えていなさい。ママさん」

「……はい」

優しい微笑みを向けられ、はにかむ様に答える。

そう、すでに覚悟は済ませている。これからのことも、ヴィヴィオのことも。

(守るんだ。これまでも、これからも)

「……あら？ お客さんかしら」

自身の覚悟を確かめるのは。その時、来客を告げるアラームが鳴る。

シヤマルは手でなのはに隠れるよう指示し、なのはもそれに従う。しかし、やってきたのは予想外の人物で……

「ユーノ君？」

「突然すみません、シヤマル先生。なのは、ここにいませんか？」

「え、えつと……」

咄嗟のことに、用意していた言い訳が上手く出てこない。というより、なのはがいることを前提にしているあたり誤魔化す意味がないようにも思える。そんなシヤマルに対し、ユーノがさらにもう一押しを加える。

「なのはが保護責任者をしているあの子、ヴィヴィオのことで」

「っ！ あなた、まさか……」

「気付きますよ。アコース査察官ははっきりしたことは仰いませんでしたけど、請求された資料と六課で保護した子のことを結びつけるのはそう難しくありません。そこに、『例の事件』のことを思い出せば、なおさら。」

想像力は、考古学者の大事な能力ですから」

「……そうね、あなたはあの事件の詳細を知っていたのよね」

もう同じ事態を起こさないように、起きてしまった時に今度こそ適切な対応ができるように。カルデアは独自に研究を進めると同時に、可能な限りの情報を収集した。その一環として、無限書庫にも協力を求めたのだ。

望みは薄いかもしれないが、できることをすべてやるために。そのためには、最低でも責任者であるユーノには詳細を知ってもらわなければならないというわけだ。管理局上層部にすら報告していない、あの事件の真相を。

「なのは、いるんですよね」

「……入って」

念のためにはっきりと答えることはせず、ユーノを室内に招く。

そしてそこには、諦めて姿を現したなのはがいた。

「ユーノ君……」

「良いんだね……とは聞かないよ。ここにすることが答えだし、なのはが『こう』と決めたら譲らないのはよく知ってる」

「じゃあ、何をしに来たの？」

「もちろん、君の力になりたくて」

迷いなく、力強く言い切る。そこには確かに、彼なりの覚悟が宿っていた。

「どう、して……」

「ここに居るのは時空管理局の一等空尉でもなければ、教導隊のエース・オブ・エースでもない。ただの『高町なのは』だろ」

「そうなる、かな」



「だからだよ」

「？」

ユーノの言わんとすることがわからないのか、疑問符を浮かべるのは。そんな彼女の反応に薄く笑みを浮かべながら、ユーノはさらに言葉を紡ぐ。

「覚えてる？　まだ管理局：クロノやリンディさん、それどころかフェイトともまだ出会ってなかった頃。無限書庫の司書でも管理局の民間協力者でもないただの“ユーノ・スクライア”として、普通の女の子“高町なのは”に僕は助けられた”

「うん、懐かしいね。つい最近のことみたいだけど、ずっと昔のことのようにも思える」

「それから、色々なことがあった。フェイトたちとぶつかり合って、クロノたちと出会って……」

「冬には“闇の書事件”もあったよね。今考えると、ちよつと事件起こり過ぎだけど”

「あの頃のなのはは、囑託魔導士だったよね」

「ちゃんと試験を受けたわけじゃなかったから、臨時だったけど”

「つまり、フェイトですら“管理局関係者のなのは”としか一緒に戦ったことはないってことになるよね”

「そう、だね」

言われてみれば、確かにその通りだった。

初めてフェイトと肩を並べたのは、彼女が海に沈んだジュエルシードを強制発動させた時。あの時、既になのはは管理局側と呼べる立ち位置にいた。

「僕はもうなのはたちと同じ空は飛べない。僕の戦場は無限書庫で、みんなを情報面でサポートしていくって決めたから”

「それは……」

「いや、別にそのことを卑下してるわけじゃないんだ。それが“無限書庫のユーノ”の戦いだって言うだけ。

「だけど、なのは。ここに居るのは今の君と同じ、“ただのユーノ・スクライア”だよ”

「え……」

思わず、眼を見開く。ここまで言われてその意味が分からないほど、鈍いわけではない。

「管理局の魔導士 高町なのは」の隣は譲っても、ただの高町なのは」の隣は誰にも譲らない。相手がフェイトでも、ヴィータでもね。だから、ただのユーノ・スクライア」としてここに来たんだ。

また君と戦うために、あの時助けてくれたなのはを——今度は僕が助ける」

「でも、ユーノ君には無限書庫が……」

「所詮は民間協力者さ。クビになってもいい様に引継ぎ書類は全部用意済み、後はアルフが上手くやってくれるよ」

「が、学者さんとしてだつて……」

「学会と管理局は別だけど……追われる可能性がないとは言えないか。まあ、元々研究は半ば趣味みたいなものだしね。学会を追われても、趣味で研究するのを止められるいわれはないよ。だからこそ、スクライア一族は流浪の民をしている部分もあるし」

「えつと、だから、その……」

「まあ、生活していくにはお金がいるからね。研究関連以外に特に使う当てもなかったから、それなりに貯蓄はあるけど、今後のことを考えれば手に職は必要だし……いざという時は、翠屋で修業させてもらえるように口を利いてもらえないかな」

「そ、それは良いけど……今後のことつて？」

理解が追い付かず、つい思考が現実逃避がてら妙な方向に進んでしまう。兄も姉も実家の店を継ぐわけではなく、剣の道に進んでしまった。その上、自身もこんな道を選んだのでそうなら両親は喜ぶかもなあ……とかそんなことを思っていたら、つい妙なことを聞いてしまった。

しかし、その問いも予期していたのかユーノの返事は簡潔だった。

「結婚資金とヴィヴィオの養育費」

「っ!?! な、なに言ってるのユーノ君！ こんな時に変な冗談やめてよー！」

「冗談じゃないよ」

「ふえっ……」

「そういえば、もうあれから一年か……改めて言うよ。高町なのはさん」

「は、はい！」

「僕と、結婚してください」

「……………っ／＼」

真つ向からの直球勝負に、顔が熱くなるのを止められない。

それは、一年前にも言われたこと。その時は「空の人間だから」「いつ墜ちるかわからない」と言って拒んだ。だが、それが明確な拒絶になっっていないことはなのは自身分かっていた。

そしてユーノも、それを理解して「ずっと待ってる」と言っただけでなかった。あれからまだ一年、改めて告げられた愛の告白は、あの時よりずっとずっと重くなのはの胸に響いた。

確かに、はやてやフェイトに命令違反を犯してもヴィヴィオを守ることを告げた時、“その可能性”を引き合いに出しはした。だが、正直あれは“方便”に近いものだった。そうなれたらいいと思うと同時に、心のどこかで“都合のいい勝手な話”とも考えていたのだ。なのに、その“都合のいい勝手な話”自分からやってきている。

嬉しくないわけではない……ただ、それに甘えてしまうわけにはいかないのだ。

「ユーノ君、言ってたよね。私には空が似合うって」

「そうだね。付け加えるなら、空を飛ぶのはが好きだとも言った」

「そ、それはいいの！ だけど私、もう飛べなくなるかもしれない」

「そうだね。こんな命令違反、“不名誉除隊”だって十分あり得るし、なのはのランクを考えれば“魔力の嚴重封印”もあるだろうね」

「ユーノ君が好きだって言ってくれた私じゃ、なくなっちゃうんだよ……」

「それは違う。確かに“空を飛ぶのはが好き”なのは確かだけど、それはそもそも“なのはの”ことを愛している”からだ。飛べなくなったところで、なのはがなのはなことに変わりはないだろ」

その切り口ではユーノの決意が揺らがないことが、嫌というほど伝わってくる。

拒まなければいけないのに、自分につき合わせて将来を台無しにさせていいはずがないのに……嬉しいと、幸せと感じる自分がいることを、どうしても否定できない。

「……ユーノ君、好き」とか「愛してる」とか、そういうことスラスラ言えるタイプだったんだ」

「これでも結構頑張ってるんだよ。ちゃんと言わないと、なのはすぐ逃げるんだから」

そう言われると、返す言葉もない。だから、形勢不利を悟って早々に転身することにする。

「……多分、地上本部は囿で、スカリエツテイの狙いはヴィヴィオだと思う。ヴィヴィオがいれば、ゆりかご」を動かせる可能性がある」  
「うん、そっちは僕も調べたことだからね。おそらく、スカリエツテイは「聖王のゆりかご」を見つけたんだ。

彼にとって誤算だったのは、僕たちが「ゆりかご」と「聖王」のことを既に知っていたことだろうね」

アインスが気付いた可能性は、既に核心と言っているレベルにまで至っている。

「あの事件」に関与していた面々ですら直接見たことのなかったその「目」を、唯一知っていた彼女だからこそ気付けたこと。「金の髪」に「赤と緑の虹彩異色」、そして極秘裏に行われた検査の結果明らかになった「虹色の魔力光」の意味を。

「そんなヴィヴィオを狙ってくるんだもん。きっと、相当な戦力を注ぎ込んでくると思う」

「だろうね」

「なのに、一緒に戦うっていうの?」

「足手まとい、っていうのは承知しているつもりだよ。十年飛び続けて力と技を磨いたのはと、攻撃魔法はからつきしで防御とサポート系ばかりな上に、ずっと書庫勤めの僕じゃ雲泥の差だ。

「だけど、それでもいいないよりはまし」くらいの働きはできる」

「そんな、こと……」

あるわけがない。今もクロノと模擬戦を繰り広げ、十二分に渡り合えるユーノの防御とサポートの優秀さは誰よりもよく知っている。何しろ魔法と出会って間もない頃、なのははそれによって守られ、それを駆使する彼に育てられたのだから。

「いないよりマシ」なんてとんでもない。千の味方を得るよりも、遥かに心強い援軍だ。

「ユーノ君、一杯怪我しちゃうよ」

「その覚悟もなしにここに来るわけないだろ」

「私も、沢山怪我すると思う」

「大丈夫、治癒系は得意だから。シャマル先生もいてくれるしね」

「……それでも、残る怪我をしちゃうかもしれないよ」

それが、なのはの最期の不安だった。醜い傷の残った自分で、本当に良いのかと。

答えなんてわかり切っているはずなのに、どうしてもそれが怖かった。

「……なんだ、そんなことを気にしてたの？」

「そんなことって、大事なことなんだよ！　そ、その……好きな人には、綺麗な自分を見てもらいたいし……」

「やつとやってくれたね。その一言を聞くのに、十年もかかった。

でも大丈夫。そんなことじゃ、なのはの輝きに傷一つだっけつきやしない。そもそもそれ、美由紀さんに言える？」

「うぐう……」

剣の道を志した姉や叔母の身体には、大なり小なり傷が刻まれている。

もちろん、それを醜いと思ったことはない。とはいえ、割と婚期を気にしだした姉にその話を振るほど、なのはも命知らずではない。一足の間合いでは、今でも勝ち目が無いのだ。

それほどまでに、本物の「御神の剣士」は人間を辞めている。どうして魔力による強化もなしにあんな動きができるのか、身内でありながら不思議でならない。特に、カルデアの剣豪連中と交流してからは

それに磨きがかかっている。

「それで、他には？」

「……………私、正直言つて今でも自信がないんだ」

「なんの？」

「ヴィヴィオを守りたい、それは私の本当の気持ち。だから、ヴィヴィオの本当の“ママ”になろうってそう思った。なのに……怖い。私なんか、本当にあの子のママでいいのかわからない。

今ここでヴィヴィオを守り切れれば、自信が持てるんじゃないかって……そう思ってる。そんなの、全然理屈になってないのにな」

「……………」

それは、ユーノには答えられない問いだ。幼くして両親を亡くし、スクライアの一族によって育てられた彼には“善き父”も“佳き母”もわからない。その意味で言えば、自分こそふさわしくないのではないかと思う。

ヴィヴィオのママになろうとしているのはと結ばれるということとは、自分があの子の“パパ”になるということだ。果たして、父も母も知らない身の上で、その資格があるのだろうか。

しかし、だからこそ……

「……………一緒に、探していこう」

「一緒に？」

「僕の中になのはの不安を晴らす言葉はない。僕には、両親との思い出がないから……」

「ご、ごめんなさい！ そんな、つもりじゃ……」

「いや、謝らなくていいよ。それこそ、そんなつもりじゃなかったし。ただね、そんな僕だから良い父親っていうのはわからない。だからこそ、一緒に探してほしいんだ。こんな僕でも“本当のパパ”になれる方法を」

「……………」

「まあ、さしあたってはヴィヴィオに“パパ”って認めてもらおうところからかな。なのはと違って、僕はまずそこから始めないといけないし」

(いいのかな、そんなやり方でも。手探りで探していく…ああでも、魔法も教導も初めはそうだったつけ)

教えてくれる人はもちろんいたが、それでも自分なりのやり方は自分で見つけていくしかなかった。

きっと、親子というのもそうなのだろう。わからないことは両親や周りに聞いて、自分なりのやり方を見つけていく。きっとそれが、正しい親子”の形なのだろう。

「……一緒に、探してくれる?」

「むしろ、僕からお願いしたいことだよ」

「それじゃ…よろしくお願いします。その………これからずっと、幾久しく…だっけ」

差し出されていた手を握れば、線は細いがそれでもなのはより大きな手で包み込まれる。

その温もりが嬉しくて、胸の奥…魂の芯がじんわりと熱くなる。

(ああ、こんなに幸せな気持ちを、フェイトちゃんやはやてちゃんは知ってたんだ。なんか、ズルいなあ……)

身勝手なことを思っていると自覚しつつ、そんなことを思わずにはいられない。

「うん、ずっと。死が二人を別つまで。できれば、その後も末永く」

「にやはは……ニトクリスさんかエレシユキガルさんにでもお願いしたら、何とかなるかな?」

「あ、死後の世界が空想とかじゃないからなあ」

実際に自分たちが死んだ時に彼女たちの管轄になるかはわからないが、もしもそうなれたらそれはとても素敵なことではないだろうか。

今度、念のために確認してみようと思う。

「でも、本当にいいの? 上手くいったらいつたで結婚前から子持ちだよ、私」

「世の中に子持ちで結婚するカップルがどれくらいいるか、統計データ出そうか?」

「ちよ、ちよつと興味はあるけど……いいや。結局、その人の気を持ち

ようつてことだもんね」

「そういうこと。そして僕は、はじめから可愛い娘がいる結婚つていうのも悪くないと思ってる」

「……うん、ありがとう」

自然、二人の距離が近づきやがてゼロになる。そうして、どちらからともなく瞼を閉じて顔を寄せ……ようとしたところで視線に気づく。

(ジ～～～～～～～～～～……)

「っ!?」

「あら、気付かれちゃった」

「シャ、シャマル先生!?!」

「ずっと、見てたんですか?」

「私としては『見せつけられた』と言いたいところね。熱いわく、南極の氷も解けちゃいそう」

「……………」

つい雰囲気の流れされて周りが見えなくなっていた数秒前の自分たちに、思い切り喝を入れてやりたくなった。というか、いい年して小学生みたいなことを言わないでほしい。

その後、なのはたちの読み通り機動六課はガジェットの大群と戦闘機人たちによって襲撃された。

高強度のAMF環境下での戦いは過酷なものだったが、支援に長けたシャマルと防御に長けたザフィーラ、そしてその両方を適宜使い分けるユーノのおかげもあり、なのはは背中を気にすることなく空を舞う。

とはいえ、流石に多勢に無勢。

300人で10万人と三日間にわたって戦い抜いた、レオニダスⅠ世「炎門の守護者」の偉大さを身を以て思い知る時間だった。

そう、彼の故事を知るからこそ、なのはは『勝利』を目的としていなかった。元より、狙いは『時間稼ぎ』一択。六課が危険に晒される可能性を知っているのなら、応援に駆け付けなければならぬ可能性も想定のうち。何とか仲間たちが応援に駆け付けるまでの間、なにが



なんでも時間を稼ぐ。

そのつもりで戦い……見事、なのはたちはそれを成し遂げた。ただし、支払った代償は決して軽くはない。

隊舎はほぼ壊滅し、多くの部隊員たちが負傷した。特に、防衛線に参加した者の中には重症者も少なくない。ヴィヴィオをはじめとした非戦闘員だけは、最奥に避難させたことで無事だったのが救いだろう。

とはいえ、〃盾の守護獣〃の二つ名に恥じることなく、最後までなのはたちを守り切ったザファイーラは意識不明の重体。ユーノとシヤマルも重傷を負い、なのはに至っては負傷に加えて限界以上の魔力行使が原因でリンカーコアに多大な負荷をかけることに。結果、長期にわたるリハビリと後遺症を覚悟しなければならなかった。

そんな満身創痍の中、それでも仲間たちは間に合った。

いち早く駆け付けたエリオを先陣に、キャロが有りつ丈の魔力で契約している竜種を総動員して敵を殲滅。辛うじて事なきを得た。

とはいえ、悪いニュースも少なくない。

例えば、スバルの姉ギンガが敵に攫われ、地上本部へ向かっていた推定オーバーSクラスの騎士と交戦したヴィータが撃墜。ラインがダメージを肩代わりしたことで、ヴィータ自身は無事だったが、ラインは意識を失うことになる。

更に、地上本部は大きな打撃を受け、首都クラナガンの都市機能は麻痺。事実上の敗北と言っていいありさまだった。

しかしそれでも、良くも悪くもまだ〃終わったわけではない〃。

「ごめんね、フェイトちゃん。こんな大事な時に」

「何言ってるの。あとのことは私たちに任せて、ユーノとゆっくり休んで。」

ヴィヴィオを守って、結婚も決まった、大事な体なんだから」

「結婚はフェイトちゃんもでしょ。子どもって言うなら、エリオとキャロがいるんだからお互い様だよ」

「だからこそ、だよ。私は元気、なのはは重傷、リンカーコアも含めてドクターストップ。加えて、謹慎処分真っ最中。むしろ、休む以外の

「選択肢がないと思うけど?」

「それは、まあ……」

「それに、頼りになる助っ人もいるしね」

「そう言つてフェイトが病室の外に視線を向けると、フォワードメンバーに加えて水色と灰色の髪が見える。」

「うくん、シュテルだけでも結構無理したのに、よくレヴィや王様まで呼べたね」

「まあ、元々レヴィは『シュテルンばかりズルい』つて言つてたし」「でも、王様に規則のこととか聞いて『堅苦しい』つて辟易もしてたよね?」

「それでも、駆け付けてくれたんだから感謝しないと」

「それで、具体的には?」

「地上本部が混乱してるから、隙をついてちよつとね」

「……フェイトちゃん、最近ますますカルデアに染まってきたくない?」「別に悪いことはしてません。正規の手続きをただけだよ。まあ、いつもなら弾かれるところだろうけど」

あくまでも分類上『魔導士』でしかない三人だからできたことだ。これに加えて色々怪しいユーリ、さらにまったく別系統の技術体系である『フォーミュラ』を使うイリスやフローリアン姉妹を呼べば、流石に引つかかっただろう。3人も協力したいと言つてくれたのだが、そういうわけなので我慢してもらつた。

「今は、三人とも囑託魔導士扱いで六課預かり」

「うん、それは頼もしいね」

「それと、もう一人」

「あれ、他に誰かいるの?」

「思いもしない隠し玉がね。そういうわけだから、こっちは私たちに任せてなのはゆつくり休むこと。」

「ヴィヴィオ、しっかり見張つてね」

「はーいー!」

「うう……」

流石にヴィヴィオに監視されては妙なことはできない。もちろん、

これ以上規則を破るつもりはなかったのだが、それでもヴィヴィオに心配されるといのはなんとも……。

色々覚悟の上だったとはいえ、全身包帯塗れの姿に泣かれた時は本当にどうしようかと思っただけだ。

だがそれでも、確かにこの子を守れたのだと思えば誇らしさが湧き上がってくる。自分の選択は間違っていなかったのだと、その確信を強める。

ヴィヴィオが病室に残されたのは、なにもなのはたちの監視の為だけではない。

聖王教会系列の病院であり、いまは多くの負傷者を収容しているこの警備は嚴重だ。もし、またスカリエツテイ一味がヴィヴィオを狙っても、簡単には手が出せないだろう。加えて、なのはたちの傍にいれば万が一の時にも対処しやすい。いくらなのはたちが負傷しているとはいえ、あちらも相応の痛手を負ったはず。

少なくとも、六課襲撃に関わった戦闘機人は軒並み、地上本部襲撃に参加した者の中にも戦線離脱者はいるはずだ。そんな状態では、なのはたちの病室に忍び込む余裕はあるまい。

とりあえず、あちらの体制が整うまでは。そして、その間に趨勢を決するべくフェイトたちは負傷し疲労した身体を押し動いている。力になれない自分に歯がゆさを感じつつも、今は皆を信じて任せるしかない。

ただまさか、負傷した自分の姿を見て、ヴィヴィオがある決意を抱いていたとは思ひもなかったが。

幼いとはいえ、ヴィヴィオは頭のいい子だ。母の負傷の理由と意味を察した彼女は、強く思ったのだ。『強くなる』と。こんなになつてまで守ってくれた母の娘たるにふさわしい自分になり、いつか母を守れるようになりたいと。

そしてそれは、『彼女』との出会いを経てより強くなる。触れ合い、言葉を交わす中で垣間見た彼女の記憶がそうさせたのだ。

だが、事態は思いもしない角度から動き出した。

発端は、はやての恩師でありスバルの父親である『ゲンヤ・ナカジ

マ〃三佐が部隊長を務める陸士107部隊への来訪者。

いや、正確に言うのなら……

「すまんが、部隊長に取次ぎを願いたい」

「失礼ですが、今は緊急事態に付き一般の方への取次はお断りしています。アポイントメントをお取りの上……」

「……そうだな。それが常識的な対応だ。では、一言だけ伝えてほしい。〃ゼスト・グランガイツ〃が来た、と。」

来るまでの間、そこで待たせてもらおう」

「は、はあ……あの、〃〃用件は？」

「………自首だ。今回の事件における、犯人側の一人だ」

ゼストと名乗った偉丈夫は大人しく手錠を嵌められ、伝言を受け取ったゲンヤが慌てて受付まで駆け付けるまでに、そう時間はかからなかった。

そこからの動きは早かった。

ゼストはスカリエッティ一味の情報を提供する代わりに、いくつかの条件を提示した。

一つ、此度の一件に関わった召喚士〃ルーテシア〃と融合騎〃アギト〃の保護。

一つ、自身が持つ指輪に収められたすべてのデータを、必ず公のものとする事。

一つ、レジアス・ゲイズと会わせて欲しい。

この三つが叶うのなら、一切の抵抗はしないと。

スカリエッティの企み、その最重要要素の確保を失敗したことを知った彼は、方針を変えたのだ。これ以上、スカリエッティについても目的は達成できない。それならば、いっそ混乱した今の状況を利用しよう。

正攻法で目的を達成しようとするれば、全てをのみ消されて闇に葬られる可能性があった。だが今ならば、そうなる前にたどり着けるかもしれないと踏んだのだ。

そして今は亡き妻の上官であり、旧知の間柄でもあった男の手錠を解き、ゲンヤは彼を客人として扱い、その条件を呑んだ。

そこからの動きは早かった。

自身はレジアス中将との面会の段取りを整えつつ、六課に得られた情報を伝達。

六課はその情報から聖王教会と連携してスカリエツテイのマジトを絞り込み、彼らが動く前に先手を打って攻勢を仕掛けることに成功する。

主な狙いは二つ。スカリエツテイ本人の確保と、秘匿しているであろう「聖王のゆりかご」の破壊。

前者にはフェイトを中心とした教会戦力が、後者にははやてが指揮を執る六課メンバーが向かうことに。

ただ、ゆりかごへと向かう面々の中に見慣れない人影があった。

「良いのかよ、アタシのこと信用して」

「私は騎士ゼストからお前を任された。少なくとも、友を助け身の振り方が決まるまでは面倒を見るさ。」

「お前も、騎士ゼストや友のため、為すべきことがあるのだろうか」

「……まあな」

渋々といった様子で答える「アギト」だが、別に反抗的というわけではない。つい先日まで敵だった相手との距離感をつかみかねているのだろうか。不器用ながらも真面目な気質がうかがえる。

なぜ彼女がここにいるのか。それは、ゼストと同行していたことで早々に保護され、その後情報の確認にやってきたシグナムを見込んで託されたからだ。

アギトもまた、ルーテシアやゼストに問われる罪を軽くするため、いわば司法取引の一環として協力を了承した形であった。なにより、真正古代ベルカ式の騎士にして炎熱変換資質を持つシグナムと、「烈火の剣精」を冠する融合騎であるアギトの相性は極めて良好だった。あるいはゼストは、一時のものではなく、真の意味での「ロード」と「融合騎」になれると踏んでいたのかもしれない。

「でも、どうすんだよ。あの変態ドクターの切り札がホントに「聖王のゆりかご」だってんなら、いくら「聖王」がいなくても簡単にはいかねえぞ」

「ああ、〃聖王〃がいなければな」

(ん？　なんかそれ、おかしくないか？)

〃聖王〃として機能させるためにヴィヴィオを攫おうとして失敗したのだから、あそこに〃聖王〃はいない筈。

なのに、シグナムはまるで〃聖王〃がいるかのような口ぶりではないか。加えて、いたらいたでかえって厄介なことになるはずなのに、〃いるから楽になる〃と言っているように聞こえる。

そんな二人の前方では空を飛翔するはやと、その横で魔力を足場に空を〃駆ける〃、丈の長い灰色のコートでやや小柄な身体をすつぱり覆った人物が話をしていた。

「いやあ、なんかすいません。来てもらって早々、こんなことになってもうて」

「……いえ、これはかつての私の不始末ですからお気になさらず。

むしろ、後世の皆さんにご迷惑をおかけしてしまい……申し訳ありません。できれば私の手で始末をつけたいところなのですが」

「あく、重ねてすいません。今の時代、あなたに大々的に動かれると色々問題があつて……」

「聖王教……ですか。自分が祀られているというのは、何とも不思議な感覚です。

神霊や半神の皆さんも、このような気持ちなのでしょうか……」

細いおとが頤に鋼の義指を添え、複雑そうに唸る。

フードの奥から垣間見えた顔立ちは、確かに見覚えのある顔によく似ていた。

(当然と言えば当然なんやろうけど、確かに面影があるなあ。いや、正確には逆なんやろうけど。

美人さんになるのはわかつとったけど、ヴィヴィオもこんな感じになるんかな?)

「……ですが、不謹慎ながら胸も躍ります」

「そうなんですか?」

「誉れも高き夜天の王、屈強と名高い守護騎士と肩を並べられるとなれば……かつてのベルカでは、大変名誉なことだったんですよ」

まあ、十分な情報を得られない状況だったからこそ、噂が独り歩きしていた感は否めないが。

それでも、ベルカの地において『夜天の魔導書』に関係する者たちの勇名は、確かに轟いていたのだ。

「そんなもんですか？ 私らとしては、逆の気持ちなんやけど」

「カルデアとのお付き合いが長いのですし、慣れているのでは？」

「まあ、それはそうなんやけど、『こっち側』のっちゅうのは初めてですんで」

慎重に事を進めるという意味で言えば、まだ彼女を外部に出すのは得策ではなかっただろう。

ただ、今回の一件と彼女の存在は深く結びついている。本人も、かつての後始末を……と強く願ったことから、はやてを代理マスターにする形で派遣することになった。実際、彼女がいるのといないのとは、ゆりかご破壊の難易度が大きく変わるだろう。

立香がいけないのは、彼の動きが嚴重に監視されているからだ。サーヴァントを連れてとなれば、なおのこと。何しろ、それが二番目に管理局が警戒する状況だからだ。もちろん、一番はサーヴァントの単独行動だが。

逆に言えば、こうして代理マスターを立てる形で派遣する分には、割と何とかなる。特に今の場合、混乱の真つただ中で隙をつきやすい。サーヴァントが派遣されたことに気付いても、その真名にまではまず気付かれない。

そういう状況が整っていたからこそ、カルデアも彼女の派遣を決定したのだ。

「でも、飛ばないんですか？」

「飛ばないことはないのですが、こちらの方が消耗は少ないですから」

「ああ、そうですね。『偽臣の書』を使うた代理マスターやと、どうしても効率が悪いし」

「ええ、節約できるところは節約すべきです。戦時下では、引き締められるところは可能な限り、が基本でした」

「なるほど……つと、見えてきたみたいやね。情報やと、この地面の下

が最有力やったな。今のところ、やっぱり動く気配はないか。何かわかります?」

「……感じます。確かにここに、眠っているのが分かります」

「お墨付き、貰えたみたいやね。」

せやったら、フオワード陣はヘリから降りて副隊長たちと内部制圧！ 空戦魔導士隊は私と一緒に周辺警戒や！ 中の方、お願いできます?」

「お任せあれ。あなた方とこの世界は、私にとっても宝です。今という時のために、私はあの選択をしたのですから」

「……」

「そんな顔をしないでください。あの選択が今につながっていた、ならきつと…それでよかったです」

そう微笑んで、眼下に広がる森へと降りていく。

正当なる主、最後のゆりかごの聖王“オリヴィエ・ゼーゲブレヒトの帰還だった。

スカリエツティはその天才を遺憾なく発揮し、ゆりかご起動の“鍵”である聖王が不在でも、ある程度ゆりかごを動かせる準備をしていた。

しかし、今回は相手が悪かった。何しろ、相手は真正正銘の“ゆりかごの聖王”その人。システムを騙す詐術と真の主、どちらの命令が優先されるかは言うまでもない。ゆりかごの機能は軒並み停止し、防衛に回っていた戦闘機人たちは間もなく制圧。その後、戦闘の余波という名目の元、ゆりかごの中核機能は徹底的に破壊されることになる。

要保護対象であった“ルーテシア”と“ギンガ”もまた、多少の問題はあった物の無事確保。具体的には、妹と同類の<sup>召喚士</sup>“愛の拳”が突き刺さった。若干、ルーテシアにはトラウマが残る形にはなったが。

ただ、一番嬉々として破壊活動を行っていたのが、その“聖王”ご本人だったのは如何なものか。

色々と、“ゆりかご”そのものに鬱屈したものがあつたらしい。

ちなみに、散々暴れまわった後、いつの間にかその姿はどこかに消



えていた。彼女が再びミッドを訪れたのは、事件による混乱もようやく終息してからのこと。

同じ頃、スカリエツティのアジトでは……

「広域次元犯罪者、ジエイル・スカリエツティ。あなたを逮捕します」  
魔力で形成されたバルディッシュの切っ先を突き付けながら宣言する。

肩で息をし、頬から血を流す姿に余裕はないが……それでも、これで決着だ。

しかし、そうであるにもかかわらず、スカリエツティに焦りや絶望の色はない。どこまでも泰然として、一種の余裕すら感じられる。

「ふむ……」

「なにか、言いたいことでも？」

「いいや、負けを認めるとも。『聖王の器』は確保できず、全ての娘たちは制圧され、ゆりかごも止まった。言い訳しようもない、完膚なきまでに私の負けだ。まあ、多少不可解な部分はあるがね」

どうして的確にヴィヴィオを守ることができ、ゆりかごが沈黙しているのか。彼の立場からすれば、不自然に思うのも当然だろう。

もちろん、だからと言って懇切丁寧に説明してやる気もないが。

「ただ、道中の暇つぶしがてら、2・3質問をしてもいいかね？」

「……拒んでも、あなたは勝手に聞くんでしよう」

「よくわかってる。ふうむ、聞きたいことが増えたな。君はずいぶん私のことを理解しているようだが、それはなぜかね？」

答えてやる義理はないが、先の疑問と違ってこちらは答えたところで問題はない。だからなのか、あるいは方が一にもこの男が『改心』するのではと期待したのか、ゆっくりとフェイトの口から答えが返される。

「あなたと、似たような人を知っています」

「ほお……興味深いね。例のカルデア、だったかな。いつか調べてみたかったが、中々上手くいかなくてね」

それはそうだろう。自分たちが異邦人であり、『世界の理から外れた』存在であることをカルデアは正しく理解している。故に、基本的

に秘密主義かつ排他的だ。あくまでも、最初に接触したフェイトたちが例外なのである。

そのため、一応は協力関係にあるとはいえ、管理局に対してもその姿勢は変わらない。必要最低限の情報は開示するが、それ以上のことはしないし、各個の詳細については徹底的に秘匿する。例外扱いであるフェイトたちですら全容を知らず、どこまで把握できているか不透明なのだ。

加えてあそこには、スカリエツティと比較してなお劣らぬ智慧者が数多くいる。

さらに、BBは本人の自己申告によれば彼女は人工知能、上級AIであるという。もし真実だとしたら、その完成度は既存のそれとは一線を画している。レイジングハートたちもずいぶん人間臭いが、彼女は正直見分けがつかない。

そんな面々が執拗なまでに強固なセキュリティを強いているのだ。管理局だろうと狂気の天才だろうと、易々と情報を抜き取れるものではない。

だから、こうしてフェイトが口にするまで、彼がカルデアの内情を知らなかったのは当然だろう。

「自分の欲望に忠実で、そのためならその他一切を顧みない。あるいは、この世のすべてを自分の『快樂』を満たす道具としか見ていない」

「ははははは……なるほど、的確だ。それは私のことかな？ それとも、私と似た誰かのことか……確かにそれは、私と通じるものがある。是非とも、その人物と話をしてみたいものだ。きつと、良い友人になれるだろう」

「無理だ、と言っておきます。『あの人』にとって、自分以外のすべては『人の形をした獣か虫に過ぎない』」

「ふむ、それはまた随分と極まっている。実に興味深い」

直接会って確信を強めたが、殺生院キアラとジェイル・スカリエツティにはだいたい近いものがあるように思う。

特に、自身の『<sup>快樂</sup>欲望』の為に周囲全てを踏み台にすることを厭わな

い部分など。他にも、彼と共通する部分を持つサーヴァントにはいくらか心当たりがある。

カルデアでこの手のロクデモナイ連中と関わっていないければ、この男の人間性を把握することはできなかつただろう。

あるいは、「欲」というものに忠実過ぎるが故に、いずれは「人の身に余る欲望」の果て「悪竜現象」<sup>フェアヴニール</sup>を発現させる可能性があつたのではとすら思う。

「あちら側」の法則が「こちら側」に適応されつつあることを思えば、ありえないとは言いつれない。捕まえるのがもう少し遅ければ、最新の「悪竜」<sup>フェアヴニール</sup>になつていたかもしれない。

その意味で言えば、ここで確保できたのは運が良かったのだろう。「では、もう一つ。ここにいる私を捕らえたところで、娘たちを一人でも取り逃がせばまったく同じ私が復活する。旧暦の時代、アルハザード時代の統治者には常識の技術だが……今はそうじゃない。なのに、君はどうしてそんなにも落ち着いていたのかね？」

「別に……そう珍しくもないことですから」

初めてそういったことをする人物と出会つたのは、フィル・マクスウェル所長だった。あの時、立香たちは彼の復活を早々に予見していた。今なら、どうして彼らがその考えに至つたのかよくわかる。

カルデアと関わっていると、その手の話は枚挙に暇がない。身近なところでは、ダ・ヴィンチも似たようなことをしていたらしい。だから、何年もカルデアと関わつてきたフェイトにとって、それは今更驚くようなことではなかつた、ただそれだけのことだ。

「なるほどなるほど。いやはや、世界は楽しいな。まだ私が知らないことで溢れている。それを知る機会を逃してしまうのが、実に残念でならない」

「改心する気はないんですね」

「すると思つていたのかな？」

「……………いいえ。あなたの精神は、ある意味「聖人」のそれに匹敵する」

「ほお、面白い例えだ。私を指して「聖人」とは」

中身に関しては似ても似つかない。だが、その強度に関してはその通りだと思う。

スカリエツティに「改心」の二文字はない。彼は、世間一般における倫理や道徳をはじめとした、あらゆる観点から見た自分の行いを理解し、その上でそれを「善し」としている。故に、どんな罰を与えようと、どれだけその罪を説こうと、彼の心は揺らがない。強いて言えば「次があれば勝つ」ために、今回の失敗とそこから見えてくる課題を検討する：要は、反省するだけだ。

そこに微塵の後悔もないし、自らの行いを省みるという意味での反省もない。彼にとって、自身の行いには一点の曇りもないのだから。なるほど、その純粹さはベクトルは真逆だが聖人のそれに近いだろう。

「だからこそ、二度とあなたを外には出しません。反省も後悔も期待できないあなたに、更生の余地はない。ただ閉じ込めて、これ以上の犠牲者を出させない。それが、唯一無二の対処法だ」

「酷い言われようだが、反論の余地はないな。まさか、君にそこまで理解されているとはね」

理解したかったわけではないし、似たようなタイプを知っているとただだけだ。

ただ、一部のサーヴァントと類似点が見られるという意味では、やはりこの男は非凡な存在なのだろう。それこそ、条件次第では「座」に届き得るほどに。

案外、サーヴァントとして召喚されれば立香なら上手くやれてしまうのかもしれないが……。

「しかし、なるほど。いくらか得心がいった。どうやら君は、私の知らない経験を積んできたらしい。それらが今の君を形作っているのだろう。」

私の知る君であれば、あの揺さぶりは無視できないものだったはずだ。さあ、どうして君はまるで動じる素振りを見せなかったんだい？

君は彼のエース・オブ・エースと違って、そう強い人間ではなかったはずだが？」

確かに、その通りなのだろう。

自分の弱さを知っていたからこそ、カルデアで対策を講じてもらったりもしたが……その時は、2週間以上部屋から出られなかった。正直、アレに成果があったかは甚だ疑問である。

だから、スカリエツテイの言葉に心が全く揺れなかったわけではない。

エリオとキャロ、自分を慕う子どもたちを「反抗しないよう作り上げ、目的のために使っている」と。

そして、「自分に向けられる愛情が薄れることに臆病で、いずれはかつての母と同じようになる」とも。

その不安が、まったくないわけではない。

しかし、断言できる。そんなことにはならないと。

「簡単だ。あの子たちは、お前が思うほど弱くない。確固とした自分を形作って、自分の意志で道を選んでいける。そう、私は信じている」  
「その結果、いつか君への愛情が薄れたとしても、かね？」

「寂しいよ、それはとても寂しい。でも嬉しくもある。子どもはいずれ、巣立って行くものだから。」

なら私は、あの子たちの巣立ちを笑って見送りたい。なにより……」

そうだ、確かに大切な人たちが離れて行ってしまうことは怖い。それを引き留めたい、手元に置いておきたいという思いがあることは否定しない。

だけど、今のフェイトは知っている。それよりももっと、怖いことがあることを。

「私は、失うよりも怖いものがあることを知っている。それに比べれば、失うことなんて全然怖くない」

だからこそ、あの時フェイトは失うことを覚悟して踏み出したのだ。

失ってでも守りたいものがあつた。壊れてしまうことに比べれば、失うことなど何ほどのものだろう。

だってそれは、いつか必ず訪れるものでもあるのだから。

「永遠のものなんてないし、最後には別れが待っている。どれほどそれを恐れても、どんなにそこから逃げて、いずれその時はやってくる」

不変のものなんてありはしない。自分自身ですら、一秒前とは違う人間だ。

人が変わらないものを求めるのは、そこに安心を求めているから。変わっていくことは不安で、恐ろしい。だがそれでも、人は変わっていく。変わっていかなければならないのではなく、気付かないうちに変わっている。

人と出会い、その魂の欠片を受け取って、新しい自分が生まれる。同じように、自分の欠片は多くの人を経て彼方へと繋がっていく。

「そう、怖がることなんて何も無い。だってこれは、<sup>人生</sup>出会いと別れ<sup>希望</sup>の物語なんだ」

その輝きを、希望に満ちた旅路を、信じている。

「失うことを前提に得たものに価値がある？ 薄い絆に縋って生きる人生など、実に無意味とは思わないかね」

「価値なんてない。そこには意味もない。それは求めるものじゃない。」

価値も意味も、すべて私たちが自分で見出していくものだ」

いまなら、あの時立香の言っていたことの意味が少しだけわかる。きっと、生涯をかけてその意味を理解していくのだろう。

「欲しい」、知りたい」。そんな欲に突き動かされてきたのがこの男だが、今は哀れに思う。

どれほど問い続けてもなお、解き明かせないものはこんな近くにあるというに。この男は、それを知らないのだ。

「いずれ終わりが来ると知りながら、その先へと繋いでいく。

あなたはその尊さを、歓びを知らない。だから、そんなにも飢えてるんだ」

「さて、私には君の言っていることが良くわからないな」

「なら、いくらでも考えればいい。時間だけはたっぷりある。

そして……いつか気付くことを願っている」

「願う？ この私に？ 君は何に気付いたというんだい？」

「決まってる。私の人生は、いつだって——たくさんの光に照らされている」

愛情が薄れ、大切な人が離れて行ってしまふことを畏れることはない。

だって、彼らの方が独りにさせてくれないのだ。

夜空に瞬く星々の様に、暗い道を照らしだしてくれる大切な光。

それらはきつと、増えたり減ったりを繰り返すのだろう。だがそれでも——決して消えはしない。

自分が大切な人たちの道を照らすように、みんなが弱い自分を照らしてくれている。

立香はかつて言っていた。

『不自然なほどに短く、不思議なほどに面白い人の生。』

それは、ただ目が覚めているだけで——眩く、輝きに満ちている。

ああ、本当にその通りだ。

だから、きつと大丈夫。

（帰ろう。みんなのところへ、私の帰る場所に……）

なにしろ、地上本部襲撃から休む間はおろか傷を癒す時間すらなかった。

今とはとにかく、泥のように眠って休みたい。贅沢を言えば……

（ああ、立香の膝でゴロゴロしたい。その後はアルフをモフって、エリオとキャロ、それにヴィヴィオをいっぱい抱きしめて、最後は立香のお粥で癒されたい……）

もう恥ずかしいとかそんなことを思う余裕もないくらい、ただただ恋しくてたまらなかった。まあ、自分でも結構欲望塗れだとは思わないでもないが。

しかし、それも仕方のないことだ。だって、それくらい心身ともに疲れ切っていて、とにかく癒しが足りない。そしてなにより……

（いいなあ、なのはとはやては）

幼馴染二人はいつでも最愛の人と会えるのに自分だけ違うのだから、これくらいは許されるだろう。

(急いで区切りをつけて休みを取る。そしてカルデアに行こう、そうしよう)

これだけは断固譲らぬと、不退転の決意を固める。

ちなみに、事後処理に忙殺された彼女が休みを取るのは2ヶ月以上先のこと。カルデアほどではないとはいえ、管理局も大概ブラックだ。

地上本部のそれを発端に、本局も巻き込んで色々大混乱だったのだから仕方ないことだが。

まあその間に、混乱の間について立香が顔を出し、流星にタガが外れて大いに甘えることになるのであった。



## 高町ヴィヴィオの場合

通常、特別管理外世界「ムンドウス・カルデア」へと向かう交通手段は存在しない。

臨港次元船なんて気の利いたものは通っていないし、仮に私有機やチャーター機を使ったとしても、一定の距離まで近づいた段階で退去勧告を告げられるだけで一切の交渉には応じない。万が一それを無視して進めば、例え管理局所属の艦であったとしても実力行使で排除されるだけだ。

ムンドウス・カルデアにたどり着く方法はただ一つ、彼らが所有する艦……スペース・ボーダーか物資運搬用の船に乗り込む以外になり。そのため、たとえ許可が下りたとしてもスペース・ボーダーの任務状況や、運搬船の運行状況によつては数週間、場合によつては数ヶ月に渡つて待たされることもある。

そのため、インハルトたちの渡航許可が下りてからカルデアを訪れるまでに、さらに1ヶ月以上もの間を要することになった。

とはいえ、カルデア外で活動しているサーヴァントも少なからず存在すること考えれば、これは本来極めて不便な状態のはずだ。管理局からも度々改善要請が寄せられているが、彼らは一顧だにしない。その必要がないからだ。

そう、なにしろ彼らは帰ろうと思えばいつでも帰ってくることできる。正確には霊基の「送還」というべきだが、その応用で緊急時には即座にカルデアへと帰還できる。そのため、不便が不便として機能していないのだ。

まあ、フェイトをはじめとした関係者一同に不便を強いているのも事実なので、事実上カルデアが独占している状態の「魔術による転移なら可能」という抜け道があったりはする。つまり、キャスターたちの協力があれば移動できないこともないことはなる。

ただし、魔術の性質上とてつもなく手間とコストがかかる上、一度に転移できる質量にも制限がある。故に、個人レベルでの移動くらいにしか使えず、今回のような団体移動にはさっぱり向いていない。

なので、結局彼女たちはスペース・ボーダーか運搬船の都合がつくまで待たされることに。

だが、そんな時間もようやく終わりを迎える。

第一管理世界「ミッドチルダ」の首都クラナガンから、食料中心に物資をたっぷり乗せた運搬船「オーニソプター」に乗り込んで丸一日。数度の次元跳躍の果て、ようやく船窓からその姿を望むことができた。

「あ、見えてきましたよ、アインハルトさん」

「……アレが、カルデア」

人の顔ほどの大きさしかない小さな丸窓から、ヴィヴィオとアインハルトがくつつくようにして外を見る。客室やロビーなどのモニターからも見ることはできるが、それでは少々味気ない。風景もまた旅の醍醐味、それは実際の自分自身の目で見てこそだろう。

「青い、ですね」

「はい。なにしろ、星の表面の9割以上が水ですから。しかも、塩分をほとんど含まない真水なので、『海』というよりは『湖』に近いかもしれませぬ」

水は人が生きていく上で最重要と断言している物質の一つだ。それが潤沢にあるという意味では、恵まれた世界と言えるだろう。

次元世界の中には星の半分が陸地だったり、むしろ陸地面積の方が広かったりする世界というものもある。ただそう言った環境だと、そもそも生命が存在しない場合や、いても原始的な生物にとどまっていることも多い。開拓民が入植しても、水不足に悩まされることもザラだ。

とはいえ、9割以上が水で覆われているのもそれはそれで厄介である。なにしろ、人が住める土地そのものが限られているのだ。

船乗り系サーヴァントたちは船上生活を満喫しているが、ほとんどは地に足をつけて生きていた者たち。かつては緊急時のため我慢せざるを得なかったが、今はそうではない。いつまでもカルデアに押し込めておけば、ただでさえトラブルメーカー揃いだというのに、いつか収拾のつかない事態に発展しそうで怖い。

そこで考えられたのが「テクスチャ」の貼り付けだ。

神霊をはじめとした特に力の強い者たちが時に単独で、時に協力する形で海上にこれを構築し、疑似的な陸地を作り上げているのだ。それはそれぞれが生きた土地であり、生きた時代の写し身…言わば「特別な法則<sup>ルール</sup>を持たない固有結界」とでも呼ぶべきもの。

外から見るとそのほぼ全てを水で覆われた世界に見えるが、実際にはいくつもの島が散在する「群島世界」なのである。

「なるほど。それで、私たちがまづ向かうのが……」

「この世界唯一の陸地であり、本部でもある『アニメ・カルデア』です。たぶん、主にそこに滞在しながら、色々な<sup>テクスチャ</sup>「島」を見て周ることになるかなあと」

カルデア側の意向もあるので、実際のスケジュールはほとんどあちら任せにせざるを得ない。見せたくないものもあるだろうし、それ以上割と危険な場所も多い。

機密事項に触れさせないのは当然として、安全安心に過ごしてもらえるよう配慮するとすれば、色々周るのはちよつと難しいかもしれない。だからこそ、ヴィヴィオも少しばかり曖昧な表現をせざるを得ないのだ。

「……ですが、その…決してヴィヴィオさんを疑っているわけではないのですが……」

「まあ、普通は信じられませんよねえ。私は小さい頃から割と接点がありましたからそれほどでもないですけど、ずっと昔に亡くなったはずの人たちがいるっていうのは信じられなくて当然だと思います。特にアインハルトさんの場合は……」

オーニソプター内部は、言ってしまうえば「カルデアの領土」だ。故に、そこに乗り込んだ時点で一切の管理局法は適用外となる。同時に、管理局とカルデア双方より出された渡航許可の条件である、「詳細説明の禁止」が解除される瞬間でもある。

つまり、アインハルトたちは詳しい説明もないままに「損はないからとりあえず来い」と言われ、頭に疑問符を浮かべつつ、声をかけてくれたノーヴェエやヴィヴィオへの信頼だけを頼りに乗り込んだとこ

ろで、衝撃の事実を告げられたわけだ。

あれから丸一日経ち、ある程度は衝撃から脱することはできたと思うが、信じがたいと思うのは当然だろう。なにしろ、カルデアにはアインハルト……正確には彼女の先祖、クラウス・イングヴァルトと縁深い「彼女」がいるのだから。

「では、本当にあそこに……オリヴィエが」

「はい。アインハルトさんの話を聞いて、ずっと会いたがってたんです。まあ、その……」

「大丈夫ですよ、ヴィヴィオさん。以前の私であれば、確かに会うべきではなかったと思います。自分のこととクラウス過去のこと、どう折り合いをつけて行けばいいかわからず、ただ我武者羅に、盲目的に漠然と「強さ」を求めていた私にその資格はなかったと、他ならぬ自分自身でそう思います。

心配、してくださったんですね。あなたも、会長も」

「……」

「ありがとうございます、心配してくれて。

ありがとうございます、今の私ならと信じてくれて。

私は、あなたたちに出会えてよかったと、心からそう思います」

澄んだ笑顔を向けられれば、何とも気恥ずかしくて直視できない。そんな二人の微笑ましいやり取りを見やりながら、今回の旅の同行していたヴィクトリアことヴィクターと、ジークリンデことジークが紅茶を口に運ぶ……と、思わず目を見張る。

既に何度も味わっているが、飲む度に新鮮な驚きがある。良家のお嬢様として高級品にも一流の腕前にも慣れたヴィクターをして、このお茶を淹れた人物の腕前は瞠目に値した。

起床後間もなくなのか、それとも朝食後なのか、あるいは空いた時間の一服なのか、そういったタイミングだけでなく、飲み手の体調や精神状態をも考慮した上で注がれた一杯。

彼女たちとしても、不安や緊張……言葉にできない様々な感情が渦巻き、落ち着かない自覚はあった。だが、それを表に出すほど未熟ではないつもりだったが、このお茶を淹れた人物はそれを見抜いていたら

しい。

鼻腔を擽る豊かな香気が緊張を和らげ、口に含めば芳醇な味わいが心を落ち着けてくれる。

(食事の時も思っただけど、ちよつと本気でスカウトできないかしら……)

自身の執事も間違いなく一流と確信しているが……なんというか、年季の違いを感じる。

同じ一流でも、技術と心配りを身に付けたばかりの若い執事と分厚い経験を積んだ老執事では、当然同じようにはいかない。実際、実家に古くから仕えるダールグリユン家の生き字引と彼女専属のエドガーとの間には、まだまだ埋めがたい差がある。なんというか、それに似たものを感じるのだ。

「……なあ、ヴィクター」

「なあに、ジーク」

「こういう時、番長たちがおつたら、なに辛気臭い顔してんだ、シヤキツとしろシヤキツと！」って、背中でも叩いてくれたんやろうな」

「あの不良娘のことですもの、空気も読まずにやりそうね」

ちよつと不機嫌そうに返すヴィクターだが、どうにもソリの合わない砲撃番長の声が今は少し懐かしく感じる。

認めるのは業腹なもの、ジークの気持ちはわからないでもない。あの粗野かつ喧しい声で、この空気をぶち壊してほしいと。

「ジークも少し緊張しているようね。世界戦決勝でも、あなたはそんな顔していなかったわ」

「あ、あははは……そら、緊張の種類が違うだけやよ。」

でもま……確かに緊張しとる。ハルにやんと違うて、うちはほとんど個人の記憶は憶えてない。せやけど、それでもな……」

「これはアインハルトにも言えることだけど、ご先祖様とあなたたちは別の人間よ。受け継ぐのはいいけど、あなたたちが背負うことじゃないわ」

クラウスとリッド、彼らの無念が自分たちに関係がないとは思わない。特にアインハルトは、クラウスの記憶を色濃く受け継いでいた。

それこそ、自分自身の記憶と区別が難しいレベルで。

だがそれも、もはや過去のこと。線引きはなされ、アインハルトの中からクラウスの記憶は消え去った。だから……

「大丈夫だよ」

「ジーク……」

「うちはもちろん、ハルにやんも。ちゃんと自分を、今を生きとる。偶には道に迷うこともあるけど、大事なものを見失ったりはせえへん。そう信じてくれたから、ヴィヴィちゃんに会長さんも今回の許可を取り付けてくれたんやろ？」

「……そうね。すこし、過保護になり過ぎていたかしら。ヴィヴィに笑われてしまいそうね」

「ヴィクターはみんなの『お母さん』やからなあ」

「誰がですか!？」

たぶん、ここにいる面々に聞けば満場一致でジークの意見に賛同するだろうが。

ついでに、カルデアについて早々、白髪で左目や右頬に傷のある女の子に「お母さん？」と付け狙われることになることを、ヴィクターはまだ知らない。

「ふくむ、あの様子ならジークたちも大丈夫そうだね」

「アインハルトも思いの外落ち着いてるしな」

「うん、みんな成長してる。だけど、私まで来てよかったのかいナカジマちゃん？」

「ミカヤちゃんもうちの関係者ってか、顧問取締役だからな。しつかりガキ共の面倒、見てくれよ」

「それは構わないんだけど……」

つと視線を周囲に向ければ、そこにはヴィヴィオの母であるのはや、同じくナカジマジム所属で今回の旅にも同行しているミウラが、かつて世話になっていた八神家道場のはやての姿もある。加えて、ティアナやスバルも来ている上に、現地にはフェイトやその家族もいるらしい。

それだけの錚々たる面々がいるのなら、ミカヤの出番はあまりなさ

そうに思えるのだが……。

「気をつけるよ、ミカヤちゃん」

「気を付けるって、何にだい？」

「勉強になるって言ったのは嘘じゃない。ミカヤちゃんにとつても、あそこは得るものが多いと思う。技術的にも、場合によつちや物質的にも。」

「だけど、それはそれとして……」

「それとして？」

「一筋縄じゃ行かない連中揃いだからな。ぶつちやけ、ティアナは保護者というより生贄だし」

「それはまた、随分な言われ様なんじゃ……」

だが、実際そうなのだ。ティアナを生贄に捧げるといふより、身代わりにして子どもたちを頭の痛いトラブルから守るための…所謂「スケープゴート生贄の羊」といふ奴である。

まあ、今回はスバルも同行しているので、二人で何とか切り抜けてくれるであろうと期待している。

「なのはさんたちにしたところで、正直どこまで頼れるかわかんねえ」

「それほどなのかい？」

「あの人たちだって普通に振り回されるからな。つーか、逆らえなかつたり天敵だつたりする相手も結構いる」

「『エース・オブ・エース』や『歩くロストロギア』とも称されるお二人の天敵、というのはちよつと想像できないんだけどなあ」

「気持ちはわかるけど、そこは着けばわかるとしか言えねえ。とりあえず、アタシも含めて防波堤はいくらあつても困らないってこと。なのはさんたちがちび共連れてきてないのが、その証拠だ」

「そういえば……」

思い返せば、知り合つてからというものの基本的になのはやはやてはいつも子ども連れだった。例外は、模擬戦の時や無限書庫に行った時くらいだろう。つまり、まだ身を守る術はおろか危険を避けることすらできない子どもたちに万が一もない様に、最低限の安全策は講じてきているということだ。

「……ちなみに、今あの子たちは？」

「ユーノ総合司書長が忙しい人だから、なのはさんの方の双子は実家に預けて来たつてよ。八神司令は、基本旦那が専業主夫だからそっちが面倒見てる。生まれたばっかのなのはさんのところと違つてもう3歳だけど、さすがに連れてくるのはなあ……」

一応生まれてすぐの頃に女神たちに呼びつけられて連れて行ったことはあるが、その時は八神家や関係者総出でいつでも守れる体制を整えた上で赴いた。積極的に害するとは思っていないし、実際特に何も起こらず可愛がられて終わったが、いっどんなトラブルが脈絡なく発生するかわからないのがカルデアの怖いところ。前回が大丈夫だったから今回も、あるいは次も……なんて保証はどこにもない。

ある程度自衛手段を持つヴィヴィオたちならまだしも、歩くだけで危なっかしい赤子を連れて行くのなら、相応の備えは必須だ。

「確か、フェイトさんにもお子さんがいるんじゃないやなかった？ そんな環境で大丈夫なのかい？」

「つつても、旦那の立香さんはカルデア常駐だからな。というか、あの人が常駐しないなんてのは論外だし」

「サーヴァント、過去の英雄の写し身か……そんなになのかい？」

「話に聞いただけじゃ実感がわかないのも当然だよな。『時代を代表する個性』つて言われてもピンとこないのもわかる、アタシもそうだった。こればっかりは、経験しないとなあ……」

所謂、『百聞は一見に如かず』というやつだ。

とにかく、そんな個性の塊連中の相手をしつつ、手綱を握っているのが立香なわけで……。一日二日程度ならまだしも、長期的にカルデアを空けるのは不可能と言つていい。立香がいないカルデアなど、メルトダウン直前の原子炉に等しい。

「まあそんな訳だから、外で育てるつてなると必然的に家族で別居になる」

「単身赴任のお父さん状態か……それは確かに、寂しいね」

「まあ、立香さんの子どもつてことで基本可愛がられてるから大丈夫だろ……たぶん」



「いや、たぶんって……」

本当に、それで大丈夫なのだろうか……。

後年、〃やっぱり環境って大事だよなあ〃 そう思い知るミカヤなのであった。

「もうすぐかあ、なんかドキドキするね!」

「うん!」

「僕もです! でも、番長やエルス選手たちにはちよつと悪い気もしますけど……」

「わかります。ファビア選手にもそうですけど、私たちだけ抜け駆けみたいで……」

「それを言ったらユミナさんもだよねえ」

期待に胸が躍ると同時に、少々の申し訳なさを感じるナカジマジムの面々。

彼女たちも、今回の件にまったくの無関係というわけではない。〃エレミアの手記〃を探すため、無限書庫を共に探索したハリーやその友人たちにエルス、そしてオリヴィエやクラウスとも縁のあった魔女の一族の末裔ファビアには今回渡航の許可が下りなかった。加えて、アインハルトの親友であるユミナもまた。

それは渡航許可申請を行ったタイミングの問題であったり、ヴィヴィオたちとの関連性や付き合いの長さなども勘案されたりした結果だった。

「皆さんはまだいいですよ。むしろ、私なんかが同行できたのがかえって申し訳なくて……」

「いえいえ!」

「イクスの場合、むしろ来れて当然というか……ねえ?」

「そうそう! なにしろ、正真正銘のガレアの〃冥王〃なんですから!」

「そうですよ! ここは王様らしく、胸を張ってドーンと構えてください!」

「そ、そうは言われなくても……」

イクスが若干尻込みしていると、リオをはじめコロナとミウラが元

氣よく励ます。

とはいえ、今回辛うじてねじ込むことはできたものの、イクスと違いリオやコロナ、そしてミウラの同行も本来はかなり厳しかったのだ。既にカルデアと親交があるヴィヴィオと同級生であり同門でもある二人と、別口で八神家と親交の深いミウラだからこそ何とか許可を取り付けることができたのだ。

ヴィクターやジークに許可が下りたのはイクス同様、純粹に二人がはやてが言うところの「ベルカ子」であることが大きい。

それを言えばフアビアもだが、無限書庫の件が色々と尾を引いて許可が下りなかった。ユミナの場合、またまだ出会って日が浅いことが主な原因である。

「できれば、今度はみんなで来たいですよね」

「うん♪」

「今のままだと、守秘義務があつて皆さんには話せませんしね……」

今回の旅行にしたところで、詳しいことが話せないためかなり色々ぼかしているのだ。事情があるのだろうと深く突っ込んでこなかった皆には、只々感謝しかない。

帰ってから話せないのは心苦しいし、早く制限解除対象になつてもらいたいところである。

「……あれ？」

「どうかしましたか、ミウラさん？」

「あ、いや、見えてきてから結構立ちますけど、全然降りないんだなあつて」

「言われてみれば……」

「確かに……」

ミウラに連れられてモニターを見上げれば、相変わらずオーニソプターはムンドウス・カルデアの衛星軌道上を滑るように移動し降下する様子はない。そもそも、降りる際には一応アウンスがあるはずなので、それすらないことから当分はその予定がないことがわかる。

普通なら、とつくに降下するか、転送ポートで現地に跳ぶかしている頃のはずなのだが。

「あれ、どうしたのみんな？」

「そないに首傾げてるよ、そのうち首が痛くなるで」

「なのはさん」

「八神司令、ちよつと気になることがあります……」

子どもたちの様子に気付いた保護者組に、これ幸いにと疑問をぶつけてみると答えはあっさり帰ってきた。ただし、その内容は彼女たちの予想の斜め上を行くものだったが。

「ああ、そっか。その説明してなかったっけ」

「実はな、ここから直接カルデアに行くのはできないんよ」

「そうなのですか？」

「うん。ほら、星の周りをなんかクジャクの羽みたいなのが囲ってるのが見えるでしょ」

「ああ、アレも気になってたんですよ。綺麗ですけど、あれって何なんですか？」

「簡単に言ってみれば、ある種の防衛装置やね。通称『長城』、あそこから先にはどんな艦も進入禁止やし、魔法や通信もすべて妨害される」

「カルデア自身ですら、直接外とやり取りすることはできないもんね」  
「て、徹底してるんですね……」

「でも、そこまでやったら不便なんじゃ……」

子どもたちの反応も当然だ。なにしろ、物理的にも電子的にも、そして魔法的にもあの星は他の次元世界から隔離されていることになる。

しかし、同時にそれが必要とされる場所なのも事実なのだ。

「まあ、実際かなり不便ではあるね」

「しかも、まだまだあるで。」

いまは予定にない積み荷とかがないかの確認中や。そつちが終わり次第、これからあの一つに接続してそこから転移術式で大気圏内を浮かんでる『虚栄の空中庭園』ハンキングガーデンズ・オブ・バビロンに行つて、さらにへりに乗つてようやくカルデア本部に到着やからな」

つまり、『長城』が鎖国時代の日本における『出島』であり、『空

中庭園”が“長崎”、そして“江戸城”が“アニミ・カルデア”に相当すると考えれば、多少分かりやすいだろうか。

カルデア所有の艦でさえこの扱いなのだ、スペース・ボーダーもこの例に漏れない。当然、それ以外の方法となればさらに厳しくなる。転移魔法は軒並み妨害されているため、艦や人は長城手前までしか来られないし、基本的に接舷許可は下りない。管理局の船が来た場合でも、長城から小型艇が迎えに寄こされるだけだ。そこから先は、先と同じ手順を踏むことになる。

通信の場合も、長城を経由して空中庭園までしか通らず、別回線でも本部とやり取りすることになる徹底ぶりだ。ジェイル・スカリエツティをして、碌に情報を抜き出せなかったのもうなずける堅牢ぶりだろう。

「まあ、確認が終われば後は早いよ。だから、もう少しの辛抱ってこと」

「ちゆうても、扉を通る度に機械・魔法その他諸々のあらゆる検査を受けるから、いつペンでも引つ掛かると大変やけどな」

なのはに「脅かさないの」と注意されながら、ちよつと舌を出してお茶目に笑うはやて。

とはいえ、実際についてみればなのは言う通り後は早かった。特に足止めされることなく奥へと通され、魔法とはまた違った方式で空中庭園へと転移し、“カルデア・トラベル”なる不穏な旗を持った偉丈夫の操るヘリに揺られることしばし。

ようやくたどり着いたのは、八千メートル級の険しい山々の8合目に位置する近代的な建物だった。

「ここが、アニミ・カルデア」

「はい！ 遠路遙々、お疲れさまでした」

「ここに、オリヴィエが……」

感慨深げにアインハルト視線を巡らせていると、奥からよく見知った女性が初見の男性に伴われて姿を現す。

男性の左腕に自身の両手を絡ませ、密着しながら歩いてくるフェイト。幸せそうに微笑む姿は、今までに見たどんな彼女よりも魅力的

だ。よく見れば、右手がしっかりと彼の左手と握られている。

「みんな、いらっしやい」

「ご無沙汰しています、フェイトさん。そちらは……」

「はじめまして、藤丸立香です。えっと……こんなでもフェイトの旦那さんしてます」

「もう！ もっと自信をもって言い切ってください」

「いやほら、大抵、え、これが？」って反応されるし。それが普通じゃない？」

「価値観は人それぞれ。釣り合わないと思うのはその人の勝手だけど、私はそうは思いません。私にとっては自慢の旦那様なんだから、しっかりと胸を張って欲しいな。こう、エヘンと」

「はは、頑張ります」

多少驚きはしたが、彼女の思いに一点の曇りもないことが良く伝わってくる。当の本人が幸せであるのなら、外野が口を挟むのは野暮というものだろう。ただ、気になることがないわけでもない……。

（ねえ、ナカジマちゃん）

（ん？）

（あの二人、別に仲が微妙になつてるとか、そんなことないんだよね）  
（見りやわかるだろ）

ミカヤからの問いに、少しだけ面倒そうに答えるノーヴェ。無理もない、これ見よがしに幸せオーラをふりまかれては、寂しい独り身としては多少やさぐれたくなるというものだ。

とはいえ、ミカヤがこんなことを聞いてくるのにも当然理由はある。

（じゃあさ、どうして……長袖はいいにしても、しっかり手袋嵌めて手を握っているんだい？）

そう。いまフェイトの手を包むのは、遠めに見てもわかるくらいしっかりとした仕立ての黒手袋。

彼女の華奢な指のラインを損なうことのないものだが、空調が効いているので別にカルデア内部が特に寒いわけでもない。なのにどうして、わざわざ手袋越しに……そう、ミカヤが疑問に思うのも当然だ

ろう。

しかし、これには深くはないが一応事情がある。フェイトとて、できれば直接触れ合いたいところではあるのだが、それをすると……

(あく、フェイトさんはなあ…なんつーか…：肌フェチ？　なんだよ、あの人)

(はい?)

(いや、フェチも違うか。なんつったらいいか…：肌と肌の触れ合いが一番ドキドキする性質らしいんだわ。あ、立香さん限定だから、アタシらは別な)

(ま、まあ、そういう人もいる、のかな?)

あんまり子どもたちに聞かせたくない話なので、できるだけ小声で話す。念話だと、万が一にも傍受される可能性があるからだ。

(どうも、あんまり触れてると、こう…なんだ。　“アレ”なスイッチが入っちゃうらしくてなあ)

早い話が、フェイトにとって“肌”が一番の性感帯なのである。そして、ドキドキが高じて興奮状態になり、最終的には“えっちい”スイッチが入るのだそう。

流石に人前、あるいは日中からそれでは色々困る。本当は思う存分触れ合いたいのだが、それだと支障をきたしてしまうことから考えた苦肉の策があの手袋と長袖らしい。思い返してみれば、フェイトはどちらかという露出の多い服装を好んでいたように思う。

(そ、そうか。うん、そういうものか……)

(顔が赤いぞ、ミカヤちゃん)

(そういうナカジマちゃんだって……)

(……やめよう。なんか虚しくなってくる)

(そうだね、それがいい)

加えて、フェイトが良く逃げ出してくる理由の一端がこれだ。直接触れ合うのが一番ドキドキしてしまうフェイトだが、甘やかされてもそれは同じ。思春期を経て、ドキドキはやがて性的な興奮へと繋がる様に。

どうも、幼い頃に愛する母から冷遇され、碌に触れ合うことも甘え

することもできなかつた反動と思われる。

——大好きな人と触れ合える。

——愛する人が心に寄り添ってくれる。

それが何より嬉しく、心と身体の芯に熱を帯びさせてしまう。とはいえ、その度に発情してしまつてはまるで“サカリ”のついた獣のようではないか。

それで呆れられたり“エツちな子”と思われたりするのには困る。だからこそ、フェイトは逃げる。昔は羞恥心と許容量の限界故にだったが、今では自分自身の淫らな衝動をクールダウンさせるためという意味合いも多分に含まれている。

ちなみに、立香は割とすべて承知の上でそれをしてる節がある。

S っ気があるのかもかもしれないが、それとは別にフェイトが若干“M”の気質があることに気付いているからだろう。別に“イジメてほしい”とか“手酷く扱ってほしい”とか言うほどではないが、強く押されることが嬉しく、ついでに弱い。愛情や好意の結果としてのそれが、堪らなく心地良いらしい。

甘やかされ羞恥に悶えたり困ったりしている時も、アレはアレで心のどこかで悦んでいるのだ。本人は、恥ずかしくて認められないようだが。

ついでに、激しく求められることにも快感を覚えてしまうことを、立香は密かに確信している。

そして、このことはプレシアには秘密だ。

フェイトの性癖や弱点は、だいたいかつてのプレシアとのすれ違いに起因する。

触れ合えず、互いの心には大きな溝が横たわり、プレシアはフェイトを手酷く扱った。それらが転じて、肌の触れ合いに高揚し、隠している本音を満たされることに悦び、強く求められると興奮する。

たぶん、プレシアが知ったら「生まれてきて：いえ、まだ生きててごめんなさい」「フェイトになんて性癖刻み付けてんのよ、いつかの私い!？」と首を括りかねない。

これと似ているようでちよつと違うのがマッシュで、彼女は変則的な

「手フエチ」だ。

正確には、「手を握ってもらおう」のが一番嬉しい人である。なので、甘えたい時や「行為」の最中は大体どんな無理のある体勢でも手を握ってもらいたがる。なんでも、これが一番安心するらしい。

「そういえばフェイトちゃん、子どもたちはどないしたん？ お土産、いっぱい持って来とるんやけど」

「もう、そんなに気にしなくていいのに……」

「それ、フェイトちゃんが言える？ 毎回、車の荷台一杯に色々持ってくるでしょ」

「うっ！ そ、それは……」

「ごめん、いつも止めようとは思ってるんだけど……」

「立香さんがフェイトちゃんに甘いのはいつものことですから」

「せやね、はじめから期待してません」

お土産についてはフェイトにだけは言われたくないし、フェイトも自覚がないわけではないだけに突っ込まれると弱い。立香も毎回止めようとは思うのだが、嬉しそうに選ぶフェイトを見ると結局止める側には回れない。むしろ、フェイトと一緒に選ぶ側だ。どちらかというと、フェイトを甘やかす一環だが。

で、それを「やれやれ」とばかりに制御するのがマシユの役目である。

「と、とりあえず、子どもたちは今マシユとブーディカが見てくれてるよ。今日は、みんなの案内に集中してって」

「相変わらずの良妻っぷり、私も見習わな」

（どうやっても、八神家の良妻の座は土郎さんのものだと思うんだけどなあ）

諸行無常。

「なのはさん、そろそろ」

「ああ、そういえばそうだよね」

「スバル、アンタも警戒を怠らないで！ どこから来るかわからないわよー！」

「ティアく、そんな敵地とか戦場とかじゃないんだから……」



「あたしにとっては、十分すぎるくらいにここは敵地で戦場よ!!」

何やら剣呑な雰囲気醸し出し始めた元スターズの三人に、事情を知らない面々が疑問符を浮かべている。

そういえば、先に来ているはずのエリオとキャロはどうしたのか。

「ああ、二人なら今頃先生たちのところじゃないかな?」

「二人の先生?」

「なのはさんたちじゃなくて?」

「そのさらに前。槍と召喚の先生たちがいるんだけど……」

キャロはともかく、エリオは今頃真正銘の修羅場かもしれないだけに通信を送るのはためらわれる。

場合によっては、一瞬の隙が生じて“Dead End”なんてことも十分あり得る。何しろ、唐突に殺し合いを始める物騒極まりない女王様とかがいるのだから。

フェイトが落ち着いているあたり大丈夫そうではあるが、いつそんな事態が起こるか分からない。

無事を祈りつつ、合流するのを待つのが吉だろう。

とそこへ、できれば会いたくなかった小柄な人影が二つ。

「あらあら、ようやく来たみたいよ私」ステッソ

「そうみたいね、私」エウリュアレ

「げっ……ステッソとエウリュアレ」

「さあさあ、ティアナ・ランスター。あなたに試練を与えましょう、見事乗り越えると信じているわ。ねえ、私」ステッソ

「ええ、ええ、もちろんよ私」エウリュアレ。あなたは楽しいおも……もとい、智慧と勇気で困難を乗り越える勇士と確信しているもの。きつとあなたなら乗り越えられるわ。その暁には、私たちが存分に愛してあげましょう」

「今思いつきり“オモチヤ”って言おうとしたでしょ、この極悪女神ども!!」

よく見れば、彼女たちの後ろには眼帯で目を隠した美女がペコペコ頭を下げている。

まあ、アレはアレでティアナにとっては血や貞操の危機を覚える危

陰人物なのだが、今回ばかりは頼みの綱だ。

是非とも頑張ってほしい。

「あの、姉さま方。できれば手加減を……」

「お黙りなさい、駄メドゥーサ」

「……はい」

「もうちよつと頑張ってくださいよ……つてこの手は?!」

「つか、まあ」

「ええ、よくやったわ私のアステリオス」

「ちよ、放して！ 放しなさいアステリオス！ 邪悪な姦計にのつて

はダメ！ あなたの手で目を覚まさせて！」

「でも、エウリュアレは、いつでも、じゃあく、だよ」

「そうだった!!!」

「それはそれで何だか腹が立つわね」

(ですが事実です、下姉さま)

「何か思つて？ かわいいメドゥーサ？」

「いえ、なにも」

そうして、抵抗も虚しくまたぞろ無理難題を面白半分で押し付けられるティアナ。助けるべきかとも思うが、まだ何も始まっていない状態で子どもたちの傍を手薄にするわけにもいかない。

止む無く「と、とりあえずティアを手伝ってきます!!」と言って走り去ったスバルに一任することに。まさか、BB印の「ブタになる呪い」をかけられた挙句、「大事な指輪を落としてしまいましたの」「是非とも探してくださいさらない」と、メドゥーサもろともキング・プロテアの腹の中に放り込まれることになるとは思ひもしなかったが。絶対嘘だとわかつているのに逃れられないとは、何たる理不尽か。

しかし、カルデアの洗礼はまだまだ始まったばかり。

フェイトと立香に案内されるまま通路を歩いていると、なにやら物陰から金色の束が見え隠れ……

「なにしてはるんです、エレシユキガル様？」

「は、はやて!? こ、こんなところで会うなんて、き、奇遇なのだわ!」  
(絶対待ち伏せしとったけど……ここは話を合わせとこ)

「み、見たところ管制室に向かうところのようね。挨拶はもう済んだのだけわ！」

（いや、これから行くんやから、当然挨拶もまだなんやけど……相変わらずやなあ）

つい、生暖かいというか優しい目を向けてしまう。

「ごめんなあ、なのはちゃん、フェイトちゃん」

「仕方ないよ、色々お世話になってるし」

「うん、気兼ねしないで行ってきて。そのためにみんなが防波堤にいるんだし」

何やら不穏なルビがついている気がしないでもないが、加護を貫っている身としては無碍にもできない。しかも、相手は神霊の中ではかなりまともな部類に入るエレシユキガルだ。少なくとも、イシユタルやジャガーマンなどは比べるべくもない。いざという時守つてもらうためにも、ここは顔を立てておくのが良策だ。

実際、用件を聞いてみれば冥界に花を咲かせるプロジェクトの一環として、はやての魔法を貸してほしいらしい。そういうことだと、なおさら断ることはできない。

というわけで、ティアナとスバルに続き、はやても早々に離脱してしまうことに。

「耐えろ、なんとしてでも押し留めるんだあ!!」

「凄いい、と言うべきでしょうか。早々に三人も離脱してしまいましたわ」

「神様もいるつちゆう話やったけど、あの人たちがそうなんかなあ……」

実物を見てもまだ半信半疑なのか、ヴィクターもジークも釈然としない様子。

まあ、パツと見た感じだと、有り得ないくらいに容姿が整っている以外は人間と大差ないので無理もないが。

「レオニダスブートキャンプの成果、今ここにい!!」

「あの、今何か聞こえませんでしたか?」

「そうですか?」

何かに気付いたミウラが周りに確認するも、コロナをはじめ誰もが

首を横に振る。

「……………しまった破られたか！ 追え、追え——つ!!」

「……………」

「どうかしたの、イクス？」

「あ、ヴィヴィオ。その実は、今更になって緊張してしまって……………」

「そういうえば、イクスはオリヴィエと同じ時代を生きてたんだもんね」

「はい。とはいっても、ガレアは聖王連合ともシュトウラとも疎遠だったの、面識はないのですが……………」

「大丈夫、きつと仲良くできるから！ まあ、ちよつと圧倒されるかもしれないけど」

「何か言いましたか、ヴィヴィオ？」

「い、いえ！ なんでも……………アハハハ！」

「? ? ? ?」

同じ時代を生き、後世における評価を知ったからこそなお一層の緊張を覚えるイクス。

ヴィヴィオはヴィヴィオで、何か言い難そうにお茶を濁している。

とその時、フェイトとなのはが何かに気付いた。

「……………おっ」

「……………なのは」

「うん、わかってる。来た、みたいだね」

真剣な表情で頷き合う親友二人。

その横では立香が目頭を押さえ、「頑張ってくれてありがとう、みんなのことは忘れない」と感謝の念を贈っている。まあ、別に死んだわけではないのだが……………。マシユがいればツツコミの一つも入れてくれただろうが、惜しい。

「かっ……………」

「いくよ、レイジングハート」

《Lord cartridge》

いつの間にか展開させたレイジングハートが薬莖を排出し、なのはの魔力が高まる。

「あっ」

「……………」

静かに利き腕である左腕を前に突き出し、タイミングを計る。早ければ解析・無効化されてしまうし、遅ければ格好の餌食。今は何よりも、タイミングが命なのだ。

「さっ—」

「ママ……………」

「大丈夫。ヴィヴィオのママは強いんだから♪」

愛娘に微笑みかけ、長年の経験によって培われた直感が「今だ」と告げる。

同時に、曲がり角から何かが猛烈なスピードで飛び掛かってきた。

「エクセリオンシールド!!」

「ま———っ!!!」

———ドゴオンツ!!!

重々しい衝突音がカルデアの通路に響き渡る。堅牢さで定評のあるなのはのシールドが軋みを挙げ、全力で踏ん張っているにもかかわらずジリジリと後方に押しやられる。

一瞬でも気を抜けば、そのまま持っていかれてしまうと確信する。

だが、歯を食いしばって辛うじて踏み止まるのはに向けて、件の「何か」が涙をこぼしながら鼻声で訴えてくる。

「ああ、お母さま！ お母さま！ お母さま！ お母さま！ お母さま！

ま！ お母さま！ お母さま！ 再会の日を一日千秋の想いでお待ちしております!! ですが……………ようやくの再会だというのに、あんまりです!?! ここは愛する娘を優しく抱き留め感涙にむせぶ場面

ではありませんか!!」

「だ・か・ら!! 私のあなたのママじゃありませんって何度言わせるんですかあ!!」

「そんな水臭い…ヴィヴィオのママとはつまり私のお母さまも同然!! さあ、私のことは愛を込めてオリヴィエと。そう、愛を込めて!!!」

やたらと「愛」を強調してくる「娘を名乗る不審者」。長い金髪に赤と緑の虹彩異色、整った顔立ちはどこかヴィヴィオと似ている……………が、なのははそんなこと気にも留めずに魔力を回し、全身に活を

入れる。

「ここで、ここで押し切られるわけにはいかないのだ。そう、ヴィオのママとして！」

「ぐぎぎぎぎぎっ……！ あんな勢いでぶつかられたら私の身体がバラバラになるでしょうが!! せめて加減してください!!」

「だって、お母さまっいたらいつもすげなくあしらうんですもの。知っているんですよ、現代では『ツンデレ』というのですよね。素直になれないお母様の心を、今日こそはこじ開けるのです！」

「開けても何も無いって毎回毎回毎回言ってるでしょうが! いい加減聞いてください、あなたはバーサーカーですか、オリヴィエ『さん!』」

「そんな他人行儀な……呼び難いようでしたら、オーちゃんでも可です! ヴィヴィだとヴィヴィと被ってしまいますからね。私はできた『姉』なのです」

話を聞いてるんだか聞いてないんだか……。

ついでに、その間にも二人の間に張られたシールドは悲鳴を挙げ、限界を迎えつつあるのか『ピシッ』『パキッ』とひび割れ始めている。

「あつ、だめ…力強っ!」

「ふっふっふっふっ……さあ、観念して私のお母さまとなるのです」

「ママ——っ! 頑張っ——っ!!」

黒い笑顔で勝利を確信していたところへ、ヴィヴィオの声援が割って入る。途端、なのはが息を吹き返し、顔の手前まで来ていたシールドを押し返す。

「そんな、ここにきて妹の裏切り!」

「ふんぬぬぬ……っ!」

「いえ、とりあえず私に姉はいませんので」

「え、じゃあ私は!」

「……………『姉を名乗る不審者』?」

「あふん……」

心無い一言にショックを受けたのか、それまでの熾烈な攻防がウソ

のようにその場に崩れ落ちるオリヴィエ。

肩で息をしていたのはだったが、ライダーのサーヴァントが沈黙したことを確認すると、静かに……だが、力強くガッツポーズ。

(グッ！)

「毎度のことではあるけど……お疲れ様、ママ」

毎度なのか……、このやり取りを初めて目の当たりにした面々は何とも言えない表情でその一言を反芻する。

特に、アインハルトとイクスの目が死んでいるのが印象深い。「え、なにこれ……悪夢？」と言わんばかりだ。

しかし残念なことに、全て現実である。

「ありがとう、ヴィヴィオ。やっぱり、応援って力が湧いてくるよねえ。今回は本当に危なかった……」

「年々押しが強くなってるもんね。オリヴィエも諦めの悪い……」

「うう、良いじゃないですか私にもママがいたって。物心ついた時にはもういらっしやいませでしたし、私だって頭を撫でてもらったり、お母さまの料理を味わったりしてみたかったですよお……」

床の上に横たわりながらメソメソしているオリヴィエ。そう言われると同情してしまうが……。

「一緒にお風呂に入って、同じベッドで眠って、お買い物をしたり、髪を結ってもらったり、アレとかコレとかソレとか、色々やりたいことがいくつぱいあるんですよ……」

(シラ……)

いや、やはりあまり同情は湧いてこないか。どちらかというところ、凶々しくさえある。

とはいえ、残念過ぎるファーストコンタクトになってしまったが、紹介しないわけにもいくまい。

「えつと、とりあえず……コレ」がライダーのサーヴァントの「オリヴィエ・ゼーゲブレヒト」です。一応、本当に一応ですが所謂「最後のゆりかごの聖王」ですね。とてもそうは見えないと思いますが、すつごく残念ですけど本当なんです」

「ヴィヴィの私の扱いが雑過ぎる件について!？」

「日頃の行い」

「あ、はい。ごめんなさい。ちよつとはしやぎ過ぎました」

真つ白な目を向けられると、途端に姿勢を正して小さくなってしま  
う。もう聖王…あるいは聖王女の威厳も何もあったものではない。

とはいえ、彼女としても「最後のゆりかごの聖王」という呼称には  
言いたいことがある。

「……でもですね、私だって好きでゆりかごに乗ったわけじゃないん  
ですよ。というか、本音を言えばあんなの願い下げだったわけで  
……」

「今更それを言う?」

「逆です、今だから言うんです。昔はほら、自分の身体のこととか、  
シュトウラのこと、クラウスやリツド……大切な人たちのこともあつ  
て仕方なく…ええ、本当に仕方なく乗ったんですよ。正直言えば、聖  
王連合そのものはどーでもよかったというか……」

まさかの歴史の真実、大暴露である。

「あのお、愛着とかは?」

「は? そんなのあるわけないじゃないですか」

「な、ないんですか?」

「母の命と魂を奪い取って生まれた鬼子」とか陰口叩かれて、どう  
して愛着が湧くと?」

「た、確かに……」

「乳母と侍女をつけられてそれなりの待遇はされていましたが、身近  
な人以外の態度は割とあからさまでしたよ。腫れ物扱いならまだマ  
シな方、中には露骨に侮蔑する人もいましたから」

まあ、確かにそれでは愛着など湧きようもないか……。むしろ人格  
が歪まなかったのは、侍女や乳母をはじめ、数は少なくとも周りに彼  
女を愛し支える人たちがいたからこそだろう。

「ああ、シュトウラに人質に出してくれたことには感謝してもいいで  
す。おかげで、鬱陶しい視線から解放されるだけでなく、クラウスた  
ちと幸せな時間を過ごせましたから。聖王連合も偶には良いことを  
します、そう偶には!」



やけに「偶に」の部分強調するオリヴィエ。

自分の故郷のはずなのだが、辛辣なことこの上ない。どれだけ鬱憤が溜まっていたのだろう。

「かと思えば『ゆりかごの起動』を宣言し、私が適合したらいつそ見事なまでの掌返し……むしろ呆れ果てて滅ぼしてやりたかったくらいです。いえ、民のことがなければ滅ぼしていたかもしれないね。

くっ!? 今思い返しても悔やまれます。いつそ王城と主だった貴族を殲滅して、そのままシュトウラに併合させるべきだったでしょうか……」

もしそんなことになっていたら、色々歴史が大きく変わってしまふ。それこそ、諸王時代の戦乱が今なお続いていたかもしれないのだ。お願いなので、新しい特異点が出来そうな物騒発言は控えてもらいたい。

と思っていたら、いつの間にか近づいてきていた誰かがオリヴィエの肩に手を添える。

「ヴィヴィ様、いまさらそんなことを言っても仕方がないでしょう。それに、そんなことをされても当時のシュトウラには聖王連合の領土を治める余力はありませんでした。一時統治できたとしても、すぐに領土を切り取られて泥沼の戦争に突入していたことは、火を見るより明らかではありませんか」

「……わかっています。言ってみただけです」

「本来なら、『王族が軽はずみなことを言っただけじゃないけません』と諫めるべきなのでしょうが……」

「私はもう王でも王女でもありませんから!!」

「まあ、そういうことにおきましよう」

「というより、望んで王となり、自らの王道に則って国を治めた皆さんがここには何人もいらつしやいます。あの方々を前にしては、恥かしくて『聖王』などと名乗れるわけないでしょう。私は所詮、『ゆりかご』を守る兵器であり、傀儡にも劣る『ハリボテの王』だったのですから」

深々と溜息をつきながら、ようやく気も晴れたらしい様子のみ

ヴィエ。

だが、遅ればせながら周囲を見回すと、呆氣にとられたような視線が集中していることに気付く。

「どうかしましたか、皆さん。そんな信じられないようなものを見たような目をして」

「『ような』じゃなくてその通りなんだと思う」

「無理ありません。現代における聖王の扱いを考えれば、むしろ当然の反応でしょう」

「知りくまくせくんく！ 私はもう聖王女でもなければ、聖王でもなくただ一騎のサーヴァントですからく！」

王族の責務とか聖王家の誇りとか、そういう面倒臭いのは全部生前に置いてきたんですくく！」

「『座』じゃないんだね」

苦笑い気味に立香が聞けば、「はい！」と元気よく返事が返ってくる。つまり、いつどこに召喚されても基本このノリということか。いや、なのはやヴィヴィオがいなければもう少し落ち着くとは思うのだが。

こんな調子だから、カルデアのトラブルメーカー予備軍扱いされるのだ。

しかし、そんな彼女の様子に気付いた風もなく、呆然としていたアインハルトがようやく一言漏らす。

「……リッド？」

「？ ああ、君がクラウドの……それに、そつちは僕の末裔かな？」

「あ、その……はい。ジークリンデ・エレミア言います」

「初めまして。僕はヴィルフリッド・エレミア……何代前になるかはわからないけど、君の先祖ということになる」

「その……ど、どうも」

エレミアの一族は知識や技術の継承が主で、記憶の継承はほとんどなされない。

そのため、ジークとしても目の前のリッドが先祖と言われてもあまりピンとこない。それでも、なんとなく彼女が自分に近い存在であ

るという確信があった。

「そ、そうそう！ どういうことなのフェイトさん！ なんでリッドがここに!? っていうか、いつ召喚したの!」

「えっと……半年くらい前」

「なんで教えてくれなかったのお!？」

教えられなかったのは、オリヴィエを召喚した時と大体似たような理由だ。オリヴィエほどの影響力はないとはいえ、それでもこちら側の世界の人物の召喚にはいろいろと慎重にならざるを得なかったのだ。

まあ、オリヴィエほどの知名度がなく、〃幻霊〃寸前というか〃信勝〃あたりに近い状態らしいが。

「ご、ごめんね。こつちも色々あって……」

「半年前だと……ヴィヴィオたちが無限書庫にエレミアの手記を探しに行った時だよな。ってことは、あの一件がきっかけで〃座〃に登録されたのか?」

「そんな些細なことですか?」

「あく、そのあたりよくわかってねえからなあ……オリヴィエさんのことにしたって、ヴィヴィオを保護したのがきっかけっぽいし」

あくまでも〃おそらく〃ではあるが、その人物にまつわる何かが起こり知名度や世界との繋がりが濃くなると、今まで存在しなかった英霊が登録されるのではないか、というのがカルデアの見立てだ。

「……………なあ、ミカヤん」

「なんだい、ジーク」

「それやったら、クラウド陛下もおるんちゃうん?」

「まあ、いそうではあるが……」

「ああ、いるよ」

「二〃いるんですか!？」

さらっと告げるリッドに、誰もが驚きを隠せない。しかし、彼女たちは特に気にした風もなく……。

「割と最近に、ですよねヴィヴィ様」

「そうですねえ……2ヶ月くらい前だったでしょうか」

(確かその頃って……)

(うん。アインハルトさんがD S A A U—15のタイトルを取ったのと同じ頃の筈)

同時にそれは、アインハルトの中からクラウスの記憶が消え去った時期でもある。

それらとの因果関係はわからないが、無関係ということはなさそう  
だ。

ところで、そのクラウスは今どこに……と思っていると。

「ほら、クラウス〜！ あなたも出てきて下さ〜い！」

「ほらほら、陛下。可愛い末裔が来てくれてるんですよ」

「ま、待ってくれ二人とも！ まだ心の準備があああ〜〜〜?!」

一度先ほど飛び出してきた曲がり角に戻り、白い塊を引きずり出してくるオリヴィエ。

“ペイツ”と放り出したそれは、白い布にくるまった歪な球体だった。

((なにこれ?))

「さあ、クラウス。そろそろ観念してください」

「往生際が悪いですよ、陛下」

「ふ、二人は負い目がないからいいだろうが、僕はその…色々合わせる顔がないというか……」

「……はあ、リッド」

「はい、ヴィヴィ様」

「せ〜のっ！」

息を合わせ、両サイドから白い布をつかみひっぺがす。するとそこには、アインハルトとよく似た色彩の美丈夫がうずくまっていた。

「ああっ!？」

「ほら、シャンとしてください。アインハルトに笑われますよ」

「私と違って、あなたは立派に王として歩んだじゃありませんか。なら堂々と向き合ってください」

「う、それは、だが……」

バツの悪そうな表情を浮かべ、ノロノロと立ち上がりつつ視線を右

往左往させるクラウス。

そこで、ようやく現実に理解が追い付いたアインハルトが彼を見上げる。その視線に気づき、おずおずといった様子でクラウスもアインハルトと視線を合わせる。

「クラ、ウス」

「君が、アインハルトか……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

お互いに何を言っていないかわからず、長い沈黙が場を満たす。

先にそれを破ったのは、アインハルトの方だった。

「……私とは、会いたくありませんでしたか」

「違う、それは違う。どちらかと言えば、さつきも言った通り『合わせる顔がなかった』」

「どういう、意味ですか？」

「僕は君に、君たちに余計なものを背負わせてしまった」

なんでも、厳密に言えばアインハルトはクラウスの直系というわけではないらしい。彼は生涯独身だったが、王として後継者を定めないわけにはいかない。そこで傍系から養子を引き取ることで、跡取りとした。それがアインハルトの先祖である。

クラウスは養子に取った子を我が子同然に育て、短い時間の中でできる限りのことを教え遺した。その中に、『記憶継承』も含まれる。自身の後悔と同じ轍を踏まないように、もしもの時に己が『霸王流』が道を開く力になればと願って。

しかしそれは……

「僕の人生は、失敗ばかりだった。その中でも最悪のものが二つ、一つがオリヴィエを止められなかったこと。もう一つが、君を苦しめた。記憶継承だ」

「そ、そんなことは……」

「だが確かに、君は僕の記憶のせいで苦しみ、藻掻き続けてきたんだろう？ リッドの様に、技術や知識だけにとどめていれば……あるいは、いつそ継承などさせなければ、君は一人の女の子として……」

「ああ……ちよつといいか、陛下」

「君は……」

「ノーヴェ・ナカジマ。一応こいつのコーチっつーか、まあそういうのだ」

「そうか。君にも……いや、君達にも多大な迷惑をかけた。伏して謝罪……」

「いらねえ」

「なに？」

「代わりに先に謝つとく。これからすることはあたしの完全な独り善がりで、身勝手だ。アインハルトも、後ろの連中も関係ない。処罰するってんなら甘んじて受ける。だから、こいつらには責任がないってことを承知してくれ」

「君は、何を言ってる……」

「歯あ食い縛れ！ このボケナス!!」

「ぐっ!?!」

ノーヴェの拳がクラウドの頬に突き刺さる。見れば、いつの間にかジェットが展開されている。正真正銘、遠慮呵責一切なしの全力だ。

頑丈さが売りの霸王とはいえ、流石に不意を突かれればその限りではない。クラウドの身体は殴り飛ばされ、背中から床に盛大に倒れ込む。痛む頬に顔をしかめながら、ゆっくり体を起こせば……ノーヴェはクラウドではなくアインハルトの方を見ていた。

「あんたの気持ちもわかる。良かれと思って遺したもんが、後になって望んだのとは真逆の結果になったら頭の一つも下げなきややって

らんねえのは当然だ。大人として、ガキどもに詫びなきやいけねえ責任があるのも理解してるつもりだ」

「……」

「だけだよ、それは結局アンタの都合だ。こいつを見るよ、アンタに頭を下げられてどう受け止めていいかわからねえってツラしてるだろ。こいつはアンタに謝ってほしいわけじゃないし、罪の意識を感じてほしいわけでもねえんだ。」

アンタだって、別にこいつを泣かしたいわけじゃねえだろ」

クラウドもアインハルトに視線を向ける。そこには、困惑の表情のまま目尻に涙を浮かべる彼女がいた。

「……当然だ」

「なら謝るな。謝りたくても、謝らなきやいけないとしても、絶対に謝るんじゃねえ。こいつが望まないもんを押し付けるのは、アンタの本意じゃないんだろ」

「……そうだな。たしかに、あなたの言う通りだ」

クラウドから見れば余計な重荷だったろうし、おそらく外野から見ても同じだろう。だがそれでも、アインハルトにとって、クラウドの記憶はかけがえのない宝物だった。辛く、苦しいものだったとしても、間違いなく「余計」ではなかった。

ならば、確かにノーヴェの言う通り謝るべきではない。アインハルトが欲しい言葉は、そんなものではない。

クラウドは再度立ち上がり、もう一度アインハルトと向き直る。

謝りたい気持ちはある。だがそれは、結局のところクラウドの問題に過ぎない。アインハルトを思うのなら、告げる言葉は別にある。

「言い直すよ。ありがとう、アインハルト。僕の記憶、無念……僕の願いと拳を受け継いだのが……君でよかった。」

僕が遺したものは、霸王流は……君の役に立っただろうか」

「……はい。はい、間違いなく！今の私があるのは、クラウドが遺してくれたものがあつたからです！

あなたが遺したものがあつたから、私はかけがえのないものに出会えました。恩師に、親友に、大切な仲間たちに出会えたのは、あなた

のおかげです。

ありがとう、クラウド。私に、多くの宝物を遺してくれて本当にありがとうございます」

「……………そうか。僕が遺したものは、無駄ではなかったのか。そうか、そうか……………よかった」

\* \* \* \* \*

つて感じだつたかなあ。いやあ、今思い返すと色々懐かしい。

——ふうん。クラウドってその頃からメンドクサイ性格してたんだ。

メンドクサイって…………いや、確かにメンドクサイと思うけど。でもそれって、責任感とかの賜物なわけで…………。

——それで相手を泣かせてたら本末転倒じゃない？ そんなだから起源：傍迷惑ランスロットと馬が合うんでしょ。

あゝ、そういえばあの二人って結構仲いいよね。マシユさんとインハルトさんに、どう関わっていいか未だに相談し合ってるし。

——相談相手が悪い、お互いに。

否定できないなあ。

こう、相手のことを一生懸命考えてはいるんだけど、微妙に的外れというか、空回りしてるというか…………。

——まあ、母さんと違ってアインハルトさんは塩対応じゃないだけマシじゃない？

マシユさん、ホントにランスロットさんには厳しいからね。まあ、アレはランスロットさんにも原因があるんだけど。

——いや、アレは百パー自業自得でしょ。

(そして、流石親子。基本的にランスロットさんへの対応が辛辣だ。どーしてフェイトさんに似なかったかなあ、結構フェイトさん似のはずなのに、どうしてここだけ…………。あるいは立香さん似だったらもうちよつと…………でも、うん。自業自得なのは事実なんだけどね)

——それで、その後は？



その後？ とりあえず、みんなの自己紹介しながら所長さんにあいさつに行つて、その日は「アニミ・カルデア」で見ている場所をざつと見学。最後は食堂で歓迎パーティ……

——いやいや、そうじゃなくて…ほら、トラブル的に。

……いや、そんな楽しそうに聞かないでほしいんだけど。

——え、でもカルデアの醍醐味じゃない？

(どこで育ち方間違つたかなあ……いや、環境かな？ やっぱり環境が悪いのか。別にトラブルメーカーなわけじゃないし、黒幕に回るわけでも、余計に引つ掻き回すわけでもない。だけど、トラブルの匂いに「ワクワク」しちゃうのはどうかと思うんだよなあ。お姉ちゃん、ちよつと将来が心配です)

——ほらほら、うちに来て何も無いなんてあるわけないんだしさ。

自分で言うのもどうかと思うなあ……。

まあね。たしかに、到着して早々あつたわけだけど。

——えつと、テイアナさんとスバルさん、それにはやてさんはもうその時離脱済みでしょ。

うん。だからなのはママに、ね。

——なのはさんかあ……スカサハとか？

ううん、アスクレピオス先生と婦長が。

——おおっ！

目をキラキラさせない!!

なんというか……あの頃つてアスクレピオス先生、リンカーコア関連の症例とかに興味津々でね。JS事件の時の後遺症の経過を見るついでに、出産がリンカーコアに与える影響を調べるつて。婦長は婦長で、またママが無茶してないか検査するつて言いだしてさ。

どつちか片方ならまあ問題はないんだけど、二人同時に来てママの取り合いに……。

——ああ、所謂「勝つた方が治療するだけです」？

……うん。治療方針の違いというか、お互いの治療における優先順位の違い？ とでも言えればいいのか。

婦長は「看護師」で、アスクレピオス先生は「医者」。だから、基本的には治療そのものは先生に任せて助手とかに回るんだけど、微妙にソリが合わないからなああの二人。

こう、「治療最優先」の婦長は迅速確実がモットーで、「医療の発展最優先」の先生は緊急事態じゃなければ患部とか徹底的に調べてデータを取って、新しい治療法も積極的に試していく……。

——そうそう。患者を治療するって点では同じ癖に、方針とかが違うから割と衝突して大乱闘。……よし、記録が残ってないか今度漁ろう。

怖いもの知らず……いや、怖いもの見たさ？ まあ、別にいいけど。

でもね、当事者はシヤレにならないんだよ。危うくママが大岡裁きされそうになるし、こつそり逃げ出せばそんな時だけ息を合わせて二人で追撃。涙目になりながら逃げまわるママ、未だに忘れられないよ。

——なのはさんをマジ泣きさせられる人って、割とレアだしね。教導隊隊長だつてやったことあるんだよ、ママって。それを泣かせるってレアどころの話じゃないから。

——そういえば、なのはさんに士官学校の校長にならないかって打診が来てるって聞いたけど？

……それ、一応機密扱いのはずなんだけどどこから……いや、いい。今のは忘れて、聞くのが怖い。

とりあえず、そういう話も来てるのは本当。他にも、空隊の養成校とかもね。

まだまだ飛べるとはいえ、流石に体力的にきつくなってきたのは本当だし。娘としても、そろそろ腰を落ち着けてほしいし。

まあ、ママ自身はのんびりと喫茶店経営も視野に入れて迷ってるみたいだけど。

——なるほど……はやてさんも現場を離れて、すっかりハラオウン派の重鎮だっけ。

うん。クロノさんは執務官長で、見事にハラオウン派のトップ。フェイトさんはもつと上にも行けたはずだし、やろうと思えば派閥

のナンバー2だって狙えただろうにね。

——そこはほら、母さんだから。父さんの傍を離れたくないからカルデアの“駐在武官”一択。

そのカルデアも、最近大分落ち着いてきたから規模を縮小して解体も近いんだっけ？

ねえ、そっちはそれでいいの？

——時代の要請だよ。カルデアはもう必要ない、なら余計なものを残さずに消えるのが良い。ま、父さんが生きてる間の完全解体は無理だろうけど。

カルデアの詳細を知りたがる人はいるだろうしね。

——でも、それさえ済んだら全部終わり。ま、最後の一つが残ってるわけだけど。

……。

——なんなら、ヴィヴィオが殺してくれてもいいんだよ？

やめてよ。私、そんなの絶対にしないから。

——いいの？ 下手したら、それこそ世界の滅亡だよ？

可愛い弟を手にかける理由としては下の下。だいたい、まだ何もしてないのにそれをする法的な理由がないでしょ。

——優等生だなあ。

優等生で結構ですう。

——僕に、死ぬまで生きろって？

永遠なんて苦にもしないでくせに。

——それでも寂しいとは思うよ、きつと。

……ごめん。

——あはは、別にそんな顔をさせたかったわけじゃないんだけどなあ。大丈夫、寂しいけどそれだけさ。別にそこで終わるわけじゃない、ちゃんと僕も世界も先に繋がってる。なら、のんびりと綺麗なものを探して生きることにするよ。

“生きることに飽きる”なんてありえない。世界にはいくらでも美しいものがあって、未知なんてどこにでも転がってる…だっけ？

——そう。“学ぶ”よりもずっと早く、ずっと多くのことが新た

に生まれている。知ろうとするだけで、いくらでも生きていられるよ。

加えて、旅をする。世界に絶景・奇景は数知れず。全てを見て回って、また最初からやり直せばその頃にはまた違う景観が形作られている。

——最後に出会いと別れ。別れは寂しいけれど、「綺麗なもの」との、「美しくなるかもしれない」ものとの出会いは心が躍る。何がどう化けるかわからないのも楽しいね。

……そう聞くと、確かに「永遠」も悪くないのかもね。

——そうさ。人は永遠に夢を見過ぎていくけれど、同時に恐れ過ぎだ。百年も億年も、僕にはそれほど差があるようには思えないんだけどなあ。ただ願わくば、僕が「怪物」にならないよう、人間には頑張って美しくあつてほしいね。4番目みたいに引き籠もるのは、ちよつと勘弁。

ねえ。美しいものを探すのは、自分を殺せるものを見つける為？

——うーん……確かに僕を殺せるのは「美しいもの」だ。逆に言えば、それ以外に殺す術はない。それが、僕というこの世界最初の……あるいは最後の「人類悪<sup>ピースト</sup>」の特性。でも、別に死にたいわけじゃないよ。完成したいとは微塵も思わないけど……単に、僕が見たいから探すだけ。

そつか……ならいいよ。私も、世界が少し綺麗なものになる様に、頑張る。

——はは、それは楽しみ。そうだ、ヴィヴィオは知ってる？ 昔、母さんたち二人でサンタやったことがあるんだって。で、その時の格好が……

ああ、知ってる知ってる。アレは……なんというか凄かった。デンジャラスかつピースト……ううん、もうそんな段階じゃなくて……

## 聖別秩序機構ベルカ 「ゆりかごの眠り姫」

### Next Order

人理修復の旅の末、寄る辺なき身となったカルデア。

いくつもの偶然と微かな縁に導かれ、漂流の末に安住の地にたどり着いて早5年。有する技術と力を足掛かりに着実に地歩を固め、縁を紡いだ少女たちもまた確かな時を重ね大輪の花を咲かせつつあった。

だが、金色の少女は胸の内に焦りを抱く。

幸せな日々、充実した時間。それらによつて生まれ、育まれるものの名を「安定」と呼ぶ。人は「安定」を望み、「変化」を恐れる生き物だ。

しかし、変化なくして進展なし。「彼」との関係は相変わらずで、手足が伸びても子ども扱いのまま。幼かった肢体は、年月の経過とともに十分に「女性的」な曲線を描いているはずなのに。どれだけ草や身嗜みに気を遣っても、変わることなく向けられる微笑みに不安が募る。

嬉しいはずなのに、もどかしい。

それでも世界は回り続ける、淡々と冷徹に。幾許かの火種を抱えつつも、概ね穏やかで：時に騒がしく。

そんな日々が、一つの世界を覆う「ノイズ」によつて一変した。

確かにそこにありながら、されども一切の観測を寄せ付けないその世界の名は「ベルカ」。

最早歴史の彼方へと追いやられ、ただその名だけが人々の記憶に残る過去の遺物。だが、その名が持つ意味は今なお重い。

威信をかけて八方手を尽くして事態の收拾に奔走したものの、ついに万策尽きた時空管理局は「異なる法則」を駆使するカルデアに協力を要請するのであった。

“発生した観測不能領域内の調査、及び事態の打開を望む”

少女は大きな決断を迫られる。

降り立った地で、臃げな記憶が断片的に蘇る。風景ではない、人物でもない、出来事も違う。されど、確かに何かが魂の奥底を刺激する。

——握り潰されそうなほどに胸が苦しい

——肩にのしかかる重さで足が竦む

——押し寄せる「ナニカ」が心を切り刻む

——狂おしいほどの悲嘆

——記憶の欠片だけで、気が触れてしまいそう

——だけど、それでも私は……

決めたんだ      この手で      自分自身の意志で      悪を為すと

あなたがそれを望んでいないことは知っている。

でも……ごめんなさい、これは私のワガママ。

“□しています”

君が■れてしまうかもしれない。

それを私は許せない。

“心から、君を□しています”

私は世界のすべてを切り捨てる。

何の罪もない生命を踏み躪る。

“君が■れてしまう方が、ずっとずっと怖い”

応えてくれなくてもいい。怒ってくれて構わない。

嫌われ……たら泣いてしまうかもしれないけど、それも受け止められる。

“これが……最後のワガママだから”

君には、本当にたくさんのもをもらった。

それなのに、もつともつと……そう思う自分がいる。私はきつと欲張りだ。

抱えきれないくらいたくさんのもを君に貰ったのに、君の全部が

欲しいと思う自分がいる。

“君を、守らせて”

でもそれ以上に、君に幸せになってほしい。笑顔でいてほしい。そのためなら、君の傍にいられなくなっても構わない。

“ありがとう、私と出会ってくれて”

聖別秩序機構 ベルカ

「ゆりかごの眠り姫」

定理偏差値：C+

——法理抵触、確認。速やかなる執行を。

世界よ、美しくあれ。人の営みよ、正しくあれ。故に、寸分の狂い  
ない運営を。

降り立ったのは、法と秩序によつて律された穏やかな世界。

豊かな暮らし、繁栄した街並み。人々は礼節を重んじ、仁愛を持つ  
て生きている……まさに、絵に描いたような理想郷。

にもかかわらず、異様な緊張感が空気を満たす。

人々は恐れる、“悪”の存在を。悪は悪であるが故に存在してはな  
らない。

ならば、存在してはならないものの末路とは……。

「鋼の秩序」 「セイシを賭けた戦い」 「優しい嘘」 「いつか<sup>未</sup>と繋がる  
縁」 「諸王」 「雷の罪過」 「孤独の夜」 「閉ざした瞳」 「三百年の  
悲願」 「三人の絆」

## カリム・グラシアの場合

——…むう、そろそろ少しくらい教えてくれてもいいと思うんですけど……。

ふふふ、おかしなことを言うのね、ヴィヴィオ。衛宮さんのことで知っていることは、もうすべて話したと思うのだけど。

——（あからさまなまでの「苗字」呼び＋「さん」付けが、かえって怪しんだけどなあ）

ええ、本当に…あんな人のことなんて知らないわ。全然！ 全く！！ これっぽっちも！！

——（あ、圧が、圧が凄いです騎士カリム。余計な詮索を許さないオーラがヒシヒシと…あ、シスターシャツハもしきりに頷いている。…ごめんなさい、八神司令。やっぱ無理っぽいです）

それにしても、どうして誰も彼もそんなことを気にするのかしら？ 一時期はロツサまで調べていたみたいだし、最近はシスターセインやシャンテもあれこれ聞いてくるんですもの…困ったものね。いくら調べたって、何も出て来やしないのに。

——…あの、なぜシスターシャツハに目配せしてるんでしょう？ なぜシスターシャツハは闘気を漲らせてるんでしょう？ 別に何も無いんですよ？ そうなんですよね！

もちろんよ。まあ…あの子どもたちが無駄な労力を払ったりしないようにお話をするつもりだけど。

——（なんだろう、いつもと変わらない柔らかい笑顔のほずなのに…無性に怖い。シャンテ達、口封じとかされないよね？）

（証拠になりそうなものは粗方処分するか嚴重に管理してるはずだから大丈夫だと思うけど、念には念を入れておかないと）

——あれ？ 今何か言いました？  
いいえ、気のせいじゃないかしら（にっこり）。

——ハイ、ソウデスネ。じゃ、じゃあ騎士カリムはいま気になる男性とかいないんですか？

ふふふ、ヴィヴィオもそういうことが気になる年頃なのね。私も急



がないと、あつという間におばさんかしら？

——（桃子おばあちゃんとかリンディさんもそうだけど、この人っていまいち〃年を取った姿〃がイメージできないんだよねえ。十年後も二十年後このままのような気が……）

でも、生憎いまのところそういう方はいないわ。私の場合、教会から出る機会がほとんどないから、出会いがないのが悩みの種かしら。

——それでなくても教会騎士で管理局の理事……高嶺の花過ぎますよね。

自分で言うようなことではないけど、肩書自体が人除けになってるのは否定しないわ。下心ありきの方だったら、枚挙に暇がないのだけ……。

——じゃあ、例えば好みのタイプとか！

そう言われると、あまり考えたことがないのだけど……強いて言うのなら（ポツ）。

——（おお!! これはコイバナの予感!!）

ゴ、ゴルドルフ所長なんて、大変可愛らしくないかしら。

——可愛らしい、ですか？ あの所長さんが？

………つて、あれ？ おつかしいなあ、違和感が仕事しない。なんで？

ふふふ、口ではご自分のことを『冷酷な貴族主義』とか『選民思想の権化』なんて仰るけど、言葉と行動の端々に〃人の好き〃が透けて見えてしまっているとは思わない？

カルデア以前から苦勞され、所長になられてからは窮地と修羅場の連続で増々苦勞されたでしょうに……すぐに狼狽えて誰かに感情移入してしまうんですもの。多分、カルデアで一番人間味があるのはあなたの方ではないかしら。

——（言わんとすることはわかる気もするし、実際所長さんってカルデアの清涼剤というか、良心の最後の砦みたいなところがあるけど……それ以上に、シスターシャツハの『どうしてカリムはこう男性の趣味が悪いんでしょう』と言わんばかりの濃い呆れの表情が気になる）

そうそう、カルデアと言えばようやく渡航許可が下りたんだったわね。アインハルトたちを連れて行くのは、次の長期休暇かしら？

—— はい、そのつもりで……そうだ、それで確認というか、聞いておきたいことがあったんです。

ふふっ、何かしら。私に答えられる範囲ならいいのだけど。

—— えっと、まずはカルデアの概略とか業務についてどこまで話していいのかなって。管理局側からの禁則事項とかは八神司令に聞いたんですけど、教会としては話しちゃ不味いことってあります？

そのためには、まずヴィヴィオがどの程度カルデアのことを把握しているかを聞いた方が良さかしら。創立理念や保有技術、彼らがこちら側に来るまでの活動内容については？

—— 概要くらい、だと思えます。 “人理保証” と必要に応じての “修復” っていう創立理念は聞いてますけど、あれ裏の目的とかありますよね？

さあ、どうかしら？

—— ……つまり、知っちゃダメな範囲なんですね。とりあえず、技術関係については “カルデアス” と “レイシフト”、 “シヤドウ・ボーダー” あたりについては『何ができる』かは知ってるつもりです。『どうやって』の部分はさっぱりですけど。

というより、管理局や教会としても具体的な技術や理論については知らない、というのが実情ね。ある意味、それこそがカルデアの生命线ですもの。

—— 活動内容についても、大まかに何をしてたかは知ってます。

“人理焼却” と “七つの特異点”、それに続く “濾過異聞史現象” と無かったことにされた人類史 “異聞帯”、そして “人類悪”、これらの解決ですよ。でも、具体的にそれぞれの特異点や異聞帯で何をしたとか、人類悪との戦いがどんなものだったかは知りません。

まあ、そうですね。あれは、迂闊に外部に漏らせるようなものでもないでしょうし……じゃあ、こちらに来てからの活動は？

—— スペース・ボーダーで各次元世界を回りながら、再建した “カルデアス” で百年後を観測。文明の灯が消えていたりした場合に

は、報告して対策を促している…でいいですよね。

うくん、それだと50点<sup>分</sup>かしら。

——じゃあ、残りの50点<sup>分</sup>は？

彼らが観測しているのは何も未来だけではないわ、過去も観測しているの。

なぜなら、カルデアアの観測結果に揺らぎがあるということは、その世界において何らかの異常事態が発生するということを意味する。でもそれは、必ずしも「現在」より後とは限らない。ちようど、「人理焼却」がそうだったように、ね。

——それは、過去に「特異点」が発生することもあるってことですか？

頻度としてはそう多くないのだけど、稀に。

——でも、どうして……。

あなたにはそろそろ教えておいてもいいかしら。

まず、根本的な問題。私たちの世界と彼らの世界は似て非なる物であることは理解している？

——はい。地球に限ってみれば酷似しているけど、端々で違いが散見されるんですよ。世界の外に目を向ければ、なおさらに。

あちら側には管理局自体が存在しているかすら定かではない。そもそも、次元世界という概念そのものがあるかどうか……だけど重要なのは、そんな表面的なことでもなくもっと根源的な話よ。

——根源的？

そう……物理法則をはじめとした世界の在り方<sup>システム</sup>が違うの。多くの部分では共通しているけど、こちらには「アラヤ」や「ガイア」、そして「抑止力」という概念自体がおそらく存在しない。いえ、正確には存在しなかった、というべきかしら。

だから、「英霊の座」もないし、当然「サーヴァント」の召喚もできない。集合無意識によって作られた、世界の安全装置である抑止力がない代わりに、世界と人類の存亡は私たちの手に委ねられている。

それが残酷なことなのか、あるいはもつと別の……それはきつと誰にもわからないけど。

……でも、今この世界ではサーヴァントが召喚できる。うん、召喚できるようになった。それはつまり……

新たに「英霊の座」が生まれた、と考えるべきでしょうね。ここからはカルデア側からの推論だけど、「世界法則」<sup>システム</sup>にある種のアップデートのようなものが行われたんじゃないか、ということよ。

こちらになかったものを、世界が「有用」と判断して取り入れた。それが「英霊の座」であり「サーヴァント」……多分、これらはそのうちの極一部のはずよ。私たちに確認できたものだけがすべて、ということはないでしょう。

それも十分大問題だけど、それ以上に重要なことがある。アップデートが行われそれまでなかったものが入り入れられたのなら、当然何かしらの不具合やバグが生じるものよ。そして、それこそが……

——特異点、なんですネ。

ええ。きつと、カルデアがこちら側に来た時からアップデートは行われていたんだわ。その結果、様々な次元世界で不具合<sup>特異点</sup>あるいはバグが生じた。当然、発生した特異点を放置すればどんな影響が出るかわからない以上、人理<sup>ベルトリキヤスト</sup>補正作業は必須ね。とはいえ、カルデア以外にそれを可能にする組織もない以上、彼らが対処するしかない。

技術を公開してくれば管理局にも対処できるでしょうけど……モノがモノだからリスクが高すぎる、と考えるのは当然ね。まあ、見方を変えれば「自分たちの後始末をしている」とも取れるから、それも理由の一端かもしれないけど。

——なるほどお。

(本当に、貧乏くじを引いてばかりね。存在の不確定化による漂流にしたところで、元は人理漂白解決のために己むに己まれず、ということだし。

曰く、<sup>ロストベルト</sup>異聞帯は人類史そのものが行った足切り。切り捨てられたが故に、<sup>第二魔法</sup>並行世界論を以てしてすら観測できないはずの領域。にもかかわらず、カルデアのデータベースとスタッフの魂にはその「存在」が刻み付けられてしまった。

全ての空想樹の伐採と<sup>ロストベルト</sup>異聞帯の消滅、そして異星の神の打倒を以

て、人理漂白は一応の解決を見た。でもそれは、表面的なものに過ぎない。存在しないはずのものを知っているが故に、カルデアある限りその「残滓」は完全には拭いきれない)

……………  
（「世界は矛盾を許さない」）

……………ム。

（存在しない筈のものの残滓が残っているという、その矛盾。世界を救った彼らの存在そのものが、今度は世界を脅かす原因になってしまった。それこそ、いつ何時また人理が覆されてしまうかわからないくらいには。

もちろん、危ういながらも对症療法で何とかなつたかもしれない。発生した異常を逐一処理していく、いつ終わるとも知れない作業だけ。なにしろ、カルデアが存在する限り異常が発生し続ける可能性もあつたと聞くし。

そんな中で一度でもミスすれば……いえ、抑止力による修正のことを考えれば、成否にかかわらず「焼却」か「漂白」か、あるいはもつと別の何かが起こっていた可能性も否定できない。それ位には危うい状態）

……………力………？

（少なくとも、<sup>人理補正</sup>バグ取りさえしていれば大きな問題は起こらないこちら側とは、比べ物にならないくらい危険な状態だつたそうですもの。

だからこそ、彼らは決断した。せざるを得なかった。多少存在が不確定になつていたとはいえ、楔を打ち、<sup>アンカー</sup>錨を下ろし、存在証明を可能にする彼らなら元の世界に残り続けることは不可能じゃなかった。

にもかかわらず、敢えてそれらすべてを放棄して漂流の道を選択したのは、責任を果たすため）

……………カリ………！

（そう、全ては取り戻した世界ニチジヨウを守るため。そして、奪った世界イノチを無意味にしないため。

たとえそこに、自分たち自身存がいらなくなつたとしても。彼らは、自らの意志でそれを選んだ）

……………リム!?

(そんな、悲しくも尊い決断の果てに、彼らはこの世界にたどり着いた。)

色々と頭の痛いこともあるけど、いずれは不具合特異とバグ点の発生も終息する見込みという話だし……それくらいは許容しても罰は当たらないでしょう。こちらも、それなりの利益は得ているわけですから)

……………騎士カリム!!

は、はいっ!? って、あら?

——どうしたんですか、ブーツとして。

……あらあら、ごめんなさい。ちよつと考え事を……それで、何の話だったかしら?

——もう! 召喚のことについてですよ。本来、サーヴァントの召喚はできない。少なくとも、こちら側の世界の英雄は無理なはずだったのに、ある時例外が発生して“あの人”が召喚されたんですね。

ああ、そのこと。そうね。報告を聞いた時は私も驚いたわ。

……いいえ。それどころか、召喚された方の正体を知った時は自分の正気を疑った……というのが正しいかしら。

——無理もないと思います。というか、騎士カリムだから正気を疑うだけで済んでますけど、外部に漏れたりしたらいったいどうなることか。でも、他に召喚された人がいるって聞いたことないんですね。

たぶん、“あの事件”がきつかけなんだと思うわ。実際、それまでいくらカルデアが召喚を試みても、少なくとも“こちら側の英雄”は一人も召喚されなかったんですもの。

おそらく、少なくとも過去の人物については無条件に座に記録されるわけではないのでしよう。“英霊”や“サーヴァント”というものに関わりを持つことで記録されるとか、そういった条件があるのではないかしら。

まあ、“あの方”にしたところで事件があつてから召喚されるまでに随分と間が空いていたし、他にも条件がありそうだけど。

——そういうものですか。

逆に言えば、条件さえ整えばまた別の誰かが召喚される可能性もあるわけだけど。それこそ、ヴィヴィオたちが到着するまでに、なんてこともあるかもしれないわ。

——怖いこと言わないでくださいよお。アインハルトさんたちへの説明（言い訳）だけでも気が重いですから。……ところで、「あの事件」って？

\* \* \* \* \*

第1無人世界「ベルカ」。

かつてミッドチルダ式魔法と勢力を二分した古代ベルカ式魔法発祥の地であり、次元世界最大の宗教組織「聖王教」が信仰する「聖王」が治めた世界。

それ故に、ロストログアの暴走で滅び、長く続いた戦乱と用いられた兵器による汚染で人の住めぬ土地となった今でも大きな存在感を放つ世界。

管理局システムが適用される次元世界の出身なら当然に、システムへの批准こそしていないが他の次元世界との国交を行っている高度な文明を持つ世界の出身なら、一度は耳にしたことがあるであろう世界の名だ。過去の事件や戦争の影響から、人の生存を許さぬ過酷な世界と成り果ててしまったが、数年に一度は調査団が派遣され、稀に新たな発見が世間を賑わす「忘却」とは未だ縁遠い存在。

そして新暦71年。この年もまた、ベルカへの調査団が派遣された。目的は、かねてより発掘が進められていた遺跡群の調査。かつては激しい戦争が繰り返され、未だに稼働する防衛機構やいつ何をきっかけに再起動するかわからない兵器など珍しくもない場所だ。

調査団にはミッド式・近代ベルカ式を問わず優れた魔導の使い手が護衛に付き、1時間おきに欠かさず定時連絡が行われるなど、安全管理も徹底している……そのはずだった。

何をきっかけに異変が発生したのかは不明、あるいは調査団とは無

関係に発生したのかもしれないが。いずれにせよ、最後の定時連絡から15分ほどして、突如遺跡内部……調査チームの一つが踏み込んだその一角から“ノイズ”のようなものが発生したのが始まりだった。当該箇所を調査していたチームの一人はオープン回線で叫んだ。

“仲間が消えた”と。

その報告を受けたベースキャンプのオペレーターたちは、すぐに各チームに撤収を指示。しかし、ほぼすべてのチームが無事帰投する中、件のチームは誰一人として帰ってこなかった。救出に向かうか、それとも救援を要請し待つか、あるいはベルカからの全面撤収か。議論は紛糾するかに思われたが、そうはならなかった。

正体不明の“ノイズ”が徐々にその範囲を広げ、一刻と経たないうちに遺跡全体を覆い、なおも拡張し続けていたからだ。彼らは魔法やサーチャーを放つてその正体を突き止めようとしたが、その全てが為す術もなくノイズに吞まれて消えてしまった時点で、調査団単独での事態の解決を諦めた。

ロストログアが発見されることもあることから多様な分野の専門家と優秀な戦力を揃えてはいても、彼らは所詮遺跡発掘チームとその護衛に過ぎない。いや、だからこそ、というべきか。自分たちの知識と経験にないものが現れた、だからこそその慎重策。それこそが、ロストログアに関わる調査・研究などを生業にする者の心構えなのだから。

結果的に、正体不明故に迂闊な接触を避け、メンツに拘わることなく外部に救援を要請したのは正しい判断と言えただろう。おかげで、異常事態は速やかに管理局の知るところとなり、滞りなく救援部隊を編制、派遣することができたのだから。

ただ、問題はむしろここからだった。

仲間を見捨てることに忸怩たる思いを抱えながらも衛星軌道上まで退避し、少しでもノイズの正体に近づこうと観測を続けていた彼らは、6時間後に到着した比較的近くの有人世界からの先遣隊と合流。事情聴取とノイズの観測を続け、やがて本局より救援隊本隊が駆け付けお役御免となった。



とはいえ、事態は一向に好転の兆しを見せない。どれほど調べたところで、ノイズの正体は「不明」なまま。視覚的には半球形の「モニター」上に生じる砂嵐」のようなものに覆われているだけで、彼の世界は存在し続けている。にもかかわらず、送り込んだ無人機は消息を絶ち、魔導・科学を問わずあらゆる観測が空振りに終わる。端的に言つて、「見えているが存在しない」それが管理局に突き付けられた結論だった。

強いてわかったことと言えば、「浸食」が徐々に「加速」してきていること。無論、加速の上限も、拡張の限界もわからない。最悪、「終わりが無い」可能性すらある。

そんな可能性を振り払うように、聖王教会をはじめとした関係各所と連携し、威信をかけて八方手を尽くして事態の收拾に奔走したものの、ついに万策尽きた時空管理局は……やむなく最後の手段に打つて出た。

「この世界とは異なる法則」を駆使する「人理保障機関フィニス・カルデア」に協力を要請したのだ。

正直、この決断には最後まで反対意見が根強くあった。既にいくつかの次元世界を観測し、時に未来へ向けての助言を、時に過去に生じた特異点の修正を行ってきたが、彼らの言葉と行動を訝しむ者は少なくなかった。

なぜなら管理局全体としてみれば、カルデアは不信の塊だったからだ。

——「異界法則」の元に運用される「秘匿技術」の数々

——主戦力は「英霊」あるいは「サーヴァント」と呼ばれる、「オカルト」としか言えないような存在

——管理局システムへの批准を拒み、無人世界を独自に開拓するという姿勢

——侵入した犯罪者の引き渡し要求も拒否し、時には囲い込むこともあると聞く

——あまつさえ、構成員の中には危険人物も多く、時には彼ら自身も事件を引き起こすこともあるとか

カルデアとしても、否定できないことが多いだけにそれらの評価を甘んじて受け入れていた。特に身内関連のことには、むしろ「ご迷惑おかけしています」と謝りたくなるくらいだ。

だが、カルデアと比較的良好な関係を築いている一部高官のとりなしもあり、アンノウン「毒を以て毒を制す」ではないが、アンノウン「正体不明」には「異界法則」を以て対処することに。

「発生した観測不能領域内の調査、及び事態の打開を望む」

管理局からその旨を通達されたカルデアは、急ぎベルカへと向かったのだが……そこで彼らが目にしたのは、一つの世界を丸々覆ってしまふほどに拡張したノイズと、その奥に鎮座するベルカだった。

「ええい、管理局の連中は何をやっておるのか!? 事態が逼迫し、手に負えなくなつてから丸投げするなど無能の証ではないか!!」

「うくん、まあ……言っていることは正しいよね」

憤懣やるかたない様子のゴールドルフ・ムジークに、生体ユニットとしてシャドウ・ボーダーメインフレームの中央電算機になつているダ・ヴィンチがちよつと曖昧な感じで同意する。それというのも……

「でも、ゴールドルフ君。時計塔なら手に負えなさそうだからって外部に協力要請したりする?」

「するわけなからう! 我々は魔術師だ。そして魔術師とは、おしなべて排他的な利己主義の権化であり、人を人とも思わん」人でなし」  
の総称だ!

当然、そんな連中に関わる奴らも碌なもんじゃない! 弱みを見せれば付け込まれるのが目に見えておるわ! 手伝わせてやる」ことはあつても「協力を求める」など、裏で「散々利用して最後は殺す」とか思っているに決まっている!」

「なるほど。では、ミスター・ゴールドルフもそうだと?」

「あ、うん。私はね……自分でやろうとするとだいたい状況が悪くなるから。そういうえば、トウーレも言っていたな。『助けを請うは一生の損、助けを請わねば人生終了のお知らせです』と。まあ、死ぬよりは損する方がマシじゃないかね?」

「フオウオウ? フオウ!」

「では参考までに、助けを請われたらどうしますか？」

ホームズの問いかけに、ゴルドルフの目がクワツツと見開かれた。

その目からは「なんでそんな悲しいこと聞くの!? 私に助けを求めなんてあるわけないでしょ!？」という思いがありありと見て取れた。ついでに、カルデアスタッフ一同思わず目頭を押さえる。彼に助けを求めるような場面・状況というのがちよつと思いつかないのは悲しい事実だが、かといって別に「いらない」と思うほどではない。むしろ、いてくれるとありがたい、特に役には立たないかもだけど。というのが、職員一同の共通見解である。

ところで、それはそれとして……

「あれ? そういえば、なんで私まで出張っているのかね? 昔とは違うんだから、ムンドウス<sup>本</sup>・カルデア<sup>部</sup>でどつしり構えながら成果を待っていても良いのでは? というか、最高責任者が現場に出て何かあつたらだれが責任取るの?」

「訂正訂正! そんなの今更今更! そもそも我々はチーム、チームは一人でもかければ上手くは回らないもの。ならば、一人だけハブにするなんてナイナイ! まあ、人員は補充できましたが責任職を果たせる人がいないというのが実情ですが。なので、ゴルドルフ氏にはそこでどつしり構えていてもらいましょう」

「いや、だがね……」

「では、いつ暴走するとも知れないサーヴァントたちをミスター藤丸一人に押し付けると?」

「うぐつ!」

「勢い任せの独断専行」

「ふぐつ!」

「目を盗んでの悪巧み」

「ひうつ!」

「まあ、藤丸の奴もなんだかんだでノリがいいですからねえ。オツサンも監督した方が良いんじゃないの?」

「……ええい、わかった! 藤丸、ちゃんとサーヴァントたちを監督しときなさいよ、ホントに! 私が目を光らせていることを忘れるな

！」

あくまでも立香を監督するのであって、サーヴァントの監督は丸投げするゴルドルフであった。まあ、いつものことだ。小心者の彼では付き合いきれないのだから仕方がない。

「あ、はい」

「頑張りましょう、先輩」

「フォウフォウ！」

「フォウさんもフォローしてくださいさるそうです」

「うん、よろしく」

（毎度のことだが、独特な空気感だな、ここは）

身内人事をはじめ、管理局も緩い面はアチコチにあるのだが、カルデアのそれはどこか違う。上下の距離が近いのは良いことだと思うが、ホームズゴルドルフ下に上がコントロールされるのはどうなのだろう。

まあ、これでうまく回っているのだから部外者が口を挟むものではないと自制しているものの、生真面目なシグナムとしてはやはり若干首をかしてしまいたくなる。

「それでキャプテン君、突入はいつかね。無論、我がカルデアの技術の粋を集めたスペース・ボーダーに不可能など……」

「無理言うな」

「え？」

「あんな正体不明アンノウンに突っ込んで、無事かどうかなんてわかるわけがない」

「うそん？」

「もちろんマジンコさ、現実を受け止めなよゴルドルフ君」

「ゴルドルフ氏にもわかりやすく言うなら、〃ありえるが物質界にないもの〃である。〃架空元素・虚数属性〃のようなものですかね」

「きよ、虚数属性ならスペース・ボーダーで……あ」

「そう、結局は同じことなのさ。あくまでも〃ようなもの〃でしかないから虚数空間に潜る機能〃しか〃ないシャドウ・ボーダーではあそこには直接たどり着けない。たどり着くには、ゼロセイル虚数潜航で虚数空間から向かうしかない。まあ、仮に虚数空間〃そのもの〃だったとして



「まあ、それでヴォルケンリッターが必要なのはわかるんだ。ベルカとの縁を辿るなら、当然の人選だと思っし」

「ま、あたしらはベルカ出身だからな」

「ベルカの末裔もいるだろうが、我らの方が適任なのは自明だろう」  
虚数潜航<sup>ゼロセイル</sup>で現地に向かわなければならぬとわかった時点で、同伴者の選定が行われ、その結果としてヴォルケンリッター一同がスペース・ボーダーに乗り込んでいる。

一応、ザフィーラの言う通りベルカの末裔というのはいるところにはいる。聖王教会のカリムもそうだし、ベルカの王族の血を現代に受け継ぐ者もいる。とはいえ、彼らの縁はあくまでも間接的なもの。本人がベルカの地を踏んだことがあるわけでもないことから、その縁は薄い。

それに比べて、往年のベルカを直接知る彼らとの間につながる縁は濃い。戦力としても期待できることを考えれば、何が待ち受けているかわからない状況では当然の人選だろう。

「そして、ヴォルケンリッターの皆さんを率いるとなれば当然……」

「まあ、これでも『夜天の主』やから」

「はやてちゃんなくしてなんの八神家なのか、です!」

「でも、不思議なんですよね。どうしてなのはちゃんまでベルカに縁があるのかしら?」

「にゃはははは……ど、どうしてでしょう?」

不思議そうにシャマルが首を傾げれば、困ったように笑うなのはお茶を濁す。別に先祖がベルカ出身というわけでもないはずなのだが……というか、彼女とベルカの間にある縁は下手なベルカにルーツを持つ面々より強い。ヴィータと仲が良い(自称)からかとも思ったが、それならシグナムと仲の良いフェイトも同様の筈。にもかかわらず、フェイトのベルカとの縁は割と薄い。ないわけではないのだが、なのはとは比べるべくもない。

その理由が判明するのは、これよりさらに4年後のことだ。

ちなみに、ここにはいないがユーノも割と濃い。ただ彼も今や一部門の長であり、基本的には非戦闘員。こんな怪しげなものに<sup>スペース・ボーダー</sup>乗せて、

不明なことばかりの地に送り込むことは許されなかったので、この場にはいいないが。実はなのはなどを同行させるのも、なかなか骨が折れたそうなの。

逆に、ヴォルケンリッターを送り込むことへの反対は少なかった。強いて言えば、聖王教会が難色を示したくらいだろう。彼らへの風当たりは、まだまだ強い。

「まあ、なのはとはやてはベルカへの縁を補強するためにも必要っていうのはわかるんだけど、なんでクロノたちまで？」

「……組織のメンツ、という奴ですね。流石に、丸投げしっぱなしで事件を解決されては面目丸潰れ、それを憂慮したのでしよう」

立香に話を振られ、クロノが肩をすくめて答える。一部高官からの圧力でベルカへの侵入はカルデア任せになるとしても、管理局からも人員を派遣し事態解決に当たらせようという話になったのだ。加えて、あわよくばカルデアの秘匿技術の奪取なども画策していたらしい。

一応提督の地位にあるとはいえ、彼もまだまだ若輩だ。とてもその流れを止めることはできない。彼にできたのは、派遣する人員に志願すること。提督の中では若輩とはいえ、されど提督。誰もこのような危険かつ不透明な任務に志願したがるらない。カルデアへの不信感もそれに拍車をかける、特に立場が上になればなるほど。そうになると、現場における管理局側の指揮官は彼でほぼ決まりだ。

カルデアの面々と比較的良好な関係を築いている彼が指揮官になれば、少なくとも余計な軋轢と不和を産むことは避けられる。裏の思惑についても、身内で固めてしまえば口裏を合わせて「できなかつた」「余裕がなかつた」と言えばそれまで、そう考えての行動だ。カルデアからも、ヴォルケンリッターの派遣を求められていたので好都合だったというのもある。

その配慮自体にはカルデア一同感謝しているのだが、立香としてはその「身内」というのが困りものだった。

(なんでフェイトまで連れてくるのさ)

(本人の志願と、現場での連携を重視した結果です。他意はありません)

んよ)

小声で抗議すれば、シレッと建前論で封殺される。相変わらずカルデアではヒラの立香と、管理局で若くして提督位についたクロノ。個人的には友人だが、こういう状況になると立香では到底太刀打ちできない。しかも、固有名詞を使わない念の入れようだ。

いや、それを言えば別に建前ばかりというわけではないだろう。クロノとしても、可愛い義妹にはできれば不確定要素の多すぎるこの任務への参加は控えさせたかったはずだ。まあ、それを言えばなのはや八神家一同も似たようなものだろうが。

とはいえ、今回の場合八神家の参加は避けられない。なのはも、理由は不明ながらベルカと強い縁を持つことから、任務の成功率を上げるために可能ならば参加が求められる。そんな中で、なのは達ほどではないにしてもベルカとの縁の強いフェイトだけを除外するなど、できるはずもない。ましてや、本人の強い希望もあるとなればなおさらだ。

(いい加減、ハッキリさせたらどうですか。さすがに、もう「子ども扱い」は難しくなってきましたよ)

「ハッキリさせないのはそっちだろ」と言いたいところをグツと飲みこむ、どうせ言ってもやり込められるだけだからだ。

しかし、クロノの言うことももつともだ。昔であれば「まだ」と言えたが、最近はそのも難しくなってきた。『まだ15歳』なのか、『もう15歳』なのか、それはフェイトを見る側の気持ち次第なのだろう。10歳という年齢差は当然縮まらないが、それが持つ意味合いは年を追うごとに変わってきている。今はまだいろいろと外間が悪いが、それももう数年もすれば形骸化するだろう。例えばあと5年が経ち、二人が20歳と30歳になれば……多少珍しくはあるかもしれないがはない。たぶん、日本生まれだったり日本育ちだったりする二人には、そこが一つの契機になる。そして、これまで時間が立香の味方をしていたのに対し、以降はフェイトの味方だ。時間が経てば経つほどに、二人の年齢差は意味を無くしていく。

そして、そんなことは立香も言われなくてもわかっている。



カルデアが此方側に浮上してからは、彼も所属関連のアレコレで忙しくなることもあり、以前ほどフェイトと顔を合わす機会も時間も減った。

代わりに、フェイトたちは第二次成長期の真つただ中。どんどん手足が伸び、身体は女性らしい丸みを帯びていく。蕾が花開くように、会う度に魅力的な女性へと変貌していくのだ。むしろ、偶にしか会わないからこそ、その変化を目の当たりにさせられる5年間だった。

年齢はまだしも、他の点においては「子ども扱いは難しくなっていく」どころの話ではない。

下手な成人女性よりも、はるかに完成された（恐るべきことにまだ成長の余地がある）柔らかくも引き締まった肢体。

辛い過去を乗り越え、大人たちの中で職務に励んできたことで鍛え磨かれた精神。

難関の執務官試験を突破した明晰な頭脳と魔導の腕、そして積み上げてきた実績の数々。

フェイトがもう子どもではないことはわかっている。むしろ、年齢以外においては「子ども扱い」できる要素が見当たらずに困るくらいだ。

もしも自分が同年代とかであれば、こつちが憧れる側であったことは想像に難くない。好意を向けられ、それを何とか躲しているという状況が、心底不思議に思うくらいだ。

半年ほど前に距離を置かれた時には、彼女が零す涙を何とかできないかと心配したりもしたが、同時に安堵も覚えたのだ。ようやく、彼女も己の気持ちに区切りをつけられたのだ、と。フェイトは聡明だ。立香がフェイトの想いに応える気がないことに、気付いていないとは思えない。

まあ、彼女の零す涙がそれを受け入れるためのものに見えなかったからこそ、立香も心配したのだが……そちらは、やっとう重い腰を上げたプレシア<sup>実母</sup>が拭いたらしい。結局フェイトが何を抱えていたのか、神ならぬ立香は詳細を知らない。周りも、聞いても教えてくれなかった。

だが、フェイトの涙の原因が立香への想いでないとすれば、最終的には元に戻るのは必然……いや、なぜか「憂いなし」とばかりに積極性が増しているのが疑問なのだが……それはおいておく。

問題なのは、フェイトがどれだけ好意をアピールしたとしても、決して「告白」をはじめとした直接的なアプローチに出ないことだ。それどころか、「デートっぽい」ことはしたことがあっても、ハッキリと「デート」と呼べることはしたことがない。彼女が保護した子どもへプレゼントを贈る際に意見を求められたり、家族や友人関係の相談だったり、いつも何かしらの理由が付属したからだ。

心の機微に聡い立香が、その裏の真意に気付かないはずがない。それらは大事な要件ではあるだろうが、相手が立香でなければならぬ理由はないからだ。なので、「都合がつかない」をはじめとした理由で断ることもあった。まあ、下手に嘘を吐くと清姫が怖いし、なにより虚偽の断りはプレシアがリークするので不可だったわけだが。結果、本当に都合がつかない時しか断れなかった。この辺り、どうもアルフと結託していた疑いがあるのだが、定かではない。

ともあれ、好意は示しつつも友人としての分は越えない、それがフェイトの強かさだった。

(いや、アレ絶対周りの入れ知恵だよね!?)

リンディ<sup>義母</sup>と間もなく義姉になるエイミイとか超怪しい。良くも悪くも素直で純粋なフェイトに、あんな搦め手が思いつくとは思えない。

立香に言わせれば『ハッキリしない』のではなく、『ハッキリさせてもらえない』のである。本人はハッキリさせたいのに、リンディたちの入れ知恵とカルデアへの手回しがそれを許さない。「なあなあ」の曖昧な状態を全力で維持しにかかっているのだ。しかも、一部サーヴァントとプレシアをはじめとしたカルデア職員までそれに便乗する始末。狙いは立香にもわかつている、彼が「落ちる」のを待っているのだろう。

一度関係をハッキリさせられてしまえば、そこからの挽回は困難。区切りをつけるとはそういうことだ。特に、立香の場合はなおさらだ。「言葉にして」「相手に伝える」というのはそういうことだ。

だからこそ、区切りをつけていない状態を維持し、先に「落とす」。惚れた方が負けとかそういう話ではない、告白するのは別にフェイトからでもよいのだ。ただ、まず「落としてから」でないと、立香はフェイトの想いを拒んでしまう、その確信があちらにはあるのだろう。

初めは年齢差故にと思っていたはずだが、どこからか情報を漏らした者がいると考えないと、今なおそのスタンスを維持している理由がわからないが。

(別に難しいことじゃないでしょう。意中の人がいるとかであれば、納得すると思いますよ。誰がとは言いませんが)

(それができれば苦労しないって……)

いつそその理由を暴露してやろうかと思ったこともないではないが、彼にも男のプライドがある。なにより、うっかりしなくてもセクハラと取られかねない内容なので、憚られるというのもある。

(マシユさんと、という選択肢はないんですか?)

(……ないよ。それはない)

噛み締めるように、そう呟く。

あるいは…いや、きつと最初の旅の時はそういう感情もあったはずだ。だが、何時しか立香は自身のそういう感情に蓋をし、女性を恋愛対象として見ないようになった。マシユにしてもフェイトにしても、大切な人だと思っている。だが、異性としては見ていない。だから、付き合うとか恋愛感情の有無とか言う話を振られても、今となっては正直困ってしまう。

相棒とか友人とか、そういうラベルの問題ではない。客観的に見れば「魅力的」だとは思いますがそれで終わりだ。恋とか愛とか、「そういう」相手として見ていない。だから、「そういう」感情を向けられても応えられないし、「そういう」風に見ないのかと問われても「ない」と断言できてしまう。

マシユもそんな立香の理由は知らなくても考えはわかっているからか、好意はアピールしてもアプローチはかけてこない。

(二人には、ちゃんと愛してくれる人を見つけてほしいんだけどな)

こんな、愛することを放棄してしまった男ではなく。誰かを愛し、家族になり、共に幸せを育める誰かと。

自身が抱える問題、それがすべてではないことは知っているつもりだ。しかし同時に、それが大きな幸せの形の一つであることも事実ではないか。

複雑な生い立ちを持つ、きっと誰よりも家族の大切さを知る娘たちだからこそ。

(あなたは、どうしてそこまで……)

スペース・ボーダーによる、ベルカへの虚数空間を介しての突入は無事成功した。

次元航行艦を改修したこともあり、スペース・ボーダーは相応に巨大だ。そのまま浮上してはいらぬ騒動の種になりかねない。そこで、必要な人員を乗せたシャドウ・ボーダーで以て浮上を実行。

恙なくベルカの地に降り立った一行が目にしたのは、どこまでも広がる蒼穹と点在する白い雲、そして燦々と降り注ぐ陽の光だった。

「気持ちいい空、ここがベルカ……」

「うん。空気は……なんというか、もうちよつとかな？ でも、聞いたのと随分違う」

次元世界の一般常識として、なのはたちもベルカのことには知っていただけに些か驚きを隠せない。

曰く、もはや人が住める土地ではない、と。空気は汚染され、水は濁り、大地は痩せ衰えている。そのため、ベースキャンプも結界で閉ざし、持ち込んだ食料や水、空気の浄化装置をフル稼働させるといふ、宇宙ステーション並の設備が必要なんだとか。

まあ、地球の都市部と比べても少々空気の悪さを感じないではないが、それでも前情報とは比べ物にならない。見渡せば、背は低いものの疎らに樹が育っているし、足元もところどころ地面が見える程度には草が茂っている。

ただし、かつてのベルカを知る者からすれば、その驚きはいかほどのものか。

「馬鹿な……ここが、あのベルカなのか？」

「え、そんなリアクションなんですか!？」

「気持ちにはわかるけどよ、昔のベルカつつつたらホントに酷いもんだったんだぜ」

「空は重く厚い灰色に閉ざされた曇天、昼夜の区別はついても陽の光を見ることなどなかったはずだが……」

「それだけじゃないわ。空気もあの頃とは比べるべくもないくらいに澄んでいるし、大地も草木も生えない、というほどじゃないわ。この分なら、水も少し濾過すれば飲めると思う」

「話には聞いとったけど、そこまでやったんや……」

「何分、束の間の勝利のためにどこの国も禁忌兵器フェアレターの使用に踏み切っていましたから」

禁忌兵器、それは古代ベルカの負の遺産の一つ。

水と大地を汚す猛毒の弾薬、すべての命を腐らせる腐敗兵器。それら、一時の勝利と引き換えに自らも滅びゆくしか道のない手段。ベルカの諸王戦争期において、追い詰められた国々はこぞつてこれらを使用していた。

その結果として、ベルカは人の住めぬ土地となったのだから。だが、いま彼らが降り立ったベルカにその面影はない。

もちろん、正しく「自然豊かな世界」には及びもつかないが、十分に人の生存が可能な世界だ。ラインフォース・ツヴァイことラインの驚きに、ヴィータがしみじみとつぶやくのも無理はない。

とはいえ、驚いてばかりもいられない。どれほど信じがたくとも、彼らが降り立ったのはベルカであるはずだ。

そのつもりで行った虚数潜航ゼロセイルだし、妙な話だが外部との一切の通信が途絶しているのがその確信を強める。普通なら有り得ないことだが、ありえない事象に覆われた現在のベルカならその限りではない。そして、見上げた空に目を凝らせば、そこには微かにノイズのようなものが見て取れる。アレに空が覆われているとなれば、それこそが何よりの証拠と言えるだろう。

とりあえず、原因究明のために件の遺跡へと向かう。

しかしその道中、彼らは一つの街を発見した。いや、街という言葉は適切ではないだろう。そこは十分に「都市」と呼べる様相を呈していた。いくつかの天衝く摩天楼が立ち並び、都市周辺には疎らに立ち並ぶ民家と畑や家畜と思しき動物の姿。

まずは古代ベルカを知る守護騎士たちに現地調査を任せてみれば

……

「なんつーか、拍子抜けだったな」

「どういうことなん、ヴィータ？」

「普通に平和だった。服装とか建物の様式とか、その辺は昔のベルカの面影があるんだけどよ」

「発展度合いだと、地球の地方都市レベルでしょうか？ あんな感じで古い建物と新しい建物が混在してて、都市周辺は民家が少なくて耕作地だったりする」

シグナムとザフィーラを残し、一足早く戻ってきたヴィータとシャルの報告がおおよそこんなところだ。強いて言えば、使用されている言語が古代ベルカのもののが多少厄介な点だろうか。まあ、それもカルデアの翻訳術式で何とかなる範囲だ。

とはいえ、なんとなくニュアンスはわかったものの、それだけでは情報が足りない。とりあえず危険性は高くないことから、今度はカルデア組と管理局組も都市に入り、人手を武器に調査を進める。

ただ、平和である分目立った情報は得られない。こちらの通貨を持っていないこともあり、目視と聞き込みが主だったこともあるだろうが。

そうして日暮れまで調査はしたものの、大した成果は得られず仕舞い。その後も数日にわたって滞在し、換金して資金を調達し、さらに調査を進めるが進展は特になし。少なくとも、どうしてあの「ノイズ」が生じたかはさっぱり。

わかったことと言えば、この世界が「王制」を敷いていること。そして、この土地の王が「霸王イングヴァルト」であり、世界そのものの統治者として各地の王を束ねるのが「聖王」な事くらいか。ただし、聖王については称号はわかれども名前まではわからなかったが。

とはいえ、これはある程度予想はしていたことだ。どうしてベルカが人の住める環境になっっているかは不明だが、今なお人が住んでいるのなら諸王時代の状況が多少なり残っているのは想定範囲内。まあ、まさかかつての王が未だに君臨しているのは驚きだったが…同一人物とは限るまい。

しかし、彼らを知りたいのはこの世界の情報ではなく、異常の原因。その手掛かりがないとなれば、いよいよ別の都市に足を延ばすか、あるいは当初の遺跡を目指すか、というところで立香は一つの疑問を抱く。

「クロノ、ちよつといい?」

「?」

「少し気になることがあって……」

そうして立香が口にしたのは、クロノにとってはあまり気に留めていない事柄だった。

「ニユース、ですか?」

「うん。ほら、中央部にでっかい電光掲示板みたいなのがあって、色々流してるでしょ?」

「そう、ですね。僕も何度か見かけましたが、それがどうかしましたか? 割と、ミッドや地球と似たり寄ったりな番組やCMが流れていたと思います」

「ああ、それは俺も思った。でもさ、変じゃない?」  
「変、というと?」

「ニユースでスポーツとか天気の話はしてたけど……強盗とか殺人とか、その手の報道って見た?」

「……見て、いません」

「俺も、気付いた時は偶々そういうのがない日か、タイミングの問題なのかなんて思ったんだけど……」

「てつきり僕もそう思っていました……いえ、思ったのかもしりません。あるいは、都合のいいことに目を向けて、深く突っ込みたくなかったのか。でも、そう言うということは、違っただけですね」

「結構じっくり見てただけど、さっぱり。それどころか、交通事故や

芸能人とか有名人のスキヤンダル系も見えてない。ねえ、そんなことつてありえるの？」

「事故や犯罪の報道がない、大変結構なことだ。一日くらいそんな日があってもいいはずだ。」

「そう思うし、思いたい。だが、現実的に考えるならば、そんなことはありえない。」

かつては執務官として現場に立ち、現在は提督として部下を率いる立場だからこそ断言できる、できてしまう。世界規模、あるいは国家規模で事故や犯罪と無縁の一日などありえない。仮にそういったことがなかったとしても、前日の、あるいは数日前の未解決事件の報道がされるはずだ。そういったものが一切なかったということは、可能性として考えられるのは二つ。

「それなりの期間にわたって事故も犯罪も起きていないか、あるいは情報統制しているか」

「王制だから、情報統制くらい有り得るだろうけど……いくら何でもやり過ぎじゃない？」

「王ほどの程度の権力があるかにもよりますが……一応、議会の類はあるようですし、流石に一切合切というのは……」

正直、この世界の政治体制などにはさほど興味がなかったこともあり、あまり突っ込んだことは調べていない。

「このことを他には？」  
「所長たちには相談してる。一応調べてもらったんだけど、どうにもね」

なんでも、王の下に補助機関としての議会があり、こちらは選挙によって選ばれるなど、だいぶ民主化されているらしいという事はわかった。貴族もいるらしいが、被選挙権は彼らの独占ではないらしいことも。にもかかわらず、一切の事故や犯罪に関する報道を規制しているというのは考えにくい。

それに、謎はもう一つ。各地の王を束ねるのが聖王なのはわかっているが、具体的な支配体制がよくわからないらしい。果たしてこの世界を治める聖王とは何者で、いったいどのような意志の元に君臨して



いるのか。あるいはそこに、この不自然さの答えがあるのかもしれない。

「それにさ、この都市まちに限った話かもしれないけど、空気がおかしくな  
い？ 特に夜」

「おかしい、ですか？ 空気が悪いとかではなく？」

「うん。妙に緊張感があるというか、張り詰めてる気がするんだよね」  
心の機微に敏感ということは、空気を読む能力に長けるということ  
でもある。立香には、この都市を満たす空気がどこか不自然に感じら  
れてならないのだ。

「……………とりあえずは、予定通り遺跡を確認に行  
きましょう。ですがその後は、できるだけ都市部を周って見た方が良  
いかもしれませんね。それも、国境を跨いで。幸い、こちらでも車両  
の類は珍しくありませんし、シャドウ・ボーダーも大勢での長旅用と  
誤魔化せないこともないでしょう」

「うん」

「ですが、ホームズは何も言っていないんですか？」

「明かす者」の代表を名乗るだけあり、人格的には問題だらけだ  
が、彼の洞察力・考察力は驚異的だ。いつそ神懸っているといっても  
いい。フェイトも一時期捜査の勉強をさせてもらったことがあるが、  
異次元過ぎて全く参考にならなかったほどである。

そんな男が、何も気づいていないとは思えないのだが……

「いやあ、ホームズはほら、アレだから」

確証が持てない事は身内にも黙っていたり途中まで言いかけて言  
葉を濁したり、というのはよくあること。一応気付いたことは伝えて  
あるのだが、何も言っていないということはまだ確証がないのだろ  
う。

「解き明かす」ことは彼の性、確証を得れば聞かなくても勝手に  
語ってくれる。むしろ、必要とあらば周囲に碌な説明もせず独断行  
動や颯爽、誤解を招きかねない言動を躊躇なく取ることさえよくあ  
る。なので、精神衛生上、下手に絡みに行かない方がいい相手だ。特  
に、クロノのような生真面目なタイプは。

そうして場所を変えて調査を進めるが、やはりなかなか進展は見られない。

件の遺跡も、遺跡として残ってはいるがこれと言ってめぼしい発見はなく。そのまま様々な都市を渡り歩くが、これまた似たり寄ったりで目新しいものはない。ただ、やはり立香の感じた違和感は正しかったらしく、どこに行っても「暗い報道」にお目にかかることはなかった。強いて言えば、「川が氾濫して〇名が行方不明」とか、「〇〇で野生の獣に襲われた」とか、そんなところだ。加害者側にいるのは、いつだって自然や不運の類で人がそちら側にいることはない。

しかしそれも、4つ目の都市に足を運んだところで崩れ去る。

発端は、立香が車通りの少ない横断歩道を、ついつい信号無視して渡ろうとした時のこと。

「君、何をしようとしているんだ！」

「? ああ、すみません。車も来なさそうなので、つい……」

「つい、じゃないだろ!? 命を粗末にするもんじゃない！」

「え? いや、いくら何でも信号無視くらいで?」

(確かに、少し不自然すぎるような……)

そういう見方もできるかもしれないが、流石に言い過ぎではないだろうか。傍らに立つマシユも首をかしげている。だが、笑い飛ばすには立香を引き留めた男性の表情は切羽詰まっていた。いや、詰まり過ぎていて。それこそ、今まさに車が猛スピードで通り過ぎようとしているところへ飛び込もうとしていたかのように。

そこで、困惑する立香の横を一つの小さな人影が通り過ぎる。

「姉さん、早く早く！」

「止まりなさい!? 行っちゃダメえ!!」

十歳くらい……いや、十二歳くらいだろうか。思春期に差し掛かるか否かの少年が、まだ赤信号(相当)の表示を無視する形で、横断歩道を渡る。普通なら、精々周りから「やれやれ」といった視線を向けられる程度の筈。

にもかかわらず、周囲からは悲鳴が上がり、誰も彼もが青褪めた表情を浮かべている。

そして、遅ればせながらわたり切ってから気付いた少年の顔は、  
絶望で彩られていた。

「な、なんてことを……」

「ああ、まだ若いというのに」

「だが、仕方がない。法を破るということは、そういうことだ」

「そう、ね。決まりを守る、ただそれだけのことなんですよ」

（何を言ってるんだ、この人たちは？）

口々にこぼれる言葉の意味を理解できずにいる立香たちを他所に、  
彼らは一歩二歩と後退していく。

その間にも、件の少年にフェイトたちと同年代と思しき姉と思われる少女が駆け寄り抱きしめる。まるで、何かから守ろうとするかのよう  
うに。

やがて、それは現れた。

「違反容疑者を 補足 確認作業に 入ります」

現れたのは、バイザーで顔を隠した女性。体のラインが浮き出るタイトな服装だが、どこか作り物じみて見えるのは、その口から放たれた言葉があまりに無機質だからか。

「あ、ああ……これ、~~お~~の……」

「確認 市民番号 × | × 氏名 ウルス・クラウン 交通法違反に

相違ありませんか」 × × ×

「ぼ、僕は……」 ×

「ちが、違うんです！ この子は、その……違反したわけではなく……」

「確認作業への 虚偽報告は 刑法 × 条に 違反します」

「っ!?! で、でもこの子はまだ……」

「対象 年齢12歳 特別保護の 対象外 酌量及び 保護責任者の  
代替は できません」

「そんな……」

「姉さん……」 ×

「沈黙は 肯定と 受け取りませ

最終確認 市民番号 × | × 氏名 ウルス・クラウン 交通法違

反に 相違ありませんか × × ×

× × ×

「……」

「沈黙 肯定と 判断 刑の執行を 開始」

「なっ!？」

その瞬間、女性の右腕が砲身へと変化する。それは躊躇なく砲口を少年の身体の中央、心臓へと向ける。が、少年を抱きしめていた女性が邪魔で直接狙うことができない。

「即時の 退去を 要請

カウント 5 4 3……」

「姉さん」

絶望と恐怖で力が入らないのか、少年がそっと押すと姉の身体が後ろに倒れる。

障害物が失われたことでカウントが止み、代わりに砲身が淡い光を宿す。

その意味するところを理解し、少年は歯を食いしばって目を閉ざし、姉は思わず目を逸らす。

何が何やらわからないことだらけだが、一つだけ確かなことがある。それは……

「マシユー!」

「シールダー、呐喊します!!」

如何なる法であろうと、交通違反を犯したくらいで……それも、このような幼い子どもが殺されていい道理はない。

戦闘そのものは、瞬く間のうちに終了した。攻撃能力が高いとは言えないマシユだが、さほど苦にすることなく女性を制圧。件の少年たち事情を聴こうとしたのだが……その前に、組み伏せた女性が突如爆発。

マシユが防御性能に優れていたことと、咄嗟に飛び退いたことが奏功し、何とか無傷。かと思えば、周囲には先ほどの女性のそっくりさんが大挙しているではないか。

「あーもう、何が何だか……」

「どうしましょう、マスター」

「とりあえず………二人を抱えて逃げる!」



ものに不思議そうな顔を浮かべる。まるで聞いたこともない、考えたこともないような概念を耳にしたかのように。

あまりにも釈然としない二人の反応。当然、より詳しく問い質そうとするが…突如、周辺警戒をしていたダ・ヴィンチが警告を発する。何者かが、高速で接近してきているというのだ。

それも、尋常ならざる魔力を内包した“ナニカ”が。

そして、場合によっては応戦もやむなしと、シャドウ・ボーダーの外に展開したはやてたちが目にしたのは、あまりにもよく見知った人物だった。

「リイン、フォース？」

「アインスさん？ だけど、え？」

「なんで、なんでアインスがこんなところにおるん!? 聖王教会のポットで眠つとるはずや……」

困惑をあらわにするのはとフェイト、そしてはやて。管理局組の中では唯一アインス本人と言葉を交わしたことの無いリインもまた、思わぬ形で実現した“いつか必ず”と願っていた出会いに言葉を失っている。

だってそうだろう。主であるはやての未来の為、自らの消滅をすら選ぼうとした彼女がどうして、はやてに一瞥もくれようとしなにか。

「お下がりにください、主」

「ザフィーラ？」

「どういうつもりだ、アインス…いや、リインフォース！ 主はやてを前にしてのその無礼、ことと次第によつてはお前であろうと容赦はせん!!」

「将？ いや、ありえない。将も、鉄騎も、癒し手も、守護の獣も、皆ここにいます。ここにいますのだ。そう、私と共に。」

……だが、私が見間違えるはずもない。なんだ、お前たちは？ それに、主？ その娘がか？ しかし、確かにその手にあるのは夜天の書とシュベルトクロイツ。夜天の主の証、その魔導の器。加えて、リインフォース？ アインス？ 誰のことだ？ 私はヨル、もはや主

を持たぬヨルだ。お前たちも夜天の雲、守護騎士ヴォルケンリッター  
ならずべて承知のはず。その上で、お前たちは私と一つになったので  
はないか。

「……………わからない、分からないことばかりだ。だが、一  
つだがはつきりしていることがある」

僅かに困惑の色を見せたかと思うと、すぐにそれを消し去るアイン  
ス。元より落ち着いた印象の女性だったが、それにしても平坦過ぎ  
る。なにより、はやてのことがわからないというのが異常だ。

しかし一同の疑問を他所に、彼女の視線は立香とマシユへとむけら  
れる。

「その青年と盾の娘、お前たちは法を犯した。故に、刑を執行する。  
私は、そのために来た」

（まただ、また“法”。罪を犯したのではなく、“法”を犯した。どう  
いうことだ？ 法を守る、というのはわかるがそれにしても…………）

「ここは聖王の代行者たる冥王の領域。その冥王の使者に刃を向ける  
とは、これ即ち聖王への反逆。本来であれば、後の世を生きる者たち  
への戒めとして然るべき処罰を下すところだが……データに該当者  
がない。生憎、他世界のデータベースへのアクセスが不通になって  
いるが、間違いない。お前たち、異邦人だな」

クロノの疑問を他所に、一人話を進めるアインス。

「異邦人ならば、致し方ない。法は各地の王が定め、聖王がこれを審査  
する。そして、認められた法に基づいて人は生き、これに背けば罰を  
与える。しかし、異邦の法に無知なのは当然のことだ。それを責めは  
すまい。」

とはいえ、無知を理由に放免したとあっては、法の平等性は保たれ  
ない。刑は絶対だ、代わりに罰を減じよう。“戒め”ではなく、お前  
たちへの“裁き”に留める」

（話が通じない、つてわけじゃないかな？）

（そう、ですね。こちらの事情も鑑みてくださっているようですし  
…………）

「これは聖別、苦しみはない。眠る様に、その命を絶つ」

「と思つたら全然話通じねえ!」

「それで軽い罰なんですか!」

「だとしたら、彼女の言う「戒め」とはいったい……。」

流石におとなしく殺されてやるわけにはいかない。当然というか止む無くというか、そのまま戦闘に発展。

しかし厄介なことに、アインスの強さがシャレにならない。かつて彼女と戦ったのはから見ても、あの時を上回るといふ。当時のなのはたちですら、上位サーヴァントに食らいつけるだけの力があつたといふのに、それを軽く凌駕するレベルとなるとトップサーヴァントでも分が悪い。しかも、どういうわけか守護騎士たちの武装と魔法まで駆使してくる始末。

「ジリ貧になるのは必然。ならばどうするのか、選択肢は少ないが……」

「よく耐える。騎士たちの写し身、お前たちには聞きたいこともあつたが……是非もない。」

法を犯した以上、末路は同じだ。慈悲だ、瞬きの間に消えろ――

――ジャガーノート

シャドウ・ボーダーを中心に、四方に放たれる漆黒の光。それは着弾すると同時に急速に膨張し、何もかもを飲み込まんぞと迫ってくる。

「くつ、皆さん私の後ろに! 顕現せよ――」  
「いまは遙か理想の城!!!」

シャドウ・ボーダーの上に立ったマシュを中心には皆が集まってくる。同時に白亜の城が顕現し、迫りくる漆黒の光……否、闇を押しとどめる。どこまで闇が広がるうとも、決して揺らぐことなく城はそこにあり続ける。

だがそこへ、更なる光芒が降り注いだ。

「……早いな。同じ世界内となれば、当然かもしれないが」

アインスが空を仰げば、そこには一隻の巨大な船の姿。

流麗な船体の一部から砲門が顔をのぞかせ、一斉にシャドウ・ボーダーに照準を合わせ、次々に光が放たれる。アインスの広域攻撃すら凌いでいた城だったが、無数の光条に飲まれて行く。



光の雨が止んだ時、大地には無数の弾痕以外には何も残っていないかった。

(消えた、か。しかし、あのまま行けばジャガーノートすら凌ぎ切っていただろうあの城はいつたい？ あのような魔導、これまで見たこともないが……いや、詮無いこと。転移する隙はなく、痕跡すら残っていない。なら、そういうことなのだろう。)

ただ、あまりにもきれいに消えすぎているような気は、しないでもないが……)

念のため精査するも、特に引つかかるものはない。

(強いて言えば……いや、仮にあそこに落ちたとすれば同じことか。それよりも、今は宙を覆うあのノイズの正体突き止める方が先だ。聖王の威光が届かないと知れば、他の世界がどうなることか……急がなければ)

そう結論し、アインスはその場を飛び去っていく。

だがそこで、やや離れた岩陰から人影が姿を現した。灰色の外套を羽織り、目深にフードをかぶっているため顔立ちどころか性別すら判然としない。ただその人物は、ジツと先ほどまでアインスと交戦していた者たちが最後に集まった場所を見続ける。

(やはり、彼らは異邦人やったか。咎人を助けて、マリアーヂュを退け、ヨルに抗った時はもしやと思っただんやけど……)

この程度では、期待外れと言わざるを得ない。そんな考えがよぎるが、自らの傲慢さを悟り小さく首を振って否定する。

(いや、それはウチの勝手な言い分やな。彼らやなかった、ただそれだけのこと。)

そもそも、ウチラが人のことを言えた義理やない。自分たちだけじゃ届かへんからって、他人様当てにしている時点だな)

自嘲しながら踵を返そうとするが、ふとその足が止まる。特に理由はない。ただ何となく……

(せやな、別に急ぐ理由もないし。異邦人やったら、ベルカであの人らのこと知つとる人なんてほとんどおらんやろ。なら、ウチくらい偲んでも罰は当たらんはずや。)

にしても、「法は絶対」これはどこも同じはずなのに、どうしてあの人らはあんなことを？ まさか、「ゆりかご」の届かへん場所から？ ホンマ、色々聞いてみたかったんやけどな……)

近場の岩に腰掛け、数日前から監視していた人物たちのことを思い返す。かなり警戒範囲が広がったようなので、その外から追いかけるのは中々に骨が折れたが……難しい分、今となっては少し楽しかったようにも思う。

思わず寂しげな笑みが零れ、天を仰ぐ。彼らの冥福を祈ってか、あるいは助けようとしなかったことを詫びるためか、それとももつと別の……。いずれにせよ、重力にひかれてフードが背中に落ちる。

露わになったのは男とも女ともつかない端正な顔立ちと漆黒の髪、そして視線の先に広がる蒼穹を移したかのような青い瞳だった。

(まあ、いくらエレミア製とはいえ、義体のままで「ヨル」の相手は荷が重すぎるんやけど。ましてや、「ゆりかご」まで出張ってくるとはなあ……)

## リインフォース・ツヴァイの場合

ベルカでのごとくですか？

……………はあ

。

——え、なんでそんな重い溜息？

溜息も重くなりますよ。そりゃこういうお仕事ですから？ 命の危険とかその辺は覚悟していますけど、だからと言って「死ぬかと思った」とか「走馬灯を見た」なんて経験、早々するものじゃない筈なんですよ。

なのに、ベルカに限ってもいったい何度死を覚悟したことか……。考えても見て下さい。四方をオーバーSを軽く超える広域殲滅攻撃に囲まれながら、上空から艦砲射撃の雨霰ですよ？

肝が冷えるなんてもんじやないです!? っていうか、マシユさんの宝具がなかったら普通に10回は死んでます!?

まあ、カルデアと関わりと割とそんな感じなんですけど……。

——……ごめんなさい、ヴィヴィオが間違っていました。

というかですね、ぶっちゃけあのままだったらホントに死んでましたから。

——え、そうなんですか？ でも、確かマシユさんの宝具って私たちの最大出力でも突破できないって……。

正確には、なのはさんに加えてフェイトさんとはやてちゃんの最大出力ですね。具体的に言うと、模擬戦の時にトリプルなブレイカーも防ぎ切っています。

——……十分異次元レベルだと思うんですが。

まあ、実際マシユさんの防御性能…特に宝具のそれは桁が違いますからね。さすがに試したことはありませんが、理論上はアルカンシエルでも防げるんだとか。実際、「星を貫く熱量」とか「星の表層を焼き払う」とか言われてる代物を防ぎ切った実績もあるそうですし。

はつきり言って、人間レベルじゃどうやってても突破は無理でしょう。というか、ゆりかごからの砲撃自体も防ぐことには防げていまし

たしね。

ですが！　ここで重要なのは火力の高さではなく、高威力攻撃の継続攻撃時間です。

——時間？

はい。いくらマシユさんの宝具が鉄壁でも、無限に展開できるわけではありません。いずれ限界は訪れ、理想の城は消失します。

そして、ゆりかごとってあの時放っていた砲撃は、いくらでも連発できる程度のものでしかありません。なのはさんのシユーターみたいなものです。

なので、マシユさんが防いでいる間にゴルドルフ所長の指示でシャドウ・ボーダーに避難。砲撃に紛れて虚数潜航<sup>ゼロセイル</sup>を敢行し、辛うじて難を逃れたという次第です。

——そ、そうだったんですね……。

あのあたりの引き際の良さは、流石といえるかなんというか。立香さんも指示を予想していたのか、あるいは元から撤退するつもりだったのか、物凄く鮮やかな手並みでしたからね。

言い方は悪いかも知れませんが、逃げ慣れているというか……。

——それだけ聞くと、カッコ悪く聞こえますけど……。

そんなことはありません。むしろ、今思えば引き際の見極めの方が、攻め口を見つけて突くよりもずっと難しいと理解できます。

無意味な逃走は簡単です、なりふり構わず逃げればいいだけです。まあ、往々にして行き当たりばったりになり、追い詰められてしまうわけですが。

同様に、攻めるのも実はそう難しくありません。ほんの少しの勇気があれば、突っ込むことはできますからね。当然、こちらも効果的な攻めをするには技術と経験が必要ですけど、できはします。

しかし、引き際の見極めは本当に難しいです。

なにしろ、ちよつとでも希望やチャンスがあるとどうしても躊躇ってしまいますからね。『もう少し粘れば』『あそこを突くことができれば』そんな誘惑に惑わされて引き際を見誤り、結果的に大損害を被る……指揮官研修を受ける際、必ず注意されることです。

最大の障害は自分自身の心ですから。どれだけ技術と経験があつても、中々上手くはいかないものなのです。

——リインさんでも難しいですか？

当然です！ はやてちゃんだつて、きつと同じことを言います。敗色濃厚だつたりすればまだしも、形勢が微妙だと欲が出ますから。

その点、カルデアの皆さん……:というか、ゴルドルフ所長と立香さんの見極めは見事の一言です。私も見習わなければと思います。

——お二人つて、実はすごかつたんですね〜!?

あ、いや、お二人の場合どちらかという……。

——? ? ?

ゴルドルフ所長は、単純に臆病というか小心者なんですよ。

——へ?

聞いたことありませんか? “短所と長所は表裏一体”なのです。

ゴルドルフ所長の場合、臆病だからこそなるべく安全策をとるように指示しますし、勝ち目のない戦闘やリスクのある行動もごく最低限に抑えようとします。要は一か八かの賭けや博打にはまず出ないということです。

このあたり、昔のカルデアのギリギリ具合も影響していますね。物的損害はあとから補填できますが、人的損害はそうはいきませんか。ら。

なので、“ヤバそう”と感じたら逃げることに躊躇しません。躊躇している間に死んでしまつては元も子もありませんからね。色々苦い経験もされているそうなので、そのあたりで培つた決断力なのでしょう。

——うくん……:わかる気はしますが、逃げてばかりじゃどうにもなりませんよね?

それも真理です。

事実、臆病なだけの人であれば無能の誹りは免れないでしょう。ですが、さつきも言つた通りいろいろ経験している方ですから。アレで結構大胆……:というか、いざという時にはやけっぱちになれる人でもあるんですよ。

大抵の場合、サーヴァントの皆さんや立香さんの無謀な作戦や行動は却下しますが、いざという時には決断してくれます。

——やけっぱちに？

やけっぱちに、です。

で、朱に交わって赤くなつたのか、それとも持つて生まれた性質なのか：思い切りが良すぎるところがあるのが立香さんなんですよ。命が危ない場面とか普通に怖がりですし、怯んだり挫けたりもします。なのに、要所要所ですごいアグレッシブというか、割と無謀な行動力を発揮したりするんですよ。

ある意味、カルデアの人たちが立香さんに魔術を習得させなかった理由の一つはそれなんでしょうね。

——どういうことですか？ 才能がないっていう話なら聞いたことがありますけど。

もちろんそれもありますよ。立香さんの魔術回路じゃ、修行しても大したことはできないそうです。でも、少しでも力があれば使いたくなるのが人間です。どんな形であれ、です。

時に人はそれを暴力や犯罪に使ったりもしますが、逆に誰かを助けるために使う人もいます。なのはさんやフェイトさん、そして立香さんもそういう人です。

だからこそ持たせなかつたんです。力を持った立香さんが、それに頼った無茶をすればどうなるか……火を見るよりも明らかですから。そして、立香さんが命を落とせばそれですべてが終わってしまう、あの人たちの旅はそういうものでした。半端な力なんて、むしろ害にかなりなりません。

——そっか。立香さんは礼装なしだと魔術をほとんど使えない。でも、弱いままだからこそ……逃げることを忘れずにいられるんですね。

そうです。どれほど凄い戦力が周りを囲んでいても、立香さんは相変わらず弱いまま。ですがそれは、逃げるという選択肢を忘れずにいるために必要な要素なんです。お人好しな人だからこそ、小さな武器で蛮勇を振るうのではなく、丸腰でいつでも逃げられる心構えを持ち

続ける方が有益。カルデアは、そう判断したんです。

まあ、修羅場・鉄火場にほぼ丸腰で放り込むのもどうかとは思いますが……。

——ママが結構無茶する人なことを考えると、それでよかったのかもしれないね。

です。

実際、お二人の判断のおかげで命を拾ったことも多いですからね。「弱さ」もまた、生き残るための術なのです。あの人たちを見ていると、それがよくわかります。

——なるほどお……。

(まあ、同時にその「弱さ」が冷徹な、あるいは冷酷な判断を下すことを余儀なくさせているわけですが。

いえ、違いますね。「弱いからこそ決断できる」と言うべきなのでしょう。本当にそうするしかない時、自分にできることが多くないことを、その手の小ささを知る立香さんは、「諦めて」決断を下す。決断した場合と足掻いた場合を天秤にかけて……それは、ある意味でも残酷なこと……)

——リインさん？

あ、すみません。ちよつとブーツとしてました。

えつと、どこまで話しましたっけ？

——弱いからこそ生き残れた、ってところまでですね。

ああ、そうでした。

そういえば、いつだったかフェイトさんが言っていましたね。「昔の私は『大丈夫だよ、私強いから』ってよく言ってたけど、今思うとあれは強がりと自分を鼓舞するのが半々だったんだなあ」と。

——それと立香さんに何の関係が？

「立香さんの強さ」についてですよ。

さっきの「攻めるのはそう難しくない」にも似ていますが、自分を強いと口にするのは楽なんです。だって、そう思い込めば怖さとか不安とか、そういったものを抑え込めますからね。

でも、立香さんにその手は使えません。だって、自他ともに認める

くらいに弱いですから。

サーヴァントの皆さんに囲まれていては、その手の強がりも口にしなくても虚しいだけです。智慧も力も、およそ全てにおいて誰かしらが遥か上を行くわけですから、かえって苦しくなるだけです。

——あゝ、確かに……。

弱いまま戦場に立って、守ってもらわなければならないのです。本来であれば戦場に出るべきではない人が。ですが、魔力供給の関係上、立香さんは最前線にいなければなりません。魔術回路の性能がもつと高ければ違ったかもしれませんが、それはないものねだりですしね。

普通ならその時点で限界でしょう。でも、あの人は自分ができることから目を背けません。決して逃げないんです。

——できること、ですか？

何も難しいことじゃありません。

顔を上げて前を見る”

”進み続ける”

”他者を思いやる”

”相手を理解しようとする”

”決断に責任を負う”

”通ってきた道を忘れない”

そういう、誰もがやっている極々当たり前のことです。

——言われてみると、本当に普通というか……当たり前ですよね。

ええ、本当に。

でも考えて見て下さい。立香さんと同じ状況に立たされて、同じことが出来る人が一体どれだけいますか？

——っ！

特別なことなんて何もありません。

難しいこともありません。

誰もが普通に、特に意識せずにやっていることばかりです。

別に、”百年先を予見しろ”とか、”破壊不可能と言われたロストロギアを破壊しろ”とか、そんなことを言っているわけじゃありません。



ん。

でもそれらは、「当たり前」の中でこそです。立香さんが置かれた状況の中では、その「当たり前」こそが至難の業です。

余裕なんてなくて、縫れるものもなく、重い責任ばかりが積み重なっていく中、それでもあの人は逃げませんでした。無力さを言い訳に、目を背けることだけはしませんでした。

上手いかないことばかりだったでしょう。

自分の弱さを、平凡さを嫌というほど突き付けられてきたはずで

す。  
魔術の勉強も、トレーニングも、どれだけ頑張っても気休めにしか  
ならない。

当たり前のことしかできない現実には、何度打ちのめされたことか。

それでも「まだできることがある」と信じ、「普通」を繰り返し続ける。

「何とかなるさ」と「そんなこともあるさ」と、そうやって強がりながら。

……………それが立香さんの強さです。

私にはきつとマネできません。人は自分の弱さから、醜さから、矮小さから目を逸らしたいものです。

でも、そこから目を逸らしてしまえば……立香さんにはもう何もでき  
ることがありません。

だからせめて、自分自身と向き合い続けてきたのでしよう。

——（私に、できるかな？ ……わからない。自分の弱点とか課題は分析して向き合ってるつもりだけど、たぶんこれは立香さんのそれとは違う）

きっと、だからこそ多くの英霊たちが立香さんに手を貸すんだと思います。

ある人は捨て去り、またある人は気付けば失い、中には持ち合わせる  
ことすらできなかつた灯ひかり。

それを、守りたいのではないのでしょうか。

……………。

つて、なんか話が重くなってきましたね！ わ、話題を変えましょうか！

——そ、そうですね。じゃあ……こつちの世界にも『英霊の座』はできたみたいですけど、ママたちが召喚されることってあるんですかね？

ああ、そのことですか。どうも、まずないらしいですよ。

——へ？ そうなんですか？

確かに皆さん突出した力の持ち主なのは事実です。でも、AAAランクで管理局全体の約5%…数字としては少ないですが、人数に換算すると結構な数ですよ。

——あ、言われてみれば……。

そのうち戦闘が可能で、なおかつSランク以上となるとかなり絞られますが、それだつて百や二百じゃ収まりません。加えて、仮になのはさんが引退しても、数年すれば新たにエース・オブ・エースの称号を受ける人が出てくるでしょう。あるいは、現役の間に『次期』を冠す人が出てくるかもしれませぬ。

——それは、まあ……。

管理局としては、突出した個人に頼り切るわけにはいきません。まあ、割と個人の才覚に依存している部分があるのは事実ですが。だからと言って、欠けたら揺らいでしまうような層の薄さでは話にならないのです。というか、そうでないと困ります。

AAAランクですら5%もいる。その層の厚さこそが、管理局の強みなんですから。

ですが、これはある一つの事実を示してもいます。それは……

——ママは凄い魔導士だけど、決して代わりの利かない戦力じゃない。

そうですね。個人、一人の「高町なのは」という女性はもちろん代わりは利きません。ですが航空魔導士、あるいは砲撃魔導士、そして戦技教導官としてならその穴を埋めることは十分可能です。

だからこそ、『英霊』という『時代を代表する個性』足りないのです。今の時代、魔法に携わる人でなのはさんを知らない人は中々い

ないでしょう。ですが、十年後は？ 百年後は？ 千年経った時、「高町なのは」という名前は歴史上に数いる優秀な魔導士の一人として数えられるにとどまる可能性が高いです。

そして、それ位では「座」には届きません。それこそエミヤさんの様に、世界と取引をして「守護者」として取り込まれない限りは。

——じゃあ、フェイトさんも？

はい。今の時代、世界の一つや二つ救ったくらいでは「英霊の座」には届かないでしょう。それこそ、「管理局史上最強!!」くらいじゃないと。

ワンチャンあるとしたら、「最後の夜天の主」であるはやてちゃんとユーノさんくらいじゃないかと。

——え、はやてさ…八神司令はわかりますけど、パパもですか？

何事も、「最初」と「最後」は特別なものです。「最後の夜天の主」として闇の書の呪いを終わらせた…たとえそれが一人で為し得たことではないとしても、その看板の影響力は大きいです。

同じように、今まで誰も有効活用できなかった「無限書庫」を開拓し、巨大データベースとして運用可能にしたユーノさんもまた、「先駆者」として歴史に名を残し得る可能性があります。

そんなわけで、可能性があるとしたらこの二人が最も高い、という結論になるわけですね。

まあ、ユーノさんの場合、作家系サーヴァントの皆さんのような扱いになりそうですが。

——その場合、宝具も「無限書庫」になりそうですし、情報戦のエキスパート的な扱いですかねえ…。

ありそうですねえ♪

——なるほど…：…そういえば、サーヴァントと言えば向こうのベルカの王様たちとどっちが強かったですか？

一概には言えませんね。ただ…：

——ただ？

シャレになりません。

——え？

諸王戦争時代を舐めてたつもりはないんですが、割と引くくらい強かったです。

——ぐ、具体的には？

例えば……あちらの冥王はイクスから代替わりしてたんですが……というか、ほとんどの王はちゃんと代替わりしてたんですけどね。

——あ、そうなんですね。でも、そういうことだったらやっぱりマリアージュですか？

はい、いましたよ………億単位で。

——おつ、くう!?

性能的にはこっちで報告されたのと同程度なんですが、その数をしっかりと統制されているのが厄介で。

——というか、完全に統率された億単位の軍とか夢でも勘弁してほしいです。

——しかも、死ぬことを恐れないし、動けなくなったら自爆……

コワツ!? イクスコワツ!?

別にイクスが率いていたわけじゃありませんけどね。

あと、「天帝」は索敵能力が鬼でしたね。領地内のことならわからないことはない、とばかりでしたし。おかげで近づくこともままありませんし、作戦は筒抜けなので対抗策取られまくりました。

——え……。

他にも「炎帝」は自分が出した炎以外にも周囲の炎も操れるので、周りが燃えれば燃えるほど火力が増すんですよ。速攻で決めればまだしも、時間が経つと本当に手に負えなくなっていきましたからねえ。

——ええ……。

それと……「氷帝」はかなりの広範囲、確か数キロ四方に及ぶ空間固定ができたはずですよ。フェイトさんのスピードでも、発動を察知してから範囲外に出るのはほぼ不可能ですよ。発動にタイムラグがあるのと、連発できないのが救いでしたが。

——ええ……。

拳句の果てに、〃光王〃は常時ブレイカー状態。使用済みの魔力どころか周囲の魔素を直接魔力に変換してましたし、制御を緩めるとこっちの魔力まで持つていくんですよ？

——うぼあ……。

ああ、ヴィヴィオも知ってる。〃雷帝〃。あちらは周囲の電気信号を狂わせてくるんです。おかげで機械は誤作動起こすし、近づくと思うように動けないしで……ヴィクターがしょっちゅう機材を壊すのつて、たぶんこの名残じゃないですかね？

ちなみに、〃霸王〃と〃黒王〃……あ、〃エレミア〃のことなんです。二人は対人戦特化と言ったところでしょうか。

〃霸王〃が超回復で、〃黒王〃があらゆる攻撃がイレイザーの悪魔仕様です。

——攻撃全部イレイザーっていうのも怖いですが……超回復つてどのくらいなんですか？

いくらダメージを与えてもコンマ一秒後にはチャラにされます。確か、虞美人さんにも匹敵する不死身っぷりだとか。実際、頭や心臓どころか、ほとんど全身粉々になっても復活してましたよ。

しかも、そんな身体なのをいいことに無茶な特訓と超回復のスクラップ&ビルド。おかげで、素の戦闘能力がおつそろしいことになっていたですねえ。それに比べれば、アインハルトやジークはまだまだかわいいものです。

——（確かに、シャレにならない……）

まあ、ベルカ諸王時代からこうだったとは思いませんけどね。多分、元々あつた資質や能力を何らかの形で強化されたのでしょう。

——それにしたつて酷過ぎませんか？

……それが、立香さんたちの旅の中ではもつとんでもないのめいと聞きます。攻撃を完全に無効化してくるとか、チャージに時間がかかるものの真面目に一撃で世界滅ぼせちゃうとか……。

——も、もう何に驚いていいやら……。

（どっちもオルタナアルジュナさんのこと、というのは言わない方がよさそうですね）

——よく勝てましたね。

まあ、何事も攻略法はあるものですよ。一応、強力な分制限もありましたし。

逆に、そういう意味で言えば「聖王」本人を除けばあちらのアインスが一番の難敵でしたねえ。

——そうなんですか？

シンプルに全性能の向上でしたから、逆に隙がなかったんですよ。しかも、シグナムたちのリンカーコアを全統合したことで限界値も上がっていましたし。

——統合？

はい。単純にそれぞれのデバイスを使えるというのではなく、技術や魔法、そして魔力の特性すら引き継いだ文字通りの「ワンマンアーミー一人軍隊」でしたから。

他の王たちが「聖王」の代行者でしかなかった中、アインスはただ一人の「側近」だったんです。

——それは、どうして？

どうして、というのはどちらの意味ですか？ アインスが皆を統合した理由？ それとも、アインスが「側近」だった理由でしょうか？

——えっと……どっちも。

統合した理由は私も知りませんが、彼女は話してくれませんでしたから。ただ何となく、みんなをこれ以上戦わせたくなかったんじゃないかと、そう思います。

特にあちら側の世界のあの時代は、「騎士の誇り」や「騎士の戦い」とは無縁でしたから。

——じゃあ、唯一の「側近」っていうのは……。

あの世界の「聖王」の在り方故に、ですよ。

——？ ？ ？

まあ、それは追々。

——はあ……じゃあ、「聖王」自身はどうでした？ あと、さっき「ほとんどの王は代替わりしてた」って言うてましたけど、「聖王」もそうなんですか？

“聖王”自身もほとんど基本性能の向上ですね。まさに、シンプル・イズ・ベストを地で行ってました。あとは、“鎧”の強度が“十二の試練”並な事でしょうか。

——…十分反則仕様ですよ。

それでも蘇生能力がないだけマシ…あ、いや、ちよつと感化されすぎかもしれません。

というか、それを抜きにしても常に“ゆりかご”内にいたので、それで十分だったんですけどね。アレ一隻で全ての王より戦力は上でしたし。

——…つくづく、諸王時代のベルカは“修羅の国”だったと思えました。いくらサーヴァントがいたからって、どうやって…。

あ、確かにサーヴァントは強力な戦力でしたが、スペース・ボーダーに乗ってた人全員動員できたわけじゃないですよ。

——そうなんですか？

立香さんの魔術回路の性能の関係で、どうしても上限がありますからね。

“偽臣の書”を使えば、魔導士一人に付き一騎は何とかなりますけど。それを踏まえた上でも、最大15騎が限界でしたねえ。

一応裏技があるらしいですが、それなりのリスクなり条件なりがあるようです。

——それならなおのこと、どうやったんですか？

協力してくれた人たちがいたんですよ。

——協力？

はい。ほとぼりが冷めた頃を見計らって再浮上した時、そこにいたんです。当代の“黒王”、アトラージュ・エレミア…アトラが。

\* \* \* \* \*

シャドウ・ボーダーがベルカの地に再度降り立った時、周囲は“見るも無残”としか言いようのないありさまだった。爆撃後の様に大地は抉られ、推定10時間は経っているであろうになお黒煙を上げて

いる。生き物の気配はなく、草も樹も……何もかもが消し飛んでいた。

その光景にかつてのベルカを思い出したのか、守護騎士たちの表情は苦い。

いや、浮かない表情を浮かべているのはなのはたちも同様だ。良く見知った顔が、「お前たちなど知らぬ」とばかりに殺しに来たのだから、無理もないだろう。見知った顔に殺されかかる経験は散々してきたカルデア組だからこそ、今はそつとしておこうと思っっているのかもしれない。

それに、虚数潜航中<sup>ゼロセイル</sup>に件の姉弟から話を聞き、この世界の在り様がある程度把握できたのも一因だろうか。

様々な異聞帯を越えてきたカルデア組はなんとなく察していたことだが、やはりこの世界において“法”とは特別な意味を持つらしい。

この世界において最大にして絶対の法、それが“遵法”だ。その前では、どんな微罪も如何なる重罪も誤差でしかない。人を傷つけたから、あるいは騙したから、または財産を奪ったから罪に問われ、罰せられるのではない。それ以前に“法を守らなかった”、その罪を問われるのだ。

そして、“遵法”という“絶対”を破った者に対する罰は等しく“死”。そこに酌量の余地はない。故に、この世界に軽犯罪や重犯罪といった“罪の軽重”の概念はない。法を守らなかった者の末路は一つ。

それならば、都市の人々や保護した姉弟の反応も当然だろう。彼らはそういう価値観の下で、そういったルールの中に生まれ、生きてきた。他の価値観の存在を知ることなく、触れることなく過ごしてきたのだから……。

ただ、そういう社会だというのなら、法の綱目をかいくぐる者も出てきそうなものだが……そのあたりもこの世界は徹底している。

明文化された法はもちろん絶対だが、世の中には“不文律”というものがある。所謂モラルや暗黙のルールなどがそれだ。こちらは滅



点法が採用され、規定された法の上では問題なくとも、持ち点を失えば罰せられる。

また、市民には「起訴」の権利も認められ、個人や団体を訴えることもできる。

ただし、そこは法を絶対のものとする世界。当然、「法」の優先順位は「人権」にも勝る。具体的には、起訴した側とされた側、双方の頭の中を洗い出すというプライバシーも何もあつた物じゃない措置が取られる。

自身の正義、あるいは他者の罪に確信がある場合でもなければ「起訴」はできないだろうが……その代わり、すれば真実は明らかになる。報復の心配もない。何しろ、それをすれば逆に命で以て贖うことになってしまうのだから。

効率、という意味では優れているのは認めよう。些か以上に、冷徹すぎると思うが。

だからこそ、なのはたちはそんな価値観や文化の違いをうまく呑み込めずにいるらしい。意図はわかる、だがそれとは別に「そこまでしなくても」と思わずにいられない。

しかし、受け入れがたいと感じるのは別に、この世界での犯罪率が恐ろしく低いのも事実だ。ニュースなどでそういった報道がされないのは、規制しているからではなく、純粹に事件そのものが起こらないからに過ぎない。

信号無視程度でも即座に対応されていたことから考えても、その目は隅々にまで行き届いているのだろう。

となれば、確かに早々法を破る者が出ないのは道理だ。何しろ、万引きの対価が命では割に合わないことこの上ない。

空気に交じった緊張感は、「法を破るまい」という無意識の産物だろう。特に夜にそれが顕著だったのは、一日の疲れや酒の影響で「そんなつもりじゃなかった」が起こりやすいからか。

様々な価値観、多様な世界の在り様を見てきた立香たちとしても、まさに「鋼の秩序」と呼ぶべきこの世界の在り様には複雑なものがある。

突き付けられた事実を消化し、如何なるスタンスでこの世界と向き合うべきか。それを定めるにはまだ時間がある。

だが、世界はそれを待つてはくれなかった。

未だ立ち上る黒煙の向こうから、夜よりなお黒い『漆黒』の人影が姿を現したからだ。

アインストとの再戦か、と一同に緊張が走る。しかし、皆の反応に氣付いた人影は両手を挙げてそれを否定する。

「ちよっ!? 堪忍してえな。ウチ、アンタらと戦り合う気はないんよ」  
独特なイントネーションでそう言つて目深に被つたフードを取り払うと、現れたのはどこかあどけなさを残した黒髪の少女。

だが、タダ者ではない。無防備な姿をさらしながらも、一目でそう直感させる凄みがある。

「初めまして、ウチはアトラージュ・エレミア：アトラつて呼んで。仲良くできると、嬉しいんやけど」

コテンと首を傾げる仕草にはこれまた幼さを感じさせ、思わず毒氣を抜かれてしまう。

一同は目を見合わせてから、妙なところで大胆さを発揮する立香が一步を踏み出し、アトラに向けて手を差し伸べた。

「俺は藤丸立香、よろしく。できればいろいろ聞きたいことがあるんだけど、良いかな?」

「もちろん、ええよ。おしゃべりは大好きや♪」

アトラから得られた情報は膨大であり、重要であり、そしていくつかの欠落が伴つたものだった。

『聖王』は世界のすべてを統べる者であり、その支配領域はベルカにとどまらず他の次元世界にまで及ぶ。詳細までは不明だが、おそらく管理局の管理領域と同等かそれ以上だろう。また、ベルカがそうであるように、各次元世界も聖王の代行者というべき者たちが各地を治めている。ただし、その『代行者』の形は『王』とは限らない。『議會』がその役を担うこともあれば、『真竜』のような存在がその役を担うこともある。後者の場合、ベルカの王たちがそうであるように補助機関として議會が置かれている場合が多いようだが。

そんな、まさに世界<sup>宇宙</sup>の頂点ともいうべき聖王だが、下界の統治は“代行者”達に任せ、自身の領地も持たず、またその姿を外部に見せることもない。聖王は船であり、城であり、玉座でもある。“ゆりかご”に座し動かないからだ。300年前、聖王の支配体制が始まった当初から従っているベルカの王族たちですら、聖王の姿を見たことはないらしい。同様に、侍従や兵が召し上げられることもない。なので、“ゆりかご”と“聖王”の現在を知る者がいるとすればただ一人、“側近”として“ゆりかご”の出入りを許されている“ヨル”と呼ばれる女性だけ。

それでもその支配体制が揺ぎ無いのは、各地を治める“王たち”の力と、彼らが続べる“聖王”の最大戦力である“ゆりかご”が極めて強力だからだ。そして、直接姿を見せることはなくとも、“ゆりかご”で各地を巡り、通信や“ヨル”を使者として“代行者”達に都度指示を与えているからに他ならない。

ただ不思議なことに、普段は各世界を巡っているはずの“ゆりかご”だが、いまはここベルカにずっと滞在しているらしいが。

もちろん、これらの情報は一般人が知る範囲を超えている。なら、なぜアトラはそれらのことを知っているのか。

「そんな簡単な話や。ウチも王の一人やからな。こつからずつと東に行つたところにある“黒の国”を治める“黒王”、それがウチやから」

“偉いんやで”と割と薄めの胸を張るのだが……いまいち威厳がない。というか、子どもが頑張つて背伸びしている感が何とも。

いやいや、それ以前に王様が護衛もつれずに他国をほつつき歩いていていいのかという問題もあるわけで……いや、この世界で護衛をつける必要性はあまりないのか？　だがしかし……という疑問は、ダ・ヴィンチによつて否定される。

「いやあ、その心配はないんじゃないかな。その身体、多分人形か何かじゃないのかい？」

「おお!?　ようわかつたな……正解や。この体はエレミアの一族に伝わる義肢技術を応用した義体なんよ。ウチの本体は、いまもちやくん

とお城におるよ」

「フオウ！」

「でも、あの……」

「ん、何か聞きたいことでもあるん？」

相手が現役の王様と知り、さすがにちよつと尻込みした様子のフェイト。そこへ、あまり物怖じしないのはが疑問を引き継ぐ。

「それでも王様がこんなところにいていいんですか？ お仕事とかいっぱいあるんじゃない？」

「ウチの国のみんなは優秀やからな。多少さぼっても問題ないんよ」

実際には、いつつも義体で根無し草をしている主君の放浪癖を治すことを諦め、最低限の仕事しか回さないようにしているだけなのだが……言っていることは間違っていないか。

「でもよお、エレミアなんて王いたつけ？」

「……昔のことは私も記憶が曖昧だからな。あまり自信はないのだが……」

「私も、ちよつと心当たりがないですね」

と、守護騎士たちは首をひねるが、彼女たちの疑念は正しい。

元々、エレミアの一族は王族でもなんでもない流浪の一族だった。しかし、アトラの先祖は三百年前に「ゆりかご」に乗った「聖王」オリヴィエ・ゼーゲブレヒトと友誼を結んでいたらしい。その縁と卓越した武技から、統治する者のいない土地の王となることを任されたらしい。

「いやあ、ウチラはどうも腰の落ち着かん性質たちでなあ。先代も先々代も、みくんなお城を抜け出してフラフラしとったんよ」

とはいえ、一応責任ある立場なので本当にフラフラされては困るし、いざという時に連絡が取れないのはもつと困る。というわけで、義体に意識を移して本体は王城にとどまるという、今のスタイルに落ち着いたらしい。

傍から見ると、自室で眠っているだけに見えるらしいが、良く臣下たちはついていってくれているものである。なにより、臣下たちの苦労が偲ばれるばかりだ。

「まあ、やることもあったからなんやけど」

「ん？」

「いやいや、こっちの話や。それで、そろそろそっちの話も聞かせてくれへん？　ことと次第によっては、協力できることもあるかもしれないよ？」

ゴルドルフたちの方で提示しても良い情報とそうでない情報を慎重に見極めながら、立香たちも自分たちの状況などを伝えていく。

ただし、あえて隠したことも少なくはない。

その一つが、自分たちが別の世界宇宙からの異邦人であること。アトラには、聖王の支配領域の外から来た、と言って誤魔化した。

まだ推論の段階だが、可能性は否定できない。この事件の解決は、ただ「二つの世界宇宙を別つ」だけでは済まないかもしれない。となれば、最終的に待っているのは……。

だがそれとは別に、突っ込んだ話が必要な部分もある。

例えば、カルデアの観測機器が「ゆりかご」内部から特殊な反応を検知したこと。そしてそれが、自分たちの探し物である可能性があることも。

「……つまり、君らの世界の問題解決のために、「ゆりかご」にある「なにか」が必要と？」

「かもしれない、だけどね」

「ふくん……」

思案を始めると同時にそれまでの澆刺さは鳴りを潜め、どこか風格めいたものを漂わせるアトラ。

これまでの話から考えて、「ゆりかご」ひいては「聖王」とコンタクトを取るのには容易なことではないのは明らかだ。基本的に直接下界に干渉してくることはなく、概ね「代行者」たる「王」に一任されている。「聖王」が直接動くのは、「王」達に指示を下す場合や、「代行者」から現在の法について改正などが行われる際の審査を求められた場合。

そして、今回の様に単に「法を犯した」に収まらない事案が発生した場合だ。

なんでも、重大な事案が発生した場合にはいくつかの段階があり、まず現地の「代行者」が動き、それでも処理しきれない場合には「ヨル」が、最終手段として「ゆりかご」が直接動くらしい。まあ、この三百年の間に、「ゆりかご」が動くほどの事態になったことはほとんどないらしく、「聖王」の支配体制が始まった当初を除けば、「ヨル」が動くことすら百年に一度あるかないかなのだとか。

だが今回は、そうそうに「ゆりかご」が動いた。これは、まぎれもない異常事態である。「ゆりかご」がベルカにとどまり続けていることと、何か関係があるのかもしれない。とは、アトラの弁だ。

「なあ、アトラさん。良ければ、「ゆりかご」……「聖王」についてもらえへん？　王様のアトラさんなら……」

「……………よし！　ちよう行つてほしいところがあるんやけど、ええか？　ええな！　せやったらそこで合流や、ほな！」

「「へっ」」

唐突なアトラの申し出に、思わず素っ頓狂な声が漏れる。

しかし彼女は待つてなごくれず、むしろそれを了承の返事と受け取ったのか、地図を広げて場所を指定すると義体との接続を切つてしまう。

困惑するばかりだが、現状唯一の手掛かりであるアトラとの関係悪化は何としても避けたい。彼女がどんな意図を以て「合流地点」を指示したのかは不明だが、今はそれに従う他あるまい。

誰との合流するための指示なのかは、一抹の不安があるが。

それから、シャドウ・ボーダーが目的地につくまでの間、アトラが義体と再接続することはなかった。

目的地である森に到着したのは数日後、待ち受けていたのはアトラの本体……ではなく、碧銀の髪の偉丈夫だった。

「……来たか。君たちが、カルデアだな」

「あ、はい。そうです！　人理継続保証機関カルデア所属の、マシユ・キリエライトです。こちらはマスターの……」

「藤丸立香です」

「こちらはフオウさんです」

「フオウ」

そのまま各自簡単な自己紹介をしていく。青年はしつかりとそれぞれの顔を見据え、声に耳を傾ける。全力で相手の顔と名前、声を覚えようとしているのがよくわかる。

「それで…えっと、あなたは？」

「丁寧なあいさつ、痛み入る。早速自己紹介を…と行きたいところだが、少し待ってくれ。」

ほら、起きろアトラ！　いつまで寝ている、この寝坊助！

大股で近づいてきたかと思うと、ザフィーラが背負ったアトラの頭に拳骨を落とす青年。するとどうしたことか……

「あたっ!?　なにすんねん、ウォルフ兄!?!」

「お前がいつまでも寝たふりをしているからだ。まったく、いくつになっても楽をしたがる。」

確かに彼らを見つけたのはお手柄だが、今やお前も「黒」の名を引き継いだ「王」の一人なんだぞ。その自覚を持ってだな……

「うー、小言は勘弁してえな……」

「私とて好きで言っているわけじゃない。だいたいだな……」

どうやらこの二人、所謂幼馴染という奴らしい。で、青年の方が年上かつ生真面目なしつかり者なことから、兄貴分として面倒を見ていて、今なおその関係性が続いている、と。

二人の間柄はわかったが、仮にも「王」の一人にこの口ぶり。普通なら不敬なはずだが、不思議とそんな印象はない。というか、闊達すぎてあまり威厳などを感じさせないアトラと違い、青年の方にはにじみ出る気品と風格がある。この時点で、なんとなく青年の正体が分かった気がした。

「うー、もう堪忍してえ……」

「まったく……。と、失礼。みつともないところをお見せした」

「あ、いえ……」

「その、お気になさらず」

「感謝する。私はウォルフ、ウォルフ・イングヴァルト。若輩ながら、

「霸王」を名乗らせてもらっている」

(やつぱり……)

なんとなく、そんな気はしていた。アトラが指定した場所は、ギリギリ霸王領に含まれる森だ。そんなところに、明らかに貴顕の出とわかる人物がいたので、真っ先に浮かんだのだが……正解だったらしい。

そして、アトラが義体との接続を切った……つまり、本体の方で行動していた理由は彼と接触を持ったためだったのだろう。

「申し訳ないが、抜け出してられる時間はそう多くない。事情は、お歴々から聞いてくれ。さ、こっちだ」

そう言っつて先導するウォルフに続く一同。

案内されたのは、森の奥深くにある猫耳っぽいものをはやし、黒いローブを纏った人々が暮らす集落だった。

「まあまあ、殿下……いえ、今は「陛下」でしたね。ご即位、おめでとうございます。ご挨拶にも向かわず、誠に申し訳なく……」

「気にしないでくれ、長。あなた方に墓守を押し付けたのは我々だ。その役目のせいで、随分と不自由を強いている。詫びと感謝、あなた方に向けるものは他にない」

「ありがとうございます。あのわんぱく坊やが、随分とご立派になられて……」

「む、昔の話はよしてくれ。それに、アトラに比べれば「僕」など……」

「あ、ズルいでウォルフ兄!? ウチを引き合いに出すやなんて!」

「アトラ様も、お元気そうで何よりです。相変わらず、王城は窮屈なご様子で……ですが、旅も程々になさい。糸口を見つけるのも大事なお役目の一つなのは、皆理解していることでしょう。ですが、いくら義体とはいえ、心配をかけるものではありませんよ」

「い、いやあハハハハ……気を付けます」

進み出てきた老婆とはどうやら旧知の中らしい。むしろ、「思わず」とばかりに口調から堅苦しさが抜けたり、バツの悪そうな顔をしたりにしている。それにしても「お手柄」発言や「お役目」とやらから推



察するに、アトラが旅をしていたのは放浪癖だけが理由ではなさそう  
だ。きつと、彼女……いや、エレミアの一族は何かを探していたのだら  
う。そして、その末に立香たちを見つけたのだ。

「それで、本日はどのようなご用向きで？」

「……墓所への案内をお願いしたい」

「……それは、お二人の総意と受け取ってよろしいのですね？」

「ああ」

「うん」

「承知しました。……そうですか。ようやく時が来た、ということ  
でしょうか。三百年……長かったのか、それとも短かったのか」

「まだ分からない。だが、機会を逃すべきではないと思う。だからこ  
そ……」

「うん。会って、貰いたいんや」

「そうですね、その通りでしょう。では、こちらに」

感慨深げに空を見上げた老婆に先導されながら、さらに森の奥へと  
入っていく。

間もなく、辛うじて前を歩く者の輪郭がわかるという濃密な霧に覆  
われる。それでも何とかはぐれることなく進んでいけば、何かの境界  
線のように唐突に霧が晴れた。そこにあつたのは、三つの墓石。

「こちらです」

そのうちの一つ、中央の墓石の前に立った老婆が詠唱と思われる言  
葉を紡ぐ。すると、墓石が姿を消し一人一人が辛うじて通れるという程  
度の幅の、地下へと続く階段が姿を現した。

「魔女術か」

「そうみたい。ベルカやミッドとはだいぶ違うから、昔はだいぶ手を  
焼かされたわねえ」

ザフィーラとシャマルのつぶやきを他所に、さらに奥へと進んでい  
く。

いったい何段の階段を降りたことだろう。やがて階段は終わりを  
迎え、広く天井の高い空間に出た。

そこに鎮座していたのは……

「生体ポッド？」

担当する事件の関係上、目にする機会の多いフェイトが零す。

鎮座していたのは2基の生体ポッド。そして、そのどちらもが使用中。つまり、中に誰かが入っているということだ。

「はやてちゃん」

「気付いたか、リイン」

「はいです。なんだか、アトラさんとウォルフさんに似ていませんか？」

「まあ、当然やね」

「ああ、何しろこの二人は私たちの先祖。右がクラウス・イングヴァルト」

「左の方が、初代『黒王』のヴィルフリッド・エレミアや」

「……………」

「さあさ、詳しい話はまた後で。まずは、お二人にお目覚めていただきましょう」

沈黙が場を満たす中、里長が手を叩く。長は中央のコンソールの操作をはじめ、アトラとウォルフはそれぞれポッドに併設された何らかの機材に手を添える。どうやら、両者の直系であることを確認するための装置だろうと思われる。

間もなく操作は終了し、白い煙を吐き出しながらポッドが解放される。

数歩下がったアトラとウォルフはそれぞれに跪き、かつての王たちを出迎えた。

「お加減はいかがでしょう」

「お二人が眠りについて三百余年。遅くなり、誠に申し訳ございません」

「覚醒は良好だよ。それと、時間のことは気にしないでいい。そうだと、クラウス」

「ああ。むしろ、よく三百年もの間付き合ってくれた。こんな、僕たちのワガママに……………本当に、感謝している」

「勿体ないお言葉です」

「あなたが、今の魔女たちの長ですね」

「はい。ご尊顔を拝謁する誉に浴し……」

「よしてください。クラウスはまだしも、僕は流浪の身に過ぎません」  
「ズルいんじゃないか、リッド」

「事実だろ、クラウス……いや、陛下と呼ぼうか？」

「僕たちの間で、それは今更だろう」

「確かにね。そもそも、本来僕たちは『王』なんて柄じゃない。未裔  
たちには窮屈な思いをさせてしまったし、あなた方にも……」

積もる話は絶えないが、まずは……と、ウォルフが音頭を取る形で、  
カルデア・管理局側との話し合いが始まる。

カルデア・管理局側の伝えるべきことは既にウォルフたちに伝えて  
あることから、主になるのはクラウスたちのことだった。

簡単に言ってしまうえば、彼らは『ゆりかご』に乗った『オリヴィ  
エ・ゼーゲブレヒト』：クラウスとヴィルフリッドことリッド、二人  
の友人を取り戻したいのだそうだ。

『ゆりかごの聖王』とは伝承にあるような英雄ではない。ゆりか  
ごという巨大兵器を動かすための『鍵』であり、玉座を守る生きた兵  
器。自我さえも奪われ、僅か数年でその命を燃やし尽くす。そうし  
て、王の死と共に『ゆりかご』は再び眠りにつく。

かつての戦乱期、オリヴィエは人質を兼ねてシウトウラ：現在の覇  
王領に『留学』という体で送り出された。そこで当時王太子だった  
クラウスと出会い、学士として『食客』扱いでゼーゲブレヒト家に身  
を置いていたリッドも後に合流。三人は共に競い、学び、語らいなが  
ら4年の月日を過ごす。

だがある時、聖王連合は「ゆりかごの起動」を表明。そのための「玉  
座の王」の候補者の招集を開始した。結論を言えば、様々な思惑の結  
果としてオリヴィエがその役目を負うことになる。

二人は止めようとしたが叶わず、オリヴィエはゆりかごと共に灰色  
の空に昇った。

「この辺りまでは、たぶんこっち側の世界と同じ歴史なのかな」

「おそろくは」

クラウドたちとの話し合いを終え、今後の予定はまた翌日……ということになり、とりあえず里へと引き換えしてきた一同。ウォルフはあまり長い時間、城を開けるわけにもいかず引き返し、クラウドたちは里に泊めてもらうことになった。だが、立香たちは情報をまとめ今後のことを協議するべく、シャドウ・ボーダーまで引き返していた。とそこで、スペース・ボーダーとの通信回線を開いていたダ・ヴィンチが口を開く。

「紫式部は何か聞いてないかい？ 確か君、時々無限書庫の手伝いに行ってたよね？」

彼女はその在り方と能力から、カルデア図書館で管理者兼司書を務めるだけでなく無限書庫にも顔が利く。

ダ・ヴィンチが言った通り、本の整理や防衛機構への対処等々……結構重宝されていたりする。ただ、問題がないわけでもない。例えば、カルデア図書館には無限書庫にもない書物があることからユーノなどが興味を示していることだ。とはいえ、魔術書をはじめとした日く付きの代物も少なくないので、今のところは立ち入りを制限させてもらっているのだが。

閑話休題。

それでも紫式部が無限書庫に顔が利くのは事実。おかげで、色々な書物に目を通してしている。そんな彼女なら、その辺の歴史的なことも知っているかもしれないと考えてのご指名だ。

「ええ、読んだことはございます。ですが、そのあたりについてはまだ研究途上で、定説と呼べるものはなかったかと……」

「そうか……まあ、具体的な分岐点の考察は後回し。今重要なのは、オリヴィエが乗って以降、一度も『ゆりかご』が停止したことがない、ということだ」

玉座に座り、物言わぬ兵器として命を燃やし尽くすのが『聖王』の運命。二人も、残念ながらそのことは受け入れている。しかし、ならばどうしてオリヴィエが乗って三百年が経った今でもゆりかごは止まらないのか。

考えられる可能性はいくつかある。一つは、ゆりかご内部で新たな

“玉座の王”が選定され代替わりが続いている場合。他にも、最早ゆりかごは“玉座の王”を必要としない可能性もある。各地の王たちが手にした力を考えれば、ありえなくもない話だ。

だが、正直二人にとってそれらの可能性はどうでもよい。

重要なのは、未だオリヴィエが“ゆりかご”に囚われているという事実。最早彼女を救い出すことは叶わない。しかしせめて、オリヴィエを彼女が愛した土地に、彼女を愛した人々の眠る場所に葬ってやりたい。

ただそれだけを願って、二人は永きにわたる眠りについた。“記憶継承”という特殊な技術で子孫に想いを残し、チャンスを待ち続けたのだ。

「ですが、アトラさんやウオルフさんのお話ですと、現“聖王”との直接交渉は難しいですよね」

「みたいだよね。基本、事務的な報告しか受け付けてくれないらしいし」

事実、“聖王”と“ゆりかご”によってベルカが平定され、恭順を示した王たちを“代行者”に世界を統べるという支配体制が始まってすぐの頃、まだ王の座にあったクラウスや新たに任じられたリッドはその旨を要請したことがある。

しかし、答えは一つ“ゆりかご”内部は聖域につき、人とモノを問わず不出とする”。ゆりかごへの出入りを禁ずる理由もわからないではない。アレは世界の平定と並行して、危険な兵器や魔導器を破壊し、破壊できないものは内部に封印してきた。それが外部に漏れることを畏れていることだろう。

人の出入りを制限するのも、万が一にも持ち出される可能性をなくすためだ。

特に、“ゆりかごの聖王”となるためには“聖王核”なる物が必要らしく、核を抽出したとしても、その影響を受けた肉体を外部に出していいのはわからない。少なくとも、詳細を知らないクラウスたちでは判断がつかないことだ。だから、オリヴィエの遺体が引き渡されないことは理解できないこともない。

だがその上で、二人はオリヴィエをちゃんと叩いてやりたい。友人として何もできなかった自分たちが彼女にできる、それが最後の親愛であり友情だから。

「話してダメなら力で……っていうのは、仕方がないことなのかな」

そして、それがクラウドたちの出した結論だった。

とはいえ、いくら「王」として絶大な力を誇る二人に加え、当代の「王」達がいるとはいえ、それでもゆりかごを落とすには到底足りない。だからこそ、彼らは待ち続けていたのだ。現状を打破し得る、そんなきっかけを。アトラ：というか、放浪癖を抱える「黒王」の役目とは、どうせフラフラするのは止められないし、そのついでにきっかけとなるものを見つけ出すことでもあったわけだ。

「……アトラさんたちは、それで良いのでしょうか？ この世界の在り様に、私は違和感と反感を覚えずにはいられません。ですが、事実として世界は平和で、荒廃したベルカは回復に向かいつつあります。なのに……」

「二人も言ってたよね、『最善ではないが最良なのは認める』って」「そのあたりは、彼女たちが他の面々と違って過去の記憶があるのが理由だろうね。だからこそ、この世界の在り様に私たちに近い感覚を覚えるんだろう。個人として先祖の悲願を叶えてやりたいという思いと、それとは別に「王」として今の世界の在り様を善しとしない考え、その両方が」

個人としても王としても、ゆりかごを落とす。それが、当代の「王」であるアトラとウォルフの意志だ。

そしてそれは、カルデア・管理局組の利害と合致する。故に、共同戦線は必然だろう。

たとえばその後に、決定的な破局が待っているとしても……。

「先輩、皆さんにそのことは伝えなくてよいのでしょうか？ 今はまだ可能性の段階かもしれませんが、ですが、だとしても……」

「伝えるべき、なんだと思う。だけど俺は、伝えたくないと思っている。知らないことが救いになることって、やっぱりあるよ。それが、知っている側の傲慢だとしても」

ズルいということとは理解している。立香が同じ立場なら、やはり知りたいと思う。きっとあの子たちも、〝一緒に背負う〝ことを望むだろう。

しかし、その上で……

「でも、そこはお互い様だと思う。きっと、フエイトたちが同じ立場でも、自分たちだけで背負おうとするだろうしさ」

「それは……」

「お互いにワガママなんだ、俺たちは。〝一緒に背負わせてほしい〝と思うくせに、逆の立場になったら自分だけで抱え込もうとする。なら俺は、自分のワガママを押し通そうと思う」

「……………はい、私も同じです。皆さん、とても優しい人たちですから。知れば、きつととても苦しむのだと思います。私たちは、その重さと苦しさを知っています。だからこそ、こんな重荷を背負うのは、私たちだけでいいはずですよ」

1と2に大差はないが、0と1には途方もない開きがある。それと同じだ。

既に背負っている者が背負えばいい。

今までの道行きを考えれば、〝きつと碌な死に方はしないだろうなあ〝と立香は思っている。同じような道を、あの子たちが進む必要はないはずだ。それが、どうしようもなく身勝手に、傲慢な、ワガママだと知った上で。

そのために、あの子たちに嘘を吐く。何も知らないふりをするのだ、全てが終わるその瞬間まで。

「ま、あの子たちの場合だと、〝他にも方法が……〝と言いつい出しかねないしね。現状、あるかないかもわからないものに時間を割く余裕はないし、あったとしても研究・実現に漕ぎ着けるための設備もない。

彼女たちの不屈さは、また別の機会に発揮してもらおうでしょう」  
なのはたちの在り様は決して嫌いではない。通じる部分はあるし、共感もしている。それがあの子たちの強さでもあるのだから。

だが、今それは不要なものだ。今必要なのは、いつ訪れるかわからない限界点を迎える前に事態を打開する、そのための〝迅速な対処〝

なのだから。

「とりあえず、具体的な作戦を講じることにしよう。私としては、各地の王を『倒す』まではいかないにしても、ある程度混乱させておきたいところだね。でないと、本命に仕掛ける時にまとめて相手をする羽目になりかねない。」

アインス：こっちでは『ヨル』と呼ばれていたかな。彼女の相手は八神家の諸君が担ってくれるらしいとは言え、『ゆりかご』だけでも十分すぎるくらいに難敵だ。不安要素や横槍は極力排しておきたいからね」

まあ、その王たちも戦乱期よりも能力が強化されているので、十分すぎるくらいに厄介なのだが。とはいえ、ゆりかご攻略中に大挙して来られるよりはマシだろう。

一応、現<sup>ウオ</sup>『霸王<sup>ル</sup>』と現<sup>ア</sup>『黒王<sup>トラ</sup>』の二人が内部から切り崩しを図っており、何名かはこちら側についてくれそうな目星をつけているそうだが。それでも、戦力的に圧倒的不利な状況に変わりはない。こういう時は、直接頭を叩いて盤面をひっくり返すに限る。カルデアにとつては、割と慣れた戦いだ。

(とはいえ、流石に何もかも隠して…というのは問題か。こちら側と違い、管理局とはこれからもよろしくしていかなきやならないわけだしね。ゴルドルフ君とも相談して、『彼』には一応伝えておいた方が良いかな)

同じ頃、クラウドたちと共に里に宿をとっていたなのは、星空の下を歩きながら目当ての人物を見つけていた。

「フェイトちゃん、眠れないの?」

「なのは……うん、ちよつとね」

(また、何か考えてる顔してる……)

此方側に来てからというものの、フェイトは物思いに耽ることが多くなかった。

何を考えているのかは、付き合っても長く、自他ともに親友と認めるなのにもわからない。



ただ、ふとした拍子にフェイトが今にも消えてしまいそうに感じる  
ことがある。

そんな儚さと危うさ、眼の奥にある悲しい光はどこか出会ったばかりの頃を彷彿とさせて……。

だからこそ、心配でならない。

「……フェ」

「大丈夫だよ、なのは」

「え？」

「私、強いから」

「……」

「どこにもいかないよ。帰る場所がある、帰りたい場所がある。とても暖かい、私の居場所。だから帰るよ、みんなのところに」

「……ん、約束だよ。ちゃんと、みんなで帰ろう」

「うん、約束」

小指を絡めて、指を切る。

その思いは嘘じゃない。帰るべき場所に帰る、その思いは本物だ。

そう、本物だからこそ……ちゃんと連れ帰らなければならない、彼もまた。

(こっちに来てから、ずっと感じていることがある。……ううん、違う。これは前から感じていたこと。心の奥、そのずっとずっと深いところにあつたものが疼くんだ。オモイダセって)

想起しようとする、意味のない断片が過る。時に風景が、時に人が……それらは、知らないはずのナニカ。

なのにどうしてだろう。どうしてこんなにも、胸が苦しい。

(っ……落ち着いて、ゆっくり、焦らずに)

「フェイトちゃん？」

「大丈夫、大丈夫だよ」

(全然大丈夫そうじゃないよ、そんなに顔を青くして。震えているの、自分じゃ気付いてないんだよね)

指摘しようかとも思うが、フェイトがアレで頑固なのはよく知っている。きつと、指摘したところで意味はないだろう。

ならばせめてと、なのははフェイトの身体を優しく抱きしめる。自分の熱を、少しでも分け与えるように。

(……そう、大丈夫。私は一人じゃない、なのはがいる、母さんがいる、みんながいる。そして、立香がいる。一人じゃない、だからきつと……)

決意を固めようとすれば、“ナニカ”が押し寄せて訳も分からぬままに心が切り刻まれる。

これはきつと悲嘆であり、絶望であり、慟哭であり、悔恨なのだろう。

狂おしいまでの感情の奔流。

気が触れてしまいそうなのに飲み込まれ、自分で自分がわからなくなってしまう。訳も分からず叫びたくなる衝動を必死に抑え、一つ一つ探っていく。自分を襲う、“ナニカ”の正体を。

探れど探れど、答えは出ない。これが一体何なのか、どこから来て、どこへ向かうものなのか。何一つわからない。

でも、一つだけ……決めたことがある。せめて、逃げることだけはすまいと。

向き合って、受け止めて……それだけで総身が震え、足が竦むけれど、それでも……その向こうにはきつと、大好きで大切な、彼がいる。

(……そうだ、決めたんだ。もらったものを、一つずつ返していこうって。あの人を守るくらい、強くなるって)

それは幼い頃、胸に宿った想いを自覚した時から抱いていた決意。

(きつと、今がそうなんだ。昔から見ていた不思議な夢も、ほとんど忘れてそれでも残った“ナニカ”も、全てはこの時のためにあつたんだ)

悲鳴を挙げながら飛び起きたこともあった。涙がとめどなく溢れたこともある。酷い時には胃の中ものを吐き出し、起き上がれなくなることもさえ。でもそれらすべてに、きつと意味があつたのだ。

(進むんだ、立香がそうしていたように。たとえその先で……)

どうしようもなく辛い決断が待っていたとしても。せめて逃げて、目を背けることだけはしたくない。それをすれば、もう彼の隣に立つ

資格はないのだろうか。

(……ううん、違う。資格なんて、いらぬ。そんなものより、ずっと大事なものがある。そのためなら、この関係すら失っても悔いはない。怒られて、嫌われることになっても……)

きつと泣いてしまうだろうけど、それでも「一番望む」モノだけは見失わない。本当はもつともつと、彼のすべてが欲しいけれど。

(欲張りな私だけど……大丈夫。「一番」を零すことだけは、絶対にしない)

一番に願うものも、一番に欲しいものも、一番見たいものも。何もかもいつだつて一つ。なら、そのためにできることをしよう。

(それが、「悪い」ことだとしても)

自分自身の意志で決断し、責任を負う。それ位なら、自分にもできるから。

## マシユ・キリエライトの場合

——うへえ……。

クスクス……お砂糖とミルクは如何ですか、ヴィヴィオさん。

——うう、願います。大人つて、どうしてこんな苦いもの飲  
むんでしよう？　というか、どこが美味しいの？

(ニコニコ)

——……あのお、私の顔がどうかしましたか？

ああ、いえ……ただ、懐かしいなあ、と思ひまして。

——懐かしい？

はい。昔、フェイトさんも今のヴィヴィオさんと同じようにブラツ  
クで飲もうとして、やっぱり苦そうにしていらつしやつたものでは  
ら。

先輩が飲んでいたというのもあったのでしようが、「コーヒーが飲  
める「大人」というような図式があったようで。フェイトさんなり  
の、精一杯の背伸びだったのでしよう。その時のことを思い出して、  
つい。

——どこか似てました？

そうですね……思わず舌を出してしまっていたところとか、でしょ  
うか。こう、チヨロツと。

——(は、恥ずかしい……／／)

そんなに顔を赤くしなくてもいいと思いますよ。巖窟王さんのブ  
レンドは苦みが強いのが特徴ですから。でも慣れてくれば、奥にある  
バラのような豊かな風味が感じられるようになりますよ。

それに、むしろとても可愛らしかったかと。うっかり喉をくすぐり  
たくなるレベルです。ほぼゆるキャラと同義です。

——……ごめんなさい。比喻の意味がさっぱり分かりません。

——そうでしょうか？

——でも、砂糖とミルクと言えば、フェイトさんはあんまり入れ  
ないんですよ？

——そうですね。ミルクは少々、お砂糖も小さじ半分くらいでしょうか

？

——か、完璧に把握してるんですね。

はい、もちろん。

——さすが、一緒に暮らしているのは伊達じゃないというかなんというか……つてそうじゃなくて。なのに、緑茶にはどっちもたつぷり入れてますよね？

ああ。そちらは味の好みというより、フェイトさんなりの味や香りとのバランスの問題なのではないかと。

——ふくん……リンデイさんなら、お酒以外は基本なんでもミルクと砂糖マシマシですよね。

リンデイさんは極度の甘党ですから。

——糖尿病とか生活習慣病とか大丈夫なんでしょう？

今のところ、健康診断は問題ない……というか、毎回理想的な数値を維持しているそうです。個人的、世界七不思議のひとつです。

——ああ、分かります。ところで、マシユさんはリンデイさんたちのことを「お義母さん」とは呼ばないんですか？

うう……呼んでいい、というか是非呼んでほしいと仰っていたいただいはいるのですが……。

——何か問題が？

……………お父ヒトツマニアさんが調子に乗りそう

で。

——な、なるほど……あく、そうだ！ 話は変わるんですけど、フェイトさんとマシユさんで悪阻とか大丈夫だったんですか？ ママは全然平気な人みたいで、特にダメな匂いとかなしいし、何でも美味しく食べてたんですけど。でも、八神司令は結構大変だったみたいで、お肉とお魚は全く食べられなかったって……。

ああ、そのことですか。確か「草食動物の気分やつた」とお聞きしましたね。私の場合、半ば霊基の身体のおかげなのか、なのはさんと同じで正直悪阻があったかどうかすらわからないくらいでしたね。ただ……

——フェイトさんは違ったんですか？

生まれのこともあってなのか、かなり重かったようです。胸やけや吐き気で食事も喉を通らなかつたり、匂いを嗅いだだけで……ということもありましたね。それこそ、悪阻の間中寝込んでしまうこともありましたし。

それに伴って精神状態も不安定になってしまったのですが、プレシアさんやリンデイさんはもちろん、出産経験のあるサーヴァントの皆さんがサポートしてくださって。本当に助けられたと、改めてお礼を言っておりました。

あ、もちろん先輩もできる限りサポートはしてくださってましたよ。ただ、先輩の匂いにも反応してしまっていたので、落ち着くまで傍にいられなかつたのは、お互いに非常に辛そうでした。

——（個人差があるとは聞いてたけど、そんなになっちゃうこともあるのかあ……）

まあ、これは体質だけでなく精神的なものも影響するそうですから。プレシアさんが頑張ってくれたとはいえ、やはり人並み以上に不安要素があつたのも影響しているのでしょうかね。

——なるほど……でも、そんな状態だと食事もままならなかつたんじゃない……。

ええ。特に酷い時は安静にして点滴、ということもありましたから。でも幸い、少なからず食べられるものもあつたんですよ。

——へえ。例えば、何を？

先輩が作ったお粥やスープ、あと梅干ですね。

——まさにソウルフード!? どれだけフェイトさんの魂に染み付いてるんですか!!

……お米の炊ける匂いはダメなんですけど、不思議なことに先輩特製のお粥とかなら食べられるんです。ですが、他の方……例えばエミヤ先輩が作つたりするとやっぱり食べられなくて、どうしてなのでしょうね？

まあ、それでも消化に良くて薄味のものに限られました。

——それって、ジュエルシードの一件の時に食べたのとはほぼ同じメニューだからんじゃない……というか、お粥に梅干しって、ほとん

ど和食ですね。

ああ、はやてさんも似たようなことをおっしゃってましたね。それで「フエイトちゃん、ホンマに異世界人なん？ 実は日本生まれやったりしない？」と不思議がっていましたっけ。

——あ〜……：そういえばフエイトさんて和食が得意料理だし、コーヒーも紅茶も飲むけどどちらかと言えば緑茶（ミルク&砂糖マシマシ）派ですもんね。

エミヤ先輩は難しい顔をして、「抹茶オレというのもある」「個人の好みの問題だ」とご自分に言い聞かせていましたが。

——な、なるほど。で、純日本人のはずのママは洋食、八神司令も一番得意なのは中華だって言っていましたっけ。むう、日本人以上に日本通とか……。

まあ、割とよくあることですよ。

——というか、ママが洋食なのはわかるんですよ。おばあちゃんが洋菓子職人ですし、洋風に傾くのはある意味当然かなあって。でも、八神司令はどうして中華なんでしょう？

さあ？ お二人を避けて……：ということはないでしょうね。

——ですよね。司令の方がお料理得意だったわけですし……。  
……あつ。

——どうかしましたか？

いえ、その……：カルテアが浮上したあたりから「中華に目覚めた」、という話は聞いたことがあるような……：そういえば、いつだったかエミヤ先輩が「加護が好みにまで影響を与えているのか？」「声が似ているとは思っていたが、まさか同じようなアクマにはなるまいな？」と戦慄していたことがありましたが、どういう意味なのでしょう？

——？ ？ ？ 不思議ですねえ。

はい、これで七不思議が早くも二つです。

——あ、じゃあ三つ目……：じゃないですけど、前々から聞きたかったんですが、どうして別々に結婚式を？ ちっちゃい頃は気付かなかったんですけど、こういうのって一緒にやるものでは？

ちなみに、その情報源はどこから？

——えつと……小説とか。

そうですか……いえ、別に何か確執があったというわけではないですよ。ただ……

——ただ？

これから先家族として支え合っていくことに不満も抵抗もありませんでした。一生に一度の特別な日ですから。その……そんな時くらいは特別扱いしてほしいな、と。

特に話し合ったりすることもなく……というか、先輩から提案されてあっさり決まったんですよ。『みんなと一緒にもちろん大事だけど、大切な日だからこそ特別扱いさせて欲しい』と。

以来、お互いの結婚記念日と誕生日は夫婦二人で……というのが我が家のルールですね。

——ああ、ちよつとわかるかも。一緒にお祝いしたり喜んだりはいくらでもできるけど……。

はい。多くを共有するのは大切なことですし、それは素晴らしいことです。でも、独占できるところはやっぱりしたいものですから。

先輩は、私たちのそんな気持ちをちゃんと汲んでくださったわけですよ。

——じゃあ、立香さんだけ指輪の形が違うのも？ 確か、結婚した人同士で同じ指輪を左薬指につけるのが地球の文化なんじゃないか？

厳密には違うわけではないんですよ。私とフェイトさん、それぞれの指輪と同じデザインのものが交差するようになってるんです。そして、交差する場所に宝石を嵌めて『どちらが上でもない』と、まあそんな意味を込めたわけです。

とはいえ、問題が全くないわけではないんですけどね。式の日取りを決める際、フェイトさんが『私の方が後からだったから』と譲ってくださいって、その結果私の方が先に式を挙げさせてもらったのですが……そこに『違い』や『差』を見出す方もいらっしやうて。

——お二人とも、すつごくキレイでモテますもんねえ……。



……「蔑ろにされているのでは」や「貴女という人がいるのに」というお話は時々。心配してくださるのは恐縮なのですが……。

それに、実はフェイトさんもご自分の式をちゃっかり6月、それも大安に入れていたりするんですよ？

——タイアンキチジツっていうのですよね？ 確か、おめでたい日のことだったと思いますけど。

はい、よくご存じですね。さすが無限書庫総合司書長のご令嬢、博識です。

——えへへ、でも6月ってなにかありましたっけ？

ミッドチルダでは馴染みがないでしょうが、とある地域に「6月に結婚する花嫁は幸せになれる」とされる言い伝えがあるんです。由来は諸説ありますが、とりあえずウエディングシーズンとして認知されているんです。

私はあまりそういったことに詳しくなかったので、後から知って驚きました。正直に言うところ少し引け目のようなものを感じていたのですが……

——それがなくなっただけ？

そうですね。私が先に式を挙げ、フェイトさんが特に縁起の良い日を取る。おかげで、バランスが取れたように感じたのは確かです。

フェイトさんらしい気づかいと、たぶんちよつとだけ抱えていたであろう「やっぱり本当は……」という気持ちからのイタズラなんだろう。

——気持ちわかる気もしますが、あんまりフェイトさんらしくないような……。

ええ、同感です。結婚してからはちよつとしたサプライズ、という形でのイタズラはありますが、こういったものはアレが最初で最後ですね。多分、どなたかの入れ知恵があったのでしよう。

——なるほどお……。

ええ。

……。

……。

……。

……それで、本当は何が聞きたかったんですか？

——うゝっ!? わ、分かります？

何か聞き辛そうにしているとは、思っていましたから。

——あ、いや、今のも前から興味があつたのは本場で……ごめん  
なさい、いざとなると聞いていいかわからなくなっちゃって……。

私たちの旅のこと、でしょうか？ 申し訳ありませんが、秘匿事項  
になるので詳しくは……。

——ああ、いえっ、そうじゃなくて……もう一つのベルカは、  
異聞帯ロストベルトっていうのだったのかなって。そして、今はどうなってるのか  
など。

……。

——あつ、教えられないことだったら別に……。

……いえ、お話しする分には問題ありません。

——そう、なんですか？

はい。それというのも、ヴィヴィオさんがお聞きになりたいことの  
根幹については「わからない」というのが答えだからです。

——わからない？

順を追って説明しますね。まず、彼のベルカが異聞帯ロストベルトなのかという  
質問ですが、これは「NO」です。そもそも異聞帯とは、「剪定され、  
中断したはずの歴史が続いていたら」という並行世界論からすら切  
り捨てられた「ifの世界」です。そして、剪定の要因は「行き止ま  
り」であること。

あのベルカは、二重の意味でこの条件から外れています。

——一つ目はあれですよね、そもそもこちら側の世界宇宙には「剪定  
事象」っていう現象自体がないはずだから。

はい。発生するとしたら、私たちカルデアが現れて以降でしょう。

あちらのベルカは、300年ほど前の時点で分岐した一種の並行世  
界と考えられます。そのため、剪定事象の対象外、と考えるのが自然  
かと。まあ、「剪定事象」という世界法則システムが適用されたので、分岐し  
てから300年経った今、それが発生する可能性は否定できませんが

……でも、それを踏まえた上で、あの世界は剪定の対象外でしょう。いくつかの異聞帯ロストベルトを見てきた私たちだからこそ断言できます。あの世界は、まだ『行き詰って』はいなかった。

———そうなんですか？

『法の絶対順守』、それがあの世界が選んだ在り様でした。確かにそれは、未来への危うさと共に可能性を削ぎ落とす結果にはなつたでしょう。でも、選挙によつて選ばれた人たちによる議会が存在したことからわかる通り、選択の余地がないほどではありませんでした。

『聖王』というシステムに許された範囲の中ではありますが、彼らには自分たちの未来を選ぶ選択の自由があつた。これは、私たちが見てきた異聞帯ロストベルトとは大きく異なる点です。

法は守らなければならぬ。でも、その守るべき法が本当に正しいのか、時代に即しているのかを議論し、必要に応じて修正を加えていくことができる。もちろん、時には間違えることもあるでしょうが……。

———だけど、確かその法律が正しいかを審査されて、場合によっては却下されることもあるんですよ。

確かにそうです。ですが、おかしな言い方かもしれませんが……『聖王』というシステムは良くも悪くも公正でした。絶対的な力を有しているからこそ、特定の派閥や勢力に傾くことなく、一つ一つの国における最大多数の利益を守る法の在り様を善しとしていましたから。

今も思うことがあります。もし、議会が『聖王』の存在を否定するような法を議決したら、どうなつていたのかと……。

———え？ でも、それはさすがに認められないんじゃないや……。

いえ、そうとも限りません。あの世界においては、絶対者であるはずの『聖王』というシステムすら、法の下に位置していました。『聖王』とは法の番人であり執行者、各地の王はその代理人、それがあの世界の形です。決して、『聖王』は法を統べる存在ではありませんでした。

そう、ある意味では『法』こそが『神』だったんです。その場合、

選挙や議論は「信仰」のようなものだったのかもしれないね。

まあ、流石に唐突に「聖王不要論」や「民衆による法の管理・執行」なんてものが出たらその限りではないでしょうが、ゆつくりと時間をかけて「聖王」というシステムの権力を削いで行くような流れがあつたらあるいは……そう思うことがあります。

ですから、あの世界は異聞帯ロストベルトではなく、並行世界だったのでないかというのが私たちの見解です。つまり、方式は虚数潜航ゼロセイルでしたが、実態は並行世界転送スライド・シフトに近かったわけですね。

——じゃあ、あちら側の世界は続いているんですね。一時的に世界が重なって、あるいは繋がって、また離れたわけですし。うくん、ちよつと興味あるんだけど、何とか見に行くことってできないのかなあ？

……………。

——マシユさん？

そうであればと、願っています。でも、きっと……………。

——違うん、ですか？

あの事件の発端になったのは、「鏡」のような形のロストロギアだと思われます。カルデアの観測結果はアレが中心だと結論してしましました。そして実際、ゆりかご内部で破壊したことで世界は元の姿を取り戻しましたから。

——そういえば、それってこっちにもあつたんですか？

ええ。後から件の遺跡を調査したところ、同様の割れた鏡が発見されたそうです。

ここからは推論になりますが、アレはおそらく鈴鹿御前さんの「顕明連けんみょうれん」と似たものなのでしょう。あらゆる世界、並行世界すらも鏡の向こうに作り出し見渡す事が出来る……言わば「可能性」を見る鏡。

それが二つの世界でシンクロしたのか、あるいは元々そういう機能があつたのかは定かではありません。

ただ、一つ言えるのはアレを基点に二つの世界が「重なった」ということです。

ノイズに覆われた範囲がこちら側の世界であり、内部から見たノイズの外側はこちらの世界。そうして徐々に二つの世界は重なっていききました。基本的に行き来ができなかったのは、重なっているだけで繋がっていないからでしょう。

そして、重なった範囲を示すように発生していたノイズは「世界の悲鳴」です。

——悲鳴？

ノイズが広がるにつれ、微弱な次元震が断続的に発生していたんです。あちらのベルカの方々のほとんど……それこそ、「ゆりかご」に近い方々以外は「地震が増えた」くらいに感じていたと思いますが。

——いやいや!? 次元震って……シヤレになりませんかよ!?

そうです。だから私たちは解決を急ぐ必要がありました。

時間をかければ二つの世界をゆつくりと、安全に離していくこともできたかもしれません。

ですが、それは所詮「かも」という可能性の話です。できるかどうかわからないし、それを可能にするためにはどれだけの時間が必要でしょう。ほんの数日の間に星一つを覆うほどの速度であり、徐々に加速も上がっている中で、です。

一つの惑星レベルの重なりであれば、微弱な次元震で済みます。でも、もつと範囲が広がったら？

——……大規模次元震に発展して、近隣世界まで……。

その程度で済めばまだマシ……というのがカルデアや管理局の見解でした。

当初はこちら側に別の世界<sup>宇宙</sup>があるとは思っていませんでしたが、大規模次元震かそれ以上の危険の可能性があったからこそ管理局はカルデアを頼らざるを得なかったのです。

そうですね、沖田さんの「無明三段突き」を思い浮かべるとわかるのでは？ 「同じ位置」に「同時に存在」するというその矛盾、剣技として用いるのであれば局所的な事象飽和現象に留まりますが、ことは世界<sup>宇宙</sup>と世界<sup>宇宙</sup>の重なりです。例えば、一つの宙域が丸々消滅したとして、その余波は如何程でしょう。最悪、双方の世界が自壊する恐れす

らありました。

そして、どの程度の猶予があるかすら、前例がないため我々には断定できませんでした。いまならば、あの時のデータがあるのである程度推測することもできますが……。

——だから、可能な限り早く切り離す必要があった。もう片方の世界がどうなるか、分からないとしても。

……はい。あの戦いは、ある意味でとても公平であり、同時に極めて不平等でした。

どちらかの世界の鏡を破壊すれば一応事態の打開は可能です。自身の鏡を死守しながら、お互いの鏡を破壊し合う。その点において条件は同じでした。

でも、そのためには重なつた世界の中心部に向かわなければなりません。そのための技術がこちらにはなく、私たちにはあった。

ああ、いえ……ゆりかご内には無数のロストログアが保管されていたので、もしかしたら……という可能性は否定できませんね。『ゆりかご』はほぼ真相をつかんでいたようですし、心当たりもあるようでしたから。そうであつたら……という、私の願望が多分に交じっているのは否定できませんが。

まあ、不平等という意味で言えば、お互い様ではあつたのかもしれませんが。あちらの鏡はゆりかご内部で嚴重に保管されていたのに対し、こちらの鏡は碌に防衛機構も働いていない遺跡の中に野晒しでしたから。もし攻め込まれていたら、瞬く間のうちに破壊されていたでしょう。

——守りが手薄どころか『ない』っていうのも、ゾツとしますけど。でもそれじゃあ、あちら側の世界は……。

推論はいくつか並べることができませんが、どれも確証はありません。同時に、それが救いでもあるわけですが。

そこが、ロストベルト異聞帯との違いですね。

——それって、まさか……。

……秘密、ですよ。まあ、あるのは証言と私たちの手元にある記録だけなので、追及のしようもないんですけどね。

——…あの、そのことをママたちは？

伝えていませんでした。伝えたところでどうにもなりませんし、かえってなのはさんたちの心を乱すだけでしたから。

——（確かに、そうかもしれない。安全な分離方法の解明のためには、研究するための設備と専門家、それに時間が必要不可欠。でも、聞いた限りの状況じゃどれも望めない。選択肢が、時間があまりにも少なすぎる……）

ベルカに到着してある程度私たちが置かれた状況を把握した時、正直言つて後悔しました。

なのはさんたちを、連れてくるべきではなかったと。

——（ママが言つてたのつて、このことだったんだ。「この手にあるのは撃ち抜くための力。涙も、運命も……だけど、撃ち抜くべきものがわからなければ何もできない。強くなるのはいいよ、力をつけるのも。でも、どんな力、どんな強さにだって限界はある。それを覚えておいて。だからこそ私たちは、誰かと繋がって手を取り合うんだ。自分にできないこと、自分の手じゃ届かないものに手を届かせるために」。この時ママの手は、届かなかったんだ……）

結果的に、皆さんの心に深い傷を残してしまいました。

「物分り良く諦めたら、きつと後悔する」なのはさんの仰る通りです。そうするしかなかった、そうせざるを得なかったというのは言い訳に過ぎません。私たちは大人理性的な判断の理屈を盾に、彼女たちに諦めることを強いてしまったのですから。いったい皆さんは、どれほど後悔したのでしょうかね。

私たちにできたのは、同じ轍を踏まないように研究を進めること。そして策を巡らし、皆さんに代わって手を下すことだけでした。まあ、最後の方は失敗してしまっただけですが。

——え、それって……。

クロノ提督にだけは、おそらくはそうなるであろうという推論を伝えていました。

——クロノ提督が、伝えたんですか？

まさか。提督は口の堅い方です。二つの世界宇宙が共倒れになるくら

いなら、わずかにであつてもあちらの世界も生き残れる可能性を……  
そう、納得してくださいました。

管理局からも、可及的速やかに事態を打開するよう指示が出ていた  
ようです。実際、時間をかければどれだけの被害が出たことか……発  
生地点が無人世界だったおかげで、被害は最小限に住みました。はっ  
きり言って、偶然の産物であり、奇跡的なことでしょう。

クロノ提督もそのことは承知しているはずですが、それでも不本意  
だったことに変わりはないでしょうね。

——でも、それなら誰が？

ずっとずっと前から、動いていた人がいたんです。まさか、見越し  
ていたとも思えません……。

——？？？

(そして、もう一つの可能性。アレが、この世界に生じた抑止力による  
“多すぎる可能性を間引くための生存競争” だったのではないかと  
いう仮定。言わば、“汎人類史” を定めるための戦い、その一つだっ  
たとしたら……。

幸い、似た事例は以降観測されていませんが……そうであることを  
願うばかりですね)

\* \* \* \* \*

結論から言えば、ダ・ヴィンチの作戦案をベースに彼らは行動する  
ことになる。すなわち、各地の王たちの警戒心を煽って自領に引き籠  
らせることで、本命である“ゆりかご” 襲撃時に横槍を入れられなく  
する、というものだ。

欲を言えば、各地で生じた混乱を終息する為、“ゆりかご” からも  
戦力支援が行われることが望ましい。そうすれば“ゆりかご” もい  
くらか手薄になり、作戦の成功率が向上するだろう。

とはいえ、言うほど簡単なことではない。

そもそも、各地の王たちはベルカ諸王時代において鎬を削った猛者  
たちの末裔。加えて戦乱を治めるため、平定と並行して回収した魔導



器や遺物などを用い、その力を著しく強化されている。

平和な時代が続きその力を振るう機会はほとんどなかったはずだが、当代の王であるウォルフとアトラの実力は本物だ。それこそ、一対一ならなのはたちでも分が悪い。

そして、残る王たちの力も二人に劣るものではないという。しかも、一口に混乱を生み警戒心を煽るとは言っても、そもそもなのはたちは公僕の身だ。一般市民を脅かすなど言語道断。己むに己まれぬ事情があるとはいえ、彼女らにできる最大限の譲歩、それは直接王を狙うこと。無用な被害を産まずに混乱を招くとなれば、それしかない。

相手が強敵であることを考えれば、無理難題と言わざるを得ないだろう。

実際、作戦実行にあたりアトラたちからの情報提供には非常に助かった。

そもそも、この手の作戦は同時多発的に行ってこそ意味がある。戦力を集中して一ヶ所ずつ仕掛けていくのでは、本命に仕掛ける前に他所の混乱が収まってしまふからだ。そのため、いくつかのチームに分かれて行動するのは必然。だがそれは、戦力が分散しているということの意味する。

正直、あらかじめある程度王たちの能力を把握できていなかったら、作戦の達成率は5割に届かなかったかもしれない。それだけ、誰も彼もが厄介な能力を持っていたのだ。

特に天帝の場合、知っているか否かで作戦の成功率が大きく変化する。何しろ、対策した上でもさらに先手を打たれてしまうほどだ。対策していなかったらと考えると、ゾツとしない。

とはいえ、無事に誰一人味方を欠くことなく作戦を完遂することができた。あとは、本命である「ゆりかご」に強襲を仕掛けるのみ。

「でも、具体的にはどうするの?」

「そうだよ。『ゆりかご』の位置がわからないことには……」

最後の作戦を明日に控え、最後のブリーフィングというところでフェイトとなのはが呈した疑問。どの程度の猶予が残されているか

さえ不透明な状況為、碌に説明することもできなかつたのだから仕方あるまい。

何しろ、日を追うごとに地震の頻度と規模が増して来ている。なのはたちにはこれが『次元震』に由来するものであることは伝えていないが、タイムリミットは刻一刻と近づいているのは間違いない。状況を正しく把握している指揮官たちが、説明不足を承知で行動を急いだのも無理からぬことだろう。

「せやねえ……例えば、アトラさんのところで『ゆりかご』に救援要請をだしてもらうつちゅうのはどうやろ？」

言いたくはないんやけど、この世界からすれば私らは『賊』や。それがアチコチで好き勝手してる中、その足取りが分かつたって報告すれば……」

「いやあ、それはナイナイ！」

「え、ダメなんですか？」

「なに、初歩的なことさ、諸君。各地を治める王たちは極めて強力。にもかかわらず、良い様に手玉に取られている現状を鑑みればおのずと答えは……」

「ホームズ長い！ ウザイ！ まどろっこしい！」

いいかい。簡単に言ってしまったえば、内通者……裏切り者の存在に気付いているはず、ということさ」

当然、そこまでわかっていればウォルフたちにも疑いの目が向けられることになる。確信を得ているかはわからないが、疑わしい者からの救援要請を鵜呑みにするはずもない。

「あの、でも！ それじゃウォルフさんたちが危ないんじや……」

「うん。それに、二人の国の人たちも……クロノ！」

「安心してくれ、その点も抜かりはないよ。最悪、断定されている場合も含めて考慮してある。というより、それを利用してもらうのさ」「ちゅうと？」

「明日、二人には大々的に『聖王体制』からの脱退を宣言してもらう。当然、『聖王』は黙っていないだろう。各地の混乱よりも、そちらへの対処の方が優先度ははるかに高いからね」

だからこそ、〃ゆりかご〃は必ずそこに現れる。もちろん、戦闘になる以上は開けた場所に誘き出すことになるが、それは罠の存在をアピールするも同然。だが、問題はない。罠とわかった上で、乗らないわけにはいかない状況なのだ。〃聖王体制〃が始まって以来初めての事態、速やかに処理しなければ後に禍根を残すことになる。

ここでネットクとなるのは、ヨルことアインスが処理に動く可能性だろう。しかし、そこにカルデア・管理局組も姿を現せばどうだ。彼女ですら攻めあぐねるほどの戦力までいるとなれば、万全を期すために、〃ゆりかご〃は動かざるを得ない。

そして、今日までの工作のおかげで、各地の王たちが対処に動くには相応の時間を要する。

「明日は時間との勝負だ。各地の王たちが集まってくる前に、〃ゆりかご〃内部に侵入。今回の事件の中心と思われる〃ナニカ〃を見つけ出し、破壊する。」

戦力で劣る僕たちの勝機はそこにしかない。厳しい戦いになると思うが、心しておいてくれ」

そう締めくくると、各々与えられた部屋へと向かう。

そこに<sup>ゆりかご</sup>あることは分かっているが、その詳細はおろか外観すらわからない事件の中心。正直、不安がないと言えば嘘になる。

限られた時間内にアインスや〃ゆりかご〃の防衛網を突破し、広大な船内から位置を特定、さらにどれだけの候補があるかわからない中から目当てのものを見つけ出し、その上で破壊する。

普通ならこんなにも不確定要素ばかりの作戦など論外だが、今はこれ以上を望むべくもない。そのことは、なのはたちとて理解している。だからこそ、決意と覚悟を胸に最後の夜を過ごすのだ。

例えそのさらに奥に、まったく別の思惑を秘めていたとしても。

明くる日。ウォルフとアトラの二人は予定通り、長距離通信も交えて〃聖王体制〃から脱退する旨を宣言する。

その内容を要約するのなら、「法とは人が他者と共に、より善く〃生きるため〃の規範なのである」「故に、〃法によつて人が殺される〃な

ど、断じてあつてはならない」というものだった。

紡がれる弁には熱が籠り、人の心へと訴えかける力が宿っていた。きつとこれは、作戦などとは関係なく……二人が、あるいは両王家が長年に渡って胸に秘めてきた思いの発露だったのだろう。だからこそ、その言葉は何にも勝る糾弾だった。今の世界を作り上げた「聖王」への、「お前は間違っている」という宣言。

こんなものを突き付けられてしまえば、体制側として黙っているわけにはいかない。予想通り「ゆりかご」が姿を現し、間髪入れずにアインスが無数の航空兵器を伴って飛び出してきた。さらに、巨大な船体の各所から砲塔が姿を現し、地上の立香たちへ砲口を向ける。

ここまでくれば、後は各々が役目を果たすのみ。

「……すごい数だね」

「うん。正攻法であの数を突破するのは厳しい、かな」

数えるのも億劫になる物量に、思わずといった様子で感嘆の声が漏れる。広域型の攻撃手段を揃えれば、あるいは何とかなるかもしれないが……作戦の都合上そうもいかない。

だがそれを理解した上で、筆頭候補というべきはやては負担をかけることになる二人に頭を下げずにはいらなかった。

「ごめんなあ、二人とも。私だけでもそつちに回れたらええんやけど……」

「ダメだよはやて」

「そうだよ。はやてちゃんには、大事なお仕事があるんだから」

「……………そやね。アインスのことは、私らに任しといて」

愚かな拘りなのかもしれない。しかしそうとわかった上で、どうしてもはやてたちはあのアインスを他の誰かに任せることができなかった。彼女は自らの胸を押さえてこう言った「騎士たちはここにいろ」と、同時に自らを「主を持たぬヨルだ」と。

きつと、かつて闇の書が完成した時の様に、アインスはシグナムたちのリンカーコアさえも取り込んでいるのだろう。そして、何があつたかはわからないが夜天の書は主を得ていない。どんな意図や思いの末に今に至つたかはわからない。だがそれでも、夜天の書最後の一

人として三百年の時をあり続ける……それはきつと、とても寂しい時間だったはずだ。

“自分たちのアインス”ではないとしても、その“孤独”を見逃すことはできない。仲間として、同胞として、なにより“家族”として。だからこそ、はやてたちはアインスと対峙する役目に志願した。

彼女と向き合うその役目を、他の誰かに譲る気はない。

「さあ、アインス。お話、聞かせてもらうで」

「……いや、その必要はない。主だったかもしれない娘”よ。

既に私もお前たちが何者なのかを理解している。管制融合騎 私が私にならなかつた世界。騎士たちと共に、運命と呪いに翻弄され続けたであろう哀れな子ども。

いったい今日までにどれほど傷ついた、どれだけ苦しんだ。全ては、融合騎としての在り様を捨てる。たったそれだけの決断を下せなかつた、“私”の愚かさ故だ」

（ああ、やっぱりそういうことやったんか……）

なんとなく、そんな気はしていたのだ。

きつとこのアインスは、自らの在り様を否定してしまつたのだろう。主を守り、支え、共に戦う管制融合騎という在り方を。わからないではない。夜天の書は、すでにベルカの戦乱期には防衛プログラムが暴走していたという。守るべき主を、他ならぬ自分自身の手で殺してしまう。それは管制融合騎である彼女にとって、これ以上ない絶望だろう。

彼女は優しいから。これ以上、主を殺し、騎士たちを苦しめるくらいならば……そう考えて、自らの在り方を否定したに違いない。

“ゆりかご”は危険な魔導器や遺物を可能な限り破壊し、不可能な場合にはその内に封印してきたという。夜天の書もまた、その一つだったのだろう。アインスの手に本体というべき“夜天の書”がないことがその証拠だ。

“聖王”には“聖王の鎧”という強力無比な鎧を展開する能力があるという。その応用か、あるいは“ゆりかご”が有する性能なのはわからないが、浸食を抑えて封印することが可能なのだろう。

もしかしたら、完全には抑えられないからこそ騎士たちを取り込んだのかもしれない。仲間たちを守るため、彼女ならやりそうなことだ。その場合、自身への浸食をどうしているのかが懸念されるが、  
「ゆりかご」内部に帰還していることを考えると、そこで何らかの対処をしているのかもしれない。

いずれにせよ、「融合騎」という自身の根本的な在り方を否定せず、悲劇を繰り返したこちら側の自分は許し難い存在に思えるらしい。そうでなければ、今にも泣きそうな顔をしているはずがない。

だが違う、それは違うのだ。確かに多くの悲劇があつたかもしれない。彼女も騎士たちも、何度も何度も苦しみと絶望を繰り返したかもしれない。でもその果てに、得られたものがあるのだ。最早、彼女ではどうやっても得られない、かけがえのない光が。

「……………だというのに何故お前は、お前たちは！ そんな目で私を見る！ 己の運命を、その身に降りかかった呪いを、忘れたわけではないはずだ！ なのに、どうして……………」

「……………確かに、この身の運命を呪ったこともある」

「そうね、いつそ早く壊れてしまえば…そう思ったこともあるわ」

「しかし、今ならばわかる。あの、いつまで続くかわからない暗く閉ざされた道行は……………主と出会うためにあつたのだと」

「そんな顔すんなよ。昔のアレコレなんざとつくに取り返して、今あたしらはすつげえ幸せなんだ!!」

理解できないとばかりに叫ぶアインスに対し、そうではないと否定する騎士たち。それでもなお理解できないのか、あるいは理解してしまふことが恐ろしいのか。アインスはその手に光を湛え、力で以て否定しようとする。

「認めん……………認められるものか！ 呪われた魔導書、闇の書の呪い…私は凶兆の化身だった。それが、それがたつた一人に晴らせるものなら、どうして私は……………!!」

「……………まったく、どこの世界でも泣き虫なんやなあ。せやけど、おいたする子はきつちり叱るんが八神家流や。いくで、リイン」

「はいです！ “祝福の風”、確かにアインスまで届けて見せるです

！」  
リインフォース・ツヴァイとユニゾンし、はやての髪と瞳の色が変化する。

負けるわけにはいかない。彼女が残そうとしたもの、彼女から受け継いだもの。そして、今も彼女の帰りを待っているもの、その輝きと強さを証明するために。

「いくよ、みんな！ 一人で何もかも抱え込むあの子に、夜天の主と騎士は全員揃ってこそが本領やってこと、思い出させたるんや！」

「はい（おう）！！」

「はやてちゃんたち、大丈夫かな？」

「大丈夫だよ、はやてたちなら。他の誰かならまだしも、相手がインスならなおさら、ね」

「心配する気持ちもわかるが、今は目の前のことに集中しよう。露払いとほ言えこの数だ。突出せず、孤立せず、カバーし合うことを忘れるな」

「うん」

「お二人も、よろしくお願いします」

クロノが背後を振り返れば、そこには改造セーラー服とでもいうべき格好の狐耳女性と、背中に翼上の光を瞬かせるフードを被った少女の姿。

「オツケー！ 全然いけるしいー」

「はい、全力を尽くします」

前者は軽く、後者はやや無機質さを帯びた静かな声で答える。

セイバー、鈴鹿御前。ランサー、ワルキューレことオルトリンデ。今回の戦いに当たり、『偽臣の書』を用いてなのはたちが魔力供給の肩代わりと引き換えに共闘する3騎のうちの2騎だ。

八神家一同がアインスを抑えるために向かってしまったため、どうしても前衛が薄く、なおかつ圧倒的物量を相手取らなければならぬという、難しい状況になのはたちは立たされている。そこで前衛を強化し、なおかつ必要に応じて広範囲をまとめて……というニーズに応え

るべく選ばれたのがこの二名。

二人とも基本的には前衛型で広範囲攻撃などは得手としていないが、宝具はその限りではない。十分、今必要とされているものを満たしていると言えるだろう。

まあ、もつと適任のサーヴァントはいないこともないが、偽臣の書は所詮魔力供給の肩代わりをするだけの代物。令呪のように指示に強制力を持たせることはできないことから、かなり人：ならぬサーヴァントを選ぶ。相性以上にサーヴァントの性質によっては、平然と攻撃してくることも考えられるからだ。

また、強力なサーヴァントであればあるほど魔力消費も比例して多くなる。長期戦が予想される状況では、あまり協力過ぎるサーヴァントを選ぶわけにはいかなかった、というのも理由の一つだ。

そして、それが理由で八神家側は誰も偽臣の書を所持していない。全盛期以上の性能を有したアインス相手に、他に魔力を回す余裕はないからだ。

「そういえば、クロノは誰となんだっけ？」

「今は秘密にしておくよ。何しろ、とっておきの切り札だからね」

「? ? ? ?」

どちらかと言えば、情報はしつかり開示して共有する主義のクロノらしからぬ返事に二人は首をかしげる。

しかし、悠長に構えている時間はない。

「さて、まずは……度肝を抜いてもらうとしましょうか」

微かな笑みを浮かべて視線を転じれば、そこには左手を添えた右手を軽く握り、胸に当てて瞑目する立香の姿。

注意して目を凝らせば、その手の甲に刻まれた赤い刻印が僅かに光を放っていることに気付くだろう。

やがて、おもむろに瞼を開いた立香は右拳を掲げて告げる。

「カルデアのマスターが、令呪を以て命じる。

宝具を発動し、“ゆりかご”を落とせキング・プロテア!!」

途端、大地が鳴動した。何かが陽の光を遮り、あたり一面を影が覆う。



見上げればそこには……天を衝く大きさの少女の姿があった。いや、既に山ほどもあるその身体がさらに巨大化を続けている。

「……わくはっはっはっはっはっはっ!! ぎつつっぱ——ん!! 食くべちやくうぞく!」

頭からねじ曲がつた角を生やし、全身は緑色の毛皮かあるいは藻のようなもので覆われている。少女は高々と両腕を持ち上げ……先端は最早視認すら困難な遙か高空。かと思えば、ゆりかごの全長を優に超える長さの腕をがっちりと組み、勢いよく振り落とす。

「せくの……アイラーヴァタ・キーングサーイズ巨影、生命の海より出ずる!!」

はい、ド——ん!!!」

落雷を彷彿とさせる、しかしどこか形容しがたい鈍さを伴った轟音。

思わぬ方向からの、予想外の手段による、いつそ意味不明なくらいに単純な力技。およそ経験しようのない、想像すらしえないであろう攻撃が「ゆりかご」の船体を地面に向けて叩き落とす。

本来、キング・プロテアは、「無限に成長する」という特性を持っている。しかし、実際には常に『圧迫』され、その成長は大幅に制限されている。彼女の宝具はそんな『圧迫』を一時的にはね除け、プロテア本来のサイズに戻る固有結界。それをさらに令呪で底上げし、巨大な「ゆりかご」をすら見下ろす巨大化を瞬間的に可能にした。

彼女は、あの瞬間成層圏すら超えて宇宙から地上を見下ろしていた。最早人間の視点では知覚すら困難なサイズとなったプロテアはシンプルに、ただ一撃、ゆりかごに対して腕を振るい、これを叩き伏せて見せたのだ。

なんとというか、怪獣ムーブ好きの彼女好みの展開だろう。

「聞くを見るとじゃ大違いだな、アレは」

つついっいそんな眩きがクロノの口からこぼれるのも無理からぬことだろう。なのはやフェイトにしたところで、驚きのあまり目が皿のようになっている。事前に聞いてはいたが、まさかこれほどとは……。

いや、それだけではないか。カルデアに召喚されたすべてのサー

ヴァントを把握しているわけではないことを、あらためて思い知らされた、というのもあるだろう。いったいあそこには、他にもどれだけの隠し玉がいるのだろうか。しかも、そういうのに限って色々な意味で手に負えなさそうだから頭が痛い。できれば、今後とも未長く日の目を見ないでほしいものだが……。

「へえ、マスターもやるじゃん。なら、ここは私もアゲていくし！」

「状況への適応を、主導権を握ります」

「草紙 枕を紐解けば 音に聞こえし大通連 藁いづかの如く八雲立ち 群がる悪鬼を雀刺し」

「同位体、顕現開始します。同期開始、照準完了」

鈴鹿御前の手を離れ飛翔した刀が無数に分裂し、召喚されたワルキューレたちが一様に手にした槍を構える。

「文殊智剣大神通 恋愛発破 天鬼雨!!」

「……終末幻想・少女降臨!!」

同時に放たれた剣と槍の驟雨が、迫りくる航空兵器群に突き刺さり、一条の道を作り出す。

僅かに遅れてなのはたちも動き出し、大地にめり込んだゆりかごへと向かう道をさらに押し広げる。

突入部隊はクラウドスとリッド、そして立香率いるマシユを含めたサーヴァント総勢7騎……いや、プロテアは令呪によって底上げした宝具解放の反動でダウンしているの、実質6騎か。

一度に供給できる魔力量の問題もあるが、それとは別に立香の魔術回路の性能で一度に運用できるサーヴァントの、これが上限でもある。簡単に言ってしまうえば、コンセントの差し込み口の数がそこまでしかないというわけだ。立香の貧弱な魔術回路では、基本的に同時にこれ以上の魔力の供給を行うことができない。7騎目からはかなり無理をすることになる、プロテアの戦線離脱はそれも一因だ。

なのはたちの役目は、彼らがゆりかごに入るための道を開き維持すること。その後はゆりかご周辺に布陣し、内部へ戻ろうとする敵性兵器の阻止。つまり、立香たちが作戦目的を達成するまでの間、少しでも内部に戻ろうとする敵を遮らなければならない。長期戦を視野に

入れていたのはこれが理由だ。

なのは達三名に、サーヴァントが二騎、さらにウォルフとアトラが加わっても僅かに7名。彼我の戦力差を考えれば、敵航空兵器の性能が有象無象レベルだったとしても、十分すぎるほどに無理難題だ。

しかし、内部情報がほぼほに等しいことを考えれば、突入部隊に可能な限りの戦力を割かなければならない。だからこそ、一人一人がなのはたちとも渡り合える戦力であるサーヴァントを、計6騎動員できる立香をそちらに回すのは必然だった。

(気を付けて、立香)

サーヴァントが操る馬の背にしがみつきながら、未だ再浮上する兆しを見せないゆりかごへ向かう立香の背に視線を向けて無事を祈る。

だが、そんな余所見は刹那のこと。すぐに正面に向き直り、自分が為すべきことに集中する。

ゆりかごの内部は、外観を裏切らない広大さだった。

それでもほぼ迷うことなく玉座の間に到達できたのは、一本の大きな通路が中心部を貫いていたからだ。『ゆりかご』は戦船であると同時に、正当な王族の出産が行われる神聖な場所。そのため、内部の構造もそれにふさわしいものでなければならなかった。

人を惑わし、閉じ込める迷宮など論外。王城がそうであるように、玉座の間へと続く道は堂々としていなければならぬと、そういう理屈らしい。

そういつた格式などには疎い立香だが、今回はそれに助けられた。最悪、隅々まで探し回る羽目になることも覚悟していたからだ。

内部も自律兵器が跋扈していたが、道に迷ってしまったのに比べれば圧倒的に時間は短い。

まあ、できれば今回の事件の中心と思われる『何か』も探したいところだが、どうも反応は通路の先にあるらしい。ならば、一石二鳥を狙うのも悪くはあるまい。

そうして辿り着いた荘厳な大扉を押し開ければ、そこには無人の広間と…その奥に寒々しく鎮座する玉座。

そして、静かにそこに座す、ドレスを纏うなだれた様子の金髪の女性の姿があった。

「あの方が、当代の聖王陛下でしようか？」

「そうみたいだけど、何だか様子が変じゃない？　いくら何でも、誰もいないなんて……」

そう、玉座の間に侵入されたのなら、然るべき対応というものがあるはずだ。

いや、それを言えばそもそもおかしい。どうして迎撃してくるのが無人兵器ばかりで、一度も“人”と相対することがなかったのか。こは、この世界でも最も重要な場所のはずなのに……。

本来、大勢の人間に守られているべき場所だからこそ、立香たちはキング・プロテアによる撃墜を選択した。単に“ゆりかご”を落とすだけなら、藤乃かりップの能力で破壊してしまった方が手っ取り早い。

しかしそれをすれば、内部の人間に多大な犠牲が生じることになる。それを慮つての選択だっただけに、この状況には著しい違和感がある。

なにより、ようやくたどり着いた悲願の場所にたどり着いた二人は、どうして信じられないものを見たかのような顔をしているのだろう。

「……オリ、ヴィエ？」

「そんな……でも、アレは間違いなくヴィヴィ様。まさか、この三百年ずっと……」

「え、あの人が!？」

「ですが、とても三百年が経っているようには……」

玉座に座す女性の姿は、まるで眠っているかのように穏やかで、瑞々しい生命の息吹を感じさせる。端正な顔立ちには皺の一つもなく、髪は艶やかな光沢を放っている。まるでここだけ、三百年間時間が止まっていたかのようだ。

しかし、そんなことがあり得るのだろうか。

オリヴィエは“聖王核”を有した正当な王女だったが、逆に言えば

それだけだ。普通に成長し、傷を負えば血を流す人間だった。決して、“不老不死”などではなかったはず。聖王家にも、そのような逸話はない。

だが、ならばどうして最後に見た日と変わらぬ姿のオリヴィエがそこにいるのか。

いや、2つ違和感を覚えるものがある。細い体を包む品の良いドレスや豪華なマントとはあまりにも不釣り合いな無骨な義手と目元を覆い隠す赤い布。

前者は良い。オリヴィエは両腕を物心ついた時には失われ、それ故にエレミアの義手を使用していたと聞く。彼女が本当にオリヴィエなら、むしろあって当然なのだろう。だが、あの布はいったい……

とそこで、それまで静かに頭を垂れていた女性がゆつくりと顔を上げると、

「……………」

「オリヴィエ、分かりますか、僕のことか」

「ヴィヴィ様……」

ゆつくりと距離を詰めながらも、感極まった様子の二人。しかし、返ってきたのは、暖かな親愛とはかけ離れた、あまりにも冷たい声だった。

「……侵入者を確認 排除行動を開始します “聖王の鎧” 展開」

「っ!? オリヴィエ！ 僕です、クラウドです！ わからないのですか!?!」

「二人とも、下がって!!」

立香が叫ぶよりわずかに早く、弾かれたかのようにオリヴィエが二人に襲い掛かる。

寸でのところでマシユが割って入り、その盾で突きの一撃を受け止める。だが……

「くうっ!?!」

盾越しの打撃にもかかわらず、マシユの身体が弾き飛ばされる。咄嗟にクラウドとリッドがそれを受け止めるが、二人がいなければるか後方…それこそ玉座の間の外まではじき出されていたかもしれない

い。それほどまでに、重い一撃だった。

「これは、いったい……」

「元々、ヴィヴィ様は腕を魔法で操作されていましたが、いまの動きはまるで……」

全身を魔法によって操作しているように見える。ある意味、それはとても効率的なことなのかもしれないが、重要なのはそこではない。全身を魔法によって動かしているというのなら、果たして今彼女の肉体を動かしているのは、本当に「オリヴィエ」なのだろうか。

どうも、あの機械的な声を聴くと嫌な予感を覚えずにはいられない。

その予感は正しかった。

本来、「ゆりかごの聖王」は玉座に適合したとしても自我を奪われ、数年のうちに命を落とすという。

今のオリヴィエは自我を失い、玉座を守る生きた兵器そのもの。

ただ一点違っていたのは、彼女があまりにも「玉座と適合し過ぎていた」こと。

本来であれば数年のうちに燃え尽きるはずの命は、その適合率故に玉座に使われるのではなく、玉座と半ば以上「融合」する結果となった。それゆえに、「ゆりかご」の自己管理・自己修復機能は彼女も自らの一部と捉え、完璧なメンテナンスを施した。機械だけでなく生命体すら三百年の長きに渡って完全に管理して見せる、それが聖王家ですら把握しきれていなかった「ゆりかご」の性能の一端だった。

同時に、これこそがこの世界の<sup>宇宙</sup>支配者の正体。

君臨していたのは「聖王」という名の「システム」。それ故に冷徹に、厳格に、完全な「法」による統治を敷いた。

——世界を美しく蘇らせるため

——人の営みが正しくある様に

——寸分の狂いもなく運営する

——人の心を持たぬが故の完全性

正体を知って納得した。ここは、<sup>デウス・エクスマキナ</sup>機械仕掛けの神が続べる、文字通り鋼鉄の世界だったのだ。不完全で不安定な、血の通った人間が生き

るには……あまりにも『完全』過ぎる。

「……………」

「アルトリア？」

「……いえ、ご心配には及びません。確かに生前の私は、『完璧な王』たらんとしました。正しき治世のため、最善の判断を下し、最適な采配を振るい、公平な裁定を行い、全てを公正に評価する。確かに私は、そうであろうとしました。見方によっては、それは機械的にさえ写ったことでしょう。国を動かす歯車、王という名の装置……それで良いとさえ思っていた。

ですが、アレは違う。たとえ結果が伴っていたとしても、アレは私が望むものとは相容れない。

意志の介在しない統治など、圧制・暴政とすら比するに値ません」  
静かに、だが確かに今彼女は怒っている。

かつて「王は人の心がわからない」と言われた彼女だが、それでも『心』を失ったことはない。

この世界の在り様ではなく、目の前の存在を……オリヴィエを動かす『システム』を許すわけにはいかなかった。

「決着をつけましょう、マスター。アレは、人の世には不要なものだ」  
「ほう、珍しく意見が合うではないか騎士王。うむ、アレはいくらなんでも極まり過ぎだな。完全管理して生かすというのがかえって性質が悪い。いつそ人間を滅ぼすとかの方がまだマシだろう」

「いや、それはそれで笑えないけど……」

豪放過ぎる征服王の弁に、思わずツツコミを入れてしまう。

「で、貴様らはどうなんだ。ん？ あんなものが『聖王』などと名乗っているとあつては、王として一言二言三言と、言いたいこともあろう」

「それを俺に聞くかよ。あんま偉そうに語れるほど、王やってたわけじゃねえんだがな、俺は。

だがまあ……そんな俺でもアレはねえわ。つーわけで、とりあえず殴って蹴ってぶち壊す！」

「私は破壊であり、文明を滅ぼす機械装置。王か否かを判断するのは、

私の役目ではない。

しかし、自らの道行きを知らずに終わるのは良くない。故に……アレは悪い文明だ。ならば、その文明を破壊する」

あまり自身が「王」であることに拘りを見せないベオウルフやアルテラですら、目の前のシステムの操り人形には思うところがあるらしい。

ただ、いつも人一倍暑苦しい人が今回は妙に静かなのが気になるどころだが……。

「あれ、レオニダスは何もないの？」

「おお、そういえばそうだな。真っ先に食いついてきそうなもんだが……」

「大丈夫です、先輩。レオニダス王なら、きつと含蓄溢れるお言葉を聞けるに違いありません！」

「……システム………機械仕掛け………つまり、インテリ!!」

(うくん、間違つてなくもないのか?)

せつかくのシリアスが総崩れになりそうなので、見て見ぬふりをする。

どうやら、マシユの期待は盛大に空振ってしまったらしい。

まあそれはおいておくとして……何はともあれ、やることは一つしかないのだ。

「マシユ、まだいける？」

「はい。戦闘に支障はありません、お二人が受け止めてくださいますから」

「……いや、助けられたのはこちらの方だ」

「それに、任せきりにしてしまつては承らえてきた意味もありません。ここは、僕らに任せてもらえませんか」

驚愕を乗り越え気持ちを立て直したのか、クラウドとリッドがアルトリアたちのさらに前に立つ。いつの間にか、リッドの両腕には黒い手甲が現れ、クラウドもまた拳を構える。

そう、これは元々二人の戦い。オリヴィエを取り戻す、そのことに



何の変化もないのだから。

時を同じくして、ゆりかご周辺。

いくら一騎当千揃いとはいえ、流石に圧倒的物量の前では限度がある。じりじりと防衛戦を押し込まれ、少なからず網目を抜けた機体がゆりかご内への再侵入を果たしている。

何とかしたいのはやまやまだが、とてもではないが手が足りない。

「どうしよう、フェイトちゃん。このままじゃ……」

(このままじゃいけない、それはわかってる。だけど、どうしたら……)

切り札を切つての起死回生……といきたいところだが、そうもいかない。

ブレイカーなどを用いれば、確かに敵陣に大きな打撃を与えられるだろう。だが、それまでだ。圧倒的物量の前では焼け石に水でしかない。

切り札を切つた後、疲弊した身体で残された敵による攻勢を支えきれぬのか。せめて、はやてたちが合流してくればとも思うが……。

「あつちは……まだまだかかりそうだね」

「うん。アインスさんだもん、そう簡単にはいかないよね」

遠方から響く戦闘音。八神家とアインスの間で、今なお熾烈な戦いが繰り広げられていることがわかる。

「やむを得ないか……頼めますか？」

(いいんすか？ 割とタイミングとしては微妙なところだと思うつすよ?)

「それでも、ここで戦線を崩すわけにはいきません。何より、いつフェイトたちが飛び込むかわからない」

(……しょうがないツスねー。供え物、よろしくつす)

合意を得られると同時に、クロノの背後に光が集まり……石像が出現した。

割とサーヴァントたちと関わってきたのはとフェイトですら、一瞬啞然として手が止まる。

奇抜な格好、奇天烈な姿形のサーヴァントは数いれど、石像の姿をしたサーヴァントはただ一人。

だが彼女は、割とこういう現場には出てきたがらない真正の出不精ではなかったか。

「ガネーシヤ（さん）!?!」

「ガネーシヤさんが、アタシにもつと輝けと囁いている……! 商売繁盛待ったなし! 今伝説のお……」

「え、ちよつ、まさか……」

「ここでそれなんですか!?!」

二人が驚くのも無理はない。何しろ、今使おうとしているのはこと珍妙さでは屈指の代物。いろいろ追い詰められたガネーシヤさんが繰り出す逆ギレ宝具。その正体は神気を込めに込めた武器による「ただの重すぎる打撃」である。

だが、ただの打撃と侮るなかれ。神の武器は振るうだけで様々な奇跡を起こすもの。

なるほど、その威力は周辺を飛び回る有象無象を一掃して余りある……かもしれない。

とりあえず、巻き込まれてはたまらんとばかりに急ぎ距離を取る二人。もちろん、このままだと逃げ遅れそうなウォルフたちへの警告も忘れない。しかし、そんな二人の予想は思いもしない形で裏切られた。

「ガネーシヤ・ヴァイグネーシユヴァラ 帰命せよ、我は障害の神なり」

聞いたことのない真名、同時に巨大な壁が出現し航空兵器を押し返す。衝突した兵器は次々に爆散し、やがて壁はゆりかごを丸ごと飲み込んだ。発動させた、ガネーシヤさえも飲みこんで。

すっぽりと「ゆりかご」を包み込み、それは巨大な立方体を形成した。

見た目からは材質がわからないが、次元違いの強度があることは本能的に察することができる。マシユの宝具同様、なのはたちの最大出力を以てしても破壊は不可能だろう。

「クロノ、人が悪いよ」

「そうだよ、こんな凄いのがあるんだっつたらもつと早くに……」

「秘密にしていたのは悪かった。でも、早々気安く使えない理由もあつてね」

ガネーシヤ・ヴィグネーシユヴァラ  
帰命せよ、我は障害の神なり

それは、ガネーシヤの障害除去神としての性質を純化させる事で発現させる絶対不可侵力場であり、よほど特別な事情がない限り使われない宝具。

クロノがガネーシヤへの宝具発動の要請をギリギリまで引き延ばしたのは、その性質故だ。

万が一にも、失敗するわけにはいかない。なぜならこれは、一度発動させたら……

「そつか。こんなに凄い宝具だもん、あんまり長くは続かないよね」

「……いや、逆だ」

「どういうことなの?」

「この宝具は……」

「解除、できない」

「え……」

フエイトのつぶやきに、なのはが反射的に振り向く。なぜそう思ったのかはわからない。だが、確信があつた。

「……そうだ。この宝具に発動制限時間はないし、彼女も自力で解除できない。」

同時に、この宝具の特性は「絶対不可侵力場」だ。外部からの攻撃では、突破は不可能だろう」

少なくとも、人間レベルの攻撃では。アルカンシエルクラスなら、別かもしれないが。

とはいえこんな問答をするなど、戦場の真ただ中で悠長なことではあるが、航空兵器たちの最優先事項はゆりかごの防衛であり、侵入者の排除だ。その前では、なのはたちは捨ておいて問題ない脅威ではない。

立方体の破壊が困難と悟つたようで、だからこそなのはたちは特に攻撃されることなく佇むことができている。要は、なのはたちの相手

をする余裕がないのだ。

「なら……ならどうして私たちを中に入れてくれなかったの、クロノ君！」

攻撃による破壊は無理でも、別の方法で解除は可能はずだ。あるいは、出入りする方法があるのか。そうでなければ、内部の人間を殺しかねない以上、抜け道はあるはず。だから、出られない心配をする必要ない。

重要なのは、そんな敵の侵入をほぼ完全に防げる手段がありながらここまで使わず、使ったうえでなのはたちを締め出したことだ。最初から使い、なのはたちも中に入っていれば、もつとこの作戦の成功率を高くできたはずなのに、それをしなかった。

そのことをなのはは憤っているのだ。しかし、クロノがそれを選択したのには、当然理由がある。

「君たちは、ここから先に行くべきじゃない。それが理由だ」

「……………」

「どういうことなの……………」

「…………それより、はやてたちは」

なのはの問いに答えることなくそう口にしたところで、一際大きな閃光が周囲を照らす。どうやら、あちらも決着がついたらしい。

(結果的に、最善のタイミングだったのかもしれない)

如何に疲弊しているとはいえ、はやてたちが合流すればゆりかご内部に突入する余裕もできた可能性がある。

そうなる前に、事実上の封鎖をしまえたのは僥倖というべきだろう。

白く眩い光が止んだ時、残されたのは大地を抉る巨大なクレーターだった。

そしてその中心部に横たわる、クレーターと比してあまりにも小さな一つの人影。

人影を取り囲むようにして降り立ったのは、守護騎士たちとはやて。誰もが肩で息をし、特に前衛を務める三人の疲労は濃い。

傷を負っていない場所がないくらいに手酷くやられ、打撲・打ち身は数知れず、出血や骨折している個所もある。

後衛を務めるはやたとシヤマルですら、騎士甲冑は破損だらけで目立った怪我を負っていないのが奇跡的なくらいだった。

「私らの勝ちやね、アインス」

「……………私に、そう呼ばれる資格はない」

「そうは言われてもなあ、他の呼び方知らんもん」

「そうですね。管制人格とか、管制融合騎とかじゃ流石に…………」

「お前、というのも今更だからな」

しらばっくれるようにはやてが視線を向ければ、シヤマルとシグナムもそれに乗っかる。

確かに呼び名としてはどうかと思うものだが、守護騎士たちに限って言えば、昔はそうやって呼んでおいて、何をいまさらという話だろう。

「……………どうして、お前たちはそうやって笑っていられるんだ」

「そりやまあ、良いことばっかりじゃなかったよ。むしろ時間と回数なら、嫌なことの方がずっと多かったと思う。でもさ、それをチャラにしてもお釣りがくるくらい、今が幸せだったことだよ。

昔のことは昔のこととして、今がよければ笑える。そういうもんだろ、人間ってよ」

「その今にしたところで、紆余曲折の果てに得たものだがな」

はやてを主として戴いたいてからも、決して平坦な道ではなかった。むしろ、夜天の書の呪いに侵されるはやてを救わんと誓いを破り、運命に抗おうと足掻いていた時は辛かったし、苦しかった。

それでも、お節介なお人好したちが頑張ってくれたおかげで呪いは解かれ、こうして愛する主と共に、家族で暮らすことができている。そんな奇跡に身を置いているのだ、笑わなければ嘘ではないか。

「……………そうか。お前たちが笑える未来も、あったのだな。それを諦め、手放した私が愚かだっただけか」

「馬鹿を言え、お前は物分かりが良すぎる」

「だな。なのはたちを見習え」

「あなたはあなたなりに、私たちを守ってくれたんでしょ。だからこそ、この世界の私たちはあなたに全てをゆだねた。あなた一人に押し付けたことを悔いこそすれ、あなたを責めたりなんかしないわ」

「……………そうか。私は、間違えたわけではなかったのか」

仲間たちのために、自分にできる精一杯をしたつもりだった。それが間違いでなかったのなら、少くくは胸を張ってもいいだろう。

そんな安堵が最後の心の悶えを取り払ったからか、かすかな微笑みとともにアインスの身体から光の粒子が立ち上り始める。はやてたちは目にしたことのない現象だが、それはどこかサーヴァントの消滅に似ていた。

「アインス!?!」

「……………逝くのか」

「ああ。気に病むことはない、私は『ゆりかご』によって維持されていたようなもの。夜天の魔導書としては、とうに終わっていた身だ」

「……………」

「最後に一つだけ聞かせてほしい。そちらの私は、どうしている?」

「……………眠つとるよ。防衛プログラムを消すことはできたんやけど、その反動みたいなもんや」

「……………そうか」

僅かに瞑目し、うつすらと瞼を開けるアインス。夜天の魔導書として、最後に為すべきことが見つかった。

「そこにいるのは、私の後継機か」

はやてを見据えながらの問いに答えたのは、ユニゾンを解いたリイン自身だった。

「はいです。リインフォース・ツヴァイ、あなたの名前を受け継いだ二代目『祝福の風』です」

「次、いつ目覚めるかわからないからって」

「主はやての魔導の器にこそ、その名はふさわしいとな」

「そうか。ならば、この手を取れ二代目。これが、私にできる唯一の餞別だ」

言われるがまま、リインはアインスの手に自らの小さな手を添える。

「これは……」

「今の私を構築するデータと、私を維持するために使われたシステムだ。そちらの私にどの程度転用できるかはわからないが、使つてくれ」

「リインフォース……」

「……いいや、その名は私のものではない。お前と、そちらの私の名だ。だが……ああ、私も、自らの主にそう呼んでほしかった」

少しだけ悔しそうに、あるいは羨ましそうに光となって消えていく。

その後、彼女が遺したデータはアインス自身に適用される。本来であれば、無限書庫を搜索しても数十年、あるいは二度と覚醒することはないかと思われた彼女だが、辛うじて覚醒を可能にする程度には修復することに成功したのであった。

この世界の王たちの力は、トップサーヴァントどころか、生前の彼らにすら匹敵するほど強力だ。

ましてや、そんな王たちを統べる『聖王』の力ともなれば如何程か。例えば、機械仕掛けの操り人形だったとしても……否、だからこそ効率よく、一切の無駄なく、その性能を完全に引き出すことができていた。

2名の王と6騎のサーヴァント、それだけの戦力が揃ってなお、結果は紙一重だった。騎士王と征服王、発動までに一瞬の間がある二人の最強宝具を、発動させずに抑え込んだというのも一因だろう。

激しい戦いの中、浮き上がった結晶体を破壊することで、ようやくオリヴィエはその動きを止めた。

「状況、終了。聖王オリヴィエの、沈黙を確認しました」

肩で息をしながら、ようやく動きを止めたオリヴィエを慎重に見定めながら報告するマシユ。

守りに長けるマシユとレオニダスが揃っていないながら押し切られ、ア

ルトリアやイスカンドルの猛攻を真つ向から受けて立ち、アルテラやベオウルフの一撃に耐え、クラウスとリッドをねじ伏せて見せるオリヴィエの力は、過去の経験と照らし合わせても指折りだったろう。

特殊能力や絡め手を用いず、正攻法で強いというのがまた厄介だった。

とはいえ、オリヴィエが倒れると同時に“ゆりかご”の機能もダウンしたのか、あるいは激しい戦闘でシステムが破損したのか。いずれにせよ、照明は明滅を繰り返し、度々聞こえてきたアナウンスも沈黙している。

これで終わった、そう判断しても差し支えあるまい。

クラウスとリッドの二人も、ようやくその実感が湧いたのか。思わず顔を見合わせると、弾かれたように倒れ伏したオリヴィエに駆け寄る。息があるのかは定かではないが、二人の悲願がようやくかなったのだ。

「先輩？」

「本当は急いで探すべきなんだろうけど、見届けるくらいはしてもいいよね」

「……そうですね。この後、どうなるかわかりませんから」

言葉にせずとも共有できた、共有できてしまう未来の可能性の一つ。

もしかすると、これからやろうとしていることはようやく再会できた三人を消し去る行為なのかもしれない。だからこそ、目に焼き付けなければならぬと思っただの。これから、自分たちが何をしようとしているのかを。

見て見ぬふりなど許されぬ。思考放棄と自己防衛の末に卑劣な行為に走ることだけは。

「う……」

「オリヴィエ！」

「ヴィヴィ様！ わかりますか、僕たちのことが！」

「その声……クラウ、ス？ それに、リッド？ どうして……」

どうやら一命はとりとめたらしく、徐々に意識を取り戻すオリヴィ



エ。

同時に、固く結ばれていた目を覆う布が解け、その下には……抉られたかのような痛々しい傷跡があった。

「オリヴィエ、その目は……」

「いったい、何があったんです！ 僕たちがいない間に、いったい何が……！」

二人の問いかけに答えることなく、わずかによろめきながらも身を起こすオリヴィエ。先の戦いのダメージは、まだまだ残っているのは明らかだ。しかしその足取りには、どこか弱々しさが無い。

同時に、全身から確固たる決意が滲み出ている。

「初めまして、異邦人の皆さん」

「……俺たちのことを、知っているんですか？」

「私は『ゆりかご』と繋がっていましたから。そして、『鏡』が教えてくれました。あちらとこちら、今まさに二つの世界が重なり…崩壊しつつある。それが、『鏡』から得られた情報を基に『ゆりかご』が出した結論です。そして、それはあなたたちも同じようですね」

『鏡』。それが、今回の事件の中心。どうやら、それを納めていた『ゆりかご』は、これを分析することで真実の一端にたどり着いていたらしい。

「あなた方を責めることはしません。守るべきものを守るために戦う、それが人ですから。」

『ゆりかご』もまた、準備が整い次第あちらに渡っていたことでしょう。そして、あちらの『鏡』を破壊しようとしたはずです、あなた方と同じように」

この口ぶりからして、ゼロセイル虚数潜航に近いことを可能にする遺物なり技術なりが、ここには収められていると考えるべきか。だとすれば、やはりことを急いだのは正解だった。こちらと違い、あちらには『鏡』を守るものがないのだから。

「例えその結末が、どうしようもなく残酷なものであったとしても」

「あなたも、そうなると思っっているんですか」

「この点については、『ゆりかご』も確証は得るには至りませんでし

た。ただ、可能性としては十分にありうると」

「……」

「動じないんですね。その覚悟と決意に、敬意を払いましょう。

ですが、一つ聞かせてください。あなた方は、本当にこちらの世界を残すべきだと、そう思っているのですか？」

「どういう、意味？」

「こちらの世界のことは私も知りました。だからこそ断言できます。確かにこの世界は冷徹かもしれない。それでも、こちらの世界の方がずっと平和で安定しているではありませんか」

「……それは、あなたが『ゆりかご』を動かしていたということですか？」

立香の問いに、少しだけオリヴィエは思案する。やがて考えがまとまったのか、慎重に言葉を選びながら口を開く。

「私は、ただ願っただけです。世界が少しでも『平和』で『安定』したものになる様に。責任逃れのように聞こえるかもしれませんが、否定はしません。ですが、私が望んだのはただ一つ。

命を育むことも、大切な人抱きしめることもできない、何もできない私だけ……こんな私を愛してくれた大好きな人たちが、穏やかに暮らせる世界を。その願いを、『ゆりかご』はくみ取ってくれました」

見えない目をそつと背後に立つ二人に向けて、そう語る。

ある意味『ゆりかご』は聖杯のように機能した、ということだろうか。オリヴィエの漠然とした願いを、その機構で実現するためにはどうすればいいかを演算し、実行したと。

オリヴィエの身体を維持していたのも、これ以上『ゆりかご』の聖王となる者を生み出したくないと、心のどこかで願ったからか。

「もう一度聞きます。『鏡』を破壊された世界には消滅の可能性があります。それを知った上で、不安定な世界のためにこちらの『鏡』を破壊するのですか」

きつと、普通なら躊躇い、足踏みしてしまう場面なのだろう。

だが、立香たちにとってその問いは……すでに通り過ぎた場所だ。

「……壊すよ」

「如何なる道理の下に」

「この世界じゃ、俺は笑えない。きつと、俺の大切な人たちも」  
「……」

「だから、だよ。俺は、俺たちが笑って生きられる世界の方が大事だ。生き残るべきなんだ」

傲岸に、胸を張って、断言する。かつて、背中を押ししてくれた友が言っていたように。

それが、滅ぼそうとする側の責任だ。

ただ、気になることが一つある。

「一つだけ、教えてください。その目は、どうしたんですか？」  
「……」

答えは返ってこなかった。だが、それで十分だった。

きつと、オリヴィエが自ら望んだことなのだろう。戦乱を治めるため、多くの命を“ゆりかご”で奪っていく。その罪悪感からか、あるいはその光景を見ることに耐えられなかったからか。なんとなく、そんな気がした。

「……あなたたちがこちらの“鏡”を破壊するというのなら、私はあなたたちを倒します。この世界を作り上げた、その責任を負う者として」

既に限界を超えているであろう身体に鞭を打ち、構えをとるオリヴィエ。

しかしそこで、クラウドとリッドの二人が並び立つ。

「二人とも……」

「すまない。彼女が戦うというのなら、僕らは君たちの敵に回る」

「恩を仇で返す不義、許せとは言わない。でも……」

「良いと思う。だってそれが、二人がずっとしたかったことなんですよ」

「……」

「なら、それをすべきだよ。今度こそ、その手を離さないで」

目を見開き、続いて瞑目する。そこに何を込めたのか、あえて追及

はしない。

これから互いに「自身の願いや正義、生存のために他者のそれを踏みにじる」というのに、それは余分なことだから。

ガネーシヤが作り上げた絶対不可侵力場の前では、合流したはやてたちもまたクロノに食って掛かっていた。だが、クロノは頑として何も語ろうとしない。それが、立香との約束だったからだ。

全てが終わるまでは、どうか黙っていてほしいと。

しかし不思議なことに、なのはやはやてが言いつのつてくる中、フェイトだけは何も言わずに巨大な壁を見上げているだけ。

普段の彼女なら、なのはたちと共にクロノを追求していたはずだ。なのにそれをしない。頭は良くても物分かりが良いわけではないことは義兄としてよく知っている。そんな義妹の不自然な態度を訝しむが、何も思い当たるものはない。

だがそこで、フェイトがそつと壁に指を這わせる。当然、その程度では何の影響も与えはしない……はずだった。

「引きこもりだって——」

フェイトの口からは到底、出てくるはずのない言葉。  
なのにどうして、迷うことなくその言葉が紡がれるのか。

「——空を見ていい」

同時に、まるで先ほどまでの偉容がウソのように立方体が消え去った。

残されたのは、今なお地面に埋まった「ゆりかご」と、フェイトの目の前で呆然と佇むガネーシヤだけだった。

「らしくないよ、ガネーシヤ。パスワードの使い回しなんて、初歩的なことしちや」

「……どうして、君がそれを知っているんすか」

どこか愁いを帯びた微笑みで窺<sup>たしな</sup>めるフェイトに、訳が分からないとばかりに呟く。しかしすぐに気づく。こんなことができる者など、一人しかいないことに。

「っ！ あんのロクデナシの仕業っすね！」

「……………」

「わかってるんスカ。その先は地獄っスよ。君は、マスターと一緒に地獄まで来てくれるんスカ？」

ガネーシヤの横を通り抜け、<sup>ッ</sup>ゆりかご<sup>ッ</sup>へと向かおうとするフェイトに、普段の彼女からは想像もつかないような厳しい声音が向けられる。呆氣にとられ、反射的にフェイトの後を追おうとしたのはたちも思わず身体を固くする。

言っている意味は分からない。だがここから先は、安易に踏み込んではいけないことだけはよくわかった。

そんなガネーシヤに振り返りながら、逆にフェイトは問い返す。

「君たちは、どうなの？」

「サーヴァントはマスターに従うものっス。そりや知ったこっちゃないって連中ももちろんいるけど、ガネーシヤさんはできたサーヴァントっスからね。地獄の底までだって付き合っただけあげるっスよ。」

でも、君はどうなんスカ？」

「……………」

「言っておくっスけど、半端な覚悟ならよした方が良く、下手な善意はむしろ迷惑っス。これ以上…………マスターを追い詰めないでくれなっスか」

それは、今にも泣きだしそうな声音の懇願だった。半端な優しさなんていらぬし、自己陶醉ならぬおのこと。

ここから先は、本当に最後の最後まで付き合う…………見届ける覚悟がなければ踏み込むべきではない。

彼らは知っている。自分たちの契約主が、本当はどれだけ追い詰められているのかということ。ギリギリのところ、辛うじて自分を保っているのだということ。

一時でも彼を救ってくれたフェイトには感謝している。しかし、ここから先に踏み込むなら話は別だ。

余計なことをするようならば、容赦はしない。そのつもりでいたのだが…………

「ほら、分かっただらさっさと下がるっス。大丈夫、君ならちやくんと幸せに……」

「そうだね、地獄に付き合う気なんてないよ」

「そうっスそうっス、それが一番」

「だって私は、そこからあの人を引つ張り上げるために行くんだから」  
マスターとサーヴァント、主と従。形式程度のものでしかないとはいえ、それが契約だ。

その関係を前提にしている彼らでは、藤丸立香を救うことはできない。守ることはできる、障害も排除できる。しかし、救うことだけではないのだ。生者を救うのは、いつだって同じ今を生きている人間であるべきなのだから。

「……………あゝ、それは…僕らにはできないことっすねえ」

だから、納得してしまった。

「なら、急ぐっス。でないと、間に合わなくなるっスよ」

「うん」

「ただし、そこまで言ったからには責任……取ってもらおうっスからね」  
「取らせてくれるなら、喜んで」

「閃光」の二つ名に恥じない加速で遠ざかっていく背中を見送りながら、僅かばかりの杞憂が過るが…すぐに否定する。そんな段階は既に通り過ぎている。今は、資格のない子どもたちのお相手だ。

(でもそれは、一度同じところまで行くってことなんっスけど……あの子なら、できちやう気がするっスねえ。誰かの手を握る大切さも、握ってもらえる嬉しさも、きつとあの子はよく知っている…いやあ、僕とは大違いっス。いやはや、恋する乙女は無敵っスねえ)

「どちらも魔力・体力ともに限界は近かった。だからこそ、勝負は“数の利”という単純明快な理由で決した。

面白くもなんともない、陳腐でつまらない結末。

それでも、勝者には果たすべき責務がある。

現界を維持できなくなったサーヴァントたちに感謝を告げ、立香は

マシユと共に玉座の間のさらに奥に踏み込む。

やはり「ゆりかご」の機能は完全に落ちているらしく、もう改めて無人機が行く手を阻むことはない。

ただ、過去何度も経験したこととはいえ……世界を滅ぼすという行いは慣れるものではない。慣れたい、とも思わないが。

しかし、伴う責任の重さに膝が折れそうになるも、何とか奮い立たせて足を前へ前へと運ぶ。

「先輩、一度休まれた方が……」

「大丈夫、これが終わったらゆつくり休むから」

心配そうに見上げてくるマシユに精一杯の微笑みを向ける。自分が先輩で、彼女が後輩。立香がマスターで、マシユがサーヴァント。その関係性がある限り、立香は彼女の前では強がらなくてはならない。

せめて強がって見せなければ、マシユを不安にさせてしまう。それではもう、マスターとしても先輩としても、男としてすら失格だ。

——早く！ 速く!! もっと速く!!!

今頃、オリヴィエたちはどうしていることだろう。命までは取らずに済んだが、元々片や300年にわたって「ゆりかご」の一部であり、方や同じだけの時を生体ポッドで辛うじて永らえてきた身だ。どちらも、十分過ぎるほどに身体に負担を強いてきた。安静にしていたならまだしも、限界以上に力を振り絞りってはただではすむまい。きつと、三人の命は長くはない。ならせめて、最後の時は三人で心穏やかに過ごしてほしい。

この世界が、いかなる結末を迎えようとも……。ずっと頑張ってきた人たちだからこそ、最後までくらはは。

——装甲も削れるだけ削る！ 有りつ丈の魔力を、全部スピー

ドにー！

「つと」

「先輩ー！」

「動いてる……わけじゃないか」

「はい。おそらく、崩壊しようとしているのではないかと」

「あれだけ戦えば、無理もないか。なら、なおさら急いだ方が良い」  
崩れてきた壁を辛うじてかわし、降ってきたがれきはマシユが盾で防ぐ。とはいえ、だんだんと崩壊が進んでいつている。これは急がないと、生き埋めになる可能性も否定できない。

——避けてる暇なんてない！ まっすぐ！ 最短距離を！  
最速で！！

辿り着いたのは、奥まった場所にある何もない部屋。本当に家具をはじめとして何も無い、ただ一枚の身の丈ほどもある大きな「鏡」が一枚だけ鎮座した部屋。

だが、計器の類を見なくてもわかる。目の前のこれが、全ての中心だ。

銃を手に取り、銃口を向け、引き金に指をかける。

特殊な防御が施されているわけでもないらしい。ならば、マシユに頼らなくてもこれで事足りる。

立香の腕でもこれだけ大きなのなら、この距離で外すことはない。あとはただ、指先に力を込めるだけでいい。

——お願い、間に合って!!!

そうして、立香が引き金を引こうとしたその瞬間、目にも止まらぬ何かが傍らを駆け抜け、一条の閃光が「鏡」を両断した。

「……………フエイト」

そこにいたのは、真ソニックとも呼ばれる可能な限りの装甲を排した速度特化仕様のバリアジャケットに身を包んだフエイト。

しかし、美しい金髪は埃や流れる血に塗れ、本来の輝きからは程遠い。

細く引き締まった四肢は至る所から血を流している。見れば、肩やフトモモなどに瓦礫の破片が刺さっている。髪を汚す血も、瓦礫などによって割れた個所からの流血によるものだろう。

そして、荒い呼吸が物語っている。彼女が、防御や回避の一切を捨てて、ここまで駆け抜けてきたのだということが。

そんな痛々しい姿のまま、フエイトは何もない天井を仰ぐと噛み締めるようにつぶやいた。



「はあ、はあ、はあ……間に、合った。間に合った。今度こそ、間に合った」

「どうしてここに……いや、それよりなんでこんな」

疑問も、聞きたいことも山ほどある。だが、問い質す間もなく通信機がけたたましくアラームを鳴らす。

どうやら、中心であった「鏡」が破壊されたことで、世界があるべき姿に戻ろうとしているらしい。

通信機越しに、ゴールドルフが早急に帰還するよう叫んでいる。

分かっている。今は何を置いてもまずは帰還を優先すべきだ。

そうとわかった上で、それでもなお……立香は聞かずにはいられなかった。

「どうして、こんなことを……」

フェイトのすぐ後ろに立ち、自分でも要領を得ないと思う言葉が出た。

ゆつくりと振り向いたフェイトは目に一杯の涙を浮かべ、小刻みに……だんだんと強く体を震わせる。

自分が何をしたのか、その実感がようやく湧いてきたかのように。

「だって……」

何かを言おうとして溢れ出る嗚咽で言葉が詰まる。

それでも懸命に嗚咽を抑え込み、フェイトはたった一言を口にす  
る。

「これっ、以上は……本当に、立香が壊れちゃうよっ」

それだけ。ほんとうにただ、それだけだったのだ。

知らないはずなのに、気付いていた。ただ、その確信があった。

決して強い人ではない、心も、身体も……なのにあまりにも重い責任を背負って、そんな無理がいつまでも続くはずがない。とづくに限

界なんて超えていて、今まで立っていられたのが奇跡だったのだ。

そのことを、フェイトは立香以上に理解していた。

「……ごめんなさい」

「なんで謝るのさ。というか、謝るならやらなきゃよかったらうに……」

「それは、ダメ。呆れられても、怒られても、嫌われたって良い。それでも私は、君に笑っていてほしかった」

(ああ、俺……全然わかってなかったんだなあ)

フェイトが自分に好意を持っていることは知っていた。知っているつもりだった。

だが、そんなのは全然わかっていなかったのだとようやく思い知る。自分は、彼女の想いをまるで理解していなかった。どれほど純粋に、どれだけ強く、思ってくれていたのかを。

ぶつけるのではなく、求めるでもなく、望まぬ結果すら厭わないほどに相手を思う心。それが、フェイト・テストアロツサ・ハラオウンの恋の形だった。

「……怒ってる?」

「怒れないよ」

「じゃあ……呆れた?」

「まあ、少しは」

「……………やっぱり、嫌いになった?」

「……………できるわけ、ないだろ」

「……………よかった」

気が抜けたのか、身体から力が抜け寄り掛かるように倒れ込んでくる。

覚悟はしていても、やはり不安だったのだろう。

(……………ヤバいなあ)

抱き留めた身体は、初めてあった頃とは比べ物にならないくらいに大きくなったはずなのに、全然頼りなくて儂い印象を与えてくる。こんなにも細かい体で、ここまで駆け付けてくれた。

「笑っていてほしい」そのために、傷を負うことも恐れずに。

こんな、思いを拒み続けてきたでしょうもない奴のために……恋心一つ携えて。

(本当に、手放せなくなる……)

今までとは違った愛おしさがこみあげてきて、抑えられなくなりそうだ。

いや、あるいはどこかでわかつていたのかもしれない。いつか、彼女の手を離せなくなる日が来ることを。

だからこそ、何とかその手を取るまいとしてきたのかもしれない。

(それに……)

一つ気付いてしまえば、残りのことにも気が付かざるを得ない。

フェイトとよく似ているようで、また違った思いを向けてくれた娘のことを。

(ずっと、待っていてくれたのか)

暖かな眼差しを感じて目を向ければ、そこにはどこか安心した様子のマシユがいた。

きつと、彼女もフェイトとよく似た危惧を抱いていたのだろう。それでも、マシユは立香に代わろうとするのではなく、そつと傍らに寄り添い支える在り方を選んだ。それが、彼女の想いの形。

どれだけ不安でも、心配でも……決してその在り方を違えることなく。

分かっているつもりで、実は全然わかっていなかった。そのことに気付いてばかりだ。

(覚悟、決めないとな)

“恋”や“愛”をどこかで切り離していた。それを、強く強く結び直されてしまった。

ならばもう、諦めて……向き合うしかないではないか。

(ああ、とりあえずは“あのこと”を伝えないと)

正直気が重いどころの話ではないが、まずは自身の身体のことを伝えるべきだろう。それで二人の想いが揺らぐ……とは、もう考えない。その程度で揺らぐようなら、こうはなっていないなかつたはずなのだから。

ならば、その先のことも考えておくべきだろう。

(さしあたっては、どっちを選ぶか……だよなあ)

恋愛事是一对一で行うもの、という価値観で生きてきた身の上なので、二人同時にとか考えられない。

ただ、同時に自覚してしまったためにどうにも優劣がつけられない

い。とはいえ、二股なんてクズい真似などできるはずもない。振って泣かせるならまだしも、不誠実を働いて泣かせるとか最低だ。

年齢のことを考えるならマシユを選ぶべきなのだろうか……

(いまさら年を理由にするのは、見苦しいか)

散々それを言い訳にしてきたのだ。どのみち、年齢差が障害になる時間も残り少ない。

ここは、開き直って向き合うのが誠意というものだろう。

(まあそれも、戻ってから話だけど……)

「り、立香……？」

「？」

「腰、抜けちゃった……」

力なく笑うフェイトにつられて笑いながら、まだまだ軽いその身体を抱き上げる。あまり意味はないとはいえ、地道に鍛えてきた甲斐はあつたらしい。

抱え上げた身体はまだ震えていて、こんなものを背負わせてしまったことも含めて責任を取るべきなのか、それともむしろそれは失礼なのか、割と真剣に悩む立香であった。

その後、無事にシャドウ・ボーダーに戻り、さらにスペース・ボーダー、続いて元の世界へと帰還を果たした。アインスは数ヶ月後に意識を取り戻し、カルデアも今回の功績で反対勢力からの声も小さくなった。

善いことは多かったが、代わりにしばらくの間フェイトは体調を崩すことに。

当初は食事も喉を通らないほどだったが、無理もあるまい。

優しく繊細な彼女に、最終的なことは不確定とは言え、一つの世界宇宙とそこに生きるすべての生命、そしてすべての歴史を自分の手で消し去ったかもしれないという事実は、あまりにも重すぎた。

幸い、立香の手料理なら割と食べられたので、徐々に回復していくことに。

まあ、実母と義母から嫉妬されたり、頑張つてクオリティを挙げたら「もつとこう…食材の良さがばやけた感じで」と注文を付けられて

凹んだりもしたが。

何はともあれ、世界はまだまだ続いていく。

\* \* \* \* \*

“ゆりかご” 外縁部。

全てが終わり、なおも辛うじて命を繋いだオリヴィエたちはそこで三人肩を寄せ合って空を見上げていた。

「クラウド、空は……ちゃんと青いですか」

「ええ、間違いなく」

「リッド、そこにいますか？」

「はい。ここにいますよ、ヴィヴィ様」

呼びかければ返ってくる声に、知らず頬がほころぶ。たったそれだけのことが、こんなにも嬉しい。

「……彼らは、強かったですね」

「はい、本当に」

「味方の間は頼もしかったが、敵に回すと恐ろしい限りだ。オリヴィエはよく、一歩も退くことなく迎え撃てたものだ」

「ふふふ、そうですよ。私、実はこう見えて結構強いんです」

おどけて見せれば、「こら」と言つてクラウドが額を小突いてくる。かつてはお互いに立場もあつてこんな真似はできなかつたが、今となつては気にすることもない。

あの頃も、実はこうした戯れを試みたいと、密かに思っていた。遠い昔に置き去りにしたはずの夢が叶ったことには、感慨深いものがある。

どれほど望んだところで、叶うことなどないと思つていたのに……。

「凄いいですね、彼は」

「立香のこと、ですね」

「……そうだな。軽んじているつもりはなかつたんだが、敵対してはじめてわかつたよ」

藤丸立香の重要性を、彼らは理解していた。だからこそ、彼の存在がサーヴァントたちにとってのアキレス腱であることも。

故に、敵対した際には容赦なく彼を狙うつもりでいた。正々堂々など片腹痛い、明確な弱点があればそこを突くのが兵法というものだ。姑息でもなんでもない、むしろ戦う相手への敬意の現れだ。

もちろん、容易に立香を討てるとは思っていなかった。弱点であることは彼らの方がよくわかっている以上、全力で守ろうとするはず。むしろ、守るために動きが乱れることを期待していたという方が正しい。

しかし、蓋を開けてみれば……

「彼は、守られ慣れていた」

「うん。どうすれば味方が守りやすくなるか、どこにいれば邪魔にならないか……それを知り尽くしていた動きだったね、アレは。その場の思い付きやヒラメキなんかじゃない、正しく経験の賜物だ」

ただ漫然と立っているのではなく、守られることに甘んじるのではなく、自分にできる精一杯を彼は惜しまなかった。

近すぎれば足手まといになるし、離れすぎればいざという時に守れない。なにより、一瞬たりとも目を逸らさず機を伺っていた。疲弊していたとはいえ、それでも立香の動体視力では影を追うことすら困難だったろう。にもかかわらず、「できない」と諦めず、「無理だ」と投げ出さず、支援のタイミ<sup>サポート</sup>ングを計り続けていたのだ。確実に成功させるため、彼の命など容易く呑み込んでしまえる「暴力の嵐」に近づいて。

仲間全員の性格と能力を熟知する……だけでは足りない。加えて、仲間同士の関係性すらも把握し、なおかつ全幅の信頼を寄せてはじめて可能になる。彼がやっていたのは、そういうことだ。

その結果、あと一步というところで支援術式が致命の一撃を回避せしめ、強化術式によって防御は破られ、拘束術式<sup>ガウン</sup>が最後の一押しとなった。

最後の瞬間までできることを探し、目の前の現実から目を背けず、足を引っ張るまいと足掻き続けた。彼もまた、懸命に戦っていたの

だ。

(私たちでは、想像することもできない世界なのでしょうね)

儂く脆い身体で立ち向かう……卓越した力を持つが故に、三人には決して理解できない領域。

およそ、才気などまるで感じない男だった。リッドの言う通り、経験の賜物なのだろう。だがだとしたらそれは、いったいどれほどの量と密度の果てに至った境地なのか。

—— 恐るべき “破壊の渦” を前にしながらも前を見据え

—— 確実にサポートを成功させられる間合いの見極め

—— 邪魔にならない距離を保つべく考え続け

—— 刻一刻と変わる守るに易い場所に駆け

—— 仲間を助けるため、失敗を恐れず踏み出す

全て、彼が身体で覚えてきたことなのだろう。

何度も失敗して、何度も傷ついて、膨大な繰り返しの中それでも腐ることなく試行錯誤を続けてきた。そうして、この二人が敵対するまでその特別さに気付かないほど自然な立ち回りを、彼は身に付けたのだ。

少しだけ、二人が羨ましい。できれば自分も、彼を背に戦ってみたかった。それはきつと、とても誇らしかったに違いない。

「……………ごめんなさい。最後まで、二人を私の我が儘に……」

「はは、何をいまさら」

「ええ。それに、我が儘というなら僕たちも同じです」

オリヴィエの謝罪を笑い飛ばし、二人で間に座るオリヴィエの肩に手を添えて抱きしめる。

「ああ、やっとだ。やっと、君を取り戻すことができた」

「結局、僕たちはそれでよかったですよ。それだけで、良かったんです」

「だからもう、置いてどこかに行ってしまうなだけでくれと。言葉にしなくても伝わってきた。」

「……まったく、二人ともいくつになっても子どもなんですから」

「君と違って、300年の間ほとんど寝ていたからな」

「圧倒的に年下ですから、仕方ありません」

「もう！ 私だつて意識がなかったのは同じなんですからね」

失礼な物言いにプリプリ怒つて見せるが……すぐに笑いがこみあげてくる。

最後になつて思い返すのは、あの幸せだった四年間のこと。

「ああ、本当に……あの頃に戻つたようです」

「……」

「ねえ、クラウドス、リッド。

ありがとう、私を迎えに来てくれて。今だから言いますが、本当は「ゆりかご」になんて乗りたくなかった。「王様」なんてどうでもよかつたんです。私はただ、あの日々が少しでも長く続いてほしかつた。でも、それはどうやつても叶わなくて。ならせめて、二人やみんなが穏やかに生きられるように……ダメですね。

それで二人を悲しませることまで、全然考えが回っていなかったんですから」

あの時はそれが最良だと思つた。でも、本当にそうだったのだろうか。

いや、それすらももうどうでもいいことだ。今ここにある温もりこそが、己が人生のすべてだった。

「私は、幸せです。二人に囲まれて逝ける。誰がなんと言おうと、私は世界で一番幸せです」

ああでも、こんなことなら……目を潰してしまわなければよかつた。

そうすればきつと二人と空を見て、二人の顔を見ながら眠ることができたのに……それが、少しだけ……残念。



「終わらない日々」  
リンディ・ハラオウンの場合

——色々聞きたいことがあって来たんですけど……とりあえず一ついいですか？

ふふっ、何かしら？ 一つと言わず、何でも聞いてくれていいのだから……。

——さつき、エイミイさんはクロノさんをどこへ引きずっていったんですか？ なんとというかこう……すごく味のある顔をしてたんですけど。

ああ、そのこと？ ちよっとお友達のお店に遊びに行っただけよ。

——翠屋ですか？

とは別の、綺麗なオネエさんと遊べるお店♪

——（えっ……でも、カレルとリエラもいたよね？ そんなところに連れて行っていいのかな？）

大人になってから自分の世界を広げるのは難しいわ。どうせなら、小さいうちから多様な価値観に触れておいた方が良さなもの。例えば、ヴィヴィオがカルデアで経験したようにね。

それに今は営業前<sup>日中</sup>、お店の準備の邪魔にさえならなければ問題ないでしょう。なにより、気のいい人たちだから心配はいらないわ。

——は、はあ……まあ、リンディさんが良いって言うなら良い、のかな？ クロノさんくらいの立場の人ならそういうお店に行くこともあるのはわかるし……いやでも、普通奥さんと子ども連れで行くかな？ というか、なんでわざわざ海鳴のお店？ どういう接点なんですか？

立香君の紹介♪

——はい？

昔、まだカルデアが浮上する前に偶にバイトしてたことがあるのよ。

——……ウェイターとかでもやってたんですか？

そう言ったお店だと「ボーイ」や「マネージャー」かしら。そういうのもやってたらしいけれど、あのお店だと専らホール担当だったはず。

——？？？ 立香さん、男の人ですよね？ それなのにホールで何やるんですか？

一緒に食事をしたりお話したり、かしら？ 私もあまり詳しくないから、今度エイミイかクロノにでも聞いてみましょうか。

——まあ、機会があれば……。

それで、今日は何を聞きたかったの？

——と、そうでした！ 割と衝撃的なお話ですっかり忘れてましたけど、それはともかく。フェイトさんに立香さんのことでアドバイスしたのは、主にリンディさん、であってるんですよ。

一応そういうことになるかしら？ でも、割と色々な人が首を突っ込んだり口を挟んだりしてたわね。エイミイに桃子さん、忍さんも良く「相談に乗る」って口実で押しかけてたわ。アレは……楽しかったわねえ♪

——（なんか、アドバイスついでに揶揄われまくるフェイトさんが目に浮かぶ。苦労したんだろうなあ……）

だってあの子<sup>フェイト</sup>ったら、見ててすごく分かりやすいんですもの。

私たちが口にしたことをイメージして、赤くなったり赤くなったり、やっぱり赤くなったりして……。

——（赤くなつてばかりだ!? きつと、無茶ぶりに近いことも一杯言われたんだろうな……でも、照れたり恥かしたりするフェイトさんを見たい気持ちもよくわかる。凄くよくわかる。だって私も見たかった!）

あの子のことだから、たぶん提案したうち半分も実践できなかったと思うのよねえ。

まあ、私たちも悪ノリしたことは否定しないけど。忍さんなんて少女漫画や恋愛小説引っ張ってきて、それはもう楽しそうに焚きつけてたものよ。

——……ちなみに、どんなことを？



ともあり得ますよね。結果的にああになりましたけど、かなりリスクが高かったんじゃない……。

そうね。フェイトにも言ったことがあるわ。

「勝機があるとすれば、最低でも五年後から。その間決して気持ちを言葉にせず、アプローチを続けなさい」

「でも、それにはリスクが伴う。五年経った時、彼の隣にはもう別の人がいるかもしれない」

「今勝ちの目がほとんどない勝負をするか。それとも、可能性すらなくなっているかもしれない五年後に賭けるか」

「ってね。フェイトにとってのはどちらにしても苦しい決断だったと思う。」

「今ならまだ勝負が決まっていけない状態で思いを伝えられる。でも、結果はほぼ見えている。だから、告白するとしたら『自己満足』にしなければ。」

かと言って、五年後には勝負の場にすら立てないかもしれない。仮に立てたとしても、勝率は決して高くない。

それでもフェイトは、少しでも自分の思いが届く可能性に賭けたのよ。

「なるほど。フェイトさん、そんなに……。」

まあ、はじめのうちはかなり空回りすることも多かったんだけどね。

はやてさんに誘われて男湯に突撃……は、まだカルデアのことがある前だったかしら。あの子、変なところで羞恥心が薄いというか、性差とかの意識が曖昧だったから妙な大胆さを発揮してたのよ。

はやてさん関係なく立香君目当てで男湯にヒョイヒョイ入っていきものだから、相談されたことがあったのよね。

「相談？」

ええ。なんというか……目つきの怪しい人たちがいるから気を付けてほしい、って。

「あのお、それってまさか……。」

天然というか世間知らずというか、そんなところのある子だったか

ら周りの目に気付いてなかったのよ。

おかげで、おつかいの帰りとかにね。心配して立香君が気を配ってくれていてよかったわ。

まあ、バルドイツシユもついてるし、本当に危なくなったらなんとか出来たとは思うけど…真面目な子ですもの。ギリギリまで魔法は使わなかったでしょうし、場合によっては動転して冷静な対処ができなかった可能性も否定できない。いくら魔法があつて実戦経験もあつたとしても、異性…それも大人に乱暴に迫られるのは怖いものよ。

それは実戦とは違う恐怖ですもの。無事撃退できたとしても、トラウマになる可能性もある。

そういう意味でも、立香君には感謝しているわ。

——そんなことがあつたんですね…。

まあ、代わりに立香君が不審者扱いされて警察のお世話になりかかったりもしたけど。

——（不憫…）

間の悪いことに、恭也さんたちに誤解されたりもしたのよ。

フェイトが一生懸命とりなして誤解は解けたのだけど、しばらく黄昏でいたそうよ。

——（そりゃ小さな女の子狙いの不審者扱いされたらなあ…）

まあ、そんな紆余曲折の末、中学卒業も間近になった頃から立香君の認識も変わったみたいだね。

フェイトも随分と生き生きとするようになって、ほつとしたのも今となつてはいい思い出だわ。

——へえ…でも、ちよつと意外。立香さんのことだから、もつと早い段階で手を打ってきてきそうな気がするんですけど。

打ってきてたわね、フェイトが全力で潰してたけど。

——はい？

フェイトたちが中学に上がった頃だったかしら。立香君も、いい加減このままではいけない”と思ったのか、結構直接的な手に出てきてね。

——というところ？

「フェイトって俺のこと好きだよな」とか。もちろん、その後には断りの文句が続く前提だったんでしょね。

——うわっ、どストレート!? でも、普通自分からそういうこと言いますか？

立香君もかなり悩んだみたいよ、「自意識過剰みたいで嫌だけど……」って。

だけど、彼の立場からするとフェイトとの関係に区切りをつけるにはそうするしかなかったんでしょね。まずフェイトの気持ちが見えなくて、断ることもできないんですもの。

もちろん、フェイトを嫌ったり疎ましく思っていたりするわけじゃない。けれど、あの子の想いに答えることはできない。

ならせめて、早めに区切りをつけるべきなんじゃないか。

彼はフェイトの真剣さを理解していたわ。だからこそ、自分もまた本気で向き合おうとした。傷つけないわけではないし、どうせなら笑っていてほしい。でも、だからといって曖昧な態度をとるのは不誠実であり、お互いの……特にフェイトのためにならない。そういう、優しさと誠意の裏返し。

「相応しくない」とか「幸せにできない」なんて逃げ口上ではなく、「恋愛対象として見れない」という現実的な視点からのね。

——「相応しくない」とかは逃げなんですか？

逃げよ。だって、「相応しい」かどうかなんてだれが決めるというの。能力・年齢・性格・外見・経歴・家柄 e t c : : 人を評価する方法はいくらでもあるけど、最後に相応しいかどうかを決めるのは本人の価値観よ。

周りから見てそうは思えなくても、フェイトにとってもそうとは限らない。

幸せだって同じこと。自分にその自信がなくても、相手はただ傍にいられるだけで幸せかもしれない。なら、「幸せにできない」なんて決めつける資格は誰にもないわ。

相応しいかどうか、幸せかどうか、それを決めるのは本人だけ。外

野、それこそ相手が決めることですらない。

フェイトが相応しいと思えば相応しいのだし、幸せだと思えば幸せなのよ。もちろん、その逆も同じ。

立香君にとつてフェイトが相応しいかどうか、フェイトといることが幸せかどうかは彼が決めること。恋愛対象として見るかどうかも含めて、ね。一人の人間として向き合つて、それでも恋愛対象にできない。それがあの時点での立香君の見解だった。彼は、それをはつきりと伝えようとしてくれていた。

それが断りの言葉であつたとしても、そればまぎれもなく誠実な対応だつたと思う。

———そこまではつきりしてたのに、良くフェイトさん立香さんを攻略できましたね。

そうね。立香君もあまり詳しくは言つてなかつたけど一言、*“壁を壊された”*と言つていたわ。

———壁、ですか？

人はだれしも壁を持つものよ。どれほど親しい相手であつても、踏み込んでほしくない領域はある。それは決して不義理なことじゃない。誰もが持つ権利であり、お互いを尊重するための線引き。

本来なら、そこに無理矢理踏み込むのは褒められたことじゃないでしょう。でも、立香さんの場合はその限りじゃなかった。彼が背負うものを分かち合うにせよ、倒れそうになる彼を支えるにせよ、線の内側に入らなければならなかった。

フェイトがそれをわかつていたのかはわからないけど……きつと立香君はどこかで求めていたのでしょうね。倒れそうになる心と体を支えてくれる人を。

同時に、誰も踏み込ませないようにしていた。自分の事情に、巻き込みたくなかつたから。

———でも、それならマシユさんが……

マシユさんは立香さんの正規サーヴァントとして*“守る側”*であると同時に、後輩として*“支えられる側”*だつたんでしょうね。だからこそ、彼女に寄りかかるわけにはいかなかつた。





——うわあ……一難去ってまた一難。

これには流石にプレシアも頭を抱えていたわね。「我が娘ながら、なんて面倒臭い」って。

まあ、そのあたりは逆に開き直った立香君が、ね。フェイトが好意を自覚した後、特に中学に上がってからは控えていたけど、その頃には逆に昔以上に甘やかすようになって、スキンシップも増えたのよ。恥ずかしがったり照れたりするフェイトを時に強引に、時に遠回しに、いつそ大人げないくらいに色々やって絡めとってたわあ。アレ、フェイトの気持ちに伴ってなかつたら犯罪すれすれよねえ。

個人的には、彼は彼で誰かに知恵を借りてた気がするんだけど……この件に関してはお互い様かしら。

——は、はあ……あれ、そういえばプレシアさんと連絡とり合ってたんですか？

ん、一応そういう形になるのかしら？ 正確には、アルフを通して立香君のスケジュールなんかをある程度流してくれていたのよ。まあ、かなりの間プレシアのことは隠されていたけど。

——あ、だから立香さんと接点を持ち続けられたわけですね。ええ。少しずつ疎遠にしていこうとしていた時期もあったけど、情報清姫を流されたらそうはいかないわ。下手に嘘を吐くと怖い人もいるしね。

とはいえ、立香君も段々情報を流したり入れ知恵したりしている人がいることには気づいていたみたいだけど……相手が悪いわ。

——本気になられたら、ちよつと手に負えない人が多すぎますよね。

私たちだって手玉に取られたんですもの。無理もないというか、当然というか……。

——それって、初めてカルデアと接触した時の交渉のことですか？

それもあるけど、その後のことも含めてね。

——その後？

管理局とカルデアが額面上とはいえ対等な関係にある理由は知っ

てる？

——はい。シャドウ・ボーダー…というか、ゼロセイル虚数潜航でゲリラ戦されると困るからって。

それもちろんあるのだけど……たぶん、実際にはゲリラ戦にすらならないわ。

——どういうことですか？

管理局は公的機関ではあるけど、関連企業からの支援や有力者からの寄付をはじめ、その運営には様々な外部の手が入っている。そこを突かれたのよ。

——えっと……。

例えば、管理局関連のいくつかの企業の有力、または筆頭株主にギルガメツシユ王をはじめとした何名かのサーヴァントが名前を連ねているの。

他にも、直接管理局と取引はしていない、けど関係企業にとって重要な企業の資本を握られていたりとか、カルデアとは一見無関係に見える有力者を経済的・情報的に影響下に置いていたりとかね。

万が一カルデアとの関係が悪化すれば、管理局体制が破綻する……とまでは言わないけど、まったく関係ないところから大きく揺さぶられるのは想像に難くないでしょう。管理局にとってカルデアは、勝手に解体するその日まで極力手を出したくない存在なのよ。

——なんでまた、そんなことに？

サーヴァントの戦力に惑わされた、その一言に尽きるわ。

戦闘可能なサーヴァントであれば、その戦力は最低でもAA以上。トップサーヴァントともなれば、オーバースですら厳しい相手よ。

———そういえば、この前の「お祭り」でシグナムさんとカルナさんが戦ってましたけど、惜しいところまでは行っただけで勝てませんでしたもんね。

あの二人の場合、噛み合い過ぎる…というのもあるでしょうね。近接戦のスペシャリストでありながら遠距離攻撃もできて、炎熱を得意とし、飛行もできる。スピードならシグナムに若干分があるのだけど、何しろ硬すぎるわ。直撃しない限り、紫電一閃でもほとんどダ

メージを負わないほどですもの。

——火力もいい勝負ですしね。ファルケンと梵天よ、ブラフマーストラ・クンダーラ我を呪えがどっこいくらいでしたっけ。

カルナさん一人に魔力供給を絞れば、その限りではないらしいけど……互角に戦えているだけじゃ、ダメージ量の差からギリ貧になるわ。

加えて、彼の最大火力は梵天よ、ブラフマーストラ・クンダーラ我を呪えじゃないのよね。

——日輪よ、ヴァサヴィ・シヤクテイ死に随え、ですか。あれ、槍が顕現した時点でもう溶鉱炉を通り越して人型の太陽みたいになつてますし……人間が対抗できる火力じゃないと思うんです。

あの一撃を凌ぎさえすれば、鎧のない彼に直接攻撃できるのだけど……。

——アギトとユニゾンして、なおかつ防御を捨てた特攻でようやく僅かに届く……ですからね。かと言って、守りに徹すればまとめて飲み込まれちゃいますし……。

ユニゾンした状態なら優勢に進められるけど、それも決定打に欠ける。結果、最終的には日輪よ、ヴァサヴィ・シヤクテイ死に随えとの打ち合いになっちゃうのよね。まあ、その優勢もスーパーカーなさん“燃える三神の衣”を使われたら覆されてしまうのだけど。

彼に限らず、騎士王の聖剣、英雄王の宝物庫、征服王の軍勢etc……どれも手に負えない代物ばかりですもの。

そう言った“単純に強力な戦力”に目が行き過ぎて、搦め手の存在に気づけなかったのが痛いわ。

クレオパトラさんをはじめ経済や商売に強い人たちに企業や経済の重要な部分を抑えられ、マタ・ハリさんたち諜報活動に優れていたり変身能力があったりする人たちの暗躍に気付くのが遅れてしまったのよね。

——でも、百貌さんたちのことは知ってたんですよ？

ええ、だから警戒はしていたの。ただ、暗殺や破壊工作、機密エリアへの侵入を主にね。

まさか、ハニートランプの達人とでもいうべきスパイとか、性別を

自由に変えられる人がいるなんて思わなくて……カルデアはカルデアで積極的に“戦力”をアピールしてくるし、並行して暗殺や破壊活動向きの人たちのことは小出しにして注意を逸らされちゃったのよ。

——なるほど。それで気付いた時には、経済面と情報面でマウントとられていた、と。まあ確かに、サーヴァントとどうか英霊の性質を聞くと、そういう方面に強い人がいるって気付きにくいですねえ。

だけど、気付くヒントはあったわ。作家系サーヴァントをはじめとした、文化面に貢献した英霊たち。彼らのようなタイプがいる以上、戦闘とは直接関係しない逸話を持つ人たちがいる可能性がある。そのことをもつと掘り下げて考えれば、あるいは気付けたかもしれないのに……。

本当に、相手がカルデアでよかつたわ。もつと敵対的な組織だったらどうなっていたことか……。

——と、とりあえずですね！ 私としては、立香さんの海鳴時代の話が聞きたいなああって！ 色々アルバイトしてたつて聞いているんですが、どんなことしてたんですか？

ああ……じゃあ、ちようどいいし、さっきの話の続きでもしましうか。

——さっきの話？

クロノたちが行った場所について、ね♪

\* \* \* \* \*

「……………ヤバいな」

ちよつと今までにない危機的状况に、流石の彼も手が震える。

猶予は少ない。明日までに何とか状況を打破しないと、いよいよもって大変なことになる。

打てる手は少ない。選択肢を選び好みしている場合ではない。くだらないプライドは質屋にでも出してやりたいところだが、それでは一文にもなりはしない。

ならばどうするか？

やることは一つ。プライドを捨て、手段を択ばず、最善と思う手を打つしかない。

たとえそれが禁断の、最後の手段だったとしても。

「俺には！ どうしても！ 金が必要なんだ！」

そうして彼「藤丸立香」は、禁忌の領域に踏み込む決意をした。

闇の書事件終結から数ヶ月。

ロストログア「ジュエルシード」に端を発するP・T事件。それから一年と経たないうちに起こったロストログア「夜天の書」にまつわる闇の書事件。

管理外世界の、それも極限られた地域で立て続けにロストログア関連の事件が発生したことから、時空管理局は第97管理外世界をある種の「特異点」と認定。東京に臨時の管理局支局を設けることを決定した。

とはいえ、該当世界が管理局の手の及ばない管理外世界。公的機関である以上、非合法な手段に出るわけにもいかない。となれば、当然対応を決めたからと言って即座に実施できるわけでもない。

交通の便をはじめとしたその他諸々の条件を加味した上で、臨時支局を置く地域を選定。その中から運営するにあたって不都合のない広さや周辺環境を備えた物件を見つけ、怪しまれないようカモフラージュするための設定やバックボーンを整えた上で不動産業者と契約。当然、契約金や月々の賃貸料を払うために口座を設けなければならぬ。また、必要な設備を運び込むために管理局内部との打ち合わせも必須。また、全て管理局側から持ち込んでしまうと不自然に思われる可能性があるので、机や椅子をはじめとした地球でも揃えられる物品は極力現地調達が望ましい。さらに、臨時支局に配属される局員の生活環境も整えなければならず、やることは山積みだ。

加えて、時間的な猶予はあまりない。何しろ、またぞろロストログア関連の事件が発生するかもしれないという危惧があるからこそ、臨時支局設置の決定なのである。可能な限り迅速に準備を整えて臨

時支局を稼働させなければならぬ。

そんなわけで、極めて平和的ながらも多忙の極みと言っている状況に立たされているのが、少し前まで「アースラチーム」と呼ばれていたリンデイ・ハラオウンの部下たちである。

臨時支局が設けられる要因となった事件の双方において中心的な役割を担った部隊であり、土地勘や現地の文化などにも通じていることから、この采配は当然のものだろう。ハラオウン家の個人的な都合としても、養子縁組が決まった「フェイト・テストロツサ・ハラオウン（予定）」のために、地球に生活基盤を置けるのはありがたい。

そのために多少職権濫用したり個人的なコネを駆使したりもしたが、誰の迷惑になることでもないので問題はあまい。というより、誰も好き好んで管理外世界という（管理世界基準での）僻地に行きたがりはないのだ。人員選抜の労力が減った分、運用部のレティ提督などからは感謝されたくらいである。

とはいえ、限られた時間の中でやらなければならないことが多すぎる。当然、正式稼働して業務が落ち着くまでの間は、碌に休みも取れないくせに遅くまで走り回らなければならず、それこそ「ブラック」の誹りを免れないだろう。

そんな過酷な労働環境の中、なんとか本日の予定を消化し終えた執務官補佐「エイミィ・リミアッタ」は、ハラオウン家が入居しているマンション最寄りの「海鳴駅」に到着した。

「うわあ、もうこんな時間かあ……終電に間に合ったのは良かったけど、フェイトちゃんもう寝てるだろうなあ」

広々としたマンションの一室を借りたはいいものの、部屋が余っていることから同居させてもらっているエイミィだが、ここのところ妹的存在のフェイトとほとんど話もできていない現状には申し訳なさが見える。

理由なんてそれこそいくらでもあるものの、だからと言って「家族」を蔑ろにするなど言語道断。特にそれが、人一倍「家族」というものに恵まれなかった少女となればなおのこと。しかも、アースラチームの事実上のナンバー3であるエイミィでこの忙しさなのだか

ら、トップと二番手である母（予定）と（次期）兄はさらに上に行く。それこそ、数日にわたって帰ってこれられないこともあるくらいだ。実際、エイミイの直属の上司であるクロノはここ数日出張で家を留守にしているし、今日はリンディも帰ってこれないだろう。

フェイトは頭が良く、周りのことにもよく気が付き、滅多に我を通そうとしない控えめな少女だ。家族の事情を理解しているからこそ、寂しさなどおくびにも出さずに三人を送り出してくれている。

だが、それを額面通りに受け取ってはいけないことはエイミイをはじめ、家族全員が理解していること。本当は寂しくても、一緒にいてほしくても、あの子はそれを胸の内に秘めて抑え込んでしまう。困らせてはいけない、迷惑をかけてはいけない。今でも十分、自分は幸せなのだから、と。

（昔のプレシアも、こんな気持ちだったのかなあ……）

仕事の忙しさから家族との時間を捻出することもできない中、“この仕事さえ終われば”と今は亡きプレシア・テストアロツサは愛娘“アリシア”との時間を夢見て心身をすり減らしながら懸命に働いたという。

その先に待っていたのは、あまりにも救いのない結末だった。愛する者を、心の支えを失ってしまったこともそうだが、大切な存在に“何もしてやれなかった”後悔が、最後の一押しになってしまったのではないだろうか。そう、今は強く思う。

彼女が道を踏み外してしまった気持ちがわかるとは言わないが、少しでもだけ共感してしまうくらいには。

せめてもの救いは、フェイトの寂しさを埋めてくれる存在がいてくれることだろうか。

「確か今日は……なのはちゃんのお家にお呼ばれしてたんだっけ。そのまま泊めてもらってもよかったのに……」

学校から帰ってからなのは、最近でははやても含めた三人で魔法の練習をするのが彼女たちの日課だ。その流れで夕食を一緒に……となることも多く、リンディたちが多忙を極める中では本当にありがたい限りである。

しかし、フェイトがそのまま高町家や八神家で泊まることは滅多にない。両家は快く提案してくれているのだが、彼女は家族が帰ってくる家で待つことを強く望んでいる。その理由がわかるだけに、誰もが強く勧めることができないのは無理からぬことだろう。

アルフがいるので、一人孤独に……とならないのは貴重な安心材料ではある。

「立香さんなら……もしかしたら泊めさせることもできちゃうのかもしれないけど、流石にねえ」

おおよそ、フェイトを甘やかすことにかけては右に出るものがない彼なら、最終的には丸め込んで泊まらせることもできるかもしれない。とはいえ、字面もあれだし、なにより世間の目とか色々考えると相手にも悪いだろう。

というか、彼は彼で割と頻繁に家を空けているので、あまり頼り過ぎるわけにもいかない。どこに行っているのか杳として足取りが追えないのが不安ではあるが、悪事を働いている風でもない。むしろ、それならもつとうまくやるだろう。立香の場合、カモフラージュもほとんどされていらないだけに、いくら足取りを完全に消しているとはいえ、不自然すぎて悪手とすら言えるレベルだ。

(というか、悪さとかできる人には見えないんだよねえ……)

根の善良さがにじみ出ているというか、よほど追い詰められない限り彼が悪事に手を染めることはありえないだろう。それこそ、生活が困窮して立ちいかなくなる……とかでもない。少なくとも、楽をするために他者を貶めるような人ではないことだけは、エイミィに限らずリンディからのお墨付きだ。

とはいえ、やはりどこで何をしているのか気にならないと言えど嘘になる。彼自身にそのつもりがなくても、騙されたり利用されたり、という可能性はなくもない。

今は忙しいので無理だが、いずれ業務が落ち着いたら合間を見て……いやしかし、地球のアレコレに管理局員が首を突っ込むのも好ましくないわけで……。

「そういえば、しばらく留守にしているんだよね。いったいどこで何を



しているのやら、やっぱり探した方が良いかな。フェイトちゃんを寂しがらせるのは私たちも人のことは言えないけど、心配かけさせるのは……ってあれば、クロノ君?」

管理局員としての規範と妹を心配する姉の心境の狭間で葛藤していると、少し先の横断歩道の手前で律儀に信号が変わるのを待つように見知った小柄な人影を発見する。

「やつほ、クロノ君も今帰り?」

「エイミイ、君も遅くまでお疲れ」

「いやいや、クロノ君ほどじゃないよ。海外出張ご苦労様」

そう、クロノは5日ほど前から遠く英国まで出張していたのだ。

「それで、何か問題は?」

「毎日報告は挙げてるでしょ。なにも問題ありませんとも、強いて言えばクロノ君がいない分のしわ寄せくらい?」

「それについてはすまなかったと思ってるよ。でも、どうしても今のごたごたに紛れて済ませておかなければならなかったんだ」

「わかってるって。むしろ、後ろ髪引かれる君を送り出した側ですし? ま、今度翠屋で奢ってくればチャラにしてあげてもよい」

「……一応聞くが、仕事での埋め合わせは?」

「あく今日もつつかれたあ、こんな遅くまで働き詰めで珠のお肌がロボロボだよ」

「わかったわかった。ケーキでもシュークリームでもなんでも奢るよ」

「やた♪ で、どうだった?」

それまでのどこか軽い雰囲気を一変させ、真剣な表情を浮かべるエイミイ。クロノも周囲に人がいないのを確認した上で、ゆっくりと口を開く。

「……結論から言えば、言質は取れなかった。でも、確約はもらえだよ。提督の人脈や情報網、抱えている重要情報は僕らに引き継がせてくれる」

「事実上の肯定、か。……大丈夫?」

「覚悟して会って来たんだ、当然だよ。まあ、それでも……間違いで



依頼の出所がグレアムであることに気付くことはできなかつたはずだ。彼なら証拠は元より、痕跡すら完全に隠蔽することもできただろう。なのにそれをせず、多少時間はかかったものの、クロノは証拠こそつかめなかつたが確信と共に彼に行きついた。そして、グレアムの休暇に合わせて管理局を介さず接触したのである。

アポも取らずに訪問したかつての教え子に、グレアムは言ったのだ「及第点だ」と。彼はクロノたちの思惑も、彼がいずれ自分にたどり着くこともすべて見越していたのだろう。正確には、そのための試験だったのだろうが。

元々、グレアムの局員人生はもうそう長くはない。伝説の三提督の様に名誉職に就くという選択肢もなくはないが、その場合どうしても影響力は薄まってしまう。どのような道を選ぶにせよ、「管理局員」ギル・グレアムの人生は間もなく終わる。

そうなる前に、彼は闇の書の悲劇の連鎖に終止符を打とうとした。元々は自らの手でやるつもりだったが、古い知己であり、派閥の暗部とも深いかわりの男のたつての願いもあり、自身は後詰に回り実行役を彼の息子に託すことにした。

件の少年は、直接の面識こそなかったが後見人を務める少女に近い立ち位置の存在だった。そんな少年の未来に必要なならばと任せられた結果は……いや、過程も含めて彼の予想を大きく覆すものだった。少年が哀れな少女を救うために自らのすべてを投げ打つこともそうだが、なによりも最終的に一人の犠牲者も出すことなく解決したことが。

あるいは、その時から彼は決めていたのだろう。自分のすべてを、後続く世代に託すことを。

だからこそ、罪を告白することをしない。それをすれば、託すものが弱体化してしまうから。

「……僕にはまだ力が足りない。もつと上、地位を手に入れなければ託されたものを十全には使えない。だからしばらくは、申し訳ないが母さんに派閥の顔を務めてもらうことになる」

「……ことは、当初の予定通りだね」

「……いや、違う」

「違うって、なにが？」

「僕が引き継ぐのは表の人脈と情報網だけだ。裏の…『暗部』と呼ぶべきものはない」

「え、でもそれじゃ……」

「そちらは士郎が受け持つ」

「どういうこと？」

「僕よりアイツの方が少しだけ早かった、そういうことだ」

依頼の出所を知らなかったという意味では彼も同じだったが、そういったことには一日の長があったのだろう。

クロノに先んじて、未だ解かれていない管理局の監視の目をかいくぐって彼はグレアムに接触していたらしい。

元々、クロノは性格的に暗躍や陰謀に向いていない。士郎も別に向いているとは言い難いが、『必要なら手段を択ばない』ことができる人物でもある。少なくとも、クロノよりよほど向いているだろう。

それを見抜いていたからこそ、グレアムはクロノに表の権力を、士郎に裏のコネを託すことにした。一人一人は一人前とは言い難くとも、二人で分担すれば……と、そういうことだ。なにより、二人の目的と利害は一致している。

「つまり、クロノ君がそれなりの地位につくまでのうちの派閥は『看板』リンデイさん、『実務』クロノ君、『裏方』士郎君の三役体制になるわけか」

「まあ、そういうことだ。まったくアイツ、いつの間に……」

先手を打たれたことが悔しいのか、まだ何やらぶつくさ言っているクロノ。早熟ではあるが、彼もまだ十代半ばの少年だ、エイミイとしてはその姿にはむしろ微笑ましさを覚える。

裏方や汚れ役は士郎が担うとはいえ、それを『当たり前』と思えるクロノではないし、思えるようになりたいとも思わないだろう。きつとこれから、慣れない派閥での折衝や勢力拡大、手回しや根回しに四苦八苦することになる。何より、士郎に色々と押し付けることに苦しむのだろう。ならば、それをフォローして支えてやるのが副官の務めではないか。

ちなみに、派閥色が強くなっていくことから様々な企業や組織、名家との接点も増えていくことに。

おかげで、見合い話やらパーティへの正体やらが大幅に増えることになる。仕方がないとは思うのだが、世界によつては舞踏会や社交界のような場もあったりするわけで……。士官学校や訓練校では当然習うことのないダンスや作法に四苦八苦することになり、王族系サーヴァントに色々習うことになるハラオウン家なのであった。

「ほくら、難しい顔はそこまでそこまで！今夜は無理でも、朝にはフェイトちゃんに会えるだろうし気持ちを切り替えないと！」

「日付は変わったとはいえ、朝までまだ大分あるぞ」

「それでも、だよ」

「……はあ、分かった。文句については、次士郎に会った時に言うことにする……つて、どこへ行くんだ？」

クロノの数歩先を行くエイミイだったが、突如方向転換して路地の方へと足を向ける。

「あれ、知らない？ こつちからの方が近道なんだけど……」

「そうなのか？ いやだが、そつちはその……繁華街だろ？」

「そうだね」

「……夜中の女性の一人歩きもそうだが、繁華街を抜けるといふのはどうなんだ？」

「もうクロノ君は心配性だなあ。海鳴……というか、地球のこの辺りは治安もいいし、そもそも私だって局員の端くれだよ？ 最近は美由紀ちゃんに護身術も習ってるし大丈夫大丈夫♪」

「だが、この間もフェイトが不審者に狙われたというし……」

「まあ、フェイトちゃんはちよつと有り得ないくらい的美少女だし、そのくせ無防備すぎるところがあるからねえ。早めに一般常識とか対処法とか覚えてもらった方が良いのは確かかなあ」

「君だってそう悪くはないだろ」

「おや？ おやおやおやおや？ もしやクロノ君つてば、エイミイさんみたいな人が好みなのかなあ？」

「口を開いた途端に色々台無しだが」

「もう！ 素直に褒められないのかね、きみい！ かわいくないぞお  
く！」

「可愛くなくて結構だよ」

そのまま「いざって時は守ってくれるでしょ」「非戦闘員を守るのは義務だからね」などと掛け合いを続けながら、結局そのまま路地を通る二人。

そろそろ日付を跨ぐとはいえ、繁華街はまだまだ賑わっている。二人ともどう見ても未成年なので、流石に客引きに捕まったりすることはないのがせめてもの救いか。

万が一があっても対処できる自信はあるが、余計なトラブルに引つかからないに越したことはない。足早に路地を通り抜け、また次の路地へ。そんなことを繰り返していると、唐突に壁がせり出した：いや、路地に面した扉が開かれた。

「おつとと……」

「大丈夫か？」

「うん、ギリギリセーフ」

「あ、すみませ、ん？」

危ういところで足を止めたエイミイたちに気づき、扉の向こうから姿を現した人物が頭を下げる。手には、パンパンになった大きなビニール袋。おそらく、溜まったゴミを捨てに来たのだろう。

暗いのでわかりづらいが、長い黒髪に赤いイブニングドレスで着飾ったその人は女性としてはかなり背が高い。170半ばから180くらいはありそうだ。年齢の割に背が低いことが悩みの種のクロノとしては、ちよつとばかり羨ましくもある……。のだが、どうしてこの女性は二人の顔を見るなりそっぽを向いてしまったのか。

「……もしや、クロノ君みたいな子が好んで照れてるとかあ？ 良かったねクロノ君、せっかくだからお姉さんに遊んでもらったら？」

「何を言っているんだ。ほら、さっさと行くぞ。明日も早いんだ」

「はくいい……っによわ!？」

「エイミイ!？」

奇天烈な叫び声と共に、何かに足を取られて転ぶエイミイ。その勢

いそのまま女性が持つゴミ袋に思い切りダイブ。

幸い人身事故にはならなかったが、代わりにごみ袋の中身がぶちまけられてしまい路地裏は散々な有様に。エイミー自身、頭からごみを被る形になってしまっている。

「えっと、大丈夫?」

「あ、大丈夫です。特に怪我とかはなさそうなので」

「疲れているんじゃないか? 早く帰って休んだ方が……」

「とりあえず、これどうぞ」

「あ、すみません」

顔やら服やらに、何かの汁……多分油や飲食物の残りが掛かってしまっている。量が少ないのが救いだが、それでも気持ち悪いことに変わりはない。エイミーは差し出されたハンカチを有難く受け取り、パツと顔や服を拭うと、深々と頭を下げた。

「ご迷惑をおかけしました。これはちゃんと洗ってお返ししますので……」

「あ、いえ、お気になさらず。そのまま処分してください結構です。それじゃ、お…私は仕事があるのでこれで!」

何やら早口にまくし立ててその場を後にしようとする女性。しかし、よくよく聞いてみると随分とハスキーだ。

というか、妙に聞き覚えのあるような……そう思っただけでチラッと見上げると、今まであまり注視していなかった女性の横顔が見えた。そしてその横顔が、知り合いととてもとてもよく似ていることに気付き、思わずポロつと……

「……立香さん?」

(ビクッ!?)

「は? 何を言ってるんだ、エイミー。こんなところに立香さんがいるわけないだろ。というか、相手は女性だぞ。流石に失礼じゃないか。すみません、どうも連れが知り合いと見間違えたというか、なんというか……」

丁重に頭を下げるクロノだが、その間もエイミーはジッと女性の背中に視線を注ぐ。

まじまじと見て気付いたが、背丈だけではなく肩幅も女性にしては  
ずいぶんと広い。というか、シヨールを巻いて誤魔化しているが、む  
しろがっしりしていることに気付く。

「ごめんなさい。ちよつとこつち向いてもらっていいですか？」

「わ、私、急いでいるので……」

「そういうばさつき、俺”って言おうとしませんでした？」

「き、聞き間違いじゃないですかねえ？」

「じゃあ、お”なんて言おうとしたんですか？　というか、ちゃんと  
こつち見て下さい」

「お、お、お……オレンジジュースって言おうとしたんですよ」

「無理がありますよね。というか、裏声にしてもわかりますから、良  
い加減こつちを向いてください！」

そう、懸命に声を誤魔化しているが、元の声音を誤魔化せるほどで  
はないので会話しているうちに確信は得ていた。この女性……もとい、  
人物は間違いなく……クロノも、さすがにもう気付いているらしい。

「……何やってるんですか、立香さん」

いつの間にか正面に回ったクロノにとどめを刺された。彼の目に  
は、ウィッグに加えて化粧を施しているので大分印象が変わっている  
が、間違いなく藤丸立香の顔が映っていた。

妹分にとつて色々と重要な意味を持つ男性が、どうしてこんなとこ  
ろで女装しているのか。色々と聞きたいことだらけであった。

「もしかして、女装が趣味とか？」

「断じて違うから!!」

「では、何をしているんですか？」

「うぐっ、それは……」

「とりあえず、この件をフェイトちゃんに……」

「それはやめて！　ホントに!!　マジで!!」

割と本気の涙目になりながら懇願してくる立香。そりやまあ、本当  
にそういった趣味があるならともかく、そうでないのに女装趣味と思  
われるのは勘弁してほしいだろう。ましてやそれが、まだ十歳にもな  
らない女の子からともなればなおさらに。



「それなら、どういうことなのかちゃんと説明を……」

「リツカちゃん？ 何かトラブルかしらん？」

「て、店長!? これは……」

「もお、アタシのことはママって呼んでって言うてるでしょおくん♡」

「ぶほっ!?!」

中々戻らない立香を心配したのか、彼が出てきた扉からさらに人影。

ただし、デカイ。

立香よりさらに頭二つ分くらいは高い身長、おそらく2m近い。加えて肩幅は広く、エイミイのウエストほどもありそうな丸太の如く太い四肢。加えて、黒いドレスを引き裂かんばかりに分厚く張り詰めた筋肉が押し上げている。見上げた顔は良く言えば堀が深く、悪く言えばとてつもなく濃い。いつそ劇画ちつくですらある。

と、ここまですとインパクト極大の精神破壊兵器なのだが……よく見るとそればかりではないことにも気づく。

例えば、纏っているドレス。強すぎる肉体のインパクトに圧倒されてしまっているが、胸元や背中が大胆に露出し、ふっかいスリットまで入っていないながらも、下品さを感じさせない瀟洒なデザインは見事の一言。

さらに、染めたとは思えない見事なキューティクルを備えた長い金髪は、世の女性たちが羨むこと請け合いの美髪の実現。ネオンの光を受けキラキラと輝きを放ち、頭上に天使の輪すら幻視してしまいそうなほどだ。

付け加えるなら、手入れの行き届いた爪にはさりげないながらもまさにアートと呼べる装飾が施され、破壊的な顔面圧に飲まれているものの施されたメイクは一流の仕事。その上、胸元や耳などにあしらわれたシンプルながらも品の良いアクセサリーがひっそりと装飾者を主役として引き立てている。

もしこれで中身が並み以上であったなら、間違いなく性別を問わず周囲の耳目を集めること確実だ。

まあ、その中身がすべて台無しにしてしまっているわけだが。というか、この格好でカイゼル髭はないだろう。

「あらくん？ この子たちは？ 二人ともとってもかわゆいじゃない♪」

「えっと、その……」

「あ、みなまで言わなくてもわかったわん♪ リツカちゃんのお友達ねん♡ せっかくだし、ちよっとお話してたらどうかしらん？」

「いや、でも、二人とも未成年……」

「やくねくん♪ 別にお酒飲まそうってわけじゃないのよくん♪ それこそ、席代は口ハでいいわくん♡ ほら、こういうお仕事でしょ？ 誤解されやすいし、それでお友達との関係をギクシャクさせちゃったら悪いじゃない♪ だ・か・ら♡ 休憩がてら、少し話を聞いてもらったらどうかなって♪ 大丈夫、誓って不埒な真似はしないわん♡」

野太い声でクネクネとシナを作りながら、間延びしてたり「わくん」とか「よくん」とかついたりする喋り方には、名状し難い圧迫感がある……が、言っていること自体は常識的だった。

「……まあ、店長もこう言ってくれてるし「ママって呼んでってばくん♪」はいはい。ちよつとだけ付き合ってもらってもいい？ あ、悪い人じゃないのはホント、そこは安心してくれていいよ。インパクト強いけど」

「やくん♪ これは日々の弛まぬ探求の結果よくん♡ 女性の美たおやかさと男性の美たくましさの融合こそ至高の美！ 男と女の境界を越えた美しさ、それが私の求めるものなのよくん♪」

「は、はあ……」

色々圧倒されて、そんな返事しか返せない二人であった。

そうして裏口から通されたのは、人目に付きにくい奥まった一角。二人の年齢などに配慮してくれたのだろう。それは純粹にありがたい。

ただ、配慮するというのなら、もっと別の方向に気を配ってほしかったというのがクロノの偽らざる本音だった。

なにしろ、右を見ても、左を見ても、行き交うのは煌びやかに着飾った見目麗しかったりゴツくしかったりするオネエさま(男)方ばかり。センスの良いBGMと味わい深いレトロな調度品が落ち着いた空間を演出しているが、木霊すのは妙に野太い女性口調。偶に、ドスの利いた怒号が聞こえる気もしないでもない。

ガワに対する拘りには一切の妥協がないのに、どうして中身はこの有様なのか。いや、女性と見紛うような人もいることにはいる。例えば、ちやうど今日の前で訥々と話してくれている顔見知りとか、似合い過ぎてちよつと怖い。ただ、それを除外したとしても、あまりのギャップにめまいを通り越して気絶してしまいそうだった。

とはいえ、ここまで来てしまったからには腹を括らねばなるまい。可愛い妹(予定)の為にも、ちよつとどういふことなのか明らかにしておかなければならないところでもある。

と思つて事情を聴いてみれば、その事情とやらは実にありふれたものだった。

「……つまり、お金に困つてこんなことを？」

「うん。その言い方だと罪でも犯したみたいに聞こえるから、表現には気を付けてほしい。言つてゐることはあつてゐるけど」

心外だ、とばかりに顔をしかめる立香。決して女顔というわけではないし、絶世の美形というわけでもないのだが……メイク次第でここまで化けるのかと、割と純粹に驚かされる。正直、勘の良いエイミイが気付かなければ、クロノなど既視感を覚えただけで普通に女性と思つていたかもしれない。それ位には、今の藤丸立香は見事なまでに変身していた。

若干、そういつた振る舞いに慣れを感じさせるのが、ますます「そういう趣味があるんじゃないか」疑惑を助長するが。

「バイトはどうしたんですか？」

「いや、それが……ここのところちよつとゴタゴタしてて」

「それで家賃の支払い期日間際でありながら、お金を用意できなかつた」と

「……うん」

見かける時は割とマメに勤労に励んでいる印象があるので、遊び惚けていたという可能性は考慮しない。プライバシーにかかわるかもしれないのであえて踏み込みはしないが、彼がそう言う以上は本当に已むに已まれぬ事情があったのだらうと納得する。実際、本来の所属先の方で「二千年続き、世界統一と永久の太平を実現した『秦』」という『世界』<sup>可能性</sup>を滅ぼすべく、仙術サイバネティクスの粹を集めた中華ロボや己一人を『人』とする皇帝、挙句の果てに『受肉した精霊』などという規格外と、何度目かになる世界の命運を賭けた戦いに臨んでいたのだ。しかも、毒を盛られてタイムリミットが迫っており、加えてある観点でなら『理想的』とも言える世界を滅ぼさなければならなかった。その精神的負荷は、それまでに滅ぼした二つの『世界』<sup>可能性</sup>を上回るだろう。そりゃ、バイトなんかしている暇がなかったのも当然だ。

いや、そもそも異聞帯攻略中は海鳴には全く来ていなかったのだから以前の問題なのだが。

とはいえ、もちろんこんな事情など話せるわけもなし。

しかしそうなると、深入りしてこないとはいえクロノからの印象は良くない。彼から見れば、勉強に勤しむわけではなく、かといって定職就こうと努力するわけでもなく、その日暮らしをしながら割としよつちゆう行方をくらましているのだ。

(う〜ん……客観的に見ると、我ながらどうしようもないダメ人間っぷり。保護者として、クロノが渋い顔をするのも当然だよ。むしろ、フエイトもよく愛想をつかさないよなあ。というか、良く関わるのを認めてくれてるよ)

「でも、なんでまた『オネエBar』なんです?」

ちよつと本気で凹みそうになっているところに、エイミイの問いで気持ちを持ち直す。

「いや、家賃の期日までホントに時間がなくてさ。店長なら『ママって言うてるの〜!!』……」

(この喧騒の中でよく聞こえるな)

(すごい地獄耳……)

「……ま、ママなら日払いOKどころか先払いもしてくれるし、そもそも時給が良いんだよね」

「ちなみに……おいくらですか?」

(……パツ)

無言で片手を「パー」の形で広げる。驚くべき高時給だ。というか、下手な武装局員より高いのではないだろうか?

「うわっ、スゴ……」

「まあ、その分結構遅くまで拘束されるし、なにより……」

「なにより?」

「精神的に、ね」

「あ……」

元々そういう趣味の持ち主や精神性の人ならいざしらず、一般的な男性の感性からすると、お客になるならともかく従業員側になるのはキツイだろう。だからこそ、立香もぎりぎりまでこちらのお店のお世話になるうとしなかったのだ。逆に言えば、今の彼の懐事情はそれ位に追い詰められている。

あと、ママこと店長が非常におおらかな人なので、勤務できる時に入れば良いと言ってくれるのもありがたい点の一つだ。

「……それなら、もつと他になかったんですか?」

「家賃だけならまだしも、光熱費とか水道代その他諸々あるし、まともったお金が必要だったんだよ。」

そうなるともう借金するか、あとは……」

工事現場やイベント会場などをはじめとした日雇いのバイトの他にも、内職だったり、昔取った杵柄で漫画家のアシスタントだったりといった選択肢もあるが、どれもこの窮状を打破するには弱い。

そのため、どうしてもクセの強い仕事に頼らざるを得なかった。ちなみに、そういった方向性の中でも、これは割とまともな仕事だったのだ。なにしろ……」

「他にもあるんですか?」

「……知り合いの若頭に危ない仕事を斡旋してもらうとかかなあ」  
(どういう交友関係してるんだ、この人は!?)

(確かに、そういうのに比べればまだマシかなあ……)

アクと個性の塊ともいうべき「英霊」達に揉まれてきたおかげか、今更ヤのつく自由業くらいで物怖じしたりはしない。なんだかんだで仲良くさせてもらっているの、いざとなれば頼るのも選択肢のうちだ。まあ、あまり頼り過ぎない方が良い相手なのも理解しているの、本当に最終手段なわけだが。

流星に、非合法すれすれの薬の運び屋や売人は勘弁してもらいたい。

「というわけで、この件はフェイトにはどうか内密に……」

「……わかりました。僕たちとしても、フェイトにいらさない心配は賭けたくありませんからね。エイミイもそれでいいな？」

「オツケー。ところで……」

「ん？」

「ちよつとお店の中とか見学してもいいですか？　こういうところ初めてなんで、ちよつと興味が……」

「君なあ……明日も早いんだぞ」

「わかつてるけどさ、ちよつと！　ホントにちよつとだけだから！」

両手を合わせて頼み込むエイミイに、クロノは渋い顔をしつつも立香に視線を向ける。助けを求めたつもりだったが、立香はむしろ率先して店長に許可を取り付けに行ってしまった。まさか、いつそのこと巻き込んでしまえ、などという思惑などなかったと思いたい。

それはともかく、気の良い店長はエイミイのお願いを快諾。むしろ、「理解を広める草の根活動よくん♪」と超ノリノリ。従業員の皆さんも二人(主にクロノ)に興味津々だったらしく、ドレスと筋肉でもみくちやにしながら大盛り上がり。具体的には、場の雰囲気に乗ることのできなかつたクロノが、「可愛い子、食べちゃいた〜い！」「オネエさんと禁断の扉、開いてみる？」と迫られる羽目に。

助けを求めようとするも、エイミイはエイミイでオネエさまたちと意気投合してしまうし、立香も煽る側に回るものだからストツパーが不在となってしまうのが悪かった。

一時間後、這う這うの体で店を後にしたクロノは、ちよつと過去に

類を見ないほど憔悴しきっていた。逆に、エイミーは激務の疲れが吹き飛んだかのように艶々していたが、楽しいひと時が良いリフレッシュになったのだろう。以降、エイミーはそれなりに彼（彼女？）らと懇意にし、店の皆さんも二人を痛く気に入ったようで色々世話を焼いてくれるように。

それは二人が結婚し、二児を設けてからも変わらない。

むしろ、忙しい時に子守をしてくれたりもしている。

「久々の休暇だね、クロノ君」

「ああ。と言つても、せいぜい一日だけど」

「そっか。それじゃ遠出も難しいか……」

「いや、何ならドライブでもハイキングでも……」

「せっかくだし、久しぶりに顔出してこよっか」

「………また行くのか？」

「またつて言つても半年ぶりでしょ。それに、私が妊娠している間とか」

「ぐっ」

「クロノ君が長期任務で空けている間の育児のこととか」

「それは……」

「色々お世話になってるんだけどなあ」

「………わかった、行こう」

「うんうん。お世話になってるんだから、せめて感謝の気持ちくらいちゃんと伝えないとね」

「だが、子どもたちの情操教育的にどうなんだ？」

「むしろ、多様な価値観に触れるいい機会と思うべきじゃない？」

「それは、そうかもしれないが……」

ヴィヴィオが来訪する少し前、ハラオウン夫妻の間でそんな会話があつたのかなかつたとか……。

それから数日後、立香はフェイトに伴われて海鳴の町を歩いていた。

「神社？」

「うん。山の上の神社で美由紀さん…なのはのお姉さんの友達が巫女さんやってるんだ。美由紀さんもおそろいの服を着てお正月に手伝ってた。白と赤の着物で、巫女装束って言うんだよね」

「……」

「どうかした?」

「いや。巫女さんが着るから巫女装束なのか、それとも巫女装束を着るから巫女なのか……」

「? やっぱり、巫女さんの服を着るから巫女なんじゃないの?」

「うくん、私そのものが巫女なのです! 私巫女が着るから巫女服!

水着でも巫女服、制服でも巫女服。ええ、何の不思議もありません!

“とかめちやくちやなことを言う知り合いがいてね”

(意味は分からないけど、何だかスゴイ自信!?)

そもそもどうして二人が山の上の“八束神社”を目指して歩いているかというと、簡単に言ってしまうばクロノに先日のことを秘密にする借りを返すよう要求されたからだ。

まだ当分はフェイトに寂しい思いをさせることになる。そこで、しばらく振りに姿を見せた立香に、その寂しさを埋めさせようとしたわけである。立香としても、それでフェイトの気が紛れるのなら安いもの。二つ返事で請け負った。

そして今朝、出かけるにあたって行きたいところはないかと聞いて帰ってきた答えが、八束神社への参拝である。

「行きたい場所はわかったけど、なんでまた?」

「えつと、この前話してくれたでしょ。ほら、日本では元々は神様じゃないものも祀って、神様にしちやうって」

「ああ、しました」

「それでね、その神様がどんな神様なのか教えてほしくって」

「それは構わないけど…その巫女さんに聞くんじゃないの?」

「立香の話って面白いから、君の言葉で聞きたいなって…ダメ、かな?」

まだまだ遠慮があるらしく、上目遣いに尋ねてくるフェイトに苦笑が浮かぶ。答えなど、決まっているというのに。



「俺でよければ喜んで」

「うん、ありがとう」

はにかみながら礼を言われれば、立香としてもまんざらではない気持ちになる。

人にものを教えられるようなご身分ではないが、それでもフェイトが話してほしいというのならいくらでも。

「だけど俺の話ってしよっちゅうわき道に逸れるから、あんまりタメにならないんじゃない？」

「そ、そんなことないよー！」

「でも、もつと教えるのが上手い人もいるし……」

そう言われてフェイトの脳裏をよぎったのは、実母の使い魔と発掘を生業とする一族の出の友人。

二人とも教えるのが上手く、的確に要点をまとめたその内容はとても分かりやすいものだ。その点で言えば、確かに立香の話はあつちに逸れ、こつちに逸れ、の繰り返しで要領は良くない。

ただ、その脇道に逸れた話が面白いのだ。面白いから興味が湧き、ふとした拍子に調べてみて気付くと頭に残っている。結果、気付くに必要な知識が雑学も込みで習得している。彼の話とはそういうものなのだ。なにより……

「確かに立香より教えるのが上手い人はいるよ。でも、私は立香の話聞くのが好きなんだ。教わった以上に世界が広がるっていうか、偶にすごく臨場感があるというか……自分がその時代、その土地に行きたみたいを感じる。それって、やっぱり凄いことだと思う」

「そっか……」

嬉しそうに語る彼女の頭を、立香も自然笑みをこぼしてそ撫でる。すると、照れながらも気持ちよさそうにはにかむフェイト。

さもありません。およそ藤丸立香ほど多様な時代、多様な土地を旅した者は稀だろう。千年前の風景も、神代の時代の人の営みも、船に乗って大海を渡る船乗りたちのバカ騒ぎも、あったかもしれない可能性も、その目で見てきたのだから。

そうしてとりとめのない話をしているうちに、目当てのお山が見え

てきた。二人はゆったりとした足取りで長い階段を上っていくが、少し強めの風が吹いて足を止める。

「ああ、良い眺めだ」

「……うん。そう、だね」

立香のつぶやきに、フェイトは少し間をおいて同意する。

山の中腹から見える風景は確かに展望が良く、海鳴の町がよく見渡せた。ただその時、フェイトが見ていたのは眼下に広がる風景ではなく、いくらか上にある立香の顔だった。

（ねえ、立香。君は気付いてる？ 空や風景の話をする時、君はいつも少しだけ苦しそうな眼をしているんだよ）

表情は穏やかなのに、眼の奥に複雑な光を宿していることに気付いたのはいつからだろうか。

希望と悲嘆、絶望と悔恨、決意と葛藤……それら様々な感情がないまぜになり、一言では言い表せない混沌とした光。一滴の涙も零しはしないが、フェイトには彼が泣いているように見えることがある。

（聞いたら、応えてくれるかな？）

聞こうと思ったことは一度や二度ではない。だがその度に、フェイトは口を噤んでしまう。隠し事をしているのは自分も同じ。そんな自分に、彼の心の奥深くに踏み入る資格があるのだろうかと思わずにはいられない。

なにより、怖いのだ。聞いて、知って、何もできないかもしれないことが。

だから、フェイトはいつもそんな自分の気持ちに蓋をして、ほんの少しだけ勇気を振り絞る。

「さ、もうすぐだから行こう！」

「はいはい」

立香の手を取り、引つ張る様にして階段を駆け上がる。

彼が苦しそうな眼をしている時、こうして我が儘を言ったり甘えたりすると目の奥の光が薄れることを、フェイト自身はつきりと意識しているわけではない。

それでも、無意識的に立香の変化を感じ取っているからこそ、彼女

は自分にできる精一杯の我が儘を口にするのだろう。

(どうしたら、君は笑ってくれるのかな?)

少しでもいい、立香に笑っていてほしい。

大好きな友達<sup>ヒト</sup>が苦しそうにしているのを見たくない。

それは誤魔化しなのかもしれない。何の解決にもなっていないのかもしれない。

それでも、彼がこの一時その苦しきから解放されるのなら……。

(ああ……どうして私は、こんなにも小さいんだろう)

自分もつと大きければ、彼と並び立てるような年齢であったのなら……。

もしそうであったなら、苦しさを分かち合うことができたのだろうか。

分かち合うことができたなら、立香を支えることも、救うこともできるのだろうか。

考えても答えは出ない。

ただ、自分の小さな手が口惜しい。

幼いこの身が、どうしようもなく歯がゆく感じてしまう。

かつて何も聞かずに支えてくれた立香に何もしてやれない自分の無力さが、悲しくて堪らない。

だから、せめて……

「フエイト?」

「ほら、見えてきた! 頑張って!」

せめて笑おう。彼が心配しないように、彼がほんの少しでも苦しさを忘れられるように。小さく幼い今の自分にできる、精一杯を。

階段を上り切った先には、時代の流れを感じさせる……だが手入れの行き届いた社が佇んでいた。

「狛犬じゃなくて狐ってことは、稲荷系かな?」

「コマイヌとイナリ?」

「狛犬っていうのは、簡単に言うと番犬みたいなものかな。入口の両脇で神聖な場所を守ってる石の犬というか、獅子というか……あ、角もあつたりするんだよね。イメージするなら、家の前で不審者を威嚇

するアルフとザフィーラ」

「ぷっ！ な、なるほど……それは、悪い人は入ってこれないね」

「そうそう。で、稲荷っていうのは……あ、もしかしてここって本物の狐がいたりする？」

「うん、いるよ。久遠って言って、なのはの友達」

「じゃあ、その子もここの守り神みたいなものかな」

「そうなの？」

「うん。そもそも稲荷っていうのは……」

そのまま経験を絡めたうんちくを披露する立香。まあ、もっぱらカ  
ルデアの良妻狐やキャラがぶれまくりなキャットの話になりがちで、  
フェイトからすれば意味不明な部分も多かっただろう。

まあ、それでもおかしそうに笑ってくれているなら何より。

そんなやり取りをしながら参拝を済ませると、社の裏手から砂利を  
踏みしめる二種類の音が聞こえてくる。

「あら、どなたかいらっしやってるんですか？」

「くうくん」

姿を現したのは、亜麻色の髪を背中の中ほどまで伸ばしたおっとり  
した顔立ちの巫女さん。その足元には、那美の足に隠れる小さな子狐  
の姿もある。

見知ったフェイトがいることからできたいのだが、見知らぬ男性が  
いるから出るに出不れ……といったところだろうか。

「ああ、フェイトちゃん。いらっしやい」

「那美さん。お邪魔します」

「今日はなのはちゃんは一緒じゃないの？」

「なのはは翠屋のお手伝い。今日は立香……この人が八束神社に来た  
ことがないって聞いて案内してたんです」

「そうだったの。初めまして、ここの管理をしている神咲那美で……」

立香に向き直り挨拶しようとしたところで、那美の口が凍り付く。  
大きく見開かれた目、蒼白な顔色、反射的に震え出す身体。まるで、有  
り得ないものを目にしたかのような反応だった。

よく見れば、それまで並の後ろに隠れていた久遠がいつの間にか並

の前に立ち、まるで彼女を守るかのように毛を逆立たせている。

「えつと、那美さん？」

「ウ——！」

(あれ？俺、この人とどっかであったことあったっけ?)

予想外のリアクションに、立香も困惑の色を隠せない。特に思い当たる節もないのだが、この反応はいったい……。

などと思っていると、唐突に那美の身体が糸の切れた人形のように崩れ落ちた。

「……………はう」

「那美さん!」

「クウツ!」

「ちよつ!」

地面と激突する前に、辛うじて抱き留めることに成功するもの：正直状況はさっぱり。

相変わらず子狐は立香に警戒心むき出しだし、那美も完全に気絶してしまっている。

フェイトの方をちらりと見れば、彼女も訳が分からず目を白黒させている。

(弱ったなあ……)

救急車を呼ぶべきか、それとも境内で休ませて様子を見るべきか。

外傷らしきものはないが、原因がわからないことには軽々に判断できない……とっていると、子狐こと久遠がゆっくりと立香との距離を詰めてくる。立香への警戒心より、那美を心配する気持ちが勝ったのだろう。

慎重な足取りで近づき、立香の間近まで来て心配そうに那美の様子をうかがう久遠。だがそこで、何かに気付いたのか、弾かれたように立香の方を見上げてくる。

(えつと、どういうこと?)

(や、さあ?)

そのまま「クンクン」と立香の匂いを嗅いだかと思うと、唐突に警戒を解いて彼の肩の上に。今度はそこから心配そうに那美のことを

見下ろす。

初対面の立香は当然知らず、なのはを介して一応面識があるとはいえ付き合いの浅いフェイトもよく知らないことだが、本来久遠は臆病というか警戒心が強いというか、中々人との距離を詰めてこない。最初の様に警戒心を露わにするというのは珍しいが、それでも人との触れ合いに積極的な方ではない。

そんな久遠が、あれだけ警戒していたのに途端に態度を翻すというのは本来なら有り得ないことだ。まあ、二人ともそれが有り得ないことだと理解していないわけだが。

「とりあえず、境内に降ろして様子を見ようか」

「うん。私、冷たいタオルとか持つてくる。久遠、場所教えて」

「くうん！」

そのまま久遠を伴って裏手に向かうフェイトだが、ふと疑問に思う。

（あれってつまり、あの狐が案内するってこと？ 狐って、そんなに頭いいんだっけ？）

生憎、普通の狐を飼ったことがあるわけでもないのに、詳しいことはわからない。まさか立香も、あの狐が人間に変化し、言葉を操れるとは思えない。

その後、おでこによく冷えたタオルを当てて様子を見ることしよし。

一時間と経たないうちに目を覚ました那美は、気絶していたのがウソのように平身低頭していた。

「本当にすみません！」

「ああいえ、お気になさらず」

「初対面の人の前で気絶するなんて、なんて失礼なことを……」

「いやいや、体調が悪かったのかもしれないし、仕方ないですよ。今はとにかくゆっくり休んでください」

「そうですよ。良ければ何か買ってきましょうか？ それか、さざなみ寮から迎えに来てもらうとか……」

「大丈夫大丈夫！ もう全然元気だから！ ね、久遠」

「くうくん」

「……まあ、それなら」

元氣さアピールのために力こぶを作って見せる那美だが、その腕にこぶらしきものは全く見られない。

そのまま「少し様子を見ましようか?」「大丈夫ですから」「でも心配です」「本当に具合が悪い時はちゃんと帰ります」「だけど……」「いえいえ……」「それでも……」などという問答の末、若干後ろ髪引かれながらも八束神社を後にする二人。ただ、その際……

「あ、フエイトちゃん」

「はい?」

「………ううん、何でもない。気を付けて」

「? はい。それじゃ、失礼します」

「お大事に」

何を言おうとしたのか気になりはしたが、聞いても応えてくれなさそうだったのでそのまま階段を降りる。

二人の姿が見えなくなった後、人の姿に変化した久遠が那美を見上げながら問う。

「いいの、何も言わなくて?」

「……うん。たぶん、余計なことを言わない方が良いんだと思う。少なくとも、今はまだ」

霊能力者としてはあまり強力な方ではない那美だが、その時は何か確信めいたものがあつた。

「なにか、見えた?」

「残念……なのかな。ちよつとよくわからないし、見えたのも一瞬だった。だけど、あの人の後ろに何かとてつもないものが見えた気がする。とても、人一人が背負えるようなものじゃない、そんな何か」

「大丈夫?」

「……わからない。でも、式神とか護法童子みたいな……でも、もつと強力な何かがあの人を守っているようにも見えた。久遠は何か感じた?」

「お母さま」

「え？」

「お母さまじゃないけど、お母さまみたいな匂いがした」

(久遠の？ それは、さっきの夢で見た……)

気絶している間、少し不思議な夢を見たことを思い出す。

周囲は真つ暗で、見えたのは大人の姿の久遠にどこか似た輪郭の人影と、その奥に輝く太陽のような輝き。

光に誘われる虫のようにふらふらと太陽の方へ向かいそうになっていると、人影が立ちはだかりこういったのだ。

「当世の人間にしては、なかなか良い目をお持ちのご様子。とはいえ、それだけでたどり着ける場所でもないはずなのですが……まったく、如何なる縁を辿ったかは知りませんが、命が惜しくばそこから先に行つてはなりませんよ。」

その先に鎮座するは、大日如来の荒魂。触ればもちろん、近づくだけでも矮小な人など塵も残りません。

幸い、あなたは私の眷属と契りを結びし御方とお見受けしました。此度はその契りを手繰り、送り返して差し上げましょう」

顔すら定かではなかったし、声も気質も久遠とは似ても似つかない印象を受けた。だが、どこか二人に近いものを感じました。果たしてあの女性は、いったい何だったのか。

「それと、一つ助言を。『沈黙は金』と申します。努々、軽率な発言は控えられますよう。良かれと思つて零した一言が、かえつて紡がれるべきものを妨げることになるやもしれません。くれぐれも、ご注意を」

その言葉を覚えていたからだろうか。フェイトに掛けようとした言葉を、寸でのところで飲み込んだ。

あの時那美は思わず口にしそうになったのだ、「本当に、彼と一緒にいいのか」と。なぜそんな言葉が出そうになったのかはわからない。ただ、彼の行く道は平坦からは程遠い、かすかな光明を追いかけるかのような、苦難と罪過にあふれたものである気がした。

だからこそ、思わず問いそうになった。同じ道を歩むことになるかもしれないから。



果たして、言葉を飲み込んだことが正しかったのか否か……。

これより数年後、カルデアそのものが此方側に浮上した後、那美は自身の職業柄、久遠は己が存在の在り様から、到底無視できない存在とこの場所でバツタリ出くわしてしまうことになる。

いや、まさか三大化生の断片に遭遇するなど、いったい誰が想像できらるだろうか。

## プレシァ・テストタロツサの場合

——テオス・クリロノミア…ですか？

そう。いくらカルデアとはいえ、本来ならナノマシンなんて技術は手に余る。

でも、5番目の異聞帯で私たちはよく似たものに触れることになったし、今もストーム・ボーダーをはじめいくつかの場所にはこれが用いられているわ。あなたは知らないでしょうけど、そもそも「ノーチラス」というかネモにこれをぶち込みまくって、その結果「ストーム・ボーダー」になったんだけど。

当然、あるからには利用するために解析する。その過程で色々ノウハウも蓄積していったからこそ、アミティエたちの持っていたフォーミュラ用のナノマシンを即興で弄れたってわけ。

——はあく……シオンさんとダ・ヴィンチちゃんが天才だからじゃなかったんだあ。

それを否定はしないけど、いくら何でもよく知りもしないものをいきなり弄るのは無理よ。

理論や構造なんかをちゃんと把握すればまだしも、その把握に時間がかかるわけだし。

——まあ、そうですね。あ、でも、そもそもフォーミュラシステムを使うにはナノマシンの量が足りてなかったんじゃないかなって思いましたっけ。そこはどうしたんですか？

ああ、そのこと？ そつちはテオス・クリロノミアで代用したのよ。幸い見本もあったから、両者をリンクさせてテオス・クリロノミアにナノマシンの機能を複写させたわけ。

ま、細かい仕様とか調整のアップロードについてはダ・ヴィンチとシオンそれぞれのやり方に一任してたから、基本構想は同じでも大分違う結果になったみたいだけど。

——そうなんですか？

大雑把に言ってしまうえば、ダ・ヴィンチがはやてに施した調整は汎用型。魔力の高速・精密運用の補助と、かかる負荷に身体が耐えられ

るように、ナノマシンを全身に行き渡らせたもの。これは、基本的にだれが使っても一定以上の恩恵を受けられるでしょうね。

逆に、シオンがフェイトに渡したのは特化型。ナノマシンを四肢やリンカーコア周りに集中させて、スピードの向上と特に負荷のかかる箇所にしぼって補強するやり方。その分、他の個所は恩恵をほとんど受けられないから、フェイトみたいなタイプじゃないとあまり意味がないわね。

——数時間でそんな調整するなんて、やっぱり天才ですよねえ……。

まあ、独自機能を持ったバージョンのサンプルもあったから。

——はあ……っていうか、その……テオス・クリロノミア、でしたっけ？ それ、フェイトさんたちにあげちやってよかったんですか？

問題ないわ。色々と手を加えたからか、稼働時間に大幅な制限が掛かってね。夜が明ける頃には機能不全になって、たいしてデータも取れなくなってたのよ。

残骸から多少のデータは取れたでしょうけど、そもそもナノマシンの代用だから量自体が少ないし。実際、エルトリア式フォーミュラはともかく、テオス・クリロノミアの方は管理局でも見切りをつけてるみたいよ。

——それもなんですけど、もうその異聞帯ロストベルトはないんですよね。じゃあ、もう手に入らない貴重品なんじゃ……。

そっちも大丈夫。使ったのは余剰分だし、ストーム・ボーダーに必要なのはヘファイストス・クリロノミアだから仕様が違うわ。かといって、サーヴァントたちの補強に使うには量が足りなかった。つまり、使い道もなくて持て余してた分を放出しただけってこと。

それで管理局からの信用を買えたなら安いものよ。

——そうなんですネ。っていうか、神様がナノマシンのものを作るってどういうことなんでしょう？

まあ、あの連中ならそれくらいやるでしょ、メカだし。

——へえ……ってメカ!? 神様なのに!? あっちって、どちらかというとなんたじやなかったんですか? それじゃS

Fですよ。

サイエンスフィクション

S Fならぬ、

サイエンスファンタジー

S Fね。

まあ、それを言ったら南米の神性は「取り憑いた生物を神に変える微生物」って話だし、深く考えない方が良いわ。

——神様とはいったい……。

——というか、あなたがそれを驚くの？

——………はい？ いやまあ、聖王というかオリヴィエは次元世界的に神様扱いですけど、私は別に……。

そつちじゃなくて、レイジ<sup>母</sup>ング<sup>親</sup>ハ<sup>愛</sup>ートの<sup>機</sup>方。

——レイジングハートがどうかしましたか？

あれ、結局由来も来歴も何もわからないんですよ。

——そう、ですね。パパも詳しいことは知らないみたいですし……。

普通に考えて、デバイスでクラスカードを<sup>限</sup>定<sup>召</sup>喚するとか絶対に無理なはずなんだけど……。

——それを言ったらフェイトさんだつてレイシフト適性90%越えですよ。まあ、ティアナさんも8割に迫るらしいですけど。

あの子たちの場合、立香と夢で繋がってたからそこで感化でもされたんですよ。

——（それはつまり、ティアナさんの苦勞の元凶は立香さんってことなのかな？）

性格が違い過ぎるから愉快型魔術礼装共の同型機とは思わないけど、オリユンポス十二神とかの同類なんじゃないかって思う時はあるわね。

——いやいや、流石にそれは……。

分からないわよ。アレ、元々は一応まっとうに杖してたのが、いつの間にか固定砲台の砲身になって、今では単独飛行する移動砲台になってるじゃない。そのうち、衛星軌道上から砲撃してくる衛星砲になったって私は驚かないわよ。

——（あれ？ オカシイな……否定したくてもできない私がいる）

それで、他に聞きたいことは？ ないなら私はもう行くわよ。  
そろそろフェイトが勘付く頃だろうし、急いで身を隠さないと。まだ  
心の準備が……。

——あのお、今更逃げ隠れするような仲でもないんですし……。  
しようがないでしょ!? 十年経とうが二十年経とうが、どんな顔し  
てあの子の前に出ればいいか全くわからないのよ!?

——お孫さんもいるんですから……。

確かに孫は可愛い！ でも、だからと言ってバツの悪さは全く軽く  
ならないのよ!! というか、むしろあの子がフェイトが幸せそうな顔をすればす  
るほど罪悪感が、ががががががが……あ——もお——

——!! なんてあんな事しでかしちゃったかな  
いつか過去の私は——っ!!!

……殺したい。いつそ過去に戻って何  
もかもなかったことにしてしまいたい。

——(いつもの事とはいえ、フェイトさんのことになるとテン  
ションのアップダウンが激しいなあ)

ふふ、ふふふふふふふ……そうよ、どうして忘れていたの。カ  
ルデアには最適レイシフトな技術があるじゃないの。私にレイシフト適性はな  
いけど、アタランテかフランケンシュタインあたりを焚きつければ  
……。

——いやいやいやいや!! そんな無駄に壮大な自殺はやめ  
ましょうよ!! フェイトさんが聞いたら悲しみますから! 絶対!

絶対?

——そう、絶対!!

……そうね、これ以上あの子を泣か  
せるわけにはいかないものね。

——ほっ。

なら、別の方法を……例えばそう、因果レベルから私の存在を抹消  
するとか……だれか、そういうのできるのいたかしら?

——よし、話題を変えましょう! とりあえず、カルデアで目を  
覚ましてからの事って聞いたことなかったですけど、どんな感じだっ

たんですか！

は？ それは、若返りの霊薬を投与されて目を覚ましてからのこと？

——はい。その辺の事、そういえば聞いたことなかったなあつて。

……別に、わざわざ話すようなことなんて何も無いわよ。

——えく……でも、とりあえず聞かせてほしいんですけど。せめてフェイトさんが来るまで時間を稼がないとだしね。自分の口から報告したいことがあるから、見つけたら足止めしておいてって頼まれたし。

……わかったわ。じゃあ、少しだけ。と言ってもね……虚数空間を漂っている間のことはほとんど覚えてないし、シャドウ・ボーターに収容された前後のことも意識が朦朧としてたから……。強いて言えば、何かを口の中に注がれたような気がするような、しないような……。

——ほ、本当にギリギリだったんですね。

……そうね。あの頃はまだアスクレピオスもいなかったし、薬を飲むのがあと数分遅かったら死んでたでしょうね。チツ、あそこで大人しく死んでおけば……！

——で、でもそうなるとフェイトさんの幸せな姿も見られなかったし、孫とも会えなかったんですよ!!

……くっ、悩ましい！ こんな老害さつさと死んでおくべきなのに、それでも幸せだと思う自分がいる!! ああ、私には勿体なさすぎるっていうのに……鬱だわ、やっぱり今からでも死のうかしら。

——そ、それで！ シャドウ・ボーターで目を覚ましてからはどうだったんですか？

とりあえず……。

——とりあえず？

——シート裂いて首を括ろうとしたわね。

——いきなりですか!?

その後もフォークで首を突こうとしたり、割った皿でリスカしよう

としたり……そんなことが続いたから、拘束着を着せられて、マシユが世話をしてくれてたんだったわね。あの子にも苦勞を掛けたわ……やっぱり死にましよう。

——とりあえず死のうとするのやめてくれませんか!?

大丈夫よ、今度こそうまくやるわ。そう、アスクレピオスにも蘇生できないくらい完全に……アイツ、自分の蘇生薬のこと。少し出来の良いAED“みたいに言ってるけど、よっぽど状態が悪くなければ死後一日くらいなら普通に蘇生させるし。………やっぱり、跡形も残らないくらいがいいかしら。

——安心できる要素が欠片もない件について!?

………仕方がないじゃない。ロシア異聞帯を滅ぼしたばかりで、みんな折り合いの付け方を模索していた時期だったのよ。そんな時に余計な手間を掛けて煩わせたなんて……。

——やっぱり、大変だったんですね。

乏しい物資、心許ない戦力、地の利はなく、時間的猶予は不明、そもそも逆転の目があるかさえわからなかった。

異聞帯ロストベルトの攻略そのものが困難を極めるっていうのに、その結果引き起こされる事態は……あまりにも重すぎる。一つの世界に生きるすべての生命、紡がれた歴史と想い、それらすべてを否定し消し去る。その重さは、とても言葉にできるものではないわ。しかも、それがあの時点で残り6つ。

誰もが道行の困難さに挫折そうだったし、押し掛かる罪の意識に心が折れそうだった。

……当時の私は、何も知らなかった。目を覚ました時にはすべての記憶はなくなっていて、自分がどこにいるのか、何者で、何をしてきて、どこに向かうのかすらわからなかった。

——不安、ですよね。

いいえ。

——え?!

不安はなかったわ。ただ、どうしようもないくらいに死にたかった。理由なんてわからなかったけど、ただただ自分の存在が赦せな

かった。息をしていることも、目を開いていることも、何もかもが……。

だから死のうとしたのよ。それが自分が真つ先にすべきことだった、そんな確信だけがあった。

でも、カルデアのみんなは私が死ぬことを許してはくれなかったわ。錯乱して、遮二無二「死なせて」とわめく私を殴ったのは……誰だったかしら。

彼らからすれば、許せなかったのでしょうね。生きたくても喪われて逝った命を知っている。『ようやく人生が楽しくなってきた』と呟きながら幕を引いた人がいた。……消し去りたくなっていたのに、自分たちの生存のため、これから先いくつもの世界を滅ぼさなければならぬ。そんな彼らからすれば、自分から死のうとする私は命を侮辱していると思つて当然よ。実際、その通りだったわけだしね。

——プレシアさん……。

北欧異聞帯での戦いは、私にとって衝撃だった。まだ大人にもなっていないうちに、あるいは運よくようやく大人と呼べるような年齢になつて、人生これからという時にはもう死ななければならぬ人たち。生かしてやりたいくても、それが出来ず不甲斐なさに耐える女神。

だれも、なにも……『悪』と呼べるものがないにも関わらず、それでも世界を滅ぼさなければならなかったみんな。

私には、なんと声をかければいいのかすらわからなかった。『酷い』という言葉を飲み込めたことだけは、自分をほめてもいいと思うけど。だつてそうでしょ？ 死にたいと思つていた人なんて一人もいない、スカディたちだつて殺したいと思つていたわけじゃない。当然、みんなだつて滅ぼしたかつたわけじゃない。いったい誰の、何を責めればいいというの？ 強いて言うなら、自分の命を軽んじる私自身……でしょうね。

——……だから、カルデアに協力を？

……ええ。見て、聞いて、知つてしまったから。

シャドウ・ボーダーに乗つて、あの場に居合わせた時点で私もまた当事者よ。無関係、部外者を気取る資格はない。だつて私は、彼らが



消え去るのを黙って見過ごしたのだから。そしてその後も、空想切除それ以外の方法を、代案を示すことができなかつた。なら、私もまた共犯者に他ならない。

——…辛くなかつたですか？

…：ノーコメント、とさせてもらうわ。それを一番に口にする資格がある人が口にしない以上、私たちが弱音を零すのは筋が通らないもの。

——立香さんだけ、なんですか？ マシユさんは…。

…：現場において、サーヴァントたちに直接指示を出すのは立香の役目よ。場合によっては、令呪も使つてブーストをかけて。ゴルドルフも極力「責任者だ」。「私がそう指示するよう指示した」つて責任を肩代わりしていたけど、それでも現場に出て直接指示するのは違うものでしょ？

空想樹の伐採を指示するということは、言うなれば「このロストベルト異聞帯を滅ぼせ」と言っているのと同じなのなもの。

ロストベルト異聞帯の、そこで生きる人々の在り様と営みを肌で感じて、時に彼らと交流し、その上で必要とあらば利用するように立ち回る…：その全てを、彼は自分の手で行つてきた。

これは、「サーヴァント」という立ち位置のマシユには絶対に降りかかることのない類の重さよ。というか、立香がマシユには可能な限り責任を負わせないようにしてたつてというのが正しいでしょうね。

まあ、あの子にはあの子なりの重さがあつたのだろうけど。

——（わかつてたつもりだけど、改めて言葉にされると…）

それにマシユの場合、生まれも育ちもカルデアだつた。耐性訓練は受けていたし、あの子が確固とした個を確立する上で特異点の旅が大きく影響を及ぼした。加えて、ギアラハッドの霊基は肉体だけでなく精神や魂にも大なり小なり影響を与えている。これら諸々があつたからこそ、あの子は最後まで歩き切ることができた。

なにより、マシユには立香がいたわ。でも、立香にはもう誰もいなかった。

——え？

確かにマシユは立香を守っていたけれど、あの子の心を支えていたのは立香だった。だけど、それなら立香の心は誰が支えていたのかしら？

人理焼却の時には、ロマニ・アーキマンがいた。彼がカウンセリングという形で支え、時には司令官代行として立香に不本意な行動を“命令という形で強制”したわ。

ホームズはああいう性格だから大人としてのフォローは期待できないし、ノウム・カルデアに残るシオンは論外。ダ・ヴィンチも以前の彼ならともかく、今のダ・ヴィンチは“同じだけ別”の存在。外見に中身が引っ張られてる部分もあるし、本人も前の自分にコンプレックスみたいなのがあつたから、とてもフォローまではね。ゴルドルフは頑張っていたけど、それでも門外漢の彼にアーキマンの水準を求めるのは無理でしょう。

かと言って、他の面々にしてもそれは同じ。

——マシユさんとか、サーヴァントの皆さんじゃダメなんですか？

関係性の問題よ。

立香はマスターで、マシユはサーヴァント。同時に、先輩と後輩という間柄で安定していた。何より、本当は戦うのが怖いマシユを前線に立たせて戦わせなければならなかつた。オルテナウスだつて当時は完成していなかつたし、霊基も万全からは程遠かつた。だからこそ、立香はマシユにこれ以上負担をかけるわけにはいかなかつた。

サーヴァントたちもフォローはしていたけど、結局は指示を出す側と出される側という関係性がある。

その関係がある以上、彼らでは立香の重荷を肩代わりすることはできなかつた。

それでもね、戦いとその合間に休息を挟んでいるうちはまだ良かった。どれほど心身を休めたところで、またすぐ次の戦いが待っている。その現実が、非日常が、心に押し掛かる重みを忘れさせてくれたから。

——そうなんですか？

あなたにも覚えがあるんじゃない？ 試合前、リラックスしているつもりでも神経が昂つたりしたことはない？

………あります。

要はそれと同じ。潜在する緊張感が、不安や興奮が、良くも悪くも平常心を奪い、心を麻痺させていた。だからこそ、押し掛かる重みに耐えることができた。

でも、全てが終わった後は違う。何もかもが終わって、ただ「結果だけが残された時」…今まで麻痺していた心が正常に背負ったものの、為し得てきた成果の「重さ」を再認識した。

あの頃は、本当に酷いものだったわ。一時期は、薬物の投与も検討されたくらいにね。

——薬物って、まさか……。

戦場では割とよくあることらしいわ。まあ、うちの医療班が許さなかったし、なにより……

——なにより？

フェイトがいた。

——フェイトさん、ですか？

支え…とも違うと思うのだけど、良いガス抜きになっていたのは事実でしょうね。

だからこそ、薬物に頼らなくてもぎりぎり立香は自分を保つことができた。

——そういえば、フェイトさんを甘やかすのが半ば趣味になっているけど、精神安定も兼ねてるって聞いたことがあります。

まさにその通り。フェイトを甘やかす方法を考えている時の立香は、妙に生き生きとしていたわ。おかしな言い方だけど、悪戯を考える悪ガキ…みたいなのがあったし。

——そうなんですわ……。

だからマシユも、フェイトに対してはあまり嫉妬を表に出さなかったのよね。少なくとも、フェイトの邪魔はしようとしなかったわ。

——嫉妬、ですか？

知らないのも無理はないけど……あの子、割とヤキモチ焼きよ。少

なくとも、シャルロットとかエレシユキガルとかが立香に迫ると、割って入ってこれ見よがしに牽制するし。

——し、知らなかった。あれ？ でも、それならどうしてフェイトさんだけ？

……自分のことで精一杯で、一番傍にいたのに立香がどれだけ追い詰められているのか気付かず、頼りきりになってしまったことをあの子は負い目を感じているんだと思うわ。まあ、それとは別に悔しいとも思っているでしょうし、嫉妬だってあるでしょう。

でもそれ以上に、あの子は立香を救ってくれたことに感謝している。それに、後になって役割を奪おうなんてことができる子じゃないし、“支えられる側”という立場に甘んじておいて、今更それを覆すのは難しい。

だからまあ、フェイトに対しては自制してたのよ。変に妨害して、それで立香に何かあつたら大変でしょ？

——へえ……。

まあ、はじめは二人の関係がどう落ち着くかわからなかったって言うのもあるでしょうね。どちらかと言えば、年の離れた友人って形になりそうだったし。

——それで静観してたら、今みたいな感じになったと。

思うところがないわけじゃないでしょうけど、それを言ったらフェイトも似たようなものでしょうし、結果的に立香にとってそれが最善なら……その点で考えが共通してるから、あの二人は。

まあ、フェイトは魔力資質的にもスタイル的にも“守る”のには向いていないから、“立香を守るパートナー”のマシユを羨んでるし、マシユも“立香を救える”ことに憧れた。お互いにならないもの強請りをしているからこそ、“二人で支えていく”っていう結論になったんでしょね。

——ふくん。でも、前々から思ってたんですけど、良く他の人たちも納得しましたね。ほら、オルタのジャンヌさんとかメルトさんとか、怪しい人結構いるのに。特に、筆頭格の清姫さんとか頼光さんとか……。

ああ、そのこと？ なにしろ……ねえ。

——何かあつたんですか？ 例えば、立香さんを巡ってフェイトさんたちと大喧嘩……とか。

いえ、そんなことはなかったわね。ただ……

——ただ？

立香が一人一人に頭を下げて、二人と結婚するって報告はしてたわね。

——それで納得したんですか？

するわけないじゃない。地震・落雷・火事・洪水……その他諸々で色々大変だったし、暴走した連中がフェイトたちを殺しそうになったりもしたし……。

——案の定かあ……。

中でも、一番危なかったのはアレね、清姫。まさか立香の奴、面と向かって言うとは思わなかったわよ。それも、護衛を一人もつけずに。

——いや、それって自殺行為なんじゃ……。

立香なりの誠意と義理を果たそうとした結果、でしょうね。守りを固めて安全圏から言いたいことだけ言うんじゃ、今まで力を貸してくれたのに不義理だからって。

——それで、どうしたんですか？

もちろん、転身して追いかけてまわしたわよ。

——え………。

ただ、嘘偽りなく本音をぶつけられたからでしょうね。本来なら一分と経たずに追い詰めて焼き殺せたでしょうに、清姫は最後まで躊躇ってた。結局、逃げ場がなくなっても立香はしっかりと清姫を見据えて、自分の言葉を翻さなかった。その頃には、アレも気づいたはずよ。誰も邪魔をしにこない、その意味を。

——なるほど、それで認めてくれたわけですね！

え？ 今でも普通に部屋にもぐりこもうとしてるわよ？

——全然認めてなかった!?

殺そうとしないだけで、別に諦めたわけじゃないのよね。まあ、そ

の辺は他の連中も同じだけど。

ただ、変なところで一致団結するようにはなったわね。

——というと？

フェイトの場合、立香を貶したり軽んじたりしても怒らないでしょ？ マシユは明らかに視線の温度が下がるし、他の連中の場合、即実力行使もあり得るけど。

——そうですね。フェイトさんと、〃人それぞれの見方〃って感じでスルーしてる感じで。まあ、内心で相手との付き合い方とか絶対修正入ってますけど。

そう。でも、流石に実際に危害を加えられるとなれば容赦はないわよ。

全員一丸になって〃子連れの獣〃状態になるから。

——やだ、何それ怖い。

怖いよ、ああなるとホントに。我が娘ながら、恐ろしい、子……。

——あ、フェイトさんやつと来た！

裏切ったわねヴィヴィオ——つ!?

——え？ 私は元からフェイトさんの味方ですが何か？

ベリーシット!! 知ってる！ そういう子よね、あなた!!

——とりあえず、観念して話を聞いた方が良いでしょう。なんか、大事な話があるそうなんです。

………わかった。聞くから、そんな寂しそうな顔しないで、私のせいだけで。

——（自覚はあるんだから、いい加減開き直ればいいのに……）  
そ、それで…今日は何の用なの？ い、言っておくけど！ 蘇生薬の研究を辞める気はないわよ！ 昔のことは反省してるけど、それとこれとは……へ？ 別に止める気はない？ 誰の迷惑にもならないことで、犯罪じゃない限りは。ただし……わ、分かってる。身体には気を付けるわ。そ、それでいいんでしょ！

——（なんか、どっちが母親なのかわからなくなりそうな会話。まあ、プレシアさんも記憶が戻る前からアスクレピオス先生の研究を手伝ってたらしいし、仕方がないのかな？ 昔のことがあるから、

フエイトさんにそこを突っ込まれるのは弱いみたいだけど)

じゃ、じゃあいったい何の要件なのかしら？

早く済ませて、偶の休日くらい家族でゆつくり過ごさなさい！ 私の轍を踏むなって昔言ったでしょうが！

——(叱つてはいるけど……全力で目逸らしてるし、声震えてるし。それだけ後ろめたいってことなんだろうな……。あ、フエイトさん“もう、しょうがないなあ”と言わんばかりの苦笑い。慣れてるなあ……)

……はえ？ 子ども？ 二人目？ え、嘘、ホントに？

ヴィヴィオ、私のジョーとテンプルを殴って！ 思いつきり!!

………とりあえず、頬つぺた引つ張りますね。

アイタタタタタタタタタ！ ……夢じゃない。

——え？ 次こそはしっかり抱いてあげてね、母さん？ ああ、

そういうえば前の時は首が据わるまで逃げ回ってたんでしたっけ。

だ、だって！ 私はその…親失格というか、いまさらそんな虫のいい話があるわけないというか……ちや、ちゃんと最後は抱いたじゃない！ それでいいでしょ!?

——あの時、メチャメチャ号泣してましたよね。“この子の為”を言い訳にしちやダメなんだからね。あなたの仕事は世界と、この子の未来を守る大事なもの。だけど、それで本当に大事なものを少しでも疎かにすれば、いつか絶対後悔する。毎日目一杯、有りつ丈の愛情を注ぎなさい。“わかつてくれる”じゃない、“わかつてもらう努力”を怠らないこと。それと、子どものこともいいけど、自分のことも大事にしなきや許さないわよ…でしたっけ。

うなああああああああつ!! 感極まって何身の程知らずにえらそうなこと口走ってんだ私いいいいいい!!

——でも、フエイトさんとしては最高のアドバイスだったらしいですよ、ねえ？

……そ、そりやね。あなた、私の悪いところばかりよく似てるし……私の失敗はあなたもやりそうというか、同じ轍を踏ませないの

が、その…お、親の責任でしようが！

——あはは、前途多難なお祖母ちゃんですねえ……つて、ところでフェイトさん。その手にあるのはもしかして……。

……はあ。色々着せてやりたいのはわかるけど、ほどほどにしなさい。つてまた懐かしいものを引っ張り出してきたわね。それ確か、昔あなたが着てた浴衣じゃない…ハツ!? こ、これはその…昔立香が強引に写真を見せたから知ってるだけよ！ 別に、こっそり様子を見てたなんてことないんだから!!

——プレシアさん、語るに落ちてます。くうっ、しまった……!

——一応言っておきますけど、完膚なきまでに自爆ですからね。分かっているわよ！

まったく……でも、いいの？ それ、確かリンデイに買ってもらったものでしょ。

聞いたわよ。あなた、遠慮して服も身の回りのものもできるだけ安く済ませようとしたそうじゃない。

——よく知ってますね。

リンデイに散々愚痴られたのよ！ ついでに、ようやく買わせてくれた高価な品つてことで、いったい何度同じ話を聞かされたことか……聞くまでもなく知ってるつての!! そもそも仕掛け人立香だったんだから!

——あ、その話もう少し詳しく……つて、フェイトさんが「ああ、やっぱり」とばかりに手を打って……。

\* \* \* \* \*

クリスマスを間近に控えたその日、闇の書事件の捜査の合間を縫ってリンデイは喫茶「翠屋」を訪れていた。

目的は単純、とある人物に呼び出されたからだ。

「おやリンデイさん、いらっしやいませ。今日はゆっくりしていかれるんで？」



「用件次第、でしようか。ちよつと待ち合わせで」

店主である高町士郎に答えながら、店内を見回す。目当ての人物は別に影が薄いというわけではないのだが、彼女の被保護者ほど目を引く容姿ではない。そのため、平日の日中でありながら大変繁盛している翠屋の店内から見つけようとする、少々手間取ってしまう。

(少し早く来過ぎたかしら?)

などと考えたところで、視界の端で何かを捉える。反射的に視線を向ければ、そこにはリンデイに向かって手を振る若い男性の姿。相手が目立たなくても、リンデイ自身が目立つので見つけられる形になつたらしい。

まだ利用回数は少ないが、何度か立ち寄らせてもらった中で既に好みに合うメニューは見つけてある。士郎に先に注文を済ませ、リンデイは目当ての人物：立香の向かいに腰を下ろす。

「待たせてしまったかしら?」

「いえいえ、全然」

テーブルに置かれたコーヒーカップからはまだ湯気が立ち上っていることから、実際にその通りなのだろうと判断する。

と同時に、周囲からの視線に気づく。

(うゝん、もしかして若い燕を囲つてる…とか思われてるのかしら?)  
所属先ではそれなり以上の地位を有し、十代半ばに差し掛かろうかという子どもまでいる身なので、客観的にはそう見えるのでは…と少しばかり危惧する。まだこちらに来て日が浅いとはいえ、十中八九長く腰を据えることになるであろう土地で、変な噂が流れるのは勘弁してほしい。

とはいえ、リンデイの危惧は杞憂だ。というか、周りからは普通に若いカップルのデートと思われている。

何しろ、リンデイの外見ときたら二十歳前後と言つても普通に通用的レベルだ。その割には落ち着きと風格があるので、もう少し上に見られることはあるかもしれないが……実年齢からすれば十分若く見られがち。眼前の二十歳手前の青年とそう差はないだろうというのが、大方の見方であることを知らないのは本人ばかり。

「お忙しいのにすみません、お呼び立てしちゃって」

「気にしないで。フェイトさんもあなたには色々お世話になっているようだし……」

「……どちらかというと、俺の方が世話をされている気が……あ、いつも差し入れありがとうございます。本当に助かってます」

「いくえく、お口にあっているなら幸いだわ」

注文した紅茶が来るまでの間、とりとめのない会話に興じる二人。何度か顔を合わせたことはあるのだが、さほど言葉を交わしたことはない。いずれの場合も、近くには二人の共通の関係者であるフェイトがおり、もっぱら彼女を介する形で交流していたからだ。

とはいえ、リンデイとしてもこの青年とは一度しっかり話をしてみたいと思っていた。今現在、中々に厄介な案件を受け持っているためその余裕がなかったが、こうして相手の方から機会を設けてくれたのは僥倖と言えるだろう。

（フェイトさんの心の安定を考えるのなら、こちらでの知り合いは大事にしたいところだけど……）

なにぶん、立香は色々と不安要素が多い。フリーターとして定職に就くことなく暮らしており、実家からの仕送りを受けている様子もない。仕事にしたところで、日雇いの仕事为中心で継続的に働いてはいないらしい。かと言って、何か夢を追いかけているような風でもなく、浪人生よろしく受験のために勉強に勤しんでいるわけでもない。忌憚なく言ってしまうと、その日暮らしてフラフラしている、といったところだろう。

まあ、何度か言葉を交わし、実際に対面した印象として悪い人ではないと思う。むしろ、おおらかで人当たりの良い好青年というのがリンデイの評価だ。

加えて、遠慮がちで甘えることが苦手なフェイトにリンデイたちに海鳴の町を案内する……という形でショッピングに行く機会を設けるなど、フェイトとリンデイの双方が望みつつも中々切り出せなかったそれを実行に移すきっかけを作ってくれたという意味では、感謝している相手だ。まあ、リンデイはリンデイでフェイトの思いを汲んで、

立香のところに通う理由を作ってやったりしているわけだが。

とはいえ、実際問題として前述したような要素があるのも事実。親戚ならまだしも、相手は完全無欠の赤の他人だ。これらの要素だけでも、十代にもならない女の子が個人的に親しくする相手としては不適切…というのが世間一般の考えだろう。

果たしてフェイトと彼の交友関係を、保護責任者として自信はどう判断すべきなのだろうか。リンデイとしては、この場はその判断を下すための材料を得る場と捉えていた。

しかし、流石に面と向かってそんなことを言うほど不躰ではない。朗らかに会話をしながら、立香が一体フェイトのことをどう思っているのか、これからのことをどう考えているのか、そのあたりを見抜かなければと笑顔の奥で細心の注意を払う。

やがて、士郎が紅茶を運んできたのをきっかけに、立香が少し面持ちを変える。それは、少しばかり真剣さを帯びたもので、自然リンデイも一層気持ちを引き締める。

「ところで……」

(来たわね)

「今日お呼びしたのはちよつと相談したことがあるからなんです」

まさかとは思うが、まだ十歳にもならないフェイトを相手に「交際を申し込みたい」とかは言いださないと思いたい。しかし、人の趣味嗜好は千差万別。他者に迷惑をかけたり、公序良俗に反しない限りは否定するものではないだろう。だが保護者として、彼がもしそんなことを口にしようものなら……

(なんとしてでも、フェイトさんを守らないといけないわ!)

「クリスマスのプレゼントについて、ちよつとご意見を伺いたいなあ」と

「へ? クリスマス?」

もちろん、地球に滞在するにあたりリンデイもこちらの風習などについてはある程度リサーチしている。当然、クリスマスなる行事も把握しており、せっかくの機会なのでささやかなパーティを行い、こっそり用意したプレゼントを贈って驚かせてやろうと、忙しい合間を

縫ってエイミィと計画しているところだ。クロノは横目で呆れた様子を見せているが、なんだかんだと協力的だし、慣れない女の子へのプレゼントに四苦八苦していることをリンディは知っている。

話は逸れたが、想定していたような内容ではないことには純粹に安堵した。まあ、クリスマスにプレゼントを渡して告白…なんて可能性も全くないわけではないだろうが、立香の様子は「想い人に贈るプレゼントに悩む恋する青年」というにはほど遠い。かといって、クロノのような「どんなプレゼントなら喜ばれるかいまいちわからず迷走している」風でもない。

なんというか…どこか慣れた様子を伴いながらも、一計を案じるような印象があった。

(一安心ではあるけど…でも、女の子へのプレゼントをその保護者に相談するっていうのはいただけないわ)

気持ちはわからないでもないが、流石のクロノでもそこまでデリカシーに欠けてはいない。予想とは違った方向性ではあるものの、リンディの立香への評価が若干低下した瞬間だった。

とはいえ、リンディも基本的にはお人好し。相談内容的にはあまり乗り気になれるものではないが、頼られたからには応えようと思う。まあ、最終的には「自分で考えなさい」と結ぶつもりだが。けれども、立香の相談の本質はリンディの予想の斜め上をいつていた。

「…わかりました。それなら、候補に何を考えているか聞いてもいいかしら?」

「とりあえず簪かんざしと下駄、あと巾着を考えてます」

「? ? ?」

全く予期せぬラインナップに、思わずリンディの頭の中を?マークが飛び交う。

名称に親しみがなく、どんな品なのかイメージがわからないのだろう。ただ、とりあえず「クリスマスプレゼント」にはいささかならず不適切な気はした。

「…それは、どんなものなのかしら?」

「あ、これパンフレットです、どうぞ」

そうやって差し出されたのは、薄手の冊子。どうやら、中々に用意が良いらしい。

そこにはいくつかの写真に蛍光マーカーで丸印が引かれており、見るとどれも普段地球での暮らしではあまり目にしない趣の品ばかり。だが、どれも可愛らしく異国情緒に溢れている。

ただ、フェイトが好む服装に合わせるとなると、非常にミスマッチではなからうか。

と思っていると、立香の方から補足の説明が入ってきた。

「この国の民族衣装で、和装とか和服とか呼ばれるものに合わせるものですね。最近だと日本人でも殆ど着る機会はないですけど、正月とか晴れの日なんかには着ることがあります」

「あら、そういうものなの?」

「ちなみに、女性用の着物だとこんな感じですよ」

続いて差し出された冊子を取り、じっくり目を通す。ミッドではほとんど見かけないタイプだが、広い次元世界には似たような服飾文化もある。柄や細部の形状などは違うが、リンデイもようやくイメージが湧いてくる。

と同時に、例えば正月などにフェイトにこれを着せたらどうなるだろうと想像を膨らませ……

(着せたいわあ……でも、困らせちゃうかしら? だけど、せっかく地球

きつと、フェイトは恥ずかしがったり照れたりしてしまうだろうが、それも含めて可愛いに違いないと確信する。別に息子を産んだことに不満があるわけではないが、こういう可愛らしい格好をさせる楽しみは女の子ならではだろう。

とはいえ、価格の項目を見ると流石にお安くはない。リンデイの収入なら特に問題はないのだが、間違いなくフェイトが気にする。ただでさえお世話になってばかりで何も返せていないというのに、これ以上は……と考えてしまう子であることは、この半年でよくわかった。遠慮がちで慎重深いのは基本的に美德だろうが、時には子どもらしく甘えてほしいと思う。

(着せたいわあ……でも、困らせちゃうかしら? だけど、せっかく地球

に来たわけだし……)

もうすっかり立香への懸念など遙か彼方。今はどうすればフェイトに和服を着せられるかで、リンディの頭はいっぱいだった。贅沢を言えば、一緒に選んで贈ってあげたい。そのためなら、多少値が張るとしても必要経費のうちだろうと思う。しかし、現実的に考えるならフェイトの性格上、彼女を困らせる結果になりかねない。それは決してリンディとしても本意ではない。

そんな彼女の頭の中の葛藤を見透かしたかのように、苦笑を浮かべる立香。それに気づき、慌てて冊子を閉じながら「ゴホン」と咳払い。

「な、なるほど。あなたの意図はわかったわ。つまり、フェイトさんがこういった服を着る時用の小物をプレゼントするということね」

「はい。正月も近いですし、ちょうどいいかなって。あ、ちなみに和服はレンタルとかもありますよ」

「あら、そうなの?」

「美容室とか写真屋とかですね。あと、持っている人もいるでしょうし、その人に借りるという手もあります」

(なるほど、それなら……)

元手があまり掛かっていないのなら、フェイトもそこまで遠慮はしないだろう。それでも恥ずかしがりはするだろうが、それはむしろ必須項目と言っても過言ではない。堂々と着こなすのもいいが、初々しく照れるのも捨てがたいものだ。

まあ、どうせなら買ったものを贈ってやりたいところだが……それは欲張り過ぎと自らに言い聞かせる、今はまだ。きつと長い付き合いになるので、長い目で見て機会を待とうと思うことにする。

「それで、その中のどれを贈るつもりなの?」

「一応、最終的には全部ですね。できれば、他にもいろいろ揃えたいところですけど」

「でも、いくらあなたからでもそんなに贈ったら、流石にフェイトさんも遠慮するんじゃないかしら……」

立香に対しては割と心の敷居が低く、素直に甘えを見せていること

に若干の嫉妬を覚えなくはない。まあそれはそれとして、そんな立香でも三品も贈ればフェイトも困ってしまうのではなからうか。

相手に喜んでもらうためのプレゼントであり、どれだけ嬉しくてもそこに「困る」という感情が混じってしまったっては台無しだ。だが、そんなリンデイの危惧を立香は思いもよらぬ角度から一蹴する。

「いえ、クリスマスで渡すのは簪だけのつもりです」

「？ クリスマスで…というのと、他のタイミングでも渡すつもりなの？」

「はい。とりあえず、お年玉代わりに巾着を、進級祝いにかこつけて下駄のつもりです」

加えて、機会さえあれば他にも和装系の小物を順次贈っていくつもりらしい。例えば、バレンタインにチョコを渡されるようなら、ホワイトデーのお返しに、といった具合に。

回数を分けるというのはわかったが、しかしそれだと立香の狙いがぼやけてくる。というか、何を贈るかも、どうやって贈るかも既に決まっているのに、どうしてリンデイに相談などしているのだろう。いや、そもそも何を相談したいのだろうか？

「それで、あなたはいったい私に何を聞きたいの？」

「ああ、すみません。そういえば、そつちをまだ言ってますでしたっけ。

要は、小物全般先にこつちで揃えるので、リンデイさんには浴衣を用意してもらいたいです」

「浴衣、というのは？」

「簡単に言うと、夏に着る薄手の着物」のことです。振袖とかに比べればリーズナブルなものが結構あるんで、こつちなら持つてる人はそれなりにいるんじゃないですかね」

そこまで聞いて、ようやくリンデイも立香の狙いが分かった。要は、順番を逆にして攻めようというのだ。

「……なるほど！ 先に小物を揃えて、せつかくだから浴衣も買っちゃいましょう」って流れに持っていくということね!!」

「ええ。一通り揃ってるのに和装そのものがないんじゃないや片手落ち感

「否めません。そこを強調して……」

「なおかつ、リーズナブルなお値段ならフェイトさんも流されてしま  
う、と」

「その際、ちよつとお高めの着物を先に見せるのがミソですね。金銭  
感覚を麻痺させるんです」

二人の会話を鍛えた耳でとらえた翠屋店主は「楽しそうに悪い顔で  
親切的な相談をするってのも、妙な話だよなあ」と、後日愛妻に向けて  
ぼやいたそうなの。

「リンデイさん、フェイトと浴衣選び…したくありません？」

「したいわ!!」

「どうせなら、フェイトに似合うのを見繕いたくないですか？」

「むしろ、一番似合うのを探したいわね!! 一緒に選べたらなお良し  
よ!!」

「じゃあ、最終決定はフェイトと、ということ。ただ、ある程度方向  
性というか色調か基本の柄は絞ってもらってもいいですか? その  
辺を踏まえた上で、フェイトに似合う簪とか選びたいですし……」

「どうせだし、お正月に着物をレンタルしましょう。そこで色々試し  
て、絞り込むというのはどうかしら?」

「いいですね。でも、そうなる簪は後回しが良いかな? だとした  
ら……」

そのまま、嬉々として悪巧みに興じる二人。同時刻、フェイトが良  
くわからない悪寒に襲われたかどうかは、神のみぞ知る。

ついでに、帰宅したリンデイから計画の詳細を知ったクロノが一枚  
噛もうとしたが……

「ダメよ」

「なぜですか!？」

「だって、立香さんとクロノの二人で同じような方向性のものをプレ  
ゼントしたら、こっちの意図がばれちゃうかもしれないじゃない。ど  
うせだし、ここはサプライズでいきましょう」

「だ、だったら僕が……」

「いや、発案者を蔑ろにしちゃダメでしょ。大丈夫、クロノ君のプレゼ



ント選びは私がちゃんと手伝ってあげるから」

「くうっ……」

悔しそうに臍を噛むクロノ。外堀を埋めてサプライズとか、僕もやりたかった”と言わんばかりだ。

「にしても、立香さんフェイトちゃんのことホント理解してますね」  
「そうねえ……。何をしたらあの子がどう反応するか、どうすれば普通なら遠慮するプレゼントを受け取らせられるか……。前に手をまわしてくれた時にもちらっと思ったけど、本気で困い込むのも手かもしれないわね」

色々と不安要素の多い相手ではあるが、それを補って余りあるほどに藤丸立香はフェイト・テスタロッサの良き理解者だ。彼女が心の奥底で求めながらも、過去の経緯から二の足を踏んでしまう……。与えられる愛情や甘えることに対する恐れを、彼はするりとかいくぐることが滅法巧い。

対等で、心からぶつかり合える友達なのはとは別の意味で、彼はフェイトに必要な存在だ。今回、リンディはそれを確信した。

「いや、フェイトはまだ子どもですよ。それは流石に気が早いんじゃない……」

「まあ、交際や結婚云々はね。だけど、彼との交友関係は大事にしたいわ。」

……。これから先、あの子はきっと多くの心無い言葉と視線に晒される。決して強い子じゃないもの、あの子の心を守ってくれる人は一人でも多い方が良いわ。そんな人たちの存在が、そのままあの子の力になる。

クロノも、それはわかっているんでしよう？」

「それは……」

「色々と気にかかることのある人ではあるけど、決して社会不適合者というわけじゃないし、かといって地に足がついていないわけでもない。今日話して、そう思ったわ。なんなら、こっちで斡旋してあげてもいいしね♪」

「それはやり過ぎではありませんか？」

半ば冗談と捉えてため息交じりに苦言を呈するクロノだが、その実リンディは割と本気だった。

ただそれは、単にフェイトのことを思つてのこと……だけではない。(なんとというか、不思議な人だったわね。話している分には、本当に普通の男の子という印象だった。だけど、どこか……)

底知れないものを感じた。

突出した能力を持っていたり、並外れた器を持っていたりする人間であれば、職業柄触れる機会が多いのでなんとなくそうとわかる。しかし、話してみた限り立香から特にそういった印象は受けなかった。にもかかわらず、ふとした拍子に得体のしれない感覚を覚える。宇宙の始まりや終わりを考えるような、あるいは“生”と“死”の本質を探ろうとするかのような、そんな根源的な畏怖。触れてはならない、触れるべきではない領域にある“ナニカ”を、リンディは藤丸立香という存在の奥の奥に感じ取っていた。

その正体を知るのは、これからさらに数年後のこと。

ちなみに、約半年後。

八束神社で行われる毎年恒例の夏祭りに、それぞれ思い思いに着飾ったフェイトたちの姿があった。

「おー♪ みんなかつわいい!」

「えへへ♪」

「ありがとうございますう」

父が割と古い家柄ということもあつてか、普通に家に和服がある高町家。流石に普段は着る機会がないが、せっかくなので浴衣の持ち合わせがない面々に貸し出し、一同バシツと浴衣姿。ちなみに、正月にも同じようなことはしている。例外はずかくらいだろう、彼女の都合ちゃんと自分の浴衣があるので借りてはいない。

代わりというわけではないが、八神家のヴォルケンリッターも浴衣姿であり、大人の色気を醸し出すシグナムとシャマルに周囲の男たちの視線が否応なしに集中している。他にも、同じく着付けてもらったエイミイ、男物を借りたクロノやユーノの姿もある。

「そういえば、フェイトはまだなんですか？」

「ああ、そろそろ来るはずだ…と、来たようだ」

アリサの質問に答えているところで、クロノの目が夏祭り参加者最後の二人の姿を捉える。

そこには、よく似た色彩と柄の着物を着たフェイトとリンディの姿。

「みんなく、おまたせく。ほら、行きましょうフェイトさん。みんなまってるわ」

「は、はい……」

恥かしそうにモジモジしながら、リンディに手を引かれて慣れない下駄に苦勞しながら歩みを進めるフェイト。

血の繋がりが無いにも関わらず、よく似た浴衣に身を包んでいるからか……仲の良い親子にしか見えない。それを意識してなのか、ますますフェイトは顔を赤くしてうつむいてしまう。しかし、それが決して嫌そうではないことも、それなりに付き合っている者なら一目瞭然。懸命に抑えてはいるが、口角が緩みどう見てもうれしさをかみ殺しているようにしか見えないからだ。

「おく……お正月にも思うたけど……フェイトちゃん、髪を上げたらまた別の大人っぽさがあるなあ」

「あ、浴衣だけじゃなくて髪型もリンディさんとおそろいなんだ」

「う、うん。リンディ……さんが、せっかくだからって」

「そうなのよおく。ちよつと若返ったき・ぶ・ん♪」

いつになく上機嫌のリンディと、嬉しさを堪え切れない様子ではにかむフェイト。周囲から向けられる眼差しも、実に温かい。

加えて、そんな結い上げたフェイトの髪を飾るのは、今年のクリスマスに立香から贈られた簪。さらに、手元や足元をはじめ、要所要所で彼が贈った品が散見される。リンディと秘かに打ち合わせつつ選んだ甲斐あり、それらは落ち着いた色調の浴衣を邪魔せず、何よりフェイト自身の魅力を引き立て実によく似合っていた。

「ふわあ、フェイトちゃんホントにキレイ……ユーノ君もそう思うよね？」

「え？ あ、うん……」

なのはの問いにどもりながら応じつつ、チラチラとユーノの視線はなのはの方へ。彼が何をどう思っているか、目が口以上にモノを言っている。

「さ、それじゃそろそろ繰り出すわよ！」

「「「おー！」」」

先陣を切るアリサの後から親友四人が続く。

そんな様子をそれぞれの家族たちは微笑ましそうに見守りながら、数歩後を歩くのであった。

その後、お小遣いの許す限り祭りと出店を堪能した子どもたち。普段子ども扱いされることを嫌うヴィータが、なんだかんだで思い切り楽しんでいたのは秘密だ。

ひとしきり出店を冷やかし終え、そろそろ一休み…と思ったところで、フェイトたちは良く見知った人物を発見する。

「あれ、立香？」

「ああ、フェイト。それにみんなも、祭りは楽しんでる？」

「あ、はい」

「ところで、何してはるんですか？」

「なにつて…知り合いのヤ…ゴホン。知人に頼まれて俺も屋台をね」

「焼きバナナ？」

「いや、そこはチョコバナナでしょ」

不思議そうに首をかしげるすずかの後を引き継ぐ形で、アリサが祭りの定番メニューを微妙に外した出し物にツツコミを入れてくる。

ちなみに、彼女たちの手にある焼きそばは、八神家のメシ使いが受け持つ出店の品だ。屋台で供される品は『海の家補正』に匹敵する『祭り補正』で通常の5割増しで美味になる。しかし、そんな補正を無視するクオリティの高さで、純粋に美味なことから屋台は満員御礼。アレは材料が切れるまで解放されまいと、ちよつと顔を出して早々に抜け出してきた次第。

そんな大繁盛屋台と比べ、立香の屋台は実に閑散としている。

「美味しいんだけどなあ、焼きバナナ」

自信を持って出した店だけに、しょんぼり具合が著しい。というかそれ以前の問題として……

「不味い、ここでせめて元を取らないと、今月の家賃はおろか食費が……」

割となけなしの財産を突っ込んでいたらしく、立香の顔色は青いどころではない。このままだと、明日食べる米にすら難儀してしまう。せめて材料費くらい稼がないと、本当に生活が立ちいかないのだ。

「えっと……手伝おうか？」

「……………頼める？」

背に腹は代えられない……とばかりに深々と頭を下げる立香。

その後、流石に放っておくわけにもいかず、それに一通り祭りを堪能した後ということもあり、手の空いている面々で客引きのお手伝い。実目麗しい女性陣や、一生懸命ちよこまか動き回る子どもたちのおかげもあり、完売こそしなかったものの無事に利益を上げることに成功。

ただし、子どもたちに頼むという大変不甲斐ない状況の心理的ダメージは大きかったらしく、終始立香はどんよりとした空気を背負っていたそうなの。

ちなみに……

「へえ、どんなものかと思ったけど結構いけるわね」

「うん。バナナって聞くと生かジュースとかが浮かぶけど、こういうのもあるんだね」

「むむっ、これは新しい味の開拓の予感。上手くすれば、しろ兄から一本取ることもできるかもしれへん」

「モキュモキュ……今度お家でやってみようかな？」

「えっと、美味しかったよ立香」

と、子どもたちからは割と好評だったことを記す。

ついでに、立香が外堀を埋めてリンディがちよつと高価な品をフェイトに買う……という一連のプロセスは、他ならぬリンディが味を占めたこともあり、この後もしばらくの間続けられるのであった。

## IF 次元特異点「英霊集結異邦ミッドチルダ」 天文台の放浪者

「物語」というものは、一部例外を除けば「めでたしめでたし」で締めくくられるのが常だ。大きな事件、過去から続く因縁に決着をつけ、未来には一点の曇りもなく、晴れ晴れとした世界が待っている……果たして、本当にそうだろうか。

意地悪な継母と義姉に虐げられた生活から一転、王子様の心を射止めた「灰かぶり」は本当に幸せになれたのか？

礼儀作法も政治の力学も知らない小娘が、唐突に貴族社会に放り込まれて上手く立ち回れるものだろうか。あるいは、貴族たちは何も知らない小娘に対し、本当に心からの敬意と忠誠を誓ってくれるのだろうか。

鬼を退治し、金銀財宝と名声を得た「英雄」のその後の人生は満ち足りたものだったのだろうか？

もちろん、「愛さえあれば他に何もいらぬ」なんて嘘っぱちだ。衣食足りてこそ、人は礼節を知る。それらを満たすためには、金銭は重要な要素だ。故に、人間社会において金銭がないということはそれだけで不幸なことである。とはいえ、だからと言って幸福を金銭で買うこともできない。買えるのは、幸福を支える土台となる「豊かさ」まで。富と名声を得た英雄の周りには多くの人が集まっただろうが、果たして彼らは真実「英雄」の幸福を願ってくれたのだろうか。「めでたしめでたし」で終わった物語の先には、果たして何が待っているのだろうか。

例えば「人理焼却」と「濾過異聞史現象」、そして「人類悪」。真正銘「世界の危機」を前に、圧倒的絶望に屈することなくこれらを打破した者たちの「その先」に待ち受けるものとはいいたい……。

——これは、その可能性の一端。

医務室のベッドの上で、貫頭衣に袖を通した「藤丸立香」の表情は

穏やかだ。動じることなく落ち着きを払い、現状とこの先に対する不平不満を滲ませもしない。まるで、そんなものありはしないと云わんばかりに。

それが、「ゴルドルフ・ムジーク」をどうしようもなく苛立たせる。「本当にいいんだな」

荒げそうになる声を懸命に抑え、絞り出すように問う。

体面を気にしていないと言えば嘘になるが、それ以上に「今更」であることを理解しているからだ。まあ、それを言えばこの問い事態が「今更」の極致なのだが。しかし、立香にとってはその今更が救いだった。

本来、「非人間」の代表とも言うべき「魔術師」でありながら、彼はどこまでも人が好い。他人の痛みに共感し、他者に犠牲を強いることを躊躇する。そんな、魔術師としては余分な「人間らしさ」。

指摘すれば本人は苦々しい顔を浮かべるのだろうが、そんな彼の下で戦えたのは幸運なことだったと思う。今もこうして、一部下に過ぎないはずの立香の身と未来を案じてくれている。本当に、カルデアの新所長に就任したのが彼でよかった。

だからこそ、少しだけ夢を見てしまう。

「もし」カルデアへの襲撃がなかったとしたら、案外査問の後も誰一人欠けることなくカルデアで過ごすことができたのではないだろうか。そして、いずれはサーヴァントたちも再召喚し、皆で騒がしくも割と危なっかしい…だけど、楽しい日々が送れたのかもしれない。そこでもきつと、ゴルドルフはサーヴァントたち関連の奇行・珍事に頭を抱え、時に現実逃避しながら最後まで付き合ってくれていたのだと思う。

なにより、そうであればかけがえのない後輩であり、無二のパートナーだった彼女も……

でも、それは結局夢でしかない。

カルデア本部は壊滅し、多くの犠牲者が出た事実が変わらない。その後に待ち受けていた「人理漂白」、人類史そのものが行った足切り「異聞帯」との対決も。

自らの手で行われた、〃あつたかもしれない世界〃を滅ぼすという決断。果てしない旅の中で支払うことになった、多くの犠牲。それらが〃なかった〃ことになるはずもないのだから。

「良いか悪いかで言えば……」

もちろん、良くはない。良くはないが、選択の余地はない。

多くのものを失ってきた、多くのものを切り捨ててきた。

ある時はその身を挺して送り出され、またある時は自分たちが生きる世界のために滅ぼしてきたからには、責任がある。〃生きる〃ことこそが、その責任を果たす唯一の方法だと信じている。

思いは同じ。だからこそ、その先を言葉にせずともゴルドルフには理解できた。理解したからには、彼もまた責任を果たさなければならぬ。

「任せておけ。〃それ〃を差し出すからには、協会にこれ以上口は出ません。そして、もう会うこともないだろう」

「……そうですね」

「マスター藤丸立香を、人理継続保障機関フィニス・カルデア所長ゴルドルフ・ムジークの権限において、永久除名する。目が覚めれば、貴様はただの一般人だ。この勝ち取った世界で、どこへなりと行き、好きなように生きるがいい」

これは、ゴルドルフなりのケジメであり、立香への配慮なのだろう。何しろ、カルデアの存在は既に有名無実化しているのだから、今更こんな宣言にさほど意味はない。

そもそも本部は壊滅し、彷徨海のノウム・カルデアも特例で設置されていただけ。人理漂白が解決した以上、彷徨海がカルデアの存在を許容する理由はない。故に、ノウム・カルデアはすでに解体され、残されたのはシャドウとストーム・ボーダーだけ。補給と整備をする施設がない以上、拠点として用いることは不可能だ。当然、サーヴァント達への魔力供給もできないことから、彼らも再度退去している。

いや、どのみち〃人理の危機〃を打破した以上、この世ならざる者を留めておくべきではないだろう。彼らは英霊の影法師、一時の稀人に過ぎないのだから。



「お世話に、なりました」

「……………ゴホン。これは独り言だが」

(独り言なら、返事はしない方が良いか)

「貴様は魔術師ではなく、どこまでいっても『偶々マスター適性とレイシフト適性を有しただけの一般人』であり、『他にいないから使われた補欠』に過ぎん。申し訳程度の魔術回路はあるが、属性的にも才覚的にも見るべき点はない。唯一、令呪を宿した右手だけが魔術的に価値のあるものと言えるだろうが、それも協会に差し出すからには、とことん無価値な存在というわけだ」

散々な言いようだが、別にこれと言って反感は覚えない。他でもない、立香自身がその通りだと思っっているからだ。礼装を介さなければ碌に魔術も使えず、現場に出ても逃げ回り守られることしかできない、偶々生き残ったからお鉢が回って来ただけ。本当に、ただそれだけのことなのだ。

だが同時に、『そういうことにしておく』というのがカルデアの生き残りたちの総意でもあったわけだが。

「故に、カルデアが解体…ではなく、カルデアから放逐された以上、貴様はもう魔術世界とは無関係になる。麻酔がてら、今からカルデアでの記憶を消すわけだが……………」

「……………」

「実を言うと、暗示とかその手の魔術は苦手だな。うん、もしかすると…方が一にもないと思うのだが、上手く消せないかもしれない可能性も無きにしても非ず、という事実を否定はできないかもしれない。なので、命が惜しければ余計なこととは言わずに黙っておくように」

(……………ありがとうございます)

あくまでも独り言なので、立香も胸中で感謝を送る。カルデアでの輝きに満ちた時間、それを残してくれる。本当に、これ以上はない退職祝いではあるまいか。

ちなみに、それはそれとして『宝くじに当たった』という名目で、滞りまくっていた給料に「危険手当」をはじめとした各種手当がついて、軽く人生数回は遊んで暮らせる額の報酬として振り込まれていた

りするのだが…本気で使い道に困ることになることを、この時点の立香は知らないのであった。

そうして別れを済ませ、魔術と麻酔の両方で立香が眠りについたので見届けたゴールドルフは、病室を後にする。と、そこに待っていたのは……

「サイキョウヤキ君」

「いや、流石に無理矢理すぎるだろソレ!! いい加減素直にムニエルって呼べばいいだろ!」

「うむ、私としてもちよつと苦しいかなとは思った」

「思うくらいなら言うなつての……で、これでよかったのかよ、オツサン」

「良いも悪いもない。こうしなければ、あの小僧は誰とも知らん魔術師の手に落ちていただろう。その後の結末など、考えるまでもない。しかし、契約の要である令呪を差し出してしまうえば、残るのは魔術的には何の価値もない只人の身体だけになる。……他に、どうしろという」

「まあ、そうなんだけどよ……」

かつて、〃人理焼却〃を解決した時と同じだ。立香はサーヴァントたちを現世に留めるための要石ではあるが、ただそれだけの存在に過ぎない。呼び出されたサーヴァント達との交渉などは、他の者たちがこなしたのだと。〃そういうことにした〃。そうでなければ、彼の身の安全は保障されないから。

とはいえ、二度にわたつて世界の危機を乗り越える一助を為し、数多の英霊たちと縁を結んだ立香の存在はそれだけでは誤魔化せないものになっていった。だからこそ、ゴールドルフは苦渋の決断をしたのだ。サーヴァントとの契約、特にその要となった〃令呪〃を差し出し、代わりに立香の身柄は解放する。それが、協会との間で行われた取引だった。

魔術協会に対して、ほとんど影響力を持たないゴールドルフにできたのは、これだけだった。それでも、せめて立香の命だけでも守ろうと懸命に走り回り、方々に頭を下げたことを、立香は知っている。本人

は、それで納得できたわけではないのだろう。

実を言えば、ゴルドルフは一度ならず提案したことがある。いつそのことサーヴァントたちの力を借りてはどうか、と。だが、立香はそれを拒んだ。彼らは「人理の危機」を乗り越えるために力を貸してくれたのだ。そんなかけがえのない仲間たちの力を、個人的な事情で使うべきではないと思ったのだ。

もちろん互いの間に信頼はあったし、中にはそれ以上のものを築き上げられた相手もいたと思う。しかし、だからこそその一線を越えたくはなかった。

だからこそ、ゴルドルフの勝ち取った結果を粛々と立香は受け入れた。彼に対する、深い感謝と共に。

「サーヴァント達  
「アイツらが知ったら、荒れ狂うだろうな」

「言うな、考えるだけで胃が痛くなる」

とはいえ、一部の切れ者たちはこの事態も予測していた。予測した上で、立香の意思を尊重し、現世に残って手を回すことをしなかった。実際問題として、彼らが立香の生きている間ずっと守れるという保証がなかったというのもある。バックアップなしに彼らを現世に留めておけるほどの魔力を用意することは不可能だったからだ。

だからこそ、ゴルドルフに策を託した。せめて、彼の命だけは守られるように、と。

「マシユと一緒に、送り出してやりたかったんだけどな……」

「言ってやるな。誰よりも、あの小僧が一番彼女にもっと世界を見せてやりたかったと思っっているのだからな。」

同時に、キリエライト君の意志の結果だ。我々が、彼女の意志にケチをつけるものじゃない」

「わかっちゃいるけど……やるせねえな」

時間神殿での戦いの際、マシユは立香を守って命を落とした筈だった。にもかかわらず、何の奇跡か彼女は蘇生した。それも、試験管ベビーとしての宿命である短命を覆し、人並みの寿命を得て。

もし、カルデアの襲撃がなければ、あるいは最後の戦いを生き延びることができれば……二人で共に勝ち取った世界を生きる未来も

あつたはずなのに。しかし、そんな未来は待っていないかった。待つていたのは二度目の、そして永久の離別。

そもそも人理焼却解決後、マシユの身体から英霊ギアラハッドは退去していた。例外的に、「ギアラハッドとは異なる盾の騎士」として成長し、生きた人間でありながら借り物に過ぎない「英霊の霊基」をその身に宿し続ける存在として成立したからこそ、令呪によって無理矢理眠っていた霊基を覚醒させ戦うことができた。

とはいえ、それは途方もない無理であり、無茶であり、この上ない無謀だ。そんなことをすれば、当然代償を支払うことになる。健康体になったとはいえ、マシユの身体は本来強靱とは程遠い華奢な女の子のそれ。酷使の代償は、彼女の命だった。

人理漂白解決後から息を引き取るまでの数日間、穏やかに過ごすことができたことを、果たして「救い」というべきか否か。

「いつまで俯いている！ そんなことではキリエライト君に笑われ：はしないな、うん。むしろ、心配されるか？」

「あく、マシユに心配をかけるのはまずいなあ……」

「そう思うならシヤンとしなさいよ、ホントに！ 藤丸のことは何とかなったけど、私たちのことはまだ何も決まっていななんだぞ！ あわわわわ……とりあえず、命だけは何としてでも守らなければ」

（現代科のロードが動いてるらしいけど、あの人こつちでのこと覚え  
ロード・エルメロイⅡ世 諸葛孔明  
てんのか？）

それとも、切れ者たちが残した策の一環なのかは、ムニエルにはわからない。とはいえ、まずは生き残るために全力を費やさなければならぬ。それが、生き残った者の責任なのだから。

それから数年後、とある商社の屋上にて。

「……………ふう〜」

啜えていた煙草を「左手」でつまみ、口内を満たしていた紫煙をゆっくりと吐き出す。

瞬く間に煙が空へと広がり溶けていく様を、立香は遠い何かを見るような眼差しで追いかける。

とそこへ、耳に馴染んだ声がかげられた。

「おう、藤丸。お前も休憩か……って珍しいな、お前吸う人だったっけ？」

「まあ、偶に」

偶に、思うところのある日や特別な日だけ吸うので、この同期入社  
の知人が知らないのも無理はないと思う。

とりあえず、「ん？」と一本差し出すと「わりいな」と悪びれること  
なく持つていく。慣れた所作でライターに火を灯し、それから煙草を  
口へ……運ぼうとしたところで、何かに気付いた様子で問いかけられ  
る。

「そーいやお前、どうやって火点けたんだ？」

「どうって……普通に？」

「普通って……お前、右手ないじゃん」

普通言いにくく感じそうなものだが、このあけすけな知人はそのあ  
たりあまり気にしない。立香自身、気にされる方が居心地が悪いので  
その方がありがたいのだが。

「あの日」カルデアを離れる際、立香は自身の身の安全と引き換え  
に「令呪」を差し出した、それを宿した「右手ごと」。令呪だけを剥  
がすことはできた、だがそれでは協会が納得しなかったのだ。令呪を  
宿し、その影響を受けたであろう魔術回路を含めて、彼らは欲した。

命と右手、選択の余地はない。立香は「右手」で「自由」を買った  
のだ。ゴルドルフの申し訳なきような、痛みをこらえるような顔がま  
るで昨日のことのように思い出せる。

「左手で煙草持つて、どうやって火点けるんだよ」

「そりゃ啞えて、空いた左手でライターを使うんだよ。というか、そう  
するしかないだろ？」

「うへえ……俺、目の前で火が揺れるのって苦手なんだよな。昔、近所  
の神社でボヤ騒ぎ起こしたのがトラウマでさあ」

そういえば、この知人は極力火に近づこうとしないことを思い出  
す。なるほど、そういう理由があったのか。

「で、そっちはどうよっ」

「ん？」

「だから、お前の受け持ちの新人」

「ああ……優秀だよ。入社半年で、もういくつか契約取ってきたから」  
「そりやスゴイ、先輩の指導の賜物かね」

「どうかな？ T大出だし、本人の努力と能力の問題かもよ？」

「一流大を自慢するなら、もつといいところ会社に行けって話だろ。うちみたいな、あと一步で一流になれない二流企業じゃなくてよ」

「まあ、今の時代中途採用でのステップアップもあるし、ここもそのつもりなんだろう」

「俺らは踏み台かよ。いや、だとしても世話になった相手のことを影で『教わることなんかないし』『眼中にないよ、すぐに追い越すさ』とか言うのはどうなんだ？」

受け持ちの新人がそういうことを言っているのは知っている。が、別段思うことはない。優秀な人間が上を目指すのは当然だし、若いうちに周りへの配慮が足りないのは止むを得ないことだろう。だが、そういうところの知人は、若干呆れの入った表情を浮かべてくる。

「いや、お前だってまだ25だろ。枯れてるといえるか、悟ってるというか……」

「実際、俺も真面目なわけじゃないしね。〃向上心のない奴は馬鹿だ〃って言うなら、俺は馬鹿なんだろうし」

「夏目漱石、だっけか？」  
「そ」

事実、立香にはあまり向上心というものが無い。というより、何を目指しているのかわからない、というのが正しいだろうか。

一生遊んで暮らしても使いきれないほどの資産を得たことがあるというのもあるだろうが、そちらはほとんど慈善団体などに寄付してしまった。まあ、それでも慎ましく生きていく分にはさほど苦勞することは無いだろう。

理由はわかっている。〃カルデア時代あの頃〃が濃厚過ぎたのだ。

生きるために必死で、前に進むだけで精一杯。世界なんて大きなものを背負える器ではないけど、それでも事実として自分の行動一つで

世界の存亡が決まることは理解していた。そのことを重く苦しいと感じたことは、数えきれないほど。ましてや……一つの失敗はもちろん、最善手を打てたとしても負けるかもしれない戦いばかり。加えて、勝つということは、生き残るといふことは、つまり、あったかもしれない世界”とそこに生きる生命とすべての歴史を滅ぼすこと。

それと社会で生きることがは比較していいようなものではないだろうけど、それでも道に迷ったかのような感覚がずっと付きまとっている。果たして自分は何を目指し、どこに向かおうとしているのか。否、そもそも”どこに行きたい”のだろうか。

(まあ、誰もが思っていることなのかもしれないけど……)

立香の場合、一際その思いが強いのもかもしれない。

それでも社会に出たのは、託されたのも、背負ったのも、得たものを無駄にしたくなかったから。世捨て人のように生きては、手を取ってくれたサーヴァントたちを失望させるだろうし、犠牲にしてきた全てに申し訳が立たない。何より、信頼してくれた後輩マッシュが悲しむだろうから。せめてこの世界を生き、彼女が見られなかったものを見よう、そう思ったのだ。

「でもよお、アイツの成果つてのもお前がいたからこそだろ？ 地道に信頼関係を築いてたからこそ、割と博打に近いアイツの契約が通ったんだし。そこはちゃんと感謝すべきだと思うがね」

「そうか？」

「自覚なしか？ お前、成績は人並みだけど妙に顔が広いじゃん。課長や部長は新人にばかり目がいつてるけど、常務なんかはむしろお前の方を買ってるみたいだぞ。この前も、昇進の話があつたんだろ？」

「そういうお前は、噂話とかに耳聡いよな。情報売り買いする仕事とか向いてるんじゃないか？」

などと誤魔化してはみたが、確かにそういう話は再三来ている。

顔の広さから各方面の情報が入ってくるし、数は多くない代わりに一つ一つの契約は良好だ。短期的に見れば目立たないが、長期的に付き合っていけるであろう契約の比率が多いのが立香の特徴である。

また、部署内の人間関係にもひっそりと手を回している。奇人変人狂人、切れ者曲者キワ者に至るまで、キャラの濃いサーヴァントたち相手のそれに比べれば、部署内での人間関係の調節など朝飯前だ。

特別隠したつもりはないが、かといって喧伝もしていない。なので、課長や部長は気付かなかったようだが、役員クラスはそのあたりを評価しているらしい。

とはいえ、立香はそれらの話を全て断っている。『何をどうしたいのか』、それすらハッキリしない人間が上に立っても、害にしかならないだろうから。

そのまま、とりとめのない雑談を交わす二人。そうして話題は、休みの過ごし方に及ぶ。

「そういや、お前今度の夏はどこか行くのか?」

「んん、まだ決めてないけど、なんで?」

「いや、藤丸つて妙にフットワーク軽いだろ。中東に行ったかと思ったら次はインド、この前は北欧だったか?」

「うん。でも、国内旅行もそれなりにするけど?」

「そうなのか? まあとりあえず、今度はお前がどこに行くのかちよつと賭けをな。決まったら教えてくれ」

「人の旅行先で賭けるなよ」

「無理言うなつて。アメリカ横断旅行なんて言い出す奴なんだから、楽しまなきゃ損だろ」

「ホントは徒歩でやりたかったんだけどな、時間が足りなかった」

冗談と取られたらしく相手は笑っていたが、立香は本気だった。とりあえず、かつてレイシフトやゼロセイルで向かった場所、その『現代の姿』を見て回ったかった。見て、聞いて、触れて、それらすべてを伝えたかったのだ。本当は、二人で『自分たちが旅した場所』を巡りたかったから、そのせめてもの代償行為として。

「そうだ、今度合コンやるんだけどどうだ?」

「合コン?」

「おう」

「そういえば、そういう話は初めてだっけ。どういう風の吹き回し?」



「……まあなんつーか、入社したばかりの頃のお前って気さくな割に近寄りたいたいところあったからなあ」

言わんとすることはわからないでもない、むしろ「なるほど」と思う。今では大分折り合いもついてきたが、あの頃はまだマシユとの離別や改めて押し掛かる自分の為してきたことの重さに一杯一杯だった。入社試験を受けたのも、もとはと言えばジツとしていると気が触れてしまいそうだったからだ。

働いていれば、少しは気が紛れるのではないか。そう思って、特に目標もなく始めた社会人生活。結局、新しい目標はまだ見つけられないが、なんとか折り合いだけはつけられるようになった。

とはいえ、それと合コンに出るのは別の問題だ。

「でも、やっぱりお前は良い奴だし、最近はお前ほどじゃなくなったからな。せつかくだし、どうだ？」

「……ちよつと、考えさせてくれないか」

マシユのことは好きだった。それは親愛であり、友愛であり、恋愛だったのだろうと今では思う。

別に彼女に操を立て、他の女性と関係を持たないと決めているわけではない。そもそも、恋人同士になれていたわけでもないのだが。

「構わねえよ。でも、あんま深く考えないで出てみたらどうだ？ お前は良い奴だけど、このままだと『良い奴』で終わって、そのまま独り身になりそうだし」

「余計なお世話だよ」

「何なら、今夜一杯どうだ？」

「悪い、約束があるんだ」

「女か」

「残念、男。それも中年。昔お世話になった人と会うんだ」

「ちえ……まあ、とりあえず考えてみてくれ」

そう言って去っていく知人の背を見送ってから端末を開く。開いたメールに記載されていたアドレスに覚えはないが、件名に表示されていたのは「ゴルドルフ」の文字。

「……再会を喜ぶ、じゃ済まないよな、やっぱり」

本来、もう二度と会うことのなかったはずの相手であり、会うべきではない人。そんなこと、むしろゴールドルフの方がよくわかっているはずだ。にもかかわらず、こうして連絡が来たということは、相応の理由があるのだろう。

だからこそ、立香も普段あまり嗜まない煙草を吸いたくなつたのだ。

(そういうえば「まるでお線香みたい」って言ったのは、誰だったっけ?)  
いつだったか、一人で紫煙を燻らせている時にそう言われたことがあるが、アレは言い得て妙だったと思う。

煙草を覚えたのは帰国した後のこと。煙草を旨いと感じたことはないし、吸いたい衝動に駆られることもほとんどない。にもかかわらず、自分でもよくわからないまま煙草に火をつけていた。

揺れる煙の向こうに今はもういない人たちを見ていたことを、その時に初めて気づかされた。

(引きずってる、ってことなのかな?)

でもきつと、こうして煙の向こうに「誰か」を見ることは、一生止められないのだと思う。

久しぶりに会ったゴールドルフは、記憶より幾分か老けていた。とはいえ、相変わらず肥えている様子で、とりあえず健康そうで何よりだと思う。

「お久しぶりです、 所長」

「うむ、息災で何よりだ。だが、所長はやめろ。私は確かに誉れあるムジーク家の当主だが、それは一般人であるお前には関係のないこと。ましてや、もう上司と部下でもないのだからな」

「それなら……ゴルさん」

「いきなり距離感が近すぎやしないか!」

相変わらずのリアクションに、むしろ安心感さえ覚える。そのまま互いの近況を報告し合うが……

「なんだ、キョロキョロと落ち着きのない。貴様もいい歳だ、どっしりと構えることもできんのか」

「いや、こんな高そうなお店、しかも個室とか庶民には敷居が高いですって」

「ふっ、まあ無理もない……いや、配慮が足らなかつたな。私のような上流階級にとつては当たり前だが、貴様のような生まれながらの庶民には肩身が狭かろう。せつかくないので、好きなものを注文しなさい。こんな機会、早々あるものではないからな」

本当に、相変わらずである。

「しかし、世界を救ったマスターが、今や一般企業の平社員とは……まあ、分相応だろう。身の丈に合わないことをしても破滅するだけだ。私、そういう経験は豊富だからね」

「ゴルドルフさん」

「むっ……」

「今日は、どうして?」

「……」

よほど言いにくい要件なのだろうということとは、あつた時から察していた。雑談ばかりで本題に入つてこないこともそうだし、顔には隠しきれないほどバツの悪さが滲んでいたから。

「……貴様を狙っている者がいる、という噂がある」

「魔術協会ですか?」

「厳密に言えば協会の所属ではある。だが、降霊術を専門とする家系なのだが、歴史はあれども実績がない。協会に貴様の右手や『例の盾』の貸出を申請しても通らんことに、業を煮やしているようだ」

「それで、直接俺を?」

「実験材料にするつもりらしい。令呪のない貴様など、魔術的には価値がないとわかつているだろうに……」

それでも、その令呪を宿していた肉体ならば……と、何かしらの考えがあるのだろうか。

「……そうですか」

「協会はこの件において、干渉する気がない。少なくとも『神秘の秘匿』さえ守られるならばな」

「まあ、そういう組織らしいですしね」

「……………すまん」

それは、守ってやれなかったことに対する謝罪なのか。あるいは、もう二度と関わることはないはずの世界と関わらせてしまうことに対してなのか。

いずれにせよ、ゴルドルフの庇護を望めないことも分かった。あまり詳しくはないし情報も古いが、ゴルドルフの協会内での立場は決して高くない。「人理漂白」の解決がどういった扱いになっているかわからないが、協会を動かせるほどのものではないのだろう。

かと言って彼個人、またはムジーク家を頼ることもできない。ゴルドルフが立香を守ろうとすれば、いらぬ憶測を呼ぶ。それがきっかけとなり、対処できない大物を引き寄せては元も子もない。これは、かつて助力してくれたエルメロイ派にしても同じだろう。今を守ることでなくても、先に続かないのでは意味がない。

「……俺は、どうなりますか?」

「我々に守ることはできない。かと言って、貴様に自分の身を守れるかと言えば……」

「無理でしょうね」

ある程度の自衛はできる。だが、それなりの腕を持つ魔術師が相手となれば、立香の手に余る。そんなこと、他でもない立香自身が一番よくわかっている。

「まあ、ちよろまかした礼装とみんなが残していつてくれたアレコレがあるんで、運が良ければ何とかかりますよ」

とは言ってみたものの、それも悪手だ。立香がカルデアでのことを覚えている証明になるし、サーヴァントたちが残した品々の中には魔術的に途方もない価値のあるものも少なくない。むしろ、追及と追手が増えるだけだろう。なにより、隠匿したゴルドルフたちの立場を危うくする。

立香もそれを理解しているので、本当にそれらを使う気はない。まあ、自分にできる限りの範囲で抗う。その結果は……受け入れるしかないだろう。そう、思っていたのだが……

「いや、貴様は逃げる。連中の手が届かるところまで、な」

「どういうことですか？」

「貴様のレイシフト適性は100%だったな」

「はい」

「これは、本来なら有り得んことだ」

「そうなんですか？」

「この世界のテクスチャは、“人の世”として安定している。だからこそ人間である限り、そんなことは本来ないはずだ。それこそ、この世ならざる“幻想種”の類でもなければな」

「でも俺、人間ですよ」

「うむ。ついでに言えば、それ以外に特殊な体質などもない。なので、幻想種との混血とかそういう類ではないのも間違いない。ホント、どうなってるの？ 実はチェン<sup>取</sup>ジリ<sup>換</sup>ング<sup>子</sup>だったりしない？」

「しない、と思うんですけど……」

ちよつと自信がなくなりそうである。

「まあ、貴様の出自や本質はこの際置いておく。重要なのは、レイシフト適性100%という事実だ。」

これは言うなれば、“世界からの外れやすさ”の指標だと思え」

「外れやすさ、ですか？」

「宮本武蔵を思い浮かべればわかるだろう。本来なら、人間は自分の生きる世界の中で完結する。が、奴はどういうわけかその枠から零れ落ちた。要は、貴様にも同じことをしてもらおうということだ」

「俺も武蔵ちゃんみたいな放浪者<sup>ストレンジャー</sup>になれと？」

「それ以外に、貴様を生かす手段はない」

そこから先は早かった。やるべきことははっきりしており、むしろいつ手が伸びるかわからないという意味では時間がなかったからだ。家族との別れには後ろ髪惹かれたものの立香は急いで身辺の整理を済ませ、ゴルドルフの準備が終わったのは一週間後のことだった。

「持っていけ」

「これは、霊基グラフ……ですか？」

疑問符が伴ったのは、彼が知るそれよりも一回り以上大きくなっていたから。以前はトランクくらいの大きさだったのが、今はキャリー

ケース並みである。

「そこには、霊基グラフの他にカルデアでの記録やレイシフトをはじめとした技術に関する資料が詰め込まれているからな。その分大きくなるのは当然だ」

「なんでまた……」

「貴様はこれから、時空間をただ誘われるままに流転し続ける次元の放浪者”になるわけだが、その詳しい形態はわからん。自由に行き来することは出来ないのは当然としても、強制的に時空の歪みに飲み込まれるのか、あるいはある程度任意で飛び込むか否か決められるのか、それすら未知だ。

だがもしかしたら、どこかで安住の地を得ることがあるかもしれない。場所によつては、その情報を売って必要な地盤を整えるなりなんなりしろ。どうせ他の世界のことだ、技術の独占も何もこちらには関係のないことだからな。まあ、後は……長い旅になる。昔が懐かしくなることもあるだろう。楽しい記憶ばかりではないが、慰めくらいにはなるだろうさ」

「後者の方がメインになりそうですけど、ありがとうございます」

「……機会があれば、どこかの世界でフィクションという体で公表でもしてしまえ。我々がいなくなれば、異聞帯の歴史を、在り様を、営みを、そもそもその存在を知る者すらいなくなる。”なかつたこと”になど、すべきではないのだろう」

「……そうですね」

知っているからには、残すべきだ。しかし、この世界でそれは叶わない。だが、これから数多の世界を放浪する立香なら、その機会があるかもしれない。

知っていてほしい、その思いは立香も同じだ。そんな世界があり、そこで生きる人々がいたことを。

「虚数ポケットのカギは憶えているな」

「ええ。捨てられないもの”ばつかりだったんで、助かりました。それに……」

首から下げたロケットを握る。そこには、かけがえのない品が入っ

ていた。

「マシユ」がいるから、大丈夫です」

「キリエライトの盾、その破片だがな。私の権限で回収できたのは、その小さな欠片一つだった。それも、本体ではなくオルテナウスの。それでは、とても召喚はできません」

「十分過ぎますよ。それに、どっちみち令呪ありませんし」

それに、召喚抜きで強引に助けに来てくれる物好きもいるかもしれない。だから、本当にあるだけで充分なのだ。

そうして、立香は数年ぶりに遠い遠い旅に出る。ただし、今度ももう帰ってくることはないだろう。いつかどこかで果てるのか、あるいはどこかに骨を埋める日が来るのか。それすら定かではないままに、世界から外れ、まっとうな時の流れからも外れた、長い永い旅に。

(ああでも、遠い世界に行くというのなら……フェイトと会うこともあるのかもしれない)

第一特異点でジャンヌ・ダルクと共に出会い、そのまま一緒に旅をした小さな金色の女の子。

人理焼却解決後、いまならゼロセイルの応用とわかる技術で元の世界へと帰還したはずの友人。

遠く、永い、遙かな旅というのなら……また、巡り合うこともあるのかもしれない。

(困ったな。会いたいけど、会いたくない。フェイトはマシユとも仲が良かったし、なんと言って伝えればいいかわからない。なにより……)

きっと自分は、彼女の知る「藤丸立香」からは遠く離れてしまったことだろう。

特異点での戦いは生きるために進み、自分が血を流す戦いだった。

だが、異聞帯との戦いは滅ぼすために、誰かに血を流させる戦いだった。

名残惜しさを振り払い、あの優しい少女を送り出してよかったと思う。きつと、彼女にあの戦いは耐えられなかっただろう。

だからこそ、今の自分を見せることに忌避感を覚える。

(まあ、早々会うはずもないか……)

\* \* \* \* \*

「……帰ってきた、のかな？」

《Yes, sir》

その日、一年と数ヶ月ぶりにフェイト・テストアロツサは第97管理外世界「地球」の地を踏んだ。地球、であればそれこそ世界各地、様々な時代を旅した彼女だが、その「地球」と第97管理外世界の「地球」は別物だ。

この世界には魔術がないし、当然ながら漂流者であった彼女を温かく受け入れ、共に戦い、語らい、困難を乗り越えてきた優しくも強い人たちはいない。いても、似て非なる別人だ。そのことは理解している、理解しているが、一抹の寂しさを覚えるのはどうしようもない。

《sir》

「わかってるよ、バルディツシュ。ここで立ち止まったら、みんなに怒られちゃうよね。」

まずは場所と時間の把握から、かな。ここがどこで、あれからどのくらい経ってるのか、ちゃんと調べないと。それから……あの子に会うんだ。会って、ちゃんと返事をする」

それが、フェイトがこの世界に帰ってくることを決断した大きな要因の一つ。世界を渡る前、対立する立場にありながら「友達になりたい」と言ってくれた「白い魔導士」。彼女の言葉に、ちゃんと返事をしなければならぬ。だからこそ、カルデアでは決して誰も「友達」とは呼ばなかった。小さな拘りと理解した上で、あの子に答えてからでなければ如何にと思ったから。

「それに、あの子に会えば管理局とも接触できるはずだしね」

《……》

「ちゃんと、ケジメはつけないと。みんなに胸を張れるように」

かつて、彼女はこの世界で罪を犯した。正しくは、それが犯罪行為であると理解した上で、母を止めるのではなく手を貸すことを選択し



た。

“あの日”のことは今でもはっきりと覚えている。

ロストロギア「ジュエルシード」を手に入れるためにあの白い女の子と戦い、敗れ、收容された次元航行艦で自身の出生の秘密を知った。一度は心が折れ、もう生きていても仕方がないとさえ思った。だがそれでも、母に伝えたい言葉があった。だから、“時の庭園”に向かい、母に会った。

そこでフェイトは悲しい別れをして、崩れ行く庭園から脱出しようとしたところで……少しだけ失敗した。何とか手を伸ばしてくれていた白い女の子、彼女の手を取ろうとするもわずかに届かず、フェイトは母と同じように虚数空間に落ちたのだ。

(あの子、ナノハ……って言ったつけ。気に病んでないといいんだけど……)

普通なら生存は絶望的だが、何の奇跡かフェイトは生き延びた。

ただし、彼女が一時を過ごした世界とは似て非なる地球の、それも西暦1400年代のフランスに出るといいう形で。

彼女はそこで聖女とも称される女性「ジャンヌ・ダルク」に保護され、やがて立香やマシユと出会い、そのままカルデアに身を寄せた。

あとはもう目まぐるしい怒涛の日々だった。絶望的という言葉ですら生温い彼らの世界、一縷の望みをかけて挑む過酷な特異点での戦い、休む間もなく発生する騒動、でも時には楽しいこともあって……母とのことをまだ引きずっていたフェイトの顔に、笑顔が戻っていたのはいつの頃だっただろう。

そのまま立香たちと共に駆け抜けて、大切な仲間との別離の果てに世界は救われた。

「みんなとあの世界を生きたい、そういう気持ちもあった、けど……」

かつて生きた世界を忘れることもできなくて。母もあちらの世界に出た可能性はあったが、元より病で余命幾許もない身だ。だから、せめて故郷で母や姉を弔いたいという気持ちがあった。それに、自分のしたことに対する責任を果たさなければという思いも。何より、あ

の白い女の子に返事をしたかった。

あるべき世界への帰還と、たどり着いた世界での暮らすこと、相反する二つの願い。どちらも捨てられなくて板挟みになっていたフェイトだったが、思いもしない方向から決断が下された。

そもそも、フェイトはあの世界とは全く別世界の住人。その存在が白日の下にさらされれば、当然放置はされない。特に、まったく異なる技術体系でありながら「魔導」を謳うフェイトの有する技術は、魔術協会を大いに刺激することだろう。だからこそ、司令官代行となつたダ・ヴィンチは彼女に言ったのだ。「元の世界に帰りなさい」「ここは君のいるべき場所じゃない」と。

そもそも、フェイトがあちら側に出現したこと自体が「人理が揺らいでいる状況だからこそ起きた例外」であり、時間が経てば経つほどに困難になっていくことは目に見えていた。

悲しかったし、寂しかった。

だがそれが、自身のことを思つての言葉だったことも聡明なフェイトは理解していた。カルデアはそのために、フェイトの存在を完全になかったものとして報告を挙げた。情報改変は当然大問題だ、発覚すれば職員一同厳正な処罰を下されることだろう。だがそれでも、彼らから反対意見が出ることはなかった。

そんな仲間たちの思いを、フェイトはうれしくも思つたのだ。だからこそ、フェイトは帰ってきた。背中を押してくれた人たちの思いにこたえるために。

「そうだ。あの旅で得たものを無駄にしないために、私はこの世界でちゃんと生きなきゃいけないんだ」

色々調べてみて分かったことは、あちらで一年以上たったにもかかわらず、こちらではまだ数ヶ月しか経っていないこと。フェイト自身、あちらではほとんど肉体的な成長をしなかったことや、異界では時間の流れが違うことがままあるという話から想定されていたことだが、それでもやはり驚きを禁じ得ない。

とはいえ、やるべきことに変わりはない。フェイトはまず件の少女との再会を果たす。

当然と言えば当然ながら大層驚かれはしたものの、相手：高町なのははこのほか喜んでくれた。そしてあの時の言葉「友達になりたい」という言葉への返事。その結果は、言うまでもないことだろう。フェイトはそのままなのはを介して時空管理局に接触、自首の意志を伝える。

心配していた自身の使い魔アルフは、なのはの魔法の師であるユーノが暫定的にマスターを代行してくれていたことで無事だったのは安心した。母プレシアはともかく、フェイトが単純に「犯罪者」の烙印を押されることが許せず、そのあたりしつかりと物申すために当分の間残ることを希望した結果らしい。

だが、すぐに管理外世界に逮捕<sup>迎え</sup>に来られるわけではない……という名目で、リンデイが高町家に話を通す形で、しばらくの間ホームステイという名の居候をすることに。なぜか妙に居候に対し好意的な高町家が快諾した際には、あまりの話の速さに色々な特殊事象に慣れたフェイトも目が点になっていた。

しかし、管理局の迎えが来るより早く後に言う「闇の書事件」が発生。フェイトは魔力を嚴重に封印していたことから当初は標的にされなかったが、なのはが狙われたことから彼女も共に事件に立ち向かうことに。

改めて己が無力さを目の当たりにし、何とかできる心当たりがありながらそれを手繰り寄せられないことに歯噛みしたりもした。

それでも、時間は刻々と過ぎていく。

フェイトはリンデイから申し出のあった養子縁組を受け入れ、裁判後に闇の書事件で出会った八神家やなのはと共に管理局で働く道を選ぶ。執務官となり、誰かを救える仕事があったから。

とはいえ、とりあえず中学卒業までは地球に生活の拠点を置き、学生と管理局の二束の草鞋で過ごすことに。管理局での仕事も、友人たちと過ごす日常も、得難く充実したものだだった。困った点があると思えば、強いて言えば一つ。

「それでフェイトちゃん、今度は誰だったの？」

「えっと、バスケット部のキャプテン」

「あく、あのイケメン君かあ。優しいって評判はよう聞くし、女子からの受けもええやん。それで、答えは？」

「すずかとはやて、幼馴染二人からの追求に特に動じた様子も見せない。初めのうちはしどろもどろだったのだが、告白件数が10を超えあたりにはすでにこの調子だった。」

「ちなみに、なにもこの手の追求はフェイトだけが受けるわけではない。というより、だいたいみんな「告白された経験」が豊富なので、その度にこうして報告会が開かれている。」

「断ったよ」

「ふくん、フェイトは相変わらず鉄壁ねえ」

「いや、それアリサちゃんが言うん？ この前なんて、『ちよつと私をドキドキさせて見せなさい』なんて、無茶ぶりしとった人が……」

「だって興味なかったし、かぐや姫よりはましでしょ？」

「にやははは……」

「まあ、鉄壁というならこの幼馴染五人組はみんな同じなのだが。一応、鉄壁は鉄壁でも方向性は異なる。例えば、はやてと交際しようとする場合は厳格な古き良き頑固お父さん以上に難攻不落な守護者4人を攻略しなければならぬし、ちようど苦笑いを浮かべているなのはの場合「like」ではなく「love」であることを理解させるのが大変だったりするからだ。」

「で、断り文句はやつぱり？」

「うん、好きな人がいるから」

「ねえ、フェイトちゃん。それはやつぱり……」

「不毛だっていうのはわかってるんだけど、ね。もう会えない人のことを思っても仕方がないって、分かっているんだ。だけど、気持ちかね……区切れないんだ」

「なのはに向けて、本当に困った様子でほほ笑むフェイト。この恋心に気付いたのは、こちらに帰ってから随分と経つてからのことだった。思春期を迎え、身体が女性らしい丸みと起伏を帯びるようになるにつれ、心も子どもから大人に変化し始めた。その時になって、ようやく気付いたのだ。」

「私は、立香のことが好き」

好きだったのか、それとも心が成長して好きになったのかはよくわからない。ただ、恋愛や恋人というものを考えた時、真っ先に浮かび、他の誰かを思い浮かべることができないことに気付いた。

思い出を美化していると言われれば否定はできない。だがそれでも、この恋心は本物だと思う。まあ、本物だからこそ厄介ではあるのだが。何しろ告白すること叶わず、かといって彼が誰かと結ばれたのかもわからない。おそらくはマシユと……と思いはしても、やはり確信は持てない。それ故に、気持ちの区切りの付け方がわからないのだ。

「ふくん、話には何度も聞いたけど、フェイトがそんなに想う人っていうのはやっぱり興味あるわねえ」

「あつ、アリサちゃんシツ！ シイツ！」

「あつ、しまった……」

「え？ 聞きたい？ ホントに？ 本気で？ 正気と狂気の境界が怪しくなるけど、それでも？」

(あかん、フェイトちゃんがまたヤミに……)

藤丸立香を語る上で、カルデアでの日々は外せない。そして、当然そこにはあの破天荒と奇想天外と非常識をこつた煮にした連中の話も絡んでくる。このことに話が及ぶたびに、フェイトの目からは光が消え、ふっか〜い闇を垣間見せるのだ。

「ふえ、フェイトちゃん落ち着いて、どーどー……」

「いや、なのはちゃん。馬じゃないんだから……」

「……でも、立香がいてもやっぱり私じゃダメだよ。私じゃ、立香に釣り合わない」

「いや、フェイトに釣り合わないってどんだけよ」

とアリサは言うが、フェイトは本当に心からそう思っている。

例えば、第七特異点でこんなことがあった。鮮血神殿に囚われ、魔獣へと作り替えられようとしている戦士たち。フェイトやマシユは彼らを助けようとしたが、立香は彼らを見捨て進むことを選んだ。それは、自らの為すべきことを、それが時間との勝負であることを正し

く理解していたから。

あの時、フェイトは助けられるかもしれないことに後ろ髪惹かれ足踏みするのではなく、立香の決断に同意し速やかに行動すべきだったのだ。そうしていれば、あるいは彼より早く進むことを進言していれば、立香に「見捨てろ」と言わせなくて済んだはずなのに……。家族や友人たちは「子どもだった」「当然の感情であり反応だ」と言うが、それでもフェイトは思う。立香にあんなことを言わせたのは、自分の愚かさ故だったと。

だから、例えば立香と再会できたとしても、やはり自分では相応しくないと思ってしまう。でも、それでも心が彼を求めてしまうのだ、「恋しい」「愛おしい」と。

「本当に、どうしたらいいのかな……」

もしかしたら、時間が解決してくれるのかもしれない。あるいは、もしかしたら一生付き合わなければならぬ恋なのかもしれない。この時のフェイトには、自分の中の感情がどちらになるのかわからなかった。

だが数年後、次元世界を震撼させる事件の渦中でフェイトは思わぬ再会を果たす。彼女が何度も思い返し、けれども叶わぬ夢とその度に諦めた相手。

でも、その彼は彼女が知っていた彼とはどこか違って、深く重い影を滲ませるその微笑みは隔てられた時間を思い知るには十分すぎた……。

——なにが、あったの？ 私が帰った後の君に、いったい何が……

——私は、帰るべきじゃなかった。残っていれば、少しでも立香を支えられたかもしれないに……

——“あの時”と同じだ、私は何も変わってない。立香に辛い決断を押し付けて、守られてばかりで、どうして私は……

だが、永く悔恨に浸る時間はない。

カルデアは見誤ったのだ、彼と英霊たちの間に刻まれた因果を。数多の英霊と縁を紡ぎ、絆を結んだ藤丸立香の令呪は、既に通常のそれ

から外れていた。強力ではない、むしろ通常のそれより強制力は劣るだろう。代わりに、彼の存在と深く結びついていた、立香本人から切り離されてもなお目に見えぬ繋がり。そしてそれは、最後まで彼を守り通した「雪花の盾」もまた同じ。

故に、それは現れた。

木乃伊化した聖痕令呪の刻まれた右腕

『英雄たちが集う場所』という特性を有した円卓召喚陣の盾

ここに膨大な魔力聖杯リソースが加わればどうなるか

一つの特異点を作り出すには、十分すぎる要素だろう。

ましてや、それを手にした者が善ならざる者だとすれば尚のこと……。

呼び出されたるは異世界の歴史に、伝承に、神話に、あるいは異聞にその名を刻んだ英傑たち。

偽りの主の下、かつての旅の記憶を持たない彼らが何を為し、誰が止めるのか。全ては、遠い次元の彼方に……。

## ヴィータの場合

——あ、お話終わりました？

おう、わりいなせつかくの休みに。機密とか考えつと、通信で済ますつつーわけにもいなくてなあ。

——いえいえ。そうだ、お茶のおかわり如何です？

おう、頼む。

——あとこれ、試作で申し訳ないんですけど、よければ感想聞かせてください。

チョコ？ ……そういや、そろそろバレンタインだっけか。妙に甘い匂いがすると思ったが、もしかしてなのはと作ってたのか？

——まあ、この手のことはママに教わるのが一番ですから。

戦技教導官  
あんなんでも実家は喫茶店で、一流パティシエ桃子さんの娘だからな。仕事で教え子どもを落としまくってるのを見てると信じられねえけど。

ん……流石にいい味してるな。その年でこれだけできりや上等だろ。競技選手、学者、公務員、聖職者、それに加えて喫茶店……未来の選択肢が多いのは良いこった。

——えへへ。

で、どうなんだ。

——どう、って？

意中の相手とかいねえのかって話だよ。

——え!?! いやあ、今のところそういうのは私にはまだ早いかなあって……。

そうか？ お前くらい頃には、なのはもフェイトも結構本気で作ってたんだがなあ……。

——八神司令……は聞くまでもないですね。

おう。ちなみに、当時は士郎の奴も菓子はあるま経験なかったから、何とかマウンとろうとしてめちゃくちゃ気合い入れてたぞ。なのはん家で、揃って桃子さんに教わったりしてな。

——へ……。



ま、今じやそつちも士郎の方が上になつちまつたけどな。流石にプロが相手じゃ分がわりい。

—— 飴細工とか工芸菓子とか、すつごくキレイですもんねえ……。

基本マメというか凝り性な奴だからな。

—— そういえば、八神家ではバレンタインってどうしてるんですか？

ん？ ああ、みんなで作るってのはねえな。そもそもこつち<sup>ミツド</sup>じやまだまだ超マイナー行事だしよ。基本、事情知ってる身内同士でやり取りして、アタシやシグナムはホワイトデーにお返しするくらいだ。

—— (ああ、そういえば初めのうちはコロナもピンと来てないみたいで不思議そうな顔してたっけ……)

ま、シヤマルとアインス、それに末っ子どもは毎年色々趣向を凝らしてるけどな。

—— じゃあ、六人でワイワイやってる感じですか？ あ、もしかしてミウラさんもいたり？

いんや。士郎・はやて組と、それ以外で分かれてる。

—— そうなんですか？

誰だつて馬に蹴られたかないだろ？

—— ……なるほど、そういうアレですか。あれ、でも八神家の料理師匠粋がどつちも参加しないとすると、誰が主導してるんですか？ 聞いて驚け、シヤマルだ。

—— えっ!?! シヤマルさんお料理できたんですか!?

ビックリだろ。アタシも驚いた。

—— でも確か、紅閨魔先生でも匙を投げたって……。

“料理”はな。でも、“菓子作り”なら割と行けるんだわ。

—— 何が違うんですか？

なんつーか、“料理人”と菓子“職人”の違いだな。

—— ？ ？ ？

つまりだ、菓子つてのはレシピ通りに作ればまず失敗しないってことだよ。

——お料理もそうだと思いますけど。あ、もしかしてシヤマル先生って変な「おりじなりてい」入れちやう人ですか？

いや、むしろ几帳面な奴だからレシピ通りに作るぞ。

ただな……ほれ、料理って結構目分量というか曖昧というか、そういうところあるだろ。

良く嘆いてたなあ、やれ「お好みで」って何!?」だの、「適量って何グラム!?」だの、「一口サイズってみんな口の大きさ違うんだけど!?」だの、「トロ火って何度から何度まで!?」だの、「じっくり火を通すって具体的に何時間何分なの!?」って具合にな。

——あく、そういうこと……。確かに、その点で言えばお菓子はキツチリしてますもんね。

ま、それでも偶に失敗することもあるけど、そういう曖昧な表現がある時だけだ。そうじゃなければ、まあ割と何とかなる。

——でも、考えてみれば当然ですよ。繊細な手術ができるくらいに手先が器用で、お薬の調合もできるって聞いたことありますし、お料理ができない理由がないんですもん。

細かすぎてかえって失敗する、メディアとかと同じだな。

——メディアさん……あの、無理に答えなくてもいいんですけど……。

あん？ どうした、別に知らねえ仲でもねえんだし、ガキが遠慮なんかすんな気持ちわりい。

——えっと、守護騎士の皆さんの的にサーヴァントのみんなってどういう風に考えてるのかなって。

どう、つて言われてもなあ。まあ、親近感じゃねえが、近いもんは感じなくもねえよ。

「自分で選んだわけでもない主に使われる」って意味じゃ、似たもん同士だろうしな。

つつても、途切れ途切れだったり思い出せなかつたりするとはいえ、一応記憶の連続性のあるアタシたちと、基本一回限りの第二の生を繰り返すあいつ等じゃ、やっぱ色々違うだろ。むしろ、アタシらもそうだったら……主が変わることに完全に初期化されてりや楽だった

のになつて思わないでもねえ。

でも、例外つてのはいるもんだ。だからつてわけじゃねえが……エミヤの奴には同情する。

——エミヤさんつて、あの赤い人ですよね。

ああ。士郎の、あつたかもしれない可能性だ。あいつは、かなりアタシたちに近いんだと思う。

……いや、逆だな。アタシらがアイツに近いんだ。別にやりたくもねえことを何度も何度も繰り返して、色々なことに嫌気がさす。自分に、人間に、世界に……全部じゃねえけど、気持ちはわかる。はやてと出会う前のアタシも、そんな感じだった。

だけど、アタシには仲間がいた。悪態ついて、当たり散らしてばかりだったけど、それでも仲間がいることに救われてた。でも、アイツにはそれ仲間すらいなかったんだよな。

たった一人で、何度も何度も戦つて、何度も何度も裏切られて、何度も何度も救いようのねえ後始末を押し付けられる。よくもまあ、あんなお節介なままでいられるもんだよ。根が士郎だからなのか、それとも何か理由があるのかまではわからねえけどな。あんま親しくしねえし。

——そうなんですか？

避けてるつもりはねえんだが、やっぱり変な感じがするしな。あとアレだ、士郎に対して滅茶苦茶大人げねえ。

——はい？

アイツの料理を「小姑か!」つて感じてデイスったり、遊んでるところに乱入してガチで顔面潰しにかかってきたりするんだよ。同情はするが、仲良くは出来ねえ。

——そ、そうなんですか……。

むしろアタシとしては、立香の奴の方がな……。

——立香さんですか？

シグナムたちがどう思ってたか知らねえけど、アタシは正直歴代の「夜天の書」の主に対していい感情は持ってねえ。どっちかつーと、ほとんどの場合「こんなのが主かよ」つて思ってた。

——そう、なんですか？

“夜天の書”の主だから従ってただけで、忠誠心とかゼロだったからな。むしろ、主じゃなかったらさっさとアイゼンの頑固な汚れにしてた奴も多い。

……アタシほどじゃなくても、シグナムたちだって本気で“自分の意志”で頭下げてた主なんてほとんどいねえんじやねえか。それこそ、はやてが初めてだって驚かねえ、だってあたしがそうだったからな！

……だからこそ、立香の奴はすげえんだ。徳の高さと業の深さが、ちよつと頭おかしいレベルだし。

——徳と業、ですか？

徳は徳でも、アイツの場合“人徳”って奴だけどな。

——はあ……。

あいつに従ってるやつらの気持ちはわかる。どこにでもいる平凡な奴が、弱っちいくせに踏ん張ってんだ。助けたくなる、それが人情ってもんだろ？

それも、アイツが向き合ってきた現実是最悪だった。

鍛えた身体も、礼装の守りも、詰め込んだ知識も、アイツが対峙してきた脅威敵の前では紙切れ同然だ。“ないよりはマシ”だろうが、“あつても期待できない”。だから“自分で戦う”なんて論外だし、“自衛”なんて夢のまた夢、“守られる”以外に選択肢がねえ。なのはだって、“バリアジャケット”と“魔力砲”があったのに、それすらなしだぞ？

——怖い…ですよね。

アタシには想像も出来ねえよ。そんな有様で戦場に出るとか、普通なら正気じゃねえ。

だが、アイツの場合それ以前の問題だ。どれだけ貧弱でも、アイツは戦場に出なきゃならなかった。戦闘の余波でも命があぶねえし、それこそ視線が合っただけで呪殺できるような奴だった。

一つのミスが命取り、ならまだマシな方だ。最善を尽くしてなお勝機がねえ、いくつもの奇跡があったから乗り越えられた。つたく、

つくづく「強運」というか「凶運」というか……良くも悪くも引き  
がつえんだよなあ、アイツ。もう「業運」だな、「豪運」！  
……ま、その手の奇跡自体が「善因善果」ってやつなわけだけ  
よ。

——その上、世界の命運まで背負ってたんですよ。

あいつ自身は、「そこまで考えてなかった」とか言ってるけどな。  
だが、事実としてアイツと世界の命運はイコールで結ばれた。あ  
と一步どころか半歩のところまで辛うじて「滅び切っていない」世  
界が、立香が倒れば完全に終わる。世界の命運なんてクツソ重いもん  
を背負ったつもりはなくても、その事実はどうもだけの重圧だったん  
だろうな。

——……。

アイツは本来、アタシらみたいな奴に「守られる」側の人間だ。そ  
れこそどうしようもないくらいに追い詰められて、自分の身を、大事  
なものを守るために戦うことを選択する。あるいは、戦うにしたって  
身の丈に合った、「一兵士」としてが分相応だ。少なくとも、「世界  
の命運」だの、「超常の戦場」だのは似合わねえ。

でも、アイツが置かれた状況はそういう本当に「どうしようもない  
」戦う以外の選択肢がない。状況で、なおかつ「分不相応」の極み  
みたいな戦場に立たざるを得なかった。

それはきつと、すげえ悲劇なんだと思う。それでも「できることが  
あるなら」って踏ん張ってるやつがいたらよ、助けねえわけにはい  
かねえだろ。

——そう、ですね。

でもな、サーヴァントの全員が全員そんなことを考えるやつなわけ  
じゃねえ。むしろ、結構な比率で「人でなし」だぞ、アイツら。

戦争が起きてたって「外敵のせいだ種が滅ぶとかでもないなら  
一々目くじら立てるほどでもない」とか、「同族同士で殺し合う余裕が  
あるなら平和だろ」とか素で言う連中だからな。アタシらとは感性  
が違う過ぎるんだよ。

そんな連中にとつちや、強くもねえ、すげえ頭がいいわけでもねえ、

将来性だつて人並みで、〃主と仰ぐ〃には足りねえもんばっかりだろうよ。そしてそれは、他でもないあいつ自身が一番よくわかつてたはずだ。

いつ殺しにかかつてくるかわからねえつてのに、それでもアイツは、掴まれた手を一度だつて放さなかつた。それが、すげえんだ。

——でも、令呪だつてあつたわけですし……。

言つとくけどな、アレ気休めにもならねえぞ。

——へ？

考えてもみろ。絶対命令権とか言ってるが、動きを止めるのが精々、仮に自害させるほどの効果があつても三画しかねえんだぞ？つまり、4騎以上で反抗されたら詰む。

——あ……。

そりや守つてくれる連中もいるから、一概には言い切れねえだろうけどよ。令呪なんぞ当てになんねえぞ。

——た、確かに……!?

つまり、ほとんどあいつ自身の〃ナニカ〃で纏めてるつてことだ。制御困難どころの話じゃねえ連中をだぞ。人徳つてのは、まあそういうことだ。

だから、仮に令呪ガメたとしてもあいつらを従えるなんて不可能なわけだ。3騎に主替えを同意させたとしても、残りの連中に磨り潰されるのがオチだからな。

ただ、フェイトの手前あんま大きな声じゃ言えねえけど………深く考えるとドン引きする。

——そ、そこまで言わなくても……。

じゃお前、ちよつと自分で想像してみろよ。神霊だの魔性だの、その手の連中の手綱、ホントに握れるか？

——辛うじてアステリオスとフランなら、何とか。

いや、アイツらの場合、予備知識に引つ張られずに普通に付き合えば割と何とかなるだろ。まあ、それだつて簡単なことじゃねえけど、まだマシな部類だ。だけど、他の連中ならどうよ。

——無理です（キツパリ）。

だろ。

——確かに、よくよく考えてみると立香さんスゴイ。ちなみに、業って？

あのなあ、むしろそっちの方が分かりやすいだろ。

闇の書ですら自己崩壊起こす関係で「世界を滅ぼす」ところまで行くことは稀だったんだぞ。下手すると、「世界を滅ぼした数」はアイツの方が上なんじゃねえか？

——うぐっ!?

徳の高さは成層圏まで届いてるが、業の深さはマリアナ海溝どころかマントルぶち抜いて地球の裏側から宇宙までかつ飛んでるからな。

フェイトの奴も、見る目があるんだかないんだか……ある意味、究極の地雷野郎だぞ。

——さすがにそれは言い過ぎなんじゃ……

……逆だろ。マシユみたいと一緒に進んできたわけでもねえ、一線を引くなりなんなりやりようはいくらでもあったのによ。クツソ重いや何もかも全部承知の上でフェイトは立香を選んだんだ。そんだけ、覚悟決めてるんだよ、あいつはな。

——フェイトさん……。

ま、アイツはアイツで割と重い奴だから、お似合いっちゃお似合いなのかもだけどな。

——そう、ですね。フェイトさんも、色々あったわけだし……。

いや、そっちじゃなくて……感情的に。

——はい？

バレンタインになあ……アイツが贈ったチョコがなあ……小学生がらしくないというか、なんというか……。

——な、何を贈ったんですか？

\* \* \* \* \*

「……なんで素直に受け取ってるんだよ、俺」

カルデアのマイルームに戻って早々、ベッドに腰掛けるとともに頭

を抱える立香。その手には、わずか数分前に貰った可愛らしくラッピングされた小箱がある。

「少なくとも、バレンティン当日今日日は会わないと思っただけどなあ……」

例によって例の如く、今年もバレンティンがらみで騒動があり、收拾に奔走し、やっとこさつとこ事態が終息したのが数時間前のこと。

その時は、多少申し訳なさを覚えつつも「フェイトと距離を取る」という密かなねらいを果たせそうに安堵していた。が、「さあゆつくり休もう」と思っただころで、まるで狙いすましたようなタイミングで「彼女」がカルデアを来訪したのだ。

(誰かがいる……)

「あ、立香。お疲れ様、大変だったね」

そこにいたのは、頬を朱に染め花開くように微笑むフェイト。いるはずのない場所で、会わないようにしていた相手と出会い、疲れ果てて今にも落ちそうだったのがウソのように立香の瞼が一気に持ち上がる。

「なんで」「どうして」と聞きたいことは山ほどあるが、頭が上手く回らず言葉にならない。

「つ、疲れてるみたいだし、手短に済ませるから……少しだけ、良いかな？」

「あ……はい」

……後々考えれば、なんとか言い訳してその場を離脱すべきだったのだと思う。まあ、フェイトとて忙しい身はずなのに、わざわざ足を運んでもらっておいて無碍にするのもどうかとは思っただが。しかし、この時の立香にはそこまで考えを巡らせる余裕がなかった。

ただ、一つだけ脳裏をよぎるものがあった。

そう——甘い予感がする。

「はい、これ。ハッピーバレンティン」

そう言って差し出されたのは、黒をベースとした包装紙に黄色いリボンをあしらった小箱。

俯き加減のため顔色はわからないが、耳は真っ赤で、声は緊張と羞恥で強く震えている。いや、震えているのは手や肩もか。



それを見て、聞いて、彼女がどんな思いと意味を込めて「ソレ」を用意したのかわからないほど、立香は鈍くない。

だからこそ、「これはいい機会だ」と思った。フェイトは立香に対し積極的に好意を示してきたが、ハッキリと形や言葉にはしてこなかった。だが、これは多少苦しいかもしれないが「形ある好意」の現れだろう。

(……そうだ。なら、ここでははっきりと「受け取れない」と言うべきだ) この場で出会うこと自体が不意打ちだったこともあり、若干間は空いてしまったが、前々から考えていたこともあり現状を正しく認識するとともに意を決する。少なくとも労力を払って覚悟を決め、立香ははっきりとその言葉を口にする。

「フェイト、気持ちはいれしいんだけどこれは受け……」

「義つ、義理だから!」

「取れな……って、はい?」

いや……しようとしたところでフェイトがインターセプト。顔を上げ、それはもう焦りまくった調子で何事かまくしたて始める。

「な、なのはたちとチョコの交換とかするから、その練習で作った奴だから!」

「は、はあ……」

「そう! と、友チョコっていう奴! いつもお世話になってるお礼、それだけ!」

「そう、です、か……?」

「そうなの! べ、別に本命とかそういうのじゃないから!!」

「その割には、包装とか気合入ってる気が……」

「日頃の感謝の気持ちを伝えるんだから、むしろ当然だよ!」

「な、なるほど……そう言われれば……」

「だから! 受け取ってくれるよね! 問題ないよね! だって義理チョコで! 友チョコなんだから!!」

「は、はい……」

とまあ、こんな具合で勢いと共に押し切られてしまったわけだ。矢

鱈と「義理」と「友」を強調されては、口を挟み辛かったというのもある。当の本人にそう断言されてしまうと、「本命チョコ」扱いもできない。

今考えれば、フェイトが口を開く前、早々にキツパリと伝えるべきだったのだろうと思う。とはいえ、先手を取られた時点で立香の敗北だったのだ。流石のスピードと言うべきか……まあ、事前にシミュレーションしていたフェイトと、奇襲を受けた立香では勝負にならないくて当然だろう。これは、戦略レベルでの敗北である。

「にしても、クリスマスと良いお正月と良い……タイミング良過ぎないとは思わない、フォウ君？」

「フォウフォウ！」

下から見上げてくる愛くるしい小動物に尋ねれば、なんとなく「黒幕がいるよ、絶対」と言わんばかりに同意してくれた気がする。

実際、今回もそうだが要素要素でタイミングが良すぎるのだ。立香のスケジュールが空いていると、結構な頻度でフェイトは顔を出すなり連絡を入れるなりしてくる。不在の時や手が離せない時、というのはほとんどない。

加えて、クリスマスや正月など季節ものの行事など、特にそうだが、割と季節ものの騒動が多いので、例えばクリスマス当日に手が空くというのは滅多にない。なのに、今年はどういうわけか当日までには騒動が終息し、今日のように絶妙なタイミングで会ったり通信で話したりすることが多い。

流石にこんなことが続けば、立香でもいろいろ察するというもの。(誰かが情報を流してる？ いや、それだけじゃなくて当日までに事件が解決するように手を回してるのか？ そういえば、なんか妙に張り切ってるのがチラホラ……)

しかも、よくよく考えてみるとフェイトと比較的仲の良い面が多かった。逆に、メルトリリスやジャンヌ・オルタなどはあからさまにやる気がなかったり、むしろ時間をかけようとする素振りがあったような……。

他にも、エレシユキガルもあんまりやる気はなかったのだが、

しようがないのだわ」と渋々という感じで頑張ってくれていた。生真面目な彼女らしくなかったので、不思議に思っていたのだ。それに、シャルロットも「うくん」と唸りながら立香の護衛と世話以外のことには積極的ではなかった。

「……あの四人とフェイトつて、なんとというか微妙な仲なんだよね。単純に仲が良いとか悪いとかじゃないというか……」

「フオウ？」

「……やっぱり、そういうことなのかな」

正直に言えば、理由に心当たりがないわけではない。というか、マシユも割とフェイトとは微妙な仲だ。初めは仲良くできると思っていたのだが、予想に反してそうはならなかった。その理由も…わからないではない。自分で口にするのは、なんとというか憚られるのだが。

ただ、マシユの方があの四人と比べればまだ拗れていないとは思う。

「まあ、フェイトの性格上メルトと相性が悪いのは当然だし、オルタもフェイトみたいな「良い子」は毛嫌いするから仕方ないんだけど……」

より正確に言うなら、フェイトがメルトを苦手としているだけで、メルトはフェイトを「フィギュア映える」と思っているのもそのままで非好意的ではない。反対に、フェイトはオルタと仲良くしたいのだが、オルタはフェイトを鬱陶しがるという図式だ。

ちなみに、この面子の中ではエレシユキガルがマシユに続いてフェイトとそこまで拗れていない。ただし、それも「現世ではともかく死後は自分が世話する」と決め込んでいるからこそだったりするのだが。

「でも、なんでシャルロットとあそこまで相性悪いのかな？」

そう、実はこの面子の中で一番拗れているのがシャルロット・コルデーなのだ。フェイトもシャルロットも、お互いに隔意が強い。仲が悪いというのとは少々ニュアンスが違うが、決して相容れないものが横たわっているように感じる。

特にフェイトの場合、シャルロットが近くにいると必ず立香との間に入り、まるで子どもを守らんとする親猫みたいに警戒する。抱く感情的に仲良くなれないのはわかるが、あそこまで警戒する理由がよくわからない。

「フオウ、フオフオフオツフオウフオ——ッ！」

「フオウ君はわかるの？」

「フオウ！」

「当然」とばかりに強く首を縦に振るフオウ。実際、二人の相性が悪いのもある意味当然なのだ。表面的な部分だけを見ればそう悪くなるようには思えないが、もっと根本的な部分が問題なのである。何しろ、「思い出すなら綺麗な思い出であってほしい」「フェイト」と「綺麗な思い出になどして欲しくない、夢見る度に罵られるほどに覚えておいて欲しい」「シャルロット」では、どうやったところで相容れない。

だからこそ、フェイトは立香とシャルロットの間に割って入る。これ以上、彼を傷つけさせたくないから。

しかし、本人たちも気づいていない。そもそもこれだけの隔たりがあるなら、もっととはつきりと険悪になってしかるべきだ。

なのに、そこまで至らないのはなぜか。それはきつと、二人が互いの在り方純粋さに無意識に憧れているからかもしれない。

「フオウ、フュー!!」

「あ、うん。そだね、そろそろ現実逃避は終わりにしないとなあ……」

そうなのだ。いくら他のことに思考を巡らせても、目の前の現実は何も変わらない。まあバレンティンチョコを受け取ってしまった以上、することなど一つしかないのだが。

「とりあえず、お返しはクツキーかな。マシユマロは流石に……」

カルデアのバレンティンは少々特殊だ。日本では「女性から男性」に、海外では「男性から女性」に愛を伝えるのが主流であり、日本の場合その際にチョコが贈られる。だが、カルデアだと「女性サーヴァント（一部例外あり）から立香」にチョコが贈られ、「立香から男性サーヴァント（これまた一部例外あり）」にチョコが贈られるのだ。

ちなみに、お返しについては男性サーヴァントは即日が多く、立香はホワイトデーにする。なにしろ、用意する量が半端ねえのである。また、この際に色々とお返しの菓子の意味とかも調べているので、割と立香はそのあたりに詳しくかったりする。

と、立香が「マシユマロ嫌い」は流石にないので、無難に「クツキー友達」にしようかと考えていた時、ノックの音が思考を中断させる。

「？ はい、どうぞ」

「ヴィヴィ・ラ・フランス♪ ご機嫌ようマスター、少しお時間はよろしくて？」

「マリー？ どうしたの？」

軽やかに入ってきたのは、フランス王妃マリー・アントワネットその人。

天真爛漫で懐っこい人ではあるが、どちらかというマイルームまで足を運ぶことは珍しい。なので素直に尋ねると、常日頃から華やかな微笑みをさらに輝かせ、興味津々とばかりに手元を覗き込んでいる。

「あら、それはあの子からのチョコね、これから開けるところかしら？」

「うん。 って、そうか。 マリーはフェイトにダンスとか教えてるんだっけ」

「少し、ええ本当に少しだけよ」

義母であるリンディが本格的に派閥を作ったこともあり、フェイトも少なからずパーティーなどに足を運ぶことがある。呼ばれる場によつては、所謂「夜会」のようなダンスが社交の一環になっている場もあることから、フェイトも一応学んではいた。なので、技術的などころはほとんど教える必要がなかったのだが、正真正銘の貴顕の生まれとでは一つ一つの所作の品位が違う。

そのことを知っていたリンディが、試しに頼んでみたらマリーは快諾。時間を見つけてダンスやマナーなどを教えているというわけである。マリーの知るそれは次元世界のオーソドックスではないが、本

当に美しい所作というのは時代や地域が変わっても通用するものだ。実際、多少の物珍しさはあれども……むしろ、その珍しさを含めて高評価を得ている。

ちなみに、もちろんマナーレッスンなどもカルデアを訪れる重要な理由ではあるが、「口実」にしているのもまた事実。実際、これがなければフェイトがカルデアを訪れる機会は半減どころではなかっただろう。

まあ、その日程調整で暗躍している女性がいることは、リンディも知らないのだが。というか、そもそもリンディがこんなことを言い出したのも元はアルフがきっかけ。そのアルフも、件の女性の入れ知恵があったりするのだが。

「やっぱり、フェイトってそういうのも覚えが良い？」

「ええ、とつても。ふつつ、何より頑張る理由があるのが大きいわ。綺麗に見られたい、それはとても重要なことですもの」

もちろん、マリーはフェイトの頑張り動機を知っている。むしろ

「頑張る女の子」は応援したいし、それが「恋する乙女」ならばなおさらだ。

「ねえマスター、よろしければ私も見てもいいかしら？」

「あれ、マリーはもらってないの？」

「もらったわ。百合のホワイトチョコよ、ステキでしょ？」

「なるほど……それって手作り？」

「ええ、もちろん」

彼女の親友の母親がパティシエなので、教わりながら作ったのかもしれないが大したものである。

「それで、マスターのチョコはどんなものかしら？」

「待ってて、今開けるから」

リボンを解き、丁寧に包装を剥がしていく。おそらく、これもフェイトが自分の手でやったのだろう。綺麗に包んではいたが、リボンがちよつと左右非対称だったりしたのはご愛敬だ。微笑ましく思う、思うのだが……実は密かに覚悟を決めていた。それこそ、ハート形のチョコくらい飛び出してもいい様に。

しかし、蓋を開けてみると……

「これは……バラ？」

「あら？ あらあらまあまあ♪ あの子らしい、とっても気持ちの詰まった贈り物ね！」

収められていたのは、バラの形をした小ぶりなチョコレートだった。ただし、通常のそれではなく赤い。メッセージカードなどはなく、11個の赤いチョコが整然と並べられている。

正直、覚悟していた分拍子抜けというか肩透かしを食らった感はない。まあ、自分が気負い過ぎていただけと思えば、些かならず恥ずかしいが。ただ、よくよく見るとチョコの色合いが微妙に違うことに気付く。

「これって、赤だけじゃなくてピンクも？」

「うふふつ、そうね。とっても情熱的」  
「？」

マリーの言っている意味が分からず、首をかしげる立香。数えてみると、赤が6個にピンクが5個。「味を変えているのだろうか？」と思い、とりあえずピンクのチョコを一つつまんで口に運ぶ。

味は、予想というか期待を裏切らないストロベリー。ただ、咀嚼する立香の横顔をいつもより5割増しでキラキラした表情でマリーがジッと見つめている。

「あの、ちょっと食べ辛いんだけど……」

「あら、ごめんなさい。ねえ、マスター。マスターはバラの花言葉をご存じ？」

「？ いや、知らないけど……」

恋人相手に薔薇を贈る話というのは、ラブロマンスなどの定番だ。なので、いい意味があるのだろうかとは思っていた。とはいえ、それでもハート形ほど直截的ではなからう。そう、思っていたのだが……。「バラはね、色はそうだけど数でも意味が変わるのよ。例えば――

――11輪なら『最愛』」

「ぶっ!？」

「赤は『あなたを愛しています』『愛情』『熱烈な恋』の意だし、ピ

ンクは「愛の誓い」という意味になるわ」

「……………ちなみに、5輪と6輪だとどうなりますか？」

もうすでに、この時点ですごく嫌な予感はしているのだが、聞かない方が恐ろしくて聞いてしまふことにする。

「5輪は「貴女に出会えたことへの心からの喜び」、6輪は「あなたに夢中」よ。ね、とっても情熱的でしょう？」

(ゆ、油断した……………)

ハート形ではないので「まあこれくらいなら」と思ったが、とんでもなかった。むしろ、ハート形よりずっとストレートではないだろうか。いったい、これのどこが「義理」で「友チョコ」なのやら。

そう、すっかり失念していたが、最近のフェイトは「本音」と「建て前」の使い分けを駆使するようになった。このチョコなどその最たる例だろう。「義理」「友チョコ」という建前で、11輪のバラのチョコ、それもピンクと赤、5輪と6輪の組み合わせ、という本音を見るむ形。

(ほんと、誰の入れ知恵だよこれ)

フェイト一人で思いついたものではない。絶対に、誰かが助言したに決まっている。まあ、犯人など一人しかいないが。

「……………やられた「パシヤツ」マリー、何撮ってんの？」

「ふふっ、写真を送ってほしいってリンディに頼まれてるの」

「やっぱりあの人の仕事かあ!? って、あ!?! 送信しないで!!」

「ごめんなさい、マスター。でも、私も教え子が可愛いんですもの。では、オールヴオワール」

そうして、止める間もなくサーヴァントの身体能力を大いに生かして走り去っていくマリーであった。

余談だが、その後もフェイトからバラのチョコを贈られるように。ただし、構成は基本的に同じものの、色の比率が変わり4輪と7輪の組み合わせになったりする。ちなみに4輪だと「死ぬまで気持ちは変わりません」、7輪で「密かな愛」であることを知り、さらに頭を抱える立香であった。



まあ、いずれはキヤラメルやマカロンを贈るようになるので、時間「一緒にいると安心する人 特別な人」の問題なわけだが。ちなみに、女性サーヴァントへのお返しはあなたとの関係が続くようにバームクーヘンである。

そして、長年バラのチョコを贈られた意趣返しではないが、プロポーズの際にはそれぞれ50本のバラを二人に贈るのであった。意味はググるべし。

その頃、海鳴は喫茶翠屋のオープンテラス。

「お、帰ってきたわね」

「どうだった、二人とも？」

用を済ませて帰ってきたのはとフェイトを出迎える、ニヤニヤ「笑いのアリサと」にこにこ「笑いのすずか。両者の性格の違いが如実に表れている。」

「にやははは、ちゃんと渡してきたよ。でも、みんなの分まで私が持つて行ってよかったの？」

「ま、あんまり大勢で押しかけられるのも迷惑でしょ」

「フェイトちゃんの方は？ ちゃんと渡せた？」

「う、うん。みんなの分は、職員の人に預けてきちやっただけ……それでよかったの？」

「いいのいいの。馬に蹴られるのは御免だしねえ」

そう、フェイトが直接渡したのは自分の分だけだったが、実は同僚を経由する形で友人たちのチョコも贈っていたりする。わざわざ回りくどいことをした理由は……まあ、アリサの言った通りだ。

実際、なのはの方も直接渡したのは自分の分だけで、友人たちの分は時間差がついている。

「まあ、立香さんの方は報告待ちとして……なのははどうだった？」

「どうって？」

「ほら、こう……ドキドキしたりとか」

「? ? ? ?」

「ちっ、この鈍感娘。じゃ、ユーノは？」

「ユーノ君? 顔が赤いから休もうって言ったんだけど、大丈夫って

言って聞いてくれないんだよね」

「まあ、あつちは自覚が芽生えただけ前進かしら」

「そう、だね」

「肝心のなのはがこの有様だけど」

「ま、まあなのはだから」

「分かったことだけど、ユーノ君がちよつと可哀そう……」

親友の鈍感っぷりに、呆れて言葉もない。実際、チョコを作っている時も「いっぱいお世話になってるお礼」と真顔で言っていたものだ。その割に、ユーノに渡す分だけは他と違って物凄く手が込んでいたが……アレで自覚がないとか、どんな頭の構造をしているのだろうか。

「そういえば、はやては？」

「桃子さんにお礼を言いに行ってるよ」

「〃完勝やった、師匠と呼ばせてください〃」って聞こえてきたわね」

なにしろ、一番手の込んだチョコを作っていたのがはやてだ。とはいえ、別に勝負をしていたわけでもあるまいに。

「さてさて、ホワイトデーはどうなるのかしらね？」

それはそれで、何やら面白いことになりそうと期待するアリサであった。

## シヤマルの場合

——うゝ、大丈夫かなあ……。

ふふつ、そんなに気を揉まなくても大丈夫よ。

——でも、かなり激しく喧嘩しましたよ。いつもだったら立香さんが上手く受け止めてくれてるのに、今回はそれをしようとすればするほどフエイトさん怒ってましたし……。

人間だから、そういう時もあるわよ。フエイトちゃんはそのあたりかなり自制できるし、むしろ逆にし過ぎるところがあるけど、それでも偶にああして気持ちちが暴発しちゃうのは仕方がないんじゃないかしら。

まあ、今回はちよゝつと激しいかもしれないわね。酔ってタガが緩んだのもあるとはいえ、普段なら子どもの前ではそういうのを見せないようにするはずなんですけど……よほど腹に据えかねてたのかしら？

とはいえ、そんなに心配しなくてもいいと思うわ。どうせ、理由事態は犬も食わない類だろうし。

——そうなんですか？

あの二人のことだから。大方、〃甘やかしてばかりで甘えてくれない〃とかそのあたりでしょ。

——あゝ……。

それをぶつけてる時点で甘えてる証拠、なんだけどね（クスクス）。

——でも、理由がそれならなおのこと拗れちゃいませんか？

拗れるわねえ、きつと。滅多に喧嘩しない分、いざ始まると徹底的に拗れてからでないかと仲直りできない人たちだから。

——立香さんが甘えれば解決しません？

気を遣って甘えられても喜ばないわ。立香さんもそれがわかってるから、無理に甘えようとしなないわけだし。

——さすが……でも、それじゃどうするつもりなんでしょう？

いつものパターンなら……逆転の発想で煽りに行くんじゃないかしら？

——煽る、ですか？ それって、拗れるどころか色々なところに罅入っちゃいませんか？

ああ、言い方が悪かったわ。煽るって言っても、言葉じゃなくて行動。

——行動？

割とよくやる方法としては、プレゼント攻勢ね。

——あく、確かに今の状況でプレゼント渡してご機嫌取りなんてしても、確かに逆効果で煽ってるのと同じかも……。でも、〃攻勢〃ってどういうことですか？

文字通り、ストックしてたプレゼント候補をぶつけるのよ。

——はい？

それも手当たり次第に全部。

——全部、ですか？

ちなみに、フェイトちゃんに聞いたらビックリするくらい全部だったらしいわ。それこそ、チラツとでも「いいかも」と思ったものは全部。

ほら、フェイトちゃんああいう性格だから欲しいものとかあっても滅多に口にしないでしょ。だからデートしてる時とか、テレビ見てる時とかに興味を持ったモノを網羅してるみたいなの。で、それを一気に放出するわけね。

普段のプレゼントも、その中から特にフェイトちゃんの気を引いたものから選ぶことが多いらしいわよ。あんまりにもプレゼント選びに迷いが無いから土郎君がコツを聞いたら、そんなこと言ったららしいし。

まあ、単純に〃似合そう〃って言う理由で選ぶこともあるみたいだし、高いものを買う時なんかは外堀を埋めてから……ってこともあるらしいけど。

——凄い観察力……って言えばいいんでしょうか？

フェイトちゃん自身ですら忘れてたようなものまで把握してるらしいし、実際「何か欲しいものある？」とかって聞かれたことないそうよ。

だから、エリオたちがフェイトちゃんへのプレゼントに困ると立香さんを頼るのも当然よね。

——（むしろ怖いレベルなんですけど……色々な意味で。いやでも、フェイトさん相手だとそれ位じゃないとプレゼントを選ぶのも一苦労、っていうのはわかるけど）

無駄遣いを咎めようにも、お金自体はコツコツ貯めた月々のお小遣いから出してるから口を挟めないってばやいてたわねえ……。

——お小遣い制、だったんですね。でも、それでよくプレゼント攻勢なんてできるほど貯められますね。

元々物欲の強くない人だし、フェイトちゃんもそうでしょ？ だから、「攻勢」って言ってもそんなに凄いことにはならないのよ。それにあの人って多才ではないけど色々多芸だから、結構手作りも多いらしいし。

——サバイバルが得意なのは知ってますけど……。

プロ並みではないけど、大工仕事だってできるのよね。海鳴時代には色々バイトもしてたから、さらにレパートリーも増えたんじゃないかしら……。

——ちなみに、どんなことしてたんですか？

接客業、清掃業、引越し、配達、漫画のアシスタント……色々な工場にも出入りしてたらしいし、変わり種だと漁師とかもやったことがあるって聞いたわね。それこそ、特別な資格のいるもの以外は大体経験あるんじゃないかしら？ 流石に無資格でつてことはないと思うけど。

——へえ……。

でも、治験とか美術モデルは報酬が良いけど諦めたって言ってたわ。色々特殊な事情のある人だから、新薬とかで変な反応が出て困るし、美術モデルも場合によっては肌を露出することもあるし、そこで体の傷とか見られるとまずいでしょ。小さなものがほとんどで大きなものは少ないとはいえ、お腹の傷はかなり目立つし。

入れ墨とは違うとはいえ、銭湯も厳しいところだと……ね。

——あ、それは確かに。改めて聞くと、こっちでも苦労してた

んですね……。

まあ、本当にお金に困るようなことはそうそうなかったみたいだから。いざっていう時の最終手段もあったみたいだし。

それに、器用貧乏もあれだけ色々できれば一種の特技じゃないかしら。『万事塞翁が馬』っていうのは、ある意味彼の人生を象徴した言葉よね。

——それで済ますには波乱万丈過ぎる気もしますけど……でも、プレゼントで煽るってどういうことですか？　ご機嫌取りをしてるって怒らせるってことでしょうか？

どちらかというと、『懲りずに甘やかす』ことに腹を立てる感じがしら？　それで、勢いに任せて溜まっていく鬱憤を吐き出させるつもりなのよ。

ふふっ、どこまで行ってもフェイトちゃんじゃ立香さんには敵わないね。

——凡そ負けてるところなんてないはずなのに……。

年齢以外なら、ほぼすべての面でフェイトちゃんが上ですもんね。でも、試合には勝っても勝負には勝てない、男女の関係は複雑なものよ。

——あゝ、それは何となくわかる気がします。うちも、力関係が良くわからないところありますし……。

そうなの？

——基本的にはママが主導権を握ってるんですが、ここぞって時はパパが強いですね。まあ、普段はパパが譲ってるだけなのかもしれないが。

あらあら……。

※ちなみに数日後、例によって例の如くフェイトが高町家に緊急避難してくる。顔を真っ赤にして、なのは親友に「立香が、立香がくくくくくっ！」と言葉にならない様子で何事かまくしたてるのであった。

ついでに、久しぶりにヴィヴィオと一緒に風呂に入ると、その首筋やら鎖骨の辺りやらに赤い痕が点々と……鏡に映るそれを見てまたさらに顔が紅潮するのだが、その頬がだらしなく緩んでいたことを

ヴィヴィオは知っている。だが、深入りはしない。だって、なのもそういう顔してるからね♪

——ちなみに、八神家はどうなんです？

ん、男女比率が偏ってることもあって、基本的にははやてちゃん  
が“一家の長”ね。でも、生活基盤を握ってるのが士郎君だから、立  
場が弱いってことはないわよ？

あ、だけど時々蚊帳の外にされて寂しそうにザフィーラとお酒を飲  
んでる時はあるわね。

——へえ、ホントに色々なんですネ。

人間だって人それぞれなんですもの、複数人で構成される“家庭”  
の在り様だってそれぞれで当然でしょ？

——そうですね。サーヴァントの人たち見ると、特にそう感じ  
ますし。

……まあ、あの人たちは本当に“個性の塊”というか、“個性が大  
爆発”してるというか……良識か常識のどちらか、あるいは両方が欠  
けてる人が多すぎるのよね。

——？ 良識と常識って、どう違うんですか？

そうね、定義的な話してもいいんだけど、ここは……簡単に言  
うと、“良識はあるけど常識がない”のがアストルフオさんで、“常  
識はあるけど良識がない”のがパラケルススさん、つて言えばわかる  
？

——あ、なんとなく言いたいことが分かりました。騒動を起こ  
すにしても、方向性が違いますもんね。

どっちも動けば余計なことしかしないのは同じだけどね。

でも、アストルフオさんの場合が頭は痛いけど怒りにくいのに対し  
て、パラケルススさんの場合は遠慮呵責なく折檻できるのは、大きな  
違いだと思わない？

——……ノ、ノーコメントで。

当然、常識と良識のどっちもない人に“常識的な”あるいは“良識  
のある”行動なんて望むべくもないのよね。というか、どっちもある  
人でも“やらかす”ことがあるんですもの。期待するのが間違つて

るんでしょね。

——まあ、それは確かに……：：：：：そういえば、シヤマル先生的には他にどんなカテゴライズがあるんですか？

そうね、例えば……：：：：：「仲間」と「味方」かしら？

——それってつまり、「仲間だけど味方じゃない」のと、「味方だけど仲間じゃない」っていう意味ですか？

ええ、そういう意味よ。

——……：：：：：何が違うんですか？　　というか、みんな「仲間で味方」じゃないんですか？　　あつ、もしかして生前の因縁的に相容れないサーヴァント、って意味？

え？　　もちろんそういう人もいるし、中には因縁はなくても性格的に合わない人同士もいるけど、普通に立香さん相手にそういうスタンスの人もいるわよ。

——え……：：：：：そりゃ酒吞さんとかが唐突に殺しにかかるのは知ってますけど、それは流石に……。

まあ、酒吞童子はなんだかんで一応は「仲間で味方」よね。ヴィイオの言う通り、私たちには理解できないタイミングで牙を剥いてくることはあるけど。

——でも、シヤマル先生が言っているのはそういうことじゃないんですよね。

ええ。簡単に言うと、「味方だけど仲間じゃない」タイプは「協力はしても慣れ合う気がない」人のこと。例えば、虞美人さんなんてそんな感じでしょ？　　あとは、昔のギルガメツシユ王とかロボもそんな感じだったみたいね。

他にもいるけど……：：：：：でもこのタイプは、最近は大いぶ「仲間」になって来た気がするわ。立香さんの根気の勝利かしら？

——ああ、なるほど。そつちは何となく意味が分かりました。でも、それなら「仲間だけど味方じゃない」って言うのは？

……指示には従うし、ちゃんと交流もしてくれる。だけど、根本的なところが「限りなく敵」に近い人たち。というより、辛うじて「敵じゃない」って言うべきかしら？



その意味で言えば、酒呑さんもちちら寄りかもしれないわね。中でも筆頭は……キアラさん。

——そうなんですか？ いつもニコニコしてて、相談事にも親身になってくれますし、普通にいい人だと思うんですけど。

……それを否定する気はないし、別に彼女がウソをついてたり、猫を被つてたりするわけでもないわ。

ただ……あの人には絶対に気を許しちゃダメ。いい、絶対よ。なのはちちゃんたちを悲しませたくないでしょ？

——そ、そこまで念を押すほどなんですか？

ある意味で、ジェイル・スカリエツテイの同類ですもの。極自然体のまま他人の人生を破滅させる、そのことに何の罪悪感も疑問も抱かない。彼女たちにとって、自分の“欲”は万事に優先する。

そしてそれは、立香さん相手でも例外じゃない。むしろ、今は立香さんだけに狙いを絞っているから周囲に被害が出ていないだけよ。籠が外れたら、いったいどうなることやら……。

——その籠が、立香さんなんですか？

そう。他ならぬ、本人が公言していることよ。彼女は立香さんを「多くの絆、数多の縁によって奮い立つ貴人」と認めた上で、「そんな貴人を墮としてこそ」と言うんですもの。

そもそも、キアラさんが立香さんを守るのは“自分の手で破滅させる”ためよ。厳密に言うなら、“破滅する過程も愉しむ”のも目的のうちかしら。

——うわあ……確かに“ほとんど敵”ですね、それって。というか、良くサーヴァントやってますね。

本当に。

——よく周りの皆さんも認めてますよね。

彼女を嫌っている人は多いわ。でも、なんだかんだ言いつつも基本的には立香さんに対し忠実よ。能力的にも代えの利かない人だし、身を挺して立香さんを守ったこともある。だから、“信用はできないけど信頼はされている”のよね。

まあ、それにしたって“サーヴァント”という立ち位置を愉しんで

いるからに過ぎないのだけど。

とはいえ、サーヴァントでいるうちは“禁欲”する方針らしいし、そこは信じていいと思う。

——…あの人、そんなに危ない人だったんですね。

本当に。カルデアに危険人物は山ほどいるけど、間違いなくトップクラスですもの。

——っていうか、“仲間だけど味方じゃない”どころか“仲間だけど敵”ですよ。

ハッキリ言ってしまうえばそのとおりね。だから管理局的にも、あそこは要警戒対象なのよ。

——てつきり、“能力”とか“人格”的な危険人物ばかりだからだと思ってきました。

それはそれで間違っていないけどね。キアラさんだって、分類するなら“人格的な危険人物”だし。

あと、韓信さんとかある意味では管理局的には悪夢みたいな人よ。

——そうなんですか？

そうよ。だってあの人、空戦Aの魔導士が3人いればオーバーSを落とせる人ですもの。

——……………マジですか？

もちろん、指揮下の魔導士がちゃんと言うことを聞いてくれればっていう条件はつくけどね。

というか、Aランクなもの“空戦”が可能な魔導士ってなると、基本的にそのランクになるからよ。何なら、B以下でもできると思う。

——ひえっ……。

しかも、あの人の本領は集団戦よ。動かせる数が多ければ多いほど真価を發揮する。少数でもSランクを落とせるあの人に、もしも軍勢を指揮させたらいったいどうなることやら……。

他にもね、怖い人はいくらでもいるもの。なのはちゃんたちも、昔模擬戦してコテンパンにされたっけ。

——そ、そうなんですか？

中には本当に手も足も出なかつたり、あるいは「もう二度とやりた

くない」って半ばトラウマになった人とか。

まあ、相性だったりビジュアルとかの関係だったりで、単純な実力云々の問題とも違ったけど。

——（い、いったい昔のママたちに何が……）

あとはそう、あの人たちって基本的に「古い」でしょ？

——まあ、そもそも「過去」の人たちですしね。

ええ、魔術的に見るとそれが強みでもあるらしいんだけど、それは別に自分たちが「最新」からは程遠い自覚があるのよね。だからこそ、新しいものを取り入れるのに貪欲なところがあって……。

——？ いいことなんじゃないんですか、それって？

良いことよ。ええ、確かに良いことなの。だけど、発想が斜め上な人やスケールがオカシイ人もいるから、教導隊でも「何てこと思いつくんだ！」って、突拍子もない戦術を考え付いちやったりするのよ。

——ああ……やりそう。

当然、そんなの普通は実行できないんだけど、強引に押し通せちゃうスペックがあるから始末が悪いのよねえ……。

——いや、ママたちも結構「無理を通して道理を叩き潰す」な人たちだと思うんですけど……。

\* \* \* \* \*

「あ、ありがとうございます〜」

「はいよ、お疲れさん」

傷らしい傷はないものの、明らかに「疲労困憊」と言った様子で頭を下げるのはとフェイト。二人の後ろには、「引き攣った笑みを浮かべるしかない」といった様子の親友たちの姿もある。

そんな面々に対し、今回の模擬戦の仮想敵役たちはいたっていつもの調子だ。

「いやはや、若いお嬢さんたち相手にちよいと大人げなかったかね」

「そう、ですね。少々やり過ぎたかもしれません」

特に疲労した様子もないことに、ちよつと自信喪失しそうな子ども

たち。流石に「やり過ぎたか」と思い、気を回すのは「ウィリアム・テル」と「風魔小太郎」の二人。

ただ、その気遣いがまた、なのはたちを打ちのめしていることに果たして気付いているのかいないのか。

「良いんじゃないねえの、別に。若いうちには挫折も必要ですよつと」  
「ま、そいつを否定はせんがね」

至って軽い調子で流す「ロビンフッド」に同意しつつ、外見・内面ともに壮年男性のウィリアムはちよつとバツが悪そうだ。望まれたことであり、必要なことだったとは思うが、幼気な子どもたちが本気で凹んでいる姿には思うところがあるのだろう。ましてやそれが、自分たちの行いの結果となればなおのこと。

「それにしても、見事に手も足も出なかったわね」

「ふぐつ……!?!」

「二人だつてすごく強いはずなのに……あの人たちの方が強かったつてこと?」

「いやあ、そう単純な話でもないつちゆうか、そもそも「戦わせてもらえなかった」ちゆうか……」

「お二人は敗因をお分かりですか?」

「……全然持ち味を活かせませんでした」

小太郎からの問いに、絞り出すようにして応えるのは。そして、ある意味ではその一言がすべてだった。

模擬戦の舞台は森林、設定された勝利条件は時間内にロビン・ウィリアム・小太郎のいずれか一人でもいいので捕縛すること。

その結果は………いつそ見事なまでの返り討ち。なのはたちは碌に三人の姿を捕捉することすらできず、持ち味である火力やスピードを活かすことなく、完全無欠にいいところなしで無力化されてしまったのだ。

さらに、その後はサーヴァント側の人数を減らしていつでも結果は同じ。そりゃ、なのはたちだつて自信を無くすというものだ。

別に、負けるのが初めてというわけでもない。

同等以上の力量の相手に負けるというのは十二分にあることだし、

訓練校の短期プログラムの最期、当時の自分たちよりも魔導士ランクの低い「恩師」にも手玉に取られた。しかし、あの時に出された宿題に「自分たちなりの答え」を出し、その上で精進を重ねてきたつもりだった。

にも拘らず、この体たらく。お世話になった色々な人たちに顔向けできない。

敗因は簡単なのだ。なのはが言った通り、「持ち味を活かせなかった」「これに尽きる。『自分の武器』を、『相手より勝っている点』を、まるつきり活かすことができなかった。それどころか、『戦う』という土俵に立つことさえさせてもらえなかった。

気付いた時には「罨」という名の「檻」の中。彼らは一切姿を見せず、徐々に二人の体力と精神力を削ぎ、誘い込み、追い詰めていった。一部の隙もない、とはあのことだろうと思うほどに、鮮やかな手並みだった。

「さて、一応聞くんだが……どうすればよかったと思う?」

「……………」

答えられない。なぜなら、何度思い返してもいつたどこでミスをしたのかわからないのだ。

だから当然、どうすれば勝てたのかもわからない。こんなことは、士郎との模擬戦以来……と考えたところで、フェイトの脳裏に閃きが舞い降りた。

「……………もしかして、戦闘に持ち込もうとしたのが失敗だった?」

「え? でも、勝利条件的に戦わなきゃいけないわけでしょ?」

「ああつ!? や、やられた〜…………」

フェイトの言葉に疑問符を浮かべるアリサだが、なのはも遅れて気付く。そう、この模擬戦はそもそも……

「どうしたの、二人とも?」

「…………この模擬戦はね、『勝たない代わりに負けない』が正解だったんだ」

「フェイトちゃん、正解。最善はもちろん勝利条件を満たすことやけど、戦ったらほぼ確実に負ける。となれば次善の策として、負けへん

代わりに勝ちを捨てる。それがこの模擬戦の正解やったわけや」

なにしろなのはたちとロビン達とでは、戦いの土俵が違い過ぎる。ほとんどの状況下では、なのはたちの方が圧倒的に有利だろう。試合形式だったり、開けた場所での戦闘になったりすればほぼ確実になのはたちが勝つ。

だが、こと森林地帯、特に具体的な居場所すらわからない状況となれば、それは「狩人」や「忍」の独壇場。なのはやフェイトの索敵能力は決して低くないが、隠密行動に長じた者たちが本気で隠れば発見は困難極まりない。対抗策としては、広域殲滅であたり一面を吹き飛ばすしかない。が、はやてのような広域型ならいざ知らず、二人では広大なフィールド全てを埋め尽くすことは不可能だった。

だからこそ、「虎穴に入らざれば虎子を得ず」ではないが、リスクを承知で森の中に降下した。二人で、時に一人で、そうして自分たちを囿にして釣ろうとしたのが悪手だった。

「勝つ」ために選択した「降下」という選択、それが間違い。正解は、決して降りることなく、一人でもいいから戦域から逃がさないよう牽制し続け、時間切れを待つこと。要は、「引き分け」こそが最適だった。

しかし、真面目な二人は素直に勝利条件を達成しようとしてしまった。

「お二人の戦い方は真っ向勝負に特化している部分がありますからね。反面、僕たちは正々堂々とは無縁。根本的に戦い方がかみ合わないんですよ」

「要は、俺らに有利な状況ならお嬢ちゃんたちに勝ち目はないし、その逆も然りってな」

「じゃあ、もしなのはたちに有利な状況だったらどうするんですか？」  
「大人しく尻尾を巻いて逃げるさ。獲物と相討ちになっちまったら、ワシら狩人にとっては敗北と同じだ」

彼らは武人でもなければ戦士でもない、そもそも「勝利」という言葉の定義がなのはたちとは違うのだ。

勝てないなら逃げる。勝てる機会を待ち、罨を張り巡らし、状況を

整える。

それが狩人や忍の戦いだ。

「まあ、二人のスキルの関係上、こういう任務に就くことはないからなあ」

苦笑いを浮かべつつ、フォローを入れるはやて。

実際、なのはやフェイトが「追跡戦」や「ゲリラ戦」という状況に投入されることは滅多にない。少なくとも、その場合には追跡や索敵に特化した補助型をつけ、二人には「戦闘」に集中できるような状況を整える。はつきり言ってしまうえば、なのはたちだけでこういう状況に持ち込まれた時点で、管理局の敗北なのだ。

では、なぜわざわざこんな模擬戦を設定したのか。それは、「現在ではなく「未来」の為。」

「今はまだ与えられた指示通りに戦う、「兵士」としての働きが二人の役目や。せやけど二人の進路的に、そのうち小隊の指揮を取ったりするようにもなる。その時には、「勝利」とか「任務達成」よりもっと俯瞰的な視点での判断を迫られる日も来るかもしれない。これは、その時のための予行練習、そのはじめの一步っちゅうわけや」

「……なるほど、はやて抜きだったのはそれも理由だったんだ」

進路の関係上、キャリアアとしていずれば部隊運用も視野に入れてい  
るはやてであれば、適切な判断を下せたかもしれない。だからこそ、  
今回の模擬戦から彼女は除外された。この模擬戦で得るべきものを、  
彼女は既に持っているから。

「ま、予想外の事態つてのは往々にして降りかかるもんだ」

「そうですね。それこそ、気付いたら「勝ち目なし」ということもあ  
るかもしれない」

「ちなみに、そっちのちっこいお嬢ちゃんならそんな時どうする？」

「そうですね……状況次第やけど、「逃げる」ことも考えなあかんで  
しょうね」

頭ではわかっているのだ。勝ち目がない時、任務達成が困難な時に  
は、「それ」も選択肢に入れなければならないことを。しかし、口に  
しておいてなんだが、はやてはその時に「それ」を自分が正しく判断

できるか自信がない。

なのはやフェイトも、そのあたりは同じらしく難しい顔をしている。なまじ優れた能力がある分、「退き時」を見定めるのは難しい。そのことを二人も思い出したのだ。

「フェイトちゃん、覚えてる？ 士郎さんに模擬戦つけてもらった時のこと」

「うん、私も思い出していた。意地張って、ムキになって、それで結局手玉に取られちゃったんだよね」

闇の書事件が終結して半年ほど経った頃だったろうか。ようやく裁判をはじめとした諸々に目途がつき、条件付きとはいえ士郎が八神家に帰ってきた間もなく。彼からの提案で模擬戦……と呼んでいいかは微妙だが、手合わせをしたことがある。

それまでなのはたちが経験してきた模擬戦や戦闘とは大きく趣の異なるそれは、彼女たちに大きな衝撃を与えた。

「士郎というと、あの村正殿と同じ顔をした御仁でしたか？」

「いや、確か村正があ坊主と同じ人間を依り代にしてるんじゃないかかったか？」

「で、あの赤いものの昔の姿って。いや、未だにあ坊主がアレになるってが、俺にはどーも信じらんねえんだよな。どんなビフォーアフターだよ」

「ですがロビン殿、英雄王や征服王の様に、劇的過ぎる方は他にもいるのでは？」

「いやまあ、そうなんだけどよ……」

些かならず腐れ縁があるだけに、イメージの不一致に対する違和感が甚だしいのだろう。

ソリが合わないというのもあるが、あの朴訥かつ純朴な少年がどうしたらあのような皮肉屋になるのやら。ましてや……

（あいつのオルタに至っては、もう別人どころじゃねえしなあ……）

「そういうえば、その時の模擬戦とはどのようなものだったのでしょうか？」

「あ、えっと、士郎さんを潜伏した犯人に見立てて、見つけて捕まえ



るって感じだったんですが……」

思い出して、なのはの顔が若干青ざめる。よく見れば、フェイトの顔色も悪い。

だが、無理もない話だ。ただでさえ魔力量が少ないところに加え、士郎は魔法を使用できなくなることで引き換えに自身の魔力を完全に封印していたので、そもそも魔力による探査に引っかけからなかった。

まさか魔法の使用を放棄してまで魔力を封印するとは思っておらず、完全に裏をかかれて翻弄されてしまったのだ。それをいいことに、逃げる側とは思えないほどやりたい放題やってくれたものである。

「銃で狙撃されたり、基礎を爆破して倒壊する建物の巻き添えにされたり……」

「突っ込んできたトラックが直前で爆発したりもしたっけ……」

どこか煤けた表情で回想する二人。今回の様にターゲットを目視することすらできない、というほどではなかったようだが、中々に手痛い洗礼を浴びたらしい。むしろ、時折捕捉できたからこそ「負けてなるものか」とムキになってしまったのかもしれないが。

まあこの辺り、育て親の（悪しき）薫陶の賜物だろう。なのはたちの進路の関係上、このような手合いとかち合う可能性も否定できないからこそ、早めに経験させようと思ったのだろう。しかし、子どもたちの中ではしっかりトラウマとして刻まれてしまったらしい。

「そりやまた、中々揉まれたようで……」

（僕たちも、もう少し容赦なく行くべきだったでしょうか？）

（さて、そいつはどうだろうな。子どものうちから、あんまり過ぎるのはどうかと思うがね）

一応、今回は結構手加減していたつもりだったらしく、軽薄そうに見える笑みを浮かべるロビンの影でこっそり話し合う二人。士郎の意図がわかるからこそ、「もっと経験させるべきだったのでは……」と思うらしい。

とはいえ、「父」としての性質を強く持つウィリアムはあまり乗り気

ではない様子。そのおかげではないが、なのはたちが「不意打ち・闇討ち・人質・騙し討ちなんのその、正々堂々何それ美味しいの？」な外道戦法」を得意とする某守護者や、「島一つを対剣士要塞に作り替え、相手を中心までおびき寄せてから罠を発動、最終的には島ごと相手を潰す」とかいいうヤベエ奴と手合わせをする機会は、当面訪れないのであった。もちろん、色々な意味でSAN値が危ない連中も模擬戦相手からは除外された。経験は財産だが、何事も限度というものがある。

いやはや、つくづくカルデアは魔窟である。

そう、魔窟なのだ。にもかかわらず、珍しいことにあの男の姿がない。それは言わば、原子炉を稼働させていながら制御棒をすべて抜いたまま放置しているに等しい。

普通なら狂気の沙汰、なのだが……この三騎は滅多に騒動を起こさない貴重な穏健派。敢えて立香が傍で監督しなくても大丈夫、という信頼の現れだ。しかし、それはそれとして普段いるはずの男がいないと気になるのが人情というもの。

「そういえば、今日は立香さんおらへんの？」

「言われてみれば……いないね」

はやての疑問を受け、すずかも周囲を見渡してみるが結果は同じ。珍しいことなのは確かだが、立香とて常にフェイトたちに付き添えるわけではない。というか、そもそも彼自身はフェイトから距離を置こうとしているのだ。

本来なら、こうして「会えない」ことの方が正しい。しかし、結果的に立香の企みがまるであまくいつていないのも事実。

なので、少なからず「会える」ことを期待していたフェイトとしては、些かならず落胆を禁じ得ない。

「……」

「せっかくだし、ちよつと探してみたいところよね」

「でも、あんまりカルデアをウロウロするのも悪いし……」

シヨンボリしているフェイトを見かねたアリスの提案だが、すずかの言い分にも一理ある。管理局と協定を結んでいるとはいえ、カルデア

アは決して開放的な組織ではない。管理局との信頼関係構築の意味もあつてなのはたちを受け入れてはいるが、彼女たちが立ち入れるエリアはかなり制限されている。

それは機密を守るためであり、同時に部外者であるのはたちを守るためでもある。下手なところに足を踏み入れると、〃真正の危険ブツ〃と遭遇してしまう可能性があるからこそその制限でもあるのだから。

一応はそれを理解しているからこそ、皆の表情は浮かない。とそこで、すずかのスマホが着信を告げる。

「……………」

「どうしたの、すずかちゃん？」

「あ、お姉ちゃんからなんだけど……………これ」

「二? ? ?」

揃ってすずかの端末を覗き込めば、一枚の画像データが表示されていた。そこに映っていたのは……

「イク ワタシ」

「いや、なんで片言なん…ツて早!？」

雷光を閃かせながら最速でかつ飛んで行くフェイトと、すずかとアリスを抱えてその後を追うのはとはやて。最低限の礼儀として「お疲れさまでした〜」ありがとうございます〜とドップラー効果を残しながら。

そんな子どもたちを見送った三騎は、軽く顔を見合わせてから肩をすくめる。

「思いのほか早くバレましたね」

「だなあ。つてことは、やっぱ誰か情報をリークしてるってことか」

「ま、気にすることもないだろうさ。リークしてると言っても娘っ子を応援するだけ、可愛いもんだ」

「二ですね／だな」

これが本気で立香が迷惑に思っているのなら彼らも動くだろうが、そうではない。カルデア関係者の大半が中立を決め込んでいるのも、わざわざ邪魔するほどのことでもないと考えているからに他ならな

い。

「ま、若い頃の苦労は買つてでもしろって話だ。偶には、こういう苦労もいいもんさ」

（うゝん、世界の存亡云々よりかは格段にマシだと思いますが、良いのでしょうか……）

「そういう苦労なら、俺にも助言くらいは出来そうですねえつと」

（いえ、ロビン殿が口を挟むと、むしろ余計拗れるというか、主殿の気苦労が増す気がするのですが……）

父親視点あるいはプレイボーイ視点で語る同僚たちを尻目に、そつと溜息をつく小太郎なのであった。

そんなことがあつた数分前。

なのはの家族が経営する喫茶「翠屋」も軒を連ねる海鳴商店街にて、その街角の物陰に身を隠す三つの人影があつた。

「……なあ、俺たちはいったい何をしているんだ？」

「シツ！ 静かにして恭ちゃん、バレちゃうでしょ！ どうです、忍さん？」

「よつし、送信完了！ ありがとね、美由紀ちゃん。恭也はこの通りだし、私だけだとバレたかもしれないけど、それもこれも美由紀ちゃんのおかげだよ。御神の剣士様々ね♪」

「いえいえ、それほどでも」

「いや、俺たちは別にこんなことのために日々修行しているわけではないのだが……」

何やら盛り上がっている恋人と妹に白い目を向けつつ、説得を諦めたように嘆息する恭也。

さもありません。事ここに至るまで散々説得を試みた後なのだ、いくら忍耐強い彼でも色濃い疲労が滲むのは無理からぬことだろう。

「まあまあ、恭ちゃんだってフェイトちゃんのこととは可愛いでしょ？」

なにしろ「なのはの親友」で、剣の手ほどきもしたことがある「教え子」なんだから」

「それは、まあ……そうだが」

「そうだよ、恭也。そんな可愛い可愛いフェイトちゃんの恋路、応援しないでするの?」

「……なあ、 “愉しむ” という副音が聞こえたのは俺の気のせいかな?」

「気のせい気のせい」

(買い出しの途中のはずなんだが、帰るのはいつになることやら。まったく、なんでこんなことに……)

事の発端は、発注ミスで納品が遅れてしまった翠屋の消耗品の補充に出たことだった。

大した量でもないので一人で充分だったのだが、ちようど客足が減る時間帯だったこともあり、休憩と気分転換がてら美由紀と忍も同行することに。そこまでは良かったのだが、その帰り道で見知った顔に遭遇した。

恭也は普通に声をかけようとしたのだが、その前に恋人と妹美由紀によって両腕を抱えられ、路地裏に連行されてしまったのだ。ご丁寧に、美由紀に口を押えられたうえで。

訳も分からぬうちに物陰に引きずり込まれ、流石の恭也も視線で抗議の意を示した。が、女性陣二人はそれに気付いた様子もなく、こっそり物陰から顔をのぞかせ興味津々のご様子。恭也も渋々状況把握のために顔を出せば、そこにはやはり見知った青年…藤丸立香の姿があった。ただし、その傍らには見慣れぬ少女の姿もあって。

「……………今度は子守のバイトか?」

——スパパン!!

率直な所見を述べれば、左右から平手が後頭部に見舞われる。

「……痛いぞ」

「恭也がトンチキなこと言うからよ」

「恭ちゃん、仮にも恋人のいる身で言うことじゃないよっ!」

「絶賛独り身のお前にだけは言われたくない」

「兄の心無い言葉が私の心を抉る!」 忍さ——ん (泣)

「お、よしよし……恭也、帰ったら “デリカシー” の書き取り一万回ね」

「……地味に辛くないか？」

「乙女心」とか「恋愛の機微」に疎いという自覚はあるが、それでもあんまりではなからうか。というより、いったいこの二人は何がそんなに気にかかるのか。

顔見知りか若い少女を連れて街を歩いている。ただそれだけのはず……と、そこまで考えて思い出す。

「……そういえば、藤丸はもうバイトをする必要はないんだっただか？」

「そうね。じゃ、あの子と藤丸君の関係は？」

「知らない顔だぞ、分かるわけがない」

「恭ちゃん、ちよつとは考えようよ」

前情報抜きで考えるのは、「想像」や「推測」ではなく、「妄想」の類ではなからうか……と思うものの、あえて口にはしない。多分、口にすればまた平手打ちをもらうことになるからだ。それくらいのこと、恭也にも予想できた。

(………見たところ、それなりに親しそうではある。昨日今日の付き合いではないだろう。

白髪に赤い瞳……アルビノ、というヤツか？ そちらに意識が向き易いが、顔立ちも非常に整っている。とはいえ、年齢的にはなのはたちとそう年の差はなさそうだし……)

「……やつぱり、デートですかね？」

「そうか？ ただの引率だと思うが……」

「あり得るわね。年の差はあるけど将来性抜群だし、手握って楽しそうにしてるあたり……怪しいと思わない？」

「思います！」

「？ 流石にそれはないだろう」

「まったく、藤丸君にも困ったものよね」

「ホントですよ。フェイトちゃんというものがありませんながら……」

「いや、だからな、決めつけるのはどうなんだ？」

友人というほど親しいわけではないが、他人というのも不適切。忙しい時には翠屋を手伝ってくれたこともあるので、流石に不名誉な憶測をされるのは不憫でならない。

彼の趣味嗜好は知らないが、ロリコンの類ではない……と思う。もしそうならなのはその付き合いも含めて考え直さなければならぬが、今までそんな素振りはなかったので信用していいだろう。なので弁護しようとはしているのだが、如何せん二人とも聞く耳を持つちやいない。

「なあ。そもそも、どうしてフェイトの名前が出る？」

「……………これだから恭也／恭ちゃんは」

「……………酷く侮辱された気がする」

こればかりは二人に正当性があるのだが、もちろんそんなことには気づかない。

「とりあえず、フェイトちゃんに通報ですね。忍さん、フェイトちゃんの連絡先知ってます？」

「知らないけど、確かすずかがフェイトちゃんたちと出かけるって言うってたはず」

「はい、なのはも同じこと言っていました」

「じゃ、すずか経由で知らせましょう。私から連絡するから、恭也と美由紀ちゃんは引き続き監視ヨロシク！」

「いや、だから……」はい、任せてください！ 日々の修行の成果、見せてやります！……………お前なあ」

とまあ、そんなことがあったわけだ。

恭也としては消耗品を翠屋に届け、そのまま店の手伝いに戻ってしまいたいのだが……………

(ガツチリ)

(……………これを外すのは、骨が折れそうだな)

美由紀は剣士の握力を、忍は夜の一族の身体能力をいかに発揮し、恭也の裾を掴んで離さない。やってできないことはないだろうが、面倒臭いことこの上ない。なにより、一人でバツクレたとなれば後で何を言われるかわかったものではない。

恭也は深々と溜息をつき、帰りが遅れる旨を伝えるべく携帯を手にとったのであった。

だが、忍も美由紀も甚だ勘違いをしていた。一見楽しそうに手を繋

いで待ちを散策する少々年齢差のあるカップル…に見える二人の  
実態を。

「おお、お嬢ちゃんカワイイね！ よっしや、こいつもサービ  
スしちまおうー！」

「えー、本当ですかー♪ ありがとうございます、オ・ジ・サ・マ♡」  
「なんのなんの〜」

可愛らしく微笑まれ、思わず表情が緩む総菜屋の店主。

そんな二人のやり取りを微笑ましそうに、その実心底呆れた眼差  
しを向けながら、立香は眺めていた。

見事戦利品コロツケを獲て店をあとにしたかと思うと、少女はにこやかな表  
情のまま冷め切った声で件の店主をあざ笑う。

「まったく、人間ってホント愚かですねー。ちよつと愛想振りまくだ  
けでデレデレしちやって……」

「……ねえ、カーマ」

「はーい、なんですか？ お・に・い・さ・ま♪」

あ、それとも、ご主人様の方が良いですか？ いやですねえ、幼気  
な少女を傅かせるとか、性癖歪み過ぎでは？ まあ、ご安心を。そん  
な気持ちの悪いあなたでも、私は平等に愛してあげますよ。何しろ、  
愛の神ですから」

「(イラッ)俺にそんな趣味はありません」

「えー、でも『マスター』の時点でギルティだと思えますけど〜」  
(イライラ……)

世間的に殺しにかかっているとしか思えない発言を、実にイヤらし  
い笑みで投げかけてくる相手に、流石の立香も苛立ちを抑えるのに苦  
労する。せめてもの救いは、表情を取り繕って小声で話していること  
か。

これでもう少し声量が大きかったり、あるいは『あからさま』な表  
情を浮かべていたりしたら、立香はあつという間に警察のお世話に  
なってしまう。

『罪』や『業』には色々心当たりがあるが、身に覚えのない、し  
かも不名誉極まりない罪状でしょつぴかれるのは勘弁してほしい。



「あ、それとももしかしてもう帰るんですか？　酷いですね、私あんなに頑張ったのにな」

「……いや、今日は一日付き合う約束だから」

「そうですね。ま、私〃は信じていましたけど」

(イライライラ)

矢鱈と〃私〃を強調してくるところにまた苛立ちが募るが、実際カーマは大活躍だった。それだけに、文句も言いづらい。

そもそもは、先日発生した微小特異点でのことだ。なんというかまあ……人理云々や人類悪アレコレとは比べるべくもなく、深刻とはかけ離れた案件だったのだが……ひたすらに頭が痛かった。

放っておけばいずれ消滅するような脆弱な特異点だったので、無視するという選択肢もあった。というか、ゴールドルフなどは全力で見ぬふりをしていた。できれば、立香もそうしたかった。しなかったのだが、それよりも一時でも放置することによる精神的なストレスが勝った。

なにしろ、彼の特異点は……

「恋愛観がトチ狂った世界、私の愛の矢が大活躍でしたね」

「ソウダネ」

あまりの悪夢っぷりに、思い返すこともしたくない。

いたる所で〃百合〃と〃薔薇〃の花が咲き乱れ、見知った顔同士が時に抱擁し合い、あるいは接吻を交わす。見た目極上が多いので感覚がマヒし、新しい扉を開きそうになったりもしたが……流石に、黒髭と青髭の濃厚なラブシーンはSAN値が消し飛びそうだった。あるいは生前の仇敵だったり、性質的に不倶戴天の関係の者同士が睦み合ったりする姿に本人たちが発狂寸前。

特に、項羽と赤兔馬が致す直前まで行った時は……大変居た堪れなかった。あと、虞美人が大暴走した。

閑話休題。

立香自身、しばらく彼らの顔を直視できなかつたくらいには、色々酷かった。

拳句の果てに、特異点にレイシフトしてみればなぜか立香の貞操が

狙われる羽目に。ねっとりとした視線が尻を這うならまだまし。嗜虐的な笑みを浮かべるエルキドウや妖艶に微笑むデオンに襲われかけた時は、心底震え上がった。

いや、ヘラクレスやイヴァン雷帝とかでも怖いことには怖いのだが、「受け入れてしまうのではないか」という意味ではこちらが勝る。

そんな時、猛威を振るつたのがカーマであった。

刺さった者に恋慕の情を呼び起こす花の矢、  
「愛もてかれるは恋無きなり」。加えて、「恋とか愛とかキャツキヤウフフしてる人たちの邪魔をするのは超楽しい」という、本人の『悪い愛の女神』として開き直ってしまったている性質が、これでもかと言わんばかりに刺さりまくった結果だ。

時に薔薇や百合のカップルを破局させ、時に立香の貞操を狙う連中の意を挫く。正直、(貞操が)危ういところを助けられた時は、涙ながらに縋りついて感謝したものだ。いや、そもそも反応しないのだが……怖いものは怖いのである。

(まあ、俺のことはともかく他のカップルには悪い気がしないでもなかったけど……)

本気、あるいは正気だったのならいざしらず、アレはあくまでも願望機聖杯による作用の結果。どこぞの博愛主義者が「誰もが自由に愛し合える世界を」と願った結果、よくわからない形で実現してしまったのが彼の特異点なので、破局させること自体には特に問題はなかった……はずだ。

まあ、その割にはというべきか、だからこそというべきか、熱量だけはすごかった。だからこそ、カーマのやる気にも火が着いたわけだが。

とそんなことがあり、大いに活躍してくれたカーマへの感謝も込めてこうして外出している次第である。

「中々会いませんねえ、つまらな〜い」

「なにが？」

「ここ、あの子の地元でしょう？　もしかしたら、バツタリ遭遇して誤

解されちやったりとか期待してたんですけどお〜」

「微小特異点でのことで味を占めたらしく、「引つ掻き回して破局させる」のがブームらしい。本当に、うざったいたらない笑顔だ。

とはいえ、確かに立香としても海鳴に来るのはできれば避けたかった。しかし、管理局との協定が結ばれたとはいえ、まだまだ互いの信頼関係は浅いと言わざるを得ない。下手に刺激しないためにも、もつとも目と手の届きやすい海鳴くらいしか来られる場所がなかったのだ。

それに、とりあえずここでフェイトと遭遇する心配はない。

「フェイトは今カルデアで模擬戦中だからね、当分は大丈夫」

「チツ〜」

ちよつと美少女がしちやいけない顔で舌打ちをするカーマ。いたい、フェイトがいたら何をするつもりだったのやら。フェイトの想いを受け入れるつもりはないとはいえ、変な誤解をされて軽蔑されるのも困る。

だからこそ、こうして一計を案じてフェイトの居ぬ間に海鳴に来たのだ。

ちなみに、こここそ暗躍している某大魔導士もその意見に賛成の為、今回は裏から手を回したりはしなかった。

「それで、次はどこに行きたい?」

「え〜、そこはしっかりエスコートしてほしいですね〜。まったく、これだから童貞さんは」

(いい加減、ちよつとくらい痛い目に合わせてもいい気がしてきた)  
「ま、哀れで可哀そうで哀れなマスターさんなので、リクエストしてあげますよ。あ、『哀れ』って二回言っちゃいました。ごめんなさい、あんまりにも可哀そうだったのでつい」

表面上は笑顔のまま、額の辺りに青筋が浮かびそうになるのを何とか堪える。ここで煽りに乗ってはいけない。そうなれば、調子に乗ってさらに煽ってくるのは自明だ。

「そうですね〜。油っぽいのを食べたので、次はさっぱりしたものと甘いものがいいですね〜」

内心で「太って体重計に乗ればいいのに」と思いつつ、サーヴァントであることに加えて女神であることから体重に変化がないことも知っているの、深々と溜息をつきつつ街を案内する。

何はともあれ、今回は慰労と感謝を込めての外出だ。ならば、どれだけ知り合いに会う可能性が高くとも、手抜きをすべきではない。そもそも、こうして海鳴りを散策している時点で知り合い云々は手遅れなのだ<sup>と</sup>開き直る。

しかし、まさか既に見つかっていて、挙句の果てに隠し撮り写真を送信されているとは夢にも思わない立香であった。

それから十数分後。立香とカーマは待ちで人気の喫茶店、翠屋の店内にいた。

「ん〜おいしい♪ 赤い人のケーキも良いですけど、やっぱり専門家のそれは一味違いますねえ〜」

海鳴で「美味しい甘味が食べられる店」となると、やはりここは外翠屋せない。自慢のシュークリームとイチゴのショートに舌鼓を打つ様は、十歳前後の外見年齢相応だ。

「っていうかさ、なんでその姿なの？」

「は？ 今更そこですか？」

「いや、なんていうか……突っ込んだら負けかなって」

普段は自分に都合のいい外見年齢でいることが多いカーマなので、今日もそうなのだろうとは思う。しかし、何を以て「都合がいい」かはわからない。

確かに子どもの姿だと色々チャホヤされるし、実際先ほどもオマケしてもらっていた。そのあたり、ちゃっかり味を占めているのである。だが、それは他の姿でも不可能ではないはずだ。なにしろ、外見は文句なしに極上の部類だし、成長した姿は大変グラマラスなので世の男どもの目を惹きつけてやまない。敢えて子どもの姿を選ぶ理由となると、ちよつと思ひ浮かばないのだ。

なので、正直言うとうと海鳴に来た時から気になってはいた。

ただ、研ぎ澄まされた危機感知能力が「今はやめとけ」と訴えてい

たので、こうして顔見知りの店まで我慢していた次第である。

だが、このあと立香は「やっぱり聞かなきゃよかった」と思うことになるのであった。

「だって、万が一にも『恋人』とか思われたらイヤですし。私の趣味を疑われちゃうじゃないですか」

「フェイトを煽るつもりだったんじゃないの?」

「それはそれ、これはこれです。誤解『させる』のはいいですけど、『される』のって気持ち悪いじゃないですか。

あ、ひよつとして大人な私とのデートを楽しみにしてたりしたんですか。ちよつとマスターさんは好みじゃないのでごめんなさ〜い」

「いや、それは別に……」

「あれ〜? ということは、小さな私とデートできて内心ワクワクだったと? な〜んて、もちろん知っていましたよ。何しろ今の私の姿は、『マスターの好み』に合わせた結果なんですから」

(ッ!?)

その時、翠屋のレジの影で必死に耳をそばだてていた金色の塊が跳ねた。ついでに、その目は『希望の光を見た』とばかりに輝いている。

(ちよつとフェイト、そんな『それならチャンスが!?!』みたいな顔しないの!)

(冷静になり。万々が一そうやったとしたら、何年かしたらストライクゾーンから外れてまうんやで? ええんか、それで)

(うん。『将来に期待』の方が、最終的には良いと思う……)

で、その金色の塊を何とか宥める小さな影が三つ。本来いるべきもう一つは、ただいまお手伝いの真っ最中の為、この場にはいない。

しかし、そんなやり取りを知ってか知らずか、カーマはさらに立香の尊厳に追い打ちをかけてくる。

「ホント、こんなミニマムボディが好みだなんて、マスターは変態さんロリコンだったんですね〜。これからはマスター改め、ロリコン男爵とでもお呼びしましょうか? いいですね〜、ロリコン男爵。サイッコウに気持ち悪くてたまりませんね〜」

(ピキッ)

「ですがご安心を。救いようのないペドフィリアなマスターですが、私はちやくんと愛してあげますよ。ほおくら、飲みかけのジュースなんていかがです？ ほらほら、ストローのこここのところ。舐めるなりしやぶるなりどくぞご自由に、間接キス”したいんでしょ？ 大丈夫、私はちやくんとわかってますから」

(こら、落ち着きなさいフェイト！ 顔見ればわかるでしょ、別に立香さんそんな趣味ないから！ だから自分の飲みかけを持っていこうとしない!?)

(むしろ、覗き見してたことがばれちゃう方がまずいと思うなあ……)  
(あかん、私のバインドやとそろそろ限界や。すずかちゃん、急いでなのはちやくんを……)

「どうやら、カーマの当初の目的のうちの半分 “煽って引つ掻き回す” は無事に達成できたらしい。まあ、本人のあずかり知らぬところではあるが。」

「あれれ〜？ どうしたんですか、マスター？ もしかして、今更自分の性癖が恥ずかしくなりましたか？ 別に取り繕わなくなりましたよ。マスターが私だけでは飽き足らず、ちびっこサーヴァントや例の金色の子を囲って、ロリのハーレムを作ろうとしているのなんて、愛の女神たる私にはお見通しなんですから」

(ガバツ!?)

(いや、何真に受けてんのよこの子は!?)

(フェイトちゃん、すっかり拗らせとるなあ。私もあんま人のこと言えんはずなんやけど……ちよう引くで?)

(う、うくん……)

バインドを振りほどき、弾かれたように立ち上がったフェイト。若干どころではないくらいに錯乱したまま立香たちの居る席に向けて駆けだそうとした、その瞬間……何かが “キレる音” がした。

—————  
ブチッ

(あれ？ いまの、何の音だろう?)

何とかフェイトを抑えようと羽交い絞めにしつつ、首を傾げながら

音の出所：立香たちの席に再度視線を向けるはずか。そこで彼女が見たのは、無言のまま「ガッ」とフォークを握りしめ、勢いよく振り下ろす立香の姿だった。その先には、カーマが最後の楽しみにと大事に大事にとつておいたショートケーキの至宝。

「? あ—— ツ!? 大事にとつておいた私のイチゴ!

あ、だめ、食べちゃダメ——!? あ—— ツ!?」

突然のことに半泣きになって止めようとするカーマを無視し、容赦なくイチゴは立香のお口にイン。

モツキユモツキユと咀嚼・嚙下する様を、「ツ——」と一滴の涙をこぼしながら呆然と見送るカーマを尻目に、立香は身を乗り出して対面に座るカーマの頬に手を伸ばす。

彼女が我に返ったのは、そのモチモチのほっぺを思いつきり引つ張られた瞬間だった。

「いひやいいひやい!? ふあにふるんですふあ—— ツ!?」

「人聞きの悪いことを……」

「ごめんなふあいごめんなふあい!!! もうしまふえんから——  
——っ!!!」

知ってるか、こいつこれでも「人類を滅ぼす大災害」の一角、ビーストⅢ/Ⅳだったんだぜ?

それが今やこの有様。見る影もないとはまさにこのこと。これぞカルデア名物「負けたらギャグ要員」、どんなに強大なラスボスも敗者の末路はいつだって悲しいものなのさ。

ところで、珍しく立香が折檻する姿を目の当たりにしたフェイトはというと……微妙にタイミングを逸して、最初の一步を踏み出せずに宙ぶらりんな姿勢のまま、ポツリと一言。

「……………いいなあ」

「「っ!」」

フェイトとしては、ああいう遠慮のない関係への憧れが口をついた……つもりだったのだが、周りはそう受け取らなかった。

(え、実はフェイトちゃんて痛いのが好きな人やったん?)

(そういえば、母親に虐待されてたのよね。まさか、それが原因で「愛

情「痛み」に……!?」

(フェイトちゃん、何も自分からハードル上げなくても……)

しかし、友人たちがこんなことを思ってしまったのも無理はない。だって、この時のフェイトは頬を紅潮させ、少しうっとりしたような表情を浮かべていたんだもの。

まあ、それが誤解だったかどうかは、本人のみぞ知る。

全くの余談だが、フェイトとしては抱擁するなら「ちよつと苦しい」くらいにきつく抱きしめてもらう方が好き。むしろ、思うように動けないくらいの方が「求め<sup>束縛</sup>られている」と強く実感できて嬉しかったりする。

反面、負傷した立香に応急手当でしただけの苦悶の表情に胸が高鳴ったりしたのは誰にも言えない秘密。断じて立香が傷を負うことは望んでいないが、それはそれとして「自分の指に立香が反応する」と言う事実には堪らなくなってしまうのであった。

まあ、要は立香だったらだいたい何でもいいということなのだが……ちよつとこのお嬢さんの将来が心配になる。



## シグナムの場合

———そういえば、どうして「星」なんでしょう？  
どうした、藪から棒に。

———あ、いえ、立香さんてサーヴァントのみんなのことをよく「星」に例えますよね。

まあ、そうだな。

———でも、あの人たち自身は自分たちのことを「人理の影法師」とか「かつてありし人の影」とか言うじゃないですか。なんていうか、随分と印象の違う表現の仕方をするなああって。

ふむ……どちらかと言えば、「影」という方がサーヴァントという存在の在り様を端的に表現しているとは思う。

彼らはその戦力と存在感に反し、虚ろで儂い。魔力の供給を絶たれば、あるいは現世との楔たるマスターを失えば、初めからいなくなつたかのように消えてしまう。

加えて、あまり好ましい言い方ではないが、魔術的な観点で見ればサーヴァントは「英霊の劣化コピー」と呼ぶべきものだ。実際、彼らの一側面を切り取った限定的な存在なのもまた事実。

サーヴァントたちが自らを「影」と呼ぶのは、そういった理由からだろう。

ヴォルケンリッター  
我々守護騎士も似たようなところがあるからな。気持ちにはわからんでもない。

———改めてそう言われると、なんだか寂しいです……。

……そんな顔をするな。確かに我が身の曖昧さに思うところがないわけではないが、別段卑下しているわけではない。それは、サーヴァントたちとて同じだろう。

まあ、一種の線引きだ。自分たちは「生者ではない」というな。

———ごめんなさい。なんというか、その線引き自体が私には、その……。

むっ、なんと言えば良いのだろうか。私はあまり口が上手い方では

ないが……差別と区別は似ているようで違う、とでも言えればいいだろうか。

“生身”でこそないが、私は別段自分の命を疎かにしているつもりはない。とはいえ、こういう身体だからこそお前たちに比べれば多少は融通が利く。そのところを弁えた上で、必要な時には身体を張っているつもりだ。

少なくとも、昔のなのはや士郎よりはよほど自分を大切にしているつもりだぞ。

——あゝ：それはまあ、確かに。じゃあ、昔のママや士郎さんが差別で、今のシグナムさんたちの心構えが区別なんですか？

そうだ。決して蔑ろにし、使い捨てにするつもりはない。昔ならいざ知らず……この日々は、失うにはあまりに惜しい。まだまだ見たいものもやりたいことも多い。勿体なさ過ぎて、手放す気にはなれんほどにな。

——サーヴァントの皆さんもそうなんでしょうか？

連中を見ていればわかるだろう。むしろ、我々以上に現世の生活を謳歌しているぞ。

——た、確かに……でも、いざとなれば霊基の消滅だって厭わないですよ？

そこはまあ、何に重きを置いているかの違いだろう。

“人類史の存続によってこそ我らの存在は報われる”

“未来に生きるその全てが、英霊にとっては何にも勝る宝だ”

おそらく、これらの言葉がすべてなのだ。そして、だからこそ藤丸は彼らを“星”と称するのだろうか。

——どういうことでしょうか？

ヴィヴィオ、お前は星とは何だと思う？

——星、ですか？ えつと……とりあえず、まず連想するのはママですね。

ふむ、確かにお前らしい見解だな。

——あとはそうですね……どこか遠い、誰かが住んでいる世界かもしれないし、あるいはもう誰もいない世界かもしれない。それこ

そ、身近な人のルーツを遡れば今見えている星のどこかに行きつくかも。そう考えると、ロマンがあるなあって思います。

そのあたりは、他世界の存在を知る者ならではかもしれない。地球でも似たような考えがないわけではないが、まだまだ夢想の域を出ない話だ。

では、視点を変えてみればどうだ？ 例えばそう、地上から見た場合の星とは何だと思う？

——うくん……夜空を照らすもので、大昔なら旅の道標でもありますよね。あ、もしかしてそういう意味なんですか？

そうだな。藤丸にとって、サーヴァントとはそういうものだったはずだ。

目指す先はわかっているけど、その道行は困難を極め、僅かな先すら見通せない闇の中を進むが如くだったことだろう。その中であって、闇という名の障害を祓い、進むべき道を拓いていった彼らの存在は、まさに「星」そのものだったに違いない。

——なるほど……「星」って言うのは、立香さんなりの皆さんへの感謝が込められているんですね。

ああ。しかし、それらとは別の意味も込められているのではないかなと思う。

——というど？

夜空で瞬く星々だが、実のところそれらが遥かな過去の光であることはお前も知っているだろう。

——ああ……「光年」っていうのは距離の単位ですけど、その光が届くまでにかかる時間の事でもありますもんね。

何百年、何千年、それこそ何万年以上も昔の光を、我々は見ている。言い換えれば、過去の光が今を照らしているとも言える。それは、現代に召喚されたサーヴァントたちにも言えることではないか？

——確かに、サーヴァントと似ているかもしれないね。

だからこそ、奴にとって彼らは「星」なのだろうよ。

——そっかあ。確かにそれは、立香さんらしい表現ですね！  
奴の根底にあるのは「感謝」だ。

騎士を喚びたい、王を喚びたい、あるいは魔、あるいは神……最初から決めて喚んだわけではない。

助けを求める声を聞き、藻掻く様に差し出した手を取ってくれた。まだ名前も知らない誰か”への。

そして、それが藤丸にできる精一杯でもあった。特別強いわけでもなく、賢いわけでもなく、飛び抜けた魔力量もない。強いて言えば、”他人との縁に関する並外れた幸運”くらいだろう。そんな奴にできたことと言えば、己の手を取ってくれた”誰か”の在り様への感謝を忘れないことだけだった。

”それしかできない”と卑下し目を逸らすのではなく、できることから逃げなかった。

覚悟もないまま大きすぎる責任を背負わされ、それでも誰かがやらなければならぬのなら、と。

いくつもの歴史を消し去り、ついには世界を救った男の、最後まで揺らぐことのなかった芯。

その簡単なようで、なんと困難なことか……。

……そうですね。

………まあ、いつか奴自身が星、もとい星座になりそうではあるが。

——英霊になるってことですか？　まあ、その資格くらいありそうですね……。

いや、そういうことではなく……。

——？　？　？

ギリシャ神話では、度々死者が星座となつて召し上げられるそうだ。ケイローン然り、アスクレピオス然り。

藤丸もまあ、大概厄介な女神……いや、そもそも神自体が厄介ごとの代名詞のようなものなのだが……それはともかく、オリオンも言っていたな”女神、特にギリシヤはやめとけ！””なんでそんなに女神喚んじやうかなあ!?”　なに、そんなにお星<sup>星</sup>さまになりたいのおたく!!”と。

——あゝ、あゝ……うん、すごい説得力。

まあ、女神に気に入られているという意味では主はやても同様なのだが……我らの誇りにかけて、なんと少しでも阻止しなければ!!

——が、頑張ってください……。

まあ、幸い藤丸が健在な限りはそういうことにはなるまい。

むしろ問題なのは、万が一にも奴の身に何かあった時だ。何しろ、激憤して暴走しそうな連中が多すぎる。

——物騒過ぎるSEC●Mですからね……。

ストッパーもないではないが、どこまで期待できることか……人望がありすぎるのも考え物だ。

——普段ならストッパーになつてくれる人でも、その時だけは……って十分ありそうですもんね。

うむ。まあ、余計なことさえしなければ基本的には爆発しないのがせめてもの救いだらう。

——ちよつとした刺激で大爆発する、ニトログリセリンみたいな人もいますけどね。

その点に関して言えば、藤丸がいればとりあえず問題なかろう。藤丸の人間性が頼みという点で危険視する連中もいるにはいるが、反対意見が完全になくなるということはないからな。

場合によっては、藤丸やカルデアに対する反感から結論ありきで危険性を主張する輩もいる。

——感情に理屈をぶつけても、沈静化は望めませんもんね。

藤丸は藤丸で、善悪の分別が独特なところがあるからな。危険視するのわからないではない。

我々があまり頓着しないのも、見方を変えれば“身内鼻真”のようなものだ。

——あゝ、そういう見方もあるんですね。でも、立香さんってそんなに独特ですか？

奴自身の倫理や道徳はまっとうなものだ。善悪についても、基本的には次元世界一般のそれと変わらん。強いて言えば、本当に必要であるならば本意ではない選択肢を選ぶことができる、という程度だろう。それ位であれば、そこまで珍しいものではない。

槍玉に挙げられるのは、「他人の在り様」に対するスタンスだ。

——柔軟というか、懐が深いというか、知っててもビツクリしちやう時がありますもんね。

個人的な見解ではあるが……。

——？

アレの本質は「鏡」なのだと思う。

——鏡、ですか？ それってつまり、相手の本質を映す、的な？ いや、そういう意味ではない。むしろ、それだとあの連中が相手の場合激昂させる可能性が高い。アンデルセンやカルナを見ればわかるだろう？

——あの二人の場合、表現の仕方に問題があると思うんですが……。

それもあるが、基本的に「一切の虚飾を配した姿」などというものを突き付けられても、大抵の場合は素直に受け止められるものではない。誰しも見たくない自分、知りたくない性質というのはあるものだからな。

私が言う鏡とは、そう言った穿った意味ではない。言葉のままに、「目に映った姿のままに遇する」ということだ。

——それって、そんなに特別なことですか？

特別だとも。貴人として見れば貴人として、変人と見れば変人として対応する。言ってしまうえばそういうことだが、実際にできるかとなれば話は別だ。

考えてもみろ、カルデアに変人奇人は大勢いるが、奴らに対してどのように対応するなどという真似、本当にできるか？

——……………怖くてできませんね。

お前でさえそうだ。サーヴァントの前では吹けば飛ぶような無力な存在である奴が、容赦のない受け答えができるというだけでも驚異的だろう。性根が柔軟過ぎるといえるか、肝が太すぎるといえるか……存外、それが藤丸の「起源」とやらなのかもしれない。

——あれ？ でもそういえば、「鏡」って他にもいませんでしたっけ？

“いる”……というか、“いた”というべきだな。ビーストI、魔王ゲーティア。方向性こそ違うが、奴もまた“鏡”のような性質を持つていたらしい。

偶然か必然か、同じ性質を持つ者同士だったというわけだ。いや、藤丸が唯一直接対決することになった獣が同じ性質を有するゲーティアだったというのは、必然だったのかもしれない。

ゲーティアは藤丸を自らの“怨敵”であり“憎悪”、そして……“運命”と評した。だがそれは、藤丸にとっても同じだったのかもしれない。

——立香さんの、運命……。

まあ、その鏡のような性質も善し悪しだが。

——そうなんですか？

藤丸の本質は“善”だ。誰が言ったか“他人に染まらず、自分の感じた正しさを信じられる”というのが奴の強さの一端だろう。

とはいえ、善一辺倒というわけでもない。“善を知りながら悪を為し、善にありながら悪を許す”あるいは“善でありながら悪を憎まらず、悪に苛まれようとも善を貫こうとする”というようにな。そしてそれは、他人に対しても同じだ。

まっとうな倫理観を持っているから非道や悪行に憤り、反論することはある。だが、奴はその根幹にある思想や価値観、過去や出自を軽々しく否定することはない。自分に見えているのが、“表面的なものに過ぎない”とわかっているからだろう。

行動と相手の本質を切り離して考えている、とでも言えばいいだろうか。藤丸はそれを特に意識せずにやっている。だから善悪で他人を差別せず、“個”に侮辱や偏見を向けることなく慈しみ尊重することができる。それは、やろうと思っても易々とできることではない。

我々はどうしても、行動と本質をつなげて考えてしまいがちだ。

いや、それが間違っているというわけではない。行動には必ず本質が影響する以上、分離して捉えるのが正しいとも一概には言い切れない。

——それは、確かに……。

正しいか間違っているかはいったん横に置くが、目には見えない部分について軽々に判断しないのが藤丸の在り方なのは間違いない。

同時に、見えてきた本質に対して敬意を払う。それが善であれ悪であれ、そう在るに至った道程はその人物個人のもの。他人である自分が口を挟む道理はない、そういうことなのだろうな。

だからこそ、奴は悪人や怪物と呼ばれる連中の手を取ることができない。それは確かに得難い美德であり、彼らにとっては眩しいものなのかもしれない。

だが、誰もがそう考えられるわけではないし、賛同するわけでもない。

むしろ、その姿勢を「危険分子」と捉える者もいるし、否定できない部分もある。多少の軋轢は、今後も絶えないだろう。

——難しいんですね……。

まあ、そもそも万人に受け入れられる在り様、などというものがそもそもあり得んと言ってしまうえばそれまでだがな。それこそ、どこぞの異聞帯でもない限りは。

——……はい。

そんな顔をするな。受け入れられない者がいるように、藤丸の在り様を愛する者もいる。

——そう、ですよ。立香さんがああいう人じゃなかったら、フェイトさんと仲良くなるなんてまずなかったでしょうし。

うむ。普通、拉致監禁した相手と結婚するなど、頭がトチ狂っているとは思えんからな。

——……ひ、否定できない言い回しはやめてほしいです。

まあ、テストアロツサはテストアロツサで「拉致監禁までしておいて」というところではあるのだが。

——やめたげてください。フェイトさんが死んじやいます、精神的に。

だがな、昔のあいつは実に傍迷惑な女だったぞ。いや、それは今もか？

——そんなにですか？



管理局員や執務官、または戦闘魔導士としてみれば信頼できる、頼もしい相手だ。

一人の人として見た場合でも、多くの美点を備えた好人物と言えるだろう。

が、だ。女として見た場合……とにかくものすごく面倒くさい。

——め、面倒……？

色々、な。子どもに話すには憚られるようなこともある。

とはいえ、一番面倒なのが本人の理性と本音の乖離だ。

——理性と本音、ですか？

よく「愛されるより愛したい」だの「愛されるのが女の幸せ」だのと言うだろうか？

その点で言えば、アイツは理性では「愛したい」と考えている。

——そうですね。基本的に世話焼きというか、構いたがりなところがありますし。

しかし、奴の本質……根源的な欲求は「愛されたい」というものだ。理由はまあ……生い立ちを考えれば納得がいくだろうか？

——あく……そういうことですか。

意識の上では「愛する」ことを望んでいながら、本人も意識していない本音の部分では「愛される」ことを望んでいる。だから、その両方が満たされないとアイツは満足できない。

——でも、「愛したい」人でも、やっぱり「愛されない」ことは満足できませんよね。

もちろんそうだ。問題なのは、人並み以上にその欲求が強く、加えて本人がそれに気づいていないということだな。

妙に献身的過ぎるといえるか、自分を抑える傾向がある奴だ。素直に甘えられないのも、甘やかされ続けると逃げ出すのも、本音の部分を理解していないからこそだ。

——逃げるのもですか？

本音では求めているものが満たされ幸福感を覚えているのに、自覚がないから持て余しているということだ。

「愛したい」というのも嘘ではないし、それが満たされないなら満

たされなくて情緒不安定になる。かといって、「愛されたい」という隠れた欲求が満たされない限りは満足できない。しかも質の悪いことに、本人にその自覚がないと来た。だから、放っておくと適切な方法がわからずいつまでたっても満たされない。

そのままだと、どうなると思う？

——なんか、ちよつと怖くなってきたんですけど…どうなるんです？

満たされないから、別の方法で補填しようと過干渉になる。アレが妙に過保護なもの、その一端だろう。

——普段、あれだけ甘やかされてるのにですか？

逆だ。アレだけ甘やかされているから、あの程度で済んでいる。

——うわあ……。

「愛したい」という欲求については、アレの性格上勝手に満たすべく動くから放っておけばいい。

しかし、表面的に見れば「世話を焼くことが幸せ」に見えるから、本音の部分が分かりにくいというえにそのままでは満たされない。だからあいつの好きなようにさせていると、欲求不満を満たすために過干渉になる。だが、それではいつまでたっても状況は改善しない。むしろ、エスカレートして手に負えなくなりかねん。

どうだ、実に面倒な女だと思わんか？

——ノ、ノーコメントで。でもそれってつまり、フェイトさん相手には徹底的に甘やかすのが最適解？

そうなる。放置すれば、相手をダメ人間にするまで干渉するか、あるいは自由がなくなるまで束縛するところまで行きかねんからな。かなり高確率で諸共破滅するのではないか？

——流石立香さん、人間関係の達人…って言えばいいんですかね？

普通に考えれば、「愛する」にしろ「愛される」にしろ要求値が高過ぎる女だが、藤丸の周りにはそれ以上が掃いて捨てるほどいるからな。常人なら重過ぎて逃げ出すところでも、奴に限って言えば気にも留めまい。

——清姫さんたちの方がずっと重いですもんね……。  
ま、そのくせ藤丸からの評価には不満を漏らすわけだが。

——評価？ 立香さんって、マシユさん相手もそうですけど、  
たいいつも褒めちぎってませんか？

その褒め方の問題だ。思い出してみろ、例えばテスタロッサの容姿  
をどう褒めている？

——どうって…あつ。

そうだ。あの男は基本、テスタロッサを「可愛い」と評する。で  
は、「綺麗」と評したことがあるか？

——えつと…あれ？ ちよつと待ってください  
……ちよつと思い出せないんですが、シグナ  
ムさんは心当たりは？

私が知る限りでは一度、ウエディングドレスの時だけだ。

——えく…フェイトさんって、どう見たって綺麗系ですよね？  
そのはずなのだがな、どういうわけかあの男は「綺麗」とは滅多に  
口にしない。

——マシユさんだと…「綺麗」って普通に聞きますね。え、もし  
かしてこれって差別？

いや、逆にあまりキリエライトを「可愛い」と聞いたことがない。

——言われてみれば…素敵とかは聞いたことがあるけど、「可  
愛い」は聞いたことがない？ 二人で使う表現を区別してるのかな  
？ それとも、まだフェイトさんを「小さい子」扱いしてるとか？

さて、そのあたりはわからんが……そういえば昔、そのことで面白  
いことがあったな。

——面白いこと、ですか？

ああ。なのはたちの学生時代の写真は見たことがあるか？

——はい。うちにはあんまりないけど、海鳴のおうちにはたくさ  
んあるので。

では、中三の文化祭の写真は？

——えつと…ちよつとピンポイントなのは思い出せないん  
ですけど、何かあったんですか？

うむ。三人が内部進学しないことはすでに知れ渡っていたからな、最後のチャンスとばかりに演劇部から強烈にオファーがかかった。主はやては要領が良いのでうまく切り抜けたが……。

——ああ、最終的にママたちの方が折れちゃったんですね。となると、舞台の衣装ですか？

そうだ、心当たりはあるか？

——うくん、ちよつと思いいせませんね。

普段見ない衣装だったからな、お前なら一度見ていれば覚えているだろう。

——つまり、私は見たことがない？ え、でもどうして……。

決まっている。恥ずかしくて隠したからだ。

……………。

ちなみに、この家にはその時の映像データがあるが、見るか？

——是非!!

\* \* \* \* \*

夢を、見ている。

(ああ、まただ)

また一人、心を通わせた大切な仲間が消えていく。

これまでがそうだったように、この海でもたくさんモノを亡くした。起きた時には覚えていないが、夢の中ではすべて思い出せる。この前も、その前も、さらに前も……数えきれないほど、かけがえのないモノを亡くしてきた。

それは、今回も変わらない。

彼に恋をしたという少女も、彼を友達と呼んだ青年も、みんなみんな消えていく。

再会したとしても、それはかつて出会ったみんなとは似て非なる誰か。

——それは、とても惨い夢。

特別な才能も、特殊な出自も、稀有な体質も持ち合わせてはいな

かった、只人であつた一人の少年。

そんな彼が、覚悟を醸成する猶予も与えられず、期せずしてあまりにも重い責任を負つて始まつた永い旅。

(また、キミは傷ついている)

——それは、とても美しい夢。

一度は世界を救つた彼が、今度は多くの世界を滅ぼす側に回る。その度に彼の心が、声ならぬ悲鳴軋みを上げている。

彼の道を拓くために、大勢の仲間が果てていく。その度に彼の心は傷を負い、見えぬ血涙がとどめなく流れていく。

(また、キミが泣いている)

——それは、とても儂気高いい夢。

彼女からは彼の背中しか見えない。いつも、いつだって、この夢は彼の顔を見せてはくれない。唯々、何かに耐え堪える背中だけを映し出す。

本当に泣いているかは定かではない、それでも確かに彼の背中は泣いていた。

そう、わかる。わかつてしまうのだ、彼がどれほど苦悩しているのかが。

肩の強張りが彼の悲嘆を教えてくれる。

血の滲む握り締められた拳が彼の慟哭を表している。

震える足が彼の恐怖を示している。

漏れる吐息が彼の絶望を物語っている。

いったい、いったい誰が知ろう。彼の苦悩を、悲嘆を、慟哭を、恐怖を、絶望を……いったい、誰が知る。

それは、彼の旅路という名の夢を見る彼女にも推し量れない。当然だ、その全ては彼只一人のもの。他の誰にも、本当の意味で理解できるものではない。

それでも、彼女は知りたかつた。理解したかつた。

その上で、彼を支え、励まし、守りたかつた。

あなたは間違っていない！

あなたの決断は正しい！！

その歩みには意味があった!!!  
そう言えたら、どんなに良かったことか。

(言える、訳がない!!)

知ったところで、理解したところで言えるはずもない。だってそれは、あまりにも無責任だ。

踏み躪り、犠牲にしてきた全てを背に、どうしてそんなことが言えるようか。

なにより、その言葉が彼を傷つけるとわかってしまう。

たとえ彼の顔が見えたところで、それは同じこと。

だがそれでも、彼女は懸命に手を伸ばす。少しでも近づこうと地面を蹴る。

双眸から溢れる涙を拭うをこともせず、懸命に我武者羅に。

かける言葉がないのなら、せめてその身を抱きしめたい。

彼を傷つけ苛む全てから、彼を守りたい。

血を流し凍えた心に、彼からもらった温もりを伝えたい。

なのに、この夢はそれすら許してはくれなくて。

どれだけ走っても、どんなに手を伸ばしても、彼我の距離は一向に縮まらない。

(ああ、本当に、なんてヒドイユメ……)

それでも走り続ける。手を伸ばすことをやめない。

だって諦めてしまえば、もう二度と届かなくなってしまう。

それだけは、絶対に嫌なのだ。

(だってあの人は、溢れんばかりに多くのものを与えてくれた)

だから走る、何年でも、何十年かかっても。

(寒くて寂しくて震えていた心に、たくさんの暖かなものを注いでくれた)

“救いたい”だなんておこがましいことは思っていない。

ただ寄り添いたい。彼に温もりを与える一人になりたい。

それで時々でいいから、ほんの少しでも自分に向けて彼が笑ってくれたなら、十分過ぎる報酬だ。

(返すためじゃない。その喜びを、この嬉しさを、ほんの少しでも伝え

たい)

走って、走って、走り続けて、白い光が視界を塗りつぶして。  
そうして今日も、届かぬままに夢が終わ<sup>覚</sup>めた。

——ピピピッ！ ピピピッ！

目覚ましのアラームが鳴り響く自室で、フェイト・テスタロッサ・ハラオウンはゆっくりと重い瞼を開く。

「ん？ ん？？」

だが、どうにも視界が悪い。己む無く右手で瞼をこすりながら、左手でアラームを止めるべく手探りで目覚ましを探す。

なかなか目覚ましに行き当たらず、右往左往する左手。しかし、それまでけたたましく鳴っていたアラームが突如止み、代わりに誰かがのぞき込んでくる気配を感じた。

「おくい、フェイト大丈夫かい？」

「ん、アルフ？」

「あくあく、あんまり擦ると腫れるよ？ ほい、タオル。そいつで少し冷やしな」

「……うん、ありがとう」

左手に手渡されたタオルから、ヒンヤリとした冷たさが伝わってくる。どうやら、冷水に浸して絞ってきてくれたらしい。使い魔というよりは家族の一員という意識が強いアルフの配慮に感謝し、冷やしタオルを両の瞼の上のせて少し休む。

「また泣いてたのかい？」

「そう、みたい。夢の内容は、覚えてないんだけどね」

他の誰かにとってはわからないが、フェイトにとってはよくあることだ。

悲鳴と共に飛び起きることも、嘔吐<sup>えず</sup>いて胃の中のを吐き出してしまうこともある。それらに比べれば、しとどに涙があふれるくらいならまだマシな方だろう。

まあ、両目が腫れぼったくなるので、その点は少々困りものだが。

「……………」

「大丈夫だよ、そんなに心配しなくても。本当に、ただの夢だから」  
「……でもさ、せめてり…カルデアに相談するとかした方がいいんじゃないかい？」

「……そうだね、考えてみる」

一応、医者…というかシヤマルには内密に相談したことはある。検査もしてみたが、特に異常らしきものは見当たらなかった。だから、まったく違う観点から調べた方がいいと思つての提案。本当は立香に相談するよう勧めようと思つて言い直したが、あまり意味はなかつたらしいと嘆息する。

「考える」フェイトのそれが拒絶の裏返しであることを、アルフは理解していた。

(立香達には相談できない内容、つてことなんだろうね)

夢の内容を覚えていないというフェイトの言を疑つてはいない。ただ、それでも残るものがあり、それがフェイトにそのような判断をさせているのだろう。

ならば、無理強いも隠れて報告もしない。きっとこれは、フェイトと彼にとつて必要なことなのだろう。アルフはどこまで行こうとフェイトの味方をする決めてる。一口に味方をすると言つても、その形は様々だろう。

間違つた方向に進みそうになるならば諫め、必要とあらば身を挺して止めるのも一つの方法だ。だが、アルフは苦言を呈し、別の道を提示はしても、最後はフェイトの意に沿う。それが彼女の考える「味方をする」ということだから。

「朝ごはんまでまだあるから、ゆっくりおいでよ。あたしはお母さんのこと手伝ってくるからさ」

「あ、でも私も……」

「いいからいいから。そんな顔で会つても、心配させるだけだよ？」

「……そうだね、お願い」

「任された！ と、あとくれぐれもその格好で出てこないこと、いいね」

そう言い残して、アルフはフェイトの部屋を後にする。残されたの



は、目元だけでなく羞恥で全身を真っ赤にしたフェイト一人。

(うー、やっぱり恥ずかしいよね、この格好……)

自覚はある。自覚はあるのだが、やめられない。というか、やめたくない。

(いいなあ、はやては)

正直、幼馴染にして親友のことが羨ましくてならない。想い人と一つ屋根の下というだけでも羨ましいのに、彼女は積極的に好意をアピールする。年齢差があるという意味ではフェイトも似たようなものだが、やはり一緒に暮らしているというのは重要なポイントだ。

フェイトの場合、会おうと思えば会えるが、逆に言えば会おうとしなければ会えない。しかも、基本的に相手は彼女の好意を受け止める気がない。そんな状態で告白しようものなら、「会おうと思えば会えなくもない」から「会おうと思っても滅多に会えない」に状況が悪化する可能性がある。あるいは、もっと悪くなるかもしれない。それを考えれば、線引きの口実を与えるのは得策ではないだろう。

そんなことになれば、ただでさえ低い可能性がさらに低くなってしまふ。だからこそ、フェイトはリンディの助言もあつて、好意をアピールしつつも告白という形を取らないようにしてきた。

その点、はやては基本的に毎日必ず顔を合わす。例え喧嘩をしようとして、例え月の物で気持ちが悪く不安定になつていようと関係なく。それはデメリットと呼べる点だろうが、告白し振られたとしても会うことができるメリットには代えがたいと思う。だって、それならば再挑戦の機会がいくらでもあるのだから。

それを理解しているからこそ、はやては惜しげもなく「愛の告白」という名の「ボディーパープ」を連打する。ジワジワと効いてきたそれに彼が屈する日も、そう遠くはないだろう。

(はやてのことだから、それこそ裸エプロンくらいしてても不思議じゃないし……)

タヌキは本来「雑食」だが、彼女の場合これでもかと言わんばかりに「肉食」だ。

思春期を迎え、小柄ながら女性らしい柔らかな曲線と膨らみ…即

ち、性的な魅力を身に着けた彼女の攻勢は、小学生の頃の比ではない  
：と伝え聞く。八神家総出で囲い込みに走り、全力で獲物を狩るつも  
りでいるのだろう。まさに狩人の所業である。

まあ、彼女のことだから悪いようにはしないだろう。むしろ、完全  
無欠に幸せにしてくれるだろうから、さつさと降伏してしまつた方が  
いいとフェイトは思う。

だってそうでもしなければ、はやての想い人は幸せになれない。あ  
れほどまでに、自分を幸せにできない人も稀有だろうから。

その点で言えば、フェイトは正直あまり自信がない。自分に“彼”  
を幸せにできるのだろうか。自分だけが幸せでは意味がない。むし  
ろ、フェイトは相手を“幸せにしたい”人だ。

何度考えても答えは出ないが、それでも……

(私は、立香のそばにいたいんだ)

いつだって、最後に至る結論はここだった。自信はない、自分が傍  
にいていいのかもわからない。それでも彼の傍らにいたいというの  
は、完全に自分の我儘だ。その自覚もある。

普段の彼女なら、自分の都合はむしろ抑えてしまうだろう。しか  
し、この件に関してフェイトは自分を抑えないようにしようと決め  
た。フェイトに我儘になることを勧めたのは、他ならぬ立香なのだか  
ら。

「責任、取ってもらうからね、立香」

言葉にして、今日も意思を固める。

本当に彼が心から拒むのであれば、きつとフェイトは引いてしま  
うだろう。だがそうでない限りは、そんな不転の決意を。

そうしているうちに目元の熱もだいぶ引いてきた。フェイトは目  
を覆っていたタオルをどけると、身体を起こしてベッドから立ち上  
がる。

「ん……！」

固まっていた体を解す様に伸ばせば、中学生らしからぬ豊かな双丘  
も弾む。と同時に、何かが弾けて飛んだ。

「あ、ボタンボタン！」

慌てて飛んで行ったボタンを探し、部屋の隅に転がったそれを拾い上げホツと息をつく。とはいえ、まさか伸びをした程度で取れてしまふとは……。

「うう、また大きくなったのかな？ 流石にこれ以上はちよつと……」  
膨らみ始めの頃は日々大人の女性らしくなる身体に内心はしゃいでいたものだが、最近ではむしろ悩みの種だ。

まず、日本だと中々合うサイズが見つからない。あつても、デザインが好みに合わなかったり、派手過ぎたりといったことが多い。はやてに唆されたのと拗れた恋心の暴走の結果、まだまだ当分はお世話になる機会のなさそうな「勝負下着」なんてものを持つていたりはそのが、基本的にフェイトはあまり派手過ぎるものは好まない。もちろん、著しく際どかったり、ほとんど下着としての機能を放棄していたりするようなものなど以外の外。

まあ、色の好みに黒系統が多いので、友人に言わせれば十分「アドルト」らしいのだが。

「海外のメーカーの通販だと高いし、ミッドなんて更にだしなあ……」  
なので、最近では局の仕事の合間に……なんてことも多い。とはいえ、ゆつくり探す時間を捻出するのが難しいので、これはこれで難ありなのだ。

「それに……やっぱり際どいよね」

今の自分の格好を見下ろしながら、若干しよぼくれる。客観的に見て、今のフェイトの格好は煽情的過ぎるだろう。

着ているのは真っ白なワイシャツとショーツだけ。ただし、袖も丈も余り気味なのに対し、胸元だけは大変窮屈だ。閉じていない第一ボタンと取れた第二ボタンのおかげで豊かな谷間があらわになっているにもかかわらず、である。

さらに、ギリギリのところまでショーツは裾に隠れているが、その下には健康的にスラリと伸びた脚。芸術的な脚線美と白磁の肌が相まって、艶めかしくもある。ここ数年の、恐るべき成長の成果であった。

こんな格好で出てこられたら、リンディはまだしもクロノは大弱り

だろう。実際、以前一度寝惚けて出てきた際には、クロノは飲み掛けの牛乳を思いきり嘔き出し、その後滾々と説教したものだ。

さて、ところでなぜフェイトがこんなサイズの合わない裸ワイシャツでいるのかと言えば、事は数年前彼女がまだ小学生だった頃に遡る。

発端は、親友たちと八神家でパジャマパーティーをした際のはやての格好だった。皆が思い思いにお気に入りのパジャマ姿でいる中、彼女はなんと下着の上から丈の合わない七分丈シャツ姿。まだ辛うじて成長期前ということもあり、着られている。感満載だったが、そのあまりにも小学生らしからぬ格好に場は紛糾。特にアリサが真っ赤になって食って掛かったものだ。

しかし、当のはやては気にした素振りも見せず、シャツに顔を埋めて深呼吸、そしてご満悦とばかりの満面の笑み。もちろん、そのシャツが誰のものであったかは聞くまでもない。

聞けば…というか聞くまでもなく、土郎の古着とのことで、それを寝間着に使っているのだという。想い人の体温を感じられるようである安心感が得られるし、加えて彼の香りに包まれて大変寝心地が良いのだそう。あの時ははやての顔は、小学生ながらフェイトたちですらドキツとしてしまう妖艶な「女の顔」をしていた。

彼女たちとしても、そういう「ちよつとイケナイこと」に興味を湧いてくるお年頃。基本良い子なので無意識下で自制しているが、目の前で…それも親しい友人が幸せそうにやっているとすればその限りではない。

思わず食い入るように見てしまえば、「ジャジャーン♪」と紙袋を取り出すはやて。そのまま「なのはちゃんにプレゼントや!」と言って渡されたその中身は、なんかどこかで見覚えのあるベージュのワイシャツ。

不思議そうに首をかしげるのはに對し、はやてはとつてもいい笑顔で「無限書庫からの産地直送、とれたてホヤホヤのユーノ君印やで」と宣った。ついでに「クンカクンカするもよし、ペロペロするもよし。なのはちゃんの好きにしてええんやで」と悪魔の誘い付き。ちよつ

と小学生がしてはいけない表情をしていたので、どこからともなく出現したアリサのハリセンが一閃されたが。

しかしその実、なのはがちよつと頬を赤らめてまんざらでもない様子であったことは、全員が気付いていた。ついでに、今なお彼女が定期的に入手しては密かに愛用していることは秘密である。『十二に』とは聞いてはいけない、ブレイカーされるからね♪

でまあ、それを羨ましがったフェイトも、同じように立香の衣類を欲しがったのだが…そこでひと悶着。

「はやて、私の分は？」

「ごめんなあ、フェイトちゃん。管理局所属身内の無限書庫やったらともかく、流石にカルデアはセキュリティの関係で……」

「私のは？」

「いや、せやからちよう相手が悪くて……」

「私の分は？」

「こ、交渉はしてみたんよ！　せやけど…ほら！　おつかない人たちがおるやろ！　それで、その……」

「ワタシ　ニハ　ナイノ？」

「フェイトちゃん怖い！　目が怖い！　目からハイライトがのうなつとるんやけど!？」

「ネエ　ナンデ？」

「指、指い!?　めっちゃ指が肩に食い込んでる!？」

しかし、やはり無理なものは無理。となれば、残された方法はあと一つ。カルデアに乗り込み、直接手に入れるしかない。そこには聞くも涙語るも涙な戦いがあったとなかったとか。

とりあえず、フェイトがこのワイシャツを手に入れたのは一年以上前のことで、まだ三代目でしかないというところで察してほしい。新進気鋭の執務官といえど、あの連中から奪取するのは容易なことではないのだ。

(スンスン)

匂いを嗅げば、やはりもう残り香はない。ただフェイトの認識の上では、うっすらとだが彼の匂いを感じられる…気がする。とはいえ、

だいぶ草臥れてきているし、できればそろそろ4代目に切り替えたいところではあるのだが……。

「でも、流石に胸がもう……」

限界と言わざるを得ない。丈の長さはもとより、腹囲も腕周りもかなり余裕がある。ただ、胸囲だけはキツイ。成長そのものは嬉しいのだが、上には上がいることを考えるとそこで勝負するべきではないだろう。戦闘魔導士として考えても、あまり大きくなりすぎるのも支障が出るので困る。特にフェイトはスピードが持ち味なので、そこが制限されるのは死活問題だ。

世の中とは、まったくもってままならないものである。

まあとりあえず、遠からずこのスタイルを諦めるか、あるいは前を閉めず羽織るだけで我慢するかを選ぶなければなくなる。そのことだけは、覚悟を決めるべきだろう。

「はあ、まずは着替えよう」

当たり障りのない格好に着替えリビングに向かう。中学生活……引いては地球での日々も残すところあと半年。卒業すれば、本格的に生活の拠点を移して管理局勤めになる。

言わば、フェイトに残された最後のモラトリアム。思い出作りとして思い切り楽しみ、満喫しなければ勿体ない。

特に、来月には文化祭も控えている。泣いても笑っても最後の一大行事、出し物は何の変哲もない喫茶店だが、そこは人気の喫茶店の娘「高町なのは」の在籍クラス。売り上げ一位を目指し、気合の入りが違う。

フェイトも翠屋の手伝いで接客には慣れている。当日に向けて今日も頑張ろう、と意気込む……のだが、まさかあんなことになるうとは……。

昼休み、友人たちには先に屋上へ行ってもらい、日直の仕事を片付けて廊下を歩くフェイトとアリサ。

だが、その手にはまだちよつと大きめの段ボールが抱えられている。職員室で雑務を済ませたのだが、ちよつと訳あって化学準備室へ

運んでいる真つ最中なのだ。こういう時、男女別棟なのが面倒でもある。待たせているみんなに悪いので、できれば走らない程度に急ぎたいところだが…なかなかそうもいかない事情がある。

「バニングス会長、こんにちは」

「は〜い。とりあえず『前』会長だから、そこんどこ間違えないように」

「わかりました〜」

「大人気だね、アリサ・バニングス前生徒会長」

揶揄う様にフェイトが長つたらしいかつての役職名で呼べば、アリサの顔が盛大に顰められる。

聖祥大付属中では、夏休み明けに生徒会選挙が行われる。それを以て、先代会長であるアリサもお役御免となったはずなのだが、未だに彼女を「会長」と呼ぶ声は多い。アリサの人望と有能さ故だが、当の本人としてはため息をつきたいところだ。

「つたく、引退したんだからいい加減楽させてほしいわ。あの子、いまだに色々聞きに来るのよ」

「それだけアリサのリーダーシップが凄かったってことだよ」

現会長への愚痴をこぼせば、益々フェイトの微笑みが深まる。

とはいえ、何も声をかけられるのはアリサだけではない。

「あ、ハラオウンせんぱーい！」

「はい、こんにちは。前、気を付けてね」

「キヤーツ！ ハラオウン先輩に声かけてもらっちゃった！」

「あー、ずるーい！」

「いや、アンタが話しかけて返事してくれただけでしようが」

「今年も頑張ってください！ 私たち、絶対先輩に入れますから！」

「え、あ、う、それは……」

まったく悪気のない善意100%の声援だが、フェイトの表情が笑顔のまま固まる。応援してくれることに感謝すべきか、それとも正直に「お願いやめて」と懇願すべきか迷う。本音を言えば、「(乙女心が)死んでしまいます」と某語り部のキャスター直伝の綺麗な土下座を披露してでも辞めてもらいたいくらいだ。

しかし、フェイトが固まっている間に当の女子生徒たちは姦しくおしやべりしながら去ってしまう。結局今回も、明確に辞退を伝えることができなかった。

そんなフェイトに、先の揶揄いの仕返しとばかりに人の悪い笑みを浮かべたアリサが乗っかってくる。

「そちらも相変わらずの人気なようですね、〝ミスター・聖祥〟のテストタロツサ・ハラオウン先輩」

男女で校舎が分かれているとはいえ、文化祭や体育祭といった大きな行事は双方の校舎合同で行われる。なんなら高等部も一緒だ。その中で毎年特に盛り上がるイベントの一つが、所謂〝ミス・コン〟と〝ミスター・コン〟である。時代の流れには些か逆行しているが、こういう催しが盛り上がるのもまた事実。

聖祥は普段からセキリティがしっかりしている上に、対外的に解放される行事の際でもかなり厳しくチェックが入る。具体的には、事前に申請して入手するか在校生が手配したチケットなしでは入場できない。そのチケットも転売などされないよう、顔認証などが用いられる徹底ぶり。だからこそ可能な催しだ。

投票形式については、男子生徒はミス・コンの投票権だけを有し、女子生徒はミスター・コンの投票権のみを有している。つまり、〝男子が選ぶ聖祥の姫〟と〝女子が選ぶ聖祥の王子〟というわけだ。

例年であれば、当然ながら〝ミス・聖祥〟は女子生徒から、〝ミスター・聖祥〟は男子生徒から選ばれる。にもかかわらず、なぜかフェイトは去年一昨年と2年連続で〝ミスター・聖祥〟に選ばれた、選ばれてしまった。

もちろん自分から名乗りを上げたわけではない。自薦他薦を問わないので、気付けばいつの間にかノミネートされていたのだ。その結果、不動の〝聖祥の王子様〟として君臨してしまった次第である。何しろ、3位以下の得票数をすべて合わせてもフェイトには遠く及ばない。

余談だが、2位はアリサでこちらは僅差だった。まあ、流石に負けず嫌いのアリサもこればかりは負けたことに一安心。とつてもい



い笑顔で祝福し、「来年も頑張りなさいよね」と激励した。フェイトとしては、今年こそアリサに頑張つてほしいところだが。

ちなみに、ミス・聖祥はここ2年非常に熾烈な争いが展開され、上位5位が団子状態。誰が勝つても不思議ではないことから、いつの間にか「黄金期」なんて呼ばれていたりもする。恥ずかしがり屋のため、あまりそういったことに積極的ではないフェイトも、ミスター・聖祥に選ばれるくらいならミス・聖祥の方に選んでほしいと、割と切実に思っている。

「……私、そんなに男の子っぽいかな？」

「いやあ……フェイトの場合、女子校的なノリで『憧れの王子様』扱いされてるだけで、男として見てるわけじゃないと思うわよ」

というより、フェイトに男性要素を見出す方が難しい。

手入れの行き届いた女性も憧れる長い金紗の髪、中学生ながらメリハリのある豊満な肢体、ナチュラルメイクを施した奇跡的な造形の顔立ちはただでさえ絶世の美貌を更に際立たせ、言葉遣いは優しく穏やか、立ち居振る舞いは淑やか且つ嫺やか、性格も控えめで外国人ながら大和撫子然としている。聖祥でも屈指の女性的な魅力をもった少女だろう。事実、去年のミス・コンでは惜しくも3位だったことがそれを裏付けている。

そう、本来ならミスター・コンにノミネートされること自体があり得ない。しかし、そうなったからには当然理由がある。

「アリサはこう……『できる女の人』って感じでカッコいいからわかるけど、なんで私が……」

「いや、フェイトだって本来は『できる女』でしょうが。というか、社会に出て実績上げてるアンタと比べるのもおこがましいっての」

「アリサだったら、今すぐ社会に出てもあつという間に駆け上がっていけると思うけど?」

「あ、はいはい。ったく、なのはといい素でそういうこと言うんじゃないわよ。はあ、これだから天然は……」

「? ? ?」

「とにかく、普段はポヤポヤとしたところのあるアンタだけど、それ

とは別にキリツとした面もあるってこと。

あたしはまあ、自分で言うのもなんだけどあんまり可愛げのある方じゃないからね。いつでも男勝りなあたしより、フェイトの女らしさとカッコよさのギャップの方がウケたってことよ」

「そう、なの?」

「そうなの!」

可愛げ云々については反論したいところだが、言っても突っぱねられるのは経験上知っている。なので、とりあえずいまいちピンとこないことについて「コテン」と首をかしげると、きつぱりと断言されてしまう。

実際、普段は優しく穏やかな物腰ながら、必要とあらば毅然とした態度を見せるフェイトのファンは多い。男性ファンも多いのだが、若干女性ファンの方が優位なくらいだ。学外でナンパされているところを助けてもらったとか、転びそうになったところを支えてもらったといった声は結構多い。

今抱えている段ボールも、元は別の女子生徒に任された仕事だったのを、フェイトが「通り道だから」と請け負った次第。優しく微笑みながらこういうことをやるから、王子様扱いされるのである。

「これだって、別にそこまで重いわけじゃないんだし……」

「でも、この前休んだ時に係りの仕事を肩代わりしてもらったから」

「その借り、随分前に返してなかったっけ?」

「そうかな?」

「まったく、この子は……」

局の仕事の関係で時折学校を休むこともあるため、フェイトたちが誰かに学校での役目を肩代わりしてもらうことは少ないながらもあつ。大抵はアリサやすずかが請け負うのだが、毎回というわけにもいかない。

フェイトが周りに気をまわすのは本人の性格もあるだろうが、そのあたりの埋め合わせという意味もある。まあ、埋め合わせ以上のことをするのがフェイトでもあるので、アリサとしては良い様に利用されないか少し心配なところだ。

とはいえ、フェイトの人徳なのか、今のところ彼女を体よく使おうという不埒者はいない。むしろ、色々と反感を集めても不思議ではない立ち位置ながら、ほとんどの生徒から好意的に受け止められている一因になっているあたり、流石というかなんというかだが。

「でも、アリサ凄いな」

「? なにが?」

「私はほら、仕事柄それなりに鍛えてるからそれほどでもないけど、これって結構重いでしょ。それなのに軽々と持ってたって凄いなって」

(もしかしてこの子、分かってない?)

天然だ天然だと思っていたが、まさかここまでだったとは……。

いや、常識人の予想の斜め上に行くからこそその天然か。そう考えれば、フェイトがアリサの予想を裏切っているのは当然の事なのかもしれない。

「いや、これ事体はそんなに重くないわよ」

「私もそう思ってたんだけど…実際に持ってみたらそうでもなかったから」

「…あのね、すずかほどじゃないとはいえそんな『立派なもの』が2つも載ってれば、そりゃ重くもなるでしょ」

「2つ?」

「てつきりわかってやってるんだとばかり…ねえフェイト、腕は重いかもしれないけど、肩はどう?」

「肩? そういえば、少し楽なような…あつ／＼／」

「そういうことよ」

どうやらようやく理解したらしく、ボツという音が聞こえてきそうなほどにフェイトの顔が赤く染まる。

アリサもフェイトも中学生らしからぬプロポーションの持主。その分、若いながらも血行やら慢性的にかかる重量やらの関係で、すでに肩こりの気がある。

しかし、常にあるはずの重量感が今は軽減されている。それはなぜか…持ち上げる際に段ボールに乗っかって、肩の代わりに腕で支えているからだ! ちなみに、アリサは意識してやっている。その方が楽

だし、なんなら日常的に腕を組んで支えていたりもする。

「一応言っておくけど、ここが女子棟だからいいものの、男がいる前ではやらないこと。いいわね？」

「は、はい……」

アリサの指摘に、フェイトは「穴があつたら入りたい」とばかりに消え入りそうな声を絞り出す。まあ、無自覚でやってしまう前だっただけでも善しとすべきだろう。もちろん、アリサはちゃんとそのあたりTPOを弁えている。

「ま、立香さんの前ではその限りじゃないけど。むしろ、思い切りアピールしなさい。せっかくの武器、使わないのはもったいないでしょ」

「……リップがいるのにな？」

「いや、アレは流石に比較対象が悪すぎるわよ。というより、比べて優位を示すためじゃなくて、自分が“子ども”じゃなくてももう“女”なんだってことをアピールしなさいってこと」

「な、なるほど……」

目から鱗とでも言いたそうにしきりに頷くフェイト。好意はアピールする癖に、性的な（卑猥な意味ではなく、純粹に女性という意味で）アピールすることが抜けているのが、フェイトらしいというかなんというか……昔から、こういうところで詰めが甘かったなと思いつ返す。

まあ、そういうところが微笑ましくて、難しい恋と知っていてもアリサはこの友人を応援せずにはいられないのだが。

「そういえば、最近はどうなの？」

「どうって？」

「ちよつとは進展したのかってこと」

「どう、なのかな。昔に比べれば、やっぱり会う機会は減ってるし……ちよつと距離を取られてる感じがするんだ」

「ふくん、良かったじゃない」

「へ？」

「だってそれって、距離を取らないとまずいって思ってるからでしょ。」

意識してるかどうかはわからないけど、ちゃんと立香さんの認識が変わってきてるってことじゃない」

「そう、なのかな。そうだと、いいな」

照れたようにはにかむフェイトに、すれ違う女子生徒たちが一様に見惚れている。まあ、本人は全く気付いていないようだが。

「……でもね、やっぱり寂しいよ」

「そう思うなら、今こそ攻め時だと思うけど」

「うん、頑張る」

段ボールを支える手に力がこもったことが、角度的に見えないながらもアリサには分かった。

「だけど、実はちよつと後悔してるんだ」

「うん、なにを？」

「どうして昔の私は……もつと立香の裸とか匂いとか温りとか記憶に焼き付けておかなかったのかなって」

「……………フェイト、アンタ疲れてるわ」  
目いっぱい怪訝そうな表情を浮かべて指摘する。恋愛に学業に局の仕事にと、忙しくしているのは知っていたがまさかここまでとは……。ちよつと一度、本格的にリフレッシュさせるべきではなからうか。

「なんてね♪ 冗談だよ、もちろん」

「わかりにくい冗談はやめなさいよ。アンタ、本当に拗らせてるんだから」

冗談めかせているフェイトに、アリサもまた冗談として受け止めてみせるが、実を言うとあまり信じてはいない。

(なんかあったのかしらね……)

とりあえず、折を見て遠回しにでも聞きだした方がいいだろう。色々を抱え込む性質なのは承知しているので、そこをフォローするのが友人というものだ。

その場合、適任ははやてだろうか。アレもアレで割と拗らせているが、手応えがあるうえに自分の本質を見据えられる強さがある。フェイトの恋に関しては、家族を除けば一番の相談相手だ。

まあ、それはそれとして周囲の耳目がある廊下で妙なことを口走らないよう話題を変えねばなるまい。学校の女子の多くが憧れる「王子様」が、まさかこんな恋心を拗らせたポンコツの残念美人だったなんて知られた日には、少女たちの甘ったるい夢が砂糖菓子之城のように大崩壊。巡り巡ってアリサに「王子様」役のお鉢が回ってきかねない。

(うん、それは御免だわ)

さしあたっては、トレーニング後の立香の汗の匂いや乱れた息遣いを思い出すとすぐドキドキするとか、実は結構逞しい身体つきや古傷の残ったゴツゴツとした手の男らしさとかをうっとりした様子で語りだそうとする幼馴染のお口にチャックする。両手が塞がっているし周囲の目もあるので、満面の微笑みで「ちよつと黙つとけ」と無言のまま威圧して。

その結果、フェイトはそれまで朱に染めていた顔を若干青くして……

「はひ……」

と間の抜けた声を漏らすのであった。

(まったく、これだから恋愛脳は……ちよつと羨ましいじゃないの)

アリサも、なんだかんだで年頃の女の子なのであった。

「わかる、わかるでフェイトちゃん。私もな、士郎が怪我して消毒した時の、あのちよつと染みて痛そうな顔を見たえも言われん。ゾクゾク“感がもう……”

「はいそこー！ 食事中に妙な話題で盛り上がらない!!」

遅ればせながら屋上で待つ友人たちに合流し、彩り豊かなかわいらしい弁当に舌鼓を打っていたらこれだ。さっきまでのちよつとした憧れや羨望の念は、はるか彼方に飛んで行ってしまった。

「二人とも、そういう話は他に人のいないところでやろうね。なのはちやんが限界だから」

(ぶしゅ……)

微笑みながらたしなめるすずかの横には、今まさに頭から湯気を立

ち昇らせる茹ダコなのは。天然且つ朴念仁、加えてニブチンの恋愛偏差値小学生未満の彼女には、少々二人の会話はレベルが高過ぎたらしい。

いや、まさか傷を治療している時の痛みをこらえる顔にゾクゾクするとか言われても、それはちよつと困るだろう。

「えー、好きな人のいろんな顔を見たいっちゆうのは、当然の感情やない?。」

「限度つてもんがあるでしょうが」

「なんというかその、ちよつと危ない人みたいというか……」

「そうやろうか……なのはちゃんはどう思う?。」

「ふええええ!!? そ、それは、その……」

「やめたげなさいよ」

「このままだとなのはちゃん、季節外れの熱中症になつちやうから」

ちなみに、はやてとしては指を切って出血した時に、止血がてら指をしゃぶってこれ幸いとばかりに舐め回されてどんな表情を浮かべることができずに固まった土郎を上目遣いに見上げるのも大好きだ。なんというか、可愛くて堪らない。いつそのこと、檻にでも閉じ込めて一生飼ってしまいたいくらいに。

そのあたり、はやては自分の欲求に正直だ。実行するかはともかく、そういう欲望があることを否定しない。

(まあ、あのおたんこなすはいつどこに飛んでくか分からん糸の切れた風船みたいなどころがあるからなあ。監禁はやり過ぎにしても、囲い込んで逃がさへんくらいでちようどええのは間違いない)

「で、でもはやて、怪我をして痛い思いをしてるのに、そういうことを考えるのはやつぱり……」

「まあ、不謹慎と言えばそうやな。せやけど、自分の心に背を向けてもしゃーないんちやう? それを認めた上で、どう向き合うかやないの?。」

「言ってることは正しいのよね。前提がアレだけど」

「あ、あはははは……」

なんでも久しぶりにカルデア関連の任務に参加し、立香と共に行動

することになったのだが……その時に、ある意味ではいつも通りのトラブルが発生。サーヴァントたちとはぐれ、二人きりになってしまった。

不謹慎とわかっていながらも、ちよつと内心はしゃいでしまった罰が当たったのか。立香が重傷とは言わないまでも軽傷で済ますには深い傷を負ってしまった。

決して油断していたわけでも気を抜いていたわけでもない。ただ、立香とフェイトの戦闘における相性の悪さ故だ。戦力という意味では皆無に等しい立香は当然同行者に守ってもらわなければならないのだが、その点フェイトは「守る」ということに徹底的に向いていない。共に肩を並べて戦う相手をフォローするという意味で守ることはできるが、高速で動き回る彼女にとって自衛能力も逃走手段もないに等しい非戦闘員を守るのは、大変やりづらいのだ。

守るくらいなら、速やかに敵戦力を無力化する方がはるかに効率的で確実。故に、フェイトも守りたいのにそれができない自分に歯噛みしながら、それでも自分にできることをと戦った。戦闘そのものは短時間で終わったが、運悪く流れ弾が立香の二の腕を抉ったのである。

幸い致命傷には程遠く、少々出血量が多いただけだった。

とはいえ、いつ仲間と合流できるかもわからない状況で放置はできない。応急手当の域は超えていたが、とにかくせめて出血だけでも止める必要があった。最悪、傷を焼くことも視野に入れていた立香だったが、幸い簡易キットで粗く縫合し、あとは止血剤と動脈の圧迫で止血はできた。

そのまま包帯で傷を保護したのだが、正直フェイトは自分の不甲斐なさに泣きそうだった。

自分が守ることに向いていないことは知っていた。その意味で言えば、立香のパートナーはマシユ以外にあり得ないだろうとも。わかっていても守ることが出来ず、碌な手当てもできない自分には失望さえしたものだ。

だが、そんなフェイトに立香は心からの感謝を込めて行ったのだ。

「ありがとう」



「フエイトがいて良かった」

「俺だけだったら死んでたかもしれないし、止血できなかつたかもしれない」

それは正真正銘、まぎれもない事実だった。フエイトがいたのに傷を負ったのではなく、フエイトがいたから生き延び傷の治療もできた。そういう考え方ができる人であり、感謝を忘れない人であることは知っていた。

彼の言葉に、失望と不甲斐なさが軽減されたのを自覚し、自分の現金さにまた泣きたくなつた。

その後、なんとか仲間と合流し任務も無事完遂。今回の反省点を洗い出し、次がないよう気を引き締めたフエイト……だったのだが、そうなるも当然傷の治療をした時のことも思い出してしまふ。

あの時、立香は縫合するにあたって麻酔の使用を拒んだ。いつ仲間と合流できるかわからない状況のため、可能な限り物資を節約するべきというのは妥当な判断だろう。痛みで気が触れてしまふとか、もだえ苦しんでいるとか、そういう状況ではなかつた。

言つてしまえば、縫合の間とその後立香が痛みには耐えればそれで済む。本当にどうしても耐えられない時だけ使うというのは、正しい判断だつたと思う。

とはいえ、片手で縫合など医者でも無理な話。必然的にフエイトが針を持つことになり、一針一針少しでも痛みが少ない様に、僅かでも綺麗に縫い合わせられるように、細心の注意と集中力を振り絞つて刺していった。

一針刺す度に苦悶に歪む立香の表情、頬を伝う脂汗、噛み締めた布の隙間から漏れる荒い息遣い。執務官試験を突破した優れた記憶力が鮮明に想起するそれらの情報に、今まで知らなかつた感覚がフエイトの身体を電流の様に駆け巡つた。気付けば身体の奥にじんわりとした熱が生じ、しばらく脳裏からあの光景が離れなくなつてしまつた。

傷つきたいわけではない。苦しんでほしいわけでもない。ただそれでも、自分の指先に彼がどんな形であれ反応を返してくれること

に、どうしようもなく悦んでしまう。もつともつと、どんな形でもいいから……一瞬とはいえ、そう思ってしまったのだ。

正直、フェイトはそんな自分を心の底から恥じたし、一時期はこの世の終わりとばかりに落ち込んだ。

一時の間ですら守ることができなかった不甲斐ない自分、傷を負い苦しんだ立香……にもかかわらず、思い返せば不謹慎極まりない反応を示し、醜い感情を抱いてしまう。

少なくとも、フェイトは自分の「恋」が綺麗なものとは思えない。同年代の少女たちが語るような、美しく、甘く、輝くようなものではない。

——身勝手に

——ドロドロと濁り

——歪み

——そして、汚い

潔癖なきらいがあるからこそ、フェイトは自分の中にあるそんな感情が嫌いで仕方がなかった。

だから見ないようにしているし、気付かないふりをしている。それでもふとした拍子に、見えてしまうことはある。

あんなにも立香は苦しんでいたのに。

下手な縫合のせいで醜い傷も残っただろうに。

守れなかった自分を彼は気遣ってくれたのに。

——守れないのなら、いつそのこと閉じ込めてしまいたい。

そんなことを思ってしまう。

同時に、自分がどうしてジャンヌ【オルタ】でもなく、メルトリリスでもなく、シャルロット・コルデーに強く反発してしまうかが分かった。彼女は自分の恋心の汚い部分を認めているのに対し、フェイトは許せない。だから、どうしても彼女に好意的になれないのだろう。

——自分の方が、ずっとずっと「醜い」というのに。

笑っていてほしいのは本音だし、幸せであってほしいと心から願っている。

ただそれとは別に、どんなものでもいいから何かを返してほしいと求めてしまうのも事実で……。

(ああ、本当に拗らせてる……)

そう、自分でもわかかってしまうくらいに。ただそれは、なかなか成就しない恋だからではなく、きっと彼女はそういう性さがなのだろう。

——どうしようもなく求め、欲してしまう。

実母のせいなどではなく、持って生まれた魂の形。

生憎、それを受け入れられるほど強くはないが、それでも笑って「恋なんてそもそも言うほど綺麗なものじゃない」と言ってくれる親友には、本当に感謝している。

あの時のことを思い返してこんなことを考えてしまうのは、きっともう思い出せない今朝の夢にも一因があるのだろう。

大好きで、愛おしくて、守りたい——そう思う心理性に嘘はない。

ただ……

求め、欲し、閉じ込めたい——そんな心本能もまた真実なのだ。

綺麗な在り様を善しとする理性と、醜く歪んだ形の本音。そんな矛盾を、フェイトはこれからも抱え続けるのだろう。

家族にはもちろん立香にもこんな自分を見せられない。見せたくない。

失望されるのが怖い。見る目が変わるのが恐ろしい。

あんなメンツに囲まれている立香ならと思う反面、想い人には綺麗な自分を見てほしいと思うから。

もちろん、それは親友たちにも同じこと。

精々、冗談としてはぐらかすことしかできないけれど、はやてには隠したままでも伝わるものがある。だから、短い言葉に万感の思いを込める。

「ありがとう、はやて」

「ん、何のことやろなあ」

たぶん、はやてとフェイトはどこか似ている。違うとすれば、はやては強くフェイトは弱い。でも、「それでもいい」と言ってくれる似た者同士のおかげで、随分と気が楽になる。

(一応、憑き物は落ちたかしらね)

冗談の延長で笑っているように見せて、その実少しすつきりした様子で笑い合う二人。アリサには二人の奥底にあるものは窺い知れないし、きつと本当の意味で共感し理解することもできないだろう。まあ、なのはやすずかもそういう気はあるので、相談相手には事欠かないだろう。今回の場合ははやてが適任そうだったので、彼女が請け負う様に話を回したというだけだ。場合によっては、残る二人に振ることもあるだろう。

なかなか厄介なことではある。だが、皆が親友であることに変わりはないし、笑顔でいてくれるために、幸せであってくれるために惜しむものはないつもりだ。

(自分で言うのもなんだけど、苦労性ってやつかしらね)

まあ、そういう性分だし、そんな自分が存外気に入っているの仕方がない。

いざとなれば、正解なんてわからないまま天然で人を救ってしまうのはが何とかしてしまおうだろうという信頼もある。

とはいえ……

「あとなフェイトちゃん、古傷つちゅうのは結構敏感でなあ。舌を這わせたりするとええ反応するんやで〜」

(スパパンツ！)

「アタアツ」

「妙な道に引き込まうとするんじゃないの！」

「小粋なジョークやのに……」

本日2度目のハリセン炸裂であった。

いい加減話の軌道を修正し、いよいよ近づいてきた文化祭について話が及ぶ。

はやてとすずかのクラスは食事処をやる予定なので、飲食店という意味で言えば競合相手。探りを入れたり、強みが被らないよう遠回しに釘を刺したりと、はやてとアリサは駆け引きに余念がない。やるかには勝ちに行くアリサ、〃趣味と実益〃即ち自分が楽しみつっ成果も出す主義のはやて。残る3人が基本的には〃大いに楽しもう〃と

という方針なので、もっぱら二人の腹の探り合いだ。

とはいえ、飲食店と言ってもあちらは「コスプレ」も主軸の一つなので、正面衝突とはいかないだろう。場合によっては、何かしらの形で結託する可能性もある。

まあ、傍から見ている分には見応えもあるし面白いので、のんびりと食後のお茶を楽しみつつ、二人の駆け引きを見守るフェイトたちであった。

しかし、唐突にすずかが「そういえば……」とつい先ほどクラスメイトから聞いた話を思い出す。

「フェイトちゃん、演劇部の助っ人に出るって本当？」

「あ、うん。何度も断ったんだけどね。どうしてもって……」

実を言えば、この手の話は中学進学から何度もあった。特に文化祭が近づいてくると、この5人にオファーがかかるのは毎年恒例だ。はやては要領が良いので上手く回避するし、アリサとすずかも押しには強い、伊達に社長・重役令嬢ではない。反面、なのはとフェイトは頼み事にはめっぽう弱い。毎年押し切られそうになるのだが、管理局の仕事もあるので心を痛めながらもなんとか断ってきた。

だが、フェイトたちが卒業後は外部に行くことはすでに周知の事実。特に漏らした覚えはないのだが、いつの間にか知れ渡っていた。そのため、今年が最後のチャンスと例年以上に押しが強かった。

加えて、最後の一押しがあって最終的に頷いてしまったのが今朝の事。正直言えば恥ずかしいのだが、学生時代のチャレンジは大事だと家族にも言われているし、なにより……

「その……」

「「「？」」」

「今年は立香も来てくれるらしいから、見てもらいたいなって……」

これまでは「部外者だから」と文化祭にも体育祭にも顔を出さなかったが、「最後だから」となんとか押し切れたのがつい先日。せっかくの機会なので一念発起するのもいいかもしれない、と思った次第である。

「立香ってほら、私の事いつも『可愛い』って褒めてくれるけど、その

……」

「そっか、お芝居に出てイメージを変えたかったんだね」

「う、うん」

「すずかの言う通り、フェイトにもそういう下心がある。どれだけ大人っぽく着飾り、メイクを研究し、立ち居振る舞いを洗練させようと努力しても、立香は一貫してフェイトを「可愛い」と評する。子ども頃ならいざ知らず、今では「綺麗」や「カッコいい」という声がほとんどで、立香や親しい人以外からは滅多に「可愛い」などと言われなくなった。

「もちろん、「可愛い」と言ってくれるのは嬉しい。他の人とは違う自分を見てくれているようで特別感もある。とはいえ、やはり「子ども扱い」されている感も拭えない。そこで、普段着ない衣装を身に纏い、まったく違う自分を演じることで立香の意識を変えられるのではないかと、そう考えた次第だ。

「ふうん、結構なことだけど…フェイトは素人よね。外見だけで芝居はできないけど、演目はどうするの？」

「うん、攫われたお姫様を助ける騎士との恋物語だって」

「あはは、そらまたベタっちゅうかなんちゅうか…女の子の好きそうな演目やな」

「ちよつと抵抗はあるんだけど、ね。でもまあ、お芝居だから」

「芝居とはいえ、立香以外を相手に恋を…というのは正直気が進まない部分はある。

「だが、ドレスで着飾り優雅に振る舞えば、立香の見方もすこしは変わるのではと期待せずにはいられない。

「加えて、もう一つ背中を押す材料があった。

「それに、なのはもいるなら心強いし」

「あ、なのはちゃんも出るん「ふえっ?!」 私、フェイトちゃんがやるって聞いたから受けたんだけど!」あれ?」

「え……私は、なのはからは許可を取ってるって……」

「あゝ、これは……」

「アンタたち、完全に嵌められたわね」

どうやら、二人別々に「相手は了承済み」とブラフを仕込まれたらしい。まあ、結果的にその言葉通りになったわけだが……どちらか片方から了承を得られなければ破綻するというのに、大した博打に出たものである。

「まあ、結果的に同じことなんだし、気にしなくていいんじゃない。相手が一枚上手だったってことよ」

「二人とも、これからはちゃんと確認しなくちゃだめだよ」

「は〜い……」

「せやけど、去年のミスター・聖祥とミス・コン2位を起用とはなあ。これは、今年の講堂は立ち見客も出るんちゃうか？」

地味〜に凹んでいる二人を他所に、実に楽しそうなのはやて。

しかし、この二人を起用するとなると下手な役では主役を食ってしまいかねないし、場合によっては両者のファンから大響燈を買ってしまう。そのところは大丈夫なのだろうか。

などと話していると、ちようどいいタイミングで演劇部の部長からメールが届いた。

「ん、それで何の連絡なの？」

「えっと、これからの練習と衣装合わせの日程だつて」

「台本は…今日中に貰えるみたいだね」

「二人とも、動き出してもうたからには腹括るしかないなあ。幸い、文化祭準備中はレティ提督が気を利かせて任務も研修も入れんようにしてくれるんやし、まあ頑張りや」

元々そういう話になつていたし、リンデイや桃子など保護者からも最後の文化祭を思い切り満喫しなさい”と言われている。準備期間も祭りの一環、好意は有り難く頂戴すべきだろう。

研修に出られないこともそうだが、任務のしわ寄せが誰かに行くことについては、申し訳なささと後ろ髪惹かれる思いがないわけではないが、はやての言う通り腹を括るといふか開き直るしかあるまい。

「そういうえば、配役はどうなったのかな？」

「え〜つと……私がお姫様で」

「私が騎士？」

「おう、思い切ったことしたわね。まさか、素人に主役を張らせるとは」

「これは、相当頑張って練習しないとだね」

素直に喜びを示すアリサとすずかだが、その横ではやてが難しい顔をしている。素人に主役をやらせるというのも無謀な話だが、それ以上に配役について思うところがあるのだ。

「せやけど……なのはちゃんがお姫様でフェイトちゃんが騎士？　これ、配役逆なんちゃう？」

「……確かに。特にフェイトは外見的にははまり役だけど、内面はむしろお姫様タイプでしょ」

「うん。どちらかというところ、なのはちゃんがフェイトちゃんを助ける騎士だよな」

「そ、そうかな？」

親しい間柄からすれば、なんというかミスマッチ感が拭えない。本人たちに自覚はないようだが。

しかし、困難を打破し囚われのお姫様を助ける……というヒーローポジションは、間違いなくなのはの領分だ。フェイトも助ける側に回ることが多いが、根本的なヒロイン属性というか……外見的にも能力的にも不足がないはずなのに、どうにも「コレじゃない」感が強い。

加えて、いつもと違う自分でアピール”という目的で受けたはずなのに、なんか思ってた方向性とは違うことにフェイト自身困惑の色がうかがえる。

(そもそも”誰かを助けるために戦う”ってというのは……普段やってることと何が違うんだろう?)

騎士云々はともかくとしても、これでは”普段とは違う自分を見てもらう”という目的が達成できていない気がする。

フェイトも女の子なので、ドレスを着て美しく着飾ることに対する憧れはある。”囚われのお姫様”というのはちよつとしっくりこないと思うのだが、親友たちに言わせれば”むしろはまり役”のとこの。

正直に言うと、「そっちの方がよかったなあ」と思ってしまう。



なのはもまた、〃助けられるより助ける方が性に合うんだけどなあ  
〃と思っただけとかいらないとか。

とはいえ、決まっちゃったものは仕方がない。  
為すべきことを為すために全力を尽くすのみ、と変なところでプロ  
根性を発揮する二人なのであった。

ちなみに、衣装合わせをしたり芝居の練習をしたりするにつれ、違  
和感が増し、背中のみず痒いことと言ったらない。本番を迎える頃  
は、友人たちの言に心から賛同したくなった。

「いや、私に騎士／お姫様は無理」

なので、その時の映像記録や写真は嚴重に封印。高町家においても  
ハラオウン家においても、滅多なことでは日の目を見ないようにしま  
い込まれるのであった。

まあ、八神家や月村家、そしてバニングス家はその限りではなかつ  
た当たり、詰めの甘い話である。

余談だが、文化祭当日。フェイト達の演目を見た立香は一言。

「へえ、フェイトってカッコいい系も結構似合うんだなあ、意外」

とのこと。騎士役がはまっているかどうかはともかく、フェイトは  
〃綺麗〃系や〃カッコいい〃系が似合うのは関係者一同の共通認識  
だったはず。

なので、周りからは「え、この人何言ってるの？」という目で見ら  
れたが、本人曰く……

「ん？ フェイトは可愛いタイプじゃない？」

「まあ性格的には同意しますけど……じゃあ、執務官の制服とかどう  
思います？」

「ああ、フェイトはやっぱり黒が似合うよね。うん、可愛いと思う」  
(あれ?)

普通、あの制服を着こなす人は「カッコいい」と思うはずなのだが  
……。

「じゃ、じゃあなのはちゃんが着てたみたいなのドレスとかどう思いま  
す？」

「うくん、白は普段あんまり見ないからギャップがあるけど、凄く可愛いんじゃないかな」

(んん?)

その後も、どんな服装を提案しても基本的に「可愛い」一択。稀に「カッコいい」という表現が出てくるが、それも本当に数えるほど。

感性は人それぞれとはいえ、流石にちよつと認識のズレを感じずにはいられない。まさか、本当にアレだけ成長してもなお立香にフェイトは「小さな子ども」としか見えていないのだろうか。あるいは、適当に「可愛い」と言ってお茶を濁しているのではないかと。

そんな懸念が湧いてくるがふと気づく、立香の目がいたって真剣であることに。そこで、すずかはちよつと思いついて聞いてみることにした。

「そうですね、フェイトちゃんはやっぱり世界一可愛いですよね」

「うん…あ」

「……………立香さんって、実は普通にフェイトちゃんのこと大好きですよね」

「……………なんのこ  
とかな」

(大丈夫だよフェイトちゃん！ 思ってる以上に、立香さんの内堀埋められてきてる!!)

これを聞いたフェイトはのちに語る。

「立香は世界一……………なんだろう？ カッコいい……………はニュアンスが違うし、憧れる……………近いようでなんか違う。」

うくん……………そうだ、愛おしい！」

関係者一同、〃やれやれ〃と肩を竦めるのであったとき。

## ユーノ・スクライアの場合

——お菓子をくれきやイタズラするぞお  
Trick or Treat!

.....あ、そういえば今日はハロウィンだっけ。

——パパ、お仕事忙しいのはわかるけど、もうちよつと気にした方がいいと思うの、色々。

い、いや、日付の感覚はあるんだよ？ ただちよつと、関連行事と結びついてないだけで.....。

——パパの場合、「感覚」じゃなくて「情報」として知ってるだけでは？

ぐっ?! そ、それは.....。

——どこどこからの資料請求の締め切りまであと何日、つまり今は何月何日なのか...そういう認識でしょ？

.....はい、その通りです。

——まあ、それでも家族の記念日とかは絶対に忘れないあたり、流石だと思うけど...自分の誕生日は忘れるよね。今年も普通にスルーしてまし。

そ、そうだったっけ？

——そうですね〜！ プレゼントもお料理も用意してたのに、直前になって「今日も帰れないから先に寝てて」ってメール貰ったママの絶望した顔、ヴィヴィオは絶対に忘れませんので。

(覚えておこうとはしてるんだけど、つい抜けちゃうんだよなあ。なのはとヴィヴィオの誕生日なら、絶対に忘れないんだけど.....)

——しかもそれがほぼ毎年、記憶力良いのにどうしてそうなのかなあ。

はい、本当に申し訳ありません。来年こそは、必ず.....でも、半分とは言わないけど三割くらいはクロノにも責任があると思うんだ。

——言い訳は受け付けません!!

うん、だよな。

——まあ、それはそれとしてクロノさんにはきつつ〜いお仕置き

をお願いしているわけですが。

え、誰に？

——フェイトさんとエイミィさんとリンディさんにアルフ。

(ハラオウン家包囲網!! クロノの奴、しばらく針の筵だろうなあ

……同情はしないけど、むしろいい気味だし)

——ちなみにパパが懲りていないようなら、次はありません。

……僕も包囲されるの？

——いや、それはしないけど。

けど？

——ママとヴィヴィオは実家海鳴に帰らせていただきます。もちろん、高町家には出禁です。

〃もし〃だけど、もしも海鳴に行ったら？

——御神の剣士4人によるフルボッコから始まるフルコースでおもてなし？

それで前菜なの!?

——それが嫌なら、本当に次は気を付けてね。

もちろんだよ!! だって命が惜しいからね!?

——うん、それならよし。

(……………父親って言うのは僕には難しいのかな。家族を蔑ろにしてるつもりはないけど、こんなに怒らせてるんだとしたら、やっぱり……)

——あ、ちなみに怒ってるわけじゃないからそこは勘違いしないでね。

ん、違うの？

——大間違いだよ!

だって、家族で過ごす時間を取れなかったから怒ってるんじゃない……。

——うくん、それは微妙に勘違いしてるよパパ。そりやまあ、確かにせっかくのお祝いをドタキャンされたのは怒ってなくもないけど、一番は違います。

じゃあ、一番は？

——だって、パパって私たちのことはすつごく大事にしてくれるけど、自分のことは二の次にしちゃうから。

そう、かな？

——そうだよ！ 自分の誕生日はスルーするのに、どんなに忙しくても私たちの誕生日には時間を作ってくれるし……

それはまあ、色々いたらないことばかりだけど、家族……だしね。

——ママが産休明けにダイエット始めたら、必要のないに自分だけ一緒に食事制限してたし……

ヴィヴィオは育ち盛りだし、いっぱい食べるのが仕事みたいなものだからね。とはいえ、目の前で甘いものとか美味しそうに食べられるのも辛いでしょ？ 幸い、僕はあんまり食に拘りはないしね。

——私が風邪ひいたら、看病するために古い術式を無限書庫から引っ張り出してきてくれたし……

なのはもある程度融通を利かせられるようにはなったけど、流石にいつもってわけにはいかないからね。他のみんなもそれぞれ責任があるし、頼れない時もある。だから、できることくらいはやらないと。

——だけどあの術式って、実質「もう一つの身体を遠隔操作する」様なものでしょ？

コロナちゃんが得意なゴーレム操作の派生みたいなものだよ。

——そのコロナが「直接目視しながらならともかく、探査魔法を応用した知覚と併用でとか無理」って匙投げてたよ。「脳が二つなきゃ」とか「変態さんの領域」とか……。

変態………ほ、ほら、僕の場合、シオンさんから「分割思考」の基礎を教わってるから。

——大事なのはそこじゃありません！  
は、はい！

——私たちが怒っているのは、パパが私たちの事ばかり優先して、自分のことを疎かにしていることです！ 少しくらい、自分のことも大事にしてください！

いやでも、僕がしたくてしてることだし……。

——……本当なら、私たちだってパパを困らせたくないの。だけ



ミックヒーローとかもいるし、変わり種だと……こんなのかな？

ゴーレムにドラゴンはまだいいとしても……なんで自販機？ 無駄に仕事細かいし……。それに、こっちなんで絶対に一人じゃないでしょ、複数人で次元航行艦の仮装なんていっそ見上げた執念だ。

……だけど、本来のハロウィンから外れ過ぎて見る影もないね。まあ、日本のハロウィンも半ば “仮装するのが目的” になってるけど。

ヴィヴィオは由来とか知ってるんだっけ？

——ん、まあ一応は。だからほら、こうして幽霊サーヴァントの仮装してるわけだし。

……なるほど、一応本旨に則ってはいるね。

でも、サーヴァントを幽霊扱いするのはやめておこうか。気にしない人の方が多そうだけど、同列に扱うのは失礼だろうし。

——あ、それはね……そうそう！ ママの仮装も楽しみにしててね、今年は気合入ってるから！

なのはも？

——うん。ダイエット達成祝って、カルデアから “どす・けべ霊衣” って言うのが送られて来たんだ。

ぶっ!?

——まだ踏ん切りがつかないみたいだけど、覚悟完了したら降りてくると思うよ。ところで、 “どす・けべ霊衣” ってなに？

さ、さあ？ そういえばヴィヴィオは寂しいんじゃない！ しばらくカルデアは封鎖期間になるし。フェイトとも年明けまでは会えないだろうからね。

——あ、通信で会うくらいはできるけど、基本的に10月から年明けまでは封鎖されちゃうんだよね。うん、寂しくないって言えば嘘になるかなあ。

関係者でもよっぽどのがなければこの期間は出禁になるからね。まあ、ハロウィンにクリスマスと、カルデア的には頭の痛いシーンに突入するから仕方ないんだけど。

——その代わり、夏のサバフェスと秋のお祭りは対外的にも盛り

上がるよね。

まあ、普段に比べればだけどね。いつもは半ば鎖国状態だけど、この二つは外部からの参加者も受け入れるから。

——夏はサブフェス、秋はお祭りとおハロウィン、冬はクリスマスとバレンタイン。結構イベント目白押しだけど、春にはこれと言って何も無いよね。エイプリルフールもないし……。

そりゃ、みんな命が惜しいから。

——？？？

ほら、〃嘘つき絶対焼き殺すガール〃こと〃清姫〃がいるから。

——あく、そつかく……エイプリルフールだろうが何だろうが、あの人が嘘を許すわけないよね。

そもそも、〃嘘を吐いてもいい日〃の存在そのものを許さないと思うよ。

——だよね。

おかげで立香さん、嘘を吐けない身体になってるし……。

——え、そうなの？

うん。流石にデリカシーはあるから余計なことは言わないし、表現にも気を付けてはいるけど、根本的に嘘がつけない人だから。

——まあ、何かの拍子で清姫さんの前で嘘を吐いたら、後が大変だもんね。あ、もしかして立香さんがフェイトさんのことで色々言われるのって、それもあるの？

——どうか？ というか、色々言ってくるのって基本的に同性だよ

？ まあ、ほとんどがやつかみ半分というか、表面的な事実だけを取り上げて〃フェイトに相応しくない〃っていう……。

——それが、その……ん？

——実は、女性からもあんまり評判が良くないというか……いや、悪いわけじゃないんだけど。

——そう、なの？

——私もチラツと聞いたことがあるだけなんだけど、〃良い人止まり〃とか〃恋愛対象にはちよつと……〃っていうのがあつて……



それで、フエイトさんは趣味が悪い……みたいな話も。

(まったく、噂話をするにしてももう少し周りに気を配るべきじゃないかな……)

——その、パパはどう思うの？

一般論で悪いけど、それこそ人それぞれだと思うよ。

一般的に評価される要素で見れば、確かに立香さんはあまり目立つ人じゃないかもしれない。実績については秘匿されているし、外部から見れば「サーヴァントを召喚するための付属品」みたいに見える人もいるのは確かだ。

あの人の凄さも得難さも、そのほとんどは隠されてしまっているから、分からないのも無理はないよ。

——色々なことが、本当にたくさんあったんだもんね。

うん。その結果、人ひとりが背負うにはあまりにも重いものを背負い込んでしまった人だよ。

でも、「幸せになる資格がない」とか言う類の卑下をする人じゃないし、むしろ責任への自覚があるからこそ自分なりに「幸せになろう」、「前に進もう」って考えられる強い人だと思う。

——あれ、でもフエイトさんやマッシュさんと恋人になったり結婚したりって言うことは考えてなかったんだよね？

……色々と体質的な問題があったからね。幸せにするのが難しいのに、巻き込むわけにはいかないと思ってたんだらうと思う。

それに、卑下するのは別にしても、色々と背負うことになってしまった人だからね。「碌な死に方をしない」とは思っていたみたいだから、自分なりの幸福は追求しても、誰かと一緒に……って言うのは抵抗があったみたいなんだ。

——……あんまり肯定はしたくないけど、実際問題としてサーヴァント絡みとか特異点関係で苦勞するのは確かだもんね。

二人はその辺に関しては知った上でだったから、そっちの心配はあんまりなかったみたいだね。

——そっか……。

(ロストベルト異聞帯でのことを考えれば、気持ちわかる。背負わざるを得な

かった業はあまりにも深く、重い。因果応報があるとすれば……と思うのも、無理はないんだろうから。

でも、そんなあの人に「巻き込みたくない」でも「一緒に不幸になつてでも」でもなく、「例えどん底まで落ちても這い上がつて幸せになる」、そういう前向きさを持てるように頑張つたフェイトは、やっぱりすごいんだよね)

——だけど、アミタさんとティアナさんは良い雰囲気まで行つたみたいだけど、結局お友達までだったし、やっぱり恋人にするには魅力が足りないのかな？

……ヴィヴィオ、随分引つ張るけど、もしかして誰か好きな人が？

——興味はあるけど、まだそういうのはよくわからないかなあ？

ほつ……。まあ、好みは本当に人それぞれだよ。頭がいい人が好きな人もいれば、頼もしい人が好きな人もいる。

基準も重視する要素も、人によつて違う。立香さんの場合、あんまり一般受けするタイプじゃなかったとか、評価するための要素のほとんどが隠されちゃつたとか……で、フェイトは隠されていた要素に触れる機会があつて、それが心に刺さつたつてことなんだと思うよ。

アミタさんとティアナに関しては、立香さんも線引きをしてあんまり深く踏み込まないようにしてたからじゃないかな。

——ふくん……。

それにほら、なのはだつて幾らでも良い人がいただろうに、僕みたいなパツとしないモヤシを選んだわけだし。

——いえ、パパはもうちよつと自分の魅力に自覚を持つて下さい。二十歳になる前から司書長を務められるくらいに優秀で、学者的さとして評価されるくらい頭が良くて、クロノさんと模擬戦できるくらいに魔法の腕もたつ人のどこが「パツとしないモヤシ」なのか、レポートにして欲しいくらいです。

そ、そう？

——そもそも、ママに関してはパパが攻め落としたんじゃないの？

それでもほら、最後に選んでくれたのはなのはだし……。

———そういえば、ママにプロポーズした時に指輪渡さなかったって言うの、アレ本当？

まあ、うん。以前にも断られてたし、押しつけがましいのも重いかなって。

———でもでも、オツケー貰ったのに指輪を渡せないのはどうかと思いません。

ソウダネ……。

———なーんてね。

へ？

———ホントはその後、六課に泊まった時に寝てるママの指に指輪をはめてたの知ってるよ。何しろ、ママが何度も話してくれてたから。いいよね、起きたら指輪がはめられてるの、ロマンチックだと思う。

やめて、娘にその話をされるのってすごく恥ずかしい……／＼／

———そんなに照れなくてもいいのに。

似合わないこととした自覚はあるからね……それに僕ってその、あんまり男らしくないからさ。

———それってもしかして、ママが酔っ払った時に女装させたがることを気にしてるの？

ブハツ!? ヴィ、ヴィヴィオどこでそれを!?

———いやあ、家の中で结界張られてたら流石に気付くし……。

(しまった! 音が漏れないように结界を張ったのがかえって裏目に!?)

———凄く楽しそうにしてるよね。 “ユーノ君可愛い” “綺麗!

だけど悔しい!” って大盛り上がりしてるし。確か、立香さんに男の人向けのメイクも習ったことがあるって聞いたことがあるけど?

やけに迷いが無いと思ったら……。 えっとヴィヴィオ、このことは……。

———もちろん誰にも言わないよ。

よ、よかった……。

——（というか、覗き見してたのがバレた時、ママがすごく怖くなったんだよね。あれきつと、”知ってていいのは私だけ”っていう独占欲的なものだろうし）

どうかしたの、ヴィヴィオ？

——ん？ なんでもなくい。ただ、私の周りの恋愛はあんまり参考になりそうにないなあって思っただけ。

\* \* \* \* \*

「毎年のこととはいえ………  
疲れた」

「お、お疲れ様」

これまでの功績もありかつてのカルデアやノウム・カルデアより幾分広くなったアニミ・カルデアの自室にて、ソファに腰掛けながら天を仰いでぼやく立香。そんな彼にリラックス作用のあるハーブティーを差し出しながら、フェイトが苦笑いを浮かべている。

しかし、無理もない話だ。つい先ほどまで、毎年恒例ともいうべきハロウィン関連のトンチキ騒動の收拾に駆けずり回っていたのだ。いつもの事ではあるが、今回も例に漏れず実に頭の痛い騒動だった。まだ事後処理が残っているとはいえ、とりあえずは解決したのだから少しくらい気を抜いて愚痴っても許されるはずだ。

むしろ、それを期待してマッシュもフェイトを立香の部屋に通したのだろう。

今回、彼女はオペレーターを務めていたのでフォローに回ることもできただろうが、第三者的立ち位置にいるフェイトの方が適役と考え譲ってくれたのだ。まあ、ほとんどいつも行動を共にしているのだから、こういう時は譲らないと不平等……という生来の生真面目さもあるのだろう。マッシュとて嫉妬心もあるだろうに、立香のためならそれを抑えられる、抑えようとするところが実に健気な話だ。

彼女の計らいに感謝しつつ、せっかくの機会なので遠慮なく立香に寄り添うように腰掛ける。

「何なんだよホントに……」メカエリちゃんvsキングプロテア  
チエイテ城最後の日”とか 海魔 対 邪神BB 深淵の戦い”  
とか……無駄にスケールが大きいんだからもう」

「私、話を聞いて古い特撮映画思い出しちゃった」

「アゝウン、ソウダネ。特撮ツポイヨネ」

ちなみに、”タウロ・ケテルマルクト・木馬 巨大ロボ大進撃”なんてものもあったが、こちらに関して立香はむしろ目を輝かせてマシユに冷ややかに「真面目にやってください」と怒られてしまった。

加えて、さらに頭が痛かったのが……

「まさか、最後の最後で”ティアマトの逆襲”だなんて……」

「でも、昔戦った時よりは弱かったんだよね？」

「まあ、うん。一応、”すぐく強力なサーヴァント”の枠を超えないレベルだったから。死の概念がないわけじゃないし、ケイオスタイドの浸食も前の時ほどじゃなかった。でも、だからこそこの後が怖いというか……」

「？ 何を心配しているの？」

「いや、このパターンだときつと遠からず……」

「遠からず？」

「ティアマトが召喚される気がする」

「……………」

まさか、かつては人類クラス・ヒースト悪の一角を担った原初の海、創世の女神がサーヴァントとして召喚されるなんて、そんなことがあるわけが……と否定しようとしたところで思い出す。

そもそも、似たような事例がすでにカルデアにはいるのだ。

「じゃあ、もしも召喚されたら帰ってもらおう？」

確かに、それが一番現実的などころだろう。万が一にも再度ビーストにならなくては大変だし、それでなくても管理局から危険視される可能性は低くない。余計な火種になる前に、対処してしまうのが無難ではあるだろう。

だが、正直言えばフェイトは本気で口にしたわけではない。むしろ、言うだけ言ってみたという感じが強い。そして、立香から帰って

きた答えは予想通りのものだった。

「いや、そのつもりはないよ」

(やっぱり、君はそう言うんだね)

「もしも俺の手を取ってくれたのなら、誠意くらいは示したい。誰が来てくれたとしても、それだけは変わらないよ」

「そう。なら私も、話をしてみたいな」

カルデアの記録にあるティアマトは、意思の疎通すら不可能な脅威、圧倒的な絶望という印象が強い。立香だけは、僅かだが彼女と対話できたそうだが……彼に影響されたのか、少しばかり興味があつた。『原初の母』としてではなく、『憐憫の獣』<sup>ビースト</sup>としてでもなく、一介の『サーヴァント』として召喚された彼女はいつたい、立香に何を思い、この世界とどう向き合うのだろうか。

「……ねえ、フェイト」

「うん、なに?」

「歌、歌ってくれないかな?」

「どんな歌が良い?」

「なんでも。今フェイトが歌いたい歌を」

「……もう。これ、結構恥ずかしいんだからね」

少しだけ立香から目を逸らし、頬を朱に染めて抗議しながらも満更ではなさそうだ。そんなフェイトに、立香も密やかにほほ笑む。

「♪ 眠れない夜 いくつ数えたかな ♪」

(俺も、少しは変わったのかな……)

耳を擦る優しい旋律に酔いしれながら、そんなことを思う。

かつての立香は、どちらかというとなが歌が苦手だった。正確には「ハロウィン」と「歌」や「ライブ」などの組み合わせが、というべきだろう。まあ、トラウマが行き過ぎて、組み合わせなくても単語を耳にただけで動悸息切れを起こすようになってしまったが。そして、その原因はどこぞのドラ娘なわけで……。

「♪ 震えてた 弱い心の奥 ♪」

しかし、数年前からフェイトは様々な場面で立香に歌を披露するようになった。

元々歌は嫌いではなかったのだが、恥ずかしがり屋の性分もあって人前で歌うことは避ける傾向があったのに、である。そんなフェイトが、珍しく自分から「歌いたいから聞いてほしい」と言ってきた。その頃、特にトラウマが深刻になっていた立香は、実を言えばやめてほしいとすら思ったものだ。

だが、あのフェイトが珍しく口にした我儘とも言えない希望である。立香に否と答えられるはずもない。震える身体を何とか抑え込み、どうにか挙動不審になることなく最後まで傾聴することができた。

♪ 微笑み色に包んでくれた ♪

まあ、本当に初めはそれだけの話。強いて言えば、実はあんまり歌詞や歌の旋律などは頭に残っていなかったのが、せつかく歌ってくれたのに申し訳なかったことだろう。もちろん、言えるはずもないので口にはしなかったが。

♪ あたたかな両手 ♪

(アレが、始まりだったんだよなあ)

柔らかな歌声に耳を傾けながら、ほんの少し昔に思いをはせる。

そう、フェイトの細やかな「お願い」は一回では終わらなかつた。その後も、折を見て度々フェイトは同様のお願いを口にするようになる。その度に立香は、並々ならぬ覚悟と意志力を消費して頷いたものだったけど……それが変わったのはいつからだっただろう。

いつの間にか、フェイトの歌を聞くのが楽しみになっていた。いや、元から彼女の歌はプロが認めるレベルだったと聞く。それこそ、ちゃんとしたレッスンを受ければ一年以内にデビューできるだろうと言われるほど。

だから、変わったのはむしろ聞き手の方。アレだけ立香の心に深く根を張っていたトラウマが、いつの間にか随分と改善されていた。相変わらず、「ライブ」や「コンサート」と聞くと震えてしまうが、フェイトの歌を聞く分にはもはや抵抗はない。むしろ、こうして「歌ってほしい」と言えるくらいには、虜になってしまっていた。

♪ 優しい君に “ありがとう” ♪

小ぶりな唇から紡がれる歌詞は、優しさと誰かへの感謝に満ちている。あの孤独に震えていた女の子が、こんなにも暖かな歌を歌えるようになったと思うと、自然と立香の心もポカポカとしてくる。

いったい、自分はどれほどこの少女の力になれたことだろう。大して役にも立てなかつたと思うのだが、フェイトはそうは思っていないらしい。

「♪ 柔らかく、そっと触れてくれた ♪」

精々が見守り、強引に甘やかし、遠慮しがちな我儘を引つ張り出そうと拙い策を巡らした程度。余計なお世話の方が多かつた気もするというのに、こんな自分をフェイトは慕い、地獄からでも引つ張り上げる”と言ってくれた。

「♪ 誰よりも 優しい君のこと ♪」

ベルカでの一件で引いていたはずの線は踏み越えられ、固めていたはずの壁は壊れてしまった。自分自身と思うところが無いわけではないが、もうフェイトの想いから逃げるような真似はしない。当然、マシユの想いからも。

何より、”手放したくない” “寄り添って生きていきたい” そう思ってしまう自分の心を、もう抑えようとは思わない。

「♪ 誰よりも 僕は守りたくて ♪」

(そう。覚悟が足りなかつたのは、俺一人。二人とも、とつくに覚悟を決めてたんだよな)

本当に、我がことながら情けなくなってくる。それでも、結局見放すことなく自分を選び続けてくれた二人。

いつの間にか妙な取り決めがされていたらしいが、せめて二人には誠意を尽くしたい。どちらを選ぶことになったとしても。

「♪ “大好き” を 伝えたい ♪」

まあ、毎度毎度誘惑してくるのは流石に困ってしまうわけだが。いくら中学は卒業しているとはいえ、16歳と26歳だと世間的には色々風当たりが強いというのに。

とはいえそれも、結婚して夫婦となってしまうえばそんな年齢差など「夫です」「妻ですから」の言葉でほとんど解決してしまうのだろうか。



……いや、立香はそれでも色々言われる可能性はある。ただでさえフェイトは人気があるのだ、冴えない自分では釣り合いが取れず納得しない輩も少なくないだろう。それに加えて未成年の幼な妻とか、突きどころ満載過ぎだろう。

(つてそうじゃなくて、そもそも結婚する前提で考えるのが間違ってるっての！)

♪ 優しい君に “ありがとう” ♪

優しいフェイトを傷つけるようなことだけはすまいと、そう誓いを新たにする。まあ、もしもマシユを選ぶとなれば、流石に無傷というわけにはいかないの、そこは覚悟しておかなければならないが。

とはいえ……

(不味い。いくらなんでも無防備すぎる……)

「ねえ、立香」

「……ん？」

「なんで私、いつの間にか膝枕されてるの？」

「……いまさらそこ？」

歌っている間、少しずつ体勢を変えていきフェイトは立香の太腿に頭を預ける形に。ついでに、身体を冷やさないようにカルデアの制服である白いジャケットをかけてある。

ツツコミを入れるならもっと早い段階ですべきだろうが、歌っている最中でタイミングを見つけられなかったのだろうか？ あるいは、これも立香の男性機能回復のための「誘惑」の一環なのだろうか。

どちらにせよ……

(フェイトが無防備すぎて辛い……)

「それに上着まで……大丈夫？ 寒くない？」

「あ、大丈夫。むしろ熱い」

「ならいいけど、無理はしないで欲しい」

「余計だったかな」

「え、ううん！ そんなことは全然！ むしろ嬉しいというか……」

ジャケットを引き上げて顔の下半分を隠しているが、フェイトの顔に赤みが増してきているのは一目瞭然。また、視線が安定せず右往左

往している。緊張しているというか、恥ずかしがっているというか、とりあえず落ち着かない様子だが…それすらも可愛くて仕方がないのだから困る。

（俺が男だつてこと、ちゃんとわかつてるのかな？　〃反応しない〃からつて、〃欲がない〃わけじゃないんだけどなあ……）

（うう、歌つてる時は集中してたからあんまり気にならなかつたけど、このアングルは目に毒だよ。それに、ジャケットから立香の匂いが……私、変な顔してないよね？）

真下から見上げる立香は知っていたつもりでも体格が良く、ぴったりのインナー姿だからこそ筋肉の凹凸が浮き彫りになっている。加えて耳に馴染んだ男性特有の低い声音も、後頭部から伝わる案外柔らかい太腿の感触も、すべてフェイトにとっては刺激的に過ぎた。

五感のうち四感を立香で満たされ、胸が苦しい。理性では激しく脈打つ心臓の音が聞こえるはずがないとわかっているのに……いや、もしかしたら太腿から鼓動が伝わってしまうのでは、なんて考えてしまう。

（そういえば、今日はぎりぎりハロウィンか……）

別に嫌いなわけではないがトラウマではあるので、そう思うとちよつと顔から血の気が失せる。まあ、錯乱しなくなっただけでも随分改善されたものだろう。海鳴でバイト生活をしていた時、ネコミミにネコしっぽなどで仮装したフェイトを見てその日がハロウィンと知り、顔面蒼白になった際は随分と心配をかけたものである。

あの時の様にフェイトを心配させないように……だが同時に、煽られた欲望を抑え切るのも流石に限界だと知ってもらいたい。何しろ、これまでの積み重ねがある。ここらでそろそろ、思い知ってもらうのもいいだろう。

「ねえフェイト」

「はえ!?　えつと、何?」

「今日つて、ハロウィンだよね」

「そ、そうだね。ジャック達にもお菓子あげたし」

用意の良いことに、しっかりとお菓子を用意してカルデアを訪れてい

たらしい。

まあ、それらもお子様サーヴァントたち相手に既にそのほとんどを放出してしまつた後のようだが……。

「じゃあ……『Trick and Treat』」

「あ、はい」

決まり文句に対し、反射的にポケットから飴玉を取り出すフェイト。

（甘いよ、立香。お菓子の予備はまだ少しはあるんだから……ってあれ？　もしかして、今のはお菓子を渡さない方が良かった場面？　いやでも、『イタズラ』されるなんて恥ずかしいし……）

などと欲望と理性の狭間で葛藤していたら、飴玉を受け取つた立香は舌の上でそれを転がしつつ、フェイトの手を取つたかと思うと……ペロツと舐めた。

「ひゃん!?　り、立香?」

思わず高い嬌声を挙げるフェイト。そんな彼女の質問には答えず、むしろ反応を愉しむように指先を咥え、吸い上げる。

「お、お菓子……ン、あげたのに……ふあっ／＼／＼」

そのまま頻りフェイトの指先を舐つて満足したのか、ゆっくりと細い指から唇が離れていく。その間には、先のイタズラの名残である銀の糸が撓み、やがて切れる。

残されたのは、頬を紅潮させて息を荒げるフェイトと、いつもとは違う悪戯<sup>嗜虐</sup>っぽい笑みを浮かべた立香だけ。

「ハアハア……どう、して……?」

「フェイト、もう一回」

「へ?」

「Trick but Treat」

繰り返される言葉に、再度……だが先のこともあるので、若干オズオズといった様子で飴を差し出すフェイト。

しかし、次もまた立香は悪戯を仕掛けてきた。

今度は掌、少し前の任務で傷を負い、一応は治つたがまだ周囲と色合いが馴染んでいないややピンクがかつた新しい組織、そこに舌を這

わせ丹念になぞられる。他より敏感な個所である分、くすぐったさのほかにも形容しにくい感覚が背筋を電流の様に駆け抜ける。それは、今までにあまり経験したことのない…だが決して嫌ではない感覚だった。

でも、口は思わず静止と拒絶の言葉を紡いでしまうのだが、立香はそんなこと気にも留めない。

「や、め…：…ひうつ！　そこ、くすぐつ…：…たいよお…：…んっ！」

「いつかのお返し」

「…：…／／／」

ちよつと身に覚えがあるだけに、反論の言葉が出てこない。フェイトも何度か、立香の古傷にイタズラを仕掛けたことがあるのだ。そういうのが結構効果があると、某タヌキに唆されたのである。

「あ、そういうえばさっきのも昔やられたっけ」

「ん、それ…：…知らな…：…あ、それダメエ…：…」

フェイトは覚えていないだろうが、実は指先を舐られたことがあったのを思い出す、寝ていたフェイトは当然覚えていないので抗議しようとするも、艶やかな声色では効果などたかが知れている。

むしろ、涙目になりながらでは逆効果だ。

「恥ず、かしいよお…：…」

「レロ…：…どうして？」

「だって、私の手…：…固いし、肉刺<sup>まめ</sup>でゴツゴツして、るから」

ようやく解放されて、息も絶え絶えになりながらイタズラされていない方の手で顔を覆い、恥ずかしそうに答える。

戦闘魔導士として訓練と実戦でバルディッシュを握ってきたフェイトの手は皮が厚く、何度もつぶれた肉刺が固くなっている。なのも似たようなものだが、近接もこなす分フェイトのそれは彼女以上だ。

普段はそのことを恥じたりしないが、流石に長年の想い人に手や指を弄られるとなればそうはいかない。古傷だってあるし、あまり女性的な手とは言えないことに羞恥を掻き立てられてしまう。例え、立香がそんなことを気にしないとわかっていても、それが乙女心というも

のだ。

綺麗な手、あるいは誰かを救える手、そう言つて褒めることもできただろう。しかし、立香はあえてそれを選択肢から除外した。月並みな言葉というのものもあるが、率直な感想が別にあつたからだ。

「フェイトの可愛いところがたくさん見られるし、俺は好きだなあ」  
「今日の立香、すごい意地悪だ」

「じゃ、意地悪ついでに……」

「え、まさか……?」

「フェイト、Trick yet Treat」

「お菓子あげたのにイタズラする人には、何もあげません」

流石にフェイトも学習したようで、不貞腐れたようにそっぽを向く。

何故お菓子を渡したのにイタズラされたのかはよくわからないが、とりあえず渡さなければいいのだろうと考えたわけだ。だが、その考えは甘い。

「うん、いいよ」

「え? ひあつ! 耳、噛んじゃ…ダメエ／＼」

「痛い?」

「よく、わかんない……」

そのまま時に甘噛みし、時に耳の内側を舌でなぞり、容赦なくフェイトを責め立てる。

フェイトはされるがまま、ただただ与えられる刺激に戸惑い、翻弄される。

できることと言えば、精々弱々しく腕を突つ張ることと、嬌声交じりの静止の声を漏らすことくらい。正直、どちらもあまり意味はない。

しかし、立香は気付いている。口では色々と言っているが、実のところフェイトが自分の行為を受け入れていることを。そうでなければ、フェイトなら容易く立香を跳ね除けることができる。

未熟な術者なら感覚に翻弄されることもあるだろうが、フェイトは歴戦の魔導士だ。彼女がその気になれば、結果は火を見るよりも明らか。

か。なのにそうなっていないという事実こそが、何よりもフェイトの本音を如実に物語っている。

そのままフェイトの耳を舐めること数分。他には一切手を出さないからか、いつの間にかフェイトはモジモジと内股を擦り合わせ、辛うじて押し返そうとしていた腕からも完全に力が抜けてしまった。

少し顔を離してフェイトを俯瞰してみれば、目じりに羞恥以外の涙を浮かべながら、茫洋とした目で天井を見上げている。

とはいえ、まだまだ火のついた「欲」が鎮火する気配はない。むしろ、フェイトの艶姿に益々燃え上げている。残念ながら……というべきか、相変わらずごく一部分は反応してくれていないが。

「さて……」

「まだ、やるのお?」

声に普段の凛とした張りがなく、若干間延びしているあたりも愛おしく感じられるあたり、立香も自分に苦笑を禁じ得ない。いつの間にか、こんなにも夢中にさせられていたらしい。まあ、マシユと同じことをした場合も……自分を抑えられる自信がない当たり、最低過ぎてちよつと直視できないが。

それはそれとして、そろそろネタバラししてもいい頃合だろう。

「ん……そもそもフェイト、俺の話ちゃんと聞いてた?」

「立香の、話って、Trick or Treat」:でしょ? だ

からお菓子あげたのに、イタズラして、酷いよお」

「いやいや、違う、それは違うよフェイト」

「違うって、なにが?」

「俺が言ったのは、Trick and Treat」とTrick but Treat」、それにTrick yet Treatだよ」

「え……orじゃなくて?」

「そうそう。and」とbut」、それにyet」なわけ。さて、Trick or Treat」ならお菓子をくれなきやイタズラするぞ」になるわけだけど、この三つだどどういう意味になるかわかる?」

目を皿のように丸くして聞いていたフェイトは、そのまま考え込む。普段の彼女ならすぐに理解できただろうが、度重なるイタズラによる動揺と疲労、それに未だに身体を奥から焙る熱のおかげで思考がまとまらないのだろう。

だが、それでもすぐに答えに行き着いたのは、流石というべきだろうか。

「……『Trick and Treat』なら、『お菓子をくれたらイタズラするぞ』？」

「正解。だからイタズラしました」

「『Trick but Treat』だと、『お菓子をくれてもイタズラする』？」

「そうそう。別に、ルール違反じゃないよね」

「ず、ズルいよそれ!!」

「ちなみに、『Trick yet Treat』ならさしずめ『お菓子は良いから悪戯させろ』だから、これまた何も問題なし」

「それって結局、必ずイタズラするってことだよね!？」

「うん」

これ以上なく簡潔な返答を返すと、フェイトは両手で顔を覆い足をバタつかせて羞恥に悶える。その顔は、今やリングゴの様に真っ赤になっっていた。

「定型句だからって、ちゃんと聞かないからだよ」

「……………うう、ハロウィンで『Trick』と『Treat』が出たら誰だってそう思うよお」

「まだまだ『うっかり』やさんだね」

随分前にも上官に指摘された部分だけに、益々恥ずかしい。

しかし、今宵のイベントにはまだ最後の一節が残っていた。

「さて、以上を踏まえた上で……」

「まだ、あるの?」

「大丈夫、ちゃんと聞けば問題ないから」

優しい微笑みを浮かべる立香だが、今のフェイトはそれを素直に受け止めることはできない。今度はいったいどんな変化球が来るのか

と身構える。パツと浮かぶところだと、  
Trick so Treat”だろうか。

(ううん、それだと話の展開が前後する。だとするとあとはどんな  
……)

「フェイト、お菓子くれたらイタズラするぞ  
”Trick and Treat”」

「え、それって……」

「さ、フェイトはどうする?」

意味は分かった。どうすれば回避できるかもわかる。ならば、すること  
は一つ。なのに、身体は意に反してそろそろとポケットからとある  
ものを取り出す。

これが用意してきた最後の一つだ。いっそのこと、残っていなければ  
話は簡単だったのに……。

(ああ私、すっごく恥ずかしいことしようとしてる……)

取り出したその包装紙を外し、指でつまんでゆつくりと立香の口  
へ。意に反してなどと誤魔化すことはもうできない。これは紛れも  
ない、フェイトの意思がやらせていることだ。

そう、フェイトももう認めざるを得ない。いつもは心のどこかで  
燻っている「昏い熱」が、今はナリを潜めている。

求め、欲し、閉じ込めたい——そう望む、醜い我執が消えている。  
愛するから、捧げるから——献身というには、あまりに身勝手な  
欲が湧いてこない。

欠けたナニカが満たされる——本当は何を求めていたかがわか  
かってしまう。

それが見えてしまったのなら、もう受け入れるしかないではない  
か。だって彼は、そんな自分を許してくれるから……こうして、甘え  
てしまう。

「……………お、お願い、します」

「うん、喜んで」

その後、散々イタズラされたフェイトは足腰が立たなくなるのだが  
……復活して早々、脱兎の勢いで逃走。親友の家に逃げ込むと、茹つ  
た頭で漏らしてしまった一言に身悶えしながら、しばらく布団にくる



まっつて出てこなくなるのであった。

ちなみに、その親友からは……

「あんまりフェイトちゃんをイジメないでください！」

と抗議されるのだが、立香は悪びれた様子もなく……むしろ艶々した様子で謝るのであった。

ちなみにその晩の事……

「ほらね、どうだいキャスパリーグ。やはり、彼女に見せて正解だっただろう？」

「フオウフオウ！」

「アタツ!? 何をするんだこの凶獣! 目が、目があつ!!」

両目にダイレクトアタックをもらい、のたうち回るグラウンド・キヤスターがいたとかいなかったとか、真相は夢の中である。